

DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT

公開プロジェクトの摘要書

この資料は報道機関, 米国政府, 米国科学界の人々に向けて準備された. 執筆および編集はスティーブン・M・グリア医師(責任者)とセオドア・C・ローダー三世博士による.

2001年4月

DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT

公開プロジェクトの摘要書

この資料には、UFO/ET の話題を取り巻く論点の概要、行動提言、背景情報、論説、UFO/ET 目撃の証拠、UFO/ETI 事象に対する軍と政府の目撃証人による証言の要約、最近の主要な 2 報告の要約、および重要な政府文書が含まれる。

執筆者の住所:

スティーブン・M・グリア 博士, 責任者
公開プロジェクト
バージニア州クロゼット
Dr. Steven M. Greer, Director
The Disclosure Project
PO Box 265
Crozet, VA 22932
Phone: 540-456-8302
Fax: 540-456-8303
e-mail: Disclosure2001@cs.com
website: www.DisclosureProject.org

セオドア・C・ローダー三世 博士
ニューハンプシャー大学地球海洋宇宙空間研究所
ニューハンプシャー州ダラム
Dr. Theodore C. Loder III
Institute for the Study of Earth, Oceans, and Space
University of New Hampshire
Durham, NH 03824

著作権所有: 2001 年 4 月 - 公開プロジェクト

情報と情報検索システムを含む本資料のどの部分も、公開プロジェクトの書面による事前の許可無くしては、いかなる形においても、また電子媒体と印刷物とを問わず、複製を禁ずる。

本資料の複製物は、上記住所の公開プロジェクトから入手できる。

“それ自身の空軍, それ自身の海軍, それ自身の資金調達機構, そしてそれ自身が考える国益を追求する能力を持ち, あらゆる抑制と均衡の束縛を受けず, 法そのものからも自由な, 陰の政府が存在する”

上院議員 ダニエル・K・イノウエ

“政府の議会において我々は, 求められたものであるか否かにかかわらず, 軍産複合体による是認されていない影響力の支配を警戒しなければならない. 根拠のない権力の破滅的な台頭の危険が存在し, これからも存続するだろう. この複合体の重圧が我々の自由と民主的プロセスを危険に陥れることを許してはならない. 何事も当然のことと考えるべきではない. 用心深く見識のある市民のみが, 平和な方法と目的をもって巨大な産業と軍事の国防機構に正しい網をかぶせ, 安全と自由を共に繁栄させることができるだろう”

大統領 アイゼンハワー, 1961年1月

目次

1.0 要旨	公開プロジェクト摘要書の目的	8	
2.0 読者へ	本資料の利用方法	8	
3.0 公開の概要		9	
3.1 公開:	環境, 世界平和, 世界の貧困と人類の未来に対する意味	9	
	概要	9	
	環境に対する意味	10	
	社会と世界の貧困に対する意味	11	
	世界平和と安全保障に対する意味	13	
3.2 重要人物と目撃証人による未確認飛行物体と地球外知性体についての発言の引用		16	
3.2.1 1節:	科学者たち	16	
	カール・セーガン博士	16	
	マーガレット・ミード博士	16	
	J・アレン・ハイネック博士	17	
	フランク・B・ソールズベリー博士	17	
	ジェームズ・E・マクドナルド博士	17	
	米国航空宇宙航行協会 UFO 小委員会(1967)	17	
	ピーター・A・スターロック博士	18	
	ヘルムート・ラマー博士	18	
	ヘルマン・オーベルト教授	18	
	カール・グスタフ・ユング博士	19	
	宇宙飛行士 エドガー・ミッチェル博士	19	
3.2.2 2節:	政府は語る	政治家, 軍人, 情報当局者	20
	大統領	ハリー・S・トルーマン	20
	大統領	ドワイト・D・アイゼンハワー	20
	大統領	ジェラルド・フォード	20
	大統領	ジミー・カーター	20
	大統領	ロナルド・レーガン	21
	J・エドガー・フーバー	21	
	ネイサン・D・トワイニング将軍	21	
	ウォルター・ベデル・スミス将軍	22	
	H・マーシャル・チャドウェル	22	
	エドワード・J・ルッペルト大尉	22	
	ロスコー・ヒレンケッター提督	22	
	E・B・ルバイイ少将	23	
	ウィリアム・スタントン議員(ペンシルバニア)	23	
	ウィルバート・スミス	23	
	ヒル・ノートン卿, 英国海軍提督(五つ星)	23	
	ウィルフレッド・デ・ブラウアー少将(ベルギー空軍, 副長官)	24	

3.3	なぜ UFO は秘密にされるのか	24
	序文	24
	ことの始まり	25
	推測される現状	26
	我々が織りなす蜘蛛の糸	30
3.4	認められざるもの	33
3.5	UFO／地球外知性体問題に関するプロジェクトと施設	45
	エドワーズ空軍基地と関連施設	45
	ネリス複合施設	45
	ニューメキシコ施設	46
	アリゾナ	46
	その他	46
	現在または過去に関与した米国政府機関	47
	関与していると信じられている民間企業組織	47
3.6	秘密の存在を語る証言	48
	ステイーブン・ラブキン准将：陸軍州兵予備軍	48
	メルル・シェーン・マクダウ：米国海軍大西洋軍	49
	チャールズ・ブラウン中佐：米国空軍(退役)	49
	“B 博士”	50
	ジョナスン・ウェーガント上等兵：米国海兵隊	50
	ジョージ・A・ファイラー三世少佐：米国空軍(退役)	50
	ニック・ポープ：英国国防省職員	51
	ラリー・ウォリン：米国空軍, 保安兵	51
	クリフォード・ストーン軍曹：米国陸軍	52
	ダン・モリス曹長：米国空軍, 国家偵察局諜報員	53
	A・H：ボーイング・エアロスペース社員	53
	アラン・ゴッドフレイ警官：英国警察	54
	カール・ウォルフ軍曹：米国空軍	54
	ドナ・ヘア：NASA 従業員	55
	ジョン・メイナード氏：DIA(国防情報局)職員	55
	ロバート・ウッド博士：マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者	55
	グレン・デニス：ニューメキシコ UFO 墜落日撃者	56
	レオナルド・プレツコ軍曹：米国空軍	57
	ロベルト・ピノッティ：イタリアの UFO 研究者	57
	ポール・シス博士：マクドネル・ダグラス専門技術者	57
	エドガー・ミッチェル宇宙飛行士	57
	ジョン・キャラハン：FAA(米連邦航空局)事故調査部長(退職)	58
	マイケル・スミス：米国空軍レーダー管制官	58
	フランクリン・カーター：米国海軍レーダー技術者(退役)	59
	ニール・ダニエルズ：ユナイテッド航空パイロット(退職)	59
	フレデリック・フォックス大尉：米国海軍パイロット(退役)	60
	ロバート・サラス大尉：米国空軍, 戦略空軍打ち上げ管制官	60

ロバート・ジェイコブズ教授：米国空軍(退役)	61
ハリー・アレン・ジョルダン：米国海軍	62
ジェームズ・コップ：米国海軍暗号通信	62
3.7 編集者からの重要な事前通知	62
3.8 ビデオ録画された目撃証人による証言と政府文書の要約	64
3.8.1 概要	64
宇宙飛行士 エドガー・ミッチェルの証言	64
モンシニョール・コラード・バルドゥツツイの証言	67
3.8.2 レーダー／パイロットの事例	68
序文	68
FAA(米連邦航空局)部長 ジョン・キャラハンの証言	69
米国空軍軍曹(退役) チャック・ソレルスの証言	75
エドワーズ空軍基地の音声テープからの抜粋 - 1965	79
米国空軍 マイケル・W・スミス氏の証言	85
米国海軍中佐(退役) グラハム・ベシューンの証言	89
上級航空管制官 エンリケ・コルベックの証言	95
リチャード・ヘインズ博士の証言	98
米国海軍 フランクリン・カーター氏の証言	100
航空会社パイロット ニール・ダニエルズ氏の証言	102
ロバート・ブラツィナ軍曹(退役)の証言	103
米国海軍大尉(退役) フレデリック・マーシャル・フォックスの証言	104
マッシモ・ポッジ機長の証言	105
米国陸軍少尉 ボブ・ウォーカーの証言	106
米国陸軍 ドン・ボッケルマン氏の証言	107
3.8.3 SAC(戦略空軍)／NUKE(核兵器)	108
序文	108
米国空軍大尉 ロバート・サラスの証言	109
米国空軍中佐(退役) ドワイン・アーネソンの証言	114
米国空軍中尉(退役) ロバート・ジェイコブズ教授の証言	117
米国空軍大佐(退役)／原子力委員会 ロス・デッドリクソンの証言	122
米国海軍 ハリー・アレン・ジョルダンの証言	124
米国海軍／国家安全保障局 ジェームズ・コップ氏の証言	126
ジョー・ウオイテッキ中佐の証言	128
米国空軍三等軍曹 ストニー・キャンベルの証言	130
3.8.4 政府部内者／NASA／深部の事情通	130
序文	130
宇宙飛行士 ゴードン・クーパーの証言	131
陸軍准将 スティーブン・ラブキンの証言	135
米国海軍大西洋軍 メルル・シェーン・マクダウの証言	142
米国空軍中佐(退役) チャールズ・ブラウンの証言	149
キャロル・ロジン博士の証言	156
“B博士”の証言	162

海兵隊上等兵 ジョナスン・ウェーガントの証言	164
空軍少佐 ジョージ・A・ファイラー三世の証言	170
英国国防省 ニック・ポープ氏の証言	175
提督 ヒル・ノートン卿の証言	182
米国空軍保安兵 ラリー・ウォリンの証言	184
ローリ・レーフェルト大尉の証言	197
クリフォード・ストーン軍曹の証言	198
ワシリー・アレキセイエフ少将の証言	210
米国空軍(退役)／国家偵察局諜報員 ダン・モリス曹長の証言	213
ロッキード・スカンクワークス, 米国空軍, CIA 請負業者 ドン・フィリップス氏の証言	219
米国海兵隊(退役) ビル・ユーハウス大尉の証言	222
ジョン・ウィリアムズ中佐の証言	225
ドン・ジョンソン氏の証言	226
ボーイング・エアロスペース社 A・H の証言	227
英国警察官(退役) アラン・ゴッドフレイの証言	233
元英国外務省 ゴードン・クレイトン氏の証言	234
米国空軍 カール・ウォルフ軍曹の証言	235
NASA 従業員 ドナ・ヘアの証言	236
国防情報局(退役) ジョン・メイナード氏の証言	238
ハーランド・ベントレー氏の証言	245
マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者 ロバート・ウッド博士の証言	246
上級政策分析官 アルフレッド・ウェーバー博士の証言	247
元 SAIC 従業員 デニス・マッケンジーの証言	249
米国陸軍大佐(退役) フィリップ・J・コーソの証言	250
グレン・デニス氏の証言	255
米国海軍中尉 ウォルター・ハウトの証言	258
米国空軍軍曹 レオナルド・プレツコの証言	258
米国海軍 ダン・ウィリス氏の証言	259
ロベルト・ピノッティ博士の証言	260
3.8.5 工学技術／科学	261
米国空軍 マーク・マキャンドリッシュ氏の証言	261
ポール・シス教授の証言	273
ハル・パソフ博士の証言	281
デービット・ハミルトンの証言	282
トーマス・E・ビーデン中佐(退役)の証言	283
ユージン・マローブ博士の証言	284
ポール・ラビオレット博士の証言	285
フレッド・スレルフォール氏の証言	287
テッド・ローダー博士の証言	287
4.0 一般社会, 民間および政府の利害関係者に対する行動提言の要約	288
4.1 報道機関と一般社会に対する行動提言	288
4.2 議会に対する行動提言	289

4.3	軍に対する行動提言	291
4.4	科学界に対する行動提言	292
4.5	米国大統領に対する行動提言	294
	(*4.6 は原文にない)	
4.7	恩赦の保証と安全の確保	296
4.7.1	なぜ恩赦か	296
4.7.2	UFO/地球外知性体の主題に関係した国家機密保全誓約の合法性の評価(1996)	296
5.0	論点 - 論説	298
5.1	公開の必要性和秘密主義の危険性	299
5.1.1	作戦即応性と未確認飛行物体/地球外知性体(UFO/ETI)問題: なぜ軍と国家安全保障の指導者たちは知る必要があるのか	299
5.2	UFO/ETI問題の国家安全保障に対する意味: 要約	305
5.3	新エネルギー革命の国家安全保障と環境に対する意味: 米国上院環境・公共事業委員会に向けた概要説明	308
6.0	背景情報資料	313
6.1	入手し得る最高の証拠への手引き	313
6.2	1940年代より前のUFO目撃	314
6.3	1942-1945年: 現代のUFO目撃はこうして始まった	314
6.4	ニューメキシコでの墜落回収と着陸事件	316
6.5	軍用機による遭遇-1951年	321
6.6	1952年夏: 首都ワシントンを含む多くの場所上空のUFO	323
6.7	戦略空軍基地上空を通過	327
6.8	イラン上空の軍用機による追跡-1976年	333
6.9	英国空軍/米国空軍ベントウォーターズ-ウッドブリッジ-1980年12月	335
6.10	日本航空機による遭遇(1986年)	338
6.11	英国における1990年代の目撃多発現象-三角形飛行物体その他	340
6.12	メキシコでの目撃多発現象-1991年以後	341
6.13	バルジニャでの出来事-ブラジルで地球外生物を捕獲?	342
6.14	アリゾナでの目撃-1997年3月	345
6.15	イリノイ州セントクレアでの2000年1月の目撃	348
7.0	エネルギーと反重力研究の概要	351
	テスラの自己出力自動車	353
	モレーの放射エネルギー装置	354
	ガブリエル・クロンと負抵抗体	355
	モスクワ大学の科学者たちがオーバーユニティ装置を1930年代に試験	356
	最初の点接触トランジスタ	357
	ミニットマンミサイルに搭載されたオーバーユニティ装置-ウェスチングハウス社の特許	358
	宇宙飛行士の磁気ブーツ	358
	日立の技術者たちがオーバーユニティ・プロセスを確認	359
	磁気ワンケルエンジン	360
	ジョンソン・モーター	360
	フロイド・スウィートの真空三極管増幅器	361

デボラ・チャング博士の負抵抗体	361
ランデル・ミルズ博士とブラックライト・パワー	362
常温核融合	362
反重力と電気重力	365
タウンゼント・ブラウンの電気重力工学技術	369
シド・ハーウィッチ	370
8.0 最近の民間による研究の概要	372
8.1 UFO 報告に関係した物理的証拠のスターロック/ロックフェラー報告	372
8.2 COMETA 報告: UFO と国防に関するフランスの報告	375
9.0 付録 AI. UFO に関係した米国政府の文書	381
9.1 政府文書についての概要	381
9.2 付録 I.1: UFO に関係した政府文書の説明一覧	382
10.0 推奨される文献一覧	385
11.0 謝辞	386

1.0 要旨 — 公開プロジェクト摘要書の目的

この摘要書は、大変複雑な UFO/ET (未確認飛行物体/地球外知性体) の主題を一般に向けて公開するプロジェクトの概要と、個人がこの問題を研究するために役立つ背景情報資料および参考資料を提供するために書かれた。この主題は、この惑星に住む人類の未来にとり、精神と技術の観点から広範かつ深遠な意味を含むがゆえに、本質的にはかり知れない重要性を持つ。我々は様々な利害関係者(報道機関、一般社会、議会、軍、科学界、米国大統領、および UFO/ET 統制組織のメンバーを含む)に対する行動提言を行なった。これらの提言は、この話題が政府と公的部門で公然と詳細に議論されるように仕向けることで、公開の進行を円滑にする役に立つだろう。背景情報資料には、以下の種類の情報が含まれる: 1) UFO/ET 事件に直接立ち会った軍、政府、および個人の直接目撃証人によるビデオ録画された証言の概要。2) 背景の歴史、公開の必要性とその意味、そして秘密主義をとり続ける危険性を述べた一連の論説。3) 20 数人を超える軍の目撃証人がいる 14 の主要事件、複数の目撃証人がいる多くの事件とそれを裏付ける政府文書。4) この主題が事実であることを知る科学者と政府の証人による一連の発言からの 27 の引用。5) UFO 現象をさらに深く研究する必要性を述べた、科学調査委員会による最近の主要な 2 報告の概説。6) ゼロポイント・エネルギー、オーバークニティ装置、反重力研究を含む技術についての高度な論評。この資料を読んで、洞察力のある進歩的な読者が UFO は現実であることを理解し、その意味をこの惑星の政府や人々に思慮深く訴えかけるようになることを願う。

2.0 読者へ — 本資料の利用方法

かつてカール・セーガンは、次のように述べた。“並外れた主張には並外れた証拠が必要だ” UFO問題では、さらに二つの言葉を加えると状況が明確になるだろう：“並外れた証拠をつかむには並外れた関心が必要だ”，そして“並外れた関心は単に必要というだけではない、増え続ける多くの並外れた目撃例がそれを実際に要求しているのだ”

このことを念頭に置いて、読者にはこの摘要書をただ読み通すだけでなく、一つの原典として利用することを勧める。まず“要旨”と“公開の意味(3.1 節)”を読み、全体的な論点をつかんで欲しい。もし、多くがそうであるように、我々の政府は秘密を隠しておけない(実際はそうではない)との思い込みから、この内容が事実でないと考えたら、“なぜ UFO は秘密にされるのか(3.3 節)”と“認められざるもの(3.4 節)”を読んでいただきたい。次に、もしあなたがまだそのような行動をとっていないなら、様々な利害関係者にあてた“行動提言(4.0 節)”を読み、または再吟味し、これらの問題を公開するために何が必要かを理解して欲しい。公開の重要性とその意味をさらに深く理解しようとするなら、5.0 節に収録した残りの“論説”がその助けになるだろう。

我々の経験では、最初にこの情報を提示された人々は、到底信じられない、という気持ちを起こす。だが、ひとたび彼ら自身でこの問題を研究するや、その現実性と複雑さを真に理解し始める。読者が研究を始める手助けとなるように、我々は幾つかの種類の見聞録を用意した。“目撃証人による証言の要約(3.8 節)”は、迫真の直接的な証言である。その内容は、多数の人間が UFO 問題とその隠蔽に関わっており、その中の一部は、この問題についての自らの経験を証言するために名乗り出る意志を持っている、という見方を裏付ける。さらに、有名で詳細な記録が残っている一連の

UFO 事件(6.0 節)についても論評した。これは付録の政府文書によって裏付けられている多くの事例である。“入手し得る最高の証拠への手引き(6.1 節)”は、さらなる情報を得るための原典を提供している。“発言の引用(3.2 節)”では‘内情に通じた’多くの著名な軍人、および政府要人による 1940 年代以後になされた発言を引用した。また、“ゼロポイント・エネルギー、オーバークニティ装置、反重力研究についての高度な論評(7.0 節)”もこれに加えた。最後に、“米国とフランスで科学者、政府指導者、軍関係者によりなされた最近の UFO 研究(8.0 節)”の要約を加えた。さらなる裏付け情報は、グリア博士の目撃証人による証言についての著書¹⁾の中で見出されるだろう。

3.0 公開の概要

3.1 公開：環境、世界平和、世界の貧困と人類の未来に対する意味

概要

著作権 スティーブン・M・グリア、医師 — 2001 年 3 月

大部分の人々にとり、我々がこの宇宙で孤独なのかそうでないかは、哲学的な物思いにすぎない — 学問的にはともかく、日常においての重要性は何もない。人類以外の知的生命体が現に我々を訪問しつつあるという証拠さえ、地球温暖化、過酷な貧困、戦争の脅威といった世界に住む多くにとっては、無関係に思える。人類の遙か未来に対する現実の課題に直面するとき、UFO 問題、地球外知性体、政府の秘密プロジェクトなどは余興にすぎない、そうではないか？間違っている、破滅的なまでに間違っている。

この後の頁で提示される証拠と証言は、以下のことを確実に示している：

- ◆ 我々は進歩した地球外文明の訪問を実際に受けつつあり、またこれまでもそうであった；
- ◆ これは米国と多くの国々において最も秘密にされ、区画化されてきた計画である；
- ◆ これらのプロジェクトは、アイゼンハワー大統領が 1961 年に警告したように、米国や英国などで、法の管理と統制を逃れてきた；
- ◆ 情報機関により地球外輸送機(extraterrestrial vehicles; ETVs)と呼ばれている地球外起源の進歩した宇宙機が、少なくとも 1940 年代以来、おそらくは 1930 年代頃から、撃墜され、回収され、研究されている；
- ◆ これらの物体の研究(そしてニコラ・テスラの時代に遡る、人類による関連技術の革新)から、エネルギー発生と推進の分野で、重大な工学技術上の大発見が行なわれた。それらの技術は、新しい物理学を応用し、化石燃料や電離放射を必要とせずに、巨大なエネルギーを発生する；
- ◆ 最高度の極秘プロジェクトが、完全に機能する反重力推進装置と新しいエネルギー発生システムを所有している。それらは、もし公開され平和的に用いられるなら、欠乏も貧困も環境破壊も起こさずに、人類に新しい文明をもたらすだろう。

これらの主張を信じない人は、軍と政府の多数の目撃証人による証言を注意深く読むべきである。その内容は明確に上記の事実を立証している。これらの声明の広大で深遠な意味を考えると、その主張を受け入れる人もそうでない人も、この問題の真実を確かめるために、議会公聴会の開

催を要求しなければならない。まさしく人類の未来がかかっているからだ。

1) Greer, Steven M. *Disclosure: Military and Government Witnesses Reveal the Greatest Secrets in Modern History*. 2001.

環境に対する意味:

“人類は秘密にされているエネルギー発生と反重力推進の装置を実際に所有しており、それらは、現在のエネルギーと輸送システムのあらゆる形態を完全かつ永久に無用のものとする能力を持つ”我々は、公開された議会公聴会で上記のことを立証できる事情通と科学者たちを確認している。それらの装置は、空間の電磁気とゼロポイント・エネルギーと呼ばれる状態に作用し、いかなる汚染をも伴わずに、巨大なエネルギーを生み出す。本質的にこのようなシステムは、遍在する量子真空エネルギー状態、つまりあらゆるエネルギーと物質を生じる基底エネルギー状態を利用して、エネルギーを発生させる。すべての物質とエネルギーを支えるのはこの基底エネルギー状態であり、特別な電磁気回路と構造を使えば、我々を取り巻く周囲の空間／時間から、巨大なエネルギーを引き出すことが可能なのである。これらはいわゆる永久機関ではないし、熱力学の法則にも違反しない。ただ周囲に遍在するエネルギー場に作用して、エネルギーを発生するのである。

このことは、これらのシステムが、燃やす燃料も分裂または融合させる原子も必要としないことを意味する。これらのシステムは、発電所も送電線も、また膨大な経費を要する関連設備も使わずに発電し、インド、中国、アフリカ、ラテンアメリカなどの奥地に電力を供給する。これらのシステムは、必要な場所にありさえすればよい。どこにでも据え付け可能で、必要なエネルギーを生み出す。本質的にこの技術は、我々が直面している大部分の環境問題に対する最終的な解決策となる。

このような発見が環境にもたらす恩恵は、数え上げることすら難しいが、幾つかを列挙する:

- ◆ 石油、石炭、ガスはエネルギー源として不要になり、輸送やこれらの燃料の使用による、空気と水の汚染がなくなる。石油流出、地球温暖化、空気汚染による病気、酸性雨などは、10 から 20 年で解消できるし、そうしなければならない;
- ◆ 資源枯渇と化石燃料資源の争奪がもたらす、地政学的な緊張は終わるだろう;
- ◆ 空気、水の両方において、産業排出をゼロまたはゼロに近づける技術はすでにある。しかし大量のエネルギーを消費するために、完全に適用するには費用がかかり過ぎると考えられる。さらに、それらは大量のエネルギーを消費するものであり、今日のエネルギーシステムは世界の空気汚染の大部分を発生させていることから、環境への逆効果となるときがすぐにやってくる。この方程式は、もし産業が大量のフリーエネルギー(燃料不要、発電機よりも廉価な装置のみ)を利用できるようになれば、劇的に変わるし、またそれらのシステムは汚染を発生しない;
- ◆ エネルギーを大量に消費する再生利用は、繰り返すが、固形廃棄物を処理するためのエネルギーが無料かつ豊富にあるために、完全実施されるだろう;
- ◆ エネルギーに依存し環境を汚染する今の農業は、きれいで汚染を発生しないエネルギーを利用するものへと変化するだろう;
- ◆ 砂漠化の進行は食い止められ、世界の農業は脱塩施設により活性化されるだろう。現在この

施設は、エネルギーを大量に消費し、また高い建設費がかかる。しかし、一度これらの汚染を発生しない新エネルギーシステムを使えるようになれば、費用効率のよいものになるだろう；

- ◆ 航空輸送、トラック輸送、都市間輸送システムは、新しいエネルギーと推進技術に取って代わられるだろう(反重力システムは、地表面上を無音で移動することを可能にする)。汚染は発生せず、エネルギーにかかる費用が無視できることから、経費は大幅に下がるだろう。さらに、都市部での大量輸送には、無音かつ効率的な都市間移動を提供する、これらのシステムが利用できるだろう；
- ◆ ジェット機、トラック、その他の輸送形態による騒音汚染は、これらの無音装置の利用により解消されるだろう；
- ◆ それぞれの家庭、職場、工場が必要なエネルギー発生装置を持つことにより、公共施設は不要になるだろう。つまり、暴風雨による被害で停電を起こしがちな見苦しい送電線は、過去の遺物になるだろう。地下のガス管も、しばしば破裂や漏洩により土壌や水を汚染するが、これもすべて不要になるだろう；
- ◆ 原子力発電所は閉鎖され、その跡地を浄化する技術が利用可能になるだろう。核廃棄物を無害化する秘密の技術は、すでに存在する。

理想郷だろうか？そうではない。人間社会は常に不完全だからだ。だが、たぶん今日のそれよりはましだろう。これらの技術は事実である — 私はそれを見たことがある。反重力は現実であり、フリーエネルギーもまたそうである。これは空想や悪ふざけではない。これを不可能だと言う人々を信じてはならない：彼らは、ライト兄弟が空を飛ぶことは決してないと言った知識人の末裔なのだ。

今日の人類文明は、全世界を滅ぼす能力を持つに至った。我々はおもうまくやれるし、そうしなければならない。これらの技術は実在するので、環境と人類の未来について懸念を持つ人なら誰でも、これらの技術が公開され、秘密を解かれ、安全に応用されるように、緊急公聴会の開催を求めべきだ。

社会と世界の貧困に対する意味：

上記のことから、現在秘密にされているこれらの技術により、人類文明が持続可能なものへと到達できることは明らかだ。言うまでもなく、我々は近未来に起きる社会、環境、技術の、まさしく人類史上最大の変革について語っているのである。私は、このような公開に伴って否応なしに生じる、世界を覆うあらゆる変化を軽視するものではない。半生をかけてこの問題に取り組んできた私は、その変化がどれほどのものか、よく理解している。

人類はこの宇宙で唯一の存在でも最も進化した存在でもない、という事実の判明はさておき、この公開により、人類は歴史上最大の危機と好機に直面することになる。もし何もしなければ、我々の文明は環境的、経済的、地政学的、および社会的に崩壊する。10から20年の間に、化石燃料と石油の需要は供給をはるかに追い越すだろう。そうすると、そこに繰り広げられるのは、石油の最後の一滴を求めて相争うマッド・マックス(Mad Max)の世界である。地政学および社会的な崩壊が、環境の激変よりも早く起きる可能性が高い。

これらの新技術の公開は、我々に新しい持続可能な文明を与えるだろう。世界の貧困は、我々

の生涯のうちに解消するだろう。新しいエネルギーと推進システムの出現により、地球上で欠乏の起きる場所はなくなるだろう。砂漠にさえも花が咲くだろう。...

貧困地域で農業、輸送、建築、製造、電化のために、豊富で無料に近いエネルギーが利用できれば、人間が達成できる物事に限界はなくなる。信じ難いような貧困と飢餓が世界に存在する一方で、この状態を完全に覆し得る秘密の技術を上から押さえつけている状況は、馬鹿げており、腹立たしくさえある。では、なぜこれらの技術を解放しないのか？社会的、経済的、および地政学的秩序が大きく改変される、というのがその理由である。私がこれまでに会ったどの深部の事情通も、これは人類が経験したことのない、大きな変化であることを強調する。問題は、極度の秘密保持の理由が馬鹿げたことではなく、その意味するものがあまりにも深遠で遠大なことにある。生来、このようなプロジェクトの統制者たちは、変化を好まない。そして我々はここで、人類史上最大の経済的、技術的、社会的、および地政学的変化について語っている。それゆえに、我々の文明が忘却に向かってつき進んでいても、現状が維持されているのだ。

だが、この理屈では我々は産業革命を起こすことはなかったし、ラダイト(Luddite)は今日までこの世界を支配しただろう。

経済的混乱を最小限にとどめ、新しい社会と経済の現実へと容易に移行するために、国際的的努力が必要である。我々にはこれができるし、しなければならない。一部の石油、エネルギー、および経済部門の特別利益団体は影響を受けなければならないが、同時に温情をもって扱われる必要がある。彼らの権力と帝国が崩壊するのを見たい者はいない。石油とガスの販売に大きく依存している国々は、経済の多角化、安定化、および新しい経済秩序へ移行するための支援を必要とするだろう。

米国、ヨーロッパ、日本もまた、新しい地政学的現実に適応する必要があるだろう。現在貧困と人口過剰にあえいでいる国々が、技術的にも経済的にも劇的に発展するにつれ、彼らは世界の中で相応の地位を要求するだろうし、獲得するだろう。そうやって然るべきだ。しかし、国際社会は、先進諸国と第三世界の地政学的和解が、発展よりも新興勢力による好戦的で破壊的な振る舞いを引き起こす可能性に対して、防護策をとる必要があるだろう。

特に米国は、その力でもって先導する必要がある。ただし、支配に向かう今の傾向は避けなければならない。統率と支配は同じではない。そのことを我々が早く学ぶほど、世界はいつそうよくなるだろう。支配と覇権を伴わない、国際的な統率力というものは可能である。米国はこの問題でまさに求められる統率力を示すつもりなら、両者の違いを認識する必要がある。

これらの技術は、字義どおりにも比喩的にも力を分散するがゆえに、苦難と貧困の生活をしている数十億の人々を新しい豊かな世界へと導くだろう。そして経済と技術の発展により教育が盛んになり、出生率は下がるだろう。社会の教育と繁栄が進み、技術が進歩し、また女性が社会で対等の役割を担うにつれて、出生率が下がり、人口が安定することはよく知られている。これは世界の文明と人類の未来にとりよいことである。

どの村も汚染なしに電化が進み、農業はきれいで無料のエネルギーにより活性化し、輸送費用

が下がると、貧困は劇的に世界から消滅するだろう。もし今行動を起こせば、2030年までには今日の我々が知る世界の貧困は、事実上消滅できるだろう。我々に必要なのは、これらの変化を受け入れる勇気と賢明さを持ち、人類を安全に平和裏に新時代へと導く勇気だけである。

世界平和と安全保障に対する意味：

数年前、私はこの主題について、元上院外交委員会議長のクレイボーン・ペル上院議員と議論していた。彼は私に、1950年代からずっと連邦議会にいたが、この主題については一度も説明されたことがなかったと明かした。私は彼に、これら闇のプロジェクトの性質上、我々の指導者の大部分は、この問題についていかなる決定からも外されてきた、実に恥ずべきことです、と言った。私はこうも言った。“ペル上院議員、あなたが外交委員会の議長だった全期間を通して、あなたは究極の外交問題を扱う機会を奪われていたのですよ...”そして頭上の星々を指さした。彼は言った。“グリア博士、残念だがあなたの言うことが正しいようだ...”

ペル上院議員、ジミー・カーター大統領、他の国際的指導者など、我々の卓越した外交官と長老たちが、特に、また意図的に、この主題から遠ざけられてきたことは事実である。これは世界平和にとり、直接的な脅威である。秘密の孤立の中で、人民にも、人民の代表にも、国連にも、他の合法的などの組織にも監督されずに、世界平和に直接脅威を与える作戦が実行されてきたのだ。

お互いに見知らぬ、共謀の機会を持たない、軍の複数の目撃証人によって確証されている証言は、米国と他の国々がこれらのETVs(地球外輸送機)に攻撃をしかけ、幾つかは撃墜に至らしめたことを明らかにするだろう。私が国連事務総長ブトロス・ガリの夫人に述べたように、もしこれに10パーセントの真実でもあるなら、これは人類史において世界平和に対する最終的な脅威となる。

そのような作戦行動について直接の知識を持っている、信頼できる多くの軍と航空宇宙当局者に個人的に面接取材をした結果、私はこのことが実際に行なわれたのだと確信している。なぜか？これらの未知の輸送機が、無許可で我々の領空にいたからであり、我々が彼らの技術を獲得しなかったからである。これらの物体から人類が実際に脅威を受けたとは、これまで誰も主張していない。明らかなことは、恒星間航行を当たり前に行なう能力を獲得したいいかなる文明も、もしそれが彼らの意図であったなら、我々の文明を瞬時に終焉させることができたということである。いまだに我々が地球の自由大気を呼吸している事実が、これらのET文明が敵意を持っていないことを示す十分な証言である。

我々はまた、いわゆるスターウォーズ(または米国本土ミサイル防衛システム)計画が、実際にはETVsが地球に接近または大気圏に侵入したときに、それらを追跡し、標的にし、破壊する兵器システムの展開という、闇のプロジェクトのための口実であったという情報を得ている。他ならぬウェルナー・フォン・ブラウンが死の床で、そのような構想が事実であり、また狂気じみていることを警告した。それに何の効力もないことは明らかである(ウェルナー・フォン・ブラウンの元代弁者であったキャロル・ロジンの証言を見よ)。

まさに、方向を変えなければ向かっている所で終わりになる、である。

秘密の兵器庫に隠されている兵器 — 熱核兵器よりもはるかに恐ろしい種類の兵器 — をもつてしても、生存戦争に勝つ可能性はない。それにもかかわらず、密かに人類の名で、我々の未来を危険にする行動がとられてきたのである。すべての、ありのままの公開のみが、この状況を修正することができる。この緊急性を言葉で伝えることは、私には不可能だ。

10 年間、私は一人の緊急医として働き、どんな物でも武器になり得ることを見てきた。英知と平和なよき未来 — 可能なただ一つの未来 — への願望によって導かれなければ、どんな技術も闘争の道具となる。国連にも、米国政府にも、英国政府にも、合法的などの組織にも答えない極秘プロジェクトは、人類の名でこのような行動を続けることは許されない。

極度の秘密がもたらす危険性とは、それが自由で開かれた意見の交換に扉を閉ざした、密閉されたシステムをつくるということである。そのような環境では、どれほど重大な過ちも起きる可能性があることは、容易に理解できる。たとえば、ここに掲載した証言が示すように、これらの ETVs(地球外輸送機)は、我々が最初の核兵器を開発し、宇宙に進出し始めてから、その出現が頻繁になった。この中に信頼できる軍関係者による多数の証言があるが、これらの物体が ICBMs(大陸間弾道ミサイル)の上を舞い、さらに無力化した複数の事例があった。

閉鎖的な軍事的視野の中では、これに憤慨し、反撃体制をとり、物体の撃墜を試みることになるかもしれない。実際、これが通常の反応だったのだろう。しかし、これらの地球外文明が、次のように言っていたとしたらどうだろうか。“どうか、あなたたちの美しい世界を破壊しないでください — そして、次のことを知ってください: 私たちは、あなたたちがこの狂気を持って宇宙に進出し、他の世界の人々を脅かすことを許しません...” 気遣いと、より大きな宇宙的英知さえ示す出来事が、幾たびも侵略行為と解釈されてきたかもしれない。このような誤解と近視眼こそが、戦争を招く元なのである。

これらの訪問者たちに対する我々の認識がどうであれ、暴力的な戦闘によって誤解が解消されることはない。このような狂気を企てることは、人類文明の終焉を企てることである。

ペル上院議員のような、我々の賢明な長老と分別のある外交官たちに、これらの重大問題を任せるべきときである。これを、選ばれてもいない小集団の、勝手に説明のできない秘密作戦の手に預けるのは、米国と世界の安全保障にとり、史上最悪の脅威である。アイゼンハワーは正しかった。しかし誰も耳を貸さなかった。

これらの訪問者たちに対して暴力的な戦闘を伴う秘密の行動がとられてきた、とする証言に照らし、国際社会一般、とりわけ米国議会と米国大統領は、以下のことを緊急に行なう必要がある:

- ◆ この主題が秘密裏に扱われていることが、国家と国際社会の安全保障に及ぼす危険性を評価するための公聴会を開く;
- ◆ 宇宙の軍事化を即時禁止する。特に、いかなる地球外物体に対しても、それを標的にする行為を禁止する。このような行動は是認されず、人類全体を危険に陥れる;
- ◆ これらの地球外文明との仲立ちをし、意思疎通と平和的關係を促進するための、特別外交団を創設する;

- ◆ 人類と地球外文明の関係を管理し、平和な互惠関係を確保するために、適切な権力を持つ、開かれた国際監視団を創設する；
- ◆ 進歩したエネルギーと推進システムに関係する新技術の平和的利用を確実に促進することができる、国際的な諸機関を支援する(下記を見よ)。

上記に加えて、あまり目立たない — だがおそらく同じくらい差し迫った — 世界平和に対する脅威は、この主題が秘密裏に統制されることにより、すでに議論された新しいエネルギーと推進の技術を世界が奪われていることから発生する。

世界の貧困、そして富める国と貧しい国との広がる格差は、世界平和にとって深刻な脅威である。このことは、これらの技術の公開と平和的応用によって是正されるだろう(上記を見よ)。今後 10 から 20 年以内に想定される、化石燃料の供給減少を巡る戦争の現実的脅威は、この公開の必要性をさらに強める。貧困に生きている 40 億の人々が車、電気、その他の現代の利器を望んだら、何が起きるだろうか — すべては化石燃料に依存しているのではないか？我々が直ちに、今秘密にされているこれらの技術の利用へと移行すべきであることは、思慮深い人々にとって明らかだ — それらは、すでに棚に置かれたままになっている強力な解決法である。

もちろん、多くの部内者が指摘するように、これらの技術は祖父の時代のオールズモビルではない。それらは他と同様に、テロリスト、好戦的な国家、常軌を逸した人間により、暴力的に利用され得る技術的進歩である。ここで我々は板挟み状態になる。もしこれらの技術がすぐに出現しないとすれば、我々は人類文明と環境の確実な崩壊に直面するだろう。もしそれらが公開されれば、破壊にも使える非常に強力な新技術がそこに転がっているということになる。

短期的には、人間はどんな新技術でも暴力的に利用するだろう、と考えるのは賢明である。これの意味するところは、このような装置を平和のためにのみ利用することを確実にする — つまり強制する — 国際機関が創設されなければならないということである。今日では、このようなすべての装置を GPS(全球位置把握システム)監視に接続する技術が存在する。それにより、故意に手を加えられたり、平和的なエネルギー発生と推進以外の目的に使われるいかなる装置も、無能にしたり役立たなくすることができるだろう。これらの技術は、規制され監視されるべきである。国際社会はそれらの平和利用のみを保証できるほどに成熟しなければならない。

他の目的への利用は、地球上のすべての国々により、絶対に阻止されるべきである。

このような協定は、必要な次の段階である。おそらくいつの日か、人類はそのような統制を必要とせずに平和に生存するだろう。しかし当面は、状況は鎖につながれた犬である — 何らかの強い鎖が当然必要であり、不可欠である。

しかし、このような懸念はこれらの技術の公開をさらに遅らせる論拠になり得ない。我々はそれらの安全で平和な利用を確実にする、知識と手段を持っている — だから、もし我々が環境の悪化と世界の貧困および紛争のこれ以上の深刻化を回避するつもりなら、これらの技術は直ちに応用されなければならない。

つまるところ、我々はどんな技術的または科学的な難題をも凌ぐ、社会的および精神的な重大局面に直面させられる。技術的な解決策はある — しかし、我々は共通の利益のためにそれらを実行に移す意志、英知、勇気を持っているだろうか？この問題を考えるほど、我々にはただ一つ可能な未来しかないことが明らかだ：平和である。地球の平和と宇宙空間の平和 — 英知を持って実現する普遍的な平和。それ以外はすべて滅亡への道である。

これこそ、現代の最大の課題である。我々の精神的、社会的資源は、この課題に立ち向かえるだろうか？他ならぬ人類の運命がかかっているのだ。

3.2 重要人物と目撃証人による未確認飛行物体と地球外知性体についての発言の引用

3.2.1 1 節： 科学者たち

カール・セーガン博士

Carl Sagan, Ph.D.

最近亡くなったコーネル大学天文・宇宙科学教授

“今や、地球が唯一の生命の惑星でないことは、まったく明白のように思われる。天空の多くの恒星が惑星系を持っている証拠がある。地球生命の起源に関する最近の研究は、生命の発生へと導く物理的、化学的過程が、我々銀河系の大部分の惑星で、その初期の段階で急速に生じることを示唆する--おそらく、我々よりも先行する技術文明が存在する惑星は、百万を数えるだろう。恒星間飛行は、現在の我々の技術的能力をはるかに超える。しかし、見晴らしのきく我々の立場からすると、他の文明がその技術を開発した可能性を排除する基本的な物理的障害は、何もないようだ”²⁾

マーガレット・ミード博士

Margaret Mead, Ph.D.

人類学者、作家

“未確認飛行物体は実在する。つまり、研究によりおそらく 10 から 20 パーセントだが、説明がつかずに残る事例がある。何度も地球に接近し、静かで無害に航行する物体の活動の背後にどんな目的があるのか、我々はただ想像するしかない。私にとって最もありそうに思われる説明は、彼らはただ我々の為そうとすることを観察しているということである”³⁾

2) Sagan, Carl. “Unidentified Flying Objects.” *They Encyclopedia Americana*. 1963

3) Mead, Margaret. “UFOs: Visitors from Outer Space?” *Redbook*, Vol. 143, September 1974.

J・アレン・ハイネック博士

J. Allen Hynek, Ph.D.

元ノースウェスタン大学天文学部長;空軍ブルーブック計画科学顧問(1947 - 1969)

“目撃多発現象が起きるたびに、現在の方法による分析を拒む報告がさらに累積する... 混乱の 20 年を経て、もし我々が何らかの答を見つけたかったら、ここで徹底的な調査が必要だ”

“長い間待っていた UFO 問題への解答が現れたとき、それは単なる科学の小さな次の一歩などではなく、ある巨大で考えも及ばないような大飛躍になると私は信じる”⁴⁾

フランク・B・ソールズベリー博士

Frank B. Salisbury, Ph.D.

ユタ大学植物生理学教授

“一人の科学者が空飛ぶ円盤について何か好意的な発言をすると、激しい反論が浴びせられ、科学界からの除名を言い立てる人物が出てくる。このことを私は認めざるを得ない。それでも私はここ数年間、未確認飛行物体(UFO)に関する情報を研究した。その結果、最早私はその考えを軽々しく退けることはできない”⁵⁾

ジェームズ・E・マクドナルド博士

James E. McDonald, Ph.D.

アリゾナ大学大気科学研究所上級物理学者

“最も興味をそそる UFO 報告は、低空やしばしば地上で見られた、これまでにない性質と性能を持つ機械のような物体の近接目撃である。一般社会は、信頼できる目撃者から寄せられる多数のこのような報告にまったく気付いていない... このような事例を調査し始めると、その数はきわめて驚くべきものである”⁶⁾

米国航空・宇宙航行協会 UFO 小委員会(1967)

“科学的小および工学的観点から、相当数の説明できない目撃を簡単に無視することは、受け入れられない... ただ一つの有望な取り組みは、改良されたデータ収集と客観的手段に重きを置いた、適度の努力の継続である... その中には、*利用できる遠隔探査能力*と、あるソフトウェアの変更が含まれる”[強調は編者による]

また、コンドン報告(ブルーブック計画)については、1986 年:

“コンドン報告の内容からは、反対の結論が引き出されたかもしれない。つまり、説明できない事例の比率(約 30 パーセント)がこれほど高い現象は、その研究を続けるのに十分な科学的好奇心を喚起して然るべきだ”⁷⁾

4) Hynek, J. Allen: From interview in *The Chicago Sun Times*, August 28, 1966; “The UFO

- Experience: A Scientific Inquiry.” Regnery Co., 1972.
- 5) Salisbury, Frank B.: Fuller, John G., *Incident at Exeter*, Putnum, 1966 (quoting a paper presented at the U.S. Air Force Academy in Colorado in May 1964).
 - 6) McDonald, James E.: “Symposium on Unidentified Flying Objects,” Hearings before the Committee on Science and Astronautics, U.S. House of Representatives, July 1968.
 - 7) American Institute of Aeronautics and Astronautics, UFO Subcommittee (1967), *The encyclopedia of UFOs*, 1980.
-

ピーター・A・スターロック博士

Peter A. Sturrock, Ph.D.

スタンフォード大学宇宙科学・天文学教授、宇宙科学・天文学センター副所長

“UFO の謎の最終的な解決は、確立した科学の正規の手法と大学の管理者による、公然かつ詳細な科学的研究に曝されるまでは、実現しないであろう”

“これまで科学界は、UFO 現象の意義を軽視する傾向にあった。．．だが、少数の科学者たちは、この現象が現実であり重要であることを主張してきた。科学者にとり、(彼自身の実験と観測以外に) 確実な情報源は学術雑誌である。稀な例外を除いて、学術雑誌は UFO の目撃報告を發表しない。發表しない決定は、校閲者たちの忠告にしたがった編集者が行なう。この過程は自己増幅される。明らかなデータ不足が、UFO 現象は無価値だという見解を強める。そしてこの見解が、関連データの發表をさらに妨害する。．．”⁸⁾

ヘルムート・ラマー博士

Helmut Lammer, Ph.D.

オーストリア宇宙研究所地球外物理学部物理学者
[火星のシドニア地区について書いている]

“これまでの幾つかの結果は、それらが自然物でないことを示唆するが、バイキングのデータは、これらの物体の起源を説明する作用を特定できるほど十分な解像度を持たない、というのが著者の考えである。明らかにこれらの不思議な物体は、次の火星探査でさらに精査される価値がある。そのいずれかの探査で、火星の顔、ピラミッド、その他の奇妙な構造物が、実際に人工物だと分かったとき、‘ありそうもない’ 先行入植あるいは先行技術文明仮説が、一つの可能な答になるだろう”⁹⁾

ヘルマン・オーベルト教授

Professor Hermann Oberth (1894-1989)

ドイツのロケット工学者、宇宙時代の創始者

“空飛ぶ円盤は実在し、それらは他の太陽系から来た宇宙船である、というのが、私の主張である。それらにはおそらく知性を持った観察者が乗っており、彼らは数世紀の間地球を調査している種族の一員だと私は考えている。彼らはおそらく、組織的な長期間の調査を行なうために派

遣されているのだろう。はじめは人間、動物、植物、そして最近は原子力施設、兵器、および兵器の製造施設だ”¹⁰⁾

カール・グスタフ・ユング博士

Dr. Carl Gustav Jung

“純粹に心理学的な説明は除外される。．．円盤は人間に似た操縦者によって操られている様子を見せる。．．重要な情報を持っている当局は、直ちに、かつ全面的に、一般社会を啓発することをためらうべきではない”¹¹⁾

8) Sturrock, Peter A.: “An Analysis of the Condon Report on the Colorado UFO Project,” *Journal of Scientific Exploration*, Vol. 1, No. 1, 1987.

9) Lammer, Helmut: “Atmospheric Mass Loss on Mars and the Consequences for the Cydonian Hypothesis and Early Martian Life Forms,” *Journal of Scientific Explorations*, Vol. 10, No. 3, 1996.

10) Oberth, Hermann: “Flying Saucers Come from a Distant World,” *The American Weekly*, October 24, 1954.

11) Jung, Carl: *Flying Saucers: A Modern Myth of Things Seen in the Sky* (R.F.C. Hull translation), 1959.

宇宙飛行士 エドガー・ミッチェル博士

Astronaut Edgar Mitchell, Ph.D

1971年にミッチェル博士は、米国アポロ宇宙計画の中で月面を歩いた6人目となった。

“私はアメリカの宇宙飛行士、訓練を積んだ科学者だ。私の立場ゆえに、高位高官の人々は私を信用する。結果として、私は異星人がこの惑星を訪れていることに何の疑いも持っていない。米国政府と世界中の政府は、説明がつかないUFO目撃の数千のファイルを持っているのだ。科学者として、少なくともそれらの幾つかは異星人の宇宙機を目撃したものだと思えるのが道理に適っている。これらのファイルを利用できる立場にある軍関係者は、彼らが単なる変人と見なす人々に対してよりも、元宇宙飛行士である私に進んで話してくれるのだ。UFOについて話すのに私よりはるかに高い能力を持つこれらの人々から聞いた話によって、私は異星人がすでに地球を訪れていることに何の疑いも持たなくなった。．．”

“．．異星人の存在を知ったとき、私はそんなに驚かなかった。だが、10年前に地球外知性体についての報告を調査し始めた私を動揺させたのは、その証拠が闇に葬られてきた実態のひどさだった。異星人の訪問について沈黙を守ってきたのは、米国政府だけではない。地球外知性体がこの国だけを訪問先に選ぶと考えるのは、私のようなアメリカ人の傲慢というべきだろう。実際に私は、異星人の訪問を知っている世界中の政府についての、信ずるに足る話を聞いている— その中には、英国政府も含まれる”¹²⁾

3.2.2 2 節:政府は語る — 政治家, 軍人, 情報当局者

大統領 ハリー・S・トルーマン

President Harry S. Truman

“もし空飛ぶ円盤が実在するとしても, それは地球上のいかなる勢力が建造したものでもない
私は断言できる”¹³⁾

大統領 ドワイト・D・アイゼンハワー

President Dwight D. Eisenhower

“軍産複合体を警戒せよ”¹⁴⁾

12) Anonymous: “Yes, Aliens Really Are Out There, Says the Man on the Moon,” *The People* [a
London Newspaper], October 25, 1998.

13) Truman, Harry: White House press conference, April 4, 1950.

14) Eisenhower, Dwight: Last speech as President, January, 1961.

大統領 ジェラルド・フォード

President Gerald Ford

“... 私はこれらの[UFO]記事に特別の関心を持ってきた。なぜなら, 最近報告された目撃の多
くは, 私の故郷ミシガン州でのものだからだ... 私はこれらの幾つかには実体があると考えて
おり, またアメリカ国民には, 今まで空軍によって提供されてきたよりもさらに詳細な説明を受ける
権利があると信じている。この理由により, 科学・宇宙航行委員会か下院軍事委員会が, UFO 問
題についての公聴会を開き, 政府の行政部門とUFOを目撃したという人々の両方から証言を得
るよう, 私は提案している... アメリカ社会は, これまで空軍により提供されてきたものよりもさら
により説明を受ける資格がある, という強い信念のもとで, 私は UFO 現象を調査する委員会の
設立を強く提言する。我々は国民に対してUFOについての真実性を確立し, この主題について
可能な最大限の啓発を行なう義務があると考え”¹⁵⁾

大統領 ジミー・カーター

President Jimmy Carter

“私が大統領になったら, UFO 目撃についてこの国が持っているあらゆる情報を国民と科学者に
明らかにするつもりだ。私は UFO が実在することを確信している。なぜなら, 私はそれを一度見
たことがあるからだ... ”¹⁶⁾

大統領 ロナルド・レーガン

President Ronald Reagan

“...世界のどこに住もうとも我々はすべて神の子だ、と考えるのを人々がやめたなら、私は[ゴルバチョフに]こう言わざるを得なかった。もし、突然宇宙の他惑星から来た種族によるこの世界への脅威が出現したら、我々が持ったこれらの会合において、彼と私の仕事がいかに容易であったかと...”

“この相互の連帯を我々が認識するためには、おそらく何か外部の宇宙的な脅威が必要だ。我々がこの世界の外部から異星人の脅威を受けていたなら、世界中の不和がいかに早く消失することか、私はどきどき考える”¹⁷⁾

J・エドガー・フーバー

J. Edgar Hoover

“私はそれ[UFOの研究]をしたいと思う。だがそれを承諾する前に、回収された円盤への自由な接近を強く要求しなければならない。たとえばロサンゼルス事件では、陸軍がそれを接收し、我々が簡単な調査をするためにそれを入手することを許さなかった”¹⁸⁾

ネイサン・D・トワイニング将軍

General Nathan D. Twining

空軍資材軍司令官 (the Commanding General of the Air Material Command) 在任中に、以下のことを書いた:

“見解は次のとおりである:

- a. 報告された現象は現実の何かであり、幻想や作り話ではない。
- b. 多くは円盤に近い形をし、我々の航空機と同程度に見える大きさを持つ物体が存在する。
- c. 事件の幾つかは、流星などの自然現象によって引き起こされた可能性がある。
- d. 異常な上昇速度、運動性(特に横揺れ)、友好的な航空機やレーダーにより目撃または捕捉されたときの回避行動に違いない振る舞いなど、報告された動作特性は、物体の幾つかが手動、自動、または遠隔操縦されている可能性を信じられるものにする”¹⁹⁾

15) Ford, Gerald: Letter to L. Mendel Rivers, Chairman of the Armed Service Committee, March 28, 1966.

16) Carter, Jimmy: *The National Enquirer*, June 8, 1976; confirmed by White House media liaison Jim Purks, in a letter dated April 20, 1979.

17) Reagan, Ronald: 1) White House transcript of speech at Fallston High School, December 4, 1985; 2) Speech to the United Nations General Assembly, September 23, 1987.

18) Hoover, J. Edgar: Letter to Clyde Tolson, July 15, 1947.

19) Twining, Nathan: Letter to Commanding General of the Army, September 23, 1947.

ウォルター・ベデル・スミス将軍

General Walter Bedell Smith

CIA (*Central Intelligence Agency; 米中央情報局) 長官, 1950 - 1953

“中央情報局は、報道機関が様々に憶測し、また政府諸機関の関心事となってきた、未確認飛行物体についての現状を再調査した. . . 1947 年以来、およそ 2,000 の公式な目撃報告が受理され、これらの約 20 パーセントが今のところ正体不明である。この状況は一機関の管轄範囲をはるかに超え、我々の国家安全保障にかかわる可能性があるものと私は考える。これらの報告の中で見られる幾つかの現象について、確固たる科学的理解を得るために、広範な組織的取り組みを開始する必要がある”²⁰⁾

H・マーシャル・チャドウェル

H. Marshall Chadwell

CIA 科学情報部副部長 (Assistant Director, Scientific Intelligence, CIA)

“1947 年以来、ATIC (*Air Technical Intelligence Center; 航空技術情報センター) はおよそ 1,500 の公式な目撃報告に加え、おびただしい量の手紙、電話、および新聞報道を受理してきた。1952 年 7 月だけでも、公式報告は 250 に上る。空軍は 1,500 の報告のうち 20 パーセントを、また 1952 年 1 月から 7 月までの報告の 28 パーセントを、*正体不明* としている”²¹⁾

エドワード・J・ルッペルト大尉

Captain Edward J. Ruppelt

元米空軍ブルーブック計画責任者[1951 - 1953]

“公式には存在しないものを扱うために、この報告は書くのが難しかった。1947 年 6 月に最初の空飛ぶ円盤が報告されて以来、惑星間宇宙船のようなものが存在する証拠はない、というのが空軍の公式見解であることはよく知られている。しかし、よく知られていないことは、*証拠* という一つの言葉のために、この結論が軍とその科学顧問たち全員の一致によるものとはほど遠いということだ；だから、UFO 研究は続いている”²²⁾

ロスコー・ヒレンケッター提督

Admiral Roscoe Hillenkoetter

初代 CIA 長官, 1947 - 1950

“今こそ、真実が明かされるときだ. . . 舞台裏では空軍の高官たちが正気で UFO に関心を持っている。しかし、公職上の秘密とあざけりにより、多くの市民が未知の飛行物体は馬鹿げていると信じ込まされている. . . 未確認飛行物体についての秘密によりもたらされる危険を減らすために、議会は直ちに行動を起こすよう、私は強く求める”²³⁾

20) Smith, Walter: Memorandum to National Security Council, 1952.

21) Chadwell, H. Marshall: Memorandum to Director of Central Intelligence, 1952.

22) Ruppelt, Edward: *The Report on Unidentified Flying Objects*, Ruppelt, Doubleday, New York,

1956.

23) Hillenkoeter, Roscoe; *Aliens from Space*, Major Donald E. Keyhoe, 1975.

E・B・ルバイイ少将

Major General E. B. LeBailly

空軍官房情報局長 (Director of Information, Office of the Secretary of the Air Force)

“... 説明できない多くの報告は、誠実さについては疑い得ない、知的で技術的資質のある人々から寄せられてきた。さらに、空軍により公式に受理された報告には、多くの民間 UFO 雑誌で公表される華々しい事例は、ごく少数しか含まれていない”²⁴⁾

ウィリアム・スタントン議員 (ペンシルバニア)

Congressman William Stanton (Pennsylvania)

“空軍は、この事件[ペンシルバニアでの 1966 年 4 月 17 日の目撃]を徹底調査する責任を果たさなかった... 公共の福祉を使命とする人々が、国民は真実に対処できないと考えるや、今度は国民が、最早政府を信用しなくなるだろう”²⁵⁾

ウィルバート・スミス

Wilbert Smith

カナダ運輸省, 上級無線技師, マグネット計画責任者

“この問題は、合衆国政府において水爆をも凌駕する、最高度の秘密事項だ。空飛ぶ円盤は実在する。その操作方法は未知であるが、バンネバル・ブッシュ博士に率いられた少数のグループにより、集中的な研究が行なわれている。この問題の全体は、合衆国当局によりとてつもなく重要なものと考えられている”²⁶⁾

ヒル・ノートン卿, 英国海軍提督(五つ星)

Lord Hill-Norton, Admiral of the Fleet, Great Britain (Five Star)

“私がなぜこんなにも UFO に関心を持つのか、とよく訊かれる。長年にわたり国防に密接に関係してきた人間がこれほど単純なのは奇妙だ、と人々は考えるようだ。私には幾つかの理由がある。第一に、私は物事が明快に説明されることを好む一種の探求心を持っている。私にとってまったく明らかなこの問題全体の一つの側面は、UFO は私 が満足するほどに説明されてこなかった、ということである。まったくのところ、私に関する限り U は *unidentified* 以上に *unexplained* を表している。第二に、実に様々な正体不明の別の現象が存在する。それらは UFO に関係しているかもしれない、そうでないかもしれないが、私は UFO との関連で注目してきた。第三に、複数の政府が行なっている UFO 製造のための研究が、公的に隠蔽されていると私は確信している。米国は確実にそうだ... 人間が作った物体とも、科学者に知られている何か物理的な力または効果とも説明できない、我々の大気中さらには地上でさえ目撃されてきた物体が存在するという証拠は、私を圧倒する”²⁷⁾

ウィルフレッド・デ・ブラウアー少将(王立ベルギー空軍, 副長官)

Major-General Wilfred de Brouwer (Deputy Chief, Royal Belgian Air Force)

“ともかく空軍は、幾つかの特異な現象がベルギー上空で発生し続けてきた、との結論に至った。．．． 現在まで、攻撃性の兆候が示されたことはない。軍用機でも民間機でも、航空交通が干渉や威嚇を受けたことはなかった。それゆえに、我々は考えを進めて、これまで当然とされてきた対処行動は明確な危険行為であるということが出来る。．．． これらの現象が技術的手法を用いた探知と収集により観測され、その起源がすべて分かる日が必ずくるだろう。．．． ”²⁸⁾

24) LeBailly, E.B. “Unidentified Flying Objects” (No. 55); hearing by Committee on Armed Services, House of Representatives, April 5, 1966.

25) Stanton, William: Quoted in *Ravenna Record-Courier*, Pennsylvania, April 1966, cited in *Mysteries of the Skies*, Lore and Deneault, Prentice Hall, 1968.

26) Smith, Wilbert: Memorandum on Geo-Magnetics, November 21, 1950.

27) Hill-Norton, 1988, Foreword to *Above Top Secret*, Timothy Good, William-Morrow, New York, 1988.

28) DeBrouwer, Wilfred: *UFO Wave Over Belgium—An Extraordinary Dossier* (original title in French), SOBEPS, 1991.

3.3 なぜ UFO は秘密にされるのか

序文

過去数年間、私の仕事は米国と海外の両方で、政府および科学界の指導者たちに UFO／地球外知性体についての背景説明を行なうことであった。

この主題についての証拠は、明白で確実なものだ。UFO の実在そのものを示す否定し得ない事例を挙げるのは、困難でなかった。それよりも難しいのは、UFO に関係した秘密の構造を解明することである(3.4 節の“認められざるもの”と題された論文にある、この問題の解説をみよ)。しかし最大の困難は、“なぜ”を説明することである。なぜ、すべてが秘密なのか？なぜ、政府の内部に“闇の”，または認められていない政府があるのか？UFO／ET 問題が国民の目から隠蔽されるのは、なぜなのか？

“何が”，つまり証拠は、複雑ではあるが何とか対処することができる。“いかにして”，つまり秘密計画の性格は、さらに難しく複雑で入り組んでいる。しかし，“なぜ” — 秘密の背後にある理由 —こそは、最も困難な問題である。この問いにただ一つの答はない。それどころか、このような桁外れの秘密には、相互に関連した数多くの理由があるのである。我々の調査と、このような計画の内部にいた数十人に上る極秘の目撃証人への面接取材により、秘密の背後にある理由を理解できるようになった。それらは、かなり明白で単純なものから実に異様なものまで、多岐にわたる。ここで私

は、この秘密についての幾つかの要点を共有したいと思う。なぜ秘密が保たれてこなければならなかったのか、秘密計画の内部にいる統制組織にとり、その方針を変えて公開を許すことが困難なのはなぜか。

ことの始まり

ET/UFO 現象の初期には、軍、情報機関、および産業界が、現象の性質について関心を持った。それは我々の敵対者による人類起源のものか、またそれが地球外起源と断定されたら、国民はどう反応するか。

1930年代と1940年代、これは小さな問題ではなかった。もし、これらのUFOが地球外起源だとしたら、それらは米国の航空機よりもはるかに進歩した機械装置による地球侵略の証拠となるだろう。そして、それが地球外のもので断定されるや(幾つかの部局は、第二次大戦終了前にこれを知っていた)、答よりもさらに多くの疑問が生じた。すなわち、なぜETはここにいたのか？彼らの意図は何か？これらの装置はいかにしてこのような驚異的な速度で飛行し、広大な宇宙空間を航行できるのか？これらの技術をどうしたら人間に応用できるか — 戦時と平和時の両方に — ？国民がこれを知ったらどう反応するか？これらの事実の公開が人間の信仰に与える影響はどうか？政治的および社会的なシステムはどうか？

1940年代終わりから1950年代初めにかけて、これらの宇宙機の背後にある基本的な科学と技術を解明するために、まずニューメキシコや他の場所から回収された地球外物体の直接調査と逆行分析(reverse-engineering)による、組織的な取り組みが行なわれた。直ちに、これらの物体が、内燃機関、真空管などといったものよりもはるかに進歩した物理法則と応用技術を使っていることが明らかになった。冷戦のただ中にあり、わずかな技術的優位性が核軍備競争における軍事バランスを危うくする世界にあって、この問題は小さくなかった。

実に、人間の地政学的な機能障害という主題は、UFOに関係する秘密の一つの特徴として繰り返し現れる — それは今日この時点まで続いている。これについては後でさらに述べる。

ウィルバート・スミスによる1950年のカナダ政府最高機密文書から、この主題が水爆の開発よりも大きな秘密として保持されてきたことを、我々は知る。1940年代終わりには、地球外物体についての研究、それがどのように機能するかの解明、またそのような発見が人間のためにどう応用されるかの予測に、多大な努力が払われていた。そのときでさえ、この主題を扱うプロジェクトは、とてつもない秘密であった。

1950年代初めに、ET宇宙機のエネルギーと推進システムの背後にある幾つかの基本的な物理学について、実質的な進展がみられ、秘密の傾向はさらに強まった。我々が推定できる限り、このプロジェクト全体が次第に闇の中に消え、認められざるものになっていったのは、このときである。

これらの秘密プロジェクトが実際に手に入れたものが何であるかが理解された1950年代初めに、UFOを扱うプロジェクトの区画化が急速に進行した：もし公開されれば地球上の生活を永久に変えてしまうであろう、物理学とエネルギーシステムを示す装置類。

アイゼンハワーの時代、UFO/ET プロジェクトは、合法的な監督と統制の指揮系統を離れて、益々区画化された。このことは — 目撃証人の証言から、我々はアイゼンハワーがET宇宙機について知っていたことを知っているが — 大統領(および英国や他の同様の指導者たち)が次第に蚊帳の外に置かれていったことを意味する。このような選挙で選ばれ任命された高い地位にある指導者たちは、彼らの統制と監督がいよいよ届かない、迷路のように区画化されたプロジェクトを持つ、(アイゼンハワーがそう呼んだ)複雑な軍産複合体に直面することになった。目撃証人による直接の証言から、我々はアイゼンハワー、ケネディ、カーター、そしてクリントンが、このようなプロジェクトの内部に立ち入ろうとして挫折したことを知っている。

このことは、議会や捜査当局の高官たち、外国や国連の指導者たちについても同様である。実にこれは、機会均等排斥プロジェクトである — 官職や位がどんなに高くとも、無関係である。もしあなたがプロジェクトに不要と見なされれば、あなたはそれについて知ることはない。以上。

一般に流布している俗説と異なり、我々が宇宙で孤独ではないという事実に直面したとき社会に起きる、ある種のパニックへの懸念は、1960年代以来、秘密の主たる理由ではなかった。内情に通じる人々は — UFO団体やXファイルの中では奇怪な話が作られているが — 敵意あるETの恐怖もまた、重要な要因ではなかったと理解している。ET現象の背後にある究極の目的について、幾つかの秘密の集団内では依然混乱があるものの、ETを敵対的な脅威と見なす部内者は一人もいないことを、我々は知っている。

1960年代までには — 確実に1990年代までには — 世界は宇宙旅行の概念を熟知するようになり、人気の空想科学産業は、遙か遠くからETがやってくるかもしれないという考えを、大衆に徹底的に吹き込んだ。だとすると、なぜ秘密が続いているのか？

冷戦は終わった。我々が宇宙で孤独ではないと知って、人々が動揺することはほとんどないだろう(多数の人々はすでにこれを信じている — 実際には大部分の人々が、UFOが現実であることを信じている)。さらに言えば、20世紀後半を、全世界の主要都市に向けられた数千の水爆とともに生き抜く以上に衝撃的なことが、あり得るだろうか。もしこれに対処できれば、間違いなく我々は、ETが現実であるという考えに対処できる。

恐怖、パニック、動揺などといった安易な説明では、大統領とCIA長官でさえその情報に接近することを拒否されるほどの深い秘密性を正当化するには、不十分だ。

推測される現状

そうすると、UFO問題が今でも秘密にされているのは、基本的な世界の権力力学、そしてこのような秘密の公開がそれらに与える影響の大きさに対する、現在も続いている懸念に関係しているに違いない。

すなわち、UFO/ET現象に関係した知識は、どんな犠牲を払ってでも、それを抑圧し続けることが絶対に必要だと考えられるほど、現体制を変える大きな潜在力を持っているに違いない。

遡って1950年代初め、これらのET宇宙機の背後にある基本的な技術と物理学が、非常に集中的な逆行分析(reverse-engineering)プロジェクトにより発見されたことを、我々は知った。秘密性がかつてないレベル — 我々が知るように、本質的に政府の通常の指揮系統による統制から外す — まで引き上げる決定がなされたのは、まさにこのときである。なぜか？

冷戦時代にこのような知識が米国／英国の敵対者によって使われる可能性があったことはさておき、これらの装置類が‘お父さんのオールズモビル’ではないことが直ちに理解された。エネルギー発生と推進システムの背後にある基本的な物理学は、地球上にあるすべての既存のエネルギー発生と推進システムに容易に取って代わり得るほどのものであった。それにより、すべての地政学的小および経済的秩序もまた、同じ運命を辿る。

1950年代、地球温暖化、生態系破壊、オゾン層破壊、熱帯雨林消失、生物多様性の荒廃などには、大きな関心が払われなかった。第二次大戦後、必要なことは世界経済、技術および地政学的秩序の動乱ではなく、安定であった。覚えて欲しい：支配者は支配者のままでいたがる。彼らは危険回避者であり、重大な変化を嫌い、支配や権力を容易に放棄しない。

ETの存在を公開すると、不可避免的にこれらの新技術に関連する公開がすぐその後につき、世界を永久に変えてしまうだろう — それを彼らは知っている。こんなことはあらゆる犠牲を払ってでも回避しなければならない。さらに当時は、“GM(*ゼネラルモーターズ)にとってよいことは米国にとってよいことだ”の時代であった。同じことは、大手石油資本、大手石炭資本などについても言えただろう。

否定できない事実は、こうである。ET存在の公開は、それとともにこれらの技術の確実な解放をもたらすだろう — その解放は、この惑星上のあらゆる技術基盤を洗い流す。変化は途方もないものになるだろう — そして突然である。

50年後の今、このことは当時よりもさらに真実である。なぜか？1950年代の問題回避により — 当時は都合がよかったが — 今やさらなる綱渡りの状況を招来している。例を挙げれば、世界が石油と内燃機関技術に依存する度合いは、1955年よりも今の方が大きい。また、世界経済は今の方が桁違いに大きい。だから、どんな変化も飛躍的に大きく — さらなる大混乱を起こす可能性を秘めている。

こうして、これは難題になった：その時々時代と世代がこの問題を次の世代に先送りすることにより、継続される秘密は、一時代ごとにその不安定さを増す以外になくなった。狂気じみた秘密の循環、公開の遅れ、増大する世界の複雑さと我々の時代遅れのエネルギーシステムへの依存の中で、それぞれの世代は前の世代よりもさらに大きな圧搾を受けてきた。1950年代に公開することは困難であっただろうが、今公開することはさらに困難である。その結末は世界を揺るがすことになるだろう。

地球外宇宙機の逆行分析によりもたらされた1950年代の技術的発見は、我々が世界の経済、社会、環境を完全に変革することを可能にしたはずであった。このような進歩が社会に明かされな

いできたことは、その時点の統制階級が変化を嫌う本性を持っていたことに関係している — それは今も続いている。

だから、間違いなく変化は途方もないものになるだろう。

考えてみよ：いわゆるゼロポイント場からエネルギーを取り出すことを可能にし、すべての家庭、事業所、工場、乗り物がそれ自身の動力源を持つことを可能にする技術 — 外部からの燃料源を使わずに、永久に、石油、ガス、石炭、原子力発電所、内燃機関のどれも不要。しかも環境汚染は皆無。以上。

考えてみよ：地表面上を浮遊しながらの輸送を可能にする、電気重力装置を利用した技術 — 輸送は地表面上を浮遊して行なわれるために、肥沃な農地を覆う道路は最早不要。

素晴らしいことだ。だが、1950年代は石油が豊富で、誰も汚染を心配せず、地球温暖化は関心のかけらもなく、世界の大国には安定こそが求められていた。現体制の維持である。その上、なぜこのような公開による構造変革か？後の世代に任せようではないか。

しかし今、我々がその後の世代である。そして、2001年は1949年ではない。地球は、そのすべてが車、電気、テレビといったものを欲しがらる増大する人口 — 現在は60億人 — の重荷に歪んでいる。石油がさらに50年もたないことは誰でも知っている — 仮にもったとしても、地球の生態系はこのような酷使にさらに50年は耐えられないだろう。公開による危険は、今や秘密による危険よりもよほど小さい。もし秘密がさらに続けば、地球の生態系は崩壊する。まさに、大きな変化と地球規模の不安定とはこのことだ。...

多くの人々は、このような公開の技術的および経済的影響が、継続する秘密を正当化する主要部分だと考えるだろう。つまるところ、我々は毎年数兆ドルの経済的变化について語っているのだ。経済のエネルギーと輸送の全領域は、大変革させられるだろう。エネルギー部門 — 再生不能の燃料が購入され、燃やされ、再び補給される部分 — は完全に消滅するだろう。そして、他の産業部門が繁栄していくことになる中で、このような数兆ドルの経済部門が消えゆく現実を受け入れないのは、愚か者だけである。

石油、ガス、石炭、内燃機関、および公益事業に関係した産業基盤につながる‘既得権益’が、この世界において小さな勢力でないことは確かである。

しかし、UFOの秘密を理解するためには、その金というものが本当は何を意味するのか、考えなければならぬ。権力である。巨大な地政学的権力である。

インド(アフリカ、南米、中国でもよい)のすべての村が、汚染を伴わず、燃料のための莫大なエネルギーも費やさずに、大量の電力を発生する装置を持ったなら何が起きるか、考えなければならぬ。全世界はかつてない勢いで発展することができるだろう — 汚染もなく、発電所、送電線、燃料に巨額の資金を使うこともなく。持たざる者が持てる者になるだろう。

多くの人々は、これをよいことだと考えるだろう：結局、世界の不安定要因の多く、戦争などといったものは、大きな富を持つ世界の中での、気の遠くなるような貧困と経済的悪行に関係がある。社会的不正と極端な経済格差が、世界に混沌と苦悩を生んでいる。これらの分散的な、汚染を生じない技術は、それを永久に変えるだろう。砂漠にさえも花が咲くだろう...

しかし、地政学的権力は、技術的および経済的能力から生じることを覚えておかなければならない。インドは10億を超える人口を擁し、米国はその約4分の1であるが、どちらがより大きな地政学的権力を持っているだろうか？

これらの新エネルギーシステムが拡散するにつれて、いわゆる第三世界は急速にヨーロッパ、米国、日本などの工業先進世界と肩を並べることになる。これは、大規模な地政学的権力の移行を引き起こす。そのとき、工業先進世界は、今虐げられている第三世界と実際に権力を共有しなければならないことに気付くだろう。

現在(また1950年においても)権力の座にある者たちは、こんなことをすることに何の興味もない。我々が国連の中で権力を支持したり共有したりすることは、ほとんど不可能である。

UFO/ET問題の情報公開により、新エネルギーシステムは全世界に拡散し、世界の権力は急速に均等化されるだろう。米国とヨーロッパには6億の人々がいる。これは世界人口のたった10パーセントにすぎない。残る90パーセントの技術的および経済的地位が上がるや、地政学的権力がその方に向かって移行 — または均等化 — することは明白である。権力は共有されるべきものになるだろう。本当の地球規模での集団安全保障が必然となるだろう。それは我々が知っている世界の終わりである。

経済的および技術的影響と地政学的影響を合わせたとき、終焉する秘密によってもたらされる変化が真に構造的であることは明らかである — 大規模で、世界を包囲する、革新的なもの。それは容易なことではない。

だが、世界がこれらの新技術を獲得したはずのときから50年 — 生態系の荒廃、社会的および経済的な混乱と格差の長い50年でもあった — 経って、我々はUFOの秘密として知られる宇宙的難問を先送りしてきた、長い行列の最後の世代であると気付いている。

こうして、我々はこの難問を抱えてここに立っている。しかし何を為すべきか？

秘密の終焉は、人類生存の事実上あらゆる面における、甚大で深遠な変化を意味する — 経済、社会、技術、哲学、地政学、等々。しかし、秘密の継続とこれらの新エネルギーおよび推進技術の抑圧は、はるかに不安定な何物かを意味する：我々が依存する地球生態系の崩壊と化石燃料の確実な枯渇。満たされた尊厳ある生活を必要以上に奪われている持たざる者の怒りの増大。この宇宙的難問を引き渡せる世代は、我々にはもういない：我々はこれに対処し、1950年に行なわれていたべきだったことをしなければならない。

我々が織りなす蜘蛛の糸

前述のことが秘密の対象として不十分だと思うなら、この秘密を維持するために驚くべきことが行なわれてきたことを思い起こして欲しい。秘密を維持し、大統領、CIA 長官、高い地位にある議会指導者、ヨーロッパの大統領といった人々を欺くことができるまでそのレベルを拡張するのに必要な構造基盤は、相当なものである — そして違法である。明確にしておきたい。UFO 問題とそれに関係した技術を統制する組織は、世界のどの一国の政府または知られている世界の指導者の誰よりも、強力な力を持っている。

このような事態になるかもしれないことは、アイゼンハワー大統領が 1961 年 1 月に、増大する“軍産複合体”に関して我々に警戒を喚起したときに、予め警告されていた。これは、彼が大統領として世界に発した最後の演説だった — 彼は、彼自身が知っていた驚愕すべき状況について、直接我々に警告を発していたのである。というのも、アイゼンハワーは、ET 宇宙機と ET の遺体を見ていたからである。アイゼンハワーは、この事態に対処した秘密計画について知っていた。しかし、彼がこれらのプロジェクトに対する統制を失ってしまったことも、また彼らがその研究開発の範囲と全容について彼に嘘をついていることも知っていた。

実に、秘密維持の現在の最新技法は、複合型、準政府、準民間の国際的な活動である — これはいかなる単独の機関または一国の政府の権限も及ばないところで行なわれる。“政府” — あなたや私やトーマス・ジェファーソンが考えるような — は本当にまったく蚊帳の外である。そうではなく、選り抜きの、厳重に管理され区画化された、“闇の”または認められざるプロジェクトが、これらの問題を統制している。近づくためには組織の一員になるしかない。そうでなかったら、CIA 長官、大統領、上院外交委員会議長、または国連事務総長の誰であろうと、あなたはこれらのプロジェクトについて知ることも近づくこともできない、というだけのことだ。

私が背景説明を行なったことのある国防総省統合参謀本部の高官たちが、このようなプロジェクトに一般市民より以上に接近できない状況は、実に尋常ではない — 何かの理由で彼らが“内部”にいない限り。だがこれは稀だ。

このような権力を獲得し維持するために、あらゆる種類のことが行なわれてきた。我々はロバート・フロストの詩を思い出す。その中で彼は、“我々が織りなす蜘蛛の糸...”と書いている。しかし、このような組織がどうやってこの秘密、欺き、虚言、反抗の蜘蛛の糸から抜け出すというのか？

はっきり言えば、このグループは法的に認められない権力と権利を不法使用しているのである。それは米国、英国、および世界中の他の国々で憲法を超えたところにある。

私は、次の可能性を認めよう。少なくとも最初にこの秘密活動は、秘密を維持し不安定を回避するためであった。だが、不注意による秘密漏洩の危険 — または国や世界の指導者が合法的に秘密を公開すべきときであると決意する危険 — から、益々大きな秘密と非合法活動の蜘蛛の糸を織ることが最重要になった。そして今、その蜘蛛の糸は活動そのものを包圍してしまった。

つまり、区画化されたプロジェクトの複雑さ、違憲で不当な活動の度合い、連携する企業(軍産

複合体の“産”の部分)による先端技術の“民営化(または盗用)”,合法的に選出され任命された指導者と社会に対するこれまでの虚言 — これらのすべてとそれ以上のことが、隠し続ける心理を助長してきた — なぜなら、公開により歴史上最大のスキャンダルが暴露されるからだ。

たとえば、汚染による地球全体の生態系荒廃と、今や絶滅した数千もの回復できない動植物種の損失が、まったく不要であった — そして 1950 年代にこの情報の公開が正直に行なわれていたなら、回避されていたはずだ — という事実には、国民はどう反応するだろうか？

認められざる違憲プロジェクトに、長年にわたり数兆ドルもの資金が使われてきたと知ったら、社会はどう反応するだろうか？そして、これら納税者の税金が、この秘密の中で軍産複合体の“産”の企業によりET 物体研究に基づく副次的技術開発のために使われ、さらにその技術は、後に特許として大きな利益を生む技術の中で使われているとしたら？納税者は詐欺行為を受けているだけではない。彼らの税金で賄われた研究開発の成果である画期的技術に割増料金まで支払っているのだ！ET から獲得したこのような技術の知的所有権の不正使用ということに、何らの考慮も払われていない。基本的なエネルギー発生と推進の技術が公表されないできた一方で、これら“産”の企業は、電子技術、小型化技術、および関連領域での他の画期的な技術と便益により、大きな収益を上げてきた。このような秘密の技術移転は、実に社会の共有財産となるべき技術の、数兆ドルもの盗用に相当する。なぜなら、納税者がそれを賄ってきたからである。

また、内燃ロケットなどを使った数十億ドルの宇宙計画が、原始的で不必要な実験だったと知ったなら、国民はどう反応するだろうか？というのは、これよりはるかに進んだ技術と推進システムが、我々がかつて月に行った以前に存在していたからだ。NASA と関連機関の大部分は、このことを知らなかった政府の人々および国民と同様に、この秘密の犠牲者である。NASA 職員のうちごく少数の、非常に区画化された部分のみが、これらのプロジェクトの中で隠し通されてきた実際の ET 技術を知っている。私の叔父は、ニール・アームストロングを月に運んだ月着陸船の設計に携わっていたが、これらの画期的技術に接近することを拒まれていたという点で、確かに他の犠牲者と変わるところがなかった。彼は、他の皆と同じように、古い物理学と古い内燃ジェット推進技術に頼らざるを得なかった。何という恥辱か。

否定できない事実は、こうである。この秘密プロジェクトは、最初の意図がいかにか善意であったにせよ、それ自身の秘密権力により押し流されてしまった。秘密プロジェクトは、その権力を誤用した。それは、我々の未来を 50 年間奪い続けている。

実際に、1940 年代終わりと 1950 年代初めに行なわれた静かなクーデターがひとたび暴露されるや、今日の世界に本当の不安定さをもたらすだろう。

しかし、状況は実のところ、これよりさらに悪い。これまで述べたすべては、さらに大きな問題の前では小さく見える。UFO に関係したこれら闇のプロジェクトを運営している秘密グループは、初期段階にある地球外文明と人類の交渉を独占的に支配してきた。そして悲劇的に間違った対応がとられてきた — 真の地球破滅になりかねないほどの。

というのは、選ばれてもいない、任命されてもいない、自らを選んだ、軍事指向のグループが単

独で、人類と ET の間の異種族間交渉をしなければならないとしたら、何が起きるか？何でもそうだが、バラ色の眼鏡をかけたら、全世界は赤く見えるものだ。だから、もしあなたが軍事眼鏡をかけたら、すべての新しい制御できない現象は、潜在的または現実の軍事的脅威に見えるだろう。

このようなグループ — 異常な統制下にあり、かつ排他的な — の本性は、均質な世界観と発想である。権力と統制はきわめて顕著である。このような極度の秘密性は、抑制と均衡、妥協を完全に欠いた、非常に危険な環境を生む。そしてそのような環境の中では、意見の反映、議論、あるいは必要な展望の洞察が適切に行なわれないうまま、非常に危険な決定が行なわれる可能性がある。それらは否応なしに排除される。

このような極度の秘密性、軍事主義、および被害妄想の環境の中で、とてつもなく危険な行動が ET に対してとられてきたことを、我々は知った。実際に我々には複数の内部事情通があり、彼らが語る所では、地球外物体を追跡し、標的にし、破壊する、益々進歩した技術が使われてきた。もしこれが真実だという 10 パーセントの可能性でもあれば（私は 100 パーセント正確だと確信しているが）、完全に我々の統制外にあり、しかも惑星全体を危険にする、地球規模の外交的および社会的危機に直面していることになる。

覚えて欲しい。秘密の逆行分析 (reverse-engineering) プロジェクトは、技術の飛躍的進歩をもたらした。それはひとたび軍事システムに応用されれば、平和的にここにいるであろう ET に対する、真の脅威になり得る。宇宙空間を急速に軍事化する企ては、おそらく地球外知性体のプロジェクトと意図に対する、近視眼的、軍事主義的、被害妄想的な見方によるものだ。それが抑制されないままだと、結果は破滅でしかない。

実にこのグループは、いかに善意から出たものであろうと、直ちに白日のもとに曝され、新しい視野を持った全世界の政治家たちがこの状況の仲裁に乗り出せるようにする必要がある。ET 文明が敵対的である証拠を我々はまったく持っていないが、彼らの活動への野放図で増大する干渉を、彼らが許すことはないこともまた明らかだ。自己防衛は普遍的なものだろう。ET はこれまで驚異的な自制を示してきたが、もし人類の秘密の技術が彼らのそれに肩を並べ始め、そのような先端技術を人類が敵対的な方法で用いようとしたら、宇宙の仕掛け線を踏むことになるのではないか？その考えは我々を肅然とさせる。

我々はジミー・カーター、ダライ・ラマ、その他の国際的な政治家たちを、この巨大な問題に関与させる必要がある。しかし、接近が拒否され — またこの主題が公開されず、全世界のレーダー画面の外にあるなら — 選ばれてもいない少数に我々の運命を預け、我々の代表として行動することを許すことになる。これは変えなければならない、それも直ちに。

帰するところ、UFO と ET に関係したこのような公開に伴う変化は、大規模で地球生命のあらゆる側面に深遠な実質的影響を与えるだろうが、それでもそれを行なうことは正しい。秘密は一人歩きしてきた — それは増殖する癌であり、それが地球の命とその上に棲むすべてのものを破壊する前に治療されなければならない。

秘密の理由は明白である。地球規模の権力、経済および技術的な支配、地政学的な現体制維

持、このようなプロジェクトと彼らの行動の露頭が巻き起こすスキャンダルへの恐怖、などである。

しかし、公開よりも危険なことは、秘密を隠し続けることである。地球は死にかけている。我々が殺しているのだ。世界の上位 250 人とその一族が持つ資産は、最貧 25 億人のそれに等しい。人類と他の惑星の人々との前途有望な関係は、完全な秘密の中で行なわれている間違った思考と間違った計画により、軍事化され、歪んでいる。

公開による短期的な不安定と変化のすべてを考えると、気も遠くなるが、秘密を続けることは、我々の愚行と貪欲により地球を破壊することを意味する。人類の未来、それは過去 50 年間遅らせられ奪われ続けているが、さらに 50 年間奪われ続けることはできない。なぜなら、我々はさらに 50 年間の時間は持っていないからだ — 地球の生態系は、その前に崩壊するだろう。

安易な選択はない。だが正しい選択が一つある。その実現に力を貸していただけるだろうか？

3.4 認められざるもの

政府は秘密を隠しておけるか？

ある本当に大きな秘密 — あらゆる時代の中で最大の秘密を？政治家と政府指導者のどんなつまらない過ちもゴールデンアワーのニュースになるときに、政府は世界の歴史の中で最も驚愕すべき発見 — 地球外知性体の存在 — を、我々から隠せるものだろうか？

そう、イエスでもあり — そして、ノーでもある。

はじめに、政府という概念を定義し直す必要がある。というのは、まず“我ら人民”の政府がある。選ばれ任命された公務員、国民の代表、行政官、立法府および司法府、等々、中学社会科にあるような。

しかし、認められざる“政府”もまた存在する：深く隠蔽された“政府”，深い闇のプロジェクト，雇われた作業員と企業，‘我ら人民’の政府が認められざる“政府”について知ることを阻む任務を負った、謎の中間役人たち。

左手がしていることを、右手は知らない — しばしば知ろうとするが...

我々は少し先走り過ぎているようだ。はじめに幾つか背景を述べたい。

この 20 世紀の後半に、実在する秘密がいかに維持されているか、私はほぼ 11 年間静かに研究してきた。私が知ったのは驚くべきものであった。そして正直に言うと、信じ難いものだった。今あなたが読もうとしている内容は真実である — だが、10 年前に誰かがこれを私に話したら、私はそれを信じなかつただろうと認める。あなたは、この論文の残りの部分を作り話として読むかもしれない。その内容のすべてを遠くから眺めたら、あなたはもっと安心するかもしれない。しかし、これは本当

のことだ、という気持ちもいづらか持って欲しい。

この節で扱う内容は、UFO/ET が現実か、あるいは地球を訪問しているか、ということについては、まずそのことから離れよう。というのは、それは扱いやすい部分だからである：UFO は現実である；それらは地球外起源である；彼らは数十年間（数世紀でないとしても）、我々の周囲にいる；彼らが敵対的である証拠はない；我々を訪問している種族は、おそらく複数である；“政府”のある部分は、少なくともこれを 50 年前に知っていた。

この主題のもっと難しい部分は、この異常な物事は現実であるが、それでも何かしら非現実的で、隠され、秘密にされ、得体が知れない、ということを理解することだ。公式の政府 — およびメディアと科学界の公式な真実の管理人 — がこれほど長く欺かれてきたことは、歴史上に例を見ない秘密の精巧さ、深さ、広さ、遍在性のたまものだ。

実に、いかにして — そしてなぜ — この偽装行為が存在してきたかの物語は、その奇妙さ、不思議さ、信じ難さにおいて、地球外現象そのものを超えている。実際のところ、秘密の効力はその秘密の性質の驚くべき信じ難さそのものに関係しているようだ。別の言い方をすれば、これら秘密プロジェクトの理由、方法、いわれ因縁は、あまりにも奇妙で信じられないために、そのこと自体がそれらの最良の覆いになっている：それに行き当たっても、誰もそれを信じないだろう。それは完全に限度を超えている。

正直に言うと、あなたがこれから読もうとしていることへの私自身の最初の反応は、こうであった。“本当だろうか...”しかし、その後の確証に次ぐ確証、独立した証拠に次ぐ独立した証拠により、私はそれを確信するに至った。そのとき、私はこう言っていた。“何てことだ...”

ここでの紙数の制限から、私は 6 年間の緊迫した舞台裏での研究の主要部分だけをあなたにお伝えする。いつの日か、話の全貌、名前も何もかもが語られるときがくることを願う。だが当分は、大まかな実態と、詳細の幾つかを述べることにしか許されない。この情報は、非常に高位かつ関係がある軍、情報機関、政府、および民間企業の情報筋との個人的な、内密の、慎重をきわめた会合と長い議論によりもたらされたものである。これら秘密プロジェクトに関する真実を研究する途中で、私は首脳、王族、CIA 高官、NSA (国家安全保障局) 諜報員、米国および外国の軍指導者、政治指導者、先端技術企業の請負業者といった人々と会うことになった。その過程は消耗的で、過酷で、衝撃的だった。安全と慎重のために、ここでは彼らの名前を当分伏せておかなければならない；あなたがこれを読み終わったとき、その理由が明らかになるだろう。

ことの始まりは、少なくとも第二次大戦にまで遡る。米国政府の一部の当局者は、人類が孤独ではないこと、一部の戦場の周囲を敵のものでも味方のものでない、進歩した機械が飛び回っていることを知っていた、ということを知った。親類が第二次大戦の高名なパイロットだったという、医療の同僚でもある友人が私に語ったところでは、このパイロットは、これらのいわゆる“フー”戦闘機が何であるかを突き止めるために、大統領命令によりヨーロッパに送られた。彼は大統領への報告で、それらは地球外宇宙機だと述べた。

これ以後、事態は益々奇妙になっていく。後にある CIA 長官の右腕になった一人の退役将軍は、

私にこう語った：1946年に軍将校だった彼の任務は、アイダホ上空で起きた一連の白昼 UFO 目撃に関して、“でたらめな”文書を作成することであった。彼が言うには、人々は UFO が現実であることを知っていた。しかし間もなく冷戦が始まり、その後には幾つかの戦争が続いた。人々は誰もが地球規模の熱核戦争に懸念を持った — だから、これら正体の知れない、しかし無害な ET について心配する暇など、誰にあっただろうか？

一体、誰が心配したというのか？

新しい、独立して確証する複数の目撃証人は、1947年のニューメキシコ、1948年のアリゾナ州キングマンでの ET 宇宙機の墜落と回収について、我々に語った。今やこれが確実に誰かの注意を引き、これ以後、目標の名前は*進歩した地球外技術*になった。それはどのように機能するのか；何に使えるのか；彼らはどう使うのか；我々より先にソビエトがそれを解明しないか；それが漏れて誰か新しいヒトラーが世界支配のために使わないか；人々がそれを知ったらパニックにならないか；もし？

そして、当時答が見つからなかった、さらなる疑問の数々。

こうして、千年紀の秘密プロジェクトが生まれた。

要するに、当時我々は水爆の開発を行っていた — そして我々の大敵ソビエトは、我々を追いかけるのに躍起になっていた。すでに危うくなっていた世界秩序をさらに不安定にするのに、真空管や内燃機関の世界に恒星間推進技術を持ち込む以上のものがあっただろうか？我々が技術的能力の飛躍に直面していた、というのは控えめな表現だ。我々は自分自身のために、それが安全に行なわれることを望んだ。

こうして、“国家安全保障”の面から、あらゆる犠牲を払ってでもこの問題全体を隠蔽しておくことが強く求められた。そして、これを行なうためにあらゆる手段がとられた。

しかし、この計画を台無しにする、大きくて活動的な一つの障害があった：ET はアメリカとそれ以外の世界の空を、ときには編隊を組んで数千人の人々に目撃されながら飛んでいたのである。さあ、あなたはこれをどうやって隠すか？

心がそれを隠すのである。ジョージ・オーウェル式のひねりの効いた仕掛けで、第二次大戦中の過去の心理戦研究により、実に以下のことが知られていた。もしばしば嘘が言い立てられ、特に‘ひとかどの’人物によってそれがなされたら、人々はそれを信じるようになる。第二次大戦中に心理戦の達人であった一人が、1940年代終わりにこの任務を任されたようだ。ウォルター・ベデル・スミス将軍が、この問題の心理戦部分を調整することに関与し、また大きな嘘を立ち上げることに一役買った：UFO は、たとえ百万人がそれを目撃しようとも、存在しない。

一般の人々に知られるようになったすべての目撃に対して、当局による否定が行なわれ、さらに悪いことに、事件とその研究者が嘲笑の対象になった。ハーバードの天文学者ドナルド・メンツェルが引っ張り出され、世界に向けて次の声明を出した。それはすべてヒステリーであり、UFO は実在

せず、すべて馬鹿げた話であると。

こうして、1950年代になっても、比較的少数のグループだけが真実を知っており、真実は彼らのうちにとどまっていた。メディアの注目を引く出来事が起きたときには、当局者がそれを否定し、馬鹿げた話にした。人間というものは、概して臆病な社会的動物であり、我々が認めたがるように、むしろレミングに近い。だから、困惑や嘲笑や社会的疎外を避けたければ、それを自分の目で間近に見ても、UFOについては沈黙を守るということが分かった。これに加えて、自然に発生した気違いや変人など、お分かりの社会一般の風潮と相まって、市民のUFO団体の中で馬鹿げた奇妙なほら話が積極的に奨励された。まともな人間 — 特に“まともな”メディア、科学者、政治指導者 — は誰でも、これを避けるべき“好ましくない話題”と見なした。

(これまで11年間の私の経験を振り返ると、彼らを非難することなど私にはできない...)

しかし、これらのすべては、いかにも型どおりの話だ。異様な事態への展開は、秘密プロジェクトのための新しい規範が徐々に展開した1950年代に始まった；フランケンシュタインが造られた。しかし、今やそれは自らの意志を獲得し、手術台を離れ、すべての拘束を断ち切り、我々の中を動き回っている。

1993年終わりから1994年、1995年、1996年と、会合を重ねるたびに衝撃的な真実が浮かび上がった。ともかく、1990年代に至るまでに大変な何かが起きた：事柄の全体は、その大部分が民間に移され、10層の深さの闇に沈み、米国または他の政府の憲法による指揮系統を離れて活動するようになった。私は今、あなたが何を考えているかが分かる — 私も最初は同じことを考えた — だが、私の話に最後まで耳を傾けていただきたい。

1993年7月の最初の会合から数ヶ月のうちに、私や我々のチームのメンバーたちは、CIA、議会、クリントン政権、国連、統合参謀本部、英国やその他の軍の、きわめて高い地位にある高官たちと会うことになった。我々の最初の立場はまず、冷戦が終わった今、これらの問題について重要な公開ができる機会が到来したことを、これらの人々に明らかにすることだった。この問題を国際社会に返すときがきたのだ。本当か？とんでもない！事実上一つの例外もなく、軍、情報分野、政治、国家安全保障分野の指導者たちは、真実を語るときがきたことに同意した。問題は、彼らが真実にも、データにも、事件にも、技術にも、また保存されているETの遺体(それらが現在どこにあるか、我々は知っている。それらは最早ライト-パターソン空軍基地にはない)のどれにも、接近できる手段を持っていなかったことである。

私が蚊帳の内にいると考えた人々は、蚊帳の外にいた。そしてショーを演出している者たちは、秘密の作業員と民間企業利害関係者の奇妙な連合体だった。このときから、我々の進む道は鏡の向こうの世界となった。

私の先祖は、ノースカロライナでアメリカ革命のために戦った。彼らは憲法と代議員による政府を創設するために戦った。その憲法に何が起きてしまったのか、私は驚いた。ひどい悪夢を見たように、私は夢から覚めてそれが本当でないと分かることを祈り続けた。どうしたらこれを人々に伝えられるか？誰がそれを信じるか？ノースカロライナの医師にとり、進歩した地球外知性体が我々を訪

聞していると主張することさえ、とんでもないことだ。しかし、これは？

私は、レーガン大統領の国家安全保障会議のスタッフだった友人に、どうしてこんなことが可能なのか、訊いてみた。政府、軍、上級情報機関、および国家安全保障分野にいる世界で最も力のある人たちが、これについて知らないばかりか、この情報に接近する手段さえ持たないことがどうして起こり得るのか？ 私は彼に次のように訊いた。もし大統領に誰がそれを本当に知っているかを知らせ、大統領が彼らを大統領執務室に呼び出し、“私は合衆国大統領だ、これについて知っていることを全部話せ”と言ったら、彼らはどうするかと。

彼は笑い、次のように言った。“スティーブ、もし彼らが大統領に知られたくないと思ったら、彼らはただ嘘をつき、そんなものは存在しないと言うだけだ。ずっとそうしてきたのだ...” 私はこの皮肉な言葉に驚いた。また、明らかに憲法が逆さまになっていることにも。

政府の高官たちを“守る”ための“否認能力(plausible deniability)”の策略として、これはどうやら一定の機密事項を扱う分野で行なわれているようだ。そして UFO 問題は、すべての中で最大の機密事項である。

重要な秘密情報なら何でも知る立場にあると国民の誰もが考える、高い地位にいる情報関係機関の指導者との会合で、私は次のことを知った。この高官は、UFO が実在することを知っているにもかかわらず、過去の情報にも現在の情報にも、ET の主題を扱うプロジェクトにも、接近する手段を持っていなかった。またもや、私は呆然とした。

召喚と最高機密取扱許可を持つ、きわめて高い地位の上院捜査官たちも、同じだった。統合参謀本部の人たちも、同じだった。国連の高官たちも、同じだった。英国国防省の高官たちも、同じだった。首脳たちもまた、同じだった。

物事はこのように進み、さらに続いた。これは嘘偽りではない；これらの会合は、個人的な内密の接触者と友人たちにより準備された。皮肉なことにこれらの指導者たちは、この秘密の混乱を本来の状態に戻すために、我々に情報、分析、そしておかしなことだが、行動を頼んだのである。私は妻と 4 人の子供、一台のミニバンと一匹のゴールデンレトリバーと暮らすノースカロライナの田舎医師にすぎない。これを指摘したところで、この現実は変えられなかった。だから、私は‘空き時間’を使って私のできることをしてきたのである。

認められざる特殊接近プロジェクト(UNACKNOWLEDGED SPECIAL ACCESS PROJECTS). USAPS. この言葉 — 実際には概念 — は、把握するまで暫く時間がかかった。純真と言われるかもしれないが、私は民主主義、憲法、大統領職、議会の重要性といったものを心から信じている。しかし、このような奇異な観念はある時点で私の心に同化し、この新しい現実の一部となる必要があった：大統領、議会、法廷、国連、その他の世界の指導者たちがいる。彼らは税金、通貨、あれやこれやの計画を心配する。しかし、本当に大きなもの — それは彼らを除外している。結局、これらの人々は 2 年か 4 年ごとに来ては去っていく。彼らが知らないことは、彼らに何の害も与えない。そのうえ、我々は彼らがこれらの秘密プロジェクトについて何も知らないでいるように便宜を図る。とにかく、これらのプロジェクトは認められざるもの(UNACKNOWLEDGED)であり、ゆえにそれらは

事実上どこにも存在しない...

USAP とは何か？それは極秘の区画化されたプロジェクトで、最高機密取扱許可を持つ人間でさえ特殊な接近手段を要し、かつそれは認められていない。つまり、あなたの上司、司令官、長官、大統領など、誰か — 誰でもよいが — が、それについてあなたに訊ねたとする。あなたは、そのようなプロジェクトは存在しないと答える。あなたは嘘をついているのだ。

これらの USAPS にいる者たちは、彼らのプロジェクトを秘密にしておくのに本気であり、物語を隠し、他の当局者たちと国民に偽情報を与え続けるために、ほとんど何でもする。

そして、すべての USAPS の元祖は、UFO/ET 問題である。

思い出して欲しい。ウィルバート・スミスによる 1950 年のカナダ政府最高機密文書には、ある秘密の米国グループが、その背後の技術も含めて、UFO 問題に取り組んでいることが分かったと述べられている。また、これは水爆の開発を取り巻く秘密をも超える、米国政府最高の秘密であるとも述べられている。

さて、このプロジェクトが 50 年経ったらどうなるか、想像してみたい。橋の下を水はどれほど流れたことか。50 年もの歳月が経ち、プロジェクトの様々な側面に膨大な資金が使われた：逆行分析 (reverse engineering) による地球外技術の解明；非線形の推進および通信システムの実験；国民に対する大規模な偽情報工作と、憲法により選出され指名された当局者および組織への虚言；等々。

重ねられるこの積極的な偽情報工作 — 国民を欺き畏にかけ、国民の目を本当の活動から逸らすための偽 ET 事件の捏造や偽装。誘拐。動物切断。宇宙や地下の基地にいる雑種混血の赤ん坊。世界政府勢力と邪悪な宇宙人との間の秘密協定。その他、うんざりするほどの数々。悲惨なことに、大衆メディア、出版社、UFO 団体／業界、および一般社会が、これらの話を節度もなく鵜呑みにする。

この馬鹿げたことは、資金も専門知識もない民間 UFO 団体に対する有効な畏であるばかりか、“まともな” 科学者、主要メディア、公職にある人々を沈黙させるのに必要な、狂気と悪趣味の印象をつくり出す。それは問題全体を、安全に彼らのレーダー画面から外れたままにしておく。

1940 年代半ばから 1950 年代半ば、そして終わりにかけて、これらの事柄が進行するかたわら、この秘密グループはやや型にはまったものだった。トルーマン政権とアイゼンハワー政権の多くの当局者たちはそれについて知っており、関わっていた。それは当分の間秘密にされるべき、本当の国家安全保障上の緊急事項と考えられたのである。だから、彼らは忠誠心を持って行動し、我々の立憲民主主義の妥当な限度内にあったと私は信じる。

しかし、アイゼンハワー時代の半ばから終わりにかけて、合法的に蚊帳の内にいるべき人々が押しつけられる傾向が徐々に発現したようだ。これがアイゼンハワー時代の終わりとケネディ政権に起きたことだと確証する、複数の情報筋を我々は持っている。

直接の目撃証人たちが我々に語ったところでは、アイゼンハワーは UFO/ET 問題の多くの重要な側面について、自分が闇の中に置かれていることに憤慨していた。彼は ET 宇宙機と遺体を見ていたが、異常なプロジェクトが進行しており、自分が蚊帳の外であることを知った。だから、五つ星将軍であり保守的な共和党员だったにもかかわらず、彼が大統領として国民に向けた最後の演説で、“軍産複合体”について警告したことに何の不思議があるだろうか？ 軍産複合体という言葉を考え出し、その行き過ぎの危険性を初めて我々に警告したのは、この五つ星将軍 — アビー・ホフマン(*反体制指導者)ではない — だったことを、人々は忘れていた。なぜか？ 彼がそれらの行き過ぎを、間近に自分の目で見ていたからである。

1963年6月まで話を進める。ケネディは、“私はベルリン市民だ”という有名な演説をするために、ベルリンに飛んでいる。エアフォースワンの機上には、次のように語る一人の軍人がいる：長いフライトの途上にあつたケネディは、ある時点でこの軍将校と UFO 問題を議論し始めた。UFO は現実であることを知っており、証拠を見たことがあると彼は認めた。だが、次にこう述べて、その将校を驚かせた。“問題の全体が私の管理外にある。なぜなのか私には分からない...” ケネディは、真実が明かされることを望むが、自分にはそれができないと言った。そして、問題が自分の管理外にあり、なぜなのかその理由が分からない、と述べているのは、軍最高司令官である米国大統領なのだ。私は、彼が同年その後暗殺される前に、真実を解明したのではないかと考えている。

アイゼンハワー、ケネディ、クリントン政権の重要人物たち、軍の指導者たち、情報機関の指導者たち、外国の指導者たち。誰もが蚊帳の外である。しかし、誰もがそれが事実であることを知っている。何が起きているのか？

USAPS は物語の一部にすぎない。より小さな部分である。軍産複合体への警戒を呼びかけたアイゼンハワーを覚えているだろうか？ 重要な意味を持つ語：産業の(industrial)、民間の(private)、民営化された(privatized)。1995年7月に、一人の元英国国防参謀長とこの問題を議論する中で、私は彼も同様に蚊帳の外にいることを知った。本当の秘密は、MI5(*英国軍事情報活動第5課)と MoD(*国防省)の頂点にいた人間さえも寄せつけないことを、我々は再び知ったのである。答の一部は USAPS にある。だが、もっと大きな部分は、民間の請負業者の組織にある。

米国政府は、ほとんど何もしていない(有り難い...)。あの B-2 ステルス爆撃機は、米国政府が作っているのではない。米国政府のために、民間企業が作っている。そして、民間企業は USAPS よりさらにうまく秘密を守る。確かにそうだ：コココーラの製造法はずっと誰も知らない。米国大統領でさえ、それを知ることはできない。その製造法は秘密で、民間所有である。

さて、もしあなたが望むなら、民間所有の秘密の独占権を USAPS に結合させ一体化することで、事実上誰も侵入できない秘密の要塞を造れるだろう。というのは、もしあなたが民間部門からその秘密に近づこうとすると、それは所有権により保護されている。また、もしそれに公的部門や政府から近づこうとすれば、それは USAPS の中に隠されている。そして、あなたや私が通常考える“政府”には、何の手掛かりもない。

だから、個人的な経験から私はあなたに次のように言える。もしあなたが指導者たちにこのことを

知らせたら、彼らは両手で頭を抱え、かつて私がそうであったように、こう言う。“何てことだ...”

では、この秘密活動の本質的な特徴は何か？

説明：このグループは、準政府的な、USAPS に関係する、準民間組織であり、国際的／汎国家的に活動する。活動の主要部分は、進歩した地球外技術の解明と応用に関係した、民間企業の“他から頼まれた仕事”の契約プロジェクトに集中する。関連する区画化された単位は、これもまた USAPS であるが、偽情報工作、国民を欺く活動、積極的な偽情報工作、いわゆる誘拐と動物切断、偵察と UFO 追跡、宇宙空間兵器システム、および特殊連絡グループ(たとえば対メディア、対政治指導者、対科学界、対業界、等々)に関与する。この組織は、政府、USAPS、および民間企業の複合体と考えてよい。

グループの主な構成要素は、まず USAPS に関係した軍と情報機関の中間職員、ある種の先端技術企業内の USAPS または闇の単位、国際政策分析界、ある種の宗教団体、科学界とメディアの内部にいる選ばれた連絡係、とりわけこういうものである。これらの組織と人物の一部を我々は知っているが、残りの大部分は特定されていない。

その政策決定組織を構成するおよそ3分の1から2分の1は、今この問題の幾つかの種類を一般に公開することを支持している。彼らは、過去の行き過ぎにあまり関わっていない、概して若い構成員である。残りの構成員は、近い将来の公開について反対か葛藤している。

実際の方針と政策決定は、USAP 関連の軍や情報関係者ではなく、現在は圧倒的に民間民生部門の手中にあるようだ。ただし、活動のある分野では、顕著な相対的自立性が見られるとの情報も幾つかある。我々の現在の評価では、ある種の秘密活動と公開の可否について、論争が激しくなっている。

“闇の”または USAPS プロジェクト内の多くの区画化された活動は、その任務のために働いている人々が、それが UFO/ET に関係したものとは気付かない仕組みになっている。たとえば、いわゆる“スターウォーズ”の取り組み、すなわち SDI の幾つかの側面は、地球の近傍に侵入する地球外宇宙機を標的にする意図を持っている。しかし、SDI 計画にいる科学者や作業員の圧倒的多数は、これを知らない。

我々が三つの別々の確かな情報源から知ったところでは、1990 年代初め以来、実験的な宇宙空間兵器システムにより、少なくとも 2 機の地球外宇宙機が標的にされ、破壊された。

ホワイトハウス当局者を含む政治指導者たち、軍指導者たち、議会指導者たち、国連指導者たち、および世界の他の指導者たちの圧倒的多数は、この問題について定期的な背景説明を受けていない。査問が行なわれた場合、彼らはその活動について何も教えられないし、いかなる活動の存在も確認されない。概してこの秘密組織の性質により、指導者たちが誰に対してそのような査問を行なったらよいかさえ、分からない。

国際的な協調体制が広範囲に存在する。ただし、何人かの目撃証人が述べるところでは、ある

国々、特に中国は、幾分独立した行動計画を積極的に追求している。

活動の主要拠点は、広範囲に分散している民間施設を別にして、カリフォルニア州エドワーズ空軍基地、ネバダ州ネリス空軍基地、特に S4 とそれに隣接する施設、ニューメキシコ州ロスアラモス、アリゾナ州ファチュカ基地(陸軍情報司令部)、アラバマ州レッドストーン兵器庫、飛行機でしか行けないユタ州の遠隔地にある比較的新しい拡張中の地下施設、とりわけこういう場所である。その他の施設と活動センターは、英国、オーストラリア、およびロシアを含む多くの国々に存在する。多くの機関が、これらの活動に関与する隠蔽された、闇の、USAPS に関係する単位を持っており、その中には国家偵察局(National Reconnaissance Office; NRO)、国家安全保障局(National Security Agency; NSA)、中央情報局(CIA)、国防情報局(Defense Intelligence Agency; DIA)、空軍特別捜査局(Air Force Office of Special Investigations; AFOSI)、海軍情報局、陸軍情報局、空軍情報局、連邦捜査局(Federal Bureau of Investigation; FBI)、および MAJI 統制組織(MAJI control)として知られるグループが含まれる。さらに多くの個人、民間、および企業の組織が、重要な関与をしている。科学、技術、および先端技術に関する活動の大部分は、民間の製造業と研究組織に集中している。重要な — 生死に関わる — 警備は、民間の請負業者が担っている。

これらの機関と民間グループにいる職員および指導部は、そのすべてではないにしても大部分は、これらの区画化された認められざる活動について、関わってもいないし知ってもいない。この理由により、特定の機関または企業組織を全面的に非難することは、いずれもまったく根拠がない。“否認能力”は、どの段階でも存在する。さらに、専門化と区画化により、そこにいる人々が UFO/ET の主題に関係した仕事をしていると気付かずに、多くの活動が存続できる。

協力に対する見返りと秘密に違反した場合の罰則は、共に尋常ではない。軍上層部にいる一人の情報源が我々に語ったところでは、過去数十年間にわたり、協力を確実にするために少なくとも 1 万人の人間がそれぞれ 100 万ドル以上を受け取ってきた。罰則に関しては、沈黙の掟を破るなどその家族が脅迫を受けてきた、信頼すべき複数の事例を我々は知っている。また、我々は最近‘自殺’とされた民間請負企業の二つの事例を知っている。それは、被害者たちが ET 技術に関係した逆行分析(reverse-engineering)の秘密に違反し始めてから起きた。

資金：議会のある上級捜査官が個人的に我々に語ったところでは、“闇の予算”が、この活動と USAPS である同様の活動に使われているようだ。この‘闇の予算’は、控えめに見て年間 100 億ドル、おそらく年間 800 億ドルを超えている。UFO/ET 活動だけにどれだけ使われているかは、現時点では不明である。加えて、相当の資金が海外、民間、および協会組織の財源から引き出されている。これらの活動により調達される額がどれほどになるのかも、我々には明らかでない。

これは現時点で我々が知ったことの一部である。明らかに、ここには答よりもさらに多くの疑問があり、知られていないことは知られていることを上回る。それでも我々は、この組織の活動形態の理解において、重要で歴史的な前進をしたと私は信じる。この一般的な評価を、私は幾人かの重要な軍関係者、政治家、政策研究機関の人々に見せたが、これがきわめて正確で、彼らが個別に到達した独自の評価と一致すると見なせることに私は驚いた。

しかし、さらに大きな疑問は、なぜ？世の中は一般に、何が、誰が、いかに、は常に、なぜ、よりも

簡単である。なぜ、秘密が維持され、偽装が続いているのか？

私は、この危険な方向へあまりにも深入りすることを躊躇する。というのは、我々はここで究極の動機と目的に関係した疑問にのめり込んでいるからだ。それは、常に幾分つかみどころがない領域であり、最良の場合でも曖昧である。そして、私が思うに、これはありふれた問題などではなく、このような異常な一か八かの行動の背後にある感情、動機、および目的は、おそらく複雑で調和がとれていない。実際に、そのような動機はおそらく、当初の崇高で善意あるものから邪悪なものまで、大変入り組んでいる。

1994年にバリー・ゴールドウォーター²⁹⁾上院議員は、私にこう語った。ET主題を取り巻く秘密は、“当時の最悪の失敗だった。そして今の最悪の失敗だ...” 私はここで上院議員に同意したいと思うが、秘密に駆り立てるものは、過去も現在も、すべてが愚かさだけではない。むしろ、それは恐怖と信頼の喪失に根ざしていると私は見る。

大体に私は、心理学を軽率に持ち出すのは嫌いだが、この問題のすべての心理学的要素は重要だと信じている。私の考えでは、秘密、特にこれほど極度の秘密は、常に病気の症候だ。もしあなたが家族の中で秘密を持っていたなら、それは恐怖、不安、および不信から生まれた病気である。これは地域社会、会社、社会全体にまで拡張され得るだろう。究極のところ、秘密を駆り立てるものは、基本的な信頼の喪失と取り巻く恐怖および不安によって生まれた、深い病理の症候である。

29) See a letter by Senator Goldwater in 1975 indicating his interest and frustration with this subject in Appendix I (Document AI.2).

UFO/ETの場合、1940年代と1950年代の初期の頃は、その帝国を拡張し、寸分の隙もなくより大きくより破壊的な核兵器で自らを武装していたソ連と隣接する、恐怖の時代だったと私は感じている。そして、彼らは宇宙への競争で我々を打ち負かしていた。

このとき地球外宇宙機がふと現れる。それは遺体となった生命体(一人は生存していた)とともに回収される。恐怖。混乱。答の分からない、数え切れないほどの恐怖の疑問がわき起こる。

彼らはなぜここにいるのか？国民はどう反応するか？どうしたら彼らの技術を安全に保管し — また我々の不倶戴天の敵からそれを守れるか？世界最強の空軍がその領空を統制できないことを、人々にどう説明するか？宗教的信念に何が起きるか？経済秩序には？政治的安定には？現在の技術の所有者には？そして...

私の見解だが、秘密の初期の段階は予見可能で理解もでき、おそらく正当化もできる。

だが、数十年が過ぎ去り、特に冷戦が終わると、恐怖だけではこの秘密を説明することができない。結局、1996年は1946年ではない — 我々は宇宙に進出し、月に着陸し、他の太陽系に惑星を発見し、遙か遠くの宇宙に生命を構成する物質を見出し、人口の約50パーセントがUFOが現実であることを信じている。そして、ソ連帝国は崩壊した。

私の考えでは、二つの別の重要な要因が今進行中である：貪欲と支配、それと数十年間の秘密の慣性。

貪欲と支配は容易に理解することができる：進歩した地球外技術を解明し、応用するプロジェクトに関与しているありさまを想像してみよ。このような技術の能力と経済的影響力 — したがって価値 — は、内燃機関、電気、コンピュータチップ、遠隔通信のあらゆる形態を合わせたものよりも大きい。我々は次の千年の技術について語っているのだ。コンピュータ／情報時代革命は大きなものと考えるか？シートベルトをしっかりと締めた方がよい。やがて — 遅かれ早かれ — 進歩したET技術に基づく非線形、ゼロポイント技術革命が始まる。

疑いもなく、企業、軍産複合体の利害と秘密は、USAPSに関係している政府のそれをさえも凌ぐ。コカコーラの製造法など、これに比べたら大したことはない。

大きな秘密活動の官僚的慣性は、さらに別の問題である。活動、虚言、国民への偽装とさらに悪いことの数十年を経て、このようなグループはどうやって自ら織りなしたすべての蜘蛛の糸を解くというのか？ある種の人間にとって、秘密の権力には確かな中毒性の魅力がある；彼らは秘密を持ち、知ることでも力を得る。そして、この責任者、あの責任者と、人々が声を上げて要求する、一種の宇宙ウォーターゲートになる不安な見通しがある。すべての官僚が熟達しているもの、すなわち現体制の維持がより容易な道となる。

そして、今でさえ恐怖はある。このゲート、あのゲートといった、ウォーターゲート時代の暴露される恐怖ではなく、よそ者嫌いと未知のものに対する恐怖である。これらの宇宙人は何者か、なぜ彼らはここにいるのか；許可も受けずに、どうして我々の領空に敢えて侵入したのか！人類は異なる者、知らない者、よそから来た者に対する恐怖 — および憎悪 — の長い歴史を持っている。人類の世界を荒廃させる、今なお暴れ回っている人種、民族、宗教、国家主義的な偏見と憎悪を見よ。未知の者や異なる者に対する、ほとんど習慣となったよそ者嫌いの反応が存在する。そして、確かにETは、たとえばアイルランドのプロテスタントとカトリックが異なる以上に、我々と異なる。

私は一度、UFOに関係した軍事と情報作戦に関わる、一人の物理学者に訊ねたことがある。なぜ我々は、宇宙空間に設置した先端兵器でこれらの宇宙機の破壊を試みるのかと。彼はすぐに興奮して、こう言った。“この作戦を運営している連中は、とても傲慢で自制がないので、彼らは我々の領空へUFOが侵入したら、どれも敵対行動をとるに値する攻撃的なものと見る。そして、注意を怠ると、彼らは我々を惑星間戦争に巻き込むだろう。…”

だから、次のように言える。恐怖。未知のものに対する恐怖。貪欲と支配。組織の慣性。これらは、秘密を継続するための現在の原動力として私が考えていることの一部である。

しかし、ここからどこに向かうか？極度の秘密から公開へと、この事態をどうやって変えるか？

一つの中国の格言がある。“方向を変えなければ向かっている所で終わりになる”なんと真実なことか。そして、この領域で我々が向かっている所は、非常に危険である。極度の秘密、特にこれら

ど遠大で重要なものの秘密は、民主主義を土台から崩し、憲法を覆し、途方もない技術的能力を選ばれてもいない少数者の手に集中させ、惑星全体を危険な状態にする。これは終わらなければならない。

政府が議会と協力して公聴会を開催し、そこで現在 400 人を超えるこれらの目撃証人たちが、UFO/ET 問題について知っていることを公然と証言できるようにすることを、私は提案する。これは必ず決定的な公開になるだろう。この際、あなたが貢献できる方法は二つある。

- 1) 大統領に手紙を書き、これらの目撃証人たちが安全に名乗り出てこられるように大統領令を発することを要請する。それと同時に、あなたたちの上院議員と下院議員に手紙を書き、これらの証人たちが語れるように公聴会を開催することを要求する。
- 2) もしあなたか、あなたの知っている誰かが、現在または元の政府、軍、企業が目撃証人であるなら、すぐ我々に連絡して欲しい。我々は保護手段を整えている。目撃証人が多ければ多いほど主張は強化され、すべての関係者の安全性は高まる。できるなら、どうか我々に力を貸して欲しい。

国際社会と国連は同様に、この問題についての公聴会を開催すべきである。我々には世界中からの目撃証人がいる。だから、理想的には、国際的な公開と証拠を収集する努力が直ちに開始されるべきである。

国際社会は傍観しているべきではない。それは秘密の活動に対する責任放棄である。公開プロジェクトは、5 年間にわたり市民外交の取り組みに関わってきた。そして、これらの地球外からの訪問者たちと接触する手順の開発において、著しい飛躍を成し遂げた。これを受け身的に何か遠い“現象”として見るのではなく、我々はこれらの生命体との交信を確立することを試みるべきである。そして、公然と惑星間関係の初期段階を開始すべきである。もしあなたが、このような研究と外交の取り組みに関与できる方法についてさらに知りたければ、我々に連絡して欲しい。

最後に、我々は許すことを学ぶべきだ。現在または過去のいずれであれ、秘密に関与した人々を厳しく処罰する要求から得られるものは、何もない。多くはその当時、正しいことをしていると感じていたかもしれない、また現在でさえも。我々に宇宙ウォーターゲートは不要だ。我々は全員でそれを放棄すべきである。我々は喜んで今と未来に目を向け、過去を許すべきである。これには先例がある。クリントン政権の初期に、エネルギー省と前の原子力エネルギー委員会内で行なわれた過去の行き過ぎた行為と狂気の実験について、全面的な公開があった。我々は、孤児院の子供たちのオートミールにプルトニウムが混入されたこと、“何が起きるか”を見るために人口集中地域に故意に放射能がまき散らされたこと、等々を知った。この真実は明らかになったが、世界は終わりにならなかった。誰も投獄される必要はなかった。政府は崩壊しなかったし、天は落ちてこなかった。前進しようではないか、いくらかの本当の同情と寛容とを持って。そして、この世紀を新しく始めようではないか。

つまり、人々が先導すれば指導者たちはついてくる。この事態を変革し、開放と信頼の時代を創造し、全世界と惑星間の平和の基礎を打ち立てるために、勇気、展望、そして忍耐が必要

である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を欠いているなら、我々がそれを彼らに示さなければならぬ。我々の未来が奪われているときに、それを無視することはあまりにも高い賭けである。地球の生命の未来と宇宙における我々の立場は、危険に曝されている。共に、それを守るために働こうではないか。我々の子供たちと、その子供たちのために。

3.5 UFO/ET 問題に関係するプロジェクトと施設

著作権 1998 スティーブン・M・グリア医師, 議会のために準備, 1996年8月30日

エドワーズ空軍基地と関連施設

EDWARDS AIR FORCE BASE AND RELATED FACILITIES

政府施設 :

Government Facilities:

エドワーズ空軍基地

Edwards AFB

ヘイスタック・ビュート

Haystack Butte

チャイナ・レイクス

China Lakes

ジョージ空軍基地

George AFB

ノートン空軍基地

Norton AFB

テーブル・トップ・マウンテン観測所 (NASA)

Table Top Mountain Observatory (NASA)

ブラックジャック・コントロール

Blackjack Control

航空宇宙諸施設

Aerospace Facilities

ノースロップ“アントヒル”(テホン・ランチ)

Northrop "Anthill" (Tejon Ranch)

マクドネル・ダグラス・リャノ工場

McDonnell Douglas Llano Plant

ロッキード・マーチン・ヘレンデイル工場

Lockheed-Martin Helendale Plant

フィリップス研究所(ノース・エドワーズ施設)

Phillips Labs (North Edwards facility)

ネリス複合施設

THE NELLIS COMPLEX

エリア 51/S4

Area 51/S4
パヒュート・メサとエリア 19
Pahute Mesa and Area 19
グルーム・レイク
Groom Lake

ニューメキシコ施設

NEW MEXICO FACILITIES

ロスアラモス国立研究所
Los Alamos National Laboratories
カートランド空軍基地
Kirtland Air Force Base
サンディア国立研究所 (SNL), 防衛原子力局
Sandia National Laboratories (SNL), Defense Nuclear Agency
フィリップス研究所
Phillips Labs
マンツァノ・マウンテン兵器貯蔵施設, および地下複合施設
Manzano Mountain Weapons Storage Facility, and underground complex
コヨーテ・キャニオン実験場 (マンツァノの北端)
Coyote Canyon Test Site (N. end of Manzano)
ホワイトサンズ複合施設
White Sands Complex

アリゾナ

ARIZONA

フアチュカ基地, 地下貯蔵施設
Fort Huachuca, underground storage facility
フアチュカ基地近くの国家安全保障局と陸軍情報局の複合施設, 地球外宇宙機と以前に検視解剖された地球外生命体が貯蔵されている地下施設
NSA and Army Intelligence complex near Ft. Huachuca, underground storage of extraterrestrial spacecraft and previously autopsied extraterrestrial life forms

その他

ユタ地下複合施設, ソルトレーク市の南西, 空路でのみ接近可能
Utah underground complex southwest of Salt Lake City, accessible only by air
レッドストーン兵器庫地下複合施設, アラバマ
Redstone Arsenal underground complex Alabama
ローレンスリバモア研究所
Lawrence Livermore Labs
シャイアン山コロラド深宇宙ネットワーク, UFO追跡の制御を目的とする。
Cheyenne Mountain Colorado Deep Space Network, dedicated console for tracking UFOs

現在または過去に関与した米国政府機関

US Government Agencies with Current or Past Involvement

(活動は超機密 USAPS – 認められざる特殊接近プロジェクト – に区画化されている。つまり、指揮系統上の高官を含む誰にも認められていない)

国家偵察局

NRO (National Reconnaissance Office)

国家安全保障局

NSA (National Security Agency)

中央情報局

CIA (Central Intelligence Agency)

軍情報部門(陸軍, 空軍, 海軍)

Military Intelligence divisions (Army, Air Force, Navy)

空軍特別捜査局

Air Force Office of Special Investigations (AFOSI)

国防総省国防高等研究事業局

DARPA (Defense Advanced Research Projects Agency)

連邦捜査局

FBI (Federal Bureau of Investigation)

宇宙軍

Space Commands

その他

関与していると信じられている民間企業組織

Private Corporate Entities Believed To Be Involved

ノースロップ・エアロスペース

Northrup Aerospace

ボーイング・エアロスペース

Boeing Aerospace

ロッキード・マーチン(デンバー研究センターを含む様々な施設)

Lockheed Martin (various facilities including Denver research center)

ビー・ディー・エム

BDM

イー・システムズ

E Systems

イー・ジー・アンド・ジー

EG&G

ワッケンハット社

Wackenhut Corp.

ビレッジ・スーパーコンピューティング, アリゾナ州フェニックス

Village Supercomputing, Phoenix AZ

フィリップス研究所

Phillips Labs

マクドネル・ダグラス社

McDonnell Douglas Corp.

ティー・アール・ダブリュー

TRW

ロックウェル・インターナショナル

Rockwell International

ブーツ・アレン・アンド・ハミルトン社

Booz-Allen and Hamilton, Inc.

マイタ社

MITRE Corp.

サイク社

SAIC (Science Applications International, Inc.)

ベクテル社

Bechtel Corp.

その他

3.6 秘密の存在を語る証言

スティーブン・ラブキン准将：陸軍州兵予備軍

Brigadier General Stephen Lovekin: Army National Guard Reserves

“だが、起きたことはアイゼンハワーが裏切られたということだった。彼はそれを知らずにいたから、UFO 情勢全体について統制を失ったのだ。国民に向けた最後の演説で、彼は我々に、もし用心しないと軍産複合体に後ろから刺される、と語っていたのだと思う。彼は油断していたと感じたのではないか。彼はあまりに多くの人間を信用したと感じたのではないか。アイゼンハワーは疑いを知らぬ人間だった。彼は善良だった。そして、前触れもなくこの問題が企業の管理下に入って行きつつあることに気付いたのだと思う。それはこの国を大きく損ねる可能性があった”

“私の記憶では、この失意は何ヶ月も続いた。彼は UFO 問題への統制を失いつつあると気付いた。この現象というか、とにかく我々が直面していたものが、最適に管理されそうにないことを彼は悟った。私が思い出せる限りでは、‘最適に管理されそうにない’という言い方だった。本当に心配していた。こうして、結果は...”

“もし私がこれについて話したら、軍の立場で私に何が起きるか、このことを数多くの機会に私は議論してきた。政府は、絶望的な恐怖を植え付けることで秘密を強化するという、現代の記憶に残る何よりもよい仕事をしたと言えるだろう。彼らは実によい仕事をしたと思う”

“ある古参の将校と私は、もし暴露したら何が起きるかと話したことがある。彼は消されることについて語っていたので、私は‘その、消されるとはどんな意味ですか?’と訊いた。そしたら、彼はこう言った。‘だから、君は消される、姿を消すことになるんだ’私はさらに訊いた。‘あなたは どうしてそんなことを知っているのですか?’彼の答は次のようなものだった。‘私は知っている。

これらの脅迫はずっとこれまで行なわれ実行されてきたのだ。脅迫が始まったのは 1947 年だ。陸軍航空隊がこの件を絶対統制するよう任された。これはこの国が今まで対処した最大の治安問題なので、消された人々もこれまで何人かいた...”

“あなたがどんな人間であろうと関係ない。あなたがどれほど強くて勇気であろうと関係ない。その状況はまさしく恐怖と言える。マット(この古参将校)がこう言ったからだ。‘彼らは君一人だけの後は追わない。彼らは君の家族を追いかけるだろう’彼はそう言ったのだ。だから、私に言えることは、こうだ。彼らは恐怖を与えることでそれをこんなにも長い間秘密にしてきたのだ。彼らは見せしめをつくることに非常に長けている。それがこれまで行なわれてきたことなのだ”

メルル・シェーン・マクダウ： 米国海軍大西洋軍
Merle Shane McDow: US Navy Atlantic Command

“その二人の男は、この出来事について私に質問を始めた。正直に言うと、彼らはとても手荒だった。私は文字どおり両手を上げてこう言った。‘あなたたち、少し待ってください。私はあなたたちと同じ側にいる。ちょっと待ってください’彼らはまったく粗野だったからだ。とても脅迫的で、はっきりと次のことを言った。何も見なかったし、聞かなかった。何も目撃しなかったし、知られたことはこの建物から消える。‘君たちはこれについて同僚に一言も言ってはならない。また、基地を離れたら、これについて見たり聞いたりしたことは忘れる。何も起きなかった...’”

チャールズ・ブラウン中佐： 米国空軍(退役)
Lt. Col. Charles Brown: US Air Force (Retired)

“おかしいことだが、我々は犯罪の目撃証言により人々を投獄し、死に追いやる。我々の法制度はかなりの程度このことを基礎にしている。しかし、私が過去 50 年間に異常空中現象を追いかけてきた中では、とても信頼のできる目撃証人が何か未確認のものを見たと言ったときに信用を失わせる、何かの理由があるようだ...”

“我々の政府の中にデータを操作できる諸機関があることを、私は実際に知っている。そこでは[何でも好きなように]拵えたり作り直したりする。飛行物体、知性的に操作されている飛行物体は、この惑星上の我々の物理学に基本的に違反してきた。それらは長い間そうしてきた。政府が現時点で -- 我々がそれを 1947 年から調査してきたことを私は知っている -- 答を持っていないことは、何か深刻な裏事情があることを示しているように私には思われる。我々はそれほど科学に無能だろうか？私はそう思わない。我々の知能はそれほど劣っているだろうか？それほどは知能が劣っていないと私は知っている。さて、ブルーブック計画だが、コンドン博士のグループによりそれが閉じられたとき、これはまったくの意図的なごまかしだったと信じる完全な理由が私にはある...”

“UFO は長期間にわたり調査されてきた。一般社会はそれについて完全には知らされていない -- ただ、ほんの断片、予め決められた対応、そんなものだけが与えられている”

“B 博士”:

“Dr. B”:

“一緒に働いていた何人かがある計画で消えてしまい、消息を絶ったことを私は知っている。彼らはまさに消えたのだ。私の仕事の全期間を通じてその証拠がある。ご存じか、その人たちはプロジェクトのために出ていったのだ[そして消えた]。だが、[これから身を守るために]私はプロジェクトのためにどこにも行こうとしなかった。なぜなら、何か奇妙なことが起きていると分かったからだ。そうして、多くの人々が本当に消えてきたのだ。彼らは上の人たちだ”

ジョナスン・ウェーガント海兵隊上等兵： 米国海兵隊

Lance Corporal Jonathan Weygandt: US Marine Corps

“‘お前はそこにはいなかった’ ‘お前はこれを見てはなかった’ ‘お前を行かせたら危険だ’ 彼らは実際私を殺そうとしていたのだと思う...”

“そこには空軍から来た一人の中佐がいた。彼は身分を明かさなかった。彼は私に言った。‘もし我々がお前をジャングルに連れ出したら、誰もお前を見つけられないだろう’ 私は彼が本当にそうするかどうか確かめたくなかったの、ただこう言った。‘はい’ そしたら彼は、‘お前はこれらの書類にサインしなければならぬ。お前は決してこれを見なかった’ 私はそこに‘いなかった’し‘これは決して起きなかった’ もし誰かに喋ったら、ただの失踪ということになる...”

“彼らは私を怒鳴り、大声を上げ、悪態をついた。‘お前は何も見なかった。我々はお前と忌々しいお前の家族に何でもする’”

“この状態がおおよそ 8, 9 時間続いた... ‘お前を連れ出してヘリに乗せ、尻を蹴飛ばしてジャングルに突き落とし、お前を殺す’”

“これらの様々な機関は独立している。彼らは憲法に従わない。彼らはならず者だ。これが政府によるプロジェクトで皆が認めるものかって？ 違う。この連中は勝手に行動しているだけで、誰もそれを知らない。今の世の中で、それはこんなにも簡単なことなんだ。何の監視も何の統制もない。彼らはまったく好き放題にやっている...”

“死をもたらず恐ろしい力が使われてきた。知らない人もいるだろうが、私は海兵隊の狙撃手のことを知っている。他の誰かがそれについて話しているのを聞いたこともある。これらの連中は街に出て行ってこっそり人の後をつけ、殺す。陸軍航空狙撃手も同じことをしている。彼らはデルタフォース(*米陸軍特殊部隊)を使い、これらの人々を捕捉し、殺して黙らせる”

ジョージ・A・ファイラー三世少佐： 米国空軍(退役)

Maj. George A. Filer, III: US Air Force (ret.)

“時々私は核兵器を運んだものだ。つまり、私は核兵器を運ぶことに気持ちが慣れていたが、UFO を見ることに対してはそうではなかった。これまでずっと、このことに対する批判や嘲笑は、

真実が明るみに出ないようにするためのほぼ最良の方法だった”

ニック・ポープ： 英国国防省職員

Nick Pope: British Ministry of Defense Official

“政府と軍、そして実に民間の研究者、政治家も — 誰であろうと — この問題については、あらゆることを社会共有のものとすべきだ。私はそう信じている。政府は矛盾することをしてはならないと思う。公式見解がしばしばそうであるように、一方で UFO は防衛上何の重要性もないと言いながら、他方ではデータの一部を隠しておくなどということをしてはならない”

“それは絶対にできない。どちらか一方だ。政治家がこの問題に探りを入れたりメディアが問い合わせたりしたとき政府が決まって言うように、もし心配することが本当に何もないなら、そのすべてのデータを見てみようではないか”

ラリー・ウォリン： 米国空軍、保安兵

Larry Warren: US Air Force, Security Officer

“我々はガイガーカウンターで入念に調べられた。一人から反応があり、彼のポケットから何かを取り出された。この同僚はすぐに排除された。命にかけて誓うが、その後再び彼を見たことはない。彼は排除された。これは多くの人たちに起きたことだった。空軍が責任を負うべき自殺も一件あった。これは実際の名前を持った実在の人間だ...”

“我々が連れてこられたとき、机の上には書類があった。我々は全部でおおよそ 10 人だった。そこには一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つの山積み書類があり、すでにタイプされていた。一つは我々が見たもの — 我々が見たものではなかった — についての予めタイプされた陳述書で、すべてが一般的な内容だった。それには、我々は勤務外であり、木々の間を飛び跳ねていた未知の光を見ただけだ、と書いてあった。私はそれをはっきりと覚えている。私は、もしこれにサインしなかったらどうなりますか、ジグラール少佐？と訊いた。そしたら、彼は私に、他の選択肢はないと言った。続いて彼は、私にはそうさせてくれと彼に頼む以外にないのだと言った...”

“我々のそれぞれに二人の男が背後から近寄ってきた。そして、誰かが彼に向かって歩いていき、エーロゾルスプレーのような音が聞こえたのを確かに覚えている。私は目の前が真っ暗になった。私はやたらと涙(はな)が出て胸が苦しかった。私はどう見ても車の中でおとなしくなかったもので、暴行を受けた。文字どおりあばらを殴打され、突かれ... とにかく、私は 20 分間だけ覚えているが、まる一日気を失っていた。話は他の人々の間でも知られていた。人々は、私が緊急休暇、休暇、あるいは基地を離れていたのだと話していた。だが、私は他でもない基地の地下にいたのだ。そして、そこには他の隊員たちも降ろされていた”

“...ところで、そこから出てきたとき、私には静脈注射か何かの跡が付いていた。私には青あざと包帯が巻かれていた。私はそれを認める。本当のことだ。私には跡があったのだ。私に起きたかもしれないことを思い出したり考えたりすると、恐ろしい...”

“私が自分の履歴書を持っているただ一つの理由は — ある空軍大佐から — 履歴書の一部をこっそり抜いておくと忠告されたからだ。彼が言うには、彼らは私を蒸発させるかもしれないということだった。彼らは君を無害なものにしようとしている、と彼は言った。私はまるでフランク・セルピコか何かのように見られていた。私は組織型人間ではなかった。なぜなら、私は誰にでも話したからだ。... 信心深かった。私はそれに敬意を払っていたが、我々に共通なものは何もなかった。彼はいいヤツだった。そして、彼らは我々の助けになることは何もしなかった...”

クリフォード・ストーン軍曹： 米国陸軍

Sgt. Clifford Stone: US Army

“UFO について論じるとき、最後はこの疑問に行き着く。米国はもちろん、どの政府でも、秘密は隠しておけるものか？その答は、はっきりとイエスだ。だが、情報関係機関が使える最大の武器の一つが、米国民、米国の政治家、暴露者たち — UFO 情報を暴露しようとする人々 — が持つ傾向だ。彼らはすぐに出てきて、こう言う。我々は秘密を隠しておけない、秘密なんか隠しておけるものじゃない。では、本当はどうか。秘密は隠しておけるのだ”

“国家偵察局(NRO)は何年もの間秘密だった。NSA(国家安全保障局)があるかどうかさえも秘密だった。原子兵器の開発は、それを一回爆発させ、何が進行しているかを一部の人々に言わなくてはならなくなるまで秘密だった”

“そして我々は、我々自身の理論的枠組みにより、高度に進歩した知的文明が我々を訪れるためにやってきているという可能性または確率を、受け入れないように条件付けされている。きわめて信頼できる物体の目撃報告、それらの物体内部にいた実体の目撃報告という形で、証拠は存在する。それでも我々は平凡な説明を探し求め、我々の理論的枠組みに合わない証拠の数々を投げ捨てる。だから、それは自らを守れる秘密なのだ。それはありふれた風景の中に隠される。情報機関に出かけて行き、この情報を出せとせがむのは、政治的自殺行為だ。私はその方針で彼らの多くと協力してきたから分かるが、議会の大部分の議員は尻込みし、それをさせないようにするだろう。ロズウェルで起きたことについて、議会の調査を単刀直入に要求した3人の議員の名前を私は挙げる...”

“政府のファイルにそれはあるのだから、我々はその資料を入手する必要がある。それが最終的に破棄されてしまう前に、我々はそれを公開させなければならない。一つの好例がブルーフライとムーンダストのファイルだ。私は空軍が認めた秘密文書を入手した。私をもっと多くのファイルを開放させるために議会の議員たちの助けを借りたとき、それらの文書は直ちに破棄されてしまった。私はそれを証明できる”

“そのどこかの段階で、彼らはその資料を見るかもしれない。もしそれが漏洩の危険に曝されたら米国の国家安全保障に深刻な影響を与える、何かきわめて機密性の高い情報があることを知るだろう。少数の人々に制限された接近だけを許すことを確実にするために、それはまだ保護される必要がある。その少数の人々は、一枚の紙に名前を書いて挙げられるほどの少数だ。だから、特殊接近プログラムが存在することになる。特殊接近プログラムにあるはずの管理はそ

ここにはない。文書を保護する仕組みと秘密のプログラムを実行する仕組みを議会が精査したとき、彼らは特殊接近プログラムの内部に特殊接近プログラムがあることを知った。つまり、そのすべてを議会が管理統制することは本質的に不可能だった”

“さて、UFOの場合、それと同じ原則が適用される。こうして、情報関係機関内の100人以下の小さな核、いや私はそれが50人以下であることを知っているが、それがすべての情報を支配している。それはまったく議会の調査や監視の対象ではない。だから、議会はその核心に迫った質問を掲げ、公聴会を開催することに踏み切る必要があるのだ”

ダン・モリス曹長： 米国空軍、国家偵察局諜報員

Master Sgt. Dan Morris: US Air Force, NRO Operative

“私はその情報を調査し収集するグループの一員になった。最初にそれはまだブルーブック、スノーバードやその他の秘密プログラムの傘下にあった。人々が何かを見たと言ったとき、私は彼らに訊問し、彼らが何も見なかったか見たものは幻覚だったことを納得させようとした。それで効果がなかった場合、別の一団がやってきてあらゆる脅しをかける。そして、彼らとその家族を脅したりする。彼らの仕事はその人々の信用を落としたり、いかれた人間に仕立て上げたりすることだ。さて、それでも効果がなかった場合、また別の一団がいて、どうにかしてその問題に終止符を打つ”

A・H： ボーイング・エアロスペース社員

A.H.: Boeing Aerospace Employee

“ワシントン D.C.のある CNN 記者が、ゴルバチョフが二度目にアメリカに来たときに、ゴルバチョフとその夫人にインタビューすることができた。彼らは通りに出てきてその警護特務隊をイライラさせた。CNN 記者がゴルバチョフに‘核兵器を全廃すべきだと思いますか?’と質問した。そしたら夫人が進み出て、いいえ、異星人の宇宙船がいるから私たちの核兵器をすべて廃棄すべきだとは思わないわ、こう言ったのだ”

“さあ、この話を CNN はヘッドラインニュースで半時間にわたり放送した。私はこれを聞いて飛び上がり、次の半時間を記録するために空のテープを入れた。なんと、この話は消えてしまったのだ。誰が妨害したか、あなたはご存じだ。それに関与したのは CIA だった。なぜなら、彼らは CNN と全世界のヘッドラインをそのとき監視していたからだ。彼らはそれを踏みつぶした。だが私はそれを聞いてしまった。これで私の NSA 情報源から入手したロナルド・レーガンに関する情報が正しかったことを、私は知った。私に関する限り、この秘密はまったくの行き過ぎだ。議会はこの情報について知る必要がある...”

“彼が言うには、目撃を最小限に減らし、メディアと目撃情報をメディアに報告してくる目撃者たちを鎮めるために、彼らはこれにフタをしようとしている。空軍はこのことを絨毯の下に押し込み、研究を続けて、まさにそれを掌握したいと考えている。彼は次のことをはっきり言った。空軍は、これらの目撃は大学生のいたずら、気球、気象現象などによるものだ、という馬鹿げた考えに報道機関を誘導しようとしている...”

“秘密の保安について、彼は私にこう言った。これについて喋った彼らの軍関係者は、それを撤回するよう軍法会議にかけられるか、少なくともそう脅される。別の脅迫は給料小切手を取り消す、アラスカのような大抵の人間が行きたがらない基地に転属させる...”

“基本的に、これらのプロジェクトはマジスティック 12 グループにより統制されていた。もうこれは MJ12 と呼ばれていない。私はこの組織の新しい名前を見つけようと調べている。エリア 51 で働いていた私の接触者は、この組織の名前を知っているが、それを私に言うのを拒んでいる。要するに、これはワシントン D.C.にある国家安全保障会議および国家安全保障立案グループと交じり合った、一つの統制組織だ。あらゆること管理統制を行なう国家安全保障立案グループと呼ばれるものがある。MJ12 はこれらの人々、国家安全保障立案グループと交じり合っている”

“彼らは完全な統制力を持っている。彼らは、今起きていることについて大統領に注意を喚起する。すると、大統領はそれを認可するか、単に‘やってくれ’と言うだけだ。彼らは完全な統制力を持っている。彼らに議会の監視はまったく及ばない。彼らは誰に対しても答えない、米国外の大統領以外には。しかし、私が理解したところでは、その大統領さえも脇に押しやろうとしている”

“大統領は、最早これらのグループに対してそれほどの統制力を持たない。それはまるで分離した組織だ”

アラン・ゴッドfrey警察官： 英国警察
Officer Alan Godfrey: British Police

“その後で起きたことに私は本当に驚いた。私の人生はあっという間にひっくり返ってしまった。のんきな男が 6 ヶ月の間に地獄を経験させられ、想像できないような惨めな人間になってしまった。他ならぬ原因は嫌がらせ、圧力、虐待、ありとあらゆるものだ。私は実際に経験したのだ”

カール・ウォルフ軍曹： 米国空軍
Sgt. Karl Wolfe: US Air Force

“それ以上私はそれを見たくなかった。命が危険に曝されていると感じたからだ。言っていることがお分かりか？ 本当はそれをもっと見たかったし、それをコピーしたかった。それについてもっと話し、議論したかったが、それはできないと知っていた。これを他に話していた若い同僚は、まったく当時の限度を踏み越えていると私には分かっていた”

“彼は誰かに話さずにはいられなかったただけだと思う。彼はそれについて議論しなかったし、できなかった。彼がそうしたのは、このことの重圧を受けて苦しんでいたからで、それ以外に何の意図もなかったと思う...”

“軍を除隊後少なくとも 5 年間は、私がいた国務省に断りなしにはどこにも行けないと知っていた。旅行するときには、米国内でさえもいつも届け出て許可を得なければならなかった。私がどこにいるか、常時彼らは知っている必要があった。たとえば、もし我々がベトナムにいとすると、い

つも銃を持った何者かが我々と一緒にいる。もし我々が敵の手に渡るようなことでもあれば、彼らは基本的に我々を消滅させる。彼らは敵が我々を捕まえることを欲しない。その代わりに殺す”

“我々はこのような条件下で行動していることを知っていた。もし間違った者の手に渡ったらと、我々の命は常に危険に曝されていた。そのことを我々は認識していた。除隊するとき、私はこう告げられた。私が何か政府のためにならない変な活動に関わっていないことを確かめるために、私は定期的に調査されると”

ドナ・ヘア： NASA 従業員

Mrs. Donna Hare: NASA Employee

“これを話しては駄目だといって、何人かが私の前に姿を現したときがあった。彼らは殺すとは言わなかったけれど、これを話してはいけないというメッセージだと思った。だけど私はそのときはもうあちこちで話していたので、最早何の意味もなかった。私が[1997年に]議会の背景説明会で話したように、この話題はまるでセックスと同じだと感じ始めていた。誰もが知っているけど、男女同席では誰も口にしない。安全な議会公聴会の中でもっと話したいから、私はいつでもそれを待っている。私はグリア博士を信用している。今までのところ、博士は身の安全や私が話した秘密に関する限り、彼がすると言ったことは全部してきた。必要で適当な時期に、それが明るみに出て何かの役に立つことを私は望んでいる。うろつき回ってこれらの人々を排除したり、傷つけたり、身柄を拘束したり、また脅して引っ越しさせるようなことをしないで欲しい。私が知っているこの人物は、この地球上から姿を消してしまった。その人は消えた。私、それだけのご免だわ”

ジョン・メイナード氏： DIA (国防情報局) 職員

Mr. John Maynard: DIA Official

“この問題に関与している企業の中で、アトランティック・リサーチ社は主要なものの一つだ。だから、これはあまり頻繁には聞かれない。その目立たない存在をそう呼びたければ、これは内部にいる環状道路沿いの悪党だ。その仕事の大部分を情報機関の内部で行なう。TRW, ジョンソン・コントロール, ハネウェル。これらのすべてがどこかの時点で情報分野に関わるようになった。ある種の仕事、活動は彼らに請け負わされた。アトランティック・リサーチはずっと以前からその一つだった。これらは‘環状道路沿いの悪党’になるためにペンタゴン(国防総省)の人々によって創られた組織だ — ある極秘の区画化されたプロジェクトを実行するために、プロジェクト、助成金、資金を受け取っていた。あまりにも秘密で区画化されていたために、何が行なわれているかを知る人間は4人ほどにすぎなかっただろう。それほど、それは厳重に統制されていた”

ロバート・ウッド博士： マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者

Dr. Robert Wood: McDonnell Douglas Aerospace Engineer

“ご存じかもしれないが、あなたがこれらの秘密プログラムの一つに接近を許されると、特別なバッジをつけ、その部屋にいる誰とでも大変率直に話ができる。そして心のつながりを持ったグループの一員のように感じる — そこには形成された大きな仲間意識がある。こうしてあなたは特別な資料庫を利用できることになった。そこで我々にできることの一つは、空軍が運営する資

料庫に行って、いわば遠慮なく極秘資料を渉猟することだ。私は UFO に関心があったので、やるべき通常の仕事があったとき、彼らの資料庫を覗き、彼らが UFO についてどんな資料を持っているのかを知ろうとも思った。約 1 年間に、私は様々な報告書の中にこの主題に関する相当数の資料を見つけ出していた。そしたら、まったく突然に主題の全資料が消えてしまった。この主題の分類全体がまさに消えたのだ。一緒に働いていた我々のグループの資料庫係は、この資料庫に 20 年間いるが何事も正常だったと言った。これは異例のことだとも言った。そして彼はこう言った。こんなことは初めてだ。君は一つの主題をまるまる失った、それは君を逃れて消えたのだ。君は何かを探り当てた。..”

“そうこうしている間に、もう一つ別のことが起きた。それはジム・マクドナルドとの付き合いから生じた。私はヤツが好きだった。彼は実に元気のある物理学者で、しっかり者だった。彼はある事実をつかむと、何としても専門家の学会で圧倒的に説得力のある話をしようとした。彼は、米国航空宇宙航行学会と米国物理学会でよく話したものだ。私はたまたま両方の会員だったので、彼が町にいるときはいつも車で迎えにいき、付き添い、彼が歓迎されていると感じられるようにしてやった”

“一度、彼が住んでいたツーソンを通って旅行した折り、私はそこに立ち寄った — 私には 2 時間の飛行機の待ち時間があった — そして彼は空港に出てきて私とビールを飲んだ。私は‘何か新しいことはないかい、ジム?’と言った。彼は‘どうやらつかんだらしい’と言った。私は‘何をつかんだんだい?’と訊いたら、彼は‘答をつかんだようだ’と言うじゃないか。だから私は‘それは何だい?’と訊いた。彼は‘まだ君には話せない、確かにつかんだんだ’と言ったのだ。彼が拳銃自殺を図ったのはそれから 6 週間後だった。数ヶ月後、彼はとうとう亡くなった”

“我々の防諜活動員が用いる技法について、私には今思い当たることがある。ジムに自殺を決心させる能力を、彼らは持っていたのだ。それが起きたことだった。..”

“この主題の統制を効果的にやろうとしたら、あらゆる段階でそれをする必要がある。最もはっきりしている段階はメディア(情報媒体)だ。だから、あらゆる種類のメディアに目を配る必要がある。映画、雑誌、そして言うまでもなく初期の頃は新聞がすべてだった。今や我々はインターネットやビデオなど、他のあらゆる種類の媒体を持っている。だが、これらの分野の技術が進歩するのに伴い、この統制を心配する人間たちが、媒体とともに、まさにこの分野に入り込んできている。こうして、新しい媒体が出現するたびに、彼らはそれに対応する新しい統制手段を持つのだ”

グレン・デニス: ニューメキシコ UFO 墜落日撃者

Glen Dennis: NM UFO Crash Witness

“軍警察の一人が私を脇に連れていき、はっきりこう言った。いいかお前さん、ここを出ていって噂を広めるんじゃないぞ。ここでは何も起きなかった。もし何かしたら、分かっているだろうが、深刻なことになるぞ、と言った。そのとき私はやや憤慨していたので、こう言った。私は民間人だ(*手出しはできないはずだ)、地獄に落ちろ。そのとき彼はこう言ったのだ。地獄に落ちるのはお前だ。もし話したら、誰かが砂の中からお前さんの骨を拾うことになるぞ”

レオナルド・プレツコ軍曹： 米国空軍
Sgt. Leonard Pretko: US Air Force

“軍隊では人を馬鹿にすることがよくあり、私はこれらの UFO 事件で何回か馬鹿にされた。私が言われたのは、もしこのくだらないことをまた言い出すなら、決して曹長になれない、ということだった。私の上司はこう言った。‘もし君がこの馬鹿げたことにいつまでも拘るなら、君は曹長に昇進できない。君は工科大学行きの命令は受けるだろうが、曹長にはなれない。君は軍隊を出ていかざるを得ない’”

ロベルト・ピノッティ： イタリアの UFO 研究家
Dr. Roberto Pinotti: Italian UFO expert

“おそらく、世界中の至る所に、この秘密を隠している一つの確かな見えざる組織と繋がる見えざる鎖の輪がある。彼らはこの主題に研究の観点から取り組んでいる。その目的は、収益を上げ、様々な分野に応用する技術を獲得することにある。UFO 問題は科学の問題であるだけではない、情報の問題でもあるのだ”

“これは UFO の実相の重要なもう一つの側面だ。これを理解し始めると、多くのことが理解できるようになるだろう。なぜなら、このすべては権力に関係しているからだ。あらゆる権力、あらゆる国の、あらゆる政府の、あらゆる状況の権力だ”

ポール・シズ博士： マクドネル・ダグラス専門技術者
Dr. Paul Czysz: McDonnell Douglas Career Engineer

“闇の予算の世界は、あの親しげな幽霊カスパーを描写するのに似ている。彼の漫画を見ることはできるが、それがどれくらい大きいのか、その資金がどこから来るのか、どれくらいの数があるのか、その区画化と守られる誓約のために、知ることはできない。私がいた場所で働いていた人々の今を知っているが、もしあなたがそれについて彼らに訊いても — たとえインターネット上で論じられていようとも — 彼らは‘知らない、あなたは何を言っているのか’と言うだろう。彼らは今 70 歳台だが、依然としてあなたが言っていることを知っているときえ、決して認めようとしないうだろう。あなたには見当がつかないが、たぶんあなたが考えるよりも巨大だ”

エドガー・ミッチェル宇宙飛行士：
Astronaut Edgar Mitchell:

“だが、それはこれまで真実が露見しないように注意を逸らし、混乱をつくり出すための、偽情報工作の対象だった。偽情報工作は、完全な防御のためのまさしくもう一つの方法なのだ。それは最近 50 年ほど、一貫して行なわれてきた： 何かの墜落機を隠蔽するための、ロズウェル上空の気象観測用気球。これが偽情報工作だ。我々はそれを 50 年以上見てきた。これは何かを隠すための最良の方法だ...”

“どんな活動が行なわれていようとも、それが秘密の、準政府的な、準民間のグループである

限り、私が思いつく範囲では、政府によるどの段階の監視も伴わない。これこそが大きな懸念なのだ”

ジョン・キャラハン： 米連邦航空局 (Federal Aviation Administration) 事故調査部長 (退職)
John Callahan: FAA Head of Accidents and Investigations

“質問が終わると、彼らはそこにいる他の人々全員に対して、実際にこう断言した。‘この事件は決して起きなかった、我々はこの会合を持たなかった。これは決して記録されなかった’...”

“それは CIA から来た一人だった。いいですか？彼らはそこにいなかったし、この会合もなかったと。そのとき私は言った。‘しかし、あなたがなぜそう言うのか、私には分からない。つまり、そこに何かがあった。それがステルス爆撃機でないとしたら、ご存じのとおり、それは UFO だ。そして、もしそれが UFO なら、なぜあなたたちは人々にそれを知られたくないのか？’ なんと彼らは皆感情を高ぶらせた。あなたはそれを口にするさきえ考えてはならない。1機の UFO が 30 分間レーダーに捉えられたデータは、彼らにとって初めてだと彼は言った。彼らは皆そのデータを入手し、それが何物で、何が実際に起きていたか、知りたくてうずうずしていた。彼はこう言った。もし彼らが公の前に出て、米国民に対して UFO にそこで遭遇したと言ったなら、国中にパニックを引き起こすだろう。だから、あなたたちはこれについて語ってはいけない。彼らはこのすべてのデータを持ち去ろうとした...”

“さて、届いた報告書を彼らが読んだとき、FAA は自らを守ることを決めた — 彼がそう言ったことだとしても、目標を見たと言ってはならない。彼らは彼にその報告書を修正させ、それが目標 (target) ではないように聞こえる‘位置標識 (position symbols)’という言葉を使った。こうして、もしそれが目標でないなら、我々が[レーダー上で]識別している他の多くの位置標識は、どれも目標ではないことになる。それを読んで私は驚き、何やら胡散臭いものがあると考えた。誰かが何か、あるいは誰かを恐れている、彼らは隠蔽しようとしている”

“CIA が我々に、これは起きなかったしこの会合もなかったと言ったとき、このことが進行中であることを彼らは国民に知られたくないのだと私は思った。普通なら我々は、これがあったあれがあったという類のニュースを流すものだ...”

“こうして、私は FAA で多くの隠蔽に関与してきた。我々がレーガン政権のスタッフに報告したとき、私はそこにいたあのグループの後方にいた。彼らとその部屋にいた人々に話していたとき、彼らはその人々に、これは起きなかったと誓わせた。だが、彼らは私にはそれを誓わせなかった。私をいつも悩ませたのは、次のことだった。我々は、これらのことを行なわれるままにしている。人々がラジオやテレビで何かを見たり聞いたりするとき、ニュースはそれを取り上げない。なぜなら、それは存在しないからだ。何も言わないことが、私には苦しかった”

マイケル・スミス： 米空軍レーダー管制官
Michael Smith: US Air Force Radar Controller

“政府、彼らは隠蔽する。彼らは誰かがそのことについて話すのを望まない。しかし、それは本

当に驚くべき技術なのだ。これらの人々は、どこも知れない場所からやってくる。彼らは皆に知ってもらいたいのではないかと私は思う。..”

“個人的な話をすれば、オレゴン州で起きた最初の事件後、私は休暇をとって帰省し、そのことを父親に話した。彼は心底赤面したり、蒼白になったり、青ざめたりした — かつての第二次大戦の英雄であり、大変な愛国者だ。私は、これらの UFO が日常的に目撃されると説明していた。父はこう言った。‘いや、政府は UFO なんていないと言っている’ 私は父に、これらをレーダー上で自分の目を見たんだと言った。そしたら父は、いいかげんにしろ、政府は私に絶対嘘をつかない、と言った。だが、ここにいるのはその息子だ； 私は父に決して嘘は言わない”

“そしたら、父はどうしてよいか分からなくなった。彼が私にこう言ったのは、数年後ウォーターゲート事件が終わった後だった。‘お前、ここに座って私にそれを話してくれるか。政府はウォーターゲートのような小さなことについて、私に嘘をついていた。だから彼らは何か大きなことについて嘘をついているのは明白だ’”

“それは最早必要のない、政府の隠蔽だ。冷戦はすでに終わった。私はグリア博士と同じことを信じる。つまり、彼らが持っている技術は、化石燃料の燃焼、オゾンの破壊などをやめさせることができるだろう。これらの人々は技術を持っている — 何か持っているに違いない。政府はそのことを知っている。彼らはこれらの異星人、これらの宇宙機、この技術、そのすべてを所有している。多くの逆行分析技術(back-engineered technology)があることは、きわめて明白だ。他の政府が前向きに取り組み、それを認め、彼らのファイルを開示しているときに、これを隠蔽している者たちは誰か — 我々の政府はなぜそれをしないのか？”

フランクリン・カーター： 米国海軍レーダー技術者(退役)

Franklin Carter: US Navy Radar Technician

“彼らは我々が見ていたことについて、誰にも知られなくなかった。これが隠蔽の始まりだと私は考えている。こうしてそれは手に負えなくなった”

“だが、今日の社会からそれを隠し続けている人々は、米国人だけだということを私は知っている。他の誰もがそれを知っており、受け入れている。そもそも英国と米国以外のすべての政府は、それを受け入れている”

“これが続いているのを見ると、私個人としてとても苛立つ”

ニール・ダニエルズ： ユナイテッド航空パイロット(退職)

Neil Daniels: United Airlines Pilot

“これまで物体を目撃し、それを話したパイロットたちは解雇された。何人かは飛行から外され、変人扱いされたりした。だから、そのことについて私は何年もの間口をつぐんでいた”

フレデリック・フォックス大尉： 米国海軍パイロット(退役)

Lt. Frederick Fox: US Navy Pilot

“JANAP 146Eと呼ばれる印刷物があり、その中に、UFO 現象についてもし誰かに何かを口外したら、10,000 ドルの罰金と 10 年間の投獄を科される旨が述べられている一節がある。つまり、あなたが何を経験しようとも、許可なくしてはそれを持ったまま一般の人々の中に入ってはならないことを厳格に定めている...”

“航空管制からは、そのことについて何の話もなかった。どの出来事についても、私は口を開くことはなかった。ピート・キリアンという、何冊かの UFO 書に出てくる機長がいた。彼は 1950 年代にアメリカン航空の機長で、確かに目撃をし、上院委員会の前で証言した。また、翼の外側にいた UFO の写真を実際に撮った別の機長もいた。もちろん、彼らは嘲笑の対象になった。私はそんなふうになりたくなかったので、FAA にも軍にも何も報告しなかった。多くのパイロットたちは、周囲からの圧力と嘲笑のために、このことに巻き込まれることを望まなかった。こうして秘密が保たれてきた...”

“私には、第二次大戦中 B-24 のパイロットで、戦略諜報局 (Office of Strategic Services; OSS) に入った、とても個人的な友人がいる。彼は原爆が広島と長崎に投下された後に、最初に日本に行った人々の一人だった。彼はブルック計画第 13 項に関わったが、それは計画の中で極秘部分だったと私は信じている。当時、彼は空軍大尉だった。彼は今 70 歳台後半だが、今なお大尉として現役を続けている。彼が給料を貰っているかどうか私は知らないが、現役だとしたら、彼は任期の長さで階級から三つ星将軍で、給料も貰って然るべきだ。彼が現役を続けている理由は、まさに彼が知っていることのために機密保全誓約を守り続ける必要があるということだ。私が海軍の最高機密取扱許可を持っており、また我々は二人とも同じものに強い関心を持っているが、機密保全誓約のために、彼が私に話そうとしない何かがある”

“何かの理由で、政府または政府の諸機関は、彼らの基本方針を守る必要があると考えている。しかし、それは今や明らかに我々の基本方針ではない。この見え透いた欺瞞を終わらせるために、我々が行動すべきときがきたと私は考える。そして人類が適切に進化し、その進化の実りを確実に享受するのに必要な対策を講じるときが”

ロバート・サラス大尉： 米国空軍、戦略空軍打ち上げ管制官

Captain Robert Salas: US Air Force, SAC Launch Controller

“私はこの事件について報告書を書き上げた。私は日誌に書いていた内容を報告に含めた。我々が基地に着くと、すぐに部隊司令官に報告しなければならなかった。その部屋には、部隊司令官とともに空軍特別捜査局(我々の基地には空軍特別捜査局があった)の人間が一人いた。彼は司令官と一緒にその事務所にいた。彼は私の日誌を要求し、簡単な説明をして欲しいと言ったが、何が起きたか彼はすでによく知っているようだった。それでも我々は彼に簡単な説明をした。そしたら彼は我々二人に、これは機密情報だからと言って、機密保全誓約書に署名するよう求めた — 我々は誰にもこれを漏らしてはいけなかった、そういうことだった。我々は話せなかった; 彼は我々にこう言った。我々はこれについて誰にも話せない、他の隊員にも、配偶者にも、

家族にも、お互いの間でさえも...”

“ボブ・コムンスキが、これらの[UFO に関係した ICBM の]運転停止のあらゆる側面を調べるために組織を率いた。ある時点で彼は上司から、空軍が‘調査を中止せよ；これについてこれ以上何もするな、最終報告書も書くな’と言っている、と言われた。コムンスキは私に書面でそう語った。繰り返すが、CINC-SAC(戦略空軍最高司令官)が、ここで起きたことを正確につかむことはきわめて重要だ、と述べたことだけを考えても、こんなことはきわめて異常だ。それにもかかわらず、調査隊の団長が調査中にそれを中止し、最終報告書も書くなと言われたのだ”

ロバート・ジェイコブズ教授： 米国空軍(退役)

Prof. Robert Jacobs: US Air Force

“[その事件について]ある記事を発表した後で、事態は大変なことになった。私は仕事で嫌がらせを受け始めた。日中に奇妙な電話がかかり始めた。夜に自宅で私は電話を受けるようになった — 一晩中、時々は午前3時、午前4時、夜中の10時、相手は電話をよこし、私に喚き始める。このくそつたれ！このくそつたれ！彼らが言うのはこれだけだ。彼らは私がどうとう受話器を置くまで喚き続ける”

“ある夜、何者かが大量のロケット花火を放り込んで、私の郵便箱を吹き飛ばした。郵便箱は炎を上げて燃えてしまった。その夜の午前1時に電話が鳴った。受話器を取ると、何者かがこう言った。‘郵便受けの夜のロケット花火、きれいだったぞ、このくそつたれ野郎！’”

“こんなことが1982年以来繰り返し起きている...”

“UFO 問題の周辺を縁取るこの間違いじみた物事は、その真面目な研究を抑えつける協調した作戦の一部であると私は考えている。この主題を真面目に研究しようとすると、いつでも誰でも嘲笑の対象になる。私は比較的主要な大学の正教授だ。私が未確認飛行物体を研究することに興味を持っていると聞いたら、私の大学の同僚たちは私を笑い、私の後ろであれこれ大声で揶揄することは間違いない — 未確認飛行物体はまさに我々が共生すべき物の一つなのだが...”

“マンスマン少佐が私や他の人々に語ったように、そのフィルムに起きたことは、それ自体興味深い話だ。私が立ち去ってから暫くして、私服の男たち — 私は彼らをCIAと考えたが、彼は違うと言った。それはCIAではなく他の何者かだった — がそのフィルムを取り上げ、UFO が写っている部分をリールから外し、はさみでそれを切り取ってしまった。彼らはそれを別のリールに巻き、彼らの書類カバンに入れた。彼らは残りのフィルムをマンスマン少佐に返し、こう言った。‘機密保全誓約違反に対する罰則の厳しさは、説明する必要がないですよ、少佐。この事件は片づいたことにしよう’そして彼らはフィルムを持って立ち去った。マンスマン少佐はそのフィルムを再び見たことはない”

ハリー・アレン・ジョルダン： 米国海軍

Harry Allen Jordan: US Navy

“私のよく知らない一人の少佐がやってきて訊ねた。どうしたんだ、ジョルダン？ 日誌に何が書いてあるんだ？ 彼は、君はそれをそこに書く必要はない、と言った。私にとって航海日誌にあのことを書くなどということは、きわめて変則的なことだった。私はそれに捕捉のことを書いた。私は UFO について書き始めていた”

ジェームズ・コップ： 米国海軍暗号通信

James Kopf: US Navy Crypto Communications

“数日後、艦長と副艦長が艦内テレビに出演した。それが 5,000 人の乗組員に向かって話しかける唯一の方法だった。彼[艦長]はカメラを見て — 私は決してこれを忘れないだろう — こう言った。‘乗組員諸君に告ぐ。海軍の主要な戦闘艦で起きた出来事は機密事項と見なされる。したがって、知る必要性を持たない誰とも議論してはならない’ これが彼が言ったことのすべてだった”

3.7 編集者からの重要な事前通知

1993 年を始まりとして、私は一般への公開に使用する他の証拠とともに、UFO 事件とプロジェクトに対する軍と政府の直接目撃証人を確認する取り組みを始めた。1993 年から、我々は CIA 長官ジェームズ・ウルジー、国防総省上級軍将校、主要議員、とりわけこういった人々を含め、クリントン政権に対して背景説明をすることに、相当な時間と資源を費やした。1997 年 4 月に、そのような政府と軍の目撃証人 10 数人がワシントン D.C. に集まり、国会議員、国防総省当局者などに背景説明を行なった。そこで我々は、この主題についての公開公聴会を開くことをはっきりと要請した。誰も積極的ではなかった。

1998 年に、我々はビデオを撮影し、編集し、UFO 事件とプロジェクトに対する 100 人を超す軍と政府の目撃証人たちを組織するために、資金を集めてこの公開手続きを“民営化”することに着手した。これを世界規模で行なうには 2 百万ドルないし 4 百万ドルが必要だろうと我々は試算した。2000 年 8 月までにその 5 パーセントしか集まらなかったが、我々は先に進むことにした。なぜなら、さらに遅らすことは、問題の深刻さを考えると無分別だと思われたからである。だから、我々は 8 月を始まりとして *目撃証人記録保存プロジェクト (Witness Archive Project)* を開始し、これらの目撃証人への面接取材内容を放送に耐える品質のデジタルビデオにするために、世界中を駆け回ることになった。厳しい資金難のために、この取り組みは大体 2000 年 8 月から同年 12 月までの間、大部分は私自身と他の数人のボランティアにより行なわれた。

2000 年 12 月後半から、私は自宅で 90 ギガバイトの容量を持つ 1 台のデュアル G4 マッキントッシュと 1 台のデジタル・ビデオデッキを使い、120 時間を超す証言生ビデオの編集を始めた。私は医者で、編集者ではないことを言うておかなければならない。2000 年 12 月終わりから 2001 年 2 月終わりまでに、120 時間は精選された証言の 33 時間にまず縮減され、さらに厳選された証言の

18 時間になった。その精選された証言の 33 時間は録音テープにダビングされ、文字に起こされ、およそ 1,200 頁の証言文書になった。2001 年の 3 月と 4 月初めに、私はこれらの証言文書を編集し、読める形式にした。それはこの資料に含まれている。

これは大変厳しい時間と資金の制約の中で行なわれたことを、私は強調しなければならない。週に 7 日、毎日ほとんど 18 時間の作業をした。“救急科”はなんてタフかと私は思ったものだ！

私がこれを言うのは、ただ読者に、これらの証言文書や他の資料の中に、たぶんに誤りが含まれていることを理解してもらいたいからである。それらの中には、名前の間違いもあるだろうが、それは証言の音声テープから、音だけを頼りに綴りを書いたからである。このことを前もってお詫びしておきたい。

証言文書(摘要書に含まれている)は、文の長さ、文法、および読み易さについてのみ、修正された。私は、証言の意味を変えることだけはしないように、常に気を配った。括弧[]の中で述べていることは、意味を明確にするためである。括弧[]の中の斜体文字は、私による注釈で、その後私にイニシャル SG を付した。

これらの資料は、もうお分かりのように、我々がデジタル・ビデオテープに記録した内容の氷山の一角にすぎない。つまり、100 人を超える目撃証人からの 120 時間を超える証言から、我々は 33 時間だけを文字に起こし、さらにその一部分を資料として編集した。加うるに、その全記録には 400 人以上の証人の中の 100 人による証言だけが含まれている。この編集された証言は書物として発表されるだろう。その一部は公開の摘要書の中に含まれており、証言のほんの短い抜粋と基本的な要約のみが、その要旨に含まれている。将来我々が望むことは、資金を確保して、我々が持っているビデオ収録された証言から、5 ないし 6 部の放送品質のビデオ・ドキュメンタリ・シリーズを制作することである。なぜなら、これらの目撃証人たちが話す、聞いたり見たりしたことの衝撃は、きわめて迫力があるからである。

この証言を読むときに思い出して欲しいことは、これはほんの始まりだということである。その後はあなたにかかっている：遅らすことなく、この主題について議会と大統領と他の国々の指導者たちに、公聴会の開催を呼びかけ、要請することである。これらの目撃証人たちは、彼らが経験し、ここで述べたことに対する誓約のもとで、公式に証言するために召喚されることを歓迎している。実に、最も衝撃的な証言は、公になることを待っている。なぜなら、最も深部の情報源は、公式な議会公聴会により保護されるまで、名乗り出るのを拒んでいるからである。

さて、私の最後の要点である：今日まで証言を提供した目撃証人たちは、並外れて勇気ある人たちである — 私には英雄に思える — 彼らは、名乗り出るために大変な個人的危険を冒した。何人かは、脅迫され、恫喝を受けてきた。すべての証人たちが、この主題につきまとう、昔から変わらない嘲笑の危険を冒している。誰一人、その証言の見返りを受けた人はいない：証言は、人類のために無償、無条件で提供された。私は個人として、ここで彼らに感謝するとともに、心から最高の尊敬と報恩の念を表したい。

どうか、この努力と彼らの犠牲を無駄にしないよう、お願いする。その真実のすべてが公開され、

今は隠蔽されているそれらの地球を救う技術が解放され、それによって人類が宇宙の多くの人々の一員として、その進化の新しい段階に移行できるように、この問題を国民、メディア、そして我々の選ばれた代表たちの前に提示することに、力を貸して欲しい。

この要約は、重要な直接目撃証人の証言に焦点を当てている。我々は、数千の政府文書、数百の写真、ごく一部の着陸事件、その他を入手している。しかし、それらをこの長さの要約に含めることは、不可能である。これらの資料は、科学界あるいは議会からの真面目な要求があれば、提供されるだろう。

スティーブン・M・グリア, 医師 2001 年 4 月 5 日

3.8 ビデオ録画された目撃証人による証言と政府文書の要約

3.8.1 概要

宇宙飛行士 エドガー・ミッチェルの証言
Testimony of Astronaut Edgar Mitchell
1998 年 5 月

[このインタビューを我々と共有してくれたジェームズ・フォックスに深甚なる謝意を表す。SG]

1971 年 2 月に、宇宙飛行士エドガー・ミッチェルはアポロ 14 号に搭乗し、月面を歩いた 6 人目となった。彼は証言の中で、地球にはこれまで ET の訪問が行なわれてきたし、墜落した宇宙機と回収された物質および遺体もあることを認めている。彼はまた、この主題を巡る隠蔽が 50 年以上行なわれてきたこと、それに対する政府の監視と目に見える統制が欠けていたことについても語る。彼の関心は、この地球に対する我々の適切な管理ということであり、我々の環境問題の深刻さは現実であると考えている。

EM: 宇宙飛行士エドガー・ミッチェル

JF: ジェームズ・フォックス

EM: 調査資料の中に我々は、飛行中に未確認物体に遭遇し、それを追跡するように誘導された、軍関係者からの報告を見出す。彼らは、地球外からの訪問の可能性について調査し、それに何とか対処することを任務とする、公職にある人々だ。彼らは政府の人々だ。

多くのことが、これらの警備厳重な機密種別について行なわれている — それらは軍規則のもとにある。私が思うに、我々がこのレベルの活動について語る時、それは相当に複雑だ。[秘密保持がいかんにして実行されてきたかについて]実際のところ、幾つかの不気味な話がある。それらが正しいかどうか、私には立証できない。それらが必ずしも真実かどうか、私には分からない。しかし、多くの他の話と同様に、それらは人々の心に恐怖を与える。おそらく、それが多くの人々が名乗り出ることを望まない理由だ。

私の関心の基本は、我々が住む宇宙がどんな性質を持つかということだ。より大きな実在に対する我々の関係はいかなるものか？もし[UFO が]より大きな実在の一部であり、それを我々が否定するとしたら、それは私にとり良心に照らして受け入れ難い。私はそんな生き方はしない。私は、我々が住む宇宙について学ぶため、新しい洞察力を得るため、我々が知っている存在物の境界を越えるために、宇宙空間に行った。そして、これらの現象が仮にも実際に宇宙についての新しい知識、宇宙の知性体、また宇宙を移動する我々の能力を示唆するものなら、我々はその真相を探るべきだ。それが私を駆り立てる、私の好奇心だ。

少なくともこれまで 50 年以上にわたり、いわゆる UFO 事件を取り巻く多くの秘密が存在してきたようだ。それは大変に複雑だ。我々はここで簡単なことを扱っているのではない。我々にはあらゆる種類の目撃がある。我々は、これまでほぼ 50 年以上にわたり、数千の目撃を報告してきた。それらの目撃の多くは、実際に自然現象をどうにかして見誤ったものだ。しかし、それらの多数は見誤りではない。それらはよく記録に残された事件であり、我々が地球の兵器庫に持っているいかなるものも及ばない飛行物体であることを示す。このことは、我々がそれらを ET 宇宙機であると公に立証したこととほとんど同じだ。我々は、現場にいて接触し、直接のデータを持つ人々を信用しなければならない。

そのような立場にいたと主張する、私が知っている唯一の人々は、情報機関、軍、および政府にいた人々であり、また以前このことを調査し、明らかにすることを公務としていた、幾人かの請負業者の人々だ。これらの人々は、それを国民に話すことを防ぐために、当時は厳しい制約と高い機密保全許可のもとにあった。その期間はとうに過ぎ去ったが、彼らは今なお機密保全制約のもとにあるか、少なくともまだあると信じているように思われる。

ET の訪問は行なわれてきたのだ。墜落した宇宙機も存在してきた。回収された物質と遺体も存在してきた。そして、現在政府と結びついているかどうかは分からないが、かつては確かに政府と結びついていた、このことを知っている人々のグループが、どこかにいる。彼らはこの知識を隠蔽するか、それが広く知られることを妨げようとしてきた。

これらの人々が誰であるか、私は知らない。しかし、私が秘密のグループと呼ぶ人々の存在を示す多くの証拠がある — 政府および幾つかの政府施設に半ば属しているが、ほとんどの場合、我々が言える限りの高いレベルの政府による統制下でない、きわめて隠密に活動する人々。私が知っているすべてのことから判断して、確かに ET 訪問はあったし、これからもあるだろう。回収された宇宙機も存在してきた。これらの宇宙機の幾つか、または幾つかの部品を複製することを可能にする、何らかの逆行分析(reverse engineering)も存在してきた。しかも、この装置をある方法で利用している地球人たちがいる。

さらにまた、UFO に帰すべきものと分類されている活動の多く — 誘拐やその類の活動 — は、まったく ET によるものではない可能性がある。万が一 ET によるものがあつたとしても、それはむしろ少数だ。その大部分は人間によるもの、この地球人が密かに行なっている活動だ。

これに対する動機付けまで立ち入るつもりは、私にはない。私はその動機を知らない。しかし、もしそれが普通の人間が持つ動機だとしたら、それは権力、支配、貪欲、金などに関係している。

私は、これを国民に公にする時期はとうに過ぎたと考えている。邪悪な意図を示唆するものは本当に何も見当たらない。．．．たとえば誘拐のように、多くの人々が敵対的であると言っている事柄はある。それが本当であるとしても、むしろその原因は[ET ではない]何か他にあると私は思う。

あなたが望むなら、証拠は山とある。それは本質的に動かぬ証拠となるほどの量であり、少なくとも政府の権力によっては、今まで明るみにされてこなかった。

それは秘密にされてきたか、またはいかにして秘密が保たれ得たか、という疑問に対しては、こうだ。それは秘密にされてはこなかった。それは最初からずっとそこにあったのだ。だが、それはこれまで真実が露見しないように注意を逸らし、混乱をつくり出すための、偽情報工作の対象だった。偽情報工作は、完全な防御のためのまさしくもう一つの方法なのだ。それは最近 50 年ほど、一貫して行なわれてきた：何かの墜落機を隠蔽するための、ロズウェル上空の気象観測用気球。これが偽情報工作だ。我々はそれを 50 年以上見てきた。これは何かを隠すための最良の方法だ。

ET がここに来ている事実は、我々が月に行った事実よりも少しも重要ではない。いいですか？それがまさに、この世界の一面だ。だから、我々はそれを理解し、我々自身、我々の知識の基礎、宇宙観、我々の存在の本質、我々は何者か、世界はどう機能するか、という文脈の中に組み込まなければならない。そして当然、その知識は世界が、宇宙一般が、どう機能しているのかについての我々の理解力を必ず変える。30 年前まで、科学と技術の両方で、我々が宇宙で孤独であり、知られている宇宙の中で我々以外に生命はない、というのが従来の見識だった。だが、今それを信じる人はいない。それは我々は何者か、我々はいかに適合すべきかについての、我々自身の概念を変える。

そして、我々が惑星地球の生命を管理してきた仕方には、欠陥があったということが、きわめて明白になってきた。我々はよき管理者ではなかった。我々はまさに今、環境の全球的な問題を抱えており、それは文明を危機へと追いやっている。人々はそのことを聞いたがらないが、それが現実であることは、ゆっくりと顕在化しつつある。だから、我々は何者か、惑星をどう管理するか、より大きな物事の枠組みにどうやって適合していくか、というこの知識は、とても重要な事柄だ。

さて、グリア博士は実際に率先して行動を開始し、ワシントンに行き、政府の高位高官の人々と話をし、我々がここで言及した目撃証人の幾人かを紹介し、背景説明を行なった。彼はこれらの問題について、議会公聴会の開催を要請した。私はこれに出席し、彼に協力した。そして、この問題のすべてに対する議会の監視を実現させることは、非常に重要な取り組みだと私は信じる。しかし、今のところそれは実現していない。我々は何人かの議員、彼らのスタッフ、ホワイトハウスの人々に背景説明を行なった。我々は国防総省の人々とも話をした。概してそれはよく受け取られ、何人かは聞いたことにとっても驚嘆した。しかし、今までそれは何の大きな行動にもなっていない。

JF: これは、彼らの多くにとって耳新しいことでしたか？

EM: 幾人かの人々にとっては、そうだった。他の人々とはといえば、そうではなかった。しかし、政府の高い地位にいる人々は、これに関する情報については、もし知っているとしてもごくわずか

しか知らない, ということをおきたい. 多くは普通の人々以上には知らない. 彼らは, 我々が語っていることについて蚊帳の外にいる. それは確かだ.

JF: このことは, あなたにとって懸念ですか?

EM: そのとおりだ. それは大きな懸念だ. 私はこの懸念をことあるごとに表明してきた. まさに私が言いたいのはこのことだ: どんな活動が行なわれていようとも, それが秘密の, 準政府的な, 準民間のグループである限り, 私が思いつく範囲では, 政府によるどの段階の監視も伴わない. これこそが大きな懸念なのだ.

[宇宙飛行士ミッチェルは, ここで1997年に行なわれた背景説明について言及している. これはグリア博士が議会, ホワイトハウスの人々, 国防総省, その他のために準備したものである. そこには10数人の政府と軍の目撃証人が出席し, UFOとET問題について彼らが直接目撃したことを証言した. 多くの政府高官たちと国防総省の上級将校たちが, このような重要な事柄について闇の中に置かれている事実を知ったのは, 実に当惑すべきことだった. SG]

モンシニョール・コラード・バルドゥッツィの証言

Testimony of Monsignor Corrado Balducci

2000年9月

[翻訳者を通じて]

モンシニョール(*高位聖職者の尊称)・バルドゥッツィはバチカンの神学者で, 教皇に近い部内者の一人である. 彼はイタリア国营テレビに数多く出演し, 地球外知性体との接触は実際に起きている現象であり, “精神的な機能障害によるものではない”ことを表明してきた. この証言の中で彼は, 一般大衆のみならず, 非常に信用があり, 教養があり, 教育を受けた高い地位にある人々が, このことが現実の現象であることを益々認めつつあると説明している. さらに彼は, 地球外の人々は神の創造の一部であり, 天使でも悪魔でもない, しかしおそらく精神的に大いに進化していると語る.

CB: モンシニョール・コラード・バルドゥッツィ

SG: スティーブン・グリア博士

CB: . . . 何かが起きていることを最早否定できない状況に, 我々は至った. その何かはこのUFO研究の領域で起きている. 単なる空飛ぶ円盤だけではない, 現実の人々, 生きた存在, 地球外知性体がそこにいるかもしれない. . .

私はまさに今神学者として語りたい. 懐疑的であり過ぎることは正常な常識に反する. それは理性に反する. 人の証言は意思疎通と対話の最も一般的な方法だ. なぜなら, 我々が人々の話を聞くと, 我々は彼らが言っていることは真実だと確信する必要がある. それは何かを言う人と人が言うべきことを信じている人との対話だ. さもなくば, 人が言うべきことを信じていない人との対話ということになる.

しかし, もし我々がこのような方向に向かったなら, そしてこれが一人の神学者としての私を実際

に動かした本当の理由なのだが、もし我々がこれは真実でないと言い続けるなら、そのとき何が起きるか？そのときは何のためのどんな証言であれ、それは証言に値する重要性を与えられないだろう。そしてこの証人の証言は、もしそれが貶(おとし)められたなら、多くの否定的な波紋を生じる。個人の否定的状況、社会の否定的状況、信仰の状況。そして特にキリスト教への影響...

今一つの理由がある。神。神はその英知において、我々だけを人間として創造しないだろう。

SG: 米国ではこれまで一部に反動的な原理主義者がいて、これらは悪魔の仕業ではないかと言ってきました。これについてはどう思いますか？

CB: 悪魔はこれに何の関係もない！私はこれまでこのことについては公に口にしてこなかった。だが、天使や悪魔は[宇宙]船を必要としない。彼らは空飛ぶ円盤を必要としない。彼らはこれらの装置類を必要としないのだ。神は悪魔がこのように素晴らしい姿で人間の前に現れるのを、決して許さないだろう。神はそれを決して許さないだろう。それを悪魔などとは考えないことだ...

そして、聖書には宇宙にあるものすべては神聖な創造物だと書かれている。神聖な創造物でない地球外知性体などいない...

3.8.2 レーダー／パイロットの事例

序文

(グリア博士による口頭説明から筆記、編集された)

ここでは、特にパイロットによる遭遇、レーダー事例、および関係する事例の証言を扱う。次のことを指摘しておくべきである。つまり、数十年もの間、UFOの主題について懐疑的だった人々は、もしこれらの物体が現実ならレーダーで追跡できるはずだ、と強く主張してきた。我々には米国の空軍、海兵隊、海軍、陸軍、および民間諸機関、さらに海外からの少なくとも20人の目撃証人がいる。彼らは、これらの物体をレーダーで捕捉し追跡してきた正規の航空管制官とパイロットたちである。これらの人々は、きっぱりとこう述べていることに留意して欲しい。これらの物体は気象観測気球ではなかった；それらは大気の逆転層ではなかった；それらは“沼気(メタンガス)”ではなかった。それらは構造を持つ飛行物体で、しばしば時速数千マイルで移動し、かと思うと急に停止し、空中静止したり非線形の動きをしてきた。それらの物体は、レーダーが1回走査する間に一つの地点から数百マイル、あるいはそれ以上遠くに離れた地点に移動する様子が追跡されてきた。それらは固体の物体である。それらは金属製であり、強烈で明瞭なレーダー反射を返す。

これは、我々がほんの一つか二つの例を持っているという状況などではない。証拠を評価するときには、このことを重視しなければならない：これらの物体がレーダーで追跡され、ときとして10数基のレーダーが同時に追跡していたことを証言する目撃証人たちが、テープに撮られている。これが意味するものは、我々の扱っている対象が実際の、現実にある、物理的で技術的な飛行物体だということである — それは想像の産物でもなく、集団幻覚でもなく、何か異常なものとして片づけてしまえるものでもない。空軍のチャールズ・ブラウン中佐が指摘したように、遠く1950年まで遡る空軍

のグラッジ計画が、これらの物体のレーダーによる確認を行なっていた。地上設置レーダー、地上目視、航空機搭載レーダー、および機上目視である — そして、“これに勝る方法はない” これらの目撃証人の多くは、数夜にわたりまた同じような地域に戻ってきたこれらの物体を目撃し、ソフトやハード面での誤作動はなかったことを確認するために、彼らの装置を厳密に調べている。

これは言うまでもなく、強烈な説得力を持つ。目撃証人の証言は、これらの物体は存在しないという反論を永久に封じる。なぜなら、我々には彼らの証言に加えて、レーダー追跡というものがあるからである；我々にはこれらの事件の記録資料がある；我々には 1940 年代から 1990 年代までの全期間に及ぶ、このような事件の内部にいた人々がいる。

FAA 部長 ジョン・キャラハンの証言
Testimony of FAA Division Chief John Callahan

2000 年 10 月

キャラハン氏は 6 年間、ワシントン D.C.にある FAA(米連邦航空局)事故調査部長だった。証言の中で彼は、1986 年に日本航空 747 機がアラスカ上空で 31 分間 UFO に追跡された事件を語る。その UFO は、1 機のユナイテッド航空便に対しても、着陸するまでその後をつけた。航空機搭載レーダーと地上設置レーダーによる確認の他に、目視による確認もあった。この出来事は当時の FAA 長官エンゲン提督にとりあまりにも重要だったので、翌日に説明会を開いた。そこには他の人々に混じって FBI(連邦捜査局)、CIA(中央情報局)、レーガン政権の科学調査チームが出席した。ビデオに撮られたレーダー記録、航空管制の肉声による交信記録、および文書による報告がまとめられ、提出された。この会合の最後に、出席していた CIA の顔ぶれたちが、そこにいた全員に向かってこう指示した。‘この会合は決して持たれなかった’ ‘この事件は何も記録されなかった’ 他にも証拠があったことに気付かず、彼らは提出された証拠だけを押収した。しかしキャラハン氏は、この事件のビデオテープと音声記録を確保することができた。

JC: FAA(米連邦航空局)部長ジョン・キャラハン

SG: スティーブン・グリア博士

JC: 私はワシントン D.C.にある FAA 事故調査部長だった。私はそこに約 6 年間いて退職した。

他ならぬこの事件は、アラスカの担当官からの一本の電話で始まった。彼はこう言った。“ここで問題が一つ持ち上がっている。メディアに何を言ったらいいかわからない、事務所はアラスカのメディアでいっぱいだ” 私—“その問題とは何か？” 彼—“あの UFO だ” 私—“何の UFO か？” 彼—“先週こちらの上空で、およそ 30 分間にわたり 747 機を追跡した 1 機の UFO があった。我々はそれについてあまり考えなかったが、そのことがどうやら漏れて、ここにこれらの報道陣を全部迎える羽目になった。彼らにどう説明したらいいか、知りたい”

そこで私は、一人の経験を積んだ政府職員として、常套句を彼に伝えた。それは調査中で、その後であらゆるデータを総合すると。私は彼らが持っているディスクと入手できるテープのすべてを、一夜のうちにアトランティック市にある[FAA]技術センターに送るように指示した。

彼らは軍を呼び出し、軍のすべてのテープを要求すると言った。FAA は米国とその領土上空の

空域をすべて管轄している。それは軍に属していない。それはロケットを発射する人々に属していない。それは米国政府に属し、FAA の管轄下にある。だから私は彼らに、軍のテープを入手し、彼らのすべての... (*原文欠落)... 軍はこう言った。“彼らはテープが不足していて、それらを再使用するが、まだ 12 日しか経っていない” この時点でテープは 15 日間保存されることになった。

FAA 長官は、この事件に何か懸念されることがあるかを調べるために、FAA の副長官だった私の上司と私を、アトランティック市に派遣した。すべてのデータに目を通すのに 2 日かかった。我々が入っていき、この部屋を[その遭遇が起きていたときの]アンカレッジとまったく同じに設定するように指示した。我々はすべてのデータをこのレーダー画面に映し出し、管制官が見たすべてを見たいと思った。我々は管制官が聞いたすべてを聞きたいと思った。我々はレーダー、デジタル・レーダー、音声のすべてを総合したいと思った。

囲いの向こうで作業をし、これを再現していた一部の人は、すでにテープを吟味していた。そして、そこに映っているものを我々に見せることを快く思わなかったが、我々はその全部を見た。

航空管制官が軍の管制官に、何かを見たか? と訊いたとき、彼はこう言った。見た。私はこれこれの位置に 1 個の目標を捕捉した。747 機の日本人パイロットから 1 時の方角 8 マイルだ。

事件が始まった経緯はこうだ。日本航空 747 機がアラスカ領土を横切って北西から入ってきた。その高度は 31,000 フィート、33,000 フィート、あるいは 35,000 フィートのいずれかだった。時刻は夜の 11 時頃だったが、その本当の時刻は確認できる。彼(パイロット)は管制官を呼び、その高度に他機がいるかと訊いた。管制官は、いないと応答した。基本的にそれは深夜管制であり、交通量はあまり多くなかった。そしたら彼は、11 時か 1 時の方角約 8 マイルに目標が一つあると言った。

さて、この 747 機は機首に周囲の気象状態を探查するレーダーを持っており、このレーダーが目標を捕捉している。彼はこの目標を視認する。その目標は、彼の表現によれば 1 個の巨大な球体で、その周囲を複数の光体が走っていた。彼はそれを 747 機の 4 倍の大きさがあるようだと言ったと思う!

その軍の管制官はこのようなことを言った。“確かに私は彼(747 機のパイロット)をアンカレッジの北 35 マイルで見ている。では彼の位置から 11 時または 1 時の方角にいるのは誰だ?” FAA の管制官が言った。“誰[どの定期便]もないはずだが?” 軍の管制官は言った。“それは軍のものではない”

航空管制官は軍の管制官を呼び出し、そこに軍の航空機がいるかと訊いた。軍は、いない、彼らの航空機はすべてその西側にいると言った。それで彼は戻ってきてこう言った。“そこには航空機はいない” その交信の間に、日本人パイロットは数回にわたり報告する。“それは今 11 時にいる。今は 1 時だ。今 3 時だ” その UFO は 747 機の周囲を跳ね回っていた。彼(747 機のパイロット)が言いかけたとき、その軍の管制官が割って入って言う。“それは今 2 時か 3 時だ” 彼(軍の管制官)はその位置を確認した。軍の管制官は、彼らが言うところの高度探查レーダーを持っている。また彼らは長距離レーダーと近距離レーダーを持っている。だから彼らは、もし彼らのシステムの一つで捕捉しなくても、他のレーダーで捕捉する。その軍人が言ったことを聞けば — 彼は一度そう言

ったが — 彼はそれを高度探査レーダーか測距離レーダーで捕捉している。つまり、彼らは彼らのシステムで目標を捕捉していた。こうして、レーダーによる追跡は 31 分間という長いものになった。その UFO は、日航 747 機を追ってあちらこちらと位置を変えた。暫くしてその UFO は高度を変えたが、依然としてついてきた。管制局は、日航機に 360 度旋回を指示した。747 機が 360 度旋回を行なう場合、旋回が終わるまでに数分かかる。また広い空域を飛行することになる。だが UFO は依然としてついてきた。それは正面だったり側面だったり、後方だったりした。彼ら(管制官)は、それを 747 機の正面 7 ないし 8 マイル[離れた所に]に見た。約 10 秒後の次の走査では、それは機の後方、やはり 7 ないし 8 マイルにあった。機は常に目標から 7 ないし 8 マイル離れた位置にあった。

[10 秒以下の時間で数マイルを移動する、よく知られたこの UFO の非線形の動きに注目されたい。これは他の多くの目撃証人の証言中にある 10 数例に及ぶ他のレーダー-UFO 事件によっても裏付けられている。SG]

調査がすべて終わって翌日我々がワシントンに戻ると、[FAA]長官から電話があり、何か問題になることがあったか知りたい、ということだった。私の上司は、我々はそのビデオを撮ったが、そこに何かがあったかもしれない、と答えた。FAA 長官は、上がってきて何が起きたか 5 分間の簡単な概要報告をしてくれと言った。それで我々は[ワシントン D.C.にある FAA 本部の]10 階に上がり、長官のために 4、5 分間の報告をした。そのときの長官はエンゲン提督だった。彼は、そのビデオを持っているか？そのビデオを見せてくれないか？と訊いた。私は、はい、セットすればすぐに見られます、と答えた。

こうして我々は、彼のためにビデオをセットした。彼はそれを見始めた。約 5 分後、彼はスタッフに、会合をすべて取り止めると告げた。彼はちょうど半時間あまりをかけて、そのすべてを見た。

全部が終わったとき、彼は言った。“君たちはどう考えるか？”私の上司は、役人らしいまい答え方をした。“それが何であるかはよく分かりません...”彼(長官)の見解は、誰にも言うな、だった。私が許可するまで誰にも言うな、ということだった。翌日、私に[レーガン大統領の]科学調査グループか CIA の人から、電話があった。それが誰だったか私は知らない。最初の電話だった。彼らはこの事件について何か訊きたがっていた。私は言った。“あなたが何を話しているのか私には分からない。あなたはたぶん、提督[FAA 長官エンゲン]に電話したかったんでしょう”

それから数分後に提督から電話があり、明日午前 9 時にラウンドルームで説明会を開くと言った。“君たちが持っているすべての資料を持ってきて、集まった皆に望みのものは何でも提供せよ、この事件から手を引きたい。彼らがしたいようにさせよ”それで私は、技術センターから来た人間を全部連れていった。我々は、プリンタ打ち出し資料を入れた、あらゆる箱を持っていった。それらは部屋いっぱいになった。そこには FBI から 3 人、CIA から 3 人、レーガン政権の科学調査チームから 3 人来ていた -- その他の人たちが誰だったかは知らないが、彼らは皆興奮していた。

我々は彼らにビデオを見せた。その後で彼らは、そのときの周波数、アンテナの回転速度といったあらゆる質問を浴びせてきた。レーダーは何基あったか？アンテナの数は？データはどのように処理されたか？彼らは皆興奮していた — まるでそれが彼らの仕事であるかのようにだった。質問が終わると、彼らはそこにいる他の人々全員に対して、実際にこう断言した。“この事件は決して起き

なかった、我々はこの会合を持たなかった。これは決して記録されなかった”

SG: 誰がそれを言ったのですか？それを言っていたのは誰でしたか？

JC: それは CIA から来た一人だった。いいですか？彼らはそこにいなかったし、この会合もなかったと。そのとき私は言った。“しかし、あなたがなぜそう言うのか、私には分からない。つまり、そこに何かがあった。それがステルス爆撃機でないとしたら、ご存じのとおり、それはUFOだ。そして、もしそれがUFOなら、なぜあなたたちは人々にそれを知られたくないのか？”なんと彼らは皆感情を高ぶらせた。あなたはそれを口にするこゝとさえ考えてはならない。1機のUFOが30分間レーダーに捉えられたデータは、彼らにとって初めてだと彼は言った。彼らは皆そのデータを入手し、それが何物で、何が実際に起きていたか、知りたくてうずうずしていた。彼はこう言った。もし彼らが公の前に出て、米国民に対してUFOにそこで遭遇したと言ったなら、国中にパニックを引き起こすだろう。だから、あなたたちはこれについて語ってはいけない。彼らはこのすべてのデータを持ち去ろうとした。だから私は言った。“よろしい、お望みならすべてのデータを持って行ってください”

SG: 誰がデータを持ち去ったのですか？

JC: そのグループだ。それが誰の所に行ったか、私は知らないが、そのグループが持ち去った。しかし、彼らは我々がそこに置いてあった資料だけを持ち去った。彼らは、他に何か資料を持っていないかと私に訊かなかった。彼らはこの全部のデータを持っていくと言った。だから私は、よろしいと言った。ところで、私は撮ったその元ビデオを持っていたし、回報されてきたパイロットの報告書を持っていた。最初の報告書だ。私はFAAの最初の報告書を持っており、それらはすべて階下の私の机にあった。

彼らはそれを要求しなかったので、私はそれを彼らに渡さなかった。後日私が退職するとき、それはすべて私の事務室にあり、私のものになった。それ以来、我々はその上に座って隠してきた。

[これらの資料の全部を我々は入手している。その中にはレーダーのビデオ、航空管制官の肉声筆記録、FAA報告、そしてこの事件のコンピュータ打ち出し記録がある。SG]

ついに日航747機は空域を去り、今度は1機のユナイテッド航空便がアラスカに入ってくる。管制官はユナイテッド機にこう言う。“今までこの上空に日航747機がいて、1機のUFOに追跡されていた。それ(UFO)を確認して欲しい。その高度を保ってもらえるか？”ユナイテッド機は“問題ない、了解した”と言う。管制所はユナイテッド機に約20度の左旋回を指示し、高度を保ったまま日航747機に向かわせるようにした。

2機の航空機が通過した後、その目標[UFO]はこの空域にいる間中ユナイテッド機を追跡し、それは着陸進入するまで続いた。そして、UFOはそのまま消えた。

さて、届いた報告書を彼らが読んだとき、FAAは自らを守ることを決めた — 彼がそう言ったことだとしても、目標を見たと言っはならない。彼らは彼にその報告書を修正させ、それが目標(target)ではないように聞こえる“位置標識(position symbols)”という言葉を使った。こうして、もしそ

れが目標でないなら、我々が[レーダー上で]識別している他の多くの位置標識は、どれも目標ではないことになる。それを読んで私は驚き、何やら胡散臭いものがあると考えた。誰かが何か、あるいは誰かを恐れている、彼らは隠蔽しようとしている。

CIA が我々に、これは起きなかったしこの会合もなかったと言ったとき、このことが進行中であることを彼らは国民に知られたくないのだと私は思った。普通なら我々は、これがあつたあれがあつたという類のニュースを流すものだ。

私が不思議だったのは、軍のテープが消えたことだった。そんなはずはなかった。我々は[レーダーテープが保存される残りの期間] 30 日間のうちの 15 日間を使った。軍は、その訪問者たちが誰だったかを我々以上に知っていた。そしてそれを誰にも知られたくなかった。テープの件は、そのことを示す最初の兆候だった。もちろん、これに関わつた下部の人間は、彼らの上層部で何が進行しているのか実際には知らない。誰かが電話をしてきて、それらのテープを再使用せよと言うなら、彼らはただそれを再使用するだけだ。実際、彼らは気にかけない。

彼らが私の考えを訊いてきたので、私はその上空に UFO がいたようだと答えた。FAA のテープにそれが[連続して]映っていない理由は、それが航空機にしてはあまりにも大き過ぎたために、それを気象現象と解釈し、記録しようとしなかったためだ。[システムはそのような事物を除去するようにプログラムされている]。その日本人パイロットは、確かにそれを見た。その日本人パイロットは、それを絵に描いた。その日本人パイロットは、彼自身が言ったことのために苦しい立場に置かれた。彼は彼の国を当惑させた。

[この日航 747 機パイロットの悲劇は、この主題の秘密を保つうえで嘲笑の力がいかに強いかを痛烈に思い出させる。このパイロットは長い間事務職に追いやられ、屈辱を与えられた。元 NASA 研究専門科学者だったリチャード・ヘインズ博士の証言を見よ。彼はその中で、この事件について知っていることと、そのパイロットが再び飛べるように援助したことを述べている。SG]

我々の軍の管制官は、それを見たと言った。我々の FAA 管制官は、それを見たと言った。我々の FAA 管制官は、暫くして戻ってきて、本当はその目標を見なかった、何か別のものだったと言った。彼らが報告書を作成するのに何者かが介在している。だから、それは疑わしかった。

だが、自分が UFO 事件に関わっていたなどと人に言ったら、彼らは必ずあなたを少しおかしいと見なすだろう。これが我々の国の現状だと私は考える。テレビ番組に出て UFO を見たと言う人たちは、夜中に外に出てアライグマやワニ狩りに行っている無学な田舎者だけだ。洗練された人や専門の職業を持った人々で、昨夜自分が見たことを進んで話そうとする人は、どこにもいない。彼らは米国内ではそのことを表に出さない。だから、もしあなたが UFO を見たと言ったら、自らを変わり者の仲間入りさせることになる。おそらくそのことが、あなたがこれ(UFO)について詳しいことを聞かない理由の一つだ。だが私に関する限り、1 機の UFO が大空を横切つて、半時間以上も日航 747 機を追跡するのをレーダーで見た。それは私が知っている政府のどんなものよりも速かった。

こうして、私は FAA で多くの隠蔽に関与してきた。我々がレーガン政権のスタッフに報告したとき、私はそこにいたあのグループの後方にいた。彼らとその部屋にいた人々に話していたとき、彼らは

その人々に、これは起きなかったと誓わせた。だが、彼らは私にはそれを誓わせなかった。私をいつも悩ませたのは、次のことだった。我々は、これらのことを行なわれるままにしている。人々がラジオやテレビで何かを見たり聞いたりするとき、ニュースはそれを取り上げない。なぜなら、それは存在しないからだ。何も言わないことが、私には苦しかった。

これをすべて見てしまったことが、まだ私を苦しめている。私はそのすべてを知っている。その答と一緒に私は歩き回っている。そして、誰もその答を私に訊ねようとしない。私はやや苛立ちを覚える。我々の政府がそんなふうでなければならぬなどと、私は信じない。我々がこれと同じような物事に出会ったとき、[それを隠さなければ]世界で何が進行しているのか、おそらくあなたはもっと知ることができるだろう。もし彼ら[UFO]があのような機械で、あのような距離を旅行できるとすれば、この地球で人々の健康、食料供給、癌治療のために彼らができることを、誰が知り得ようか。あの速度で旅行できるためには、彼らは我々よりもっと知っていないてはならない。

もしこれらの UFO が実在するとしたら、いつかレーダーに映るはずであり、それを見る専門家たちがいるはずだ、という人々に対して私は、1986年に遡ってそれを見た十分な数の専門家たちがいた、と彼らに言える。それはワシントン D.C.にある FAA 本部にまで持ち込まれた。その長官がそのテープを見た。我々が報告を行なった人々は、全員それを見た。レーガン政権の科学調査チーム、その3人の教授たち、博士たち、彼らはそれを見た。私に関する限り、彼らはそれに対する私の考えを検証した人々だった。彼らはそのデータにとってもとても興奮していた。これは1機の UFO が30分以上もレーダーに記録された唯一の事件だ、と彼らは言っていた。彼らはそれを見るための全データを持っている。

さて、30分間のレーダー反射データが、部屋中の箱に詰められた。箱は積み上げられ、2、3メートルの高さがあった。見るべき大量の書類があった。彼らは、今やレーダーの周波数を知った。彼らは、それがいかに速く旋回したかも知った。彼らは、それがどこにいたかも知った。そこにはそれを確認する軍がいた。

それにもかかわらず、これと同じようなものを見た人々に対して外部の人々がどういう見方をするか、政府が期待することは、彼らは変人であり、彼らはあまり正常でない、ということだと私は考える。だから、彼らに気を付けなければならない。それが彼らから受ける印象だ。私はまったくその印象を気にかけないが...

SG: FAA 本部での会合にいた CIA や他の人々の名前を覚えていますか？

JC: 私が CIA の人に私の名刺を渡したら、彼はこう言った。“我々は会社に属している(彼らは CIA だとは言わなかった)。会社では名刺を持たない。我々は会社の名刺を持っていない” 彼らは名刺を持っているかもしれないが、それは会社と何の関係もない。そして彼は、渡せるものは何もないと言った。提督の日程表には、その部屋を予約したのは誰か、その説明会の当日誰がそこにいたかが書かれているはずだ。

私が言えることは、私自身の目を見たことだ。私にはビデオがある。私には録音テープがある。私には、私がこれまであなたに話してきたことを確認する、綴じられた報告書がある。そして、私は

あなたが FAA の政府高官と呼ぶかもしれない人々の一人だ。私は提督より 3, 4 階級しか位が低く
なかった。我々は、すべての航空便の事件と事故を調査した。

[それらがレーダーで記録され、有能な専門家によって解析された証拠がないという理由で、こ
れらの物体が現実ではなかったと主張する人々は、実のところ今や誤りを認めるべきだ。ここに登
場したのは一人の経験を積んだ FAA の当局者である。彼は記録に基づいてその事件が起きたこと、
CIA と他の政府当局者たちが、この事件を秘密にするように命じ、その証拠を押収した(と彼らが考
えた)ことを述べている。我々は名乗り出たキャラハン氏の勇気に、またこの事例の証拠を保存し伝
えた氏の勇気に、深く感謝する。SG]

米国空軍軍曹(退役) チャック・ソレルスの証言
Testimony of Sgt. Chuck Sorrells, US Air Force (ret.)

2000 年 12 月

チャック・ソレルスは米国空軍の職業軍人で、1965 年にエドワーズ空軍基地にいた。このとき、1 機
ではなく、少なくとも 7 機の UFO がエドワーズ空軍基地の空域に現れ、とてつもない速度で異常な
運動をした。右旋回やその他の振る舞いを見せたが、それは当時知られていまいかなる航空機も
なし得ないことだった。それらは複数のレーダーに捕捉され、何人かの人々により視認された。一
人の UFO 特務将校が、これらの物体を迎撃するために慌てて 1 機のジェット機に発進許可を与え
た。この出来事は 5, 6 時間続いた。この事件の録音テープの筆記録が彼の証言の後に続く。

CS: チャック・ソレルス軍曹

SG: スティーブン・グリア博士

SC: 私の名前はチャック・ソレルスだ。1954 年に空軍に入り、1974 年に退役した。私は軍曹だ
った。任期のほとんどを航空管制官として過ごした。私はカリフォルニアのエドワーズ空軍基地、日
本、タイ、アラスカ、そして米国の幾つかの場所で勤務した。

この出来事は、1965 年 10 月 7 日にエドワーズ空軍基地で起きた。それは深夜当番のときで、私
は管制塔で勤務中の航空管制官だった。朝の 1:30 かその頃、私は管制塔の東方にとても明るい
光を認めた。それは 1 個の薄緑色の光体で、その下に 1 個の赤い照明があった。赤い照明は明滅
しており、その頂部では 1 個の白い照明がまさに輝いていた。それはとても明るく、かなり大きか
った。私はそれをかなり長い間観察していた。というのは、その時刻にこの空域には航空機がいな
かったからだ。私はその夜の基地勤務に就いていた通信指令部員と気象予報員を呼び出し、皆で外
に出て見るように言った。私は勤務に就いていた迎撃隊の一人にも見るように言い、下にいた大尉
にも見るように言った。我々は、それについて暫く語り合った。RAP-CON 要員(基地のレーダー要
員;ラプコン)は、その時刻その空域に 1 機の航空機も捉えていなかった。

我々はロサンゼルス防衛区の防空部を呼び出した。その司令官は、彼が管轄する基地に電話
をかけまくった。それが見えていたある時刻に、彼らは少なくとも 4 カ所のレーダー基地でその物体
のレーダー反射を捉えていた。[それらの UFO は]ジョージタワーなど、他の数カ所の管制塔でも見
られていたし、他の幾つかの場所でも見られていた。こうして、これらの UFO を地上で見ている人
が何人かおり、[それらを見ていた]レーダーサイトも約 4 カ所あった。これは 2, 3 時間行ったり来た

りを繰り返した。ついに彼らは、それに接近して観察するために、1機の航空機を緊急発進させることを決めた。これは別の上級司令部と調整されたもので、その中に NORAD (North American Air Defense Command; 北米防空軍)が入っていたと私は考えている。

[この紛れもない UFO 事例に、彼らの否定にもかかわらず、NORAD が関与していたとする軍航空管制官マイケル・スミス証言を見よ。SG]

ジェット機はそれを見るために近づいた。彼らは彼(パイロット)に、これらの目標を迎撃させようとした。最初に、私は1個の大きな光体を見た。暫くしてそれはそこに静止し、ほとんど動かなかった。だが、それは星やそれに類するものにしては、あまりにも地平線に近かった。それは山[や]丘などよりも低かったので、星ではなかった。[だから]私にはそれが何であるのか、見当もつかなかった。そのときまったく突然に、さらに3個の物体がそこに現れた。それらは同じような光り方をした。だが、これらの3個の光体は一緒のままだった。それらはある編隊を組んで一緒に静止し、次に私の南側に移動して暫く止まった。ややあってさらに3個現れた。しかしそれらは一緒ではなかった。それらは別々に飛び回り、北、南、東、西へと飛んだ — 多様な動き方だった。この時点で、私は同時に7個を見ていた。彼らが迎撃ジェット機を緊急発進させる決定を下したのは、このときだった。そのときはもう明け方に向かっていた。

彼らはこれらの UFO を迎撃できずにいた。彼らは管制塔の私に情報を要求し続けた。“この物体は本機に対してどちらにいるか？”私ができることは、彼を滑走路と一直線に並べさせることだった。滑走路なら私がいる場所に対して彼の機首方位が分かった。こうして、彼が滑走路の端に来るとすぐに、彼に対して機首をある方向に向けさせ、そのまま進めと言った。その夜、彼は異なる時刻に3回ほど“捕捉”と言った。その“捕捉”とは、彼が操縦席のレーダー上で何かを捕捉したことを意味する。それが何だったのか、我々は今でも分からない。だがそれらは現実の物体だった。

あるとき、その迎撃機は 40,000 フィートまで上昇した。彼がその物体に近づくと、その物体は大変な高速で、まったく突然に真っすぐ上昇した。そして彼はちょうどその下を通過した。テープには司令官がこう言っている箇所がある。“管制塔、彼(パイロット)はどんな様子か？”私—“彼は低い(*追いついていない)”彼(司令官)—“おい、彼は 40,000 フィートだぞ”私—“知るものか — 彼はまだ低い(*追いつかない)”

[彼が言及しているテープは、この数時間に及ぶ遭遇の実際の会話録音テープである。我々はこのテープを持っている。この後に続くこのテープの筆記録を参照されたい。SG]

その UFO は高度を上げただけだった。彼らはレーダー、高度計など、使えるものは何でも使って探査した。その時点で、それ(UFO)が彼らのレーダー上空にいたことはほとんど確実だと私は思っている。

SG: それはどれくらいの高さだったのですか？

CS: おそらく 100,000 フィートくらいだったと思う。当時は 80,000 から 100,000 フィートがおそらく彼らの探査能力だっただろう。

その迎撃機は、異なる時刻に3回捕捉した。それから彼はそれを見失った。これらの物体は、私の当番が終わるまでそこで動き回った。明るくなり始めの頃、それらのUFOは、大気中を高く、高く、さらに高く昇り始めた。星も見えなくなるほど明るくなった頃には、それら(UFO)もまた行ってしまった — それらは、まさに大気中に消えたのだ。

私はあらゆる種類の航空機を知っている。だから、これの正体でなかったものを多く挙げるができる。それはヘリコプターではなかった。それは飛行機ではなかった。それは気球ではなかった — 気象観測気球でも、他のいかなる種類の気球でもなかった。それは知られているどんな航空機でもなかったし、我々が今日知っている、あるいは当時知っていたどんな飛行物体でもなかった。また、それはレーザーショーでもなかった。そんなものではなく、ものすごい速さで移動することができた。それらは、私の視界の東側にいたかと思うと、瞬間に西側に移動することができた。おそらく、それらはあなたが指を2回鳴らす間に、30から40マイル移動することができた。本当に速かった！そして、それらは上昇することができた — まさに、そのまま上に。それらは瞬間的にそうすることができたように思われた。ある時点でそれらは静止し、そのまま長時間動かなかった — そして動いた。小さい方の3個の光体は、他の光体よりも多くの動きを見せた。最初のとても大きなUFOは、そんなに多く動かなかった。それでも数時間後、それは東から少しだけ南に向かって小さな動きを示した。それから再び東に向かって少し動いた — そんな具合だった。だが、それは彼らがそれに迎撃を仕掛けようとするまで、突然の速い動きはしなかった。そのときは真つすぐ上昇した。

個別に動き回っていた3個の光体は、素早く北、南、東、[そして]西へと動いた。本当に速く動いていたのは、それらだった。それらが実際に基地に近づいたり、地面に近づいたりした。私はそれらの高度が、時折2,000フィートかそれ以下だろうと判断した。我々がそれらに対してレーダーカットの状態にあったことを、私は知っている。カットは4,000ないし10,000[または]11,000フィートのどこかで起きる。だから、それは地面にかなり近かった。

これらのUFOは、レーダー信号を返す固体金属の何かであるはずだった。レーダーはとても単純だ：それは電波ビームで、何かに当たり、何かで跳ね返され、戻ってくる。つまり、レーダーを跳ね返す何かがないと行かない。それはゴム気球とかそういうものでは跳ね返らない。それは電波を跳ね返し、レーダー画面に表示される金属の性質を持った何かでなければならないだろう。

SG: これらの物体の速度を推定できますか？

CS: それは時速数千マイルでなければならないだろう — 速度ということなら、その程度に達するだろう。これらの物体はとてつもなく速いはずだ。レーダー操作員たちは[それらの]速度を決定するのに難儀していた。というのは、それらはある場所に少しの間いて、次にものすごい速さで移動した。レーダー画面が回転走査してそれを見つけようとしたときには、そのUFOはすでに別の場所にいた。それらに対して速度のような量を定めるのは、大変難しかった。それは東に見えていた。もしちょっとの間辺りを見回して、ほんの少しの間だけ注意が他のどこかにそれたとする。再びそれが見えたときには、それは西の向こうにあった。それらは急な方向転換をすることができたし、当時我々が知らなかったあらゆる種類の機動性も見せた。とても奇妙な夜だった。

これらの出来事は、少なくとも 4 時間の時間枠を超えて発生した。当時は、どの基地にも彼らが UFO 将校と呼ぶ要員がいた — 未確認飛行物体将校。我々の基地にも一人いた。彼の仕事は、この物体を見て調べる命令を実際に出すことだった。ロサンゼルス防衛区の防空司令官とレーダー操作員たちは、それを調べたかったが、彼らは合法的にそれをする前に、彼 (UFO 将校) の許可を得る必要があった。

そのときエドワーズ空軍基地には、ロケット基地があった。彼らは異なる燃料のあらゆる組み合わせを使って実験をしていた。彼らはそこでどんな推力が得られるかを見るために、大量のロケット燃焼を行っていた。私の考えだが、この巨大な UFO が静止していたのは、ちょうどその地域だった — まさにそのロケット基地の上空だった。

その夜に彼らが緊急発進させた F-106 は、彼らが冷たい鳥 (cold bird) と呼んでいたものだった。それは何の武装もしていなかった。

SG: あなたが空軍にいるとき、UFO とこの種の遭遇をした人々のことを聞きましたか？

CS: 確かにいた。同じような物を見た人々が語るのを私は聞いたことがある。だが、彼らは必ずしも名乗り出て見たことを言おうとしなかった。彼らは頭がおかしくなったとか、幻を見たとか言われて、自分に不名誉な烙印を押されることを望まなかったからだ。そうでなければ、彼らは仲間に冷やかされたくなかった。

今持っているその夜の出来事のテープには、これに関わった人々の、レーダー基地で記録された無線や電話による音声が入っている。私がいた管制塔からの別のテープも、どこかにあつただろう。というのは、管制塔で進行していたことのすべては、記録されたからだ。

私が一度に見たそれらの物体[の最大数]は、7 個だった。1 個の大きな物体があり、その他に同種の性質を持つ、より小さな 3 個の物体があった。だが、これらの 3 個は一緒のままだった。その後のある時点で、さらに別々に飛び回る 3 個の物体があった。だが、ある時点で私は一度に 7 個を肉眼で見た。今そのテープを聴くと、その夜その地域には、11 個もの物体があつたように聞き取れる。

[それらが]何であるのか、私には分からない。だが、それらの正体でなかったものは、多く挙げることができる。我々が今日知っているもので、あの種の性質を持つものはどこにもない — 無音で、あのような動きと速度を示すもの。あるときそれらは管制塔に近づいた。もしジェット機か何かだったら、その音を聞いていただろう。それらが何であつたか知りたい。...

[このきわめて重要な事例には、熟練した空軍航空管制官、公式の“UFO 将校”、4 カ所のレーダー基地、迎撃機搭載レーダーによる自動追跡、長い時間、そして数時間に及ぶ多くの出現物体が関わっている。これを捏造だという人々と UFO 問題を嘲笑う人々は、これらの要素のすべてを説明できなければならない -- そして実際に起きた事柄の肉声のテープも。ただ一つの結論は、疑い得ないものだ: これらの UFO は現実だった。沼気(メタンガス)ではなかった。火の玉(球電)でもなかった。幻覚でもなかった。また、これらの出来事に対して学会と官僚によって与えられた、他のいかなる馬鹿げた解釈でもなかった。SG]

エドワーズ空軍基地の音声テープからの抜粋 - 1965

記号

- P: パイロットたちの声
A: 管制官たちの声
O: 将校たちの声
H: 高度監視官
Pedro: サンペドロ駐屯地
FS: 飛行管理官

A: ビクタービルとエドワーズの間で何か捕捉したか？

P: ここに 1 個いる.

A: それらは立ち去るように見えるか？

P: [不明瞭で聞き取れない]

A: それらは遠ざかっているか？

P: 自分はすでに... 将校... 見るのに間に合わなかったようだ. それらは上昇している.

A: すると, それらは立ち去っている様子か？

P: そのとおりだ. それらは遠ざかっている. 南にいるそれらは真っすぐ上昇している. 全部だ.

A: そうか. そこにいるおよその数は？

P: 少し前には数個だった.

A: なるほど.

P: 現在は 1, 2, 3, 4, 5 個だ. 上昇している.

A: それら 5 個も上昇中か？

P: それら 5 個全部が上昇している.

...

P: ええ, それらは全部上昇中です.

O: [クラーク大尉]本当か？

P: 本当です. 今それらは全部上昇しています.

O: [クラーク大尉]よろしい, 君は我々のちょうどほぼ南に 1 個の明るい星を見た. そこからどの方向だ？あの明るい星だ - 高度約 45 度のはずだ.

...

P: 今ここから全部見える. 赤い光は停止, それら全部が向かっている先は...

O: 本当か？

A: あの明るい光の監視をまた始める.

O: 分かった.

[背景の声はパイロットが言うことを無線か電話で他の部署に説明している]

P: 3, 4 個が南にある. 弱い光だ.

...

P: それらの 1 個から赤い光がまだ時々見える.

O: 大きな光のどちら側だ？

P: その下側でやや南だ. そのうち 3 個がほぼ一直線だ.

O: なるほど.

P: ほぼ水平だ.

O: 分かった.

P: それらから赤い光がまだ時々見える. 大きい光からは見えない.

...

P: この宇宙 — この宇宙将校が私と一緒に一晩中これを見ている. もう一度彼を出して私と同じ印象を彼が持っているか訊きたい. こんな現象を見ているのが私一人だなんてことにしたくないからな.

A: 了解した[笑い].

...

O: 管制官が一人呆然としているようです. 誰かが彼の話を確認しました. 今それらはすごい速さで上昇していると彼は言っています.

A: では暫く様子を見る. それらが何を求めているかだ.

O: 了解しました.

A: レーダーから消えた.

...

O: _____が別の電話中だ. 彼が私と同じものを見ているか... それら全部が急速に上昇中だ. 私にはそう見える. たぶんそのように見えるはずだ. 上の方で輝きはどうか? それは真っすぐ上に見えるか? 真っすぐ — 今は最初に言ったときよりはるかに上だ.

...

O: こちら再び(名前 — はっきりしない)だ. 私が見ているものを基地の観測が確認した. それらはすべて上昇中だ. 予報官が私と一緒にずっとこれを観測している. 彼は参照点を使ってその動きを判断している.

O: 分かった.

O: 最初の高度よりはるかに高いと彼が言っている. 間違いなく上昇している.

O: 今の高度を推定できるか?

O: 敢えて推定したくないが, たぶん 30,000 から 40,000 だ. だがこれはまったく肉眼による推定の限度を超えている.

O: 低くはないのだな?

O: いえ, 低くはありません. 元の位置から離れています. 最初はせいぜい 5,000 フィートでした.

O: 我々は何回か高度を測定した. だが UFO 将校は我々にそれを見に行かせるつもりだった. 我々は待機していたが, その後彼からは何もない.

O: 彼はまだそれを作戦行動にしていらないと思う.

O: 我々が出動する前にこの大尉が _____まで降りてきて見て欲しかった. 赤い光はもう見えない... (同時に二つの声). 一つはまだはっきりと明滅している. それらは全部まだ明滅しているが, もうかなり遠い. 赤い光は見分けられない. 小さい赤い光は底部の障害灯のように見えた.

...

A: このとおり, 空が混み合っている. いや, 交通量は多くないが, 今その空域で幾つか動いているものがある. それらは不法に近づいてきたのだと思う. 結構な状況じゃないか?

A: そうだ. それは[不明瞭で聞き取れない].

...

O: こちらは再びクラーク大尉だ.

O: はい。クラーク大尉！そこで何か見つけましたか？

CC: [クラーク大尉]今あの明るい星に面している。それがそうなら見てくれ。その下、やや右だ。そこに“V”の字になっている3個が見えるだろう。

O: 君が見ているのはそれか？

A: はい、そうです。

CC: [クラーク大尉]その底辺が右上に向かっているVだ。

...

A: 南に3個...まるで...その一つが点滅し、次々に他が点滅する。

...

A: 私は1時間50分それを見ている。

O: ああ。

A: ほぼ2時間経った。その間に高度は2倍、西に5,6マイル動いたようだ。

O: なるほど。

O: [別の将校]そこに風があるか？

A: はい。管制塔では風があります。今は弱くなっています。2ノットより大きくはありません。東風です。これらの物体は西向きに動いています。

O: よし、そのまま追跡してくれ。今ランスから報告を受けた。そこで何か動きを捉えたらいい。彼は今私の双眼鏡で見ている。

...

O: 皆さん。現場の高度監視官がここにいます。では_____ストラブル少佐。少佐の話を聞いた人は回線をそのままに。

A: これから高度監視官が話します。

H: よろしい。目標は090に3マイル移動している。それは80マイルの030度から30, 30, 30, 30の060まで移動_____基地からだ。

O: どの基地か？

H: サンペドロからだ。

...

O: アルファ・ゼロは捕捉している。約15か20右と言っている。

A: 220か？

O: そのとおりだ。

O: アルファ。我々の他機が今そこにいるか？

A: いいえ。いません。暫くそれらの様子を見ます。

...

Pedro: 345. 距離約80.

H: 了解。それは迎撃機だ。

A: 間もなくここで彼を090に旋回させる。管制塔の頭上だ。よろしい、それを右090に向かせろ。

H: ペドロか？

Pedro: これらの物体から何かデータを得たか？

H: やあ、ペドロ。

Pedro: こちらはペドロだ。調子はどうだ？

H: (*意味不明)その迎撃機を追跡し、先回りしてそれを追いかけるタイミングを教える。

...

A: よろしい, 今アルファ・リマが見える.
A: そうだ. 捉えたと言っている. 12 時 16 だ.
A: そのとおり.
H: ペドロ, 了解した. 高度探査を彼の前方 7 度に回してくれ. 高度探査をその前方 7 度に回してくれ — その迎撃機の前方だ.
O: 捉えたようだ.
H: 管制塔, 聞こえるか?
A: 何か?
H: 今彼の様子は? 何かに向かっているか?
A: 順調だ. うまくやっているようだ.
H: ブリップ(*レーダー画面上の輝点)が合体しつつあるか... つまり...
A: そのとおり, 彼は接近している.
...
H: よし, そのまま進め... そのまま前に進め. 目標の前方 25 から 15 度まで進め.
O: 聞こえるか, 管制塔_____
A: それらは接近しつつある. 彼はそれのやや南にいるようだ. 左旋回, 左旋回. 低い高度で左旋回. 彼は低い高度で左旋回. 物体は上昇している.
H: 管制塔, 今の状況は?
A: 彼は低い! 上を探せ — 上を探せ. ずっと上を探せ, 物体は上昇している. すごい速さで上昇している.
O: 管制塔からは今彼の真上にいるように見える.
A: 彼のほぼ真上で上昇しているようだ.
H: わかった. ペドロ, 戻せ. 迎撃機に戻せ.
...
A: だが私からその物体が見える. 元の位置からずっと高い.
H: よろしい. アルファ・リマは 40,000 まで上昇する.
A: 了解.
H: よし, ペドロ. 高度探査を 030 度に向ける.
A: アルファ・リマに着陸灯をつけさせろ.
...
O: その位置に印をつけろ, シヤーム. またレーダーで捉え損なった.
A: 高度は?
H: 01, 今は 20 で 060 だろう.
...
H: レーダーでそれを捉えたようだ. そちらの基地から 10 の 075 だ.
Pedro: 10 で 075 か?
H: そうだ. そこに何かいるか?
Pedro: 075 に 1 個いる. _____
H: 了解.
Pedro: そして高い. 彼は今我々の探査範囲外にいる.
H: どの高度探査だ?
[同時に複数の声]

O: ランス, こちらは管制塔.
H: 了解.
O: こちらはクラーク大尉だ. ここからエドワーズの東にかけてこれらの物体の高度が分かるか?
H: 分からない. 高度探査でそれらを捕捉できない. その下を通過か接近する迎撃機を目標にそれらを追いかけている.
CC: [クラーク大尉]分かった.
H: 現在, 高度探査では彼らを捕捉できない. 彼がその下を実際に通過する時刻を教えてください. ここにいる基地の監視員がその位置を記録し, 私はその空域に両方の高度探査をかける.
...
H: 輝く物体が 12 時の方向に?
A: 12 時のはずだ.
?: [叫び声]12 時に輝く物体がいる.
A: 彼をあと 10 度左に向けさせろ. 左 060 だ.
H: 今 060 だ.
A: 彼はその右を通過する.
...
H: 何か見えるか?
A: いいえ, 捕捉を試みた 2 個だけです. 管制塔からは彼がその下を通過したように見えました.
H: エドワーズか?
A: はい, そうです.
H: そちらのほぼ南東に 1 個いるか? 今の時刻で約 3 マイルだ.
A: 3 マイルですか?
H: そのとおりだ. 南東のずっと近くだ. そこで何か捕捉したかもしれない.
A: 待ってください, 何か見えます. 双眼鏡で見ます.
H: 120 だ.
A: 今, 双眼鏡で見ます.
[背景の音]
H: ペドロ, そちらが捕捉した目標の対地速度は?
Pedro: 今話した目標か?
H: そうだ.
Pedro: 分からない, 2 回走査したら消えた.
H: それを 2 回走査したら消えた. 心配したとおりだ. 管制塔, 聞こえるか? 管制塔, 聞こえるか? ふうむ. 楽観できないが, あの戦闘機はどこかを飛んでいるようです.
...
H: そこで捕捉したようだ.
...
A: それは約 16,000 フィートか?
H: 16,000?
A: そうです. 上官殿? W.D.? やあ!
H: 了解. そのとおりだ. そのエドワーズの目標は 16,000 だ.
O: 目標を 16,000 で捕捉したのだな?
H: そのとおり.

O: それは 1, 6, 1,000 か？
H: そうだ, 16,000 だ. ペドロ, 聞こえるか? 高度探査をそれに固定して自動追跡しろ. 見失うな.
Pedro: それは 106 のままか?
H: そうではない. 今まで経験したことがない範囲だ. それは, えー _____ エドワーズだ.
Pedro: 了解した. 分かった. 我々がそれを開始する.
H: それから目を離すな. 以前それは分裂した. 覚えているか?
O: まだ双眼鏡で探しているのか?
H: 管制塔, 回線に戻れ. はい. あの目標はレーダーから消えました.
...
H: 彼はその正面から接近している.
O: 了解. それで追跡できているか?
H: いや. エドワーズが追跡できている. . . 高度探査がまだそれを捉えているか? 管制塔?
A: はい.
H: 01 が 10 の 120 で今接近中.
A: 10 の 120. 高度は?
H: 彼は 15 まで降下している.
A: こちらはそれを捉えていない.
H: よろしい. 01 は視認している — 点滅している目標だ. 彼の高度は低い.
A: 彼は 1 個捉えているのか?
H: そうだ, 彼は捉えている.
A: よし. 008. 彼はいい位置にいる.
...
H: 見てくれ, 彼は今旋回している. 彼は君の頭上で右旋回しているようだ.
A: 彼は _____
H: エドワーズ, 聞こえるか?
A: どうした?
H: 今 01 を捉えているか?
A: そうだ, 今彼を追跡している.
H: 彼はまだ目標の近くにいるか?
A: それが目標かはっきりしない. 我々はそれを見た. 我々は彼が見ているものを見ているが, 管制塔からは点滅しているように見えない. 彼が見ているものを見ていると思う. そこにある何かを見ているが, 何なのか分からない.
[ひどい背景雑音が続く]
A: それは目標ではないのだから?
A: それは今まで見たものようではない. それはずっと遠くにあるようだ. 彼は原野の上空を飛んで戻ってきた. 彼は今私から見て西に向かっている. いいかい?
H: もう一度言ってくれ.
A: 彼は今西に向かっている. いいかい?
H: 了解した.
O: 迎撃機はあの目標 010 を捕捉したか?
H: 彼はちょうどその上を通過した. 彼がそれを視認したかどうかは知らない.
A: . . . それは静止している.

H: それは静止しているのか?
A: 了解. 16,000 か?
...
H: レーダーでまだそのコウモリを捉えているか?
Pedro: それをまだ調べている...
?: 109 を調べて捉えたものが何かみてくれ.
H: 彼を 16,000 で捉えた. そうだな?
Pedro: そうだ. それは静止している, ほんの 1 度動いただけだ. まだ変化はない.
H: よろしい. その高度探査を自動にしろ. それに作動指令を送りたい.
Pedro: そうする.
...
A: 君が言う 12 の 130 の位置でレーダー捕捉した.
...
O: 今それに ETM を作動させているか?
H: そうだ.
O: こちらは今それを捕捉していない _____. よろしい, 01 はこれらの物体を視認しているか?
A: している.
O: ではリマ 01 を外す.
A: その他は見えない.
H: それらを全部見失ったのか? 01 は地表で点滅しているような幾つかの反射を見たと言った.
A: 地上で点滅しているような反射なのか?
H: そうだ. 湖底からだ.
A: 何か分からない — こちらの航路標識か?
H: いや. 航路標識なら知っている. よろしい, 皆さん, キーを抜いて回線を切るのがよさそうだ.
...
FS: こいつは驚きだ.
H: 彼は見える物体に向かって 15, 20, さらに 40,000 フィートまで上昇し, 地上からの目視観測によればその真下を通過したと思われる. だが私の記録ではその下を飛行したものは何もない.
FS: よろしい, どうもありがとう. とにかく興味深い.
H: そのとおりだ. 我々も不思議に思っている.
FS: まったくだ.
H: その理由を知ることはなさそうだ.
FS: そのとおり. 知ることはないだろう. よろしい, 電話をありがとう.

米国空軍 マイケル・W・スミス氏の証言
Testimony of Mr. Michael W. Smith, US Air Force
2000 年 11 月

マイケル・スミスはオレゴン州, その次にはミシガン州で, 空軍の航空管制官だった. これら両方の施設で, 彼と他の人々は UFO がレーダーで追跡され, とてつもない速度で移動するのを目撃した. 彼はまた, 要員たちはこれらの観測について秘密を守るように求められたこと, NORAD (北米防空

軍)がこれらの出来事を完全に知っていたことを確証する。実際に、ミシガン州でのある出来事では NORAD が全面的に関与し、これらの UFO を避けて B-52 爆撃機を基地に帰還させた。

私の名前はマイケル・スミスだ。1969 年から 1973 年まで空軍に勤務し、航空管制と早期警戒要員を務めたが、それは基本的に航空管制官だった。我々の任務は軍用機に対してそれを追跡し、高度を指示すること、また我々の空域に侵入する航空機を発見し、識別することだった。

1970 年の春、私はオレゴン州クラマスフォールズに配属されていた。私は夜勤当番をするためにそのレーダー基地に出勤した。通常レーダー室には 2 人か 3 人の要員がいるが、その日は厨房員から保守要員まで大勢いた — あらゆる仕事の人々がいた。私は何が起きているかと訊いた。そしたら彼らは、レーダーで UFO を見ているのだと言った。私はそれを聞いて驚き、ペンタゴン(国防総省)には知らせたか、大統領には電話したかと訊いた。彼らは、していないと答えた。彼らはそれをしていなかった。それから私はこう言った。それでは報道関係者か誰かに知らせるべきではないか — これは私にとって重大事件だった。そしたら彼らは、“いや、落ち着いてくれ”と言った。

NORAD[North American Air Defence Command]はこれを知っている。彼らは NORAD を呼んでいた。上級下士官が私を脇に引っ張り、NORAD はこれを知っているとやった — 我々が知らせた唯一の人々だ。我々はこれについて語らない。我々はこれについて誰にも話さない。知っている人は知っている。我々はただ監視する、何が起きるかを見る、それだけだ。それが我々の仕事だ。私は報告書か何かに記録することを主張した、いいですか？そしたら、君が提出する報告書があると彼は言った — それは約 1 インチの厚さがあり、最初の 2 頁は目撃に関することだ。残りは基本的にあなたの心理分析、あなたの家族、あなたの血縁、その他あらゆることが書かれている。

空軍がそれに目を通せば、[あなたは]麻薬をやっていたとか、母親は共産主義者だったとか、その他信用を落とせるものは何でも使って、彼らはあなたの信用を完全に落とすことができる。あなたは決して昇進できない。[あなたは]向こう 3 年半北極でテント暮らしをし、気象観測気球のお守りをすることになる。いいですか — 昇進の望みはない。だから、そのメッセージはきわめてはっきりした明瞭なものだ：ただ口を閉ざし、誰にも何も言うな。

この UFO は静止したまま、まったく動いていなかった。次にそれはゆっくり高度を下げ、山の陰に入った。だからレーダーからも消えた。約 15 分間そのままだったが、次にそれはその場所の上空 80,000[または]90,000 フィートに現れた。次のレーダー走査では、それは 200 マイル遠方であり、静止していた — 完全に停止した。それはそこに 5[もしくは]10 分間空中静止し、それからゆっくり降下を始め、レーダーから消えた。次にまた戻ってきた。それを 3 回繰り返したのを私は見た。

これがもう一度起きたことを私は知っている。ここでは珍しくないことだと私は聞いた。彼らはこのような現象をしばしば見ているが、私自身は 2 回見た。

パイロットの顔が風防を貫通することなしに、あのような加速、減速を行なうことができる航空機はない。つまり、重力の中であのような動きは不可能だ。... だからそれは、我々が持っていない何かであることは明らかだった。我々は、それらに対して迎撃機を緊急発進させたことは一度もない。だからそれは、ロシアが絶対に持っていない何かであることは明らかだった。それは UFO だった。

それが可能なただ一つの説明だった。NORADはそれを知っていた。彼らはそれをまさにUFOとして処理した — それを監視し、何が起きるかを見る。他に何もするな、誰にも話すな、それを記録するな、それを公にするな。

NORAD は米国と北米の全空域を管轄している。彼らの仕事は、侵入するどんな航空機、脅威に対しても、それを識別することだ — ロシアの航空機であれ他の航空機であれ。彼らがまずすることは、定期航空便、個人機、その他何でも、その飛行計画の一覧表と照合することだ。すべてが照合されて確認される。だから、何かが一瞬とレーダー画面に現れ、飛行計画にもなく、異常な飛行をしたら、それを識別するのが彼らの仕事だ。彼らは北米のすべてのレーダー基地と連携している。レーダー信号はすべてコロラド州のシャイアン山[NORAD 司令部]に行く。彼らは大きな画面を持っており、国土のどの部分もいつでも見ることができる。

私のもう一つの経験は、第3当番で起きた。私がレーダーに向かっていたとき、NORAD から連絡があった。それは、カリフォルニアに近づいているUFOが1機あり、それはもう間もなく私の範囲に入るだろうと告げた。

“どうすればよいか”と私は言った。彼らはこう言った。“何も無い、ただ注視せよ、それを記録するな”我々には一冊の日誌があり、それには異常なことから何でもその経過を記録することになっている。しかし彼らは、“それを記録するな、何も書くな。だまって注視せよ。我々は今君にただ知らせているだけだ — 注意喚起”と言った。NORADは、これらのUFOが動き回っていることに明らかに気付いていた。私がレーダーで初めてUFOを見たとき、人々の行動は、まるでそれがいつも起きているかのようなものだった。

あなたがレーダーで初めてUFOを見ると、政府がこれを知っていることに気付く。ではなぜ彼らは報道機関に知らせないのか？

だが私が脇に引っ張られたとき、次のように説明された。そのとおり、UFOは実在する。我々はそれを知っている。NORADもそれを知っている。だがそれだけだ。これは秘密だ。君はこれについて話してはいけない。誰にも話すな。どんな報告書も書くな。それを記録するな。口をつぐめ。そうすれば君は次の階級章を得て昇進し、先に進むだろう。

もう一つの遭遇が、私がミシガン州に配属されていたときに起きた。それは1972年だった — 1972年の秋だったと覚えている。その夜、私は一人で勤務していた。そのときまでに私は軍曹に昇進していた。私は交換手から電話の呼び出しを受けた。交換手が言うには、電話の相手は州警察で、私と話がしたいということだった。彼(警察官)が電話に出たとき、彼は本当に取り乱しており、マッキノー橋の北塔の上に3機のUFOがいると言った。マッキノー橋はミシガン州のアッパー半島とロウアー半島とを繋いでいる。

私はすぐにレーダーのスイッチを入れた。だが私はすぐにその警察官に、レーダーに何も映っていない、と返答した。私は電話を置いた。これは予め決められていた言い方だった — もし何かを見ても“レーダーには何も映っていない”と答える。しかし実際には、その北塔はやや大きく見えた。そのとき私は、それらがUFOであることに気付いたのだ。1機が他[の2機]を残して発進し、マッキ

ナク島を周回して元に戻った。それから3機すべてが、セントイグナスから北に延びる州間高速75号線に沿って移動し始めた。

そうこうしている間に、私は保安官事務所から電話を受けた。彼らは取り乱しており、“我々はこれらのUFOを追って高速を走行中だ”と言った。私の返答は、レーダーには何も映っていない、だった。何人かが電話をしてきた — 何人かの市民だ。報道関係者も一人いたと思う。その間に私はNORADに電話し、彼らに話した。彼らはそれを見上げて、“ああ、それらは州間高速75号線を北上している、そうだね？”と言った。私は、そうです、時速約70から80マイルです、と言った。

ところで、セントイグナスと[不明瞭]の間に、キンチェロ空軍基地がある。そこはSAC (Strategic Air Command; 戦略空軍) 基地の一つだ[1977年に閉鎖]。そこにはB-52爆撃機がある。そのとき、2機の爆撃機が最終進入していた。それは州間高速75号線と交差している。明らかに彼らは、これらの2機の爆撃機を迂回させた。なぜなら、彼らは — 爆撃機が核兵器を積んでいたにせよ積んでいなかったにせよ — 高速を横切り、ほぼ同じ高度で爆撃機をUFOと遭遇させる危険を冒したくなかったからだ。それで彼らは2機のB-52を迂回させた。

UFOが近づいたとき、私はUFOがこちらに向かっていることに気付いた — 高速に沿って、まさに私のレーダー基地のそばを通過する。レーダー基地は丘の上にあった。

私は、1個の明るい青味がかった輝きが、無音でそばを通過するのを見た。その後を赤と青の点滅するライトをつけたパトカーが追っていた。

もし私が、確かにそれらがレーダーに映ったと話していたら、次には新聞が私に話を聞きにやっけてきて、私はおそらく軍法会議にかけられていた。... それらが実際にレーダーに映ったとき、何も映っていないと言ったのは、まさに私の本能だった。私はそれらが高速道路をやってくるのを見ていた。それらはぴったりくっついていて、まるで帰還した航空機のように見えた。言ってみれば、それは超低空の1機の航空機のようなだった。

相手が記事を付けているかどうかは関係ない — これを話してはならない。日誌に[私は]これを書いた。そして翌日私の上級下士官にこれを話した — しかし、これができることのすべてだ。他の誰にも話すな。それを記録するな。もっとも、私はそれを記録してしまっていた。だが、その日誌を誰かがいつか見つけるだろうとは思えない。

政府、彼らは隠蔽する。彼らは誰かがそのことについて話すのを望まない。しかし、それは本当に驚くべき技術なのだ。これらの人々は、どことも知れない場所からやってくる。彼らは皆に知ってもらいたいのではないかと私は思う。...

個人的な話をすれば、オレゴン州で起きた最初の事件後、私は休暇をとって帰省し、そのことを父親に話した。彼は心底赤面したり、蒼白になったり、青ざめたりした — かつての第二次大戦の英雄であり、大変な愛国者だ。私は、これらのUFOが日常的に目撃されると説明していた。父はこう言った。“いや、政府はUFOなんていないと言っている” 私は父に、これらをレーダー上で自分の目で見たんだと言った。そしたら父は、いいかげんにしろ、政府は私に絶対嘘をつかない、と言

った。だが、ここにいるのはその息子だ；私は父に決して嘘は言わない。

そしたら、父はどうしてよいか分からなくなった。彼が私にこう言ったのは、数年後ウォーターゲート事件が終わった後だった。“お前、ここに座って私にそれを話してくれるか。政府はウォーターゲートのような小さなことについて、私に嘘をついていた。だから彼らは何か大きなことについて嘘をついているのは明白だ”

それは最早必要のない、政府の隠蔽だ。冷戦はすでに終わった。私はグリア博士と同じことを信じる。つまり、彼らが持っている技術は、化石燃料の燃焼、オゾンの破壊などをやめさせることができるだろう。これらの人々は技術を持っている — 何か持っているに違いない。政府はそのことを知っている。彼らはこれらの異星人、これらの宇宙機、この技術、そのすべてを所有している。多くの逆行分析技術(back-engineered technology)があることは、きわめて明白だ。他の政府が前向きに取り組み、それを認め、彼らのファイルを開示しているときに、これを隠蔽している者たちは誰か — 我々の政府はなぜそれをしないのか？

私が空軍にいたとき、他にもレーダーで UFO を目撃していた人々が何人もいた。私が話をした多くのパイロットは、それらを追跡したり、接近したり、それらと編隊を組んで飛んだりしていた。例を挙げると、私の友人が管制塔にいたとき、3機の迎撃機による飛行編隊が入ってきた。それで彼は“違う、4機いるぞ”と言った。そしたら隊長が、“違う、我々は3機だ”と続けた。そして彼は“周りを見る”と言った。実際にそのとおりで、そこには彼らと一緒に編隊を組んで飛んでいる UFO がいた。

グリア博士が議会に背景説明を行なうために[1997年4月に]我々をワシントン D.C.に連れていったとき、私はとても緊張していた。何が起きるか分からなかった。だがそこには約12人の他の人々がいて、私は本当に驚いた。私の話は彼らが経験し遭遇したことに比べたら、まったく大したものではなかった。秘密がいかに深く進行しているか、隠蔽がいかに深いものか、それは実に目を見張るものだった — 宇宙飛行士から上院議員まで、誰もが何かを進行していることを知っている。

米国海軍中佐(退役) グラハム・ベッシューンの証言

Testimony of Commander Graham Bethune, US Navy (retired)

2000年11月

グラハム・ベッシューン中佐は、最高機密取扱許可を持つ退役海軍中佐パイロットだ。彼はVIP(要人)輸送指揮官で、ワシントン D.C.からの高官や民間人のほとんどを輸送した。証言の中で彼は、一団の要人とパイロットたちを乗せてニューファンドランドのアルゼンチアに向かったときのことを語る。そのとき彼らの全員が、300フィートの大きさの1機のUFOが彼らの前方で瞬く間に10,000フィート垂直に上昇したのを目撃した。それはレーダーにも映った。彼はこの出来事を詳細な文書にまとめており、この証言の後にその重要な文書がある。

GB: グラハム・ベッシューン中佐

SG: スティーブン・グリア博士

[この事例は6.5節にも記述されている。これは1951年2月10日に起きた。SG]

GB: 私の名前はグラハム・ベッシュンだ。私は中佐、海軍の退役パイロットだ。私はパイロットを訓練する正規の海軍プログラムを履修した。私は 1943 年にペンサコラの航空アカデミーを卒業した。そしてもちろん、すべての海軍パイロットは航法士の訓練を受ける。これはこれから我々がここで議論しようとしていることを話すときに、とても重要だ。というのは、我々はすべての星座や、そのような種類の物事を知らなければならなかったからだ。私は、かれこれ 13 年間は星々とともに地球の周りを航行した。1943 年にペンサコラを卒業すると、私は南大西洋に行き、対ドイツ潜水艦作戦に従事したが、これは徹夜飛行だった。我々の仕事は、すべて夜間の哨戒機の中で行なわれた。

私は 1950 年に航空輸送飛行隊に移された。私は二人の他の将校とともに、アイスランドのケブラビークに送られたが、行く前にワシントン D.C. で会合があった。アイスランドのケブラビーク上空で UFO 目撃が起きており、彼らを守るために部隊が必要だということだった。

その会合の中で、彼らはなぜ部隊を要請したか、何を彼らは目撃しているかについて、我々に説明があった。我々は、彼らが目撃しているその航空機の種類について、もっと詳しく説明できるかと訊ねた。彼らの説明は、それらがほとんど夜に目撃されているというものだった — 光を放つ丸い形の航空機。海軍航空実験センターから来ていた我々は、そこであらゆる実験を行なったが、その中にそんなものはないと知っていた。

それで私は彼らに、我々の政府はそれらが何であると言っているかと訊いた。彼らはこう言った。“それらは実験機、おそらく実験的なロシアの爆撃機だろうとあなたたちの政府は言った(笑い)”

飛行は、通常だと 10 時間かかる。だがこの夜に限って、風は 16 ノットの向かい風だった。ニューファンドランドのアルゼンチアまでおよそ 300 から 400 マイルだったと思うが、私は水平線下の水面に何かを見た。それは夜間に都市に近づいているような見え方だった。それはまるで周辺光のようで、まったく鮮明ではなかった。それは、もし夜間に大都市に近づいていたら見える景色と同じものだった。私は暫くそれを見つめた。時刻は 1 時頃だった。

ついに私は右座席にいたキングドンに、あれを見ろと言った。彼は私のために航路を確認していた。彼はそれを見たが、何であるかは分からなかった。我々はそれを解明できなかった。...そこには何もないはずだった。我々はすでに警備艦の上を通過してしまっていた。当時彼らは、アイスランドとニューファンドランドの間に 1 隻の警備艦を持っていた。警備艦は我々に最新の気象通報をしていた。天候は快晴だった。北極光の活動はなかった。それは気象通報の一部として伝えられる。また、我々は艦船の位置をプロットしたが、その海域には 1 隻もいなかった。それで管制に、もう一つ我々に定点を示して、我々が本当に航路を進んでいるかを調べてくれと言った。我々は流されているかもしれない、見ているのはラブラドルか、グリーンランドの一部かもしれないと考えた。したら彼は、そうじゃない、我々は正しい航路をとっていると言った。

こうして我々はそれを暫く見つめたが、我々はその右側に流されていた。機首は 222 度、225 度だった。高度は 10,000 フィートで、初めはそれから 40 マイル離れていた。我々がそれから 25 か 30 マイルまで来たとき、鮮明な光が見え、水面上にある模様があった。しかし、その模様から何が起きているかは分からなかった。おそらく海軍が何か海中から回収しているか、そんな類の秘密性の高いことをしているのだろうと我々は考えた。その模様は丸い形をしており、とても大きかった。

私は乗務主任に、もう一人の輸送指揮官であるアル・ジョウンズを呼んでくるように言った。彼らはアルゼンチアに着陸したいと思っていたからだ。乗客は31人で、我々はパイロットを含む2組の要人輸送隊と哨戒機パイロットたちを乗せていた。彼らが機の前方にやってきたとき、それらの光は水面上から消えた。水面上には何もなかった。これは約15マイルの地点だった。つまり、真っ暗闇だった。

今や私の後ろには航法士、無線士、そして機付長も立っていた — 操縦室はいっぱいだった。まったく突然に、我々は水面上にとても小さな黄色い光輪を見た。約15マイル離れていた。そして、それはすぐに10,000フィートまで上昇してきた — 瞬間だった。

[このUFOの運動と他の説明の類似性に留意されたい：それは1秒くらいで15マイルを移動した。SG]

私は、それが我々を貫通しようとしているのではないかと考えた。私は自動操縦を解除し機首を下げた。私はそれがこちらに向かってくる角度でその下を通過しようとしたのだ。

そしたら何が起きたか。私はその操作をしたわずかな時間に、それは我々の高度で目の前に現れ、操縦室の外はこの飛行物体以外に何も見えなくなった。私は、どの方向に進んだらよいか分からなくなった。そのとき突然、私は大騒ぎに気付いた。私は何の騒ぎか分からなかった。フレッド(キングドン)、一体これは何事か？と訊いた。彼は見回して言った。“我々の後ろで皆ひっくり返ってぶつかり合って、デッキに転がっている、ひどい状態だ”私が視線を戻したら、そこには何もなかった。そしたら彼は言った。“それはこちらの右方にある”今やそれは約1マイルの所にあった。それは前方約5マイルの位置に移動したように見え、そこでかなりの時間、我々と並んで飛行した。

その高度が我々より上でないことが初めて分かったのは、このときだ。それは我々より低い高度にあった。だがそれは水平線よりは上にあり、そこに物体の側面が見えていた。1個のドームが見え、物体の縁を色光が取り巻いていた。

我々はこれが友好的な遭遇であることを知った。彼らは我々がここにいることを知っていた。彼らは我々に逢いにやってきた。しかしそのとき我々は、アイスランド人が話していたことを我々に見せるために彼らがそうしたのだとは考えなかった。

こうして我々は、それを暫く見つめた。そしたら、アルが操縦を代わってくれと言った。私はアルと交替し、アルは自動操縦を解除してそれを追跡しようとした。そのとき我々は約60ノットの向かい風を受けており、対地速度はおそらく120、130ノットしかなかっただろう。だから彼はこの物体をあまり遠くまで追跡するつもりはなかった。しかし彼は追跡を開始した。

私は乗客がどんな反応を示しているかを見るため、また同乗している医師と話をするために、後方へ行くことにした。最初にその医師の所に行き、ドクター、我々が見たものをあなたは見ましたか？と訊いた。彼は、私の目を真っすぐに見ながら、ええ、あれは空飛ぶ円盤でした、と言った。そして、私はこんなものは信じていませんから、それは見ませんでした、と言った。彼が言っていること

を理解するのに、私は数秒かかった。彼は一人の精神科医として、あの種の物事を信じることができなかつたのだ。それで私は再び機首に戻り、アル、何をしてもいいが、我々が見たものを誰にも何も話すな、彼らは我々が地上に降りるとすぐに我々を拘留するだろう、と言った。彼は、もう遅い、たった今ガンダー管制を呼んで、彼らがこれをレーダーで捉えていたか、訊いたところだ、と言った。この話が漏れたのは、そういうわけだった。

我々がアルゼンチアに着陸すると、空軍がそこにおり、我々を訊問した。訊問したその大尉は、実によい仕事をした。だがこの種の遭遇に関する限り、彼が誰かを訊問したのはこれが最初ではなかつた。彼はよい報告書を作成し、それはワシントン D.C.にある空軍司令部に送られた。

最初、その色は黄色だった。それが近づいてきたとき、なぜ私は異なった色を見たのか、その後私はくわしい人たちからその理由を教えてもらった。その色は縁に並んでいた。それは黄色からオレンジ、さらに燃えるような赤へ、次にほとんど紫色に変わった。彼らは、それは費やされたエネルギーの量に関係していると言った。それはいわばパワーに関係していた。その周りは霧がかかっているようだった。それはプラズマの霞かそんな性質の何かだった。

我々がその飛行物体の大きさを訊かれたとき、私には 300 フィートという数字が浮かんだ。私は、1991 年に公文書保管所からその報告書を入手するまで、他の誰の報告書も見ることがなかつたが、皆それを直径 250 ないし 350 フィートと言っていた。私がおの人々と話したとき、彼らは実際にそれくらいの大きさがあつたと言った。それが我々を離れたときの速度に関して言えば、時速 1,000 ないし 2,000 マイルと推定された。その報告書を見たとき、アル・ジョウンズは時速 1,800 マイルと推定していた。私のは 1,000 マイルだった。1,500 マイルという数字もあつたが、同じ範囲内だった。私がおそれまで見たことがなかつたレーダー報告書では、時速 1,800 マイルだつたことが分かつた。

それほど速く移動する航空機を、我々は持っていなかつた。もちろん私は、海軍飛行実験センターにいたことがあつた。テストパイロットの訓練所があつたのはそこだ。そこで、我々は航空機の極秘実験を行なつたのだ。私が知っている限り、あれに近い速度や丸い形を持った航空機はどこにもなかつた。

この飛行物体は、あの短時間(1 秒くらい)に 15 マイルを移動した。それがどれほどの速度で我々に向かつてきたか、計算できるだろう。そして次には、我々の直前でブレーキを踏んだようなものだ。直径 300 フィートのものが目前にあれば、操縦席の窓からはほとんど何も見えないだろう。

私は、ある本を書いている磁気技術者と数年間連絡をとり続けてきた。彼はすでに(航空機に磁気的な影響を及ぼした UFO についての) 100 件のパイロット報告書に通じていた。私は、起きたことのすべてを彼に詳細に伝えた。

私が自動操縦に戻したとき、パネル中央にあつた磁気コンパスは、行きつ戻りつ振れていた。私はフレッドに、これを見たかと言った。彼は私に、その飛行物体が近くにいたときそれを見なかつたのか、それは回転していた、と言った。次に我々は他のコンパスも見た。この時点でその飛行物体は、我々からおそらく 5 マイルは離れていた。我々は自動方向探知器(Bird Dogs)と呼ぶものを持っていた。それらは低周波の電波装置で、ある局に周波数を合わせると、それを指し示す。これら

の二つの自動方向探知器は、その飛行物体を指していた。あと二つのコンパスがあった。我々は翼の中に一つの遠隔コンパスを持っていた。それは反応していた。その飛行機には全部で五つの異なる方向のジャイロがあったが、そのうちの三つが正常に作動していなかった。

私はそれがレーダーで追跡されたと聞かされた。彼は、そのレーダー報告書はワシントン D.C.の空軍司令部に送られたはずだと言った。それは、通常そこからライト-パターソン空軍基地に行く。だが、私の上司はワトソン大佐(*空軍航空技術情報センター所長)に話した後で、その報告書をライト-パターソン空軍基地記録保管所のブルーブック計画の中で見つけ、その速度が 1,800 マイルだったことを確認した。それをどこで見つけたのかと私は訊いた。それはあるレーダー報告書の中にあったと彼は言った。だから、彼らがそのレーダー報告書をマイクロフィルムに撮る前に、何か起きたのだ。なぜなら、私が持っているマイクロフィルムの記録は記録保管所から入手したものだからだ(そしてレーダー報告書は消えていた)。私はライト-パターソン空軍基地にいる数年来の友人から、次のように言われた。彼らはスティーブン・スピルバーグに、このマイクロフィルム撮影を許可していた。つまり、第三種接近遭遇のためのブルーブック記録、その他の資料だ。だから彼(スピルバーグ)は相当高いレベルの機密取扱許可を持っていた。彼は、その...あなたがご存じの統制グループが関係する人々の一部と関わりを持っていたはずだ。

もう一人の輸送指揮官、その居所を私は何年も前に見つけていたが、彼はこの集団に属しており、決して話そうとしなかった。彼の退役後、1996 年に私は彼と再び連絡をとり、彼が住んでいた所に飛んだ。そこで私は、これから我々はそのことをテープに録音しながら議論するのだと言った。この経緯はそういうことだった。私の報告書に彼が述べたことが数頁にわたり書いてある。彼が見て描いた図もそこにある。それは驚くほどよく一致していた。

[我々はこの報告書の完全版を、他のパイロットによる事件の確証とともに持っている。SG]

私が見つけた文書[政府文書を見よ]は、空軍が集約した公式文書で、それは元々グラッジ計画のもとで保管されていた。

[グラッジ計画に関係していた空軍中佐チャールズ・ブラウンの証言を見よ。SG]

しかし、その扉にはトウインクル計画とあり、そこに何らかの理由で省かざるを得なかった多数の報告書が保管されていた。

[ブラウン中佐はその証言の中で、本当の機密事例はグラッジの外の別の計画で取り扱われ、彼はそれに接近できなかつたと確証していることに留意されたい。SG]

記録保管所によれば 18 頁あった。だがそれはそのときだけのことだった。アイゼンハワーの後任マコーミック提督が NATO(北大西洋条約機構)軍司令長官だった。直ちに彼の補佐官が私に接近してきた。誰もがこの出来事を知っているようだった。たとえばラドフォード提督、彼は初代統合参謀本部議長になったが、彼の補佐官がそれを知っていた。なぜなら、彼が私にそれを話したからだ。だから、これについて知っていた人々は相当いた。その事件が実際には公式のものとされず、実際にどの本にも出てこないことを知ったのは、これらを通してだ。

[コース大佐と他の人々は、きわめて機密性の高い事柄は口伝で“頭脳から頭脳へ”と伝えられると述べていることに留意されたい。SG]

その後、5月に私の家に一人の情報当局者が来た。彼は私に数枚の絵を見せた。私が初めて見るものだった。それと同じように見える絵は、まったく一枚もなかった。そこには直径100フィートの絵が一枚あった。それはあまり損傷を受けていないようだった。

[ここで彼は、損傷の程度について言及することで、回収または墜落物体の写真があったことを暗に述べている。SG]

それで私は彼に多くの質問をした。この報告書に何が起きたかと私は訊いた。そしたら彼は私に、何が起きたかを正確に語った。一つの委員会があると彼は言った。彼の言葉はこうだった：“合同情報委員会がある。…彼らが報告書の行き先を決める”

彼は何度も私の所にやってきて、何枚もの写真を見せた。その中には、我々がフー・ファイターと呼ぶかもしれないものや、丸くて輝く円盤状のものが多数あった。

キンブルという海軍長官がいた。…私は将官部の要人輸送指揮官と呼ばれる立場にあり、ワシントン D.C.からの高官や民間人のほとんどを輸送した。これらの当局者の何人かは、彼らが見たものを私に語った。たとえば、太平洋上で一緒に飛んだ2機の飛行物体があった。また1機の輝く円盤が、彼らのうちの1機の脇に近づき、暫く一緒に飛行し、彼らの周囲を飛び回った。

我々の任務は、ライト・パターソン司令部の管轄下に入った。そこは中枢部だった。そこではパイロットたちの会合が持たれた。これらの種類のあらゆる会合が持たれた。私は毎月1、2回は会合に出かけた。さらに年に2、3回のセミナーがあった。…それは約1週間だった。

あるとき、我々の飛行機をとめていた駐機場にいたときのことだが、そこは格納庫のように見えるものから遠くなかった。それは波形の金属格納庫のようだった。それはほとんどいつも開いていた。上司と私とその脇を通るたびに、上司は私がそこまで行ってその金属壁の背後に何かがあるか見たいと思わないことを不思議がった。彼が私に言ったことの大筋は、その背後には1機の宇宙機(UFO)があるということだった。そこにはETの遺体があるとも言った。それを私に言ったのは、彼が最初ではなかった。

彼はフォーニイ提督との議論から、フォーニイ提督(彼は我々のミサイル部門の最高責任者でホワイトサンズにいたことがあった)が、他の惑星からの宇宙機が我々を訪問していると確信していることを知った。彼はまた、ワトソン大佐との議論も続けた。彼はワトソン大佐から、これらの多くのファイルを見る許可を得た。そこに何かがあるかを彼に話したのは大佐だった。彼は、彼らがそこに持っていたもの[ET宇宙機と遺体]を見た。だから、今述べたように私が関心を持たないことを理解できなかったのだ。私はこう言った。“実際のところ、私は何の関心も持っていません、私はそれについて話すことは決してできないでしょうから”これまで私が見てきたことから、私はそれらが存在することを、今なら知っている。ライト・パターソン空軍基地には1機の宇宙機があった。それはどこかに墜

落した宇宙機だった。

SG: 地球外のものでしたか？

GB: 地球外宇宙機、まさにそのとおりだ。また彼が話していた遺体は地球外知性体だった。

私は自分が見たものを確信している。私が知る限り、あの大きさのものなど、我々は持っていない。それは他の惑星からのもので、この地球のものでないことは確かだ。当時の我々の技術では、あのような航空機を持つことはできなかった。私は確信している。

私は最高機密取扱許可を持っていた。だが、ここで我々はこの知る必要性に立ち戻る。私が知らなくてもよいある事柄について、他の人々が知る必要性を持っていた多くの事例を私は知っている。だから、もし我々が他の惑星から来た何かを持っているとしたら、磁気技術者であれ宇宙航空技術者であれ、その他の何者であれ、これらの何人かがそれに関与するだろうことは確かだ。

コーソの本に関しては、同種のものかもしれない何かに私も巻き込まれていた。このような物体を逆行分析 (back-engineer) するために、彼らは我々に、これと似た装置を製造する分野で誰か請負業者はいないかと訊いていた。それは我々の技術ではないと彼が言ってから、我々はそれについて考えることは決してなかった。

その後、1960年代になって、我々は新居に引っ越したばかりだった。息子は8歳くらいだった。我々は裏庭で芝を植えていた。私は汚れを落とすために家に入った。そしたら息子が入ってきて、お父さん、お母さんが外に出てきてと言ってる、と言うんだ。どうして？と私は訊いた。彼は空飛ぶ円盤が見えると言った。息子は空飛ぶ円盤について一体何を知っているんだ？と私はひそかに思った。それで外に出たら、そこに妻が立っていて、上空の何かを指さしていた。それが何だったか、あなたをご存じだろう。それは1機の宇宙船だった。それを取り囲んで複数の小さな宇宙機がいた。私は双眼鏡を取りに家に戻った。これをもっと近くでよく見たかったからだ。私が戻ると、宇宙船そのものは去っていたが、運よく小さい宇宙機を2、3機見ることができた。皆家に戻ったとき、私は妻にこう訊いた。“空飛ぶ円盤のことをどうして知ったのかね” なぜなら、我々は我々の遭遇について妻にさえ話してはならなかったからだ。1951年のことだった。

上級航空管制官 エンリケ・コルベックの証言

Testimony of Mr. Enrique Kolbeck, Senior Air Traffic Controller

2000年10月

エンリケ・コルベック氏はメキシコシティー国際空港の上級航空管制官だ。証言の中で彼は、空港で肉眼とレーダーにより見られる、頻繁な UFO 目撃について語る。計測されたそれらの速度は途方もないもので、ほとんど瞬間的にU字形の方向転換をする。空港の140人の航空管制官のうち、50人以上がこの現象を見ていると彼は推定している。ある目撃では、着陸しつつある通常の飛行機の周囲を動き回る赤と白の同じ光体群を、32人の管制官が肉眼で同時に見た。メキシコにある4つの航空管制センターのすべてが、これらの UFO について報告している。

私の名前はエンリケ・コルベックだ。私はメキシコシティー国際空港の航空管制官で、25年間管制官をしている。

メキシコ管制センターから、我々はこれまで多くの UFO 現象を目撃してきた。それらは突然現れ、進入する飛行機の航空路を頻りに横切る。我々はそれらをレーダーで見ると、時々パイロットたちが、彼らが見たものの情報を我々に提供する。我々がこの種の現象に対して、何の規制も行わないのは当然だ。パイロットたちは、彼らの航空機の周りの空域を規制することに対して、無条件で不安を感じる。

空飛ぶ円盤。過去にそれを聞くのは、とても奇妙なことだった。今日、それは我々にとり、とても深刻だ。特にエアロメキシコ 109 便の事件の後ではそうだ。その UFO は、市のとても重要なある建物の上空を飛行していた。それはメキシコシティー空港 5 番滑走路の最終航路上に位置している。

この便はグアダハラハラからメキシコシティーに入ってきており、私はこの航空機の管制を別の管制官に引き継いだ。それは 5 番滑走路に正確に着陸進入を始めていた。我々は画面上に二つの物体を見た。二つの飛行物体は、そのときその航空機にとっても接近していた。だがそれは突然、しかも瞬時に消えた。我々はレーダーでかれこれ 30 秒は捕捉していた。そしてパイロットは何の連絡もしない。後で我々は、この航空機が最後の旋回で主着陸装置をこの種の物体に衝突させていたことを知った。

その建物上空を飛行していたときの現象を見ていた人々から、我々が 2 時間後に情報を受け取ったことは重要だ。そのとき我々は、この物体と衝突した飛行機について話を聞いた。それは我々にとり、きわめて危険なことだった。なぜなら、我々は我々の空域を飛んでいるあらゆる物体について知る責任を負っているからだ。

我々には、最終航路にきわめて接近して飛行する UFO についての、多くの報告書がある。それは最終着陸進入路から 4, 5 マイル以内だ。それはまさしく現実であり、レーダーにも映る。我々はこれらの遭遇についての詳細な情報を持っている。エアロメキシコ機の遭遇が起きた週に、我々はパイロットたちから、別々のときに約 7 件の報告を受けた。これらの UFO が我々のレーダー画面に現れ、とびとびの点のように映るのは、重大なことなのだ。

それらはとてつもない高速で移動する。人間の航空機 — ボーイング 727, ボーイング 757 — は違った動きをする。もちろん、これらの速度は UFO とはまったく異なる。肉眼やレーダー画面で見ると、UFO は 1 秒間に 20 から 30 マイル移動する。それはまさしく現実のことだ。そして、当然それは人間の他の航空機のようにではない。UFO は突然に、それも 1 秒かその半分のうちに、ほとんど直角に旋回する。

この種の現象が起きるのは、1 日に 12 回のときもあれば、1 ヶ月または 1 週間に 12 回のときもある — これらの UFO がいつ現れるかは分からない。

また、UFO はきわめて素早く垂直に上昇する。これはもちろん、軍用機とさえも完全に異なる。

だがこれらの現象は、飛行計画を持たずにやってくる。それらについては、誰も何も知らない。それらは自分の好きなきに現れる。パイロットたちは、ときに恐怖を感じ、すぐに情報を要求してくる。多くのパイロットたちは、目撃したときに彼らの航空電子計器に発生する諸問題について、しばしば報告する。これらの UFO は、彼らの航空機から 2 ないし 5 マイル以内に近づく。

私は 7 年間、これらの UFO をレーダーで見えてきた。多くの目撃が、メキシコシティの外側にある火山の近くで報告された。

あるときその火山の近くで、一人のメキシコ人パイロットが、これらの 3 個の物体が彼の機の周りを飛ぶという体験をした。そのうちの 2 個は航空機の翼の上であり、他の 1 個は彼の正面にあった。我々はこの情報をレーダーで正式に記録した。

メキシコセンターには約 140 人の管制官がいる。私が思うに、少なくとも 50 人はこれまでレーダー画面でそれらの物体を目撃し、また肉眼による UFO との遭遇を経験していた。ある事例では、2 機の航空機が北から飛んできたときに、そのうちの 1 機から報告があった。1 個の赤色物体が機体のそばをととても速く通過したということだった。その後ろを飛んでいた別の航空機からも、それを報告してきた。それから 1 分以内に、我々はそれを管制塔から見た — 多くの人々が、この現象を観察するために窓辺に駆け寄ってきた。1 個は赤く、他の 2 個は白かった。およそ 32 人の管制官がこの同じ UFO を目撃した。

メキシコには 4 カ所の管制センターと 52 の空港がある。4 カ所の管制センターで、この種の現象のレーダー追跡に関する情報を得ている。4 カ所全部でだ。マサトランで我々が得た情報では、約 15 年前に、2 機の商用便ともう 1 機の自家用機が、米国との国境にきわめて近いマサトラン空域を飛んでいた。その周辺で飛行している 4、5 機の UFO があった。パイロットたちはひどく恐がり、ついにマサトランに着陸することを決めた。彼らはこの空域が安全だとは考えなかった。

我々のメキシコ当局は、パイロットや管制官たちによる国内の UFO について、多くの情報を発表してきた。

あなたたちの国(米国)は、これらの UFO に関する情報を持っているはずだ。あなたたちの国では、多くの管制官がパイロットによる報告とパイロットによる目撃を持っているはずだ。私はそれを確信している。

もう一つの事例では、我々がレーダーで 40 マイル離れた所に 1 個検出しているその同じ時刻に、この婦人が自分のカメラで 1 個の UFO を撮影した。メテペクの近くで発生したこの目撃について、我々は様々な方面から情報を受けた。

その出来事の後で、我々にとても頻繁な目撃が起きた — 1 週間にわたり連日発生した。パイロットの何人かは、それらの物体すなわち空飛ぶ円盤が、火山の内側に降りていくのを見ている。

世界中の他のレーダーとまったく同様に、我々のレーダーは光を検出しない。それは飛んでいる固体の物体のみを検出する。それはとても重要だ。パイロットから情報があるときに、管制官や路

上を歩いている人々は、同じ時刻に同じ物体を見ている。これは現実の何かであることは間違いない。それはまさしく現実だ。

実際、私や私のような専門家にとり重要なことは、それらが交通に関わるということだ。あるとき我々は、12ないし15個のUFOを同時にレーダーで記録した！市にも空港にもとても近かった。

パイロットたちの報告では、これらの物体の大きさは約100メートルかそれ以上だ。サンタクルスからメキシコシティに向かっていた1機のメキシカーナ便の報告を、私は覚えている。彼らは1個の巨大なUFOを目撃した。その後ろを約40マイル離れて飛んでいた別のパイロットには、その同じ物体が見えている。彼らはその物体がいかに巨大だったかを語っている。その2機が40マイル離れていたことを考えると、その物体は巨大だった。

リチャード・ヘインズ博士の証言

Testimony of Dr. Richard Haines

2000年11月

ヘインズ博士は1960年代中頃からNASAの研究専門科学者だ。彼は他の計画とともに、ジェミニ、アポロ、スカイラブ計画のために働いてきた。ヘインズ博士は30年以上にわたり、説明がつかない空中現象の肉眼とレーダーによる3,000を超える異常目撃事例を集めてきた。彼によれば、外国の数多くの事例も文献にあり、それらは米国の報告と性質がとてもよく似ている。米国でのある事例は、一人のB-52機長が博士に語ったものだ。その機長と彼の乗組員たちは、5個の球体が同機の各翼端のすぐ外側、後方、頭上、および下に現れ、同機と同じ航行高度と速度を保ちながら一緒に飛行するという体験をした。機長は回避行動によりそれらの球体を振り切ろうとしたが、各球体は正確な位置を保ち続けた。パイロットたちがUFOの透明な丸屋根の中を覗き、その内部を詳細に見ることができた他の事例も幾つかある。

... 多くの事例で、空軍迎撃機がこの現象を確認または調査するために発進してきた。そしてパイロットたちはレーダーによる情報を求める。レーダーに何か映っているか？私のエアキャット・ファイルには十分にそれを肯定する明瞭な、実に多くのレーダー報告事例がある。

エアキャット(AIRCAT)とはエア・カタログ(Air Catalogue)を意味している。これは、私がこれまでほぼ30年間にわたり、商用機パイロット、軍用機パイロット、自家用機パイロット、テストパイロットたちから集めた、やや大規模な資料集だ。

私は3,000以上の事例を持っている。私はパイロットの何人かに面談を行なったときの録音テープやビデオテープを持っている。私はFAA(連邦航空局)のテープも持っているが、それは一人の市民として情報公開法要求により入手したものだ。だから、このデータベースはとても大きい。完全さを欠いた事例は、通常パイロットたちがすべてを話すことをためらった結果だ。もし彼らが、たとえば商用便のパイロットだった場合、雇用の保障や周囲からの嘲笑を懸念するだろう...

我々はある興味深い事例を持っているが、その中では数機の航空機、偏位したコンパス群、無線周波数の干渉、レーダーなどが関係している。ここには豊富なデータがある。そしてこれは私を

驚かすことなのだが、私の物理学の同僚たちは、何かの理由でこの主題に興味を持たない...

現象の背後に何らかの知性的な手引きがあるのか？これは一つの科学的問題、価値ある科学的問題だ。そして今まさにそのデータ分析を行なっている私にとり、それはあると考えられる。私は、現象の背後に高度な知性と統制があることを示すデータを益々得つつある...

これは、あるB-52機長が以前私に語ったことだ。彼は製造されたばかりのB-52の前部左座席に搭乗し、カンザス州ウィチタから飛行していた。同機はそこでボーイング社により製造されたのだ。彼の任務は、米国南西部のある基地に、その航空機を軽武装乗組員とともに輸送することだった。その日はよく晴れわたった快晴日で、空は美しく輝いていた。そのとき、1個の物体が同機の左翼端外側に現れた — 丸い球体、直径4,5フィート、模様なし、鋸止めなし、継ぎ目なし、無印、米空軍の記章なし。彼の副パイロットが言った。機長、右翼端外側に1個の物体があります。彼はその様子を描写したが、それは形、大きさ、その他すべてが左翼の物体と同一だった。こうして、その航空機と一緒に航行高度と速度を保った2個の物体が、そこに出現する。

よろしい、話は長いが手短かに話そう。彼は私にこう語った。それぞれ1個の物体が同機の後、上、下、両翼端の外側に現れた。全部で5個だ。私は彼に、それでどうしたかと訊いた。私は操縦ハンドルにある自動操縦ボタンを押し、回避行動に移ったと彼は言った。それはこれらの物体を振り切ろうとするときの、いわば標準的な操作手順だ。もしそれらが気球だったなら、長くは我々と一緒に飛べなかった。もしそれらが鳥だったなら、どうしてこんな高度で、しかも時速300から400マイルで飛んでいたか、などなど。該当しないものを消去していく彼のやり方は、パイロットとしての模範的行動というものだ。それらの物体は、彼の航空機がどんなことをしても完全に配置を保ったまま、同機と一緒に飛び続けた。それは位置保持(station keeping)と呼ばれる。こんなことをしているうちに、同機は燃料を使い果たしつつあり、まだやるべき任務も残っていた。それで彼はパワーを増して航行高度まで同機を上昇させ、自動操縦に戻した。それからさらに15分ほど経って、それらの物体は現れたときは正確に逆の順序で同機から離れていった。知性を持った振る舞いだった。私にとり、それはデタラメには思えなかった。それは知性を持っていた。それは意図を持っていた...

ここで懐疑論者は、次のように言うだろう。これらはすべて幻視だったと。私はそれに賛成できない。幻視であるはずがない。これらすべての事実、あの操縦室の3組の目、レーダーによる確認、地上レーダーによる確認、そして近くにいた別の航空機...

パイロットたちは、専門家としてその経歴を賭けている。だからそれらを報告しない方が容易であり、また通常は報告しない。私の推定では、名乗り出て非公開もしくは公開報告書を書く一人のパイロットがいれば、そうしないパイロットは20人、30人いる。

私のエアキャット・ファイルを精査した結果、私は1960年代まで遡る多くの事例で、空軍がこの主題になお濃密に関わっていたことを知った。そこでは空軍が民間機に介入し、訊問する。軍用機パイロットばかりでなく、民間機にさえも介入する。空軍は訊問をこう締めくくる：あなたたちが見たことを誰にも言うな...

かなり頻繁に、上部や底部、またはその両方に少し盛り上がりが見られ、何人かはそれを何らか

の丸屋根あるいは操縦室だと表現する。多くの場合、それらは透明だ。そして窓を通して内部が見える。パイロットがあなたの目を正視し、これを高い高度で 100 ヤードの距離で見たと語る様子は、非常に興味をそそられる。これは、私の感情を強く揺らすと言わなければならない。...

米国海軍 フランクリン・カーター氏の証言
Testimony of Mr. Franklin Carter, US Navy
2000 年 12 月

カーター氏は 1950 年代と 1960 年代に電子レーダー技術者として訓練を受けた。彼は、明瞭で疑い得ないレーダー捕捉により、時速 3,400 マイルという速度を目撃した事件について語る。1957 年から 1958 年にかけて、異常な速度で移動する物体を目撃した他のレーダー操作員もいた。当時、人間の最速航空機は時速 1,100 マイルだった。ある事例では、一人の空軍レーダー操作員が、これらの UFO の 1 機を 300 から 400 マイルの宇宙空間まで追跡した。これらの報告が繰り返しレーダー製造業者のゼネラルエレクトリック社に入り続けたために、同社の技術者たちが出てきてその回路を改造し、レーダーが 12 から 15 マイルの高度までしか追跡できないようにしてしまった。

... だが、ある夜に我々はとても異常な経験をした。私はレーダー専門家で、その任務は艦船搭載レーダーの保守だった。...

ある夜、私は午前零時に勤務を終え、就寝した。そしたら電話があり、レーダーを修理するように言われた。何か不具合が発生していた。私は CIC (combat information center; 戦闘情報センター) に行き、どこがおかしいかと彼らに訊いた。彼らは、我々はこの場で時速 3,400 マイルで飛ぶ 1 機の航空機を追跡していると言った。私は、それはどこかおかしいと言った。私はそのレーダーを切り離し、予備レーダーをつないで稼働させた。私はすべての試験を行なうことに取りかかった。すべてが正常だった。私はレーダーをチェックするときに行なう準備試験を全部やり終えたが、すべてが何の問題もなかった。

彼らは私に、ずっと星形捕捉 (stellar contact) だったと言った — これは大きさが半インチより大きいブリップ (*レーダー画面上の輝点) で、目標がきわめて巨大か、すぐ近くにあることを示す。レーダーは、毎回の走査でそれを追跡した。何か異常があったときに起きることは、走査しても何も映らないか、2 回に 1 回あるいは 10 回に 1 回、とにかく輝点は消える。だがこの輝点は、すべての走査ではっきりと映った。これは物体が固体の目標であることを示している。...

ある夜のことだったが、私はプロットボード (plot board; 位置測定板) に向かっていた。3, 4 ヶ月後だったと思う。そのとき、またこの捕捉が発生した。2 回目の走査で、この物体が実際に移動していることが分かった。それは 360 マイルスケールで 3, 4 インチ移動していた。それははっきりしていたので、私はそれをプロットした。時速 3,400 マイルだった。我々はそのときも報告しなかった。だが、彼らはこう言った。何も不都合はない、これは戻ってきた我々の友人だ。我々はこのことで騒ぎ立てなかったが、それが何であるか知りたかったことは確かだ: 時速 3,400 マイル、1957 年に! 我々が持っていたものでそれに最も近い物体は、時速約 1,100 マイルだった。

この現象は、1957 年終わりから 1958 年 5 月まで発生し続けた。それは少なくとも 3 回以上発生

した。レーダー操作員をしていた私のある友人は、私に昨夜あの速い物体の一つがまた現れたと言った。起きるのはいつも夜だった...

我々は、それらを時速 3,400 マイルで追跡した。彼はこう言った:興味深いことは我々がそれを 300 ないし 400 マイルの宇宙空間まで追跡したことだ。彼はこうも言った:我々はゼネラルエレクトリック(GE 社)にそのシステムは誰がつくったのかと苦情を言った。我々はこれらの出来事を報告し続け、GE 社は我々に、そんな報告はあり得ないと言い続けた。それで我々はこう言った。我々は報告を続ける、これは事実だ。そしたら彼らがやってきて、実際に画面の映像を撮り、それを持ち帰ってそこに映ったものを分析した。それから彼らは戻ってきて、探査距離が 12 から 15 マイルになるようにレーダーに手を加えた。彼らはこう言った。その距離があれば、どんな弾道ミサイルでも大丈夫だろう。あなたたちはこれ以上見る必要はない。こうして彼らは受信機に制限をかけ、12 から 15 マイルの宇宙空間までしか見えないようにしてしまった。彼の名前はデイク・ウォリスと言った...

これらの UFO は私の想像の産物だと人々が主張するなら、私はこう言う。“私はすごくでかい E.T.(electronics technician) だった。私は自分のレーダーのことは知っていた。当時それは私の恋人だった。私はそのシステムを知っており、それらはどこも悪くなかった” 我々は現実の捕捉を追跡していたのだと私は知っている。彼らが走り兎(running rabbit; 近くにあるレーダーによる干渉)と呼ぶものと、彼らが我々に与えるすべてのテスト用国籍不明機の違いを、私は知っている。

1956 年と 57 年に米国が、たとえ実験機にせよ、時速 3,400 マイルで何度も飛ぶことのできる航空機を持っていたとはとうてい信じられない。

彼らは我々が見ていたことについて、誰にも知られたくなかった。これが隠蔽の始まりだと私は考えている。こうしてそれは手に負えなくなった。

だが、今日の社会からそれを隠し続けている人々は、米国人だけだということを私は知っている。他の誰もがそれを知っており、受け入れている。そもそも英国と米国以外のすべての政府は、それを受け入れている。

これが続いているのを見ると、私個人としてとても苛立つ。

我々が対話しなければならない諸文明が存在することを認識するのは、重要なことだ。人間としての進化の中で、我々はそのことを認識する段階に至ったのだ。だから、私を動揺させるのは、もしこの秘密のすべてを保持し、あなた[SG]が唱導し私が強く確信するところの、いかなる外交的手順をも打ち立てることを拒否するなら、米国がこの分野で世界の三流国になるだろうということだ。なぜなら、彼らはそこにいるからだ。他国の人々は彼らを認めており、自分たちと平和的に話し合いたいと考えているその人々[ETs]と対話しようとしている。人々が正気に戻り、米国民からこの問題を隠すのを止めることを、私は望んでいる...

私は、友人が軍で目撃した事例も調査した。我々は仕事で 7, 8 年間互いに知った間柄だった。彼は私が UFO について興味を持っていることなど、何も知らなかった。私も彼がある日目撃報告書を作成するまで、彼が UFO について知っていたことを知らなかった。私は彼を電話で呼び出し、そ

のことを話した。彼は空軍中尉のときに目撃したことについて語った。彼は RB-36(*戦略偵察機)の航法士だった。同機には大きなカメラが装備してあり、1950年代には秘密の写真撮影をすべてこれでこなしていた。彼はこれらの飛行機のうちの一機の航法士であり、それには22人が乗り組んでいた。彼らはノースダコタ上空にいた。誰かが尾部の銃座から、左翼の上を見ろと言ってきた。そのときそこに — 彼らは左翼から100ヤードと推定した — この100フィートの円盤があった。これはきわめてはっきりと見えた。彼らはレーダー管制塔に連絡したが、それはレーダーにも映っていた。皆立ち上がってそこに行き、それを撮影した。彼らにはカメラが与えられていた。さて、これは機密にされるべき事項だ。彼らには35ミリカメラが与えられていたが、UFOを見たときに報告書をどう埋めるかが告げられていた。22人の乗組員は立ち上がって窓の外を見、この物体を5、6分間にわたり見た。それからその物体は離れていった...

興味深いことは、彼が地上に降り立ったとき、空軍のグループがそこにいたことだった。彼らは乗組員たちに事情聴取を行ない、12年間はこれについて話すなと告げた。彼らは機密保全誓約をさせられた。それから1週間後にワシントンから一団がやってきて、乗組員たちに事情聴取を行ない、機密保全誓約を念押しした。彼らはカメラ、フィルムなど、すべてを押収した。彼が空軍を除隊して予備役大佐になったとき、彼らは再び機密保全誓約書に署名したことを念押しした。彼の名前はジム・ロイドだ。

航空会社パイロット ニール・ダニエルズ氏の証言

Testimony of Mr. Neil Daniels, Airline Pilot

2000年11月

ダニエルズ氏は59年間にわたり30,000時間以上の飛行経験を持つパイロットだ。彼は空軍に入り、B-17パイロットとして29回の戦闘任務を生き抜いた。空軍を去った後、彼はユナイテッド航空に35年間勤務した。彼は1977年3月に、サンフランシスコからボストンに向かう商用便に搭乗したときのことを語る。飛行機が自動操縦になっていたとき、機体が自然に左に傾いた。彼は窓の外を眺めてキラキラ輝く光体に気付いた。第一副パイロットと第二副パイロットもそれを見た。彼らは三つのコンパスすべてが異なる読みを示していることに当惑した。

... 私が経験したただ1回を目撃は、1977年3月に起きた。私はサンフランシスコからボストンに向かうDC-10機を操縦していた。それはユナイテッド94便だった。我々は高度37,000フィートで、バッファローとアルバニーのほぼ中間地点にいた。下には霧が広がっており、夜の暗闇だった。そのとき自動操縦になっていた飛行機が、突然15度左に回転を始めた。当然私は窓から外を見、この輝く光体を目撃した。

第一副パイロットがそれを見、第二副パイロットは座席から立ち上がってそれを見た。何が起きたかとボストンの航空管制が訊いたのはそのときだ。我々は、それが何であるか分かったら呼ぶと彼らに言った。その頃第一副パイロットは、自動操縦解放ボタンを押し、手動操縦に戻した。私が窓から外を見ていると、我々が見たこの物体は、とても速い動きで飛行機の左側から後方へと消えた。この出来事のすべてが起きた時間は、おそらく3分かそれ以下だった...

さて、第一副パイロットの自動操縦装置は機長のコンパスに接続されているが、それは飛行機の

左翼端にある。そして何かの原因で磁力が妨害され、それが飛行機の針路を逸脱させたようだった。なぜなら、針路はコンパスと連動しているからだ。三つのコンパス全部が、異なる読みを示していた。これはきわめて異常なことだ。我々の結論は、その原因はそこで我々が見た球体、あの白色の光体が持つ、とてつもない磁力だということだった。

我々が自動操縦を解除し、第一副パイロットが飛行機を真っすぐに立て直したとき、コンパスを狂わせていた磁力の妨害は止み、すべてが正常に戻った。そして、その物体は我々の前から姿を消した。こうして、あらゆることが通常の状態に戻った...

これまで物体を目撃し、それを話したパイロットたちは解雇された。何人かは飛行から外され、変人扱いされたりした。だから、そのことについて私は何年もの間口をつぐんでいた。

かなりの数のパイロットたちが、彼らが遭遇した事件や目撃や起きたことについて私に語ってきた。その中の一つを挙げると、それは東海岸での目撃で、彼はそれを約 18 分間という長い時間見続けた。それはユナイテッド航空ではなく別の会社だったが、彼がそれを上司に報告すると、彼らはそれを調査した。そして政府はこう言ったのだ。あれは沼気(メタンガス)だった。高度 18,000 フィート、250 ノットで沼気とは！そこに何かがあった可能性を、実際に誰もが認めたくなかったのだ。

ロバート・ブラツィナ軍曹(退役)の証言 Testimony of Sgt. Robert Blazina (retired)

2000 年 8 月

ロバート・ブラツィナ氏は最高機密取扱許可を持つ退役軍人だ。彼は核兵器を世界中に輸送する任務に就いていた。彼はよく晴れた夜空で、信じ難い速度で真っすぐ上昇する UFO を自ら目撃した。別のときに彼は、1 機の 747 民間機とともに彼らのレーダーで 1 個の物体を見た。それは推定時速 10,000 マイルで彼らに向かってきた。

... 私の最初の UFO 体験は 1952 年に起きた。私はシアトルからサクラメントに戻る飛行をしていた。深夜の 10 時と 12 時の間だった。よく晴れた暗い夜だった。座席に座って前方を見ていた私は、正面にオレンジ色に輝く光体を見た...

我々はパワーを増し、それに接近し続けた。当然それは次第に大きくなり、我々はカリフォルニア州レディングの辺りまで来た。それは降下を始め、我々はそれを追った。我々は緩降下によりかなりの速度を得たが、それは明らかにサクラメントに向かい、同市を横切り、市庁舎の上空へと移動した。我々はまさしくそこに向かっていて、我々の航空機は最大速度に達していた。そのときそれは上昇に転じ、ものの 2 秒で真っすぐ上昇し、消えた...

1970 年代に空軍予備役だったときに、我々はドイツからの帰国途上にあっただ。我々は C-141 輸送機に搭乗し、そのときの高度は 35,000 フィートと少しだった。我々はデラウェア州ドーバーから約 2 時間の地点にいた。繰り返すが、空はよく晴れており、暗黒だった。我々はこの物体をレーダー画面で見た。我々は二つの表示器を積んでいた。パイロットが一つと航法士が一つだ。その物体はそれらの両方に映った。それは真っすぐにこちらの機首に向かってくるようだったが、視認はでき

なかった。次にそれは脇にそれた。それは何回か我々にちょっかいを出した。実際に一度などは、我々の機首に真っすぐ向かってきた。あまりに近かったので、パイロットは回避行動をとった。

同じ時刻に民間機 747 が 1 機我々の右方にあり、我々はそれを見ることができた。我々はそれと連絡をとり、パイロットたちは会話のやりとりをした。彼らは彼らのレーダーで我々が見ていたものと同じ物体を見ていたが、それが何であるか分からなかった。

航法士は何とか計算し、それ(UFO)が時速 10,000 マイル超で移動していると言った。...

米国海軍大尉(退役) フレデリック・マーシャル・フォックスの証言
Testimony of Lieutenant Frederick Marshall Fox, US Navy (retired)
2000 年 9 月

フォックス大尉は 1960 年代に海軍で攻撃機に乗っていた。彼は最高機密取扱許可を持ち、ベトナムで従軍した。彼はアメリカン航空で 33 年間勤めた退役パイロットだ。証言の中で彼は、JANAP 146E と呼ばれる印刷物があることを明かしている。その中の一節には、UFO 現象についてもし誰かに何かを口外したら、10,000 ドルの罰金と 10 年間の投獄を科される旨が述べられている。1964 年終わりのある事件では、彼が A4 スカイホークで飛行していたとき、まったく突然に、直径約 30 フィートの 1 個の黒い円盤型物体が彼の左側に現れた。彼の経歴の中では、他にも多くの出来事があり、円盤型や葉巻型の UFO を軍事施設上空で目撃した。またあるときは、二つの赤い光体が夜空を地平線から地平線へと 3 秒間で横切るのを見た。彼はこの主題についてまわる嘲笑のために、これらの出来事を他人に話すのを恐れていた。

... 私の海軍での階級は大尉だった。私は核兵器輸送パイロットだったので、最高機密取扱許可を持っていた。

海軍にいたとき、私は Code 4 PUBS, すなわち機密広報連絡将校 (confidential publications and communications officer) だった。JANAP 146E と呼ばれる印刷物があり、その中に、UFO 現象についてもし誰かに何かを口外したら、10,000 ドルの罰金と 10 年間の投獄を科される旨が述べられている一節がある。つまり、あなたが何を経験しようとも、許可なくしてはそれを持ったまま一般の人々の中に入って行ってはならないことを厳格に定めている。...

ある夜、私は一人で航空母艦から約 180 マイル離れており、高度は約 20,000 フィートだった。そのとき、1 個の物体が私の左側に現れた。それは何の敵意も持たなかった；それは、ただそこで私を観察していた。私もそれを少し観察し、とても安らいだ気持ちでそこを離れた。私は後に航空会社に勤務するまで、誰にも何も話さなかった。後で私は、私の同乗仲間が似たような出来事を経験したことを知った。

その物体は、おそらく直径が 30 フィートあった。... 思うにそれは、知性が詰まった円盤だった。それは空飛ぶ円盤の形をしていた。...

航空管制からは、そのことについて何の話もなかった。どの出来事についても、私は口を開くこと

はなかった。ピート・キリアンという、何冊かの UFO 書に出てくる機長がいた。彼は 1950 年代にアメリカン航空の機長で、確かに目撃をし、上院委員会の前で証言した。また、翼の外側にいた UFO の写真を実際に撮った別の機長もいた。もちろん、彼らは嘲笑の対象になった。私はそんなふうになりたくなかったので、FAA にも軍にも何も報告しなかった。多くのパイロットたちは、周囲からの圧力と嘲笑のために、このことに巻き込まれることを望まなかった。こうして秘密が保たれてきた。...

私には、第二次大戦中 B-24 のパイロットで、戦略諜報局 (Office of Strategic Services; OSS) に入った、とても個人的な友人がいる。彼は原爆が広島と長崎に投下された後に、最初に日本に行った人々の一人だった。彼はブルーブック計画第 13 項に関わったが、それは計画の中で極秘部分だったと私は信じている。当時、彼は空軍大尉だった。彼は今 70 歳台後半だが、今なお大尉として現役を続けている。彼が給料を貰っているかどうか私は知らないが、現役だとしたら、彼は任期の長さから三つ星将軍で、給料も貰って然るべきだ。彼が現役を続けている理由は、まさに彼が知っていることのために機密保全誓約を守り続ける必要があるということだ。私が海軍の最高機密取扱許可を持っており、また我々は二人とも同じものに強い関心を持っているが、機密保全誓約のために、彼が私に話そうとしない何かがある。

何かの理由で、政府または政府の諸機関は、彼らの基本方針を守る必要があると考えている。しかし、それは今や明らかに我々の基本方針ではない。この見え透いた欺瞞を終わらせるために、我々が行動すべきときがきたと私は考える。そして人類が適切に進化し、その進化の実りを確実に享受するのに必要な対策を講じるときが。

マッシモ・ポッジ機長の証言

Testimony of Captain Massimo Poggi

2000 年 9 月

ポッジ機長はアリタリア航空の熟練した 747 機の機長だ。彼は 1999 年 7 月にローマからサンパウロに向かって飛行していたときのことを語る。緑色に輝く光輪が一つ急上昇し、彼の 747 機の下 500 フィートをかすめ去った。その航空機は、この UFO が下を通り過ぎたとき、突然ジャンプした。この体験中に、非常にやかましい雑音が彼のヘッドホンに入ってきた。また、1992 年にイタリアのトリノ上空を飛行していたときには、雲との距離をほぼ一定に保って停止しているかに見える、楕円型の球体を遠くに見た。彼はこの UFO をスポッティングスコープ (*望遠鏡) で見た。副パイロットに少し話すために目を離し、もう一度見たときには、それは消えていた。

私の名前はマッシモ・ポッジだ。イタリアのアリタリア航空ボーイング 747 の熟練機長だ。1999 年 7 月 1 日、私はローマからブラジルのサンパウロに向かっていた。大西洋のほぼ真ん中まで来たとき、ヘッドホンに雑音が入った。それはどんどん大きくなり、ひどくやかましくなった。それから 2、3 秒のうちに、我々は緑色に輝く拡散した光輪の一つを見た。それは高速で我々の機首の下、航空機の下を通り過ぎた。それと同時に、747 機は突然ジャンプした。ただの 1 回ジャンプした。半秒後には、その雑音と光体は消えていた。それは我々の 11 時間の飛行中に会った唯一のジャンプだった。

この物体はきわめて近かった。我々は時速 930 キロメートル、約 500 ノットで飛んでいた。そして我々の下方で交差した物体は、それよりもずっと速かった - 1,000 ノットか、それ以上あった。

その物体は我々の下だったが、それほど下というわけでもなかった — おそらく 500 フィート。飛んでいる航空機にとってはほとんど衝突だった。

米国陸軍少尉 ボブ・ウォーカーの証言
Testimony of Lieutenant Bob Walker, US Army

2000 年 10 月

ウォーカー氏は陸軍少尉だった。第二次大戦後に、彼は NASA (当時は NACA) のある建物で、30 フィートの大きさを持つ 1 機の円盤型機体を見た。それは研究のためにドイツから運ばれたものだった。別のときに彼は、あるテレビ局のために航空機を操縦していた。そのとき、1 個の円盤型物体が西からやってきた。彼はカメラを持っていたので 12,000 フィートまで上昇し、その物体の写真を何枚か撮った。着陸するとすぐに彼は写真を現像し拡大した。その物体は両側に突端を持つ、フットボール型の銀色物体であることが判明した。彼のフィルムは、その後異常な状況の中で持ち去られた。証言の中で彼は、ケンタッキー州フォートキャンベルの近くで夜遅くにたまたま参加した夕食会で耳にしたことについても語る。そこで聞いた軍警察たちの会話は、近くの農家のそばに 1 機の空飛ぶ円盤が着陸し、軍警察たちがその地域を立ち入り禁止にしたというものだった。複数の生物がいたが、恐怖を覚えた農家の持ち主により、撃たれたということだった。

... 偶然に私は、管制塔からの奇妙な交信を拾った。管制塔は、1 個の円盤型物体が西から来たと言っていた。私はこう考えた。“これはめったにない機会だ、もし見られたら一目それをみてやろう” 推定するなら、物体は 50,000 (*フィート) より低くはない、もっと上だろうと考えた。

私は、管制塔がその地域上空に飛来したのに対して警戒を呼びかけた後で、彼らを呼んだ。管制塔は“当機は何をするつもりか？”と言った。私は“もし支障がなければ高度 2,000 (*フィート) から離脱し、酸素なしで行ける最大高度 12,000 (*フィート) まで上昇させてくれないか”と言った。彼らは“よろしい”と言った。2 から 12 (*1,000 フィート単位) まで上昇するのに数分かかった。その高度に達した頃に、1 個の銀色球体が上空を通過していた。私はそれが通過している間に、35 ミリフィルムで何枚かの写真を撮った。

それはただ飛び去った。地上に戻り、私は何が起きたかと訊いた。彼らはこう言った。“ラングレー (*バージニア州、空軍基地) では、それが何であるかを見るために、戦闘機に警戒態勢をとらせた。彼らが緊急発進し、その高度に達したときには、それはすでに飛び去った後だった...”

私はこのことを誰にも話さなかったが、私とその写真を撮ったことをどうしてか知る人がいて、おそらく 6 ないし 8 週間後だったと思うが、電話があった。彼らはこう言った。“我々は UFO の可能性のあるものの情報を集めています。我々はあなたが何枚かの写真を撮ったと聞いているが、それを見たいので拝借できませんか” 私は信用証明書の類は求めなかった。そして言った。“いいですよ、写真の他にも過去 5 年間に AP が発表した興味深いニュース記事のコレクションも持っています” 彼らは、“では、それらも持ってきてください。興味あります。それを見たい”と言った。

その建物は人が住んでいるようには思えなかった。ごく簡単な家具があるだけだった。それは古

い家で、中に価値のあるものは何もなかったと記憶している。骨董品も、東洋の敷物も、何もなかった。実際、それはみすぼらしいと言ってよいものだった。彼が何をしているのか、他に誰かその家にいるのか、私は気になった。だが、私は彼にそれを渡してこう考えた。“もし見終わったら、私に電話をくれればいい。でなければ、私がここに取りにくる”彼は2、3週間電話をよこさなかった。私は“もう十分だろう”と考えた。

彼から何の音沙汰もなく、彼の電話番号も知らなかったのので、私はその家に行ってそれを取り返してこようと考えた。私がお家に着いたとき、家は空っぽだった。彼が何者だったのか、私は知らなかった。私はよくよく世間知らずだった — 私はネガも焼き増しも保存していなかったから、なおさらだった。これらは、私が持っていた現物そのものだった。その新聞もコピーをとっていなかった。というのは、我々はそれを単なる興味で収集していたからだ。それは印刷のためでも、出版のためでもなかった。こうして、それらは私の人生から永久に消えた...

別のとき、私はラングレー空軍基地で NASA 長官と対談していた。我々は空飛ぶ円盤の話 시작했다。私はいかにも漠然とした、しかし正面から受け止めた返事を引き出した。我々の話題の一つは、別の種類の航空機と UFO についてで、それらをうまい具合に融合させた。こうして私は、“では将来の航空機についてはどうですか？それらはどんな形になりますか？”と訊いた。そしたら、彼はこう言った。“我々は今航空機を持っている、我々は実際に飛べる乗り物または航空機を今持っている、だがそれらはとても変わっていて伝統的なものではないので、国民はそれらを受け入れないだろう”

彼は、それらの航空機は従来のもののようにではないと説明した。彼は事実に言及していたと私は推測する。方向舵もない、尾翼もない、翼もない...

米国陸軍 ドン・ボッケルマン氏の証言
Testimony of Mr. Don Bockelman, US Army
2000 年 9 月

ボッケルマン氏は陸軍の発射場電気技師(Launch Area Electronics Technician)だった。彼はまた、システム分析者としての訓練を受けており、ナイキ・ハーキュリーズ・ミサイルにも関わった。彼は 2 年間、ハネウェル社で核弾頭装備魚雷の製造に携わった。ボッケルマン氏は、時速 3,500 マイルで移動する、非常に速い目標を見ていた様々なレーダー操作員たちから、直接に数多くの話を聞いた。それらの幾つかは、あり得ない小さな回転半径で方向転換していた。あるとき彼は、ワシントン州マウントバーノンの近くで、防空ミサイルによりそれを撃墜しようとする企てを目撃した。

... 本当に大きな速度と高い機動性を持つ目標、すなわちレーダー上の UFO を相手にしている技術者や操作員たちがいる。私は操作員たちから、そのような多くの話を聞いた。彼らは世界中の様々な場所に配属されている。統合攻撃管制所(Integrated Fire Control)はミサイル関連のレーダーが配置されている所で、多くのレーダーの集合体だ。彼らが詳しく語る内容は次のとおりだ。飛行物体が飛び込んでくると彼らはそれを追跡し、そのままやり過ごす。それらは時速 700 マイルで飛び、大気中で加速してきわめて短時間に 3,500 マイルまで加速する。それは我々の仮想敵ロシアの目標が持つ技術という観点の基準を外れていた。それは異質な技術だった。これらの操作

員たちは熟練した人々だと私は言いたい。彼らは本当のレーダー目標と目標に見える大気擾乱の違いを判断できるように訓練されている。彼らはそのことの専門家だ。

だから、彼らが目標を追跡していたとき、彼らは大気中にある実際の物理的な物体を追跡していたのだ。彼らは、大気中であって様々な形態の運動を伴う物理的な目標が存在すると 100 パーセント確信していた。私がこれらの報告を耳にしていたのは 1960 年代の終わりだ。報告は 1950 年代にまで遡る。というのは、エイジャックス・サイトに配属されていた多くの古い操作員たちがおり、彼らはそれらを追跡していたからだ。...

軍を退役してから、ある夕方、私は自宅の居間に座っていた。1978 年 10 月のことで、私は明かりをみんな消してただ座り、心を漂わせていた。そしたらまったく突然に、部屋の中に琥珀色の光が射し、散乱した琥珀色で部屋を満たし始めた。言うまでもなく、私は見ているものが何かを突き止めるために、素早く周囲を見回した。そこには互いにほぼ等間隔で並んだ三つの光体があり、四番目の光体はその等間隔の光体群からやや離れて同じ平面にあった。...

そのときこのジェット機がちょうど西から来た。私は家の裏口に立ちながら、この物体を見た。そのとき 1 機の防空ミサイルにより、この物体が攻撃された。それはまさしく標的に向けて発射された高い爆発力を持つミサイルだったことが分かった。爆撃の破片が地面に落下していた。ミサイルは爆発し、その物体は信じられないような速度で加速しながら攻撃地点を離れた。その飛行物体への実際の攻撃はセドロ・ウーレイ(*ワシントン州)の東約 10 マイルで起きた。ライマン[・アンド]・ハミルトンと呼ばれる地域から北に約 3 マイルの付近だった。

私が軍にいたとき我々がレーダーで追跡した物体に関してだが、その速度を別にすれば、これらの目標について最も印象的だったのは、その突然の方向転換能力だ。防空に携わる人々は質量と旋回半径を見る。極小半径で旋回する能力を持つそれらの物体に匹敵するものを、我々は何も持っていなかった。我々はここで、高速のまま実質的な旋回なしで方向転換することについて語っている。時速 2,000 マイルで直角の方向転換。そして方向転換だけでなく、下降と上昇。それらは素早く下降する。それらにとって進行方向が何らかの影響を及ぼすとは思われなかった。...

3.8.3 SAC(戦略空軍)／NUKE(核兵器)

序文

(グリア博士による口頭説明から筆記、編集された)

この節では、核施設に関する戦略空軍(Strategic Air Command; SAC)と UFO 事件を扱う。我々がここで取り上げる目撃証人は多様であることを、繰り返し強調したい。彼らは原子力委員会(Atomic Energy Commission; AEC)から米国とカナダにある戦略空軍施設、ミサイル発射管制施設にいた人々にまで及ぶ。これらの目撃証人は、地球外輸送機が我々の大量破壊兵器に強い関心を持っているようだ、疑う余地のない明快な証言をする。実際に複数の目撃証人が私に語ったところでは、彼らはこれらの地球外輸送機が、次のことに強い関心を持っているためにそこにいたと信じている。つまり、我々が自らを吹き飛ばしてしまわないか — あるいは我々が宇宙に進出し、

いつか他の諸文明の脅威にならないかと。

このことはとても重要だと私は信じている。なぜなら、これらの物体により示された何らかの敵対行動があったと述べた目撃証人は一人もいないことに加え、我々が大量破壊兵器を使って行なうかもしれないことにこれらの物体が関心を持っていることは、まったく明らかだからだ。このことはとても深遠な何かを伝えている：我々は平和こそが唯一の可能な未来である段階に至った。兵器はあまりにも強力であり、そのような兵器をこれ以上進歩させその使用を意図することは、あまりにも危険な賭けである。我々は我々の兵器庫にあるこれらの大量の兵器を、いかなる生命に対しても用いることなしに、宇宙に進出しなければならない。我々の活動を監視し、数十年にわたりそうしてきたように思われる地球外文明は、実にこれを彼らの主要な関心事の一つとしているかもしれない。そして、ほぼ間違いなく惑星間社会へ参入するための第一の必要条件は、平和的に宇宙に進出する種族としての能力である。我々はここでマスケット銃(*18世紀初頭の先込め撃針銃)や大砲や剣ではなく、熱核兵器、パルスレーザー兵器、時空の連続を引き裂くことのできる外来工学技術について語っているのだ。誰もがはっきりと知らなければならないことは、生存できる唯一の未来は、平和な未来だということである。この平和は、人類が成熟した証である。

また国家の軍事機構にいる人々は、米国や他国の国家安全保障組織と同様に、これらの地球外輸送機による一部の活動を、我々の領空あるいは主権の侵害と誤解してきた可能性もある。我々はもっと広い見方をしなければならないと私は考える。そして次のことを考慮しなければならない。もし我々が100年以内に、農業文明から初期段階の宇宙飛行ができる文明へと移行し、世界を破壊できる熱核装置を持つ惑星に遭遇したら、たぶん我々はそれに関心を持つだろう。我々は一つの種族として鏡を覗き込み、こう自問すべきだ。我々の惑星の平和を確実にするため、またこれらの兵器を宇宙から永遠に排除することを保証するために、我々は何をしているべきかと。

戦略空軍施設と核事象についてこの問題を論じる中で、我々は、幾つかの事例において管制発射施設あるいはミサイルサイロ周辺に出没してきたこれらの物体が、発射装置を遮断することができたことを知るだろう：つまり彼らは、大陸間弾道ミサイルを無能なものにしてきた。これが彼らの側の何らかの敵意を示すものだと私は信じない。彼らはこう言っているのだ。“この美しい惑星を破壊しないでください。そしてこのことを知ってください。私たちは、あなたたちが私たちを破壊することを許しません”人々が次のことを理解するのは重要である。つまり、このような行動は、しかしながら、孤立する秘密の中である種の当局者たちにより誤解されてきたのかもしれない。一つの文明として、我々はこれを注意深く考察しなければならない。秘密の闇の中で何が起きているのか？秘密は自らを肥大させ、情報と展望の空白を生み出す。そこでは異なる見方、異なる生き方を持つ人々との間に、十分な意見交換が持たれない。そんな環境の中では妄想と誤解が芽生える。これは強迫観念にとりつかれた秘密 — アイゼンハワー大統領が1961年1月に我々に警告した秘密 — に特有の重大な危険である。

米国空軍大尉、戦略空軍打ち上げ管制官 ロバート・サラスの証言

Testimony of Captain Robert Salas

2000年12月

サラス大尉は空軍アカデミーを卒業後、1964年から1971年まで7年間任務に就いた。彼はまた、

マーティン・マリエッタ社とロックウェル社に勤務し、FAA(連邦航空局)でも21年間過ごした。空軍で彼は、航空管制官、ミサイル打上げ管制官、およびタイタン3ミサイルの技術者だった。彼は1967年3月16日朝のUFO事件について証言する。複数のUFOが上空に空中静止したのを保安兵が目撃した直後、二つの別々の発射場で16基の核ミサイルが同時に稼働不能に陥った。保安兵たちは、それらの物体がわずか30フィートしか離れていなかったにもかかわらず、それが何であるかを識別できなかった。空軍はこの事件を詳しく調査したが、原因らしいものを見出せなかった。事件についてのある報告会で、空軍特別捜査局から来た一人の将校が、彼に対して機密保全誓約書に署名することを要求した。そして事件については、家族や他の軍関係者を含めて、誰にも話してはならないと告げた。冷戦中のあるとき、あまり重要でない技術的異常が関係者の間で公然とやりとりされたことがあった。しかしこの事件についてはそのときも、また今日に至るも、そのようなことはなかった。これはとても異常なことだとサラス大尉は考えている。

RS: ロバート・サラス大尉

SG: スティーブン・グリア博士

RS: 私の名前はロバート・サラスだ。空軍アカデミーを卒業し、1964年から1971年まで約7年半空軍の任務に就いた。その後で、まずデンバーにあるマーティン・マリエッタ社に、次にここ南カリフォルニア地域にあるロックウェル・インターナショナル社に勤務した。私は1974年にFAA(連邦航空局)に入り、そこで約21年間勤め、1995年に連邦政府の職を退いた。

空軍で私は航空管制官だった。我々は地上管制迎撃管制官(ground control intercept controller)と呼んでいた。その次に、私はミサイル発射将校だった。その後は、ロサンゼルス空軍駐屯地の外にあるタイタン3(*大陸間弾道ミサイル)推進システムの技術者だった。

そのUFO事件だが、1967年3月16日の早朝に起きた。私は指揮官のフレッド・マイワルドと一緒に勤務していた。我々は二人とも第490戦略ミサイル部隊の一部として、オスカー小隊で任務に就いていた。この部隊には、割り当てられた5カ所の発射管制施設があった。我々はオスカー小隊にいた。

外はまだ暗く、我々は[ICBM発射管制施設の]60フィート地下にいた。早朝のことで、私は隊の保安要員である地上保安兵からの電話を受けた。彼は他の保安兵と一緒に、この発射管制施設の周囲を飛ぶ幾つかの奇妙な光体を見ていた。それらはただ飛び回るといって、とても異常な行動をしていると彼が言ったので、私は“それはUFOの意味か?”と言った。彼は、それらが何であるか分からないが、光体で飛び回っていると言った。それらは飛行機ではなかった; それらは無音だった。それらはヘリコプターではなかった; それらは幾つかのとても奇妙な動きをしていたが、彼はそれをうまく言えなかった。釈然としなかった私は“もっと重大なことが起きたら呼んでくれ”と言った。

その場のやりとりはこうして終わった。彼から再び電話があったのは、数分後どころではなく、たぶん半時間もしてからだった。今度は彼はとても怯えていた; 彼の声の調子を伝えられないが、とても動揺していた。彼はこう言う。“上官殿、正面ゲートに向かって輝く赤い物体が1個空中静止しています。今それを見ています。外では皆武器を抜いています”もちろん彼はそう言いながら、とても取り乱していた; とても興奮していた。

私はそれをどう判断してよいか分からなかったが、彼は何をすべきか、私に指示か命令を求めていた。それで私は次のようなことを言ったと思う。“外周フェンスに問題がないか確かめよ” そしたらすぐに彼は、“確かめに行きました。保安兵が一人負傷しています”と言い、電話を切った。

直ちに私は仮眠していた指揮官のもとに行き — 休憩時間のために我々はそこに小さな簡易ベッドを置いていた — 今受けた電話の内容を彼に報告した。私がそれを彼に説明しているとき、我々のミサイルが 1 基ずつ運転停止し始めた。運転停止とは発射準備ができない状態になったという意味だ。我々はベルを鳴らし、笛を吹いた — 発射準備不能の赤ランプ。

そのときの記憶ではミサイルのすべてが停止したように思われたが、後日私の指揮官マイワルドとともにこの事件の記憶をたぐっているとき、彼は、失ったのはおそらくこれらの兵器の 7, 8 基だけだったように感じたと言った。

SG: これらの兵器が何だったか、記録のために説明してくれませんか？

RS: これらの兵器はミニットマン I ミサイルだった。もちろん核弾頭ミサイルだった。

それらが運転停止し始めると彼はすぐに起き、我々は二人で状態表示盤を調べ始めた。我々はそれを調べて停止の原因を突き止める能力を身につけていた。その大部分は誘導と管制システムの障害だったと記憶している。それから彼は指揮所に報告を始めた。その間に、私はこの物体がどんなことになっているかを知るために階上を呼んだ。そしたら保安兵がこう言った。物体は去った — 高速でただ飛び去った。

負傷した保安兵はこの鉄条網を登ろうとしたらしかった。UFO は何も攻撃しなかったし、この空軍兵を傷つけることもしなかった。私は彼に物体の様子を訊いた。彼が話せたのは、それは卵形で、物体の周囲は赤味がかかったオレンジ色に輝いていたということだけだった。

SG: その距離と高さはどれくらいでしたか？

RS: 彼が語ったところでは、それはフェンスの真上に空中静止しており、彼から約 30 フィート以内にあった。フェンスの高さは 8 フィートはあっただろう。

それから 1 週間以内に、また別の事件があった。直後のことだった。そのときはレーダー報告とさらに多くの目撃証人がいた。

[ドワイン・アーネソン中佐の裏付け証言を見よ]

空軍は事件の全体についてあらゆる角度から調査したが、運転停止の原因らしいものを見つけることはできなかった。私にはこの事件を証言できる相当数の目撃証人がいる — 我々には調査団に加わった人も 2, 3 人いる — そして調査を実際に組織した人からの手紙を私は持っている。これ[複数の ICBM の運転停止]の可能な説明は何も見つからなかった。どのミサイルも基本的には自立している。それらのほとんどは商用電源から電力が供給されているが、個々のミサイルはそれ

自身の発電機を持っている。

カプセル(*地下発射管制施設)とミサイルサイトとの間の唯一の接続は、**SIN** ラインつまり機密情報網ライン(sensitive information network line)と呼ばれるものだ。それらは基本的に埋設ケーブルだが、カプセル自体の内部にあってミサイルに直接つながっている。ミサイルは互いに接続されていないために、一つのサイトの障害は他の場所のミサイルに影響しない。

我々のサイトのどこかで 6 ないし 8 基が停止したが、それらは短時間に相次いで停止した。繰り返すが、これはきわめて起きにくい現象だ。理由を問わず、複数のミサイルが停止したことは稀だった。それはきわめて稀なことだった。気象条件は除外された。私が述べたように、調査は広範囲に及んだが、電力サージは除外された。実験室で幾つかの試験を行なったボーイング技術者の一人が気付いた唯一の可能性があった。彼は何らかの電磁力または電磁場が信号を消してしまったと考えた。だがもしそうなら、その電磁力は個々のミサイルに繋がっている埋設ケーブルを通らなければならなかった。

私が階上の保安兵と話した後、私の指揮官は指揮所に連絡した。指揮所との連絡を終えたとき、彼は私に向き直ってこう言った。“同じことがエコー小隊にも起きた” エコー小隊は別の部隊だ。たぶん我々の位置から 50 ないし 60 マイル離れているが、彼らにも同様のことが起きた。そこでは発射管制施設ではなく、ミサイルがある実際の発射施設で UFO が空中静止した。その時刻に彼らの隊には保守と警備の要員が数人いたが、彼らはそれぞれの場所で UFO を目撃した。彼らの場合、10 基のミサイルがすべて停止した — 10 基全部だ。

SG: それはほぼ同時刻でしたか？

RS: 同じ朝だった。だから、その日の朝に我々は、UFO がその場所に現れ空軍兵たちに目撃された同じ時刻に、場所は違うが 16 ないし 18 基の ICBM を失った。それらのミサイルは終日停止していた。なぜなら、我々はドン・クリフォード大佐の証言を得ているからだ。彼はエコー小隊を救援したが、ミサイルが警戒状態に戻ったときそこにおり、それには終日かかったと彼は言った。それで私は我々のミサイルが元に戻るのに一日かかったと推測している。

我々が救援を受けたとき、階上に行って私が最初にすることは、保安兵の目を見ることだった。そして言った。“君、この物体について私に本当のことを言ったのか？” 彼は本当のことを言ったと懸命に訴えた。私は 2, 3 の理由で、彼が本当のことを言ったと信じた。彼が階下の私に電話をよこしたとき、彼は確かに怯えていた。そして私が彼の目を見、彼がその状況を私に話したとき、私は間違いなく彼を信じた。

私はこの事件について報告書を書き上げた。私は日誌に書いていた内容を報告に含めた。我々が基地に着くと、すぐに部隊司令官に報告しなければならなかった。その部屋には、部隊司令官とともに空軍特別捜査局(我々の基地には空軍特別捜査局があった)の人間が一人いた。彼は司令官と一緒にその事務所にいた。彼は私の日誌を要求し、簡単な説明をして欲しいと言ったが、何が起きたか彼はすでによく知っているようだった。それでも我々は彼に簡単な説明をした。そしたら彼は我々二人に、これは機密情報だからと言って、機密保全誓約書に署名するよう求めた

— 我々は誰にもこれを漏らしてはいけなかった、そういうことだった。我々は話せなかった；彼は我々にこう言った。我々はこれについて誰にも話せない、他の隊員にも、配偶者にも、家族にも、お互いの間でさえも。

これで事件はお終いだった。私はそのマルムストローム[聞いた音声による綴り>(*Malmstrom; マルムストローム空軍基地, モンタナ州)に、それ以後さらに2年間いた。その間我々はその事件について何の概要報告も与えられなかった — エコー小隊の事件も我々の事件もだ。それはとても異常なことだった。なぜなら、装置に起きた異常については、どんなことでも毎日説明を受けていたからだ。我々は説明を受け、兵器に関して生じたこれらの技術的諸問題を議論した。だがこれらの事件については、それ以上何も決して聞くことはなかった。そしてこれらは重大事件だった。実に重大な事件だった。

あのことが起きた朝、その直後に戦略空軍司令部からマルムストロームや他の基地に送られ、空軍特別捜査局の監督下で我々が受け取ったテレックスの写しを、私は入手した。それには、この事件に戦略空軍司令部が極度の懸念を持っている書かれていた。なぜなら、彼らはそれを説明することができなかったからだ。起きたことを誰も説明できなかった。それにもかかわらず、我々が説明を受けることは決してなかった。我々には、扱っているのが核兵器だったために、きわめて高い機密取扱許可が与えられていたのだ。

ミサイルが停止したとき、これらのサイトでは侵入防護警報が確かに鳴った。これは異常だ。というのは、通常ミサイルが誘導障害か何かで停止した場合、侵入防護警報は鳴らない。そうするとこれは境界線が破られるか、物体がフェンスを横切ったか、あるいは何かが発射施設の境界線にある侵入防護警報システムを壊したかを意味する。私はそれを調べるために、これらの2、3の施設に保安兵をやった。

この話がとても重要だと私が考える理由は、それより前の1966年8月にノースダコタ州マイノットで、とてもよく似たことがマイノット空軍基地の発射管制施設の一つで起きていたからだ。彼らは我々と同種の兵器システムを持っていた — 彼らはM-1ミサイルを持っていた。これ[UFO]はレーダーで目撃された。幾つかの通信障害が起き、物体は発射管制施設上空で目撃された。

これは1966年8月に起きた事件で、よく記録されている。私の事件に先立つ約1週間前、1967年3月に、私は保安兵の一人がかけた電話の記録を入手した。彼は発射施設を見ながら外で叫んでおり、私が今説明した発射施設上空の物体にとってもよく似た物体を見た。指揮官は指揮所に報告した。我々の事件後約1週間か10日して、よく記録されている事件がマルムストロームで起きた。この事例では、マルムストローム空軍基地近くで1機のUFOがレーダーで追跡され、比較的近距離からトラック運転手と高速パトロール警察官によって目撃された。空軍は調査を行なった。このUFO目撃に関する分厚い空軍調査報告書がある。というのも、それは基地の周辺を飛び回り、しかも基地にとっても近かったからだ。

これは、ミニットマンミサイルという同種の兵器システムに関して発生した一連の事件だ。

保安兵が私に提出した報告は公式の報告だ。これらは悪ふざけではない — それらは公式の

報告以外のことを意図したものではない。なぜなら、我々は冷戦とベトナム戦争の中にあつて戦略兵器を扱っていたからだ。これらの保安兵たちは職業集団であり、兵器の停止や彼らが見ていたものを冗談の種にはしなかった。だからこれらは噂ではない、公式報告だった。もし彼らが何らかの理由で撤回されたら、これらの人々はとても機密性の高い事件の中で虚偽報告をしたとして、軍法会議にかけられていただろう。そんなことは起きなかった。

ボブ・コムンスキが、これらの[UFOに関係したICBMの]運転停止のあらゆる側面を調べるために組織を率いた。ある時点で彼は上司から、空軍が“調査を中止せよ；これについてこれ以上何もするな、最終報告書も書くな”と言っている、と言われた。コムンスキは私に書面でそう語った。繰り返すが、CINC-SAC(戦略空軍最高司令官)が、ここで起きたことを正確につかむことはきわめて重要だ、と述べたことだけを考えても、こんなことはきわめて異常だ。それにもかかわらず、調査隊の団長が調査中にそれを中止し、最終報告書も書くなと言われたのだ。

実を言うと、この事件を報告した多くの保安兵たちがベトナムに送られたことを私は聞いた。私は証明できるが、次のことを事実として知っている。私が発射施設に行かせ、物体を見た保安兵の一人は、戻ってきて経験したことにとっても動揺していた。それ以後、彼は警備の任務を解かれた。彼はどこか別の所に送られた。なぜなら、彼はその経験にあまりにも動揺していたからだ。

[核施設周辺で起きたこれらの事件や関係するUFO事件についての公式政府文書を見よ。SG]

米国空軍中佐(退役) ドワイン・アーネソンの証言

Testimony of Lt. Colonel Dwyne Arneson, US Air Force (retired)

2000年9月

アーネソン中佐は米国空軍で26年間を過ごした。彼は最高機密SCI-TK(機密区画情報タンゴ・キロ)取扱許可を持っていた。彼はボーイング社のコンピュータシステム分析者として働いた。また、ライト・パターソン空軍基地では兵站部長だった。一時期彼は、ドイツのラムスタイン空軍基地全体の暗号将校だったが、そこである日一つの機密通報を受け取った。それには、1機のUFOがノルウェーのスピッツベルゲンで墜落したと書かれていた。モンタナ州マルムストローム空軍基地にいたとき、彼は再びある通報を見たが、それには金属製の円形UFOがミサイルサイロ付近に空中静止しているのが目撃され、ミサイルのすべてが遮断されて発射できなくなったと書かれていた。

DA: ドワイン・アーネソン中佐

SG: スティーブン・グリア博士

DA: 私の名前はドワイン・アーネソンだ。私は1937年にミネソタ州ロチェスターで生まれ、ロチェスター高校に入学した。そこを卒業してミネソタ州ノースフィールドのセントオラフ大学に進んだ。そこで私は物理学と数学の学位を取った。卒業するとすぐに空軍の将校訓練校に応募し、合格した。そして将校訓練校を経て1962年に将校に任命された。私は通信電子将校として米国空軍で26年間を過ごし、1986年に退役した。私はベトナム、ヨーロッパを含む世界中に赴任した。一名前を挙げたら、おそらくそこにはいたことがあるだろう。

私は最高機密SCI-TK取扱許可を持っていた。それは機密区画情報タンゴ・キロを意味し、超最

高機密と言ってもよい。その種の取扱許可を得るためには特別な審査が必要だ。空軍をやめて1986年に中佐として退役すると、私はボーイング社に求職し、そこでコンピュータシステム分析者として働いた。その立場で、1987年以来ボーイング社で働いている。1986年に退役したとき、私はライト・パターン空軍基地の兵站部長だった。

私は自分自身の詳細な調査を通して物事を見る、様々な機会を持った。一つの例は、私がドイツのラムスタイン空軍基地で中尉だった1962年に遡る。私はラムスタイン空軍基地全体の暗号将校だった。私は最高機密管理将校だった。その立場で私は偶然私の通信センターを通った機密通報を見た。それには“1機のUFOがノルウェーのスピッツベルゲン島に墜落し、科学者の一団が調査に向かっている”と書かれていた。

その通報がどこからどこへのものだったか、私は思い出さない。というのは、私の立場としてしばしば次のことを言われたからだ。“ここで見たものは、ここに置いていけ”だがそれを見たことは思い出す。

次に思い出されるのは1967年に起きたことだ。私はモンタナ州マルムストローム空軍基地、第20航空師団の通信センターを担当していた。そこでもまた、私は最高機密管理将校だった。私はSAC(戦略空軍)ミサイル隊員たちにすべての核発射認証を発していた。私には最高機密に接するよい条件があった。

ある日、私は偶然に私の通信センターを通った通報を見た。ここでもまた、その日付、発信元、送信先を述べることはできない。しかしそれを読んだり見たりしたことは、しっかりと思い出す。それは基本的に次のことを言っていた。“1機のUFOがミサイルサイロの近くに見える”...それは空中静止していた。それによれば、勤務中の隊員も非番の隊員も皆、空中静止しているUFOを見た。それは金属製の円形物体で、私の理解ではミサイルはすべて停止した。

その後、数年経ってボーイング社で働いていたとき、ボブ・コミンスキという人物から私は聞いた。彼はボーイング社を退職していた。彼はこう言った。“そうだ、私はミサイルを調査するためにボーイングから派遣された技術者だった。実際にそれらが自ら停止したのではないことを確かめるためだった”彼はこうも言った。“私はそれらに完全な健康証明書を与えたよ”私はボブの代わりにボーイング社で働き、彼のよき友人だった。

彼が亡くなる前でさえ、我々はこの主題について実に多くの会話を持った。彼はまったく信じ難いほど素晴らしい人間だった。

[マルムストローム空軍基地におけるロバート・サラス大尉の証言を見よ。SG]

“ミサイル停止”とは、それらが死んだという意味だ。何かはそれらのミサイルを停止させ、ミサイルは発射モードに入れなくなった。

また、私がメイン州のレーダー部隊の司令官をしていたとき、メイン州キャズウェル空軍駐屯地だったが、我々はローリング空軍基地と隣り合わせだった。そこではB-52、KC空中給油機、その他を

発進させていた。私にはローリングに警備担当の友人が多くいる。彼らは、ローリング空軍基地の核兵器貯蔵区域の近くで空中静止していた UFO について、私に語った。

[これはジョー・ウォイツキ中佐の証言を裏付ける。ローリング空軍基地における重大な出来事についてのその証言を見よ。SG]

少し背景を述べる。話を長引かせるつもりはない — 私がライト-パターソン基地で兵站部長に任命されたとき、私はオクラホマ市に妻子を残してきた。それは娘の高校最後の年だったので、私は約 1 年間単身赴任した。そこでアパートを探しているときに、私はこの夫人に出会った。名前はクリス・ウィードンで、デイトン近郊に小さな 5 エーカーほどの英国風荘園を持っていた。貸部屋つまりベッドルームが三つあった。私はその一つを借り、いわば彼女の息子となった。私は草刈りを手伝ったり芝生を刈ったりした。彼女は 70 歳台だった。

彼女の夫はスペンサー・ウィードン中佐だった。彼はそのときに先立つこと 20 年前に亡くなった。私が会った誰もが、彼は実に立派な人間だったと言った。彼は明晰な精神の持ち主であり、ライト-パターソンにおける主導的な UFO 調査官の一人だった。実際に私は、1950 年代に遡るスペンサー・ウィードンとあのドナルド・キーホー少佐による論争テープを自宅に持っている。それはアームストロング・サークル劇場で行なわれた。ウィードン中佐は彼女の夫だった。

私が偶然出会ってお互いすぐ好きになった人物は、アドルフ・ラウム博士だ。当時彼は 83 歳だった。彼は亡くなったと思う。ある夜の夕食後、マティーニ酒を少し飲んだ後で、私は冗談めかしてアドルフ博士に訊いた。“このライト-パターソン基地で氷の上に寝かせてられているという小さなグレイについて、何か知っていますか？” 私は彼の顔が蒼白になり、声がとても厳しくなったのをはっきりと覚えている。彼はこう言った。“アーン、私が君に言えるのは、それらが気象観測気球ではなかったということだけだ。これについて我々が話すことは今後ないだろう。いいかい？” これについて我々がこれ以上話すことはないとは私ははっきり理解した。彼はもともとスイス出身だった。彼は米国における最初の原爆実験に従事し、個人的にオープンハイマー博士を知っていた。私は最高機密取扱許可を持っていたが、我々が接近できない区域があった。だから我々は、ライト-パターソン基地の中で遺体があったかもしれないこれらの区域の幾つかについては、何も知ることができなかった — 彼らは何を持っていたか、誰が知ろうか？私の下で通信電子将校として働いていた多くの技術者たち、彼らは異様な速度でレーダー画面を横切る物体について話したものだ。我々が持っている何物もそのような速度で移動できなかった。

SG: これがあったのは何年のことですか？

DA: そう、これは私がメイン州キャズウェル空軍駐屯地でレーダー部隊司令官をしていた 1970 年代中頃に遡る。これらの技術者たちがそんな出来事を私に話したのは、このときだった。

レーダー部隊司令官は、レーダーを実際に保守する技術者とともに操作員を抱えている。実際に、我々はその陣容で戦闘訓練をする。我々は、米国にいてカナダ NORAD 師団の作戦統制のもとにあった唯一のレーダー部隊だった。さて、この部隊はカナダから南下してくる B-52 を見る。そして迎撃戦闘機がそれらに向かったりする。だから、彼らは物がどれくらい速く飛ぶかを知っていた。

彼らは爆撃機を知っていた。彼らは我々の最新戦闘機部隊の速度を知っていた。私のレーダー技術者たち、保守要員たち — 彼らは次のように言える立場にあった。“視界は A-1 条件にある — あるいは レーダーは A-1 条件にある” だから物体は調べて確認できる。操作員たちの経験、保守要員たちの経験 — 彼らはシステムが完全に稼働していることを確認した。そして彼らは言った。“あの物体は時速 2,000 ないし 3,000 マイルで移動している” 私はキャズウェルだけでなく、全米の異なるレーダー基地で起きた同様の出来事を語った様々な情報源からそれを聞いた。当時に遡ってもレーダー基地は全米にあり、似たような話はまったく珍しくなかった。

このことを考えるとき、我々のこの広大な宇宙を考えるとき、もし我々がそこにいる唯一の知的生命体だったなら、神は何と判断を誤ったことか。...

米国空軍中尉(退役) ロバート・ジェイコブズ教授の証言
Testimony of Professor Robert Jacobs, Lt. US Air Force

2000 年 11 月

ジェイコブズ教授は米国のある主要大学の尊敬を集める教授だ。1960年代に彼は空軍にいた。彼は光学装置を担当する将校で、任務はカリフォルニア州バンデンバーグ空軍基地から発射される弾道ミサイル実験を撮影することだった。1964年、彼が撮影した最初のミサイル実験中に、ミサイルと並んで飛ぶ1機のUFOを、彼はフィルムに捉えた。彼の話によれば、それは2枚の皿を合わせ、丸いピンポンボールに似た頂部をつけたように見えた。フィルムには、その一つのボールから光線がミサイルに向けて放たれている様子が映っていた。これが違う方向から4回起きた。このときミサイルは約60マイルの上空にあり、時速11,000から14,000マイルで飛んでいた。そのミサイルが宇宙から落下し、UFOは去った。翌日、彼は司令官からこのフィルムを見せられ、それについて今後決して口にしないように告げられた。彼はこう言った。もし君がそれを述べる状況になったら、UFOから発射されたレーザー攻撃だったと言うように。ジェイコブズ教授はこれはおかしいことだと考えた。なぜなら、1964年にはレーザーは実験室で生まれたばかりだったからだ。しかしそれでも彼は言われたことを守り、このことを18年間口にしないままだった。年月が経ち、そのフィルムについての記事が出た後で、ジェイコブズ教授は早朝に嫌がらせ電話を受けるようになった。家の前にあった彼の郵便受けが吹き飛ばされることさえ起きた。

我々がバンデンバーグ空軍基地で撮影したものが、私のその後の人生に影響を及ぼし、宇宙について、また政府が我々の心を操作する様についての私の理解に非常に大きな影響を与えた。

我々が核兵器を目標に向かって打ち込むための弾道ミサイル実験を行っていた、というのがこの出来事の背景だ。それが彼ら(*UFO)がそこにいた理由だった。我々は本物の核兵器を打ち上げていたのではなく、模造弾頭を打ち上げていた。それらは核兵器と同じ大きさ、形状、寸法、重量を持っていた。私はバンデンバーグ空軍基地の第1369写真部隊で、光学装置を担当する将校だった。だから、その西の実験場で落下するすべてのミサイルの計装写真を管理するのが私の任務だった。当時、我々はそれらをICBMと呼んでいた。つまり国家間弾道ミサイル(inter-country ballistic missile)だ。なぜなら、それらは発射するとすぐ爆発していたからだ。我々の仕事は、飛行中に外れる噴射口の何が悪かったのかを調べられるように、技術者たちに技術連続写真を提供し、なぜそれらが爆発したかを究明することだった。これらの実験を追跡するための写真施設を設置し

た功績により、私は空軍誘導ミサイル勲章を受けた。私はミサイル記章を得た、空軍で最初の写真家だった。それは当時誰もが欲しがっていた。

その事件が起きたのは、間違いなく 1964 年だった。というのは、マンスマン少佐がそれを確認したからだ；彼はそれを書き付けていて、その正確な日付を知っていた。

彼らがミサイルの秒読みをし、我々はエンジンが点火し上昇するのを聞いた。こうして我々はミサイルが進行中であることを知った。我々は南、南西を見ており、ミサイルは煙の中からひょっこり現れた。それは実に美しいもので、私は、そら出てきたぞ、と大声で叫んだ。180 インチのレンズを据え付けた我々の M45 追跡台にいる連中が、ミサイルを撮影した。大きな BU(*ブッシュネル)望遠鏡が旋回してそれを捉え、我々はそれらを追った。実際に我々は、推力を得た飛行ブースターの 3 段すべてを見ることができた。それらは燃焼し尽くし、落下した。当然、我々の目に見えるものは、太平洋上の島である標的に向かって下部宇宙空間へと吸い込まれていく、煙の航跡だけだった。あれは打ち上げの我々の最初の撮影だった。我々はそれを捉えた。

我々はそのフィルムを基地に送った — それからどれくらいの時間だったか、正確には覚えていないが、1 日か 2 日だったと思う — 私は第 1 戦略航空宇宙師団司令部のマンスマン少佐の事務室に呼ばれた。彼の事務室に足を踏み入れると、彼らはスクリーンと 16 ミリプロジェクターを用意していた。長椅子が一つあり、マンスマン少佐が座れと促した。そこには灰色のスーツを着た二人の男がいた。私服だったのはかなり異例だった。マンスマン少佐は、これを見ろと言い、フィルムプロジェクターのスイッチを入れた。私はスクリーンを見た。それは 1 日か 2 日前の打ち上げだった。

それは胸を躍らせるものだった。望遠鏡が長いために、アトラスミサイルが画面に入ったとき、我々は 3 段目までの全部を見ることができた。あれは実に素晴らしい光学装置だった。我々はその段が燃え尽きるのを見た。我々は第 2 段目が燃え尽きるのを見た。我々は第 3 段目が燃え尽きるのを見た。そして、その望遠鏡で我々は模造弾頭を見ることができた。それは飛び続けていたが、画面に何か別のものが入った。それは画面に入ってきて弾頭に光線を発射した。

思い出して欲しいが、これらはすべて時速数千マイルで飛んでいるのだ。この物体[UFO]は弾頭に光線を発射して命中させ、次にそれ[UFO]は反対側に移動し、また光線を発射した。さらにまた移動して光線を発射し、次に下降してまた光線を発射した。そして入ってきたときと同じように飛び去った。弾頭は宇宙から落下した。物体や我々から見えた光点、弾頭などは、高度約 60 マイルの下部宇宙空間を上昇していた。この UFO がそれらに追いつき、飛び込んできてそれらの周りを飛び、飛び去ったとき、それらは時速 11,000 から 14,000 マイルで飛んでいた。

私はそれを見てしまった！誰かがそれについて何を言おうとも、私はまったく気にかけない。私は映像でそれを見たのだ！私はそこにいたのだ！

明かりがつけられたとき、マンスマン少佐は振り向いて私を見た。そして、君たちは何か悪ふざけをしていたか、と訊いた。私は、していません、と答えた。そして彼は、あれは何だったか、と訊いた。私は、UFO を捉えたのだと思います、と言った。我々が見たもの、飛び込んできたこの物体は円形で、2 枚の皿を合わせてピンポンボールの頂部をくっつけたような形だった。光線はそのピン

ポンボールから発射された。これこそ私が映像で見たものだ。

それについて少し議論してから、マンスマン少佐は私に、これについては今後決して話すなど言った。これが決して口外されなかったことは、ご存じのとおりだ。そして彼は、機密保全誓約違反の悲惨な結末は分かっているね、と言った。分かっています、と私は言った。彼は、よろしい、と言った。私は決して口外しなかった。私がドアに向かったとき、少し待て、と彼は言った。彼はこう言ったのだ、今後もし誰かにそのことについて話すように強要されたら、それはレーザー照射だった、レーザー追跡照射だったと言うように。

だが、1964年に我々はレーザー追跡照射など行なっていなかった。我々はいかなるレーザー追跡もまったく行なっていなかった。レーザーは1964年にまだ生まれたばかりだった。それらは実験室の中の小さなおもちゃだった。それで私は、分かりました、と言って外へ出た。それが18年間で私が話した最後だった。

私はバンデンバーグ空軍基地ではそれを誰にも話さなかった。私の部隊の誰もそれを知らなかった。私以外に誰もそのフィルムを見なかった。私の司令官ルイス・S・クレメンツ・ジュニア少佐は、それを見なかった。私の作戦将校ケネス・R・キャラハン大尉は、それを見なかった。彼の中尉だったロナルド・O・ベイラーは、それを見なかった。彼らの補佐だったスプーナー曹長は、それを見なかった。私の部隊でそれを見た者はいなかった。そして私はフロレンス・J・マンスマン・ジュニア少佐の直接命令により、それを誰にも話さなかった。だから、バンデンバーグ基地で私が知っている誰もが、これについて何も知らなかった。

本当にそんなことがあるのだろうか？ 誰かは見ていただろう。誰かがそれを話したかもしれない。だが誰もそうしなかった。なぜなら、当時私は話すなど言われた最高機密事項については話さなかったからだ。兵役中に知ったことで今あなたに話したくないことがある。なぜならそれらは最高機密で、それを話すと私の立場がまずくなるかもしれないからだ。

18年後、私は次のことに思い当たった。最高機密扱いだと誰も私に言わなかったこの事件を、話してもよいのではないか。マンスマン少佐の言葉を解釈すると、彼はこう言った。“これは決して起きなかったと言うように” それはこの事件を最高機密扱いにしていないのではないか？ これが私がそれについて話すことを躊躇しなかった理由だ。それは又聞きの話ではない。私に起きたことなのだ。そして私は18年間、米国空軍の隠蔽工作に関わった一人だった。

[その事件について]ある記事を公表した後で、事態は大変なことになった。私は仕事で嫌がらせを受け始めた。日中に奇妙な電話がかかり始めた。夜に自宅で私は電話を受けるようになった。一晩中、時々午前3時、午前4時、夜中の10時、相手は電話をよこし、私に喚き始める。このくそったれ！このくそったれ！彼らが言うのはこれだけだ。彼らは私がどう受話器を置くまで喚き続ける。

ある夜、何者かが大量のロケット花火を放り込んで、私の郵便箱を吹き飛ばした。郵便箱は炎を上げて燃えてしまった。その夜の午前1時に電話が鳴った。受話器を取ると、何者かがこう言った。“郵便受けの夜のロケット花火、きれいだったぞ、このくそったれ野郎！”

こんなことが 1982 年以来繰り返し起きている。私はあなたに話したが、このヒストリー・チャンネルの件が目撃されてあなたが質問を始め、このことが再び広がり始めてから、私には再び電話がかかり始めた。妻と私は居場所も分からないここで電話を受ける。ここは我々が避難し籠もっている、我々の農場だ。これは奇妙なことだ — 彼らは何も言わない。電話を取り上げハロー、ハローと言う。そうするとフムムムム。 , カチッ。これは気味が悪い。しかし私は落ち着いて対応することを学んだ。私はもう気にかけない。私を消すために彼らは何をしようとするのか？私の信用を落とすために彼らは何をするつもりなのか？彼らはフィリップ・クラス(*UFO 懐疑派)がすでに私にした以上の何かをするつもりなのか？彼らは私を愚か者に見せようとしているのか？彼らができることはだいたいそんなものだ。

UFO 問題の周辺を縁取るこの気違いじみた物事は、その真面目な研究を抑えつける協調した作戦の一部であると私は考えている。この主題を真面目に研究しようとする、いつでも誰でも嘲笑の対象になる。私は比較的主要な大学の正教授だ。私が未確認飛行物体を研究することに興味を持っていると聞いたら、私の大学の同僚たちは私を笑い、私の後ろであれこれ大声で揶揄することは間違いない — 未確認飛行物体はまさに我々が共生すべき物の一つなのだが。

空軍はすべてを否定した。私は空軍にいたか？空軍はそれを否定した。私はかつてバンデンバーグ基地にいたか？もちろん私はいた可能性はない。私は空軍にいなかったのだからどうしてバンデンバーグ基地にいられようか？私はカリフォルニア海岸に沿って追跡サイトを設置したか？否、カリフォルニアに追跡サイトはなかった。馬鹿げているのはどっちだ！その追跡サイトは今でも私が設置した所にある。彼らはスペースシャトルがカリフォルニアに着陸するたびに、それを皆さんに見せるためにそのサイトを利用する — シャトルを最初に見るのはそこからなのだ。彼らは今でもこの追跡サイトからバンデンバーグ基地からのミサイルを撮影している。

ともかく私の話を裏付けるために、リー・グラハムはフロレンス・J・マンスマンを見つけ出した。そのことを口外しないように私に命令した、あの少佐だ。彼は今やスタンフォード大学の博士であり、カリフォルニア州フレズノで牧場を経営していた。彼はリーに返事を送ったが、それにはボブが話の中で語ったことはすべて絶対に真実だと述べられていた。

彼は私の話を裏付けてくれた。そしてその後何年間も、誰かがそれを持ち出したり彼と接触しようとしたときには、いつでもこう言って私の話を裏付けた。“そのとおりだ、それがまさに起きたことだった”これは相当に勇気が要ることだ。私は小父さん[マンスマン]のファンになってしまった。彼は今は亡い。暫くの間、彼は私の英雄だった。

そのとき私は部屋にいなかったが、マンスマン少佐が私や他の人々に語ったように、そのフィルムに起きたことは、それ自体興味深い話だ。私が立ち去ってから暫くして、私服の男たち — 私は彼らを CIA と考えたが、彼は違うと言った。それは CIA ではなく他の何者かだった — がそのフィルムを取り上げ、UFO が写っている部分をリールから外し、はさみでそれを切り取ってしまった。彼らはそれを別のリールに巻き、彼らの書類カバンに入れた。彼らは残りのフィルムをマンスマン少佐に返し、こう言った。“機密保全誓約違反に対する罰則の厳しさは、説明する必要がないですね、少佐。この事件は片づいたことにしよう”そして彼らはフィルムを持って立ち去った。マンスマン少

佐はそのフィルムを再び見たことはない。

私の考えでは、バンデンバーグ基地でそれを再び見た者は誰もいない。それはバンデンバーグ基地からどこか他の所に行ったと私は確信している。マンスマン少佐はフィルムを見ることにとても慣れていて、それは地球外のものに違いないと言った。彼らは模造弾頭を照射した光線を、ある種のプラズマビームと考えた。それはプラズマビームのように見えたからだ。

マンスマン少佐は、組織の中では大変な栄誉と科学者としての名声を得た人物だった。その彼がそれを裏付けたことで、私は十分満足している。私は自分自身を信じなくてもマンスマン少佐は信じるだろう。

そのとき空軍将校だった我々二人がそこにおり、何かを見た。また、それを見たことを我々二人が互いに裏付けた。懐疑論者や私が話していることを信じない人々に訊ねたいことは、なぜ私がこの話を作り上げる必要があるかということだ。なぜマンスマン少佐(博士でもある)がそれを作り上げる必要があるか？我々は何を得る必要があるか？私はそれから、それを話したことから苦痛と苦難以外を得ていない。私は自宅で嫌がらせを受けてきた。これは私を不利にするために使われてきた。一度教職を失う一因にもなった。この話をした後で、私は大変な目に遭ってきた。だが私はこの話をし続ける。政府の中でこの種の最低のことが行なわれていることを人々が知るのには重要だと考えるからだ。我々はこの国の市民として、その情報を知る資格がある。それを政府が隠蔽しているのだ。私がこの話をする理由はそれだ。それが私があなたにそれを語っている理由だ。

こうなった今、私は生きていく限りそれを話し続けるつもりだ。私が話すことはいつも同じだ。なぜならそれはただ一通りに起きたからだ。私は絶対に話を変えない、それができないからだ；それは本当のことだった。私は屈辱的な手紙や電話に曝され続けている。相手はNASAのジェームズ・オバーグ(*宇宙ジャーナリスト兼歴史家)やフィリップ・J・クラスのような懐疑論者だ。彼らは私をけなすことに執心する、米国政府に雇われている密告者だ。私をけなすことはよろしい。だがマンスマン小父さんをけなすことはやめたまえ！

空軍の今の立場は、そんな事件はなかったし、そのフィルムもなかったということだ。

この活動全体について私が重要と考えることは、実にこれに尽きる。人類史上最大の出来事は、我々は孤独ではない、この宇宙に他の生命体 — 知性的な存在 — がいる、そして我々はこの孤独ではない、という発見だ。それはとてつもない、大変な発見だ。我々が宇宙で孤独でないことを知るのには、人類終生の発見ではないか？それがこれらについて話すことが重要だと私が考える理由だ。それはとても胸が躍るものだ。結局我々は動物進化の最終形態ではないことを受け入れ、成長し、それを認識することが、人間である我々にとって重要だと考えるからだ。そこには我々よりも大きく、もっと心躍る何かがあるかもしれない。そして、もしかしたら彼らは我々に何かを語りかけているのかもしれない。

なぜなら、私があの日見たものは模造弾頭を撃ち落とす何かだったからだ。あのことから私はどんなメッセージを受け取ったか？核弾頭を弄ぶな。これがおそらくそのメッセージだったと私は解釈する。たぶん何者かが我々がモスクワを滅ぼすことを望まないのだ； たぶん我々はそうすること

をやめるべきなのだ。

[複数の地球外輸送機が核施設に現れた後で、これと同じ結論に達した多くの軍人に私は面談してきた：おそらく地球外の他の人々は恒星間旅行の段階に達し、これらの兵器がいかに危険かを、またその使用が我々の文明を終わらせることを知っている。そして間違いなく彼らは、我々がこのような兵器を持って宇宙に進出するのを望まない。SG]

ロナルド・レーガンはある夜テレビ出演し、とても驚くべきことをした。彼は全米国民の前で次のように言ったのだ。我々は一つの防衛の盾を構築するつもりであり、それは SDI (Strategic Defense Initiative)、戦略防衛構想と呼ばれることになる。その使命は我々を、我々のすべてを防御することである。ロナルド・レーガンはこれをすべての人々と共有すると言った。我々はそれをロシア人と共有する — 我々の敵、ほんの数年前までは双方互いに滅ぼす間柄のふりをしていた。今突然に、我々は一つの盾で彼らを防御しようとしている。誰から彼らを防御しようというのか？

おそらく、あれは最初の威嚇射撃だった。君たち、こんなことはやめなさい、大人になるときだ。こう言っている者からの最初の警告射撃だった。君たちはこの惑星を破壊したくない、そうだろ？このまま続けたら...

そこで起きたことについての私の解釈をあなたに話したが、これは私自身の推測だけに基づくものではない。私はこれまでの年月の間、他の資料も読み、他の人々とも語り合ってきた。たぶん我々の被害妄想は事実無根だ。もし我々が優れた技術を持つ存在に遭遇したなら、おそらく喜んで彼らを受け入れ、友好的になるだろう。なぜなら、彼らは我々に生き延びる術を教えているかもしれないからだ。

米国空軍大佐(退役)／原子力委員会 ロス・デッドリクソンの証言

Testimony of Colonel Ross Dedrickson, US Air Force (ret.)/AEC

2000年9月

デッドリクソン大佐は米国空軍の退役大佐だ。彼はスタンフォード経営学大学院(ビジネススクール)に入り、そこで経営学を学んだ。1950年代、彼の任務の一部はAEC(原子力委員会)のために核兵器貯蔵の在庫目録を整備し、安全調査団に同行して兵器の安全を点検することだった。様々の核貯蔵施設と幾つかの製造工場で UFO が目撃されたという報告が続いた。彼自身それらを何度目にした。1952年7月に首都で起きた有名な(*UFO 編隊の)上空飛行のときには、彼自身そこにいた。その事件で彼は照明をつけた9機の円盤型機体を見たことを覚えている。彼はまた、宇宙に向かった核兵器を地球外知性体が破壊した少なくとも二つの出来事についても語る。その一つは、月面爆発を試すために月に向かった場合だった。それが破壊されたのは“宇宙での核兵器...は地球外知性体にとり容認されない”からだった...

RD: ロス・デッドリクソン大佐

SG: スティーブン・グリア博士

RD: ... 私が1952年に原子力委員会にいたときに、最初のUFO事件を経験した。それは7月中旬のことで、それらは首都ワシントン上空を飛行した。私は初めて9機のUFOを見た...

私は原子力委員会委員長と国防長官をつなぐ、軍事連絡委員会の参謀将校だった。私は陸軍、海軍、空軍だけでなく、民間機関、CIA、国家安全保障局、また私が関係を築いた他の接触者たちと懇意になった。その時期の私の任務の一つは、すべての核施設を視察し、その兵器の安全性を点検する安全調査団に同行することだった。我々は貯蔵施設の上空、ときには製造施設の上空にさえ、UFO が飛来したという報告を受けていた。それはひっきりなしに続いていた...

1950年代を通じて続いた長くつらい期間の後、私は1960年代にはフェルト提督のもとにある、統合司令部に配属された。私は核兵器作戦計画に関わる指揮所の予備位置(Alternate command post)担当になった。その期間中、私はNORAD(北米防空軍)、SAC(戦略空軍)作戦との連絡を維持し、核兵器使用のための作戦計画に関わった。またこの同じ期間に、私はUFOに関係して起きた数々の事件を知った。さらに年月が経ち、私は空軍を退役しボーイング社に入った。そこで私はミニットマン計画の担当になり、ミニットマンI, II, III すべての核部隊の経理責任者になった。この期間に、私は核兵器に関係した事件についても知った。これらの事件の中には、宇宙に送られた2個の核兵器が地球外知性体により破壊されたというものがあった...

SG: 核施設上空への飛来は深刻に考えられていましたか？

RD: そうだ。まったくそのとおりだ。実際、それらはあまりにも深刻に考えられていたので、目撃者はしばしばそれを報告しようとしなかった。というのは、非常に多くの官僚主義、手続き、その他いろいろなことが関係するからだ。彼らは故意にそれらを報告しようとしなかった。UFO が少なくともレーダーか報告により確認された大部分の事例で、なんと彼らはそれらを迎撃するために航空機を緊急発進させようとした。それは我々自身の政府による非常に好戦的とも言える反応だった。太平洋上空で1個の核兵器を爆発させたときに起きた一つの事件があった。1961年頃だったと思う。[ET たちにとり]核爆発が引き起こした驚愕すべき事件とは、太平洋海盆全体に及んで通信が数時間も遮断され、無線通信がその間全然使えなかったことだった。これは非常に深刻だった。そして当然これは地球外知性体が本当に興味を持っていたことだった。というのは、それは地球の電離層に影響したからだ。実際に、ET 宇宙機は操作不能になった。なぜなら、彼らが依存している磁場が汚染されたからだ。私の理解では、1970年代の終わりか1980年代初めのいずれかに、我々は核兵器を月に送り、科学的データを取ったり他のことのためにそれを爆発させようとした。これは地球外知性体にとり容認できなかった。

SG: それで何が起きましたか？

RD: ET たちは、その核兵器が月に向かったときに破壊した。宇宙空間における核兵器爆発は、地球のどの政府によるどんな爆発であれ、地球外知性体にとり容認できなかった。そのことは繰り返し繰り返し行動で示されてきた。

SG: どのような行動で示されてきたのですか？

RD: 宇宙に送られたあらゆる核兵器を破壊することにより示されてきた...

その後、我々がロスアラモスとリバモアを訪れたとき、人々は地球外技術に関心を持っていた。並々ならぬものだった。

SG: 彼らの話から、地球外起源の物質がそこで研究されていたようでしたか？

RD: そのとおり、そのとおり。実際、それはエリア 51 が悪名高くなった時期だった...

米国海軍 ハリー・アレン・ジョルダンの証言
Testimony of Harry Allen Jordan, US Navy
2000 年 11 月

ジョルダン氏は米国海軍で 6 年半を過ごしたが、1962 年には米空母ルーズベルトでレーダー操作員をしていた。作戦情報の訓練を受けていた彼は、機密取扱許可を持っており、電子妨害活動にも関わっていた。彼は次のように証言する。ルーズベルトのレーダー操作員だった彼は、時速約 1,000 ノットで移動する、大きさ約 65,000 フィートの巨大な物体をレーダーで捕捉した。艦長は 2 機のファントム 2 を調査のために発進させた。ファントムがその UFO に近づくと、それは消えた。約半時間後にそれは再び現れたが、今度は空母にさらに近かった。その出来事の後で受けた脅迫について、彼は語った。後に彼は、その前年にルーズベルトが巨大 UFO 事件に遭遇し、それが写真に撮られたこと、1 機の円盤が雲から降下してきたのを人々が見たことを知った。このことはルーズベルトが核兵器を装備してからさらに頻繁になった。海軍を除隊してから何年か経ち、ジョルダン氏は自分の HAM ラジオでスペースシャトル STS48 の交信を聞いていた。そのとき、彼らが異星人の宇宙機を見たと話しているの聞いた。何を聞いたかが知られた後で彼が受けた嫌がらせについて、彼は語る。

... とにかく、私は 2 回目の地中海航海の深夜勤務に就いていた。それはまさに、午前零時と 2 時の間のことだった。私はレーダー画面で捕捉した...

この目標は約 65,000 フィートあり、信号の強さは洋上の空母のそれと同じくらいだった。だからこの捕捉は巨大なものだった。これは私の注意を引き、また勤務中の他の人々の注意を引いた。これが起きたとき、4 人の下士官と 2 人の将校が勤務に就いていた。我々はそれが何であるかを厳密に調べ、そのコードを照合した。それは商用機ではなかった。そのとき物体は、最初かなりゆっくりと動き始め、次に速い動きになった。その移動速度は 1,000 ノット以上だった。私が最初にそれをレーダーで捕捉したとき、それは空中静止していた。それからそれは約 1,000 ノットで動き始めた。次に我々がそれを捕捉しようとしたとき、それは 500 マイル彼方にあった...

この事例では、それは高度検出装置に現れ、またレーダー装置に現れた。司令官が入ってきて、ここで一体何が起きているのかを知りたがった。彼らはそれを見、それは何だと訊いた、いいですか？それはそのときの艦長の注意を引いた。クラーク艦長だ — 私の司令官はギブソン中佐だった。電子妨害任務に就いていたのはたった一人だった。15 分もすると空母の向きが変えられ、2 機のファントム 2 が発進体制に入った。

今や私はヘッドホンをつけ、SPA8 中継装置に向かっている。そして私はパイロットと航空作戦司

令官との間の通信を聞いている。司令部に行くところと同じことをするし、司令部にいたときの私の任務は、我々の分艦隊司令官の横に座り航空機の通信を聞くことだったから、私はこれと同じことをしていた。私の仕事はすべての目標捕捉通報(tally-ho;タリホー)など、何でも記録することだった[タリホーとは戦闘機パイロットにより目標が捕捉されたときの暗号である]。認識専門家としての私の仕事は、様々な海軍艦船、外国艦船、民間船、海運船、および航空機を識別することだった。識別は電子的のみならず、視覚的にも行なわれ、電子的な特徴には精通していた。

とにかくそれらのファントム2は推力を全開にした。彼らはこの捕捉地点から約100マイルの所で、自動追跡(lock on)にするために円錐走査レーダーのスイッチを入れた。するとこの物体は消えた。彼らは約10分間飛び回り、空母へと機首を向けた。

約35分後に彼らが帰還した後、この物体は再び現れた。それは空母から約12ないし15マイルの地点にあり、約30,000フィートの高さで空中静止していた...

もちろん私は何も話せなかった。私は何も話さなかった。というのは、私は司令官からこう言われていたからだ。ジョルダン、いいかい、君の日誌に書いてあったあのことは、決して起きなかった。あの夜にそこで任務に就いていたのは私だけではなかった。だから、あの夜にそこにいた者は誰でも私が何を語っているかを知っているし、それが真実であることも知っている。しかしあの夜に起きたことを知っている人間は10人足らずだった。その空母には5,000人が乗艦していた...

この事例では、レーダー捕捉に何の熱的痕跡も残らなかった。それは何の航跡も残さなかった。それは通常で動いていなかった。この物体は30秒間に10マイル、15マイルを移動した。20マイル、30マイル、次に40マイル、そして100マイルだ。3分半の間に、この物体はほとんど500マイルを移動した。それはある高度から別の高度へと、通常のパイロットなら意識を失うような飛び方をしていた。これは現実の捕捉だった。あの距離と高度にあったこの捕捉からの反射信号は、ルーズベルト自身からの反射信号と同じくらい強かった。そしてルーズベルトは1,000フィート以上の長さがあった。

私のよく知らない一人の少佐がやってきて訊ねた。どうしたんだ、ジョルダン？日誌に何が書いてあるんだ？彼は、君はそれをそこに書く必要はない、と言った。私にとって航海日誌にあのことを書くなどということは、きわめて変則的なことだった。私はそれに捕捉のことを書いた。私はUFOについて書き始めていた...

その後何年か経ち、[スペースシャトル]STS48飛行任務の最中のことだった。彼らは軌道上にいた。私はHAMラジオを聞いていた。私はオムニアンテナ(OMNI antennae;無指向性アンテナ)を持っていた。宇宙飛行士たちは‘我々は今UFOを観察している’と言っていた。次に私が聞いたのは、彼らが異星人の宇宙機を観察していると話していることだった。私はそれを聞いたHAM無線士の一人だった。それで私はカシャー博士にそのことで電話をした。彼は私の友人で、私が教えている学校に息子を通わせていた。私は彼に、彼らが異星人の宇宙機について話していると教えた。彼らは通信チャンネル上で実際にその言葉を使うのだ。私は驚いた。本当に私は驚いた...

後に私は、インターエージェンシー(Inter-Agency;省庁間調整機関)の車が道路を挟んで向か

い側にあり、スーツを着た男たちが私の写真を撮っているのを見た。彼らは我々がワールズ・オブ・ファン (Worlds of Fun; カンザス市にある遊園地) にいたとき、カンザス市でも私と妻の写真を撮った。私はこのことを他の人々に話した。というのは、ここで起きていることに私はとても憶病になっていたからだ。私はその車のナンバーを書き取ったが、それはある空軍基地に登録されていた。

一人の空軍情報将校が私の家を訪ねてきたこともあった。...

この惑星は知性の禁欲主義者になりつつあると私は思う。人々は呆然として歩き回っている。彼らは何が進行しているのか、考えもしない。多くの企業は[UFO に関係した研究と物質により]富を得てきた。なるほど彼らは、概して我々のすべてに利益をもたらす技術的变化を人類に与えてきた。だが、そのすべてが生じたところの肉とソースを分かち合っていない。詰まるところ、彼らは UFO についての真実を共有していない。...

米国海軍／国家安全保障局 ジェームズ・コップ氏の証言
Testimony of Mr. James Kopf, US Navy/ National Security Agency
2000 年 10 月

コップ氏は 1969 年に海軍に入隊した。彼は核兵器を装備した米空母ジョン・エフ・ケネディ (JFK) に乗艦していたとき、通信部に勤務した。彼は 1980 年から 1997 年まで NSA (国家安全保障局) で働いた。証言の中で彼は、1979 年夏、オレンジ-黄色に輝く 1 機の巨大な UFO が上空に空中静止したとき、空母ジョン・エフ・ケネディに搭載されたすべての電子機器と通信設備が機能を停止した様子について語る。彼は明滅する UFO を自分の目で見た。見た者は他にも大勢いた。8 台のテレタイプ全部がでたらめを打ち続けており、空母は 2 時間にわたり戦闘配置体制をとった。彼の友人のレーダー操作員は、レーダー画面が輝き、次に真っ暗になったと彼に語った — 彼らは何も検出できなかった。この事件の数日後、艦長と副艦長が全艦内テレビに出演し、艦内で起きたある種の出来事は機密事項と見なされるので、誰とも議論してはならないと乗組員たちに告げた。空母が最後にバージニア州ノーフォークに帰港したとき、スーツを着た男たちがやってきて、様々な乗組員たちに聞き取り調査を行なった。

JK: ジェームズ・コップ氏

SG: スティーブン・グリア博士

JK: ... 8 台のテレタイプ全部が、完全にでたらめを打ち続けていた。まったく支離滅裂だった。私はメッセージの中に一つ二つの間違いを見たことはあるが、これほど酷いものは見たことがなかった。私はすぐにインターホンで施設管理部を呼び、私の放送が止まったと彼らに言った。彼らは私に、全艦にわたりすべての通信機能が停止しているので忙しい、と連絡してきた。こんなことはこれまで起きたことがなかった。

我々はインターホンと気送管システムを一つずつ持っており、それらは通信室と空母の島型艦橋の頂部にある信号ブリッジとを繋いでいた。我々は次のように叫ぶ、とても興奮した声を聞いた。“神がここにいる、この世の終わりだ” 我々は顔を見合わせ、何かがおかしいと考えた。そこで何が起きているのだ？さらに数秒して、今度はもっと落ち着いた声が入ってきた。この人物は空母の上空に何かがいると言っていた。そこで私は乗艦仲間である友人を見、彼は私を見、我々はそれを

見に行くことにした...

我々は通信センターを出て、飛行甲板の縁にある左舷側の狭い通路に向かった。そこで我々が見たものは、空母の上空に浮かんで輝く1個の大きな球体だった。その大きさを決めるのは難しかった。というのは、我々の視野は狭かったからだ。夕方も遅くなっていた。陽はとっくに沈み薄暮だったが、それは巨大に見えた...

その後で、私は同乗していた数人の乗艦仲間に話しかけた。一人はレーダー一部の友人だったが、その事件のとき任務に就いていた。彼は私に、すべてのレーダー画面が輝いて - 次に何も映らなくなったと言った。彼らはレーダーで何も検出できなかった。我々はそのことについて語りながら、ほとんど夜を明かした。

聞いたところでは、艦橋のコンパスは機能せず、レーダー航法システムは遮断された...

数日後、艦長と副艦長が艦内テレビに出演した。それが5,000人の乗組員に向かって話しかける唯一の方法だった。彼[艦長]はカメラを見て - 私は決してこれを忘れないだろう - こう言った。“乗組員諸君に告ぐ。海軍の主要な戦闘艦で起きた出来事は機密事項と見なされる。したがって、知る必要性を持たない誰とも議論してはならない”これが彼が言ったことのすべてだった...

そのUFOは空母の上空にせいぜい5分くらいしかいなかったが、機器の混乱は少なくとも1時間続いた。我々が2時間にわたり戦闘配置についたのは、そのためだった。彼らはそれが戻ってくるか確かめるために待っていたのだと思う。彼らは、なおシステムを再稼働させ、全機能を回復させようとしていた。それには少なくとも1時間はかかったはずだ。

飛行中の航空機はなかった。その事件が始まったとき、航空機はすべて艦上にあった。空母には2機のファントム4があり、それらには空中警戒待機(CAP; Combat Air Patrol)への準備が指示された。私が聞いたところでは、それらは作動しなかった。彼らはそれらのジェット機を始動させようとしたが、始動しなかったと聞いている。それらは作動不能になっていた...

この空母にはIOIC(Integrated Operations Intelligence Communications)と呼ばれる組織があった。統合作戦情報通信、何かそのような趣旨だ。聞いたところでは、彼らはこの事件の間中、そこにいてこの物体の写真を撮っていた。

政府の誰かが我々よりもこのことについて多くを知っていると確信している。これが隠蔽されている理由について、私なりの考えがある。この情報が国民に知らされていない多くの理由があると私は考えている。

SG: それは何だと思えますか？

JK: 一般国民が地球外知性体訪問についての知識に対処できないと彼らは考えているのではないか。この国の経済を著しく損ねる情報を彼らが持っているのではないかと私は考えている。エネルギーをとっても安価に、汚染を伴わずに発生できる装置があるが、企業の貪欲がそれを封じて

いるのではないかと私は考える。

この隠蔽について私を最も悩ますのはそのことだ。私が思い巡らすのは、地球を蝕むあらゆる汚染、守ることができたはずのすべて...

ジョー・ウォイテッキ中佐の証言

Testimony of Lieutenant Colonel Joe Wojtecki

2000年10月

ウォイテッキ中佐は空軍で20年間を過ごし、1988年に退役した。そのほとんどの期間を戦略空軍と戦術空軍に勤務した。彼は1969年4月のある夜のことを語る。そのとき彼はメイン州ローリング空軍基地にいて、彼と彼の飛行教官は共に、空を横切って移動する完全な等辺三角形配列をした、とても明るく輝く3個の光体を見た。彼らの推定では、このUFOの高度は3,000フィートより低かった。翌朝彼が出勤したとき、1機のUFOが6時間にわたり、核兵器を搭載した一群のB-52の上空に空中静止しているのが見られたことを知った。その光体群に飛行機が近づくと、それらは分離し、見たこともないような動き方をした。飛行機が去ると、その光体群は再び一群のB-52の上空へと集まってきた。何年も経ってから、ウォイテッキ中佐はSG(スティーブン・グリア博士)によるある講習会に参加し、1機のUFOの写真を見たが、それはまさに何年も前に彼が見た形状だった。

JW: ジョー・ウォイテッキ中佐

SG: スティーブン・グリア博士

JW: ...我々が車から降りたとき、私の飛行教官が北東方角の滑走路を振り返り、あれは何だ?と言った。私も彼が見ていた滑走路の向こうにある空を見上げた。我々が見たものは3個の輝く別々の光体だった。3個の分離した光体だった; 我々にはそれらが分離しているように思えた。それらは完全な等辺三角形で、南側に1個、そのすぐ背後の他の2個は北側にあった。光体のこの配列を我々は暫く注視した - 10ないし15分間、我々はそれを注視した - が、この奇妙なもののはじめ無音だった。次にそれはゆっくりと動いた。しかしそれは完全に一定の高度、速度、北から南への移動方向を保った。後で我々は記憶をつなぎ合わせ、それが私の飛行教官がそれより前にキラッと輝く光を見たと言ったことを知った...

翌朝私は出勤した。これは4月18日の朝となるはずだった。私の日課の最初は飛行隊指揮所での起立報告だった。ここは戦略空軍基地であり、私が覚えている限りB-52飛行隊が3部隊、135(*KC-135空中給油機)飛行隊が2部隊、F-106迎撃飛行隊が1部隊あった。私が翌朝6:30に指揮所に着くと、そこはいつになく活動的で、多くの人員が配置されていた。実際、それはミツバチの巣をつついたような状況だった。そこにいた人々は、彼らの全体的な外見とはっきり見て取れる消沈した様子から、明らかにほとんど夜を徹してそこにいた。私は直ちに、夜に起きたことが飛行教官と私がこれらの光体を見た頃の時刻から始まったことを知った。これらの光体は、まさに警戒態勢下にあるB-52部隊の上空、多数のB-52発進場の上空に滞空したようだった。これらは戦時任務遂行を想定して構成されている。だから当然、これはとても機密性の高い区域だった...

出撃隊が戻ってきたとき、夜通し任務に就いていた彼らは、これらの光体に接近し、その正体を確かめるように言われたと私に語った。これには彼らの特殊訓練任務中にあったB-52, KC-135,

数機の F-106 迎撃機が含まれていた。そして同じことの繰り返しだった。ある航空機が接近しようとする、その光体群はそこにいた誰もが持っていた、あるいは説明できた、いかなる空気力学的知識をも否定するような動きで分離した。急に加速し、垂直方向を含めて進行方向を急に変えた。それらは、我々が理解する空気力学の法則に従って飛ぶものならなし得ないはずのことをしていた。そして必ず彼らに関心を持つ地点に戻った。そこは航空機がある監視区域だった。夜も更けたある時点の早朝に彼らは好奇心を満ち、素早く一直線にそこを去って行ってしまった。

この事件が起きてから終わるまでどれくらいの時間が経ったのか、私の推測だが、おそらく 6 時間かそれ以上は続いていた。

それで私はこの事件を整理してしまっておいた。私はこれについて熟考し、長年にわたり少数の人々と議論したが、多くの人とはしなかった。これが 1990 年代のある日 — 正確な年と日付は忘れたが 1993 年か 1994 年頃だった — バージニア州ハンプトンのスティーブン・グリア博士による講習会に参加する機会を持つまで続いた。そこで見た 1 枚の写真は、今でこそ私は理解しているが、実際に UFO を見るという特権を得た人々の間ではとてもよく知られている目撃写真だった。私はその写真を見て、文字どおり席から飛び上がり、妻の手を掴んでこう言った、見たのはこれだと。それは私が 25 年近く前に見たものだった。その時点での話だ。しかし、その写真を見てよみがえったその光景があまりにも明瞭だったので、私の心には 1969 年 4 月に滑走路の向こうに見たものと同じだということに、何の疑念もなかった。そのときになってやっとそれが三つの別々の機体ではなく、実際は一つの機体だったという考えを持ったのだ。

そうだったに違いないということ、私は幾つかの情報をもとに推測するのだ。帰還する航空機により繰り返し試みられた接近は、それらを視認できない距離と高度から行なわれた。その夜は雲底が低かったからだ。そのことから私が推測するのは、それらは地上管制レーダーと基地に帰還する航空機搭載レーダーの両方で追跡されていたということだ。それらがレーダーで容易に追跡できていたと推測するのは、理に適っているだろう...

私ははっきりと覚えているが、その光体群に対して空軍、その航空隊の誰によっても、いかなる敵対行動もとられなかった。というのは、実際にそれらは少しの敵対的、威嚇的な振る舞いをも示さなかったからだ。それらはただ禁止空域にいただけだった。彼らは何らかの防衛行動を発動させることは何もなかった...

SG: それは通常の飛行機よりも大きかったですか？

JW: 間違いない。私が見た写真を見て大変驚いた理由はそれだった。あのとても離れていた光体群は、たぶん一つの機体の一部だったのだ。今にして思えば、その配列はあまりにも完璧だったが、私は自然にそれを独立して作動する別々の機械だと見なし、何年もの間そう信じていた。しかし、そう考えるべき理由はどこにもない。ただ、それらが一つの機体の一部だと考えると、その機体は何物と比べてもあまりに巨大でなければならなかった。当時 B-52 はとても大きい飛行機と考えられていた。もちろん、これは B-52 の機体の一部だったかもしれない何物よりも、はるかに巨大だった。

米国空軍三等軍曹 ストニー・キャンベルの証言
Testimony of Staff Sergeant Stoney Campbell, US Air Force
2000年10月

キャンベル軍曹は1966年に空軍に入隊した。1967年夏、彼はオクラホマ州にあるSAC空軍基地で1機のB-52を警備していた。そのとき突然、B-52の真上に巨大な青みがかかった靄(もや)が現れた。それはブーメラン翼の形をし、輝き、固体ではなかった。それはレーダーに捕捉され、多くの人々がそれを見た。

...これは30年かそれ以上前のことだ。この出来事はオクラホマ州アルタスのSAC基地で起きた。私はB-52を警備していた。SAC(Strategic Air Command)は戦略空軍で、我々は核兵器を警備していた。私は警備の任務中で、爆撃機区域で1機のB-52を警備していた。そこは我々がハリーハウスと呼ぶ真ん中の建物で二つの区画に分割されていた。そこは将校や乗組員たちが待機し、警戒態勢に入ったときに素早く飛行機へと散らばるための場所だった。これは1967年夏のことだったかもしれない。夏の季節だった。両側におよそ4機ずつの飛行機があった。たぶん夜遅くのこと、真夜中から朝にかけての時間帯だった。突然、核兵器を装備したB-52のうち1機の上空に、青味がかかったも靄(もや)が現れた。それはほとんどブーメランまたは翼の形をしていた。この靄の中に1個の輝く光体があった。我々はそれが何であるか、まったく分からなかった。SAC部隊に準備命令が出され、彼らが飛行機に向かったのを我々は確かに知っている。しかしその前に、これ[物体]は飛行機の上に少しの間空中静止し、消えた。それがレーダーに捕捉されていたことを、我々は後で聞かされた。それは滑空してそこを去ったのが見えたというのではなかった。それはヒュッと瞬く間になくなった。

それはB-52の翼幅のほとんどを覆っていた — それは大きかった...

3.8.4 政府部内者/NASA/深部の事情通

序文

(グリア博士による口頭説明より)

この節であなたは、地球外起源の物体が着陸したり、墜落または強制着陸させられて回収されたりした事件に関わった人々の話を聞くことになるだろう。これは当然ながら爆弾証言である。それはこの現象の現実性と、我々がこの現象を多年にわたり研究してきたことを立証する。多くの人々は、これがいわゆる1940年代の“ロズウェル事件”だけのことだと思うかもしれない。それは事実とまったくかけ離れている。実際には多くの、少なくとも数十の事件が発生しており、その中で地球外起源の物体が撃墜され、取得され、研究されてきたのである。

これはきわめて重要なことだと我々は考えている。なぜなら、秘密計画 — 数十年にわたり数千億ドルもの資金を地球外技術の、いわゆる“逆行分析”または“分解工学”(“reverse engineering” or “back engineering”)の研究開発に費やした — が飛躍的発明をしていないなどとは考えられないからである。証言は我々が実際にそれを成し遂げていることを示すだろう。我々は大発見をし、そ

れが電子技術, 物質, および科学という形で少しずつ社会に漏れ出してきた. しかし, 量子真空物理学 — いわゆる“ゼロポイント・エネルギー”現象や反重力, 電気重力推進など — を扱う重要な大躍進は, 我々の社会に公表されないで来た. 加えて, 地球外技術と地球外知性体を研究する諸計画は, 現在も進行中のプロジェクトなのだ.

このことは世界と科学界にとりきわめて重大であるが, それよりもっと重大なのは, 我々の当局者たちがこの主題について適切に説明されてこなかったということである.

宇宙飛行士 ゴードン・クーパーの証言
Testimony of Astronaut Gordon Cooper

1999 年

[このインタビューを我々と共有してくれたフォックス氏に感謝する]

ゴードン・クーパーはマーキュリー計画の7人の初代宇宙飛行士の一人であり, 単独で宇宙飛行をした最後の米国人だった. 証言の中で彼は, ドイツ上空で彼の戦闘機編隊と同じ編隊を組んで飛行する UFO を見た様子を詳しく語る. これらの UFO は, 通常の戦闘機ではなし得ない操縦をした. それらが見せた模倣的な操縦の様子から, それらは相互交信のために知的に統制されているに違いないと彼は感じた. 別のときには, 通常の航空機の精密着陸を撮影していた彼らの頭上に 1 機の円盤が飛来し, ある乾燥湖底にいた彼らの前方に着陸した. その全貌は詳細な近接映像とともにフィルムに収められた. そのフィルムはワシントンに送られたが, 戻ってくることはなかった.

GC: ゴードン・クーパー

JF: ジェームズ・フォックス

GC: 我々がドイツで飛行中, これらの物体[UFO]は我々の戦闘機編隊と同じ編隊を組んで頭上を飛行し続けた. 我々は F-86 で飛行していた. それらは頭上を飛行し, 我々と同じ操縦をした. 違ったのは時々そのうちの 1 機がヒュッと動き, 通常の戦闘機ではなし得ない操縦をしたことだ.

これらが現れたとき, 気象予報官は気象観測気球を追跡していて, これらの物体を双眼鏡で捉えた. 人々は外に飛び出し, それらを見た. そして, それらが何であるかを調べるために飛行機を何機か発進させることにした. しかし彼らはそれらに追いつくことができなかった. それらはもっと高く, もっと速かった. だから我々は, それらが大きくて遠かったのか, 小さくて近かったのか, 分からなかった. それらの大きさがどれくらいだったかを正確に測定することは難しかった.

[ゴードン・クーパー宇宙飛行士と他の人々は気象観測気球を見分けることができたし, これらの UFO は馬鹿げた政府見解が 50 年以上にわたり主張してきたような“気象観測気球”ではなかった. SG]

JF: それらは編隊を組んでいたのですか?

GC: それらは間違いなく編隊を組んでいた.

JF: いつのことでしたか?

GC: 1951年のことだった.

JF: 当時ロシアがそのような[動きを可能にする]技術を持っていたと思いますか？

GC: 思わない.

JF: それらが知的な統制下にあった物体だとあなたは考えたのですね？

GC: そのとおり. それらの配置はでたらめなどではなかった. それらははっきりと統制された戦闘機編隊で飛行していた.

JF: それらは何に似ていましたか？

GC: それらは典型的な皿型だった. 2枚の皿を重ねた金属製のようだった. それらは間違いなく操縦者のいる輸送機だった. それぞれに操縦者が乗っていた. それらは確かに相互交信していた. というのは, それらの旋回の仕方から判断して, 協調行動のためには交信していなければならなかったからだ.

1機は横にヒュッと移動した. 横方向への移動だった. . .

後に私がエドワーズ空軍基地にいたとき, 私は精密着陸を撮影するカメラマンたちと一緒に, ある乾燥湖の縁にいた. 1機の円盤が頭上に飛来し, 3個の着陸ギヤを出し, 乾燥湖底に着陸した. 彼らはカメラを持ってそこに行った. . . そのUFOに向かったのだ. それは浮揚し, ギヤを脚収容部に引っ込め, 大変な高速で飛び立ち, 消えた.

こうして私があらゆる規則書を細かく調べ, このことをワシントンに報告するための電話番号を探している間に, そのカメラマンにフィルムを現像しに行かせた. 彼らが現像したフィルムを持って戻ってきたとき, 私ははるかに高い位の将校たちと話をしていた. 最終的に, そのフィルムが私の机に届いたとき, 一人の大佐が私にそれを伝書ファイルに入れるように言った. 私の事務所から伝書便が出ることになり, 彼がこれらのフィルムを持って我々の基地の飛行機に乗り, ワシントンに飛ぶ手はずが整えられた. [その大佐は]焼き付けやその他あれこれを禁止した. だから我々はそれらを伝書便小包に押し込んだ.

JF: あなたはそのフィルムを見ましたか？

GC: 我々にはそれを焼き付ける時間がなかった. 私はなんとかそれを窓辺で透かして見る事ができた. それは確かに申し分のないフィルムだった.

JF: 近接映像はありましたか？

GC: 見事な近接映像があった. それまで見たことがないものだった.

JF: 近接撮影されたその輸送機は、あなたが以前見たものと似ていましたか？

GC: ほぼ同じ形だった。2枚の皿を合わせた形だった。表面には翼など何もなかった。それは[我々がドイツで見たものと]ほとんど同じ形だった。

これが起きたとき私は研究開発に関わっており、その開発センターで大変機密性の高いプロジェクトを遂行していた。当時の我々には[あのような]どんな輸送機もなかったことを私は知っていた。ロシアがあのようなタイプを持っていなかったことを、私は 99.9 パーセント確信している。あの時点で私は、それがこの地球以外のどこかで製造されたものであることに何の疑いも持たなかった。

だがそれ[証拠]は、指示に従って直ちに送られ、また物事は彼らが言ったとおりに行なわれた。その当時、私は誰も知らないある小さな計画に従事しており、それについて家族とも誰とも議論することを許されていなかった。それは U-2(*高々度偵察機)計画だった。それ[この事件]は実際に同じ[機密の]分類だった。

[それがどうしてこれほどの機密なのか]私には分からない。私の考えでは、折しも第二次大戦の直後であり、この種の性能を持つ輸送機を何者かが持っていることを国民が知ったらパニックになることを、彼らが恐れていたのではないか。だから彼らはそれについて嘘をつき始めた。その次には、最初の嘘を隠すために別の嘘をつかなければならず、今や彼らはそれから逃れられなくなっているのではないか。これらすべての政権が、多くの虚偽を語ってきたことを認めるのはあまりにも決まり悪くなりつつある。それから抜け出すのは厄介なことだろう

JF: 彼らはそれから抜け出したいと考えていますか？

GC: 基本的にはどの政権もどの大統領も、おそらくそれから抜け出し、この事態について一切を白状し、虚偽を続ける必要がなくなることを望んでいるだろう。そうになると、彼らの全部が顔に卵をぶつけられ、自分たちがまったく誠実でなかったことを認めざるを得ない状況になるだろう。

JF: 誰がこの秘密を守っているのですか？

GC: 誰かがこれをかなり長い間、深い秘密のままに保ってきたのだ。

[1970年代に UFO について国連事務総長と会見することを求められたとき、ゴードン・クーパーはこう言っている] “クルト・ワルトハイム(*国連事務総長 1972-1981)は、この主題について真実関心を持っていた。そして彼は委員会を組織し、[国連の]そのレベルで調査を行なうのはよい考えだと言った。しかし何もなされなかった。それは国連の典型的な反応だった。彼らはよい方策を語ったが、それについて何かを行なうために動き回ることを決してしない”

NASA 自身のデータによれば、生存可能な惑星は他に約 400,000 個ある。神がこの 1 個の惑星だけに人を住ませ、他のすべての惑星を空けておくなどということは、私には信じられない。私の個人的見解だが、我々は銀河世界の僻地に存在している気がする。我々は枝の先にいる。これら

の銀河はすべて互いにより接近しており、おそらく彼らは互いに頻繁に往来していると私は考えている。時々我々は遠く離れた他銀河から旅行して来たり、迷い込んだり、少しの間立ち寄りたりする少数の人々を迎えることになる。

私は国連レベルで一つのグループを組織し、世界中から情報を集め、国連レベルでそれを処理し調整することを提案する手紙を[国連に]書いた。情報を持っている国々は数多くあった。今のロシアのような国々が多い。現在ロシア政府は、複数の民間 UFO 団体と直接連携している。状況は国により異なる。しかし我々はこの情報のすべてを一つにまとめ、一つの組織で相互に関連づける必要がある。

技術的立場から我々が可能にしたことをまず考えてみよ。それらの幾つかは遠隔操縦されていたかもしれない。それらは、いわば我々が無人輸送機と呼ぶものに似た無線操縦かもしれない。それらの幾つかには、疑いなく乗員が乗っていると私は考えている。私が思うに、それらの人々はおそらく我々にとてもよく似ている。

ロズウェルで墜落したのは、気象観測気球以外の何物かだったと私は確信している。

JF: 真実は失われたと思いますか？

GC: 真実は彼らが語ったすべての嘘の中に深く埋没していると私は考えている。

JF: あなたが見た円盤の一つを彼らが隠していると思いますか？

GC: とてもありそうなことだ。私は彼らとその逆行分析 (reverse-engineered) を行ない、それから何か役に立つことを得たと考えたい。そうするのが論理的というものだ。

JF: 滑走路に着陸した空飛ぶ円盤のフィルムがどこに行ったか、あなたは知っていますか？

GC: それはワシントンに行った。私が知っているのはそれだけだ。

JF: そのことであなたは誰かと連絡を取り合ったり議論したりしたことがありますか？

GC: どうしたら私が誰かと連絡を取り合うことができたでしょうか？ 軍や政府において機密扱いの何かを追跡する方法は、それに直接関わっていない限り、ない。そして私は関わっていなかった。何が起きたかを知る方法は、私にはなかった。

JF: それはブルーブック計画の調査の一部でしたか？

GC: いや、そうではなかった。私がブルーブック計画について持っていた不満の一部はそのことだった。私の考えでは、ブルーブック計画はまったくの取り繕いだった。

[ブラウン中佐やウッド博士のような、他の高位の目撃証人たちも同じ結論に達している： ブル

ーブックは宣伝用の取り繕いであり、本当の調査はどこか別の所で行なわれた。SG]

ブルーブックに含まれなかった事柄で私を知る機会を得た数多くの出来事があった。

私の考えでは、彼らはどこか他の惑星からやってきている。私の中に疑念はない。彼らは実在しており、いずれは他の惑星から地球への定期便があることを我々は知るだろう。

我々が見たこれらの輸送機を誰が操縦しているのか？地球外知性体のパイロットたちがそれらを操縦している。そのことに疑いはない。

['闇'または見えないプロジェクトについて訊かれて、ゴードン・クーパーは言う:]我々が U-2 計画をあのように行なった一つの理由がそれだった。我々はその計画を機密扱いにしなかった。というのは、もしある計画を機密扱いにしたら、下院議員でも上院議員でも、議会から飛び出してその詳細のすべてを語る事ができる。彼らはそうする権限を持っているのだ。彼らはあらゆる安全保障を踏みにじり、思いのままに誰にでもその詳細を語る。我々はゲイリー・パワーズが撃墜(*1960年5月1日)されるまでその計画を機密扱いにしなかった。世界は本当にU-2計画については知らなかった。少なくとも米国においてはそうだった。

[クーパーや他の人々は、機密扱いを超えたプロジェクトについて私に語った。またコーソ大佐は、E.T.プロジェクトが'脳から脳'へ伝えられると話した。UFOを扱うプロジェクトのようにきわめて厳重に保持された認められざるプロジェクトは、実際には最高機密の向こうにあり、議会や国民に対して接近の道を閉ざしている。SG]

彼ら[地球外知性体]から我々が学ぶべきことは多い。その仕事を始めるための日程を決められたらと思う。彼らはいつでも私の裏庭に着陸することができる。彼らが私の裏庭に着陸したいと言うなら、私は彼らを歓迎するだろう。

我々がもう少し進歩し、もう少し向上し、もう少し速くなれば、彼らと同じになる。

私には航空会社のパイロットをしている一人のよき友人がいる。彼は1機のUFOが翼の横まで接近し彼と並んで飛行した出来事を、これまで3回経験した。彼は大手航空会社にいる。その航空会社は乗員に対して、UFOについて語ることを許可していない。

陸軍准将 スティーブン・ラブキンの証言

Testimony of Brigadier General Steven Lovekin, Esq.

2000年10月

ラブキン准将は1958年に軍に入隊した。彼は1959年にホワイトハウス陸軍通信庁に入り、超最高機密取扱許可を持ってアイゼンハワー大統領、次にケネディ大統領のもとで勤務した。彼はブルーブック計画をよく知っており、この計画が非常に信頼できる情報源をもとに科学性の高い特定のUFO事例を記録したと語った。彼らは空軍パイロットや海兵航空隊パイロットや何人かの外国人パイロットたちにより撮られた写真と、複数のレーダー自動追跡報告書を再調査した。彼はまた、ロズ

ウェル墜落事件から持ち帰られた金属片を見せられた。アイゼンハワー大統領のもとで勤務していたときに、彼は大統領が UFO に強い関心を持っていたことを知った。しかしまた、大統領がこの問題について統制を失ったことに気付いたことも知った。

SL: スティーブン・ラブキン准将

SG: スティーブン・グリア博士

SL: 私は 1958 年にフィラデルフィアにある私立の男女共学予備校ジョージ・スクールを卒業し、その後軍に入隊した。上級歩兵隊訓練を終えて私は国防総省に異動した。そこで私は無線周波数工学局(Radio Frequency Engineering Office)に入った。そこも終えて、次は 1959 年 5 月にホワイトハウス陸軍通信庁に入った。私はアイゼンハワーのもとで 1959 年 5 月から彼が政権を離れるまで、続いてケネディのもとで 1961 年 8 月に私が辞職するまで勤務した。

私の任務は暗号処理[と暗号解読]を学ぶことだった。その処理の過程で、私はブルーブック計画[これは UFO を扱う]について多くを知った。ブルーブックは事務所でかなり公然と議論された。ブルーブックの多くの部分は議論のために公開された。また、我々に持ち込まれる案件もあった。我々が訓練を切り上げようとしていたある午後、ホロモン大佐が金属片と思われる 1 個の破片を取り出した。それはヤード尺のように見えた。その表面には文字が刻まれていた。ホロモン大佐は、その文字を我々のクラスの一人ひとりに見せた(そのとき 6 人か 7 人いたと思う)。この物体はブルーブック作戦に関係する事案からのものだと我々は告げられた。

彼らが言おうとしていたことは、こうだった。“見なさい、君たちがブルーブックで見してきたことを裏付ける物理的証拠がこれだ。今や我々はこの物質を入手し、君たちに見せることができる”そして彼はそうした。彼はさらに、その物質が 1947 年にニューメキシコで起きた地球外宇宙機の墜落に由来すると説明し、議論は長時間に及んだ。私の記憶に間違いがなければ、我々はさらに約 1 時間をこの議論に費やした。翌日それが再び議論された。彼らは遺体、地球外知性体の遺体があったことを確かに話題にしたが、彼は遺体の様子を描写しなかった。3 ないし 5 体の遺体があった。... 収容された数として私の頭に残っている数字だ。これが起きたとき、一人はまだ生きていた。その後彼がどうなったか、私は知らない。

空軍はその当時ブルーブックに大変深く関与しており、UFO についての報告や UFO について話すことに関するあらゆることが盛り込まれた厳格な規則があった。もし自分の経歴を台無しにしたいなら、その最も手っ取り早い方法は UFO について話すことだ。我々はそのように説明された。私はそのとき入隊したばかりで、階級組織の一番下にいた。我々は最高機密と超最高機密のための訓練を受けていたところであり、もしこの情報が流れたなら、我々はあらゆる種類の機密資料に接する許可を与えられなかっただろう。

我々は実に多くのものを見た。我々は数多くの UFO 写真を見た。私が見た幾つかは、たぶんあなたが今日見るものよりもよいものだった。写真は空軍パイロットたちにより撮影された。

SG: そうすると、あなたは軍が UFO を撮影した公式の写真を見たのですね？

SL: そうだ、彼らが撮影した。そのとおりだ。これらの写真を撮影したのは空軍だけではない。

幾つかは民間のパイロットが撮影した — また幾つかは海兵航空隊パイロットや外国人パイロットによっても撮影された。明らかになったことは、ブルーブックに記録されていない他機関が所蔵する他の多くの写真があることだった。そのことから推測して、おそらくそれらの写真は我々が見せられた写真よりもよいものだった。ホロモン大佐はクラスの全員にそのことを印象づけた。

[グラッジ計画についてのチャールズ・ブラウン中佐の証言を見よ。彼も本当に重大な証拠はブルーブック、場合によってはグラッジからさえも外されて区画化されたと述べている。SG]

この地球外宇宙機の破片は、灰色がかった薄片のような物質で、おそらく8から10インチの長さがあった。私にとってそれは巨大に見えた。というのは、私がこのような物を見るのは初めてだったからだ。見開かれた皆の目がその物体に集まっていた。そしてそれが何であるかを彼が語ったとき、驚愕が走った。それは不気味だった。それが初めて語られたときは部屋で1本の針が落ちててもその音が聞こえただろう。

SG: それは何であると彼は語ったのですか？

SL: 彼は、それがニューメキシコで墜落した ET 宇宙機から取られたものだと言ったのだ。そしてそれは軍が調査している残骸箱の一つにあったものだと言った。当時彼らは“逆行分析 (reverse engineering)”という言葉は使わなかったが、彼らがそれを調査する必要がある、それには何年もかかると考えていたことから、それは逆行分析と同じようなものだった。よく覚えているが、ベルボワ (Belvoir) 駐屯地にあった陸軍工兵学校 (Army Engineers) で、彼らは多くの実験を行っていた。私はそれに驚いた。そのことに私は本当に驚いた。

その刻まれた文字はヒエログリフ (象形文字) に似ていた。ヒエログリフを言い表すのは難しいが、もしあなたが何らかの古代エジプトの記録を見たことがあるなら、ヒエログリフが何かの形をなぞったものだと知るだろう。これらは何かの形を表していたように思えた。もし私がこの言語を解読する方法を見つけるための記号体系を知っていたなら、それを理解できただろう。その文字はとても印象的だった。あなたもそう思っただろう。

[別の折にラブキンはこう説明した。国防総省の彼のグループは、この物体を解読困難な高度な暗号の一つの見本として見せられたと。SG]

彼は錠のついたステンレスの箱を持っていた。まるで大工の工具箱だったが、それよりは大きかったかもしれない。彼はその物体をこの箱から出し、またこの箱にしまった。その箱にあったのはその物体だけではなくに違いない。だが彼が見せたのはその物体だけだった。このことがあったのは無線周波数工学局だ。

思い出して欲しいが、国防総省では我々に一人の中佐の教官がいた。彼の仕事は我々を教えるだけでなく、信じる者にすることだ。彼がステンレスの箱のように見える物からあの破片を取り出したときがそうだった。それは埃っぽい灰色がかった薄片で、炎で焼かれたような外観をしていた。彼は、それが彼が持っている唯一の情報でも唯一の物体でもないことを示唆した。彼は他にも幾つか持っていた。おそらくその箱にはいっぱい詰まっていただろう。私には分からないが、あれが彼が

取り出して我々に見せた唯一の破片だった。彼がそうした理由は、我々が扱っているものがそれまで扱ってきたものとはまるで異なったものであること、しかし将来はそれを扱うことになることを、我々に理解させるためだった。彼は我々に対して、将来益々この主題に関わるようになることを知らせたかったに違いない。

彼はその刻まれた文字群が指示記号だと述べた。彼が述べたのはそこまでだったが、彼はその指示が、内容が何であれ、軍にとっては継続して取り組むに値する重要なものであると推測した。これはとてつもなく重要な何かであると彼ははっきり述べた。我々は当時国防総省の地下にいた。1959年のことだ。国防総省のその区域は、きわめて厳重に警備されていた。そこで働いていた誰もが私が今語っていることを知っている。その地下では、何が進行しているかを上階の他の人々に知られることなしに、一つの戦争のほぼすべてを遂行できただろう。それほど厳重な警備だった。

私は最高機密取扱許可を得るために取り組んでいた。私は機密取扱許可を取得しており、その学校を修了した時点である種の最高機密取扱許可を与えられたが、一つ段階が上がっただけだった。というのは、当時この(UFO)問題だけのための機密取扱許可はなかったからだ。もしある問題を扱うとしたら、Q 取扱許可を得ている必要があった。これは核問題取扱許可だった。おそらく後になって彼らはそれを変更することにしたが、次のことが大きな問題だったと記憶している。“この課程を修了した者たちにどのような機密取扱許可を与えたらよいか？”

当時、ブルーブックに記録されるべき報告事例が 1,500 はあっただろう。それに記録された確認事例は科学性の高いものだった。この情報は特定の軍関係者以外に流出しない種類の情報だった。つまり、その中にある情報はきわめて正確で科学的なものだった。これらの事例は、これ以上ないほどに正真正銘のものだった。それらは軍あるいは民間の様々な立場で確かな信頼を得ている人々について語っており、いかがわしい人物を取り上げてはいなかった。これは、きわめて正確だと彼らが考えていた情報だった。

レーダー自動追跡の情報もあった。その幾つかはライト-パターソン空軍基地があるオハイオ州からのものだった。しかし、私が覚えている限り、カリフォルニア州、テキサス州、ワシントン州から来たものもあった。私の推定では 200 から 300 の(UFO)レーダー自動追跡事例があっただろう。それらが記録された理由は、それが真実だったからだ。

我々が見せられたあの物質はニューメキシコの現場から来たと言われたが、現場は他にもあり、ET 宇宙機の墜落は他にもあった。彼らはそれがどこかは言わなかった。彼らはその場所を特定しなかったが、情報と物質を回収した場所がそこだけではなかったと明言した。

[A・H, クリフォード・ストーン, その他の証言を見よ. SG]

ライト-パターソン空軍基地は何度も名前が出てきた。明らかにライト-パターソンでは、他の空軍基地よりも多くの自動追跡があった。エドワーズ空軍基地は一つの実験基地だと説明された。私が言っている意味は、エドワーズは彼らが発見したあらゆる ET 物質の試験に関わっていたということだ。そんなことが行なわれていると言われていた。レーダー自動追跡記録はエドワーズ空軍基地から[も]来た。

[1965 年のエドワーズにおける複数レーダーの自動追跡に関するチャック・ソレルスの証言を見よ. SG]

私はフィリップ・コース大佐がそこにいた同じ時期に、国防総省にいたと言っておきたい。

私は[アイゼンハワー]大統領と接するようになるまで、UFO の主題とはそれ以上関わりを持たなかった。私は大統領が、特に退屈な会議のときなどは、紙やノートに実に多くの落書きをしたと聞いていた。彼はよく落書きに没頭した。彼がした落書きの一つが、様々な形の UFO を描くことだった。

私はケネディが落書きをしたのを見たことはないが、アイゼンハワー大統領はそれをした。彼は、私や私が配属されていたホワイトハウス陸軍通信庁の他の人々がいる前でも、落書きをした。私は初めてホワイトハウス勤務になったが、私が大統領に会ったのは、飛行機に乗務するようになっておそらく 1 ヶ月半過ぎた頃だった。当時それはとても形式的な会議だった。そのすぐ後で、私には大統領と一緒に少しの間旅行する機会があった。我々はフロリダに向けて暫く旅をした。私は彼が文字どおり集中砲火を浴び、好まないある種の人々に対して大統領が対処した様子を見る機会を得た。そのとき彼は落書きをしたのだ。おそらく彼は、世界最高の落書き名人の一人だっただろう。そして誰もがそのことで彼をからかった。私はそうしなかったし、そうする立場にもなかったが、高位の将校たちは時折些細なことを言ったりした。彼はただ微笑み、落書きを続けた。

さて、そんなあるとき、彼はまさに通報を受けた。つまり目撃に関する情報、UFO に関する情報を与えられた。私はそれを確かに知っている。なぜなら、私は通信センターにいてその情報を見たからだ。彼がこれらの情報を受け取ると、それは彼を興奮させた。彼は子供そのものだった。彼は大変に興奮して、D デー(*1944 年 6 月 6 日連合軍ノルマンディ上陸作戦開始日)が再来したかのように命令を与えた。彼はその UFO の形と大きさ、それを動かす原動力に大きな大きな関心を持っていた。

ホワイトハウスは地下に自らの大きな通信センターを持っている。それは空軍により運営されているが、陸軍がそこにいる。キャンプデービットを含む大統領が行くあらゆる所には通信センターがあり、専ら大統領の移動に対処する。情報は通常准尉により伝達される。

我々の主任准尉は、おそらく 30 年以上陸軍に勤務していた。彼がその種の[UFO に関する]情報を受け取ったときは、周囲から離れて暫く孤立し、その後で彼が電話すべき相手には誰であろうと電話した。だが、UFO の扱いに関して通信センターから大統領に直接情報が伝達された場合は 1, 2 回しか記憶がない。大部分の場合は間接的に大統領に伝達されたようだ。

その資料が通過するとき、大部分はマル秘だ。つまり、それに直接関係ある人間はそれを見、そうでない人間はそれを見ない。こうして UFO の目撃や新しい発見の情報が知らされる。もしあなたが大統領の近くに長くいたら、大統領の表情から、彼が何を讀み、何が彼の興味を引いたかを判断できただろう。それは彼の近くにいたから知り得たことだ。

SG: 彼はこの主題に特別な関心を示しましたか？

SL: 非常に、非常に強い関心を示した。実際、この主題は当時の彼にとっておそらく最大の関心事だったと言える。まったくそのとおりだ。

これらの UFO に関する報告は、めったにないというものではなかった。それはかなり頻繁に発生した。何回かということは敢えて言わないが、とにかく頻繁に発生した。

起きたことは、一つの特定機関がその技術的側面の処理から目撃情報、ブルーブックへの報告まで、この主題の全体を取り扱うことができないということだった。UFO 現象を取り扱うすべての作業を一つの機関が行なうことは、最早なくなり、それを継続するために政府の様々な部分に振り分けられて研究された。私の推測だが、彼らは諸機関に対してこちらで少し与え、またあちらで少し与えることによって、その情報の機密性を保つことができると考えたのではないか。この種の区画化はしばしばこれと似た物事に対して行なわれる。

だが、起きたことはアイゼンハワーが裏切られたということだった。彼はそれを知らずにいたから、UFO 情勢全体について統制を失ったのだ。国民に向けた最後の演説で、彼は我々に、もし用心しないと軍産複合体に後ろから刺される、と語っていたのだと思う。彼は油断していたと感じたのではないか。彼はあまりに多くの人間を信用したと感じたのではないか。アイゼンハワーは疑いを知らぬ人間だった。彼は善良だった。そして、前触れもなくこの問題が企業の管理下に入っていくことに気付いたのだと思う。それはこの国を大きく損ねる可能性があった。

私の記憶では、この失意は何ヶ月も続いた。彼は UFO 問題への統制を失いつつあると気付いた。この現象というか、とにかく我々が直面していたものが、最適に管理されそうにないことを彼は悟った。私が思い出せる限りでは、“最適に管理されそうにない”という言い方だった。本当に心配していた。こうして、結果はそのようになった。

もし私がこれについて話したら、軍の立場で私に何が起きるか、このことを数多くの機会に私は議論してきた。政府は、絶望的な恐怖を植え付けることで秘密を強化するという、現代の記憶に残る何よりもよい仕事をしたと言えるだろう。彼らは実によい仕事をしたと思う。

ある古参の将校と私は、もし暴露したら何が起きるかと話したことがある。彼は消されることについて語っていたので、私は“その、消されるとはどんな意味ですか？”と訊いた。そしたら、彼はこう言った。“だから、君は消される、姿を消すことになるんだ” 私はさらに訊いた。“あなたはどのようにしてそんなことを知っているのですか？” 彼の答は次のようなものだった。“私は知っている。これらの脅迫はずっとこれまで行なわれ実行されてきたのだ。脅迫が始まったのは 1947 年だ。陸軍航空隊がこの件を絶対統制するよう任された。これはこの国が今まで対処した最大の治安問題なので、消された人々もこれまで何人かいた”

彼は確信を持ってそう言ったし、彼はそれを知る立場にあった。私はそれを知っている。彼は私よりもずっと年長で、かつて CIA とも関わりがあった。彼は自分が語っていることを知っていた。彼はふざけているのではなかった。だから私は恐怖がそれを行なっているのだろうと思う。あなたがどんな人間であろうと関係ない。あなたがどれほど強くて勇気があるろうと関係ない。その状況はまさしく

恐怖と言え。マツ(この古参将校)がこう言ったからだ。“彼らは君一人だけの後は追わない。彼らは君の家族を追いかけるだろう”彼はそう言ったのだ。だから、私に言えることは、こうだ。彼らは恐怖を与えることでそれをこんなにも長い間秘密にしてきたのだ。彼らは見せしめをつくることに非常に長けている。それがこれまで行なわれてきたことなのだ。

この国では1950年代初期に非常に多くの基地が建設されたが、それらは攻撃があったときに大統領、議会、要人たちを避難させるためだった。これは政府機能の維持その他が目的だ。バージニア州ウェザー山(Mt. Weather)はその一つだ。メリーランド州リッチー基地(Ft. Ritchie)、キャンプデービッド(Camp David)もそうだった。当時ウェストバージニア州にはもう一つ別の基地があったが、我々が知っていたのはコンクリートという名前だけだった。それは暗号名だった。たとえばウェザー山は“地下”だった。そこは我々が知る限り、核兵器から防御できるような特殊な設計になっていた。私が視察で初めてそこを訪れたとき、そこには特別な設備があると知らされた。我々は大統領が行くことになるこれらの場所をすべて回り、何をどうすべきかに習熟する必要がある。そこにUFO問題に対処するためにつくられた設備があった。何をすべきかの標準的な指示書があった。私の理解では、UFOはウェザー山周辺で1回や2回ではなく、数多く目撃されていた。UFOは私がコンクリートという名前と言及したウェストバージニア州の基地でも目撃されていた。

我々はこの主題を取り巻く秘密を、あまりにも重く積み重ねてきたので、結局は大きな破綻という結末になりそうだ。残念ながら私は、その物事の内情にあまり通じていないことを認める。しかし、人々がその真実について嘘と恐怖を広めるとき、彼らは自らの立場を弱めているのだ。

彼らはこの秘密を長い間保ってきた。つまり、彼らは明らかにそのための方法を知っているということだ。しかしいつかの時点で、メディアが興味を持ったために、以前は話されることが考えられなかったようなことを話す人が出てくるだろう。特にネリス空軍基地(ネバダ州)とそこで何が行なわれているかについてはそうだろう。恐怖によって建設的なことは何も生まれない。恐怖は人間の魂、精神、心を退化させるだけだと言えるだろう。

秘密は強化されてきたと私は考えている。なぜなら、露呈されるものは、この国のある種の資本によって遙か昔に企てられた、彼らと彼らの企業を永続させるための経済を根底から破壊するからだ。石油は、これまで発生し、またこれからも発生し続けるだろう、あらゆる汚染と破壊的な悪影響にも関わらず、今の体制を保持するものとして特別な関心を持たれている。

我々が問題にしているのは、我々がまだよく理解していない源泉からエネルギーを引き出す、ある種の電磁氣的装置であると私は考える。確かに我々はそれらを公然のものとしていない。しかし、これらの装置はフリーエネルギーを発生するのだ。そしてフリーエネルギーは企業が恐れているものだ。これは政府が恐れるものだと私は考える。政府の立場で考えよ。フリーエネルギーにかんして課税するか？私がこれまで語り合ったこの主題について何かを知っている人々は皆、これらの輸送機を推進するエネルギーの源泉はまったく無料の源泉だと信じている。それは環境に何の害も及ぼさない。それはどこにも何の足跡も残さない...

我々がアラブ石油の高い価格にどう対処すべきかという、現実の問題を今抱えているので、ご存じのとおり、ブッシュ(大統領)は北極地域に進出して、より多くの石油を獲得することを主張しようと

している。私個人として、それは解決にならないと思う。地球温暖化の現状下では、それは我々の棺にさらに釘を打つようなものだ。しかしいつかの時点で、我々がフリーエネルギーを使えるようになるこの情報を共有しなければならないだろう。政府はこのことを知っている。我々を見下し、これはあり得ないと言い張ろうとするなら、彼らは愚か者だ。それはあり得るのだ。

問題はこうだった。“我々が識別不能の信号を捕捉したことがあったと私は聞いたことがあるか、さもなければ、もしそれが識別可能だったら、それは我々を監視下に置いていると思われる奇妙な飛行物体からのものだったか？” そうだ、確かに私はそれを聞いた。私はそれを少なくとも 5 ないし 6 の報告から聞いた。それらは結局ブルーブックに記録された。実際、報告の幾つかはパイロット無線を通じて入ってきた。だから当時我々が相手にしていた知性体は何であろうと、彼らは我々を相手にする方法を知っていたのだ。彼らは我々と交信する方法を知っていた。また彼らが地球外起源だということを我々は知っていた。

[ジョン・メイナードその他の証言も見よ。SG]

米国海軍大西洋軍 メルル・シェーン・マクダウの証言
Testimony of Merle Shane McDow, US Navy Atlantic Command
2000 年 10 月

マクダウ氏は 1978 年に海軍に入隊し、特殊区画化情報 (SCI) ゼブラストライプス最高機密取扱許可を取得した。彼は、当時トレイン提督の指揮下にあった大西洋軍、大西洋作戦支援施設に配属された。マクダウ氏は、1 機の UFO が高速で大西洋岸を行ったり来たり移動するのをレーダーで追跡され、パイロットによって視認されたとき、現場にいた。司令部はゼブラ警戒態勢に入り、トレイン提督は UFO を強制着陸させると命じた。マクダウ氏はその事件の後に起きた脅迫、威嚇、日誌の押収について語る。

MM: メルル・マクダウ

SG: スティーブン・グリア博士

MM: 私は 1978 年 8 月に米国海軍に入隊し、米国艦アメリカに配属された。そこで私は不運にも任務中に飛行甲板で負傷した。それから私はバージニア州ノーフォークのハンプトン大通りに面した大西洋艦隊総司令部 (CINC-ANT Fleet)、大西洋軍支援施設に異動した。私は大西洋作戦支援施設 (AOSF) 第 22 課に任命された。そのとき我々のグループには約 11 名がいた。我々は、大西洋軍司令長官だったトレイン提督に状況説明を行なう直接の責任を負っていた。我々は彼に、その日ソ連が何をしていたか、昨夜彼らは何をしたか、などなど、世界で進行中の軍事作戦について説明した。

AOSF は Atlantic Operational Support Facility の略語、CINC-ANT Fleet は Commander in Chief-Atlantic Fleet の略語であり、そのときはトレイン提督がその地位にあった。東海岸にいる誰もがこの人物の支配下にあった。

6 ヶ月後に私は、ゼブラストライプス身分証明バッジを持った極秘の特殊区画化情報 (SCI) 取扱許可を取得し、基地のすべての施設にいつでも立ち入ることが許可された。その資格は特に司令

部への出入りを許可するものだったが、同様にあらゆる施設にいつでも制限されずに入出入りすることができた。私の仕事は、指令部に入ってくるあらゆる音声・画像の入発信情報を確実に記録し、後でそれが必要になったときのために、その履歴を残すことだった。

私は音声と画像のすべてを記録した — 発生しているあらゆるもの — 彼らがゼブラ警戒態勢を呼びかけたときもそうだ。これは大抵訓練で、予め“これは演習、これは演習、ゼブラ警戒態勢に入れ”とアナウンスが流れる。そして権限のない要員が知らずに司令部にいたら、外に出される。

ゼブラ態勢は一般に全世界核危機、とくにソ連に対して海軍が持つ最高レベルの警戒だ — 当時はそうだった。ソ連のベアキャット(*艦上戦闘機)は、我々が何をしているかを探るために、日常的に東海岸の至る所で哨戒を行っていた。我々は、たとえば彼らのベアキャットが我々の領空に近づき過ぎたためにそれを排除する飛行機を発進させる必要があったり、彼らとその領域に不審な行動をとる艦船を遊弋させたりした場合に、ゼブラ態勢をとった。そうでないときは、たとえば核戦争を起こすために相互確証破壊(MAD)の規則書を取り出すという想定で演習を行なった。統合作戦部の当直士官と次席当直士官がある金庫の鍵を持っており、MAD 規則 — Mutual Assured Destruction(MAD) — と呼ばれるこれらの規則書を取り出す。彼らは、もし必要なら核攻撃を開始するために潜水艦に伝達すべき暗号を取得する。これが行なわれているとき、司令部には少数の人間しか立ち入りが許可されない。なぜなら、彼らは実際にその暗号を使用したりするからだ。ソ連はもちろん、米国の敵であるなら誰でも、その情報を入手しようとするはずだ。

ゼブラ等級 — これなくしては、この演習中にあなたはこれらの施設に資格を持って接近することを許可されない。そしてゼブラ演習は、疑いもなく司令部と洋上の艦船および潜水艦との間で交わされる最高レベルの最高機密情報だった。

さて、この事件を語ろう。その日はまったく普段どおりに始まった。私が覚えている限り、[1981年]5月の最初か次の週の前後だったと思う。彼らが照明を落としたとき、(司令部ではゼブラ警戒態勢に入ったとき最初にこれをした)すべては普段どおりに進行していた。この演習に入るとほとんどの場合、彼らは“これは演習、これは演習、ゼブラ警戒態勢に入れ”と言うことになっていた。だがこのとき彼らは照明を落とし、“これは演習”と言わなかった。だから当直士官と次席当直士官は互いに顔を見合わせ、その最中に彼らの補佐の何人かにこれが演習かどうかを確かめるように言った。そして早期警戒システム — それは当時のグリーンランドかノバスコシア(*カナダ)のある空軍基地から入ってきたと私は信じている — が、我々の領空に侵入した未確認飛行物体をレーダー捕捉したと告げた。彼らはこれは演習ではないと言ったので、それは最高度の敏速さでもって処理され、それが演習でないと気付くや、誰もが気が狂ったように走り回り始めた。それはまったく別の雰囲気だった。

直ちに当直士官はトレイン提督を司令部へと呼んだ。というのは、この事態に適切に対処することはやや彼の権限の範囲外にあったからだ。トレイン提督の監督が必要だった。数分後にトレイン提督が司令部に駆けつけ、その中 2 階のちょうど真下にある自分の展望室に入った。トレイン提督が最初に知りがったことは、捕捉したのは何機か、それらはどこにいてどの方向に移動しているか、またソ連はそれに反応しているかだった。なぜなら、彼らは領空に侵入したものがソ連のものではないと知っていたからだ。それは最初から確認されていた。

トレイン提督がそれがソ連のものではないことを知り、ソ連もこの脅威に反応しているかを知りたいと思ったとき、その時点で彼は、それが何であるかを確かめるために 2 機の飛行機を発進させることを承認した。こうして、東海岸のあちらこちらで追跡が始まった。我々は遙か北のグリーンランドから海軍飛行場オセアナ (NAS Oceana; バージニア州) まで飛行機を発進させた。この物体、我々はそれをレーダー画面で見ている — この出来事はほぼ 1 時間続いた。我々は司令部に伝送されていたパイロットたちの生の声を聞くことができた。彼らは物体を視認し、その様子を述べた。パイロットたちは 2, 3 回接近することができ、その物体が我々がよく知っている航空機ではないことを確認できた — それは我々が持っているものでもソ連が持っているものでもなかった。そのことは素早く断定された。彼らが追跡していたこの輸送機または何物かは、海岸を行ったり来たり、とても風変わりな、素早い飛行をした。

それはたとえば実際にメイン州沖にいたかと思うと、あまりに素早くその区域の領空を去るので、我々は直ちにドーバー空軍基地 (*デラウェア州) からそれを捕捉するために飛行機を発進させていなければならなかった。ところで F-14 (*艦上戦闘機, トムキャット) は、そのような長い距離を横切るのに 30 分はかかることを私は確かに知っている。だがこの物体は、それが何であれ、まさに忽然と移動していた。それはある瞬間ここにいて、次の瞬間にバン、海岸線を数百マイル南下している。まさに鬼ごっこだった。

[この種の非線形で途方もない推力に関するポール・シス博士, ベシューン中佐, その他の多くの人々の説明を見よ. SG]

それは実にはるばるメイポート (*大西洋岸フロリダ半島) 付近のフロリダ沖まで南下した。そこにはセシルフィールド海軍飛行場 (*フロリダ州ジャクソンビル) がある。次に方向を変えて我々側からアゾレス (*大西洋ポルトガル領諸島) に向かって東向きに遠ざかり、我々はその姿を見失った。

このすべてが起きている間中、我々は情報収集用の KH-11 と呼ばれる衛星を使っていた。この衛星は、大気圏外の見晴らしのよい場所から、文字どおり地上にある数フィート以内の物体を実にはっきりと写真に撮る高機能を持っていた。それで彼らはこの物体の写真は何枚か撮るために、KH-11 衛星を使ってこの物体を追跡しようと試みていた。後になって司令部で我々が入手した写真は、飛行機が北アメリカ北部の沖で最初に遭遇したときに撮ったものだった。彼らは十分接近して、何枚かの写真を撮った。それらの写真は後で司令部に引き渡された。

さて、その写真に映っていた形は、むしろ 1 個の円筒に近いものだったのを覚えている; それはとても平坦で長かった。それは両端がすっぱりと切れていた。両端は、ほとんどの航空機がそうであるような、先細りではなかった。その端は急に終わっていて、太陽光を反射しているように見えた。だからあなたならそれが金属製だとはっきり言っただろう。パイロットたちが通報していた情報によると、その後ろには飛行機雲もなく、表面には照明や模様が何もなかった。操縦席の窓もドアも、それに似たものは何もなかった。それが何であろうと、ただの固体に見えた。

トレイン提督を本当に苛立たせ、悩ませたもの、それはこの物体が疑いもなく状況を完全に支配しており、どこでも望みの場所に数秒で移動できたことだった。ある瞬間に我々はそれにメイン州沖

で接近していたかと思うと、次の瞬間にそれはノーフォーク(*バージニア州)をフロリダに向かって南下している。それが我々を翻弄していた間、我々にできることは海岸全域の早期警戒レーダーでこの物体を見守ることだけだった。

トレイン提督と彼の参謀たちは、控えめに言っても、それに強い懸念を持った。彼らは特にそれがロシアのものでも我々のものでもないと分かり、またこれほど容易に素早く移動できる飛行物体を建造する技術を持つ者が、他に思い当たらないことに気付くと、とても憂慮した。それが何であれ、この物体を監視下に置くことができないために突然発生した完全な混沌を、中 2 階の手すり越しに注視していたことを私ははっきりと覚えている。

この UFO はとても不規則に、また素早く海岸沖合を行ったり来たりした。... 彼らはこの物体を追跡したり飛行機を発進させたりするために、海岸中のあらゆる司令部に通報を試みていた。トレイン提督は、東海岸全域の飛行機を手当たり次第に緊急発進させる許可を与え、この物体の進行を阻止しようとし、北から南まで、飛行機にそれを本当に追跡させ強制着陸させようと試みた。明らかに、彼らは手段を問わずそれを回収することを、強制着陸させることを望んでいた。

もしできることなら、どんな手段を使ってもよいから、この物体を強制着陸させよとの命令は、トレイン提督から発せられた。それが確かにロシアのものではないと分かってから、それがロシアのものでない限り誰であろうと彼らは気にしなかった。それが誰であろうと、どこから来たものでであろうと、関係なかった。彼らはそれが欲しかった。欲しくてたまらなかった。

司令部からの情報は、領空を監視するために我々が東海岸のあちらこちらに持っていたレーダー基地から我々に伝えられていた。

将校たちは怖がっていたようだった。確かに、一言で言えば彼らは怖がっていた。トレイン提督は、いつもはとても冷静で穏やかな物腰の好人物だった。実際に彼が何かに対して自制を失ったり大声を出したり、興奮したりする姿は見たことがなかった。だが、これは控えめに言っても、彼を動揺させた。私がそこにいたほとんどの将校から受けた印象は、そういうものだった - 彼らは他の皆と同じように、何も分からずに怖がっていた。

実際には、彼らはそれを海岸に沿って追跡しなかった。それは直前に目撃された場所から数百マイル離れた場所に忽然と現れた。そしてパイロットたちは、それがある瞬間にはそこにいたが次の瞬間にはもうそこにはないと報告してきた。トレイン提督を本当にいきり立たせたことの一つはそれだったと私は思う。なぜなら、彼はその状況になす術を知らなかったからだ。

この物体はそれ自身の意志を持って、東海岸中にこのような大混乱を起こしていた。トレイン提督はそのとき最終的な責任を負っており、この事態は彼に大変な緊張を強いていたことは間違いない。彼の声の調子からそれが分かったはずだ。彼の言葉を聞いたら、彼がこれ以上ないほど深刻に憂慮していたことが分かったはずだ。

しかし我々はレーダー上で、ある時刻にそれを追跡していたかと思うと、次の時刻にはそれを完全に見失い、再びそれを捕捉した。それはまさに軍事空域の未認証航空機のように現れた。

そして真面目な話だが、軍はあらゆる民間航空便がどこにいるか、常時把握している。我々は自分たちの飛行機のすべてがどこにいるか、常時知っていた。我々は領空を飛行しているすべての民間航空便がどこにいるか、常時知っていた。これに関して我々が知っていないことは何もなかった。緊急発進したすべての飛行機は、沿岸の施設から発進した - 海軍は沿岸施設、たとえばオセアナといった海軍飛行場を持っている。

ゼブラ態勢に入ると、それが演習であるかどうかにかかわらず、ゼブラ接近許可バッジをつけていない人間はそこにいられない。そこは許可バッジをつけている者だけのゼブラストライプス区域だ。他の人間は指令部施設から出なければならず、そこには建物の内と外に海兵隊員が駐在している。彼らはこれらの出来事が起きている間に、資格のない要員が司令部に残っていた場合、射殺するように命令されている。それは国家安全保障のためだった。

たとえばゼブラ態勢が発動されたあるとき、その海兵隊員が入ってきて、何が起きているかと言った。これは演習か？そんなことを訊いた。彼らはいつでも射殺できる命令を受けていた。私は次席当直士官から注意されて知っていたので、“おいみんな、彼に何か言わなければならないぞ、彼はいつでも射殺できる”と言った。彼はまだ警戒態勢解除を伝えられていなかった。彼はその任務を実行したのだ。私が覚えているのは、とにかくそこから抜け出したいと思ったことだった。というのは、彼はそこに入ってきてこう言ったからだ。“もしある物を私が確認できなければ、君たちの時間は 1 分か 2 分だ” - 彼は今にも入ってきて人々を射殺し、証拠を破壊しようとしていた。

私が語っているこの出来事が終わったとき、我々が海岸を行ったり来たりして追いかけていたこの物体は、大西洋、アゾレスの上空を去っていった。私は彼らがこう言っていたのを覚えている。それはアゾレスに近づいたとき、このように 66 度の角度で急上昇した。それは速度を緩めたりすることなく、ただ 66 度の角度で急上昇に転じ、大気圏を抜けて宇宙に去った。言ってみれば、それは宇宙に向けて飛び立ち、このようにして行ってしまったのだ(指をパチッと鳴らす)。つまりそれは完全に立ち去った。我々はこの瞬間に数千マイルを移動する何物かについて語っているが、それは忽然と去った。周りに座って頭を掻きむしっているみんなを残して、ただ去っていった。“あーあ驚いた、一体あれは何だったんだ？”

米国の巨大軍事力が、正体不明の、どこから来てどこに行くのか何も分からない何物かによって膝を屈せられた様子を見るのは、ある意味で滑稽だった。彼らが確実に知っていたのは、それがソ連のものでないことだけだった。そして彼らはそれを知ることにとっても固執していた。

こうして我々は、ゼブラ態勢から解放された。照明がつけられた。誰もが司令部の床に座り込んで、呆然とそのことについて話していた。私自身は 3 番デッキにいた。トレイン提督は、彼の指令区画にいた。彼らは数分間そこにいて立ち去った。私は誰もがするように、自分の日誌にそのことを記録した。その後私はそのことについてあまり考えることはなかった。

後日、これらの二人の男がスーツ姿でやってきた。彼らは軍服を着ていなかった。彼らはスーツ姿で入ってきた。小さなバッジをつけていたが、ゼブラストライプスのバッジは持っていなかった。それは訪問者用バッジのようだった。彼らが正規の要員でないことはあなたにも分かっただろう。彼ら

は私が知っている一般の人ではなかった。私は今までこれらの男を見たことがなかった。こうして我々は階段を降り、1階に行った。そこには幾つかの小さな会議室があり、彼らは私をその一室に連れていった。そこはすでに準備されていて、私は席に着かされた — 彼らは私の日誌を持っていた。彼らはそれを手に入れ、私と一緒に階下に持ってきたのだ。

その二人の男は、この出来事について私に質問を始めた。正直に言うと、彼らはとても手荒だった。私は文字どおり両手を上げてこう言った。“あなたたち、少し待ってください。私はあなたたちと同じ側にいる。ちょっと待ってください” 彼らはまったく粗野だったからだ。とても脅迫的で、はっきりと次のことを言った。何も見なかったし、聞かなかった。何も目撃しなかったし、知られたことはこの建物から消える。“君たちはこれについて同僚に一言も言ってはならない。また、基地を離れたら、これについて見たり聞いたりしたことは忘れる。何も起きなかった” 彼らはたちが悪かった。それがぴったりの言い方だろう。私ははっきり覚えているが、椅子に深く腰掛け、手を上に上げ、これらの男にこう言わなければならなかった。“少し待ってください。私たちは同じ側にいる同輩だ。我々の間に問題は何かない”

口に出して脅迫はしなかったが、そうしないと彼らは身体的な危害を加えかねない印象だった。彼らの声の調子は、誰かがこう言っているのと同じだった。“お前さん、こっちの言うことを聞くんだ。さもないと酷いことになるぞ”

もしこの物体が敵意を持ち、我々に向かって兵器を投下したりミサイルを打ち込んだりするつもりだったなら、彼らにとってそうするのはとても容易だっただろう。そのことに疑問はない。当時我々には、あれが何であれそれに匹敵する何の手段もなかった。それは我々の領空を意のままに飛行し、移動に関する限り思いのままにできた。我々はそれにまったく何の脅威も与えなかった。それは認めざるを得ない、まったくそのとおりだった。トレイン提督もまたそれを認識し、大変懸念していたと私は信じている。一言で言えば、あの老練な軍人が誰の目にも明らかに怯えていた。

SG: その UFO 写真にどんなことが起きたのですか？

MM: 我々が持っていた 35 ミリスライドに何が起きたか、それをあなたが持ち出したのは実を言っている。あなたがその質問をしたのは実にいいところを突いている。というのは、我々にはそれをトレイン提督が実際に見るための[専用]テレサイン (Telesign) に上げる時間が与えられなかったからだ。それらは準備された。私は思い出せるが、彼女[スライドを取り扱う技術者]は私にこう語った。スーツ姿の二人が入ってきて、現像、未現像のすべてのフィルム、彼女らがそれとともに持っていたすべての資料とスライドを取り上げた。私の日誌、それを私は再び見たことはない。翌日我々は新しい日誌を持たされた — 新品だった。それに何が起きたか、私は知らない。それに何が起きたか、誰も実際に知らない。

この技術者はこうも言った。“この二人の男は、入ってきて騒擾取締令を私たちに読み上げ、これもよこせ、あれもよこせといって、彼らが望む物をかき集めた。彼らはたちが悪かった”

この出来事は、まさに未確認飛行物体として記録に残った。それが何だったか、彼らはついに分からなかった。私が覚えているのは、当直士官、次席当直士官たちが互いに顔を見合わせ話をし

ていたことだ。私は彼らの話を聞いたが、彼らは日誌にどう書くかについて互いに相談し合っていた。彼らはこう言っていた。“これを未確認飛行物体との遭遇と記録する。まさにそれだ”

この UFO を実際にレーダーで捕捉した施設 — 私が確信しているだけで 5 か所あったが、それはグリーンランドから、はるばるフロリダにまで及ぶ。その他にも私が知らない幾つかがあるかもしれない。私がこれを知っているのは、トレイン提督がオセアナ海軍飛行場に、“そこから何機か発進させよ、戦闘機を何機か緊急発進させよ”と命令していたからだ。彼はドーバー空軍基地(*デラウェア州)、メリーランド州パタクセントリバー海軍飛行場、さらにフロリダ州セシルフィールド海軍飛行場にまで、実際に電話をかけて警戒させた。...

除隊するとき、私は海軍のレターヘッドがついた公式の米国海軍文書を渡された。彼らが私にくれた文書には、いかなる状況であろうとも 5 年間はこの国を出ることが許可されない、と書かれていた。私は、バージニア州を出るために FBI(連邦捜査局)のロアノーク事務所に連絡し、州境を越えてノースカロライナ州に行くことを彼らに通知しなければならなかった。それは私が除隊してから 5 年間だった。

私の妻の家族だったこの人についても語りたい。ジャック・ブースというのが彼の名前だ。彼は今亡いが陸軍にいたことがあり、ロズウェル事件が起きたときロズウェル(ニューメキシコ州)に駐屯していた。彼は私の妻の叔父だった — 妻の母親の兄弟だった。彼はウェストバージニア州ブルーフィールド出身だった。彼が語ったのはこうだ。それが何であれ、この物体が墜落したとき、彼は陸軍の新兵としてロズウェルにいた。彼らが現場に向かったとき、彼はそこで警備任務に就いていた。1 台のトラックいっぱい詰め込まれて行った彼らは、破片やその他いろいろな物を拾った。そして彼らが実際に遺体を回収したとき、彼はそこにいた。彼は言った、“いいかい、彼らは小さな乗員たちを遺体袋に入れたんだ。それは人間ではなかった。彼らは小さく奇妙な外見をしていた。彼らはまったく人間に似ていなかった” 彼らは乗員たちを遺体袋に入れたが、そのうちの一人か二人は墜落後もまだ意識があったというか、生きていたというか、そんな状態だった。彼によれば、その乗員たちはこの墜落を生き延びた実際の生存者たちだった。

彼らは機体のあらゆる小さな破片を拾った。彼によれば、彼らは四つん這いになりながら、協力してその乗員たちを機体から降ろし、破片が散乱した場所を横断しながら、どんな小さなかけらや小片も拾って歩いた。彼らはそれを数日間やった。彼によれば、彼らは全員が脅迫された。彼らは単刀直入にこう言われた。“よく聞くんた、もし君たちがこれについて何か喋ったら、明日は姿を消すことになるぞ”

[このような脅迫に関するグレン・デニス、ジョン・ウェーガント、ラブキン准将、その他の証言を見よ。SG]

彼はそう言った。彼らがいかにこれを隠したがつているかを皆に知らしめる、そのことを彼らは躊躇することなく単刀直入に通告した。彼は言った、“いいかい — 自分はその現場にいたんだ”

私が会ったジョン・マイケル・マーフィーも、この主題について知る一人だ。私が海軍にいたとき、彼は海兵隊伍長だった。彼は大西洋艦隊総司令部で警備の兵営に駐屯していた。彼は基地の警

備特務隊の一人だった。彼がまだ海兵隊にいたとき、彼はデラウェア州ドーバー空軍基地から遠くないある施設で、実際に1機の宇宙船、地球外宇宙機を警備した。このことを彼は懸命に訴えた。私はマーフィーをよく知っているので、彼の言ったことを信じたいと思う。私はマーフィーを信じたい。これは1979年か1980年のことだったろう。

[この証言はとても重要である。なぜなら、その目撃証人はゼブラストライプス最高機密取扱許可を持ち、1時間以上もの間1機の地球外輸送機との遭遇を自ら体験したからである。それは少なくとも5基のレーダーで捕捉され、またパイロットたちにより視認された。強調されるべきは、この主題を一般に公開することの必要性である。なぜなら、我々の軍がこのような進歩した宇宙機を追跡し撃墜を試みることが世界の平和と安全を危機に陥れることは明白だからである。私がCIAと国防総省の高官たちに対して行なった背景説明において、しばしばこれらの人々がこの主題についてまったく適切に知らされておらず、トレイン提督がこの物体を撃墜するように命令を下したと同様のやり方で反応しかねないことを、我々は知った。秘密の孤立の中では、知識と視野の欠如ゆえに、恐ろしい間違いが起り得る。この理由のために、我々はこの主題についての秘密を終わらせることを要請しているのだ。それにより、我々の軍と国家安全保障の指導者たちは正しく情報を与えられ、また外交官や社会の他の指導者たちは我々の世界を以前から観察し続けている地球外文明に対し、適切で、安全で、平和的な対応を策定することができる。この問題を秘密のプロジェクトや準備ができていない軍指導者たちだけの領域とするのは、あまりにも危険な賭けである。ここにある危険は地球外輸送機そのものではなく、彼らの存在に対して適切に対処する知識と準備が不足していることから来るのだ。SG]

米国空軍中佐(退役) チャールズ・ブラウンの証言

Testimony of Lieutenant Colonel Charles Brown (retired), US Air Force

2000年10月

空軍の英雄ブラウン中佐は第二次大戦から帰還した後、空軍特別捜査局に勤務した。彼はグラッジ計画に配属され、そこでUFOの調査を命じられた。そして、従来の方法では説明がつかない幾つかの事例があることに気付いた。後に彼は、ブルーブック計画は国民に対する周到なごまかしであると信じるようになった。他にもいろいろあるが、彼は4基の独立したレーダーが時速5,000マイルで飛行する物体を追跡していた事件の報告作成に関与した。

CB: チャールズ・ブラウン中佐

SG: スティーブン・グリア博士

CB: 私は米国空軍の退役中佐だ。私はほぼ23年間軍務に就き、その後の7年間は上級外務職員を務めた。私の経歴のうちの15年間は海外勤務だった。私は1939年秋にウェストバージニア州国家警備隊陸軍兵として出発し、1940年6月に高校を卒業と同時に正規の米国陸軍通信団に入隊した。私は1942年7月にパイロットとして訓練を始め、1943年4月に少尉パイロットに任命された。その後私は、B-17(*大型爆撃機)パイロットの機長として訓練を受けた。

私はヨーロッパに赴き、1943年11月初めにそこに着任した。そして1943年12月13日からB-17パイロットとして戦闘行動に加わった。私は1944年4月11日に29回目で最後となった完遂任務に出撃した。この期間の戦闘は相当に過酷だった。私は自分の31回の出撃任務について調査し

たが、出撃のたびに犠牲者が出て、この 31 回の出撃中 235 人に達した。私は幸運にもそれをやり遂げた。...

[私は]1950 年初めに正規の空軍任務を与えられた(*米国空軍は 1947 年創設)。そして 1965 年秋に現役を退き、大佐に昇進することを諦めて上級外務職員(*国務省職員)の職を受け入れた。それから 7 年間、私は国際開発庁(USAID)で働いた。この 7 年間のうち 6 年間は、国際開発庁の地区検査官として東南アジアで過ごした。

空軍特別捜査局(Air Force Office of Special Investigation; AFOSI)と呼ばれる組織で防諜訓練と取り締まり活動をした経歴、またパイロットとして訓練された数少ない調査員の一人だったことから、結局私は破壊活動の疑いがある多くの異常な航空機事故を調査する羽目になった。その結果、何人かの傑出した科学者たちと顔見知りになり、グラッジと呼ばれるプロジェクトのために航空技術情報センター(Air Technical Intelligence Center; ATIC)で働いた。当時、特別捜査局は空軍の中にあって世界的規模の調査をする部門だった。我々は未確認飛行物体として知られるようになった現象を調査する責任を負っていた。センター内での計画名はグラッジ計画だった。

私の仕事場はライト-パターソン空軍基地の D-05 区域にあり、そこで我々は世界中から来るこれらの報告を受け取った。私の仕事はこれらの報告書を技術情報センターに手で持って運び、プロジェクト将校とともにそれらを整え、私が協力できたことがそれだったが、研究的立場からあらゆる質問に答えることだった。私はこれに 1951 年秋まで約 2 年間従事した。

私がライト-パターソン基地を去ったとき、ダン大佐が親切にも、グラッジ計画での働きに感謝する 2 頁の書簡を私にくれた。私が知る限り、それは確かにグラッジ計画で働いた空軍将校に対する初期の公式認証だった。だが、その舞台裏では何かが同時進行していたかもしれない。幸い私にその特権は与えられなかったが、調査の多くに答が出されなかったということに、[何かが行なわれているという]ある感じを持ったのは事実だった。通常、調査の分野では何かについて陳述がある。UFO の場合なら、たとえば目撃だ。それによって結論と結果を導く。随分年月が経ってしまったが、それらの多くの事例において、まともな科学的結果が何も[報告]されなかったことを私は知っている。その結果、私は未確認飛行物体に対する関心を深めることになった。その時点で数百時間の飛行経験を持っていた私は、その後の空軍勤務を通してそれへの関心を持ち続けた。戦略空軍で、私は情報部次長と本土陸軍との間の調整将校だった。当時は本土陸軍が米国ミサイル防衛の責任を負っていた。

ある物体が時速数千マイルで移動している場合、12 ないし 14 分というのはとてつもない時間の長さだ。私は時速 4 千から 5 千マイルを越す速度を覚えているが、それは我々や敵が持っていたどんな航空機をも凌ぐものだった。一人の情報将校として私の任務の一つは、敵の能力と装備について、少なくともその概略を把握することだった。

あるとき我々は、ネリス空軍基地へと飛行した。他のパイロットたちと私は 1 機のグーニーバード(*輸送機)を操縦していた。雲一つない快晴だった。そのとき、一つの物体が南西から北東へ横切った。それはたぶん 15 秒に満たない時間で天空の端から端へ、私の右方から現れ左方で視界から消えた。それは私が計算する間もないほどの速度で移動していた。それが衛星でなかったことは

確かだ。それは飛行している制御された物体だった。

報告された複数の物体は、レーダーで追跡されていた。中には地上からの視認、地上レーダー、航空機からの視認、航空機搭載レーダーと、四通りの方法で確認されたものもあった。私に言わせれば、これ以上の確認手段はない！

[ここに登場するのは、空軍グラッジ計画の中でレーダーによる証拠の信憑性とこれらの UFO の実在性を確認している、高級軍人であり外務職員であり、またわが国の英雄でもある一人の証人である。これは UFO の実在を裏付ける十分な証拠は存在せず、したがって研究すべきことは何もないとする、空軍および政府の公式声明と明らかに矛盾する。SG]

ここで語っているのは、誰かの空想ではない。この同じ時期に、私は空軍が取り込んだいわゆる専門家たちのことを耳にした。彼らは沼気(メタンガス)に始まる、似たような話を次々と捏造した。もしそれが翼を持つ航空機だったとしたら、空気力学の法則に従わなければならない、瞬く間に止まったり逆進したりはできない。だがそのようなことが実際に起きたのだ。

おかしいことだが、我々は犯罪の目撃証言により人々を投獄し、死に追いやる。我々の法制度はかなりの程度このことを基礎にしている。しかし、私が過去 50 年間に異常空中現象を追いかけてきた中では、とても信頼のできる目撃証人が何か未確認のものを見たと言ったときに信用を失わせる、何かの理由があるようだ。よろしい、あなたが私に天空のことなら何でも知っている人を見せるといふなら、私はあなたにキリストの再臨をお見せしよう。まったく簡単な話だ！彼らがどれほど技術的な資格があろうと関係ない — そこにいないで見解を表明し、彼らはあれやこれやの馬鹿げたものを見たのだと言う連中のことは気にしない。私の疑問は、彼らはどこで降りたのか、彼らを降ろし、専門家に仕立てた停留所は何だったのか？だが私はその現実の問題を扱っているのだ。

これらの現象が、グラッジ計画よりも遙か以前からこの惑星で起きていることを、私は心から信じている。そのことの十分な証拠があると私は考える。我々がこの惑星についてもっとよく知るほど、我々が本当に知っているのはわずかだということを、もっと知るようになる。だから科学は発展し続けなければならないし、我々は学び続けなければならない。

...

CB: それについて私はあまり覚えていない。たとえばガンカメラ(*機銃に取り付け攻撃の成果を測るために使用) 映像はほとんど見なかった。むしろ写真を見るが多かった。

SG: UFO のガンカメラ映像が存在すると聞いたことがありますか？

CB: 間違いなくそれらは存在する。しかしそれらはとても注意深く扱われ、通常は目に触れなかったはずだ。

[ブラウン中佐がグラハム・ベッシュン中佐や他の証人たちが観察したことを繰り返していることに留意せよ: UFO の主題を扱う計画の性質である区画化は、グラッジ計画の内部で働いているブラウン中佐のような人間でさえ他の証拠、計画、および情報に接近できない状況をつくり出す。SG]

...

CB: トルーマン大統領は、ホワイトハウス空域の[これらの物体について知っていた]むしろ一人の当事者だった。私は[ホワイトハウス上空の]隊列を組んだ未確認物体の、いわば光球群のレーダー写真を見たことがある。これらはレーダーに映った。地上からの視認、地上レーダー、航空機からの視認、および航空機搭載レーダーにより確認された。不思議なことに、航空機からの視認では2, 3機の戦闘機がそこに近づくと、それらは思いのままに姿を消した。

[ここで彼は、1952年7月のホワイトハウスおよびその周辺空域におけるUFOとの複数遭遇について述べている。SG]

こうしてトルーマン大統領は当事者になった。彼はすべての新聞見出しと物体群の写真を見た。彼はこれらの物体群を調査する責任者が必要だと言った。ジョン・サンフォード将軍が空軍情報部長だったと思う。サンフォード将軍が空軍情報部長だと誰かが言った。それでトルーマン大統領は、彼がこれの責任者か？と言った。彼らは、そのとおりです、全般の責任者ですが...と言った。トルーマンは、彼は調査を担当しているのか？と言った。彼らは、いいえと言った。それならライト・パターン空軍基地にいる一人の将校だった。トルーマンは言った。では彼を連れてきて私に説明させよと。こうして彼らはワシントンに飛んできた。彼は大統領に状況を説明したはずだ。

後に私が英国にいたとき、彼らは北海域でNATO(北大西洋条約機構)の演習を行なった。そのとき、これらの小さくて友好的な光球が2, 3個、場周経路(じょうしゅうけいろ)に入ってきた。彼らが着陸せずに甲板の上を飛んだとき、何が起きたか想像できるだろう。言うまでもない。この事件は海軍を完全に動揺させてしまった。あなたには想像できるだろう。さて、それを新聞が取り上げた。当時彼らは、これに巻き込まれた甲板員やパイロットと話をすることができた。そして誰もが調査を求めて叫んでいた。彼ら[英国人]は、我々に調査機関はないと言っていた。しかし、手短に話すと、数年後に私が所属していた大佐、彼は空軍中将で退役したが...我々はこの事件について話し合った。そしたら彼は、UFOを調査している英国の機関は、私が3年半務めた同じ建物の1階上にあると言ったのだ。それでも彼らはその存在を認めなかった！

[この証言は英国外務省職員ゴードン・クレイトンにより裏付けられている。彼はブラウン中佐を知らなかったが、この問題を扱う英国の秘密機関についてほとんど同じ内容を語っている。SG]

さて、これは氷山の一角だ。なぜなら、幾つかのとても異常な目撃が英国で起きていたからだ。

[ニック・ポープ、ラリー・ウォリンその他の証言を見よ。SG]

彼らはまた、ドイツ上空の小さなフー・ファイターについても語っていた。ドイツ人たちはそれらが我々のものだと考えていたし、我々はそれらがドイツのものだと考えていた。だが現実の世界では、光る球体には我々を驚愕させたり戯れを演じたりする、知性ある操縦者を搭乗させる場所がない。それらがどこか別の場所から来ているものだという以外に説明はつかない。私の判断、経歴、研究に基づく限り、これはまったく不可解だ。

我々の政府の中にデータを操作できる諸機関があることを、私は実際に知っている。そこでは[何でも好きなように]拵えたり作り直したりする。飛行物体、知性的に操作されている飛行物体は、この惑星上の我々の物理学に基本的に違反してきた。それらは長い間そうしてきた。政府が現時点で -- 我々がそれを 1947 年から調査してきたことを私は知っている -- 答を持っていないことは、何か深刻な裏事情があることを示しているように私には思われる。我々はそれほど科学に無能だろうか？私はそう思わない。我々の知能はそれほど劣っているだろうか？それほどは知能が劣っていないと私は知っている。さて、ブルーブック計画だが、コンドン博士のグループによりそれが閉じられたとき、これはまったくの意図的なごまかしだったと信じる完全な理由が私にはある。

[このことは、政府文書とロバート・ウッズ博士その他の証言により確認されている。SG]

米国政府の諸部門が何らかの理由により、これまで発生してきた事柄を国民に知らせ損なってきたのだと私は見ている。

UFO は長期間にわたり調査されてきた。一般社会はそれについて完全には知らされていない — ただ、ほんの断片、予め決められた対応、そんなものだけが与えられている。だから、あなたが国政選挙[2000年10月]を前にして私に面接取材をしているのは、奇妙なことだ。なぜなら、あなたはただテレビをつけるかラジオを聞くかすればよいからだ。そうすればあなたは、その道の専門家が予め決めたことの結果を聞いたり見たりする。我々は盲人に物を見させたり、けが人を歩かせたり、そんなことをする。そして我々は人々に一定の流儀で語らせ、彼らに知性があるという。我々は多くのことができる。また多くのことを隠す。

SG: 新エネルギー研究についてのあなたの仕事と、それがいかに抑圧されてきたか、話してください。

CB: 技術マニュアルと MIT (マサチューセッツ工科大学) で行なわれた研究から、もし完全な乾燥から完全な湿潤に環境が変わると、エンジン効率が 2 パーセント改善されることを私は知っていた。さて、[我々が発見したこの方法で]空気に湿気を与えることにより — 当時私がしていたのはこれだけだった — 私は内燃機関の効率を 20 から 30 パーセント改善させることに成功していた。もちろん、工学分野の人々や科学者たちはそれを信じようとしなかった。それで私は、他にもっとよい方法があったかもしれないが、先に進み、エンジン効率を著しく改善するこれらの装置を販売し始めた。そしたら、奇妙なことが起き始めた。政府、特に連邦取引委員会が介入してきた。EPA (環境保護庁) はそれが機能することに満足した。だが、政府からの支援は何もなかった。ついに EPA 長官は、ノースカロライナ州にある同庁の研究所長に電話をし、私と一緒に仕事をするように求めた。こうして私は、長官が研究所長にディーゼルエンジンを持ってこさせたことは何も知らずに出向いた。私が知る限り、その結果は目を見張る素晴らしいものだった。それは EPA 研究所でテストされた中で、あらゆる排出物を同時に低減させ、しかも燃費を 23 パーセント向上させた、最初のディーゼルだった。私が知る限り、いずれの項目についてもこれと同等の結果を出した人はいない。

連邦取引委員会は、後に文字どおり一つの違法行為をした。ワシントンのある大手卸売業者の弁護士に宛てた明確な声明は、それが機能するかどうかには関心がない、人々にはこれらの大型米国車を買って欲しくない、というものだった。私がこの報告を受けたとき、米国政府の役人 — こ

それは 1979 年から 1980 年のことだ — がそんなことを言うとは信じられなかった。

それで私はワシントンに飛び、議会に行つて科学技術委員会の一人の上院議員に会い、総務にも会った。彼は私に詳細な質問をした。私は説明資料を持っていた。そして彼は行動を起こすと言った。私が FTC(連邦取引委員会)の態度の不正さを指摘すると、彼らは連邦取引委員会委員長宛に非難する書簡を書き、その写しを私に送ってきた。その日から 3 週間のうちに、私は車を失った。およそ 10 万ドル相当の装置と試験車両を盗まれた。私は米国陸軍レースチームに小さな妖精のようなレーシングカーを提供していた。我々がレースに勝つて間もなく、彼らはその車から私の装置を取り外して盗んだ。その陸軍レースチームの指揮官は陸軍曹長だった。我々はスーパーカーを生み出していた。それを彼らはカリフォルニア州バンナイズの米国陸軍から盗んだのだ。それから 3 週間、私は精神的に参ってしまった。これはただのお話ではない。実際にあったことなのだ。人生の 9 年間で戦闘に参加し、戦闘地域に身を置いてきた人間として、この話をしないわけにはいかない。...これはとても忘れられることではなかった。

[化石燃料を不要のものとするか、あるいは我々のそれへの依存を大きく低減させる装置を持った多くの研究者たちが、この種の仕打ちと妨害行為を受けてきた。ブラウン中佐のような我が国の英雄がこんな扱いを受け、政府や法執行機関の態度が彼に協力的でないことは、私にとり受け入れ難い。その一方で地球の環境は悪化し続けている。SG]

我々はまた、海事管理局とも一つのプロジェクトを持っていたが、これはとても成功した。結論を言うと、私は 40 パーセントの排出低減と同時に、馬力の 20 パーセント向上つまり燃料の 20 パーセント削減を達成することができた。

[私はこれらの研究結果を持っている。それらは驚くべきものだ。想像してみよ：抑圧がなければ我々は 20 年前に 40 パーセントの排出低減と 20 パーセントの燃費向上を実現できていた。SG]

プロジェクトの終わり近く、その 2 ヶ月前になって、彼らは我々の協定は打ち切りだと言った。我々はこのプロジェクトを止めると。私はそれはできないと言ったが、彼らはもうそのように決まると言った。私は、プロジェクトはもうすぐ完成だ、残りの 2 ヶ月分の資金は払ったと言った。彼らが言うには、我々はその試験結果を公表しないということだった。それだけでなく、彼らは私のノートと記録のすべてが欲しいと言った。その権利はあなたたちにはない、と私は言った。そしたら彼らは、それに資金を出しているのだから権利はある、政府と争うなどと言った。こうして私は持っていたものすべてのコピーを何部か取り、方々にばらまき、そのすべての原資料を彼らに送った。このとき私の知らない何があったのか、私はそのプロジェクトを立ち上げた主任技師に電話を入れたが、彼は決して出ることがなかった。その補佐役の技師にも電話したが、出なかった。ついに私は経理担当者に電話した。そしたら彼は、この二人はもうここにはいないと言った。あなたは何を言ってるんだ？と私は問い詰めた。そしたら彼は、海事管理局は研究部門を廃止したと言ったのだ！何者かがこの技術の成功を望まなかったのだ。

それから、後日仕事で旅行中だったが、午前 0 時を 2 分過ぎて私の誕生日になったとき、ホテルの私の部屋に電話があった。私はちょうど就寝しようとしていた。電話の音が、今すぐ部屋から出てください、と言った。私は、あなたが誰で理由が何かを教えたらそうすると言った。これはフロント係

で、この可哀想な男は声変わりしていた。彼は、あなたの部屋に爆弾があるという電話を受けたところだと言った。それで私は、これ以上議論しようとは思わないと言い、電話を切って外に出た。このときまでにはモーターから全員避難が始まっていた。こんな状況だったので、私はホリデー・インに移ると言い、そうした。私は真ん前の照明のある一角に駐車したが、そのことがこの装置を中に入れた私の旧式車を災難に遭わせることになった。私はその中に数千ドルの装置を持っており、幾つかの気密試験を行なうために、それをパデュー大学に持っていくところだった。

とにかく翌朝 7 時 15 分に私は外を見た。私の車が合った場所には何もなかった。彼らは私の車を盗んだ。警察が 2, 3 週間後にそれを探し出したが、燃料タンクにはドリルの穴が開いており、私の試験装置のすべては消えていた。私は気化器の試作品を製作していた。それは私が製作した中では最後のものだった。私は実際に装置を製作した。そして何もかも失った。そのために、私は再び精神的に打ちのめされた。

そういうわけで、私は部屋に爆弾があるという電話を受けた。誰か私をつけていたのだ。私の電話は盗聴されていた。間違いない。そしてこれには何ら道理に適った理由がなかった。私の装置はこの車卸売業者を通して購入される車、トラック、バンなど、すべての米国製新車に取り付けて無料で提供された。私は米国製に限定するという条件を付けた。

私の発明は、まったく新しい科学の領域に向かう道を実際に開いたものだ。これは私だけの考えではなく、物理学、化学、および工学分野の少なくとも 3, 4 人の博士の考えでもある。

燃焼を促進する分子とラジカルが、この現象の進行中に生成される。それは瓶の中に雷を発生させる[そして燃費を大幅に向上させ排出を減少させる分子を生成する]。

私の発明は古い車を使い続けたい人々のための後付け改良装置として役立つ。だが特に有効なのは、汚染排出輸送手段に対してだ。たとえば 18 輪車、ディーゼル車、都市部のディーゼルバス、曳き船、外洋船舶などがある。ヨーロッパ、英国、およびドイツのマックス・プランク研究所の調査に基づけば、発電所のための需要も見込まれると私は考えている。これが発電所でも利用可能であることを私は信じて疑わない。人々はそこから上がる白煙を見ることはなくなるだろう。最小限の投資でこれが実現可能であることを、私は 90 パーセント信じている。

こうしてともかく私の発明は、特に空気中の酸素を増やすものだ。増えるのは酸化剤だけなのだ。それは地球を救う。それは二酸化炭素を減らす。もし使用する燃料が少なくなれば、二酸化炭素は減少する。私を知る限り、それはおそらく最も欠点のない発明だ。

本当のところ、私は米国政府のある機関から数年前にこう助言されている。もし私ができると言っていることが実際にできたら、それは新しい科学の領域だと。そのとおりだ、それが科学の新領域だということを私は知っている。なぜなら、それに対抗できる発明はどこにもないからだ。それはあらゆる熱サイクルエンジンの燃焼用空気あるいは混合気の質を高める一つの方法だ。私はそれをプロパンで試し、ディーゼルとガソリンで数百万マイルの広範な試験を行なった。私はそれをオクタン価 75 から 125 のガソリンで試験した。私は、通常ならオクタン価 92 を必要とする乗り物を、ノッキングを起こすことなくオクタン価 75 で走らせることができる。それを 3 ヶ月間行なった。[この技術の]可

能性ということに関して、私はその表面を引っ掻いたにすぎない。

もし25年前の始まりのとき、石油会社が完全に私を支持していたなら、この地球上の有限な資源である石油の利用寿命を延ばしたかもしれない。

キャロル・ロジン博士の証言
Testimony of Dr. Carol Rosin

2000年12月

キャロル・ロジン博士はフェアチャイルド社の最初の女性管理職で、ウェルナー・フォン・ブラウン晩年の代弁者だった。彼女はワシントン D.C.で宇宙空間安全協力協会を創設し、多くの機会に議会で宇宙兵器について証言した。フォン・ブラウンがロジン博士に明かしたところでは、地球外からの脅威を捏造して宇宙兵器を正当化しようとする計画があったという。彼女はまた、1990年代の湾岸戦争に向けたシナリオが計画された1970年代の会合(複数)にも出席した。

CR: キャロル・ロジン博士

SG: スティーブン・グリア博士

CR: 私の名前はキャロル・ロジンだ。私はフェアチャイルド航空宇宙会社の最初の女性管理職になった一人の教育者だ。私は宇宙ミサイル防衛顧問であり、幾つかの企業、組織、政府部門、さらには情報機関の顧問をしてきた。私はMXミサイルに取り組んでいたTRW社の顧問だったので、その戦略に加担したが、それは宇宙兵器をいかにして世間に受け入れさせるかの手本だったことが判明した。MXミサイルは私たちにとって不要なもう一つの兵器システムだ。

私はワシントン D.C.に本拠地を置くシンクタンク、宇宙空間安全協力協会を創設した。私は作家であり、これまで議会や大統領宇宙諮問委員会で証言してきた。

私は1974年から1977年までフェアチャイルド社の管理職だったが、この期間に今は亡きウェルナー・フォン・ブラウン博士に出会った。私たちは1974年初めに会った。当時フォン・ブラウンは癌で死期を迎えていたが、目下行なわれている策略について私に語るために、あと数年は生きるつもりだとはっきり言った — その策略とは宇宙を軍事化し、宇宙から地球を支配する、また宇宙そのものを支配する試みだった。フォン・ブラウンは兵器システムに取り組んだ経歴を持っていた。彼はドイツを脱出してこの国に来た。私が彼に会ったとき、彼はフェアチャイルド社の副社長だった。フォン・ブラウンの晩年、死期を迎えていた彼の目的は、宇宙兵器が愚かしく、危険で、世界を不安定にし、膨大な予算を要し、不必要で、役に立たず、好ましくないのはなぜか、またその有効な代替案は何かについて、国民と政策決定者を教育することだった。

事実上の遺言として、彼は私にそれらの構想とその推進者たちが誰かを教えた。彼は死期が迫っていたので、宇宙の軍事化を阻止するための活動を継続するよう、私に委ねた。ウェルナー・フォン・ブラウンが癌で死期を迎えていたとき、彼は私に自分の代弁者となり、体調が悪くて話ができないときには自分の代理になって欲しいと頼んだ。私はそれをした。

私の関心を最も強く引いたのは、彼と一緒に働く機会があった約4年間、彼が何度も何度も私に

繰り返した一つの言葉だった。国民と政策決定者たちを教育するために使われている戦略は、脅しの策略だ。．．．それは何を我らの敵と見なすかの方法だった。

ウェルナー・フォン・ブラウンが私に教えた戦略では、まずロシアが敵とされた。1974年には実際彼らは敵、認定された敵だった。私たちは彼らが“キラー衛星(*衛星攻撃用衛星)”を持っていると教えられた。私たちは彼らが私たちを捕らえて支配すると教えられた — 彼らは“共産黨員”だ。

次にテロリストが敵と見なされ、これはすぐに現実化した。私たちはテロについて多くを耳にした。次に第三世界の国が“過激派”とされた。今私たちは彼らを懸念のある国々と呼んでいる。しかし彼が言うには、それは宇宙に兵器を建造するための第3の敵ということだった。

次の敵は小惑星だった。ここまで話して、彼は初めてクスクスと笑った。小惑星 — 小惑星を相手に私たちは宇宙に兵器を建造しようとしている。

そして馬鹿げた最たるものは、彼が異星人と呼んだ地球外知性体だった。それが最終的な脅しになった。私が彼を知り、彼のために演説をしていた4年間に繰り返し繰り返し何度も、彼はこの最後のカードのことを話題にした。“覚えておきなさい、キャロル。最後のカードは異星人カードだ。我々は異星人に対して宇宙に兵器を建造することになりそうだ。そしてそのすべては大嘘なのだ”

そのシステムが装う情報操作の性質の深刻さを知るには、私は当時あまりにも純真だったと思う。そして今、それらの断片はそれぞれ然るべき所にはまり始めた。私たちは嘘と情報操作の囲いの中に、宇宙兵器システムを建造しつつある。ウェルナー・フォン・ブラウンはすでに1970年代初期、私にそのことを気付かせようとしていた。そして1977年に亡くなるまさにその瞬間までそうだった。

彼が私に語ったのは、その戦略は加速されているということだった。彼はそのスケジュールを述べなかったが、誰もが想像できない速度で進んでいると言った。宇宙に兵器を持ち込む戦略は、嘘の上に立っただけではない。人々がそれに気付く前に建造を終えることが意図されていた。

私が初めて彼に会ったその日、フォン・ブラウンは目の前で死期を迎えており、身体にチューブを付けられていた。彼はテーブルを軽く叩きながら私に言った。“フェアチャイルドに来なさい”私は一介の学校教師だった。彼は言った。“あなたはフェアチャイルドに来て、宇宙に兵器を持ち込ませない役割を果たしなさい”彼は強い眼差しを向けてこう言い、私が彼に会った最初のこの日に、宇宙兵器が危険で、世界を不安定にし、膨大な予算を要し、不必要で、役立たずの構想であると付け加えた。

最後の切り札は、地球外からの敵というカードだった。それを力を込めて言った彼の様子から、私は彼が口に出すのも恐ろしい何かを知っているのだと理解した。彼は大変恐れてそれを語らなかった。彼はその詳細を私に話そうとしなかった。もし彼が私にその詳細を話していたなら、1974年当時に私がそれを受け入れたか、あるいは彼を信じたかどうかさえ分からない。しかし、彼はそれを知っていたし、知る必要性を持っていたことは確かだった。後になって私はそのことを知った。

ウェルナー・フォン・ブラウンが地球外知性体問題について知っていたことは疑いない。兵器が

宇宙に持ち込まれる理由、これらの兵器を建造して迎え撃つ敵、これらのすべてが嘘だということを、彼は私に説明した。地球外知性体が最終的な敵と見なされ、それに対して宇宙兵器が建造される。このことがすでに 1974 年に画策されていたことを彼は述べた。これを話した彼の様子から、彼が何か恐ろしくて口にできないことを知っていたと私は確信している。

ウェルナー・フォン・ブラウンは、地球外知性体に関して知っていた詳細を私に話したことはない。しかし、いつか地球外知性体が敵と見なされ、それに向けて巨大な宇宙兵器システムが建造されるだろうと語った。ウェルナー・フォン・ブラウンは、その情報操作は嘘だと実際に私に語った。宇宙兵器の前提、それが建造される理由、敵と見なされるもの — すべて嘘に基づいている。

私は約 26 年間にわたり宇宙兵器問題を追求してきた。私は将軍や国会議員たちと議論してきた。私は議会と上院で証言してきた。私は 100 以上の国々の人々と会ってきた。しかし、この宇宙兵器システムを建造しているのが誰なのか、特定できていない。私はニュースを見る。私は政策が決定されるのを見る。それらがすべて嘘と貪欲の上に立っていることを私は知っている。

しかし、その者たちが誰なのかをいまだに特定できないでいる。これは 26 年間この問題を追求してきた結果だ。隠されている大きな秘密があることを私は知っている。また、今真実を明らかにしようとしている人々がいることに、国民と政策決定者たちは目を向けるべきときだと知っている。私たちは決定的に方向を変え、すべての人々、すべての生き物、この惑星の環境の利益になる宇宙システムを建造する必要がある。技術はすでにある。地球の差し迫った、長期に及ぶ潜在的な諸問題への解決策がそこにある。人々がこの地球外知性体問題について学び始めるや、私が 26 年間抱き続けてきたあらゆる諸問題は解決されるだろう。私はそう感じている。

しかし、私の結論は、それが少数の人間の莫大な利益と権力の獲得に根ざしているということだ。それは利己主義に関係している。それは私たちの本来のあり方、この惑星に住み、互いに愛し合い、平和に助け合う私たちとは関係がない。それは問題解決のために技術を利用したり、この惑星に住む人々を癒すこととは関係がない。そうしたことはない。それは彼らの財布と勢力争いのために、時代遅れの、危険な、経費のかかる策略を現実に進めている少数の人間に関係している。それだけのことだ。

私はこの宇宙兵器の戦略全体が、まさにこの米国で始まったと思う。私が望むのは、今明かされつつあるこの情報により、新しい政権が正しいことを行なうようになることだ。すなわち、戦争ゲームを宇宙ゲームへと転換し、それにより人々がその技術を軍事技術の副産物としてではなく、まさに協同的な宇宙システムを建造するための技術応用として利用できるようにする。それは全世界に利益をもたらす、彼の地に明らかに存在する地球外諸文明との交信を可能にするだろう。

これらの宇宙兵器から誰が利益を受けるか？それに関連する領域の人々だ。軍事、産業、大学、研究機関、情報機関の人々。これは米国に限らない。世界中がそうだ。これは世界規模での協同体制だ。戦争とは協同的なものだ。同じことは平和に変わっても起きるだろう。しかし現在は利益を得ている人々が多数いる。それがこの国の経済が基盤とし、世界中に拡散しているもの — 戦争だ。その結果、人々は苦しんでいる。これは正しいことではない。これまでも正しかったことはなかった。人々はこう叫んでいる。“剣を打って鋤の刃に変えよう。平和を実現し世界中と手を握ろう”し

かしこれがうまくいったことはない。あまりにも多くの人々が利益を得ているからだ。彼らは金銭的な利益を得ているだけではない。これは私の経験だが、アルマゲドン(*世界最終戦争)の到来を実際に信じている人々がいるということだ。だからこれらの戦争が必要だと。

このように、それは財布から宗教右派にまで関係している。ある人々は、これらの宗教上の理由により戦争は必要だと実際に信じている。戦争そのものが好きな人々もいる。私はただ戦争に行きたいと思っている兵士に会ったことがある。また命令を受けるだけの善良な人々、兵士たちがいる。彼らは子供たちを養い、大学にやるために職を失いたくない。研究機関の人々が私に話したのは、戦争のためにこれらの技術を研究したくないが、そうしないと給料を貰えないということだった。誰が彼らに給料を払っているのか？しかし私の理解では、これらの技術には二重用途どころか、同じ技術に対して多くの用途がある。

私たちは宇宙に病院、学校、ホテル、研究所、農場、工場を建造することができる。現実離れしていると思われるかもしれないが、そうしないと戦争基地と兵器を建造することになる。それは私たちすべての喉元に向けられる。明らかに私たちはすでにその一部を成しつつある。今私たちには実行可能な選択肢がある。私たちのすべてが利益を受けるのだ — 軍産複合体、情報機関、大学、研究機関、米国、そして世界中の人々 — 私たちのすべてが利益を受けることができる。私たちは、内なる最高の意識、精神性、そして滅亡したくなければ他に選択肢はない、という事実に立って決意しさえすれば、この産業の仕組みを容易に転換することができる。私たちは滅亡を望まない。そうすれば私たちのすべてが金銭的、精神的、社会的、心理的な利益を得ることができる。この策略を今転換することは、技術的にも政治的にも実行可能だ。そうすれば皆が利益を受ける。

1977年に、私はフェアチャイルド社のある会議室で開かれた会合に出席していた。その部屋は戦争部屋と呼ばれていた。そこでは、壁に敵と見なされた者の名前とともに、多くの図表が張ってあった。他にも目立たない名前、サダム・フセインとかカダフィなどの名前もあった。しかし私たちはそのとき、テロリスト、潜在的なテロリストについて話し合っていた。それまで誰もこれについて話したことはなかったが、これは宇宙兵器を建造するために必要な、ロシアの次の敵だった。この会合で私は立ち上がってこう言った。“ちょっと待ってください。宇宙兵器を建造するために、なぜ私たちはこれらの潜在的な敵について話し合っているのですか。彼らは今敵でないことをご存じでしょう？”

彼らはその会話を続けたが、それはこれらの敵を怒らす方法、またある時点で湾岸に一つの戦争、つまり湾岸戦争を起こすことに関するものだった。この話が行なわれているのは1977年、1977年ですよ！彼らは湾岸地域に戦争を起こすことを話し合っていたが、このときまだそれとは確認されていなかった宇宙兵器計画には、250億ドルあった。少なくともそれは、戦略防衛構想(Strategic Defense Initiative; SDI; *1983年にレーガン大統領により提唱された)とは呼ばれていなかった。1983年まではそうだった。この兵器システムは、明らかにそれまでのかなりの期間継続されていた。これについて私は何も知らなかった。だから私はこの会合で立ち上がって言った。“これらの敵に対する宇宙兵器について、なぜ私たちが話し合っているのか、その理由を知りたいと思う。このことについて私はもっと知りたい。誰か私にそれを教えてくださいませんか？”誰も答えなかった。彼らはまるで私が何も言わなかったかのようにこの会合を続けた。

突然私はその部屋で立ち上がり、こう言った。“次世代の兵器システムを開発するのに必要な一

定の予算があるときに、あなたたちは湾岸における戦争を計画している。その兵器システムは宇宙兵器が必要な理由を国民に受け入れさせる最初になるでしょう。戦争を計画している理由を誰も説明できないなら、私は辞任します。再びあなたたちに連絡することはないでしょう！”誰も何も言わなかった。なぜなら、彼らは湾岸の戦争を計画していたからだ。それは計画どおりの正確な時期に起きた。

SG: 誰がその会合に出席していたのですか？

CR: その部屋は転身ゲームに身を置く人たちでいっぱいだった。一度は軍服姿を見たが、別のときにはグレースーツや企業の服装という人たちがいた。これらの人たちは転身ゲームに興じている。彼らは顧問、企業人、また軍人や情報機関員として働く。彼らは企業で働き、これらのドアを通して政府の役職へ転身する。

この会合で私は立ち上がり、私の理解が正確かと訊ねた。宇宙兵器予算として 250 億ドルが使われており、次世代兵器を国民と政策決定者たちに受け入れさせるために、湾岸で戦争が故意に起こされようとしている。この戦争は古い兵器を放出し、まったく新しい兵器体系を構築するためのものだった。だから私はこの役職を辞めた。この企業のためにはそれ以上働くことができなかった。

1990 年頃、私は居間に座りながら、宇宙兵器の研究開発に使用された資金を眺めていた。そして、それがあの数字、約 250 億ドルに達していたことを知った。私は夫に言った。“私は今何もしていない。私は今何もしないで座って CNN テレビを見ている。戦争が起きるのをただ待っている”私の夫はこう言った。“君はどうとう頭がおかしくなった。どうかしてるよ”友人はこう言った。“今度のことでは君は度を超している。湾岸に戦争が起きる気配はないし、誰もそれについて話していない”

私は言った。“湾岸に戦争が起きることになっているのよ。私はここに座って、ただそれが起きるのを待っているんだわ”そして、それはまさにスケジュールどおりに起きた。

湾岸での戦争ゲームの一部として、国民は米国がロシア製スカッドミサイルの撃墜に成功したと教えられた。私たちはその成功に基づき、新しい予算を正当化しようとしていた。しかし、次世代兵器のための予算が承認された後で、私たちはそれが嘘だったと知った。事実はそういうことだった。私たちが教えられたようにはその撃墜に成功していなかった。それはすべて嘘だった。もっと多くの金をその予算に盛り込み、もっと多くの兵器を製造するためだった。

私は、ロシアが“キラー衛星”を持っていると聞いて単独で同国に行った最初の一人だった。

[ポール・シス博士の証言を見よ。SG]

1970 年代の初期に私がロシアへ行ったとき、私は彼らがキラー衛星を持っていないこと、それが嘘だということを知った。実際、ロシアの指導者と人々は平和を望んでいた。彼らは米国および世界の人々と協力したいと望んでいた。

サダム・フセインが油田に火をかけていたとき、私はサダム・フセインに電話したことがあった。私

が電話しているとき、夫は台所にいた。サダム・フセインの近くにいた主席随員から折り返しの電話があり、こう訊かれた。“あなたは記者か？職員か？なぜ知りたいのだ？”

私は言った。“いいえ。私は宇宙の軍事化を阻止する運動の立ち上げを支援した一人の市民です。兵器システムと敵について私が教えられてきた多くの話は、真実でないことを知りました。これらの油田に火をかけるのを止め、人々と敵対することを止めるために、何をすればサダム・フセインは満足するのか、私は知りたいのです”彼は言った。“よろしい、今まで誰もそれを彼に訊いたことはなかった。彼が何を望んでいるかを”

...

だから私が地球外知性体による脅威の可能性を聞いたとき、それは嘘だと知った。というのは、私は数千年にわたり続いてきたかもしれないET地球訪問の歴史を眺め、軍、情報機関、企業の誠実な人々が UFO、その墜落と着陸、地球外知性体の生存者と遺体についての体験を公表するのを聞いていたからだ。もし私が、これらが敵で宇宙兵器を向ける相手だと教えられているとしても、軍産複合体で兵器システムと戦略に関して働いた私の個人的経験に照らして、それが嘘だと知るだろう。それは嘘なのだ。

私はそれを信じないだろうし、外に出かけてありったけの大声で、人々にそれを調べてみるように言うつもりだ。彼ら[ET たち]は私たちをさらっていったことはない。私たちは数千年間の訪問を経てもちゃんとここにいる。もし実際に彼らが今も私たちを訪問し、私たちが被害を受けていないなら、私たちはこれを敵意のない出来事と見るべきだ。

私の望みでもあり、自分にできることは何でもしたいと思っていることは、これらの地球外知性体と交信し協力するために働いている人たちと一緒に仕事をしたいということだ。彼らが敵意を持たないのは明白だ。私たちはここにいる。これこそが十分な証拠ではないか。

この惑星上で生きる道を選ぶことには何の制約もない。私たちにはそれをする機会が与えられている。と同時に、その窓は急速に閉じられつつあると私は考えている。私たちに決心をするための時間が多くあるとは私は考えていない。私たちはあまりにも多くの危険な道に接近し過ぎている。その道は、進歩した技術か外来の技術かはともかく、それによる何らかの恐ろしい災難、ある種の戦争の発生につながっている。

私たちにはリーダーシップが必要だ。それは米国大統領から始めなければならない。私たちすべてがその心に影響を与えるべき人が米国大統領だ。あなたが海外の人でも、世界の他の国々の人でも、米国人でも、どの政党の人でも、どの宗派の人でも — 米国最高司令官である米国大統領こそが、その心を動かされるべき人なのだ。すべての宇宙兵器の最終的で包括的、かつ検証可能な禁止を望んでいると、私たちは言う必要がある。

DB: 反重力だ。実際のところ、私はマリブ(*ロサンゼルス近郊)にあるヒューズ社に出かけていったものだ。彼らはそこに大きなシンクタンクを持っていた。巨大反重力プロジェクトだ。私はそこで彼らに話した。私は彼らにアイデアを与えた。なぜなら彼らは私の全装置を買ったからだ。

だが、米国民はそれについて決して、決して知ることはないだろう。

私には航空宇宙分野で働いている仲間たちがいる。我々は時々小さな会合を持つ。そのとき私の一人の友人は円盤を飛ばした。あなたはたぶんその円盤を見たことがあるだろう。ご存じエリア 51 からだ。

この空飛ぶ円盤は小さなプルトニウム反応炉を内蔵している。それは電気を発生し、これらの反重力円盤を推進する。我々には次世代の推進装置もある。それは仮想フィールドと呼ばれている。それらは流体力学波と呼ばれる...

私はこの反重力推進問題を人々に話していただけではない。私はフォン・ブラウンにもそれについて話していた。つまり、ご存じのように私はよく喋る。そのときはもっとそうだった。

さて、我々がサターンロケットを格納庫から引き出していた最初の夜、私は揺り起こされた。私はこのコンピュータ操作卓に座り、よく眠っていた。明け方の4時だった。私の技術者の一人が近寄ってきて私を揺り起こした。“B 博士、外に来てください。何か大変なことが起きています”今起きているというのだ。私は言った。“何だ？ 一体何が起きているんだ？”彼らはちょうど鳥[サターン]を引き出し、皆で写真を撮っていた。そしたら1機の大きな円盤がカリフォルニア州シールビーチ(*カリフォルニア州太平洋岸)に降下してきた。それが空中静止している写真を私は持っていないが、その降下した円盤を400人の従業員が見た。早春の朝4時だった。それは1966年の4月頃だった。

SG: どのようにして、このことがまったくの秘密にされてきたのですか？

DB: 一緒に働いていた何人かがある計画で消えてしまい、消息を絶ったことを私は知っている。彼らはまさに消えたのだ。私の仕事の全期間を通じてその証拠がある。ご存じか、その人たちはプロジェクトのために出ていったのだ[そして消えた]。だが、[これから身を守るために]私はプロジェクトのためにどこにも行こうとしなかった。なぜなら、何か奇妙なことが起きていると分かったからだ。そうして、多くの人々が本当に消えてきたのだ。彼らは上の人たちだ...

誰が[ホワイトハウスの]中にいるかは関係ない。なぜなら産業界が今これを支配しているからだ。特定利益団体 -- それは現在この国のすべてを動かしている基盤だ。

SG: 特にどの業界ですか？

DB: どの業界かって？石油業界だ。

海兵隊上等兵 ジョナスン・ウェーガントの証言
Testimony of Lance Corporal John Weygandt

2000年10月

ジョナスン・ウェーガントは1994年に海兵隊に入隊した。麻薬取引探査レーダー装置の周辺警備のためペルーに駐在していたある夜、彼と二人の軍曹は、森の中の墜落現場と思われた場所を確保するよう命じられた。彼らが到着したとき、峡谷の斜面に20メートルの卵形UFOが埋まっているのを見た。彼はその墜落機から呼び戻され、逮捕され、手錠をかけられ、脅迫され、ひどい訊問を受けた。一人の男が彼に言ったのは、訊問者は彼らの好きなようにし、憲法には何ら縛られない、ということだった。ウェーガントはこのUFOがHAWKミサイルによって撃墜されたと信じている。

JW: ジョナスン・ウェーガント

SG: スティーブン・グリア博士

JW: 私は高校在学中の1994年7月に、予備入隊制度(Delayed Entry Program)により海兵隊に入隊した。もちろん私は約1年間の予備入隊だった。私は6月18日に新兵訓練キャンプに行った。卒業は1995年9月8日だった。そこを出てからの私の職能区分は0311、つまり歩兵だった。

1996年1月の後半、私は新しい命令を受け、新しい職能区分を与えられた。今度は7212ステインガー・アベンジャー(*対空ミサイルシステム)の任務だった。こうして私はFIM92アルファ・ステインガー・ミサイルシステムの防空射撃手になるための訓練を受けた。これは地対空ミサイルで報復兵器だった。訓練は1996年の2月から5月後半まで行なわれた。

その学校を卒業した後、私の最初の任地として配属されたのは、第2海兵航空団、第28海兵航空管制群、ノースカロライナ第2防空大隊部隊だった。私は1996年6月にB砲兵隊に任命され、幾つかのOps、作戦に参加した — 我々は作戦(Operations)をOpsと略称する。基本的にその所属のまま、私は1997年2月にレーザー攻撃部に移った。戻ってきたとき、私は行きたいかと訊かれた。私は“行きたい”と答えた。こうして私は志願してその部に送られた。我々はその年の3月にペルーに向けて出航した。

我々がそこに送られたのは、このレーダー装置の周辺警備のためだった。基本的にこのレーダー基地は、ペルーとボリビアの領空を出入りする麻薬輸送が疑われる航空機を追跡していた。ある夜のこと、アレン軍曹とアトキンソン軍曹が我々の所に来て、こう言った。“よく聞け。航空機が1機墜落した事態になっている。おそらくそれは敵ではない。我々は墜落現場に出かけてそこを警備することを要請されている”これは深夜の11時か12時のことだ。

その夜私は警備勤務だった。それで私はすでに起きていたし、私の勤務時間だった。こうして我々は朝の3時か4時頃に起き、5台か6台のハマー(*オフロード車)で出かけた。我々はまず行くべき所まで走行し、そこからは茂みをかき分けて進んだ。我々はその間に6時か7時頃着いた。ちょうど夜が明け始めていた。

さて、我々はそのことがとても容易な場所であることを知った。というのは、その何かが墜落した場所には巨大な溝があったからだ。そこでは何も破壊されていなかった — 半分に折れた樹木などが

散らばる墜落現場にあなたが行ったことがあるかどうかは知らないが、すべてが焼け焦げており、ちょうど温かいバターをナイフで切り裂いたような光景だった。それは燃えた何か、レーザーに似たエネルギーが切り裂いたような光景だった。それはとても異様だった。とにかく、私はアレン軍曹、アトキンソン軍曹と一緒に一番前にいた。我々は他の人々よりも 10 から 20 メートル前にいた。我々は皆迷わないように地図と無線とコンパスを持っていた。

我々がこの物体を見た最初だった。それは丘を駆け上がり、峡谷と尾根の側面で停止していた。その尾根は少なくとも約 200 フィートあり、硬い岩だった。それは断崖の側面に埋まっていた。とにかく、そこには真っすぐ登って行けなかったのので、我々は左側に回って尾根の頂上まで歩いた。我々がその航空機を見たのはそのときだった。

これは巨大な船体だった。それを初めて見たとき、私は恐怖を感じた。私はひどく怯え、どうしてよいか分からなかった。私は本当に混乱していた。我々は尾根を降りたが、それは尾根の所で断崖の側面に約 45 度の角度で埋まっていた。これは急峻な断崖で切り立っていた。それからシロップに似た液体が滴っており、そこら中に飛散していた。それは緑がかった紫色で、揺らいでいるようだった。それは見ているとまるで生き物のように変化し、そのたびに緑がかった紫色がその色調を変えた。

船体の上に 1 個の照明があり、ゆっくりと回転していた。私はこの機械の音を聞くことができた。なぜなら、それはまだ作動しており、ブンブンと音を発していたからだ。それはギターからアンプを抜いたときのような深い低音で、振動していた。やがてそれは止み、すべてが停止したようだった。

私とその航空機を見ていたとき、それは埋まっていたので、その上面部が見えていた。そこには通気口のように見える、これらの大きなものがあつた。背中に開いた魚のエラのようなようだった。反対側は見えなかったが、そこも同様だろうと私は推測した。船体から流れ出していたあの液体だが、私の迷彩服についてそれを変色させた。そして、まるで酸のようにそれを溶かした。それは私の腕の毛を何本か溶かした — それに気付いたのは後になってからだ。

私はその船体まで降りていた。その中には三つの穴があつた。私はそれらをハッチだと考えたが、どう言い表せばよいか。それらはその航空機の主要部と同一平面にはなく、分からないが、数インチ下がっていた。頂部に一つあるのがわずかに見えていた。反対側は知らない。頂部のものと同じ幅と直径を持つハッチがもう一つあり、それは側面に向かってやや湾曲しており、半開きだった。そこには明かりなどは何も見えなかった。しかし私はこれを感じた... 何者かの存在。

それはまったく見たことがないものだった。その生物たちは私を落ち着かせたようだ。それは奇妙だった。彼らはテレパシーで私と交信しようとしていたように思える。それは実に奇妙で、私ならこんな話は信じない。それはちょうど車に座って雑音の AM 放送をつけ、その音量を大きく上げたのに似ている。私が最初にその中に入ったとき、聞いたものがそれだった。

その船体はおおよそ幅が 10 メートル、長さが 20 メートルだった。私の記憶から推定した大きさだ。それは巨大だった。それは卵と涙滴の中間のような形をしていた。少なくとも形において、それは実に空気力学的だった。私は近くでその表面を詳細に観察したが、それは滑らかではなかった。表

面には隆起や溝などがあつた。それは実に有機的 — ほとんど芸術のようだった。それは誰かがアトリエで製作したもののようにあつた。何かの物質から手作りしたもの。だがその物質が何かは知らない。明らかにチタニウムのようにではなかつた。

それは金属に見えたが、光を反射しなかつた。太陽の光を浴びていたが、その色調はそれと異なり、何も反射していなかつた。たとえフラッシュライトを当てても、反射しなかつただろうと思う。

私は内部に入りたかつた。なぜなら誰か — その生物たちが私に助けを求めているように思えたからだ。何の問題もなかつた。私は誘われるようにその中に入りかけた。突然、アレン軍曹とアトキンソン軍曹が私に向かって、そんな所から出てこいと怒鳴つた。

SG: なぜですか？

JW: 彼らは怯えており、私が危害を受けるのを望まなかつたのだと思う。分からないが、彼らは私のことをとても怒っていた。起きたことはつまり、我々がそこから戻り、上に上がったとき、そこにはDOE(Department of Energy)、エネルギー省の人々がいたことだつた。彼らはこのことを知っていた。だからなぜ我々がそこに行つたのか、今でも分からない。だがとにかく、私は拘束された。私は黒い迷彩服の男たちによって装備をすべて外された。彼らは名札を付けておらず、30代後半から40代の年配者たちだつた。私はその場所におそらく15分から20分いた — そこに着いたのは我々が最初だつた。それから他の人々がそこに現れた。彼らは防護服を着ていた。彼らはそこに着いたばかりだつたに違いないが、確かではない。なぜなら、我々は峡谷に降りていたからだ。我々が登っていくと、そこに黒い迷彩服の男たちがいたのだ。彼らは私を連行し、彼らが持っていたキャンプベッドに押し込んだ。彼らは私に手錠をかけて両手を降ろさせ、警察が使うプラスチック製の締め具で両足を縛つた。それは一種の手錠だ。そして彼らは私をこの巨大な47(*巨大輸送用ヘリコプターと推測される)に連れ込み、我々は離陸した。

SG: なぜあなたをそのように扱つたのか、彼らは説明しましたか？

JW: いや、彼らは私を“間抜けな野郎”と罵つた。“どうしてお前は命令に従わなかつたのだ？”“お前はそこにいてはならなかつた”“お前はこれを見てはならなかつた”“お前を行かせたら危険だ” 彼らは実際私を殺そうとしていたのだと思う。

私が拘束つまり押し込められていた時間だが、よく覚えていない。2日間くらいだつたと思う。そこには空軍から来た一人の中佐がいた。彼は身分を明かさなかつた。彼は私に言った。“もし我々がお前をジャングルに連れ出したら、誰もお前を見つけれないだろう”

[それより50年前にロズウェルでグレン・デニスを受けた脅迫との類似性に注目せよ。SG]

私は彼が本当にそうするかどうか確かめたくなかつたので、ただこう言つた。“はい” そしたら彼は、“お前はこれらの書類にサインしなければならぬ。お前は決してこれを見なかつた” 私はそこに“いなかつた”し“これは決して起きなかつた” もし誰かに喋つたら、ただの失踪ということになる。

彼は実に強引だった。まさに世を拗ねた最低の人間という言葉がふさわしい。彼らは私を空軍の隊員と一緒にほぼ3週間隔離し、その後私は戻った。

この施設では米国人がいるのを見たが、他国の人も多かった。中国人がいた。ドイツ人もいたと思う。他の多数の人々がこのもう一つの基地にいた。彼らがしたことは私を訊問室に連れていくことだけだった。

よく覚えていないが、そこに私は照明をつけたまま15時間いた。彼らはこの照明を私の顔に照射し、大声で怒鳴った。これらの男たちが何者かは容易に確認できなかったが、その中の一人は墜落現場にいたことを知った。というのは、その男には見覚えがあったし、彼は黒い軍服姿だったからだ。彼はこう言っていた。“お前は何を見た？”まるで唸り声だった。続けて、“お前は愛国者か？お前は憲法が好きか？”私の答は“はい”というようなものだった。彼は言った。“我々は我々の原則で動いている。我々が従うことはない。思いのままにやる”彼らは怒鳴り立てながらそれを楽しんでいた。彼らは私を怒鳴り、大声を上げ、悪態をついた。“お前は何も見なかった。我々はお前と忌々しいお前の家族に何でもする”

この状態がおよそ8,9時間続いた。... “お前を連れ出してヘリに乗せ、尻を蹴飛ばしてジャングルに突き落とし、お前を殺す”彼らは私の身体に手出しをしなかったが、私は椅子に縛り付けられて座っており、身動きできなかった。だからこれは要するに脅迫だった。私はまる1日何も食べなかった。水も飲まなかった。まったく何も口にできなかった。ただそこに座っていた。

そのグループ、つまり私が所属する単位には、私を除いて8人から10人いる。アレン軍曹とアトキンソン軍曹もこの船体を見た。我々だけがそれを見た。ところで他の仲間たちはジャングルを切り裂いている墜落現場を見た。彼らはそのすべてを見た。彼らは尾根には行かなかった。前に話したように、我々は彼らより10から20メートル前にいて、それを見つけたこと、すべて順調であることを無線で通報した。これが起きたのは1997年の3月末か4月初めだった。...

米国に戻ったとき、私はこのことを話すためにアレン軍曹に近づいた。彼は結婚し、2人か3人の子供がいた。私は基地にある彼の家に行った。彼はとても取り乱し、私を家から放り出した。彼はそれについては話したくないと言った。彼らはこれらの人々も脅していたようだ。軍にいる限り私が話せないことをあなたは理解するはずだし、海兵隊ではすべてが一枚岩だ。彼らは何かをやれと言われたらそれをやろうとする。もしあなたがそれに従いたくないなら、基本的に彼らはあなたをそれに強制的に従わせる。

私はそれについて黙っていたくはなかった。私はポウエル曹長にそれを話した。彼が今でもまだそこにいるとは思わない。我々は3年前に話し合った。

私には何の破片も見えなかったが、その航空機の後部に大きな傷があった。それは地対空ミサイルで攻撃されたような傷だった。そこには数隊のHAWK砲兵隊がいた。つまり全自動誘導殺し屋(Homing All the Way Killers) — それは低高度から中高度までの対空ミサイルだ。

基本的に、それは標的を破壊するために標的に命中する必要がない。それがすることは標的の

近くに到達することだ。それは爆発力の強い破片弾頭を持っていて、標的とする点の近傍で大きな散弾銃のように爆発する。そして破片が飛散することにより、標的を破壊するか最早機能しないまでに損害を与える。だから私はそれが撃墜されたのだと考えている。

それが起きたことだと思う。我々がそれを撃墜したのだ。[レーダー施設にいた]他の連中は、それが飛行していたことを知っていた。私はこれらの航空機が飛行していたことを知っていた。なぜなら私はレーダー装置があるその司令部にいたことがあり、その空軍の女性隊員が二人で話しているのを聞いたからだ。彼女たちはマッハ 10 以上で大気圏に出入りする航空機について話していた。これらの航空機はその周辺を飛んでいたのだ。それらは大気圏に再び入ってきた。それがその地域を飛行していたことを上層部は知っていたのだと思う。

この航空機は我々のものではなかった。スティンガー学校ではあらゆる種類の航空機を教わるし、私は多くの航空機を知っていた。それを見て私が言ったのは、こういうことだった。“これは私が知っているものではない”

一般的に、レーダーは丘の上にあって回転しており、その地下に指令壕が建設されている。その中はスターウォーズのようだ。そこは完全に空調されている。とても快適だ。そこにはコンピュータがあり、レーダーを制御する制御盤がある。私の推測だが、それらは他の基地と連結されており、他からのデータが入ってくる。

さて、ある夜私はそこにいて入退出する人々をチェックしていた。彼らは ID(身分証明書)を持っているので私はそれらをチェックする。そのとき、この二人の女性隊員がこう話しながら歩いて出てきた。“またこれらの航空機が飛行しているのを捕捉したわ” そしたらもう一人が“そう、彼らは大気圏を出たり入ったりしている”と言った。彼らはこれらの飛来をすべて記録する。後で一人の男がやってきて日誌を集める。私は彼がそれをすべて持っていくのを了承しなければならなかった。

物体が大気圏に再び戻ってきていきなり停止する。向きを変えて正確に反対方向に進む — 奇妙な飛び方だ。流星はそんなことをしない。

SG: これは稀なことですか。それともいつも起きていたことですか？

JW: いつも起きていた。私が勤務中に同じ空軍将校がやってきて日誌を集めていったことが 3, 4 回あった。だからこれらの航空機はまさにこのレーダーで追跡され、記録されていたのだ。彼らがそれらを持ち去るのは、彼らがこれらの航空機を追跡していることを他に知られたくなかったからだ。と私は考えている。私はそう見ている。

だから彼らはこの航空機が飛来したことを知っていたと思う。それは識別できない。それはこの領空を侵略している。彼らはペルー軍に無線でそれを通報し、排除するように言い、撃墜したものだろう。私が最初にその航空機を見たとき、それを確信した。それは何かによって攻撃されていた。何かはそれを破壊した。

私は金を儲けたり有名になったり、何かのためにこれをしているのではない。これは話されなけ

ればならないと私は考える。人々はそれを聞く必要がある。私の言うことに同意するかどうかは少しも重要でない。

それは地球のものではない。それを見たときに私はそのことを知った。あれらの施設は UFO あるいは他の物体を追跡する意図を持って建設されたのではないか。そしてその口実が麻薬航空機の追跡ではないのか。彼らはただ麻薬航空機を追跡するだけよりもずっと多くのことをしている。彼らはレーザー距離計や、私が今まで見たこともないあらゆる種類の先端装置を持っていた。私にそれを説明できるはずがない。それら[レーザー距離計]は大きな望遠鏡のようだった。それらは地下壕にあり、地上へと上昇し急速に展開する — 実に奇妙な装置の一群だ。

私が連行された基地は間違いなく NATO(北大西洋条約機構)か何かの国際協同施設だった。私はそれを思い返してまだ考え続けている。なぜこれらの人々がここにいるのか？なぜ中国人が米国に密輸される麻薬に関係しているのか？我々の政府が麻薬を輸入していることを私は事実として知っている。この司令部は常設されていたのだと思う。この活動は長い間行なわれてきた。...

墜落現場には防護服を着た人々が少なくとも 30 人はいた。彼らは私が連れ去られるとき、私のすぐ脇を前進していた。彼らは一斉にその断崖を降りていた。おそらく彼らは、この物体を調査するためにそこにいたのだ。彼らはその中に入っていき、あらゆるものを持ち出し、そして持ち去ったのだと思う。

これらの人々の振る舞いは、まるでそれがいつもの仕事で、これらの人々はその準備ができていたかのような感じだった。彼らは自分たちがしていることを正確に知っていた。彼らは予めこの種の仕事を訓練を受けていた。雰囲気がそのようだった。職業意識の強い、冷静な、気取らない感じだ。我々は一仕事するためにここにいる。道を空ける。それが基本的な態度だった。

[1970 年代と 1980 年代にこのような回収チームで働いたクリフォード・ストーンの見聞記を見よ。SG]

このことがあった後、私は正気を失いかけた。

SG: どうしてそうなったのですか？

JW: 私はキリスト教徒として育てられた。神は存在し、神は宇宙のすべてを創造したと信じるようになった。そしてここにその神がいる — 私がこれまで見たことがなく、今こうして面前にいる生物たち。この遭遇のために、私はほとんど気が狂いそうだった。自暴自棄にはならなかったが、私は自分が知ったことをすべて再評価しなければならなかった。ちょうどあなたが子供で、サンタクロースはいると教えられてきたが、実はいないと知ることに似ている。知ったからには後戻りはできない。

否定のしようがない。“私は実際にはこれを見なかった”とは言えない。私は何をすればよいか？誰かに話すか？ひどいジャングルの中で一人の海兵隊上等兵がこのような航空機を見るなどと誰が信じるか？

もしそれが必要なら、私は今すぐにこれらの生物たちと一緒にいきたい。私はこの妄想に取り憑かれたが、それは海兵隊での苦痛と経験のためだったようだ。しかし私はただ脱出したかったし、これらの生物たちと一緒にいて、彼らとともにここから逃げ出したいと考えていた...

[空軍兵バローズに関するラリー・ウォリンの証言を見よ。そして英国ベントウォーターズ空軍基地での遭遇の後で彼がいかに反応したかを。SG]

これらの様々な機関は独立している。彼らは憲法に従わない。彼らはならず者だ。これが政府によるプロジェクトで皆が認めるものかって？違う。この連中は勝手に行動しているだけで、誰もそれを知らない。今の世の中で、それはこんなにも簡単なことなんだ。何の監視も何の統制もない。彼らはまったく好き放題にやっている。彼らは邪悪だ。これらの人々は悪魔だ。これがビル・クリントンや議会と関係があると考えられるか？それについて知っている連中がいる。しかし彼らは何も話そうとしない。もし彼らがお話を話すとすれば、関係を絶ったときだ。

死をもたらす恐ろしい力が使われてきた。知らない人もいるだろうが、私は海兵隊の狙撃手のことを知っている。他の誰かがそれについて話しているのを聞いたこともある。これらの連中は街に出て行ってこっそり人の後をつけ、殺す。陸軍航空狙撃手も同じことをしている。彼らはデルタフォース(*米陸軍特殊部隊)を使い、これらの人々を捕捉し、殺して黙らせる。これが行なわれるとすると、彼らは必要な資金をどこから調達するか。とても簡単だ。彼らは武器を売っている。彼らは麻薬を売っている。この商売の多くは特別作戦隊を使って際限なくこれらの金を得るものだ。そうなのだ。それは政府の金庫から来るのではない — それは麻薬や武器の密売によりもたらされる — 兵器でも何でも売るのだ。

私は尊敬されるような生き方をしてきたが、マリファナを吸ったことを告白して海兵隊を去ることができた。私は辞めたかったので、彼らにそれを告げたのだ。辞める方法は二つあった。それを言うか同性愛者だと言うかだった。それで私はポウエル曹長まで出向き、辞めたいが一番手っ取り早い方法は何かと訊いた。そしたら彼は“マリファナを吸ったと彼らに言え。一回マリファナを吸ったとだけ言え”と言った。私が彼らにそう言ったら、彼らは犯罪捜査部(Criminal Investigation Division; CID)の職員を私の所に来させた。私はこう言った。“はい。私はマリファナを吸いました。私はそれを一服し、肺に吸い込みました”私は辞めたくてたまらなかった...

空軍少佐 ジョージ・A・ファイラー三世の証言

Testimony of Major George A. Filer III

2000年11月

ジョージ・ファイラー少佐は空軍情報将校だった。彼は英国上空のUFO大編隊にレーダー上で遭遇するという異常な体験をただけでなく、1970年代にニュージャージー州マクガイア空軍基地に勤務中、地球外生命体がディックス基地で銃撃されていたことを知った。その地球外生命体は隣接するマクガイア空軍基地まで逃れてきて、そこの滑走路上で死んだ。彼の証言によれば、この生命体はそれから引き取られてライト・パターンソン空軍基地に運ばれた。その後この事件に関係した基地の主要職員の多くが、素早く異動させられた。ファイラー少佐はまた、嘲りの要素がETやUFOを見た人々を黙らせ、秘密を守るためにとても有効であると指摘する。

GF: ジョージ・ファイラー少佐

SG: スティーブン・グリア博士

GF: 私の名前はジョージ・ファイラー三世だ。私は米国空軍に勤務し、最終階級は少佐だった。私は様々な航空機や空中給油機の航法士だった。私はその経歴の大部分を情報将校として過ごし、その間に我々の能力と軍に対する脅威について、しばしば将軍や国会議員に説明をした。

さて、私は説明将校だったので、朝の4時頃[に]職場に来ていた。1978年1月18日の朝、私はマクガイア基地正面ゲートを通して車を走らせていた。そのとき滑走路上に赤い光体群があるのに気づき、たぶんそこで何かが行なわれているのだと思った。[私は]第21空軍指揮所に着くまでそのことをあまり考えなかった。そこが私の職場だった。私は第21空軍の情報副部長だったが、そこではミシシッピ川からインディアナ州にかけて地域で、大統領と様々な要人たちを運ぶ軍用機の半数を管理していた。我々は約300機の航空機を持っており、あらゆる種類の飛行任務を行っていた — 軍用空輸に関わるほとんどすべての任務を我々は遂行していた。

他ならぬこの朝に、私が指揮所に着くと指揮所長が来て、昨夜は大変な騒動があったと言った — マクガイア基地上空に夜通し複数のUFOが飛来し、そのうちの1機はディックス基地にどうやら着陸、おそらくは墜落した。一人の軍警察が異邦人(エイリアン)に出会い、銃を抜いて彼を撃つた。それで私は、外国人ですか、その意味の異邦人ですか?と訊いた。私は彼が異邦人と言ったので少し混乱していた。そしたら彼は、“そうじゃない。宇宙からきた異邦人(*宇宙人)だ”と言った。彼はディックス基地で宇宙人が撃たれたこと、その宇宙人は傷を負って走り去り、マクガイア基地に向かったことをとても具体的に語った。マクガイア基地とディックス基地はフェンス一つで隣り合っており、この宇宙人は明らかにフェンスをよじ登ったか、その下をくぐった。そしてマクガイア基地に入り滑走路の端で死んだ。保安警察がそこでこの遺体をいわば確保し、警護していた。彼が言うには、ライト・パターソン基地からC-141(*輸送機)が来て、その遺体を引き取ったということだった。それを聞いて私は立ち上がった。なぜなら、ライト・パターソン基地がC-141を持っているとは知らなかったからだ — 私はC-141航空機を持っているのは空輸軍団(Military Airlift Command)だけだと思っていた — それで私は、一体ここで何が起きているんだ?と思ったのだ。彼は私に、“今朝の起立全体説明会の場で報告を行ない、何が起きたかを皆に説明してくれないか”と言った。それで私は、トム・サドラー将軍と指揮所の皆に宇宙人を捕まえたと言えばよいかと言った。

彼らは“そうだ。今朝そのことを[彼らに]報告して欲しい”と言った。それで私はあちらこちらを少し調べてみた。私は第38空輸飛行隊指揮所に電話し、その話が私が聞いたものと同じかどうかを彼らに確かめた。彼らは確かに同じ情報を聞いたと言った。これは実際に起きたことだと彼らは言った — 基地で一人の宇宙人が見つかった。

その朝遅くになって、彼らは私に起立報告会での説明はしないことに決めたと言った。だから私は実際にはそれを説明しなかった。その朝遅く、私は暗語を持ってサドラー将軍の事務所まで行った。そこで私は何か動揺が起きていることに気付いた。保安警察が何人かおり、髪や服装がかなり乱れていた。サドラー将軍は誰に対しても身なりにうるさかったので、これらの人々が明らかに無精髭を伸ばし、疲れた様子だったのは驚きだった。こうして私は、彼らがこの事件に対処していたのだと知った。

報告会の後で、私は暗室に行った。ほとんど毎日私は暗室に行った。というのは、これらの報告会では4つのスクリーンがあり、それをきれいな写真などで埋め尽くさなければならなかったからだ。そこで彼らは、何か異常なものを撮影していたと語った。だから私は、それじゃそれを私に見せてくれと言った。軍曹はそれらを私に渡そうとした。そのとき彼の曹長が、“彼にこれを見せてはならない”と言ったのだ。だから私が知っているのは、私が見てはならない何枚かの写真を彼らが持っていたということだけだ — しかし将軍への報告者である私は、通常なら彼らが持っているどんな写真でも見るのを止められることはなかった。

それはとても重要な作戦だった。基地には核兵器貯蔵施設があった — ここからヨーロッパへ核兵器を運んだり持ち帰ったりしていた — それで私は、現場にいた[と言っている]保安警察の一人と話をした。彼は、その小さな遺体を確かに見たことを示唆した。それは子供のように見えたが、頭部の大きさは普通ではなかった。

注意を引いたのは、当時この事件に関係した鍵となる基地要員の多く — 司令官をはじめその部下 — が素早く異動させられたことだった。これは、もしあなた方が何かを知ったら、彼らはあなた方をいわばバラバラにし、それについて話せなくなるようにすることを示していた。これはものの数週間のうちに行なわれた。その保安警察は数日以内に異動させられたと私に語った — 実際のところ彼は、1日か2日以内にライト-パターソン基地に連れていかれ、何人も人間から事情聴取され、原則としてそのことについて今後話さないように告げられた。

彼らはことの成り行きを無線で聞いていた。彼らはこの追跡と、その宇宙人がディックス基地で撃たれたことを聞いていた。彼らはそれ(宇宙人)をマクガイア基地に向かって追跡した — 何かの理由でそれはマクガイア空軍基地に向かうことを選んだ — そして州警察と軍警察の両方が、UFOと思われる物体から出てきたこの宇宙人を追跡していた。私が理解したところでは、それは円盤型の航空機だった。

彼らは私に、次のようなことを言った。そのUFO群はその晩、とても頻繁にその地区に出現した。彼らは[それらを]レーダーで捕捉し、管制塔員もそれらを見た。さらにその地区にいた航空機の何機かも、おそらくそれらを見ていた。

その遺体を警護して6ないし8人がそこにいた。それから保安警察の指揮官と、[この事件を知った]指揮所の何人かが現れた。サドラー将軍はその説明を受けていたと私は考えている。

SG: あなたが軍にいた間に知った他のUFO事件がありましたか？

GF: 私はホワイトサンズで技術者として働いていた一人の女性と偶然居合わせたことがあった。彼女はある日ハイキングをしていた。彼女が私に語った話はこうだ。彼女と友人2、3人がある丘の頂上に登った。彼女らはこの谷を上から見下ろしていたが、その頭だけが丘の頂上に見えていた。彼女らはまったく何気なしに、登ってきた道を見下ろしていた。そしたら1機のUFOが地上にあり、2、3人の小さな宇宙人が岩などを拾い上げていたのだ。彼女らはそれをかなりの時間見つめていた。それは彼女らからほんの数百ヤードしか離れていなかったもので、とてもよく見えた。そのうち宇

宙人たちも彼女らを見、宇宙機に飛び乗り、飛び去った。

私自身は 1962 年頃まで何も見たことがなかった。我々は空中給油機で英国上空を飛行していた。そのときロンドン管制が我々に、1 機の UFO を迎撃せよと要請してきた。我々はちょうど給油任務を終えていたので、その任務を受け入れた。我々は北海上空にいた。彼らは我々に英国中心部まで飛行するように要請した。我々は時速約 400 マイルで急降下し、この物体の迎撃に向かった。彼らは我々に機首方位を教えたが、UFO はストーンヘンジ地区のあたりでほぼ空中静止していた — オックスフォード、ストーンヘンジ地区へ約 20 から 30 マイルの地点。私はそれをレーダーで捉えた。それはとても大きなレーダー反射だった。

我々はよくフォース湾(*エジンバラ近くの湾)橋近くの上空を飛行する。それはサンフランシスコ橋(*金門橋)のようなものだ — それはとても巨大な橋だが、その UFO からの反射は大きさや強度においてその橋と似ていた。言い換えれば、それはとても大きなレーダー反射だった。明らかにロンドン管制はそれをレーダー捕捉しており、我々をこの物体に誘導していた。我々が UFO から約 1 マイルまで近づいたとき、それは離陸して宇宙へ飛び去った — 時速数千マイル、ほとんど真っすぐに上昇した。ありのままに言うと、少なくとも私の知る限り、あれほどの性能を持つものを我々は持っていなかった。

私の最も妥当な推測では、それは平べったい円盤型だった — 少なくとも、何かこのような発光源が上部と底部にあった。その物体はただの扁平な皿型ではなかった。その上部に 1 個のドームを持っていた。

レーダー反射が正しかったとすると、それはおそらく端から端まで 500 ヤードはあっただろう — つまりそれは巨大物体だった。我々はそれを飛行日誌に書いた。

私は今住んでいるここでも 1 回目撃した。ここはニュージャージー州メドフォードにあるブライアーウッドレイクだ。我々はここに越してきたばかりだった。我々は就寝中だった — 朝の 3 時頃だったと思う。妻と一緒に就寝していた — そのとき突然、部屋が深夜にもかかわらずとても明るくなった。私はベッドから飛び起き、日よけを開け、外を見やっつた。潜水艦が水面を盛り上げて浮上するところを大抵の人が見たことがあるかどうかは知らない — これは浮上している直径約 30 フィートの円盤のようで、それから水が流れ落ちているように見えた。

その宇宙機の周囲はイオン化されていた — 北極光にとってもよく似ていた。それは暫く湖を横切り、それから相当に速い速度で飛び去った。そのことがあったので、私は多くの隣人たちと一緒に調べてみた。いかに多くの人々がこれらの湖で宇宙機を見ていたか、それは驚くべきものだった。

また私は時々、世界中で起きた UFO 目撃について、将軍たちに説明を行っていた。私の心に残っているのは 1976 年 — テヘラン(*イランの首都)近くで有名な遭遇事件があった。

その頃、他ならぬこの大佐が私に、F-106(*迎撃戦闘機)が最高速度の世界記録を打ち立てたと語った。彼らはこの航空機を可能な限り上げ、コロラド州のある谷間で空中静止していた UFO に対して急降下しようとした。ちょうど私が英国で経験したように、彼らはその UFO に近づいた

とき、それは静止しているかのような彼らを残して飛び去った。彼らは時速 1,500 マイルとか — とにかく、これらの航空機が急降下時に達成する当時の最高速度だ — しかし、誰が飛行していたにせよ、それらは我々がその後何年もの間に — 今でもそうだと思うが — 持ったどんなものをもはるかに凌駕する性能を持っていた。

これらは何か異質のものだと私は思う。それは人間がつくった航空機ではない。異質の推進原理を持ち、ここに飛来し偵察している。

私はそれらを見たことがある多くの宇宙飛行士たちと話してきた。私はそれらを見たことがある軍のパイロットたちと話してきた。私はかつてギリシャのアテネで勤務していたラミッジ大尉を思い出す — 彼は朝鮮戦争時に一度遭遇していた。それは翼の外側にピタリとつけて約 1 時間一緒に飛行した — 翼の外側につけただけではない。彼の機の周りをアクロバット飛行した！人々の何パーセントかは正確に知らないが、訊ねたパイロットと航空機乗組員の約 10 パーセントは目撃していた。

数年前、私はこの部屋で座っていた。そのとき情報機関にいた一人の大佐が、彼の B-52 乗組員の全員が UFO を見たと私に語った。ご存じのように、これらの人々は自ら進んでカメラの前に座ってそれを語ることをしない。だが驚くべき数の人々がそれらを見ている。それらが進歩した機能を持っていることを彼らは知っている。通常彼らが見るものは、何かの金属でできていると思われる固体の物体だ — 通常は砲金色(*暗灰色)だ。特に夜間は通常それらの周囲にある様々な照明が報告されている。

SG: マクガイア基地の ET はどうなりましたか？

GF: それはある種の容器に入れられ、飛行機で運び去られたと聞いたように思う。

私は 1947 年かその頃に、西部で何か墜落したのではないかと考えている。そこで何かが起こった。言うところの軍内部にある話が、少なくともその根拠だ。

何が起きているか分からないとき、それは秘密にされる傾向がある — 機密、最高機密、何かそのようなものだ。それが大統領による決定なら、きわめて高い機密事項となる。おそらく超最高機密という暗語だ。言い換えれば、知る必要性のようなものだ。そのときその種の差し止めか指定が一度何かに付与されると、その機密性を格下げすることはきわめて難しい。記録保管所に行けば、彼等が何を言おうと、そこにはまだ人目に曝すことを許されない、第二次大戦にまで遡る資料が保管されている。一度これが最高機密になると、それはいわば進み続け、永久に最高機密にとどまる。たとえば次の例を見れば分かる。この宇宙機は進歩した技術的性能を持っていた。だから人々は自分たちが知っていることを相手側に知られたくない。またこれらの物体がどう動くのかも — その秘密を守ることは、自らを優位にする。

だが、これらの様々な計画は明るみになるべきときだと思う。これほどまでに秘密が守られてきたのは、嘲笑のためだ。もしそれが最高機密というだけなら、世界の大部分は今日それを知っているだろう。だが彼等は嘲笑の要素をそれに入れた。誰かがこのような話をする時、人々はこう言うだろう。彼は頭がおかしい — 彼は UFO を信じている。人々は誰かが何かを見たときに、この嘲笑を持ち

出す。だが私の経験では、驚くべき数の警察官がこれらを見ている。驚くべき数の FBI がこれらを見ている。また驚くべき数の軍人がこれらを見ている。

時々私は核兵器を運んだものだ。つまり、私は核兵器を運ぶことに気持ちが慣れていたが、UFO を見ることに對してはそうではなかった。これまでずっと、このことに対する批判や嘲笑は、真実が明るみに出ないようにするためのほぼ最良の方法だった。

[我々はこのことを軍やその他の目撃証人たちから何度も何度も聞いてきた。メディアと当局の嘲笑は強烈で、沈黙と秘密のための強力な力として働く。大部分の人々は自分と家族をこのような嘲笑に曝すことを望まず、代わりに沈黙を守ることを選ぶ。SG]

英国国防省 ニック・ポープ氏の証言

Testimony of Mr. Nick Pope, British Ministry of Defense

2000年9月

ニック・ポープは英国国防省職員で、現在もそこで働いている。彼は 1990 年代の数年間、国防省 UFO 現象研究調査部門を統率した。彼の証言から我々は、軍関係者により完璧な証明付きで証言されレーダーでも追跡された、途方もない速度で移動する巨大物体を伴った幾つかの事件の決定的証拠を知ることになる — この地球で建造されたものでない物体。彼はまた、英国内で起きたベントウォーターズ事件や他の事件を確証する。そして UFO 現象に関する膨大な政府資料の存在を認める。ポープ氏は UFO 問題の開放性と誠実さを支持しており、世界中の政府が持っている UFO 情報は全面公開されるべきだと信じている。

NP: ニック・ポープ氏

SG: スティーブン・グリア博士

NP: 私の名前はニック・ポープだ。私は英国国防省に勤務する職員で入省は 1985 年だった。私はそこで様々な軍務を経験したが、最も関連するのは 1991 年から 1994 年で、私は空軍参謀事務局 (Secretariat Air Staff) に配属されていた。そこでの私の任務は、英国政府のために UFO 現象を研究し調査することだった。

私は毎年 200 から 300 件の UFO 報告を受け取った。私の仕事はこれら进行评估し、英国の防衛に對して何らかの脅威の証拠があるかどうか、その結論を出すことだった。綿密な調査の後で、それらの目撃の 90 から 95 パーセントは、ありきたりの説明で片付くことが分かった。しかし従来の説明がまったく当てはまらない目撃報告が、最後まで残った。それらは軍関係者による目撃、UFO と航空機のニアミス (異常接近)、UFO がレーダーで追跡された事件、および UFO がフィルムとビデオに撮られた事件を含む、幾つかの興味深い事例だった。

英国政府が UFO 現象を見てきた長い年月の間に、無相関目標 (uncorrelated targets) が軍の管制官により追跡された多くの出来事が起こり続けてきた。そしてこれらの幾つかの場合に、軍用ジェット機が任務を変更するか本当に緊急発進するかして、これらの物体を迎撃しようとしたことは確かだ — それらと敵対する意図などはなく、ただそれらの正体を確かめるために近づこうとした。

さて、これらの出来事において、我々は迎撃の試みに成功しなかったと言わなければならない。常に、UFO の速度と飛行技術は、我々が発明した最高の航空機のずっと先にあった。率直に言うと、それらは我々をはるかに凌駕していた。

軍用ジェット機が実際に UFO を追跡し、ガンカメラで撮影するため、あるいはその未知の航空機が何者かを視認するために、確認できる距離まで近づこうとしたとき、これらの物体は驚異的な加速のみならず、瞬時に方向転換や停止をする能力を見せつけた。このような飛行の仕方は、加速度(G-force)に関するあらゆる問題を提起している — 率直に言って、最高の耐加速度服を着用しても人間が生存できる限度をはるかに超える加速度。このことは、それ自体興味深い疑問を提起する。一体誰がこれらの物体を操縦しているのか。

特に印象的な幾つかの事例を取り上げるなら、まず 1956 年まで遡る必要があるだろう。このときベントウォーターズ地区の近くで、レーダーと肉眼による目撃事件が起きた。ちなみにこれはブルーブック計画で詳述された事例の一つで、特に具体的であると判断されたものだ。かいつまんで話せば、あるレーダー目標を捕捉した戦闘機管制官たちがいた。それが我々自身の航空機の 1 機だとは容易に認証できなかった。それで我々はただそれを眺め、その空域に実際に固体構造を持った飛行体があると判断したのだ。それは我々自身の戦闘機のいわば限界と比較して、驚異的な速度で飛行していた。

複数のジェット機が発進し、パイロットたちは実際に何とかこの物体に近づき、視認しようとした。彼らはそれを、構造を持つ、おそらく円盤型の、何らかの航空機だと描写した。しかし、正直なところ、それはあまりにも速く、変幻自在の飛行をしたので、本当の明瞭な姿を捉えることはできなかった。繰り返すが、それは彼らをはるかに凌駕していた。だから、それは興味を引く一つの例 — 我々が対抗することを望み得ないほどの速度と飛行技術を示す、これらの飛行体の多くの一つだ。

[もっと]現代の目撃、私が直接調査に関わったもう一つの例を挙げると、1993 年 3 月 30 日と 31 日に、英国上空で起きた一連の UFO 遭遇事件がある — この中で最も興味を引く出来事は、二つの空軍基地上空を、1 機の大きな三角形またはダイヤモンド型の UFO が実際に侵犯したということだった。その二つの基地はミッドランドのコスフォード空軍基地とショーベリ空軍基地だ。

コスフォード空軍基地では、この目撃が 31 日の早朝、ほぼ 1 時 10 分頃に起きた。コスフォード基地の警備パトロールが、まさに基地上空を飛ぶこの UFO を見た。当然彼らは電話で緊急報告し、驚いたことにレーダーには何も映っていないことを知った — この物体が彼らの真上を通過していたにもかかわらずだ。彼らが電話した中には、ショーベリ空軍基地の同僚もいた。同基地は約 10 から 12 マイル離れている。その気象官が電話を取った。これらの基地には最小限の人員しかいないことを理解する必要がある。だからその“気象”官が電話を取ったのだ。そして、たぶんこれは誰かのいたずらだろうと考えながら外に出た。

だが実際は電話のとおりだった — 彼はこちらに向かってくる輝く光体を遠方に見た。この物体はどんどん近づいてきた。翌朝彼は感動で声を震わせながら、私にこう語った。それは巨大で扁平な三角形をした航空機だった。ダイヤモンドのように片側にやや隆起しているように見え、彼の頭上をわずか 200 フィートの高度で通過した。そのとき低周波のブーンという音を発していた。彼はそれ

を聞くことはできなかったが、感じる事ができたと言った。

奇妙なことにこの航空機は、空軍基地の外周フェンスのすぐ向こう側を細い光線で照射していた。彼によれば、この物体はせいぜい時速 20 から 30 マイルの速度で彼に向かってきた — とてもゆっくりだった。

突然、その光線は機体に引っ込み、その瞬間もの数秒のうちに、それは水平線の彼方に飛び去った。思い返して欲しいが、彼は 8 年間の軍務経験がある空軍将校だ。彼は生活の中で毎日航空機や高速ジェット機を見ている。彼にこの謎の航空機の大きさを訊ねたとき、彼は典型的な軍人の言い方で、おそらくそれは C-130 ハーキュリーズ輸送機とボーイング 747 ジャンボジェット機の間だったと言った。

私はこの出来事の全面的な調査に取りかかった。実際、これは他ならぬこの夜に全土で起きた一連の目撃の一つだったのだ。この事件では、一般市民だけでなく、多くの警察官も巻き込まれ、それは特にイングランド南西部とウェールズ、さらにミッドランドにまで及んだ。私は通常の調査はすべて行なった。我々はレーダーテープを押収し、それらを国防省本館に送らせた。我々は可能なすべての一連の調査を行なった — 衛星の軌道から宇宙廃棄物、天文学的現象、流星、火球、軍用機の演習、気象観測気球の飛揚まで — しかしそのどれでもなかった。これは常に調査の基本だった — この分野ではあらゆるものを調査する。

我々はまったく正体をつかむことができなかった。これについてかなり堅実な調査をほぼ一週間行なった後で、私は一つの報告書を部長経由で空軍副参謀長 — 空軍少将、二つ星空軍将校 — へと、指揮系統を通じて上げた。我々はこれを彼まで上げ、基本的にこう述べた。無相関目標、未確認飛行体 — 単なる光や形だけではない — 起源不明の構造を持つ飛行体が、英国防空域 (the United Kingdom Air Defense Region; ADR) に侵入した。

まさしくその夜に、それはレーダーで追跡されることも航空機を発進させることもなく、飛行した。まったく咎められることなしに、二つの軍事基地と国土の大部分の上空を飛行した — そして正体不明のまま消えた。空軍副参謀長は、それについて時間をかけて真剣に考えた。それはキャッチ 22 的状况 (*八方ふさがりの状況) だったと想像する。彼はただ戻ってきてこう言った。“これは大変興味を引く事件だ。しかし君はできる調査は明らかにすべて行なった。正直に言って、我々ができることはこれ以上ない。それにしてもこれは興味をそそる”

さて、その報告書が指揮系統を上がっていったとき、我々は UFO 現象の全体像について、少数の人々の心を変えたと思った。このことが、言うなれば彼らの見ている前で起きたこと、また馬鹿げたことなどではないことを、多くの上級官僚と軍将校たちに本当に理解させたと思う。UFO 現象は天空の単なる光や形ではない。それは現実の固体だ；それは何はともあれ軍を巻き込む。私が思うに、この事件は今でもこれまで英国で起きた最も重大な事例の一つだ。そして率直に言えば、この事例は — もし実際に何らかの懸念が残っているなら — UFO 現象全体により提起される、重大な防衛と国家安全保障上の問題を示している。

何年もの間、ガンカメラを使って軍用機により撮影された、多くのフィルムが存在してきた。だが

残念なことに、このフィルム映像は最早存在しないように思える。私の前任者の一人にラルフ・ノイズという人がいる。彼は私が DS8 という旧部署名のもとで働いていたとき、そこを統率していた。つまり国防事務局第8課(Defense Secretariat 8)だ。彼は死ぬ前、やはり国防省に雇われの身分だったが、UFO 現象の真実性について公然と明言し、それを聞こうとしたすべての人々に対して、ここに重大な現象があり、真剣に研究する必要も価値もあると主張した。そうするからには、ラルフは確かにそれらが映っているフィルム映像[軍用機から撮影した UFO のガンカメラ映像]を見ていた。ラルフは私に言った — 実際、彼の証言は書き物にも記録されていると思う — 彼は空軍上級将校の報告会に呼ばれた。彼らは皆この映像の一部を見るために参集していた。その映像は、ある UFO に接近観察するために軍用ジェット機が発進し、追跡を行なった後で持ち込まれたものだった。ラルフ・ノイズは私にこう言った。彼と空軍参謀にいたこれらのすべての人々は、驚きで息をのみながら、ただ座っているばかりだった — 見て、指さして、驚いていた — しかし率直に言うと、それ以上理解することはできなかった。ただし、繰り返すが、我々よりも能力の優れた物体が我々の領空で活動していることの、暗黙の承認だけはあった。

私がそれを言うときは、当然試作機の問題についても触れる。なぜなら、UFO 現象についてしばしば提起される問題の一つは、まったく筋の通った質問だからだ。つまり、高速でとてつもない運動性能を示す、構造を持つ飛行体について語るとき、人々が見ているものは空軍の次世代機ではないのか? — 航空機であれ遠隔操縦輸送機であれ、その試作機というわけだ。

よろしい。国防省に勤務する職員であり、3年間 UFO に関係する仕事をしてきた一人として話すと、その質問をする人には、誰にでもこう言うことができる。もちろんそのとおりだ。いつだって航空機や装置の試作品はあり、それは試運転される。だが、我々の組み立てキットを試運転する場所は、我々が知っている。我々はそれらをとてつもなく注意深く、限定された範囲で、また危険地域で行なう。我々はUFOと試作機を間違えない。もしそれが試作機だとしたら、我々はUFOを追跡などしない。その違いを我々は言うことができる。

だから、一般市民が何かを見たとき — 誰がそんなことを知っているか?それは人々がどこでそれを見たかによる。だが、話が軍による目撃や私が行なったような研究と調査ということになると、もし私が試作機のテストに出会ったとき、私が“A”を知っており“B”を知らなかったなら、私はそれを見知られる。そしたらもちろん、我々は素早くそれに対する干渉を止めているだろう。

英国で最も有名な UFO 事件は、レンドルシャムの森の出来事だ。これはときにベントウォーターズ事例とも呼ばれる。この事例では 1980 年 12 月の数夜にわたり、一連の UFO 事件が起きた。表向きは英国空軍基地が関係しているが、実際にはそれらの基地は米国空軍によって運営されている。それらはサフォーク州のベントウォーターズ空軍基地とウッドブリッジ空軍基地だ。

[ラリー・ウォリン, ローリ・レーフェルト, クリフォード・ストーン, ヒル・ノートン卿, その他の証言を見よ。SG]

さて、この事例では、人々が途方もない動き方をする天空の光体を見た一連の遭遇があった。だがもっと顕著だったのは、活動の最初の夜に、人々は構造を持つ金属製の飛行機が実際に移動しているのを見た — 天空をではない — 下に降りて、ほとんど地面すれすれを。それは二つの

基地に隣接するレンドルシャムの森の中を動いていた。ある時点でこの小さな金属製の、ほぼ三角形をした飛翔機は、実際に地面に降り、森の中のある空き地で着陸したようだった。

このときの目撃証人たちは、すべて軍の要員だった。彼らは訓練された観察者だった。彼らは間違わない。これまで懐疑論者の一部は、近くの灯台を見誤ったものかもしれないと言ってきた。それは二つの理由であり得ない。第一に、彼らは訓練された軍の観察者で、灯台は見慣れており、彼らの様々な軍務の中でほぼ毎夜見ている。第二に、遭遇事件のある時点で、確実にその灯台は UFO と同時刻にはっきりと見えていた。だから懐疑論者たちが時々主張するように、これが灯台だったはずはない。

この事例は、私自身の軍務期間より 10 年か、もう少し前のことだが、私はこの事例を見直し、ファイルのすべてに目を通した。私はこの事件の調査を再開しようとした。私が焦点を当てられる最も重要なことは、実際に何が起きたという物理的証拠だった。なぜなら、この飛翔機が着陸した後で、人々は日中の光の中で着陸場所に戻り、その飛翔機が着陸していた場所の森の地面に、三角形のくぼみを発見したからだ。私が言っている意味は、その三つのくぼみを線で結ぶと、ほとんど完璧な正三角形になったということだ。

行なわれたことの一つは、その場所の放射能検査だった。これが私が入った場所だ。私は測定された値を入手した。[そして]これらの読み取り値が二カ所で極大値を持っていたことは重要だ。極大値はくぼみそのものと、その空き地にある木々の損傷を受けた側面にあった — あたかもこの物体は、降下して何本かの枝を折り、樹皮をいくらか剥いだように思えた。その物体は、来たとき、または去るときのいずれかにそうした。

私は当時チャールズ・ハルト中佐によって記録されていたその数字を送った。彼は基地の副司令官で、彼自身もこれらの事件の幾つかでは目撃証人だった。私はハルト中佐とそのチームから受け取ったデータを、国防放射能防護局に送った。そこは国防省の一部だ。そのデータは戻ってきたが、彼らはこの出来事全体について率直に困惑していた。そして地面のくぼみの放射能は、背景放射能の 10 倍だと言った — 通常あるべき量の 10 倍だ。

ここで当然ながら、そのレベルはなお比較的低かったと言っておくことは重要だ。ハルト中佐と彼のチームは、これによって危険に曝されることはなかった。これはまだ低いレベルの放射能だった。しかし繰り返すが、それを科学的に見ると、そのことが重要なのではない。重要なのはその場所のすぐ外側での対照測定と比較したときに、この飛翔機が森に降下したその場所で、通常の 10 倍という極大値を示したことだ。

だから、これはきわめて重大なことだと私は考えている。なぜなら、ここには訓練された軍の観測者による目撃があり、またある時点でこの飛翔機は、近くのワッテン空軍基地からレーダーで追跡されている。つまり、レーダーによる捕捉があり、訓練された軍の要員による目撃があり、その出来事の後では通常の日中の光の中で、否定し得ない、科学的な、放射能の測定された証拠があった。だから、誰の基準に照らしてもそれはきわめて重大な出来事であり、他ならぬその夜その空き地に 1 機の未知の飛翔機がいたという、疑う余地のない証拠があると私は考えている。

私は軍の要員による証言内容を見た。また私はこれに巻き込まれた人々による証言を聞いたが、それはこの夜に起きたことが、国防省に上げられたファイルに記録された以上のものだったことを示している。

UFO が民生用の原子力発電所、核兵器を持った軍事施設、等々にきわめて強い関心を持っていることを示す事件もある。

[当時、米国の統制下にあったベントウォーターズ空軍基地に核兵器があることは秘密だった。SG]

国防省にある空軍参謀事務局での私の軍務期間に、私は UFO 問題に関してはとても開放的な方針をとっていた。私は自分が行っていた公式の研究と調査に関しては、できるだけ開放的で誠実であろうとし、このことに関するデータを隠さないことを自分の役割と考えていた。政府と軍、そして実に民間の研究者、政治家も — 誰であろうと — この問題については、あらゆることを社会共有のものとするべきだ。私はそう信じている。政府は矛盾することをしてはならないと思う。公式見解がしばしばそうであるように、一方で UFO は防衛上何の重要性もないと言いながら、他方ではデータの一部を隠しておくなどということをしてはならない。

それは絶対にできない。どちらか一方だ。政治家がこの問題に探りを入れたりメディアが問い合わせたりしたとき政府が決まって言うように、もし心配することが本当に何もないなら、そのすべてのデータを見てみようではないか。その決定が適切な方法論に基づいてなされた、正当なものであることを確認しようではないか。

その目的を実現するためには、世界中の政府が持っている UFO 情報を全面公開する必要があると私は信じている。それが始まりつつある有望な兆候があると私は考える。たとえば 2000 年初めにサンマリノで開かれたある会議は、同国の観光局も一部協賛し、ある意味で公的性格を持ったものだったが、イタリア空軍が実際に任務として制服の代表を送り、イタリア空軍と国防省に多年にわたり報告された UFO 事例について語ったことを、私は知っている。私はこのことがチリでも起きたことを知っている。すでに述べたように、これに努めて開放的であろうとし、またデータを社会共有のものにしようとする私自身の努力が、この問題をいくらかでも前進させていけばよいと思う。

そのとおり。私はこの問題の全面公開と誠実さを支持する立場だ。明らかにそれはきわめて重要な問題だ。それは防衛と国家安全保障上の重要問題を提起するものであり、排他的な小集団やいかなる特定グループの人々によっても対処されるべき問題ではない。これらは全世界にとり重要な問題であり、すべての人々により議論され対処されなければならない。実際に、我々が持っている現実に起きた現象のデータは、あらゆる種類の人々 — 科学者、政治家、軍事専門家 — を引き入れ、この情報を得る現在の方法よりもはるかに広範な方法を用いることなしには、十分に適切な評価ができないものだ。

これらの UFO の幾つかは、確かに地球外起源であると私は信じており、そのことを私は隠してこなかった。国防省の現役職員として、それはとんでもない言明だと私は知っている。もちろん私はそれを公式な声明としては出さない — 私が個人の立場で話している — だが私の話は3年間の

公式な研究と調査に基づいている。3年間、私は新しく入ってくる目撃情報に接し、国防省あるいは公文書館にある UFO 問題に関する 250 から 300 件の奇妙な事例ファイルを見直した。その幾つかは当時機密扱いだった。だから、私はこれらの言明を軽々しくは行なわない。また盲信に基づいてそうすることもしない。私は政府が持っているデータに基づいて、それをしているのだ。

同じくらい重要なことは、この考えを持つのは私一人ではないということだ。英国国防省の中、空軍、また実に政治組織においてさえ、同じことを言う人々がいる。国防省は巨大な一枚岩の組織ではない — 何でもそうだが、それは個人の集合体だ。だから政府、軍、様々な組織 — どんなグループであっても — について語る場合、それは実際には個人の集合体の一つについて語っているのだ。

官僚の世界には疑う者と信じる者がいることを私は知った。そして地球外知性体の存在を信じる人は、多くの人々が思うよりもずっと多い — 特に空軍ではそうだ。もしあなたが英国空軍に出かけて行って話をしたら、誰かが目撃を経験し、誰かが無相関目標をレーダーで追跡し、あるいは我々が真似のできない飛び方をしている物体を見ているだろう。自分自身でこれらを経験した人もいるだろうし、同じ経験をした誰か — 友人、同僚 — を知っている場合もあるだろう。

私は軍務に就いた初めの頃に、特に米国にいる反対の立場をとる人々との対話を構築する努力をした。米国は 1969 年にブルーブック計画が打ち切られて以来、UFO 調査から手を引いている、という公式見解が私に示されたと思う。率直に言って、私にはそれを追求し深く掘り下げることがする時間がなかった。

SG: あなたの調査に対して、たとえばメンウィズヒル (Menwith Hill; 英国空軍基地) の NSA (国家安全保障局) 施設あるいは偵察活動を行なっている国家偵察局 (NRO) 衛星計画から、どれくらいの支援がありましたか？

NP: 申しわけないが、特定の機関と何らかの連絡があったかについては話したくない。非常に一般的な言い方で私が言えることはこうだ。もし私がある特定の興味ある事例に出会い、どこか他の機関からの支援、何らかの権限、設備などが必要だと感じたら、私はいろいろな経路でそれを依頼する。だが実際のところ、私が扱った UFO 事例の大部分は、私に与えられた資源で十分対応できた。実際に私は、英国防空管区レーダー基地、フィリングデール (Fylingdale) 英国空軍基地の弾道ミサイル早期警戒センター、このような国の施設を利用して毎日の研究調査を行なった。これ以上は話したくない。

次のように言えば十分だろう。多年にわたり十分に信頼できる事例が絶え間なく報告されている。それらは実際にそのデータを見た偏見のないすべての観察者に対して、ここに空中の単なる光以上の何かがあったことを確信させるものだとは私は考える。その何かは、この現象に対して時々主張されることが何であろうとも、きわめて重大な防衛上の何事かが起きていることを示唆する。それは英国の領空だけではない。実に全世界の領空で起きていると私は考えている。

英国では現在、公文書館に約 30 件の一般公開 UFO ファイルがある。全体では 250 から 300 ファイルあるはずだ。その一部はかつて機密にされていた。今ではもちろん機密が解除されている。

英国では間もなく情報公開法が成立する。私は英国の政府と軍の UFO ファイルが、その全部ではないにしても、大部分が近く公開されることを望んでおり、また信じている。

だが、そこにあるのは証拠の集まりだ。それは軍や科学の分野で何らかの経験を持つ公平な観察者が、端と端とをつなぎ合わせて眺めたときに、この現象の实在性を立証することになる。

1993年3月に起きた、英国での目撃多発現象についての一つの重要な事実は、ベルギーの社会を動揺させ、F-16(*戦闘機)の緊急発進を引き起こした目撃多発現象から3年後の、まさに同じ日の夜に起きたということだった。繰り返すと、それは3月30日の夜遅くと31日の早朝だった。おそらくヨーロッパで最も重要な二つのUFO目撃多発現象が、3年の年月を経てまさに同じ日の夜に実際に起きた。それは非常に興味深い事実の一つだ。

それは私が関わる前のことだったが、ヨーロッパで最も重要な目撃多発現象の一つが、1990年3月にベルギー上空で起きた。このとき複数のUFOが地上から多数の人々によって目撃され、レーダーで追跡され、2機のF-16迎撃戦闘機が緊急発進した。これらの航空機は、彼ら自身の航空機搭載レーダーでそのUFO群を捕捉した。そして不思議なたちごっこゲームがベルギーの空で約1時間にわたり演じられた。

それが起きたのは、私が空軍参謀事務局に配属される前だったが、私はブリュッセルの英国空軍武官と連絡をとった。私は自分自身の心の疑念を解消するためと、自分が行なってきた研究のために、その事件の真実性について彼に訊ねた。彼はそのF-16パイロットの一人あるいは二人、またこれに関わった上級将校デブロア大佐と、確かに直接話をしていて、我々の大使館を通じて私に公式に返ってきた言葉は、この事件はほぼ報告されたとおりに実際に起きたというものだった。

そのとおり。そこには確固たる構造を持つ1機の飛行機があり、F-16の前方で飛行の仕方を何回か変えた。非公式の余談として、ベルギー空軍参謀の間に一つの話が広まった。その趣旨を言えば“よかった。彼らは友好的だった”ということだった。

[ベルギー事件とその公式政府文書に関するクリフォード・ストーンの見よ。SG]

提督 ヒル-ノートン卿の証言
Testimony of Admiral Lord Hill-Norton

2000年7月

[このインタビューを我々と共有してくれたジェームズ・フォックス氏に感謝する]

ヒル-ノートン卿は五つ星提督であり、元英国国防参謀長だった。彼は在任中 UFO 問題については蚊帳の外に置かれていた。この短いインタビューの中で彼は、この主題はきわめて重要で、最早否定され秘密にされるべきではないと述べている。彼はきっぱりとこう述べる。“...我々が宇宙からの、他文明からの人々の訪問を受けつつある — またこれまで長年にわたり受けてきた — ことは、まったくあり得る。彼らは何者か、どこからやってくるのか、彼らの望みは何か、これを知るべきだ。これは厳密な科学的調査の対象であるべきで、大衆紙の嘲笑の対象にされるべきではない”

私はベントウォーターズ事件についてはよく知っている。私はそれに関わった多くの人々に面談した。そしてよく考えた末に出した結論は、サフォークであの夜に起きたことの説明は二つしかないということだ。最初の一つは、関係した多くの人々 — 当時その基地の副司令官だったハルト中佐と彼の多くの兵士たちを含む — は、地球の大気外から何かがやってきて彼らの空軍基地に着陸したと主張していることだ。彼らは出かけていき、そのそばに立ち、それを調べて写真に撮った。

翌日、彼らはそれが着陸した地面を検査し、微量の放射能を検出した。彼らはこれを報告している。ハルト中佐はメモを書き、メモは我々の国防省に送られた。彼は私が知る限り、少なくとも1回は英国のテレビに出演し、彼がメモに書いたことを事実上繰り返した。彼が言ったことは私が今述べたことだ。それが一つの説明だ — つまりハルト中佐が報告したように、それは実際に起きた。

もう一方の説明は、それが起きなかったというものだ。この場合、ハルト中佐と彼の部下全員が幻覚を見ていたと仮定しなければならない。私の立場は完全に明確だ — これらのいずれの説明も、国防上の最大級の関心事だ。私自身はそれをこの国の国防大臣たちに上げてきたが、それは報告されても、UFOに関して彼らが受け取ったどんな情報も、国防上の重要性は持たないと断言されてきた。間違いなく、すべての分別のある人々にとって、これらのどちらの説明も必ず国防上の関心事になる。サフォーク米空軍基地のこの中佐と彼の部下たちが、核兵器を搭載した航空機が基地にあるときに、幻覚を見ていた — これは国防上の関心事に違いない。

そして、起きたと彼が言っていることが実際に起きたとすれば — 一体どうして彼がそれを捏造する必要があるか — 宇宙からの輸送機(明らかに地球人が建造したものではない)がこの国の防衛基地に進入したことは、確かに国防上の関心事でないはずはない。とにかく、サフォークであの12月の夜に何も起きなかったとか、あれは国防上の関心事ではない、と声明することは、我々の大臣たちにとり少しもよいことではない — 特に国防省にとっては、それはまったく真実ではない。

私の名前がこの国と他の一つ、二つの国でとても大々的に UFO と結びつけられるようになったので、私はよくこう訊かれる。私のような経歴 — 元国防参謀長であり元 NATO 軍事委員会議長 — を持った人間がなぜ、私がなぜ隠蔽があると考えたのかと。あるいは UFO についての事実を政府が隠蔽しようとする理由は何かと。多くの説明がしばしば提示されてきた。最もよく言われてきた、またおそらく最もまことしやかな説明は、もし真実が語られたら国民はどういう反応をするか、これに政府が懸念(第一には米国で、そしてまた私自身の国で)を持っているというものだ — その真実とは、我々の大気中には我々が配備できる何物よりも技術的にはるかに進歩した物体がいる、彼らがやってくるのを阻止する手段を我々は持っていない、そして彼らが敵意を持っているとしても、我々にはそれに対抗する防衛手段がない、ということだ。

もしそれを公開すれば人々はパニックを起こすことを、政府は恐れているのだ。ニュージャージー州でのあの有名な事件のように、人々は猛り狂って電話に殺到するだろう。その日は火星人が着陸したという悪ふざけがあった — 人々は狂乱し走り回るだろう。私はそう思わない — 私は紙上でそう述べた。私は、人々がこの21世紀にその種の情報に接してパニックを起こすだろうとは思わない。なにしろ、彼らは50年前に核兵器の導入と二つの日本の都市の破壊に耐えたのだ。彼らは我々が火星に輸送機を着陸させられることを当然のことと受け取る — 何年も前に予想した正

確な時刻に。だから、なぜ彼らがパニックを引き起こすのか？彼らはトカルチョや宝くじのほうにもっと興味がある。彼らは肩をすくめ、それを当然のことと受け取る。いずれにせよ、私の経験では彼らは政治家を信用しない。

私が言いたいことはこうだ。我々が宇宙からの、他文明からの人々の訪問を受けつつある — またこれまで長年にわたり受けてきた — ことはまったくあり得る。彼らは何者か、どこからやってくるのか、彼らの望みは何か、これを知るべきだ。これは厳密な科学的調査の対象であるべきで、大衆紙の嘲笑の対象にされるべきではない。

私には、ベントウォーターズ事件が、我々の領空への明らかな侵入 — そして実に我が国への着陸 — が起きた一つの典型的事例のように思われる。これは軍の真面目な人々 — 責任のある仕事をしている責任のある人々 — により目撃された。そして、ベントウォーターズ事件は、ある意味で将来これらの状況にどう対処したらいけないかの一つの模範例だ。

[英国でのベントウォーターズ着陸事件に関するラリー・ウォリン、国防省職員ニック・ポープ、クリフォード・ストーン、ローリ・レーフェルト、その他の証言を見よ。私は以下のことも述べておきたい。私はヒル・ノートン卿と個人的に数時間を共に過ごした。彼はこの主題を巡る秘密にとっても懸念を持っていた — またそれに関して彼が欺かれてきたことに対しても。彼の五つ星提督という地位、元国防参謀長という立場にもかかわらず、彼はその主題について公式に説明を受けたことはなかった。これはクリントン大統領の参謀と彼の初代 CIA (中央情報局) 長官ジェームズ・ウルジー、議会の主要議員たち、統合参謀本部情報局長 (J-2) を含む国防総省のきわめて高位の高官たち、および国防情報局 (DIA) 現職長官についての私の経験と一致する — これらのすべての人々に私は直接説明を行なったが、彼らはこの重要な問題に関して蚊帳の外に置かれていた — もしくは査問を行なったときに、情報への接近をあからさまに拒否された。これは、言うまでもなく危険な状況である。秘密そのものが国家安全保障 — そして世界安全保障 — に対する重大な脅威であり、民主主義と政府という我々の憲法の仕組みを愚弄するものだ。これは公的措置により是正されなければならない。SG]

米国空軍保安兵 ラリー・ウォリンの証言

Testimony of Security Officer Larry Warren, United States Air Force

2000年9月

ラリー・ウォリンは英国ベントウォーターズ空軍基地の保安兵だった。1機の地球外輸送機が着陸し、空中静止し、また基地にいた空軍将校と交流した 1980 年の出来事のとおり、彼はそこにいた。後にその出来事を目撃した多くの隊員が脅迫され、事情聴取され、嘘の内容を述べた文書に署名を強要された。ウォリンの証言は、これまで確認されている複数の軍の目撃証人たちにより裏付けられている。この出来事に関する公式文書がある。この出来事に関する写真がある。そして着陸した痕跡の物理的証拠がある。この出来事の全体は、国防省職員ニック・ポープ、五つ星提督であり元国防参謀長だったヒル・ノートン卿およびクリフォード・ストーン軍曹によっても裏付けられている。

LW: ラリー・ウォリン

SG: スティーブン・グリア博士

LW: 私の名前はラリー・ウォリンだ。1980年12月、私はサフォーク第81戦術飛行隊に配属された。そこは東アングリヤ地方(*グレートブリテン島東南地方)のNATO(北大西洋条約機構)ベントウォーターズ空軍基地で、ウッドブリッジ空軍基地に隣接していた。私は専任保安兵で、当時そこで秘密に保管されていた核兵器を警備するのが仕事だった。

1980年12月11日、私の保安許可通知、PRP(*Personnel Reliability Program)が届き、私は認可された。当時の私の権限は機密取扱許可だった。

そのUFO事件はウッドブリッジ基地の近くで起きた。そこは我々の姉妹基地で6マイル離れており、[ベントウォーターズ基地とは]レンドルシャムの森として知られる松の森で隔てられている。私は駐機場警備の第2週目、夜間勤務だった。

我々は休憩を終えたところだった。前の小隊、C-小隊はボクシングデー[クリスマスの後の最初の週日]の早朝にUFOに遭遇していた — 私の出来事の2夜前だ。空軍保安兵のジョン・バローズとバッド・パーカーがウッドブリッジ基地の東ゲートにいた。バローズは滑走路東端の森の樹間に、何か物体らしきものを見た。そこには様々な色光があり、彼は航空機の墜落かと思った。彼はベントウォーターズ基地中央保安管理所に電話を入れ、見えているものを報告した。ジム・ペニストンという交替勤務監督官が電話に出た — 彼は軍曹だった — そしてさらに数名が到着した。

私はこれに関わらなかったが、知っていることはこうだ。彼らはその現象を求めて森の中へ入った — 彼らは航空機墜落に違いないと考え、そのための処置に取りかかった...

彼らはそれが航空機の墜落ではないことを知った。それは底辺が約6フィートの1個の三角形物体で、頂点の高さは9フィートだった。それは色の濃いガラスのように黒かった。彼自身の証言に基づいて私が確かに知っていることは、ペニストン軍曹とこれらの将兵たちはそれぞれ携帯武器を持っていた — 警察官が持っている38-キャリバー(38口径の銃)だった。彼らがこの物体に遭遇し、それがこれまで見たことのないものだとなつくと、ペニストン軍曹は彼の連発拳銃を抜いた。これらの人々は航空機や異常な物体に関しては高度に訓練された観察者ばかりだ — 当時我々が皆そうだったように。ペニストン軍曹は拳銃を抜いてその物体に狙いを定めた。

そのうちに彼は[この現象に]近づき、きわめて近くまで寄り、その側壁にあるパネルを観察した。そこには象形文字に似たある種の言語が描かれていた。それは彼がどこかで見たことがあるようなものだったが、何の文字かは特定できなかった。それは浮き彫りになっていた。彼はそれに触り、表面の感触を調べた — それはやや温かかった。その組織はまるでガラスだった — その稠密さや堅さから。彼らはこの不透明なガラスを通して、内部で何かが動いているのを感じとった。ペニストン軍曹はある声を聞いた。これらの将兵たちには基地と無線連絡が取れなかった空白の4時間があった。幸いにも他の一部の将兵たちがはっきりと応答し、これらの人々に起きていたことを知ることができた — そして何人かはカメラを持っており、写真を何枚か撮った。

[クリフォード・ストーン軍曹の証言を見よ。彼はこれらの出来事の映像と写真が撮影されたこと、またそれらがどう扱われたかを確証する。SG]

これらの人々は翌朝事情聴取された。彼らは放心状態で森から救出された。彼らは直ちに供述を行なった。彼らは空軍のある部隊にソディウム・ペントール(*全身麻酔に使われる)だという注射を打たれた。

空軍兵パローズが私に直接語ったところでは、彼は2日以内にこの現象が再び起きることを知っていた — そしてそれは実際に起きた。彼らのその日の勤務は終わり、私の勤務になった。

この遭遇では残された証拠があった — 地面の着陸痕。英国サフォーク警察管区は、翌朝これについて対処した。なぜならそれは事件だったからだ。それは基地保安警察作戦担当から報告された。チャールズ・ハルト中佐がこれについてきわめて正確に説明することができる。なぜなら彼は調査の現場にいたからだ。これらの着陸痕は正確に9フィートの間隔を持って三角形を形成していた。それは2トン半の重さの何かが地面にあったことを示していた。何かが明らかに通過したコルシカ松の林冠には、一つの隙間が開いていた。背景放射能の測定が行なわれた。これについての詳細情報は、ニック・ポープが国防省を通じて実際に提供できる。

[英国国防省職員ニック・ポープの重要な証言を見よ。彼の証言はこの出来事と測定された放射能について確認する。SG]

測定値は、その地域で通常自然に見られる放射能の25倍だった。この数字はいかにして得られたか。当時基地の災害対策要員だったネベルス軍曹がガイガーカウンターを持っており、測定方法を知っていた。これらの測定値はこの中心地点から得られたものだ — 木々などに残留放射能があった。

私はベントウォーターズ空軍基地駐機場の端にある周辺歩哨区域 18 (Perimeter Post 18) と呼ばれる、とても離れた地区に配置された。それは一つの警戒地点 (alert-man position) だった。私は持ち場に向かった。そこでは約 1 時間半何事も起きなかった。私が最初に気付いたのは、当時基地を囲んでいたやや低いフェンスに向かって何頭かの鹿が走った動物騒乱 (animal disturbance) だった。この鹿の群れはフェンスを飛び越え、まさに滑走路の上を走り私の持ち場を通り過ぎた。それらは怯えているように見えた。私はそのような感じを持った。

突然、私には開放周波数による交信が聞こえ始めた。当時我々はモトローラ社の無線機を持っており、保安用と作戦用に 4 チャンネルあった。ウッドブリッジ基地に向かう森の上空の光体群について、実況無線が聞こえ始めた。“あの光体群がまた戻ってきた” それで私は上を見た。このとき突然、保安将校のブルース・イングランド少尉から呼び出しがあった。彼はこのとき交替勤務指揮官だった。彼は“ウォリン、君の持ち場を離れよ。政府車両 (government-operated vehicle; GOV) が迎えに行く”と言った。1 台のトラックが止まった。私の報告将校であるバステインザ軍曹が運転していた。イングランド少尉が助手席におり、他の隊員たち — 私と同様に集められた — が後部座席にいた。私は乗るように言われた。我々は直ちにベントウォーターズ基地の駐車場に向かった。基地 CO [Commanding Officer; 指揮官] を探す人々の交信が飛び交っていた。彼らは“周波数を変えろ。すべての無線機を切れ”と言っていた。言っておかなければならないが、これらのすべては CSC (*Communication System Control; 通信システム制御装置) でその夜に作成されたテープに記録された。それらは盗まれた。その期間の日誌も同様だった — チャールズ・ハルト中佐もこれ

を確認することができる。それは数日後に彼が見に行つて明らかになった — 任務に就いた隊員名簿、他の多くのもの。つまり事件報告書などだ。それらは消えた...

我々は武器を NATO 装備 (NATO rounds) にしていたが、これはとても異例で、上層部の人々に切迫した状況があった。我々は伐採道に沿つて森に入った。森に入って約半マイルの所に 1 台の装甲車があった。これについては今暫く話さなかったが、私はそれを書いたので必要がないと考えた... 森の中での感じはとても奇妙だった。動作は普通でなかった。我々が森に入ると、すぐに知覚がおかしくなった。はっきり言うが — 問題があった。何かがおかしかった。我々は足を止めた。そこにはさらに何台かの車両があった。彼らは我々から武器を取り上げた。我々は 4 人一組の単位に分かれ、さらに森の中へと向かった。この夜、チャールズ・ハルト [中佐] が少数の上層部と一緒にそこにいた。ある時点でイングランド少尉が彼らに加わった。無線での連絡が頻繁に行なわれていたが、階級の低い我々は無線の使用を禁じられた。だが、他の開放チャンネルで誰かがこう言っているのが聞こえた。“ここに來ている者はこれらのホットスポット (hotspots) を避けよ。そこを歩いてはならない” 彼らはこれらの物体が戻つてくることを予想していたと私は考えている。

ところで、バロズ軍曹は — 最初の夜から — それに戻つてくることを知っていた。彼はその現象の近くに戻るといふ考えに取り憑かれ、勤務外に私服でそこにやつてきた。

あの夜にチャールズ・ハルト [中佐] が作成した実際のテープを聴くことができる。森に近づく道を警備していた周辺区域の一人が、無線でチャールズ・ハルト [中佐] を呼び、こう言っている。“空軍兵バロズと他の二人がそちらで合流したいと言っています” チャールズ・ハルト [中佐] がそれに応答する。“今は駄目だと言つてくれ。來られるようになったらこちらから連絡する。今は誰にも來て欲しくない” このテープをあなたは入手できるし、興味ある人々には誰にでも聴かせるべきだ。

私が見たもの — もっと単純であればよかつたと思う。我々がこの小グループで森の中を進んだとき、私はバスティンザ軍曹と一緒にいた。交替勤務監督官ロバート・ボールもいたし、他にも多くいた。我々はコルシカ松林の端のカペルグリーンと呼ばれる空き地に着いた。その地面では現象が起きていた。それは霧 (もや) のようだった。それは地面を覆う霧のように見えた。そこには映画フィルム用カメラがあった — 映画撮影用カメラだ。とても大きなビデオカメラもそこにあった — 当時それらは大変大きなものだった。これらはベントウォーターズ基地の広報部から來た。そこには [現象が] 戻つてくるという予想があった。フィルムに何かの痕跡が映っていることは立証されている。私が言っているだけではない。私があなたに話していることのすべては、どこの裁判所に行つてもほぼ裏付けされる — 特に一連の証拠についてはそうだ。私も進んでそれをしたいと思う。

私はこれを注視していた — まるで映画を見ているようだった。この霧 (もや) は地面にあり、注視されていた。災害対策準備がされていた。左方に家、農家が 1 軒あった。私は以前この森に來たことがなかつた。この家には明かりがついていたので、中にはその家の人々がいた。はっきりと覚えているが、犬が吠えていた。光体がやってくるのが見えた。ところで我々は、この空き地からオーフォード灯台の光を見ることができた — とてもはっきりと。この事例はこの灯台の見誤りだと見なされてきた — 誇張か何かというわけだ。実はこの灯台は 100 年以上もそこにあって、誰にとつても何の驚きでもなかつた。この物体、赤いバスケットボール型の物体は、北海方面から木々を飛び越えてやつてきた。私はそれを航空機の尾灯だと考えたが、動きはとても速かつた。地面の霧は構造を持

っているように見え、50 フィートにわたり広がっていた。このバスケットボール大の琥珀色光体は固体のように見えなかった — それをあなたに説明するのは難しい — だがそれは物体、つまりこの霧の頭上 20 フィートにあった。私と他の人々がこれに目をこらすと、直ちにカメラがそれに向けられた — これらの人々は反応していた。そのとき爆発が起きた — それを描写することは難しい。この物体はきわめて明るく輝く、多数のかけらに分裂したのだ！

私も他の人々も眼にやけどを負った — これについての文書を私は持っている。ある将校がそうしろと忠告したので、私はそれらをベントウォーターズ基地から密かに持ち出してきた。彼はこう言った。“君の軍歴は君がいなくなるとすぐに消えるだろう” こうして私の眼は損傷を受けた — 網膜などの閃光火傷だ。これは医学的に立証されている — それはアーク溶接の光を約 10 分間凝視したようなものだった。それは勧められない。そのときすべてがとても異様だった。

この光の爆発はとても静かだった。そして光の爆発が起きた場所には構造を持った、やや大きな固体の物体が現れた — 底辺がおそらく 30 フィートはあり、ピラミッド型をしていた。それはとても粗い形に見えた — まともに見たら虹色に似た輝きのために歪んで見えるが、目の周辺視力を使えばはっきりとその形を見ることができる、そんな状況だった。あなたに言いたいのは、この物体の実際の証拠は — それが着陸した所に — 今でもあるということだ。これは誰をも失望させない — この事例 — 私を信じて欲しい！

その物体はそこの地面にあった — それは映像に撮られ、写真に撮られた。

チャールズ・ハルトのテープには何人かの英国警察が出てくる。サフォーク警察が英国警察車両で森の中を引き上げていく様子が録音されている。なぜなら、彼らのサイレンが少しの間入っているからだ。これらの警察官が誰かは分からない — 彼らは誰にも話そうとしない。彼らはカメラを 1 台持っていたが、それは取り上げられた。すでにここでは国際間の事件が起きようとしていた。

我々の司令官ゴードン・ウィリアムズが — 彼はその夜パーティーに出ていたと思うが — 他の上層部の人々と一緒に現場に到着した。そこには英国の軍部がいた。彼らはそのパーティーにいたかもしれない。そして、なんと彼らはこのような出来事に対処する方法を心得ている様子だった。

この物体から発せられていた音は、私の記憶にない。それはまるで幻覚のようだった。それでもそれが現実のものであることを私は知っていた。なぜなら、それは痕跡、証拠などを残した。だがその物体は私がこれまで見たあらゆるものを超えていた。それはまさに我々の目の前にあった。ある時点で私はそれから 30 フィートしか離れていなかった — あまりにも近かった。

その物体とともに、ある生命体がそこにいた — これでやっと本題に入れる。私はこう考えたのを覚えている。この子供たちはここで何をしているんだ？ 私は混乱し始めた。輝く光があつて動きがあった。私ははっきりと見たが、これらのものには上半身があった。そして一つの腕が動いたのを見たとき — 何と言えよいか — この世の現実ではなかった。これらの上層部の人々はその[現象の]ごく近くにいた。

私が見たものは、この奇妙な機械の右側にいた。この輝く光は外に出てきた。それは青みがかっ

た金色で、地面から約 1 フィート浮き上がっていた。それは分裂した — それは地面から約 4 フィートの高さしかなかったが、分裂して離れた — そしてこれらの三つの生命体をそれぞれ中に包んだ三つの独立した光の繭(まゆ)がそこに現れた。

SG: でもそれは人間のように見えたのでしょうか？

LW: 彼らは人間の形をしていた。そのとおりだ。

SG: 彼らの身長を覚えていますか？

LW: そう。彼らの身長は約 4 フィートだっただろう。つまり、子供を考えればよい。その光が弱くなった。中にいるものが見えたのはこのときだった。彼らには髪の毛がなかったが、衣服を着ていた。一つの装置がそれに付いていた — それを説明できないが — 暗い色の物体だ。光のために下肢は見えなかった — これらは地面を歩いていなかった — これらの生命体だ。私は二度と見たくないが、大きな目と思われる周囲には白い膜があった — その白い膜は動いて順応していた。それは我々の目が光に順応するような様子だった。

司令官がそこにいた — これは誓って言うが、このような出来事が起きた場合の対処手順ができているということだ。彼は前に進み出た。そのとき我々の階級は、その区域から出るように命令された。実際、低い階級の人々が多数これに巻き込まれていた。我々は車両に戻された。我々が戻る途中、森では多くの現象が起きていた。これらの光の実体、またはそれが何であろうと、それらがそこにいた。周りには他の宇宙機がいた。木々の上に滞空し、まるでこの物事を警護し、支援しているかのようだった。言うておかなければならないが、空軍兵バローズは、全車両が集まっていた駐車場にいた。軍は彼を現場に行かせようとしなかった。

チャールズ・ハルトは別の光の現象を追跡していた。彼のすぐ前の地面に上空から光線が照射されていた — 文字どおり — これらの三日月型物体から照射された鉛筆大の光線だ。ハルト中佐はこの一部始終をテープに録音していた — 4 時間の録音だ。衝撃的な 18 分間の記録をあなたに入手した！

私の出来事は約半マイル離れて起きた。実際、そのテープでは私の出来事の始まりを聞くことができる。このことをはっきりさせておきたい：テープのすべてが公表されるずっと以前から、私は録音に入っていた。そしてテープのすべてを公表するようにした一人が私だ。私はそれを CNN に渡した — このことに関してやったことで私は 1 ペニーも受け取ったことはない。決してない。

我々が去るとき、空軍兵バローズは私にもう一つの物体が現れたと言った — すべてのトラックが止まっていた駐車区域に多くの保安兵がいたが、まさにその真ただ中に現れた。空軍兵バローズはこの物体にしがみついた。そしたらこの物体は地面を移動した — 10 メートルだ — しがついている彼と一緒に！これは間違いのない事実だ。彼は物理的にそれに触った。彼はこの物体に触ったまま移動した。それは飛び去った。それはジョンを置いて去った。... 別の光線が降りてきた。保安兵の一人が小型トラックにいた。この物体は彼を追いかけていた — これらの生命体の一つと光線 — 文字どおり彼を追いかけていた。彼は小型トラックに飛び込み、ドアをボタンと閉めた。

するとそれは彼の正面のガラスを通過した。彼はひどく怯え、フロントガラスをトラックから蹴り出した！この物体は別の窓から外に出た。私はこの男を知っている — これは多数の人々の前で起きていた！その物体は別の窓から出ていったが、12月だったのでそれは閉められていた。彼がその車両から外に目を向けると、1本の青い光線が木々の上から降りてきた。この物体はそれに乗って真っすぐ上昇し、光の白いピンをつけた松ぼっくりに似た暗い物体に吸い上げられた。それは夜の闇を背景にして暗かった。そしてこの出来事をじっと見ていた。別の将校が言ったのだが、彼はこの物体が何かを探すためにそこにいたと感じた。それらは前夜、辺りをくまなく探索(grid search)していた。つまり3日間活動していたのだ。

それらは理由があつてそこにいた。我々がある目的でここにいるようなものだ。君たちは我々の邪魔をする。だから君たちが知る必要があることを我々は見せよう — だが我々はやるべきことを完遂する。

このことも言うておきたい。チャールズ・ハルトは後で私にこう言った。“あの夜、この基地、森、ウッドブリッジ基地の三つの地区上空で、三角形物体の大規模飛来がずっと起きていたことを知っていたか？”そしてその期間中多くの将兵に空白の時間が生じていた — 驚くべきことだった。

後になって、私は精神的動揺で髪が白くなり、抜け落ちたことに気付いた — 文字どおり右側の髪が白くなった。涙がやたらと出た。口の中は何か金属の味がし、ひっきりなしに汗が出た。そして悪寒が走った。

私は決心した。私は母に電話しようとした。だが我々にあるのは明らかに基地の保安機能付きの電話だった。若くて世間知らずだった私は、COMSEC 規則(communication security;通信秘密保全)に注意を払わなかった。私は外からの通話をいつでも受けられる電話があるのを知っていた。それで私は公衆電話ボックスに行き(基地ではよくそうする)、通話料金を母に回した。私は、お母さん、こんなことは信じないだろう、と言った。私は、昨夜1機のUFOが基地に着陸し、自分たちはすべてを見た、信じないだろうけど！と言った。私は彼女が応答していないと考えた。お母さん？お母さん？母はそこにいなかった。私はグレッグ[私の友人の一人]を見てまた続けたが、何とことだ、電話は切れていた！私は交換手を呼んで言った。“聞いてください、もう一度接続していただけますか？”彼女—“あなたは基地からかけているのですか？”私—“そうです”彼女—“すみません。あなたは基地によって遮断されました”そして彼女は電話を切った。私はグレッグを見て言った。“おい、俺はトラブルに巻き込まれたぞ”こうして我々は走って寄宿舎に戻った。

[私が母に電話する前に]我々は事務所に呼ばれた。マルコム・ジグラ少佐が保安警察所長だった。そして彼の手下がカール・ドゥルーリー少佐 — 皆これらの出来事にいろいろな側面から関わっていた。事務所の外にジャガーが1台あり、もう1台高級車があった — それは何だったか、今思い出せない。私は、ああ、ここで事情聴取されるのだな、と考えた。最初に言うておくが、ここにはすべて階級の低い隊員たちがいた。私のグループには軍曹より上位の階級はいなかった。我々はそれぞれに切り離されて事情聴取された。今になってそれを理解できるが、そのときは理解できなかった。それで私は言った。何とことだ、彼らは我々に口をつぐめと言うつもりらしい。私は知っているのだ！私は名前を挙げることもできる。そこでは私服の人間たちが保安警察の警務室に出入りしていた。それは異常だった。これは何事かと思った。

彼は言った。“君たちの誰か、森にいたときそこから何かを回収したり持ち帰ったりした者はいないか？すべてだ。岩、小枝、何でもだ” 彼らは何度も何度も我々にそれを繰り返した。彼らはこう言った。“もし持っていて今それを話さないなら、君たちは UCMJ (Uniform Code of Military Justice; 軍事司法統一法典) の適用を免れない” 条項 XV, さらに JL-11, これらのすべての規則だ。我々は若く、新兵だった — 何ということだ、我々はまだ任務に就いてもいないのにトラブルに巻き込まれている。我々はガイガーカウンターで入念に調べられた。一人から反応があり、彼のポケットから何かを取り出された。この同僚はすぐに排除された。命にかけて誓うが、その後再び彼を見たことはない。彼は排除された。これは多くの人たちに起きたことだった。空軍が責任を負うべき自殺も一件あった。これは実際の名前を持った実在の人間だ。ところでこの基地ではその後、ついに NATO の中で最も高い自殺率になった — これは既成の事実だ。関係した大尉の一人は彼の裏庭の木で首を吊って発見された — 結婚して子供もいた。これらのすべての人たちは銃で自殺し始めた。私はそれを生き抜いた — 私がそこから生還したのは驚きだ。

こうして我々は事務所に連れ込まれた。そこには椅子が何列かあり、とても小さな机が一つあった。その日保安警察官たちは事務所から出された。この基地では、その日何もかも普段と違っていた。我々が連れてこられたとき、机の上には書類があった。我々は全部でおおよそ 10 人だった。そこには一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つの山積み書類があり、すでにタイプされていた。一つは我々が見たもの — 我々が見たものではなかった — についての予めタイプされた陳述書で、すべてが一般的な内容だった。それには、我々は勤務外であり、木々の間を飛び跳ねていた未知の光を見ただけだ、と書いてあった。私はそれははっきりと覚えている。私は、もしこれにサインしなかったらどうなりますか、ジグラール少佐？と訊いた。そしたら、彼は私に、他の選択肢はないと言った。続いて彼は、私にはそうさせてくれと彼に頼む以外にないのだと言った。私は彼の事務所にいたこれらの他の職員を見つめていた。なぜなら、我々は次にそこに回されるからだった。彼は我々に文書にサインするように告げた — 4 種類あった。一つは UCMJ 機密事項 — 忘れたが JANAP-1 とかいうものだった — JANAP とははっきり書いてあった。だが我々が読めない他のものもあった。彼は言った。“君たちは後でこれを読める；署名したまえ；社会保障番号だ” それから我々は列をなし、別の部屋に入った。そこには映像スクリーンが用意されていた。椅子が 2 列に並んでいた。金属製の折りたたみ椅子で、拵げてあった。ジグラール少佐が出ていって、私服の男が二人残った — 大男でビジネスマン風の米国人だった。彼らは写真入りプラスチック ID カードを着けていたが、それには米軍公安部とあった。それが空軍かどうか私は知らない — それは国家安全保障局の現場部門だと我々は聞かされている。彼らは人々を威圧していた。

[脅迫的な事情聴取のやり方についてのメルル・シェーン・マクダウ, その他の証言を見よ. SG]

彼らは笑ったりしなかった。我々は制服を着ていた — 彼らは特に野外で着ていた制服を着るように我々に要求した。それはガイガーカウンターに関係することだったと思う。

こうして我々は席に着いた。そしたらロンドンの米国海軍情報局 (Office of Naval Intelligence; ONI) から来たリチャードソン中佐と名乗る海軍中佐がそこにいた。彼がこの場を支配していた。彼は制服を着て、我々にとても愛想がよかった。事は大体こんな具合に進んだ。私はアラバマ州から来た友人の隣に座っている。我々は彼をアラバマと呼んだ。アラバマは信心深かった — この時

点で彼はとても混乱していた。．．彼は携帯用聖書を持っていて、それを読んでいて、彼は自分を失っていた。19歳という若さでは、多くの人々にとって人間の条件はよく理解できない — 人々の苦痛と精神的な傷 — だが私は、知っているこの男が崩れていくのを見ていた — 私の隣で、彼はうまく切り抜けられなかった一人だ — 彼は有名人で家族を持ち、何でも持っていた。彼らはそんなことを気にかけなかった。

だが、リチャードソン中佐が言ったことはこうだった — 我々は皆茫然としていたが、これだけははっきりしている — 簡単に言えばこうだ。“君たち空軍兵はある状況下に置かれた。それはこの部屋にいる君たちの誰が気付いているよりも長い年月我々がずっと知っていたものだ”それはすべて事実即しのことだった。彼は言った。“ここに一つの現象がある。それは何年もの間ここにやってくるものだ。その一部は来て去っていく。また一部は恒久的に駐留している”彼らはある現象を言ったのではなかった。彼らは様々な文明のことを言った — 進化した文明だ。そして秘密の理由が多く述べられた — 国家安全保障。彼は言った。“生き続けるのが君たちにとって最良だ”部屋にいた一人が言った。“我々が何か言ったらどうなりますか？”そしたら彼は、“今このことを覚えて欲しい — 君たちの郵便物と電話は軍にいる限り監視されるだろう”と言った。続けて、“普通の生活をする最良の道は、このことについて誰とも話さないことだ。お互い同士でさえもだ。この瞬間からだ。普通の生活をせよ。このことはすべて忘れよ。今の生活を続けよ。これからも少数の人々が必ず見ることになる何かを君たちは見た、ということ覚えておくように”他の言葉は全部が国家安全保障に対する忠誠、我々の誓約、国家への奉仕だった — それは洗脳だった。なぜなら、まったく突然にそれらの言葉は反復され、彼の声には単調な調子があった。

次に彼らは映像を見せた。彼らは言った。“君たちに一つの映像を見せよう。君たちが目撃したことを正しく観るのに役立つはずだ。また君たち自身にとっても、少しは気持ちの区切りになるかもしれない”我々はまた、何か異常な夢を見たら翌月まで毎日電話相談を受け付けると、その電話番号を教えられた。もし誰かが我々から何か情報を聞き出そうとした場合、我々は[当局に]それを通報しなければならなかった。彼らが言うには、その地区にソ連が潜入する可能性があるということだった — 我々から情報を入手しようとして。当時は冷戦だった。彼らはどんなことにも注意するように言った。我々はそれを直ちに報告しなければならなかった。

彼らは映像を流した — それはリールに巻いたフィルムだった — 音声の説明はなかった。彼も説明はしなかった。それはガンカメラによる映像から始まった。推測できたのは1940年代の記録らしいということだけだった。それは数機のプロペラ航空機の白昼映像だった。フロリダ・キーズ (Florida Keys; フロリダ半島南端の島々) のようであり、銀色円盤の編隊が航空機の下を飛んでいた。これは最初の映像の一コマだ。場面が変わった。この映像には宇宙計画に至るまでの場面が含まれていた。中でも最高の場面は、ベトナムでの第5特殊部隊ベレーだった。彼らは低い雑木林に覆われた赤土の丘におり、一人がカメラを回していた。．．いつ頃のことか分からないが、カラー映像だった。彼がカメラの向きを変えると、この巨大な、緑色の、三角形の物体は、彼らがいる場所より低い雑木林からゆっくり悠々と上昇する。そして顔のレベル、つまりカメラのレベルまで上昇し、さらに上昇を続ける — だが低木や雑木がこの巨大物体から滑り落ち、大ペリカンか別の鳥の群れが、その真下を移動している — 私は生涯これを忘れないだろう！私は屋外で起きた事件よりもこの映像をよく覚えている。

宇宙計画： 神にかけて誓う。この映像は月面上の構造物を映していた — 箱状の物体 — 砂色に見えた。

[カール・ウォルフによるこれらの構造物についての重要な裏付け証言を見よ。SG]

そこには月面車が動き回っているのが映っていた。私はそれらをはっきりと覚えている。なぜなら、私が子供のときにそのすべてが起きたことを覚えているからだ。そのとき — 少し離れて — 宇宙飛行士たちがこれらの箱のように見える物体を指差していた。構造を持った物体群は月面から浮揚して移動していた — アポロ計画飛行任務による映像だった。

SG: 月面上のその構造物はどんな様子でしたか？どんな形でしたか？

LW: その構造物は月面の色と連続しているように見えたが、構造を持っていた。ちょうど巨大な箱のような物体だ — 大変四角張って角のある構造だった。窓はなかった。だがそれらは明らかに人工物で、映像に撮られていた。それから丘の上に光体群や奇妙な物体群があった。

SG: それらの状態はよかったですか、それとも古かったですか？

LW: とんでもない — 新品同様だった。

SG: それらの UFO は移動していましたか？

LW: とても明瞭だった。いろいろな場面にあった。その多くは月面車と一緒に映っていた — その飛行任務のだ。幾つかは宇宙遊泳中の宇宙飛行士たちで、複数の赤い光点をつけた何か暗い物体がすぐに彼らに近づくのが映っていた。私はそれを覚えている。すべての場面はとても素早く変わった。彼らはそれを再び見せることはなかった。アポロ計画飛行任務の時代がその映像の終わりだった。

この会合、そして母に電話をしそれが遮断された後、私はトラブルに巻き込まれたことを知った。私はベントウォーターズ基地通信部に呼び出された。どういことになるか、私は知っていた。一人の軍曹がそこにいた。そしてその空軍大尉が私を事情聴取した。私はいろいろ質問された。事情聴取ではオープンリールテープの録音機があり、彼らは私に質問を続けた。“君は固定電話 (land lines) を使って機密情報を漏らしたことがあるかね？” 何度も何度もこう訊かれた。私は、いいえ、いいえ、と繰り返した。彼らはこう言った。“君はその主張を続けるか？” それで私は、はい、と言った。私は白々しい嘘をついていた。そしたら彼らはテープを回した — 私の声だった。‘もしもし、お母さん。信じてはくれないだろうけど。...’ 彼らは言った。“ウォリン、この基地のすべての電話は常時監視されている。このことを覚えておけ” それは追跡可能だという理由で、私には条項 XV が適用されないと告げられた。私には 300ドルの罰金が科されることになり、またもしこれ以上トラブルを起こすと、私は袖章を剥奪されることになった。その罰金の記録がある。説明はない。後に私は国税庁など、いろいろなものを使って脅迫された。間違いだ。彼らは狂っている。この組織は狂っている。

その後我々は食事をしていた。ペニストン軍曹もそこに座っていた。誰かが私に訊いた。“昨夜我々に起きたこと、一体あれは何だ？”そしたら上官のペニストン軍曹が言った。“口をつぐめ、ウォリン、口をつぐめ”そんな具合だった。私は最悪じゃないかと思った。私はトレイを放り投げ、そのまま外に出た。その後状況はまったく悪化する一方だった。

その夜遅く、バステインザ軍曹と私は電話を受け — 他の人々にも起きたと断言する — 駐車場の車まで来るように言われた。バステインザ軍曹と私は、その日の午後 5 時にこの車まで行くことになっていた。英国ではこの時刻は暗かった。我々はお互いに歩み寄った。私は、やあ、バステイ、調子はどう？と言った。彼は“変わらない”と言った。それから我々二人はこの車に向かって歩いた。ドアが開いて、そこに男が一人座っていた。それから実際に起きたことはこうだった。我々のそれぞれに二人の男が背後から近寄ってきた — 誰かが彼に向かって歩いていったのを確かに覚えている — そしてエーロゾルスプレーのような音が聞こえ、目の前が真っ暗になった。何年もの間私が思い出せる記憶は、車の室内灯が明る過ぎたということだった。記憶はそこでとぎれた。実際、我々は何かのエーロゾルスプレーを浴びせられていた。私はやたらと涙(はな)が出て胸が苦しかった。私はどう見ても車の中でおとなしくなかったのも、暴行を受けた — 文字どおりあばらを殴打され、突かれた。私は抵抗していた。バステインザ軍曹も同じだったことを私は知っている。

私は自分が問題人物になったことを確信した。何年かして、彼もまた何回か電話していたことが判明している。我々はバントウォーターズ基地駐機場のどこかに連れていかれた。周囲の音によって私はそれを知った。我々がその車から降ろされたとき、私は顔を切った。というのは、私は車から転落し — 明らかに動けない状態だった — コンクリートと氷の地面を打ったからだ。そして運ばれた。文字どおり — 体ごと、うつ伏せになって。涙が出てどうしようもなかったが、それを拭うことも何することもできなかった。我々が下に降りていったことを私は知っている。覚えて欲しいが、その基地には地下施設があり、それは — 今に至るまで — そこにある。

ひどい臨床的症状の中で、私はそれについてもっと覚えていることがある。このとき基地には外部の人々が多くいたことを我々は確かに知っている。森には多くのチームがいた。航空機がウッドブリッジに飛来し、基地の司令官でさえそれに近づいたり、なぜ彼らがここにいるのか訊ねることができなかった。白いつなぎ服を着たチームは森の中をあちこちと動き回った。基地にはこれまで決して見なかった情報関係者がいた。これらのことは他の人々によりすべて事実であると立証できる。

[この出来事を調査したこの外部チームに関わったクリフォード・ストーン軍曹の証言を見よ。SG]

とにかく、私は 20 分間だけ覚えているが、まる一日気を失っていた — 話は他の人々の間でも知られていた。人々は、私が緊急休暇、休暇、あるいは基地を離れていたのだと話していた — だが、私は他でもない基地の地下にいたのだ — そこには他の隊員たちも降ろされていた。

そこにあったのは多くの先端装置、巨大なアーチ形のガラスに似た天井、ガラス板の壁 — 地下鉄の壁のような — 古い巨大なガラス板だ。我々はある区画に連れていかれた。それが現実だったかどうかはともかく、私には覚えている記憶がある。私はとても暗い空間を見ていた。私のそばに誰かがいて、この基地から北海に通じる多数のトンネルがあると説明していた。

私が次に覚えているのは、白昼の光だ — 基地の写真現像室から白昼の日光へと歩き出していた。多くの若い人々と私はこの中を通り抜けた。はっきり覚えているが、私はテーブルについて、空軍の上官たち、他の正体不明の人々が私を見下ろして何か話しているのを見ていた。私は彼らを明るい光の中で見上げていた。ところで、そこから出てきたとき、私には静脈注射か何かの跡が付いていた。私には青あざと包帯が巻かれていた。私はそれを認める。本当のことだ。私には跡があったのだ。私に起きたかもしれないことを思い出したり考えたりすると、恐ろしい。だから私は、これらの記憶については少ししか考えたことがない。

私は母に手紙を書いた。私はその手紙を、チャールズ・ハルトが実際のハルト・メモを書く1週間半前に書いた。私はハルト・メモを情報公開法により取得した。それは空軍のレターヘッドがついた空想科学物語のような文書だ。それはその出来事の最小限の記録だが — そう意図したものだと思いが — その内容は空想科学物語のようだ。それは私が提供した情報に基づき、空軍自身はその存在を何度も否定した後で、1983年にCAUS(Citizens Against UFO Secrecy; UFO 秘密政策に反対する市民の会)により公開された。

最初の夜にその物体が着陸した場所で、着陸痕の石膏型がとられた。チャールズ・ハルトが今でもその一つを持っており、人々にそれを見せる。また議会の機関にはどこであろうと見せろだろうと思う。その大部分は結局失われてしまった。着陸場所の土壌分析が行なわれたが、それはすべて流出してしまった。年月が経ち、1988年から1990年にかけて我々はコア試料を採取し、土壌分析を行なった。それはマサチューセッツ州スプリングボーン環境研究所で正式認可を受けた科学者たちにより行なわれた。Left at East Gate という本の中にその研究成果がある。絶対間違いのない現象がその場所でだけ起きた — 地下3フィートまでだ。植物はこの部分にだけ生えない — 作物の種類を問わず — 我々はその農場主と話をした — 20年間だ。だがその土はむしろ黒っぽい。それは水を吸わない。それはほとんどが結晶質で、大変乾燥した泥と混じっている。凍結乾燥したコーヒーのようだ。

[ロベルト・ピノッティの証言およびイタリアとフランスの着陸地点から得られた結果を見よ。それらは同様の変化を示している。SG]

言ってみれば、それは土壌を工業用電子レンジで加熱し — 超高温にまで — それから瞬間的に氷点下にまで冷却していた — ほぼ円錐状の指向性を与えて。

英国空軍基地の一つワッテン基地では、問題になったいずれの夜にも、これらの物体からのレーダー反射を観測していた。ワッテン基地では3日目と最初の夜、一つの物体が森の中に降下していくのを捕捉した。翌日米国空軍がワッテン基地に行き、航空管制官に対して、1機の地球外宇宙機がレンドルシャムの森に着陸したと語った。彼らは基地司令官とも会い、そのレーダーテープを借りた。だがそのテープは戻ってこなかった。これらはすべて、おそらく今でも生きている実在の人々だ。もう一つ私が知っているのは、問題の夜のいずれかに、我々の基地から遠くないワッテン基地の周辺に、一つの小さな物体が出現したことだ。当然ながら、当時彼らはIRA(Irish Republican Army; アイルランド共和国軍)の脅威に対して厳重な警備をしていた。空軍警察犬部隊(K-9)が周辺パトロールをしており、犬は地面にピタリと身を伏せて嗅ぎ回っていた。これらの人々は今でも生きている。そのとき彼らは、フェンス際にいたこれらの二つの存在を見た — それ

を突いていた — 三角形の機械がその隣にあった。彼らはこれらの光に似た物体でフェンスを突いていた。彼らは空軍警察犬部隊を見てこの機械に逃げ込んだ。この機械は離陸し、我々の基地の方に向かって飛び去った。

人々がフィルムや写真について訊ねるなら、その確証はある — これは私が発表した話ではない。マイク・ベラーノ大尉が 1985 年のケーブル・ニュース・ネットワーク(Cable News Network; CNN)番組‘UFO: ベントウォーターズ事件’の中で、次のことを立証している。その翌日、彼は実際に司令官ゴードン・ウィリアムズを待機中のジェット機まで乗せた。パイロットが操縦席の円蓋を開けてこう言った。“そのカバンには何が入っていますか？”彼はこう言った。“本物のフィルムだ。我々は UFO の本物のフィルムと写真を持っているんだ” そう言ってゴードン・ウィリアムズはカバンの中にあつたこの資料を直接パイロットに渡した。マイク・ベラーノはこう述べたのだ。ところで、このフィルムはどこに向かっていたのかと私が訊くと、ドイツということだった。そこには当時の空軍司令部があつた。そこから先だが、その輸送記録があつたことを我々は知っている。そして最終的にはワシントンに送られた。

私は保安部隊を名誉除隊になった。私は名誉除隊だ。私はこれまで自分について言われた不快な話を多く聞いてきた。だが私は自分の履歴を持っている。私が自分の履歴書を持っているただ一つの理由は — ある空軍大佐から — 履歴書の一部をこっそり抜いておけと忠告されたからだ。彼が言うには、彼らは私を蒸発させるかもしれないということだった。“彼らは君を無害なものにしようとしている”と彼は言った。

[“消される”ことについて述べているスティーブ・ラブキン准将の証言を見よ。SG]

私はまるでフランク・セルピコ(*ニューヨーク市警の刑事)か何かのように見られていた。私は組織型人間ではなかった。なぜなら、私は誰にでも話したからだ。

不幸なことに、私の友人アラバマは無許可離隊(Absence Without Leave; AWOL)し、家に帰ろうとした。オヘア空港で彼は FBI に捕まり、直ちに任務に引き戻された。彼の望みは家に帰ることだけだったが、彼は任務に戻された。私は全装備を身につけて上級曹長と一緒に車でパトロールしていた。そのときアラバマ — これは実在の人物だ — から無線が入り、彼は家に帰れば自殺すると言った。彼は小型トラックの向きをいきなり変え、柱に向かって突っ込んでいった。彼は言った。“無線をそのままにしておいてくれ...” 私は駐機場にいた全部隊がこれに応答したのが分かった。私はハルト氏がこれに関して何か言ったのを聞いたことがない。彼が私と同じ場所に立とうとしない理由がこれだ — なぜなら、彼らが不愉快になることを私が持ち出すからだ。彼が言ったように、空軍はこれについてまったく傍観者だった。とにかく、アラバマは M16 ショート(*自動小銃の一種)を持っていた。彼はそれを口にくわえ、自分の頭頂を吹き飛ばした。私が死を目撃したのはこれが最初だった — 19 歳の非業の死。私と彼は夜と昼ほど違った。つまり — 彼は南で私は北だ。彼はとても信心深かった。私はそれに敬意を払っていたが、我々に共通なものは何もなかった。彼はいいヤツだった。そして、彼らは我々の助けになることは何もしなかった...

私は何年もの間、信じ難い電話トラブルに見舞われてきた — 典型的なトラブルだ — 私の郵便物は今でも盗み見されている。この国、英国では何年もの間それは開封され、詫び状とともにプ

ラスチックで封じ直されていた。我々の輸送物の多くは目的地に届かない。

[私はこれを立証することができる。我々が英国外にウォリン氏の検証資料を持ち出すことはきわめて困難であることがそれを示す。SG]

その後、私のパスポートの更新が近づいていたので、私はそれを送付した。それは私が旅行に出かけるまでに期限切れになるはずだった。だがそれを送ってすぐに、私は手紙を受け取った。それにはこう書いてあった。“ウォリン氏へ。あなたのパスポートは変造されているか破損しています。もう一度申請する必要があります” 一体どうなっているんだ？しょうがない。私は必要事項を記入した。次の返答はこうだった。“ウォリン氏へ。あなたは米国市民権を回復する必要があります” 何だ？私はこれらの人々のすべてに電話した。最後に、ニューハンプシャー州ポーツマス国家パスポートセンターで、この女性が言った。“ここで何が起きているかは言えません” 暫くして私は、聞いてください、私は *Left at East Gate* という本を書いています、と言った。そしたら彼女は“あのベントウォーターズの出来事...”と言った。彼女は“この番号に電話をください”と言った — それはニューハンプシャー州レバノンにある彼女の自宅の番号だった。私は彼女に電話した。そしたら彼女はこう言った。“私はプリントアウトされた当局の書類を持っています：‘当人のパスポートはある区分により無効。理由は当人の国外地域の公開討論の場で行なった機密防衛問題についての発言’、そして何かの記号、DOD (Department of Defense; 国防総省) の記号がその下にあります” こんな事が私に起きているが、まったく奇妙なことだ。

当時の我々の代理人、ニューヨークのペリー・ノールトンは、元米国司法長官ラムゼイ・クラークの友人だった。彼は我々のために会見を準備し、私はクラーク氏と直接会った。彼は私に言った。“私は君のために何度か電話するつもりだ” だが彼はこう言った。“君にこのことを言っておきたい — すべてを知ったうえでの話だ — 彼らは君が核兵器について話したのがその理由だと言っている。それ以外はない” 彼は続けた。“英国の人々は、そこに常時核兵器があるのではないかと疑っていた。いいかい、君のパスポートは君が別のことを話したから停止されたのだ” 彼はそれ以上詳しくは語らなかった。彼は2度電話し、国務省は謝罪とともにそれが間違いだったと伝えてきた。

我々はこれまでできる限りのことをしてきた。私は議会の機関ならどこでもこの出来事を話し、誓約するつもりだ。私は自分の国に敬意を払っているし、人々には知る権利があると思う。

[我々はこれらの着陸事件に関して議会で証言できる多数の目撃証人の名前を確認している。この事件はそれ単独でUFOと地球外知性体の問題の現実性を確認する。さらに、これを裏付ける文書、テープ、および着陸地点に残された痕跡や放射能測定などの証拠がある。SG]

ローリ・レーフェルト大尉の証言
Testimony of Captain Lori Rehfeldt
2000年10月

ローリ・レーフェルトは、1980年12月に起きたUFO事件のとき、ベントウォーターズ空軍基地第81保安部隊にいた。彼女と一人の同僚はその夜遅く勤務に就いていた。そのとき彼女らは遠くに1個の物体を見た。それは滑走路に着陸する飛行機のように思えた — 北海の方角から進入してきた。

彼女らはそれが無音で爆発し、三つの部分に分裂したのを見た。それらは滑走路を急速に横切り、それから真っすぐに上昇し、見えなくなった。

...この航空機を私たちは見た...それが横切って移動していたときの速度は途方もないものだった。それは通常の航空機のように入ってきた。そして、停止したときこんな動きをして三つに分裂した。滑走路を西に横切るとき、その速度は驚異的だった。その他に私たちの注意を引いたただ一つのは、それが無音だったことだ。そのとき何の物音も出さなかった。それが何だったのか、私たちにはまったく分からなかった...

それが停止したとき、物体は素早い動きをした：上、下、左、右 — その動きはとても幾何学的だった。つまり、それは普通の動きではなかった。おそらくそのことが何よりも私たちを当惑させたことだった。なぜなら、それは異常なことだったからだ。それはジェット機よりもはるかに速かった...

彼はたまたま空軍のために働く電気技術者だった。彼は、彼らがそこで何か見つけたことを君はよく知っているね？と言った。彼はまた、我々はそのプラスチック、そのとき手に入れた物質に取り組んでいる、最初その物質はかなり素材に近かったが、今ではそれを使うことができ、またそれを精製することができると言った。彼らはそれを使うことができ、またそれは様々な熱や温度にも耐える。彼によれば、それは灰色の物質だった。だが彼はそこに何かがいたことを立証していた。この物質はもともとここにあったものではない、彼はそう言った。

クリフォード・ストーン軍曹の証言

Testimony of Sergeant Clifford Stone, United States Army

2000年9月

ストーン軍曹は1940年代初期、またおそらくそれ以前に遡るUFOと地球外知性体の歴史について、驚くべき話を語っている。ダグラス・マッカーサー将軍は1943年に惑星間現象調査部隊と呼ばれる一つのグループを組織し、この問題の研究にあたらせた。それが今日まで続いている。彼らの目的は起源不明の物体、特に地球外起源物体の回収である。彼らは現場の情報資料を入手し、それを“この情報の管理者たち”に引き渡す。ブルーブック計画にさえ、ある選り抜き調査部隊があったとストーンは言う。それはブルーブックの外部にあった。この部隊はブルーブックと協力して動いていたと考えられていたが、実際は違った。ストーンは墜落したET宇宙機の回収を行なう陸軍チームの公務の中で、地球外知性体の生存者とその遺体を見たことがある。地球外知性体は、我々が精神的に成長することを学ぶまでは、遙か宇宙まで進出することを許さないだろう。そして我々がもし彼らの存在をまず受け入れなければ、彼らは間もなく自らの存在を知らしめるだろう。彼はそう考えている。

1942年2月26日、ロサンゼルスでの戦い(Battle of Los Angeles)と一般に呼ばれているこの日に、ロサンゼルス上空を飛行する15から20機の未確認航空機がいることを我々は知る。我々は直ちにこれらの物体を撃墜する作戦でこれに応えた。第37沿岸砲兵部隊は1,430発の砲弾を消費した。我々は直ちに、これらの航空機が飛来する枢軸国(*日独伊)の秘密基地があるか、これらの航空機を格納していた民間飛行場があるか、探すことに着手した。それを証拠立てるものは何もなかった。我々が取り組んだ調査は、結局何の結果も出せなかった。

同じときに、太平洋でも人々は同じことを経験していた。つまりフリー・ファイターズと呼ばれるものだ。マッカーサー将軍は部下の情報将校たちを指揮し、何が起きているかを調べさせた。私には次のことを信ずべき根拠がある。つまり、1943年にマッカーサーは、実に地球のものでない物体とどこか他の惑星の人々が我々を訪問しており、我々が第二次大戦と呼ぶ世界的な出来事を実際に観察しているのだ、ということを知った。彼が直面した問題の一つは、もしそれが事実で、また彼らに敵意があった場合、我々は彼らについてほとんど何も知らず、防衛手段をほとんど持たないということだった。

マッカーサーは惑星間現象調査部隊と呼ばれる部隊を組織した。

[マッカーサーがET問題に関与していたこと、彼がニューメキシコ墜落事件で回収された宇宙機と地球外知性体について知っていたとするレオナルド・プレツコ軍曹の証言を見よ。SG]

それは後にマーシャル将軍に引き継がれることになった。それは今日までずっと続いている。名前は変わり、その履歴もいまだ明らかになっていないが。陸軍の説明は、それは UFO を調査する正式の組織ではなかったというものだ。だがそれは将軍によって組織され、結果を残し、それらがありきたりの物体ではない、つまり惑星間宇宙機だとの結論を得ているのだ。彼らは起源不明、特に地球外起源物体の回収のための総合情報作戦の一部として、まさに今日行なっていることを続けてきたのだ。彼らの目的はその情報を評価し、現場の情報資料を収集し、それを処理してある種の有用な情報に加工し、その分野 — それを知る必要性を持っている人々や、いわばこの情報の管理者たちに行きわたらせることだ。

マッカーサーの配下にあった将軍の一人、当時の陸軍航空隊の一将軍が、マッカーサーの所に戻り、こう言った。“我々が手に入れたものは、この地球のものではありません” 私が言っておきたいのは、この頃にはドイツでさえ我々が訪問を受けている証拠を発見し、何らかの物理的証拠を持っていたということだ。マッカーサーは確実に物理的証拠を持っていた。私が[陸軍でこの問題に取り組んでいたときに]見た文書からは、その物理的証拠が何だったかは分からない。だが証拠はそこにあった。

私の注意を特に引くのは、ドイツがこれらの物体の一つに対して、逆行分析 (back-engineer) を試みたかもしれないことだ。我々は間違いなくその逆行分析を試みた。だがその逆行分析を行なうためには、我々の技術自体がその獲得する技術と同程度でなければならないことを我々は知る...

1950年代、米国空軍はブルーブック計画の外部に UFO を調査するための一つの選り抜き部隊を持っていた。ブルーブックは彼らが協力しているものと考えたが、彼らはそうではなかった。この部隊はもともと第 4602 空軍情報局部隊として組織された。その平和時の任務にブルーフライがあった。ブルーフライ計画は、地球に墜落した起源不明の物体を回収することだった。回収の対象が明確に地球に墜落した物体だったことを覚えておくのは重要だ — なぜなら、当時我々には宇宙機などなかったからだ。この結果、その目的に適っていたライト・パターンソン基地に監視要員を置くことになった。そして UFO 報告が入ってきたとき、この墜落物の回収にチームを派遣する必要があるかどうかを知るために、報告は綿密に調査された。

空軍は監視要員たちを使ったことを否定する。私は空軍が彼らを使ったことを知っている。だが、ブルーフライ計画の平和時の目的は、現場に出かけて地球に衝突した起源不明物体を回収することだった。その後、1957年にそれは起源不明のすべての物体を対象とするものに拡張された。対象はやはり宇宙機だった。それは1957年10月時点で、ムーンダスト計画と呼ばれるものの一部になった。

ムーンダスト計画は、ただ二つの物体を回収するための全体的な実地調査計画だった：第一に米国以外の起源を持つ物体で、地球の大気圏に再突入し地物に激突するもの。当然、我々は技術的、科学的情報の観点から、いかなる潜在的な敵に対してもその技術的能力を決定もしくは解明することに関心があった。なぜなら、我々米国の知られていた敵、ソ連は当時宇宙船を打ち上げていたからだ。

もう一つの関心領域は、起源不明の物体だった。今我々は、相当数の起源不明の物体があったことを知っている。それは宇宙船の打ち上げ、隕石の衝突、その他知られているいかなる宇宙廃棄物の地球落下とも関連のないものだ

要するに、ムーンダスト[計画]とブルーフライのもとで、我々はこの地球のものでない外来の破片を回収したのだ。

今我々の前に立ちはだかる機密性の程度は、年月を経る間に変化してきた。第二次大戦以後、たとえば1969年までの間、その機密性の分類は11あった。現在は三つだ：部外秘、機密、最高機密。だがもしあなたがこれらの分類のための規準を超える機密情報を持つとすれば、それはあなたが特殊接近プログラムを持つ場合だ。その種の情報は、公式の認可なしには人々の中に持ち出すことができない。

UFOについて論じるとき、最後はこの疑問に行き着く。米国はもちろん、どの政府でも、秘密は隠しておけるものか？その答は、はっきりとイエスだ。だが、情報関係機関が使える最大の武器の一つが、米国民、米国の政治家、暴露者たち — UFO情報を暴露しようとする人々 — が持つ傾向だ。彼らはすぐに出てきて、こう言う。我々は秘密を隠しておけない、秘密なんか隠しておけるものじゃない。では、本当はどうか。秘密は隠しておけるのだ。

国家偵察局(NRO)は何年もの間秘密だった。NSA(国家安全保障局)があるかどうかさえも秘密だった。原子兵器の開発は、それを一回爆発させ、何が進行しているかを一部の人々に言わなくてはならなくなるまで秘密だった。

そして我々は、我々自身の理論的枠組みにより、高度に進歩した知的文明が我々を訪れるためにやってきているという可能性または確率を、受け入れないように条件付けされている。きわめて信頼できる物体の目撃報告、それらの物体内部にいた実体の目撃報告という形で、証拠は存在する。それでも我々は平凡な説明を探し求め、我々の理論的枠組みに合わない証拠の数々を投げ捨てる。だから、それは自らを守れる秘密なのだ。それはありふれた風景の中に隠される。情報機関に出かけて行き、この情報を出せとせがむのは、政治的自殺行為だ。私はその方針で彼らの多くと協

力してきたから分かるが、議会の大部分の議員は尻込みし、それをさせないようにするだろう。ロズウェルで起きたことについて、議会の調査を単刀直入に要求した 3 人の議員の名前を私は挙げることができる。

私が聞いた最も奇妙な発言は、それを行なう人間は議長でなければならないというものだった。それで私はミシシッピ州選出のある上院議員に、ためらわずにそれをしていただけるかと頼んだ。答はノーだった。私はこう言った。それを書面にしていただけませんか？私はそれを書面で貰ったが、公開することをためらっている。私はそれをあなたにお見せするが、公開はためらう。なぜなら、私はそう約束したからだ。

政府のファイルにそれはあるのだから、我々はその資料を入手する必要がある。それが最終的に破棄されてしまう前に、我々はそれを公開させなければならない。一つの好例がブルーフライとムーンダストのファイルだ。私は空軍が認めた秘密文書を入手した。私がおっと多くのファイルを開放させるために議会の議員たちの助けを借りたとき、それらの文書は直ちに破棄されてしまった。私はそれを証明できる。

そのどこかの段階で、彼らはその資料を見るかもしれない。もしそれが漏洩の危険に曝されたら米国の国家安全保障に深刻な影響を与える、何かきわめて機密性の高い情報があることを知るだろう。少数の人々に制限された接近だけを許すことを確実にするために、それはまだ保護される必要がある。その少数の人々は、一枚の紙に名前を書いて挙げられるほどの少人数だ。だから、特殊接近プログラムが存在することになる。特殊接近プログラムにあるはずの管理はそこにはない。文書を保護する仕組みと秘密のプログラムを実行する仕組みを議会が精査したとき、彼らは特殊接近プログラムの内部に特殊接近プログラムがあることを知った。つまり、そのすべてを議会が管理統制することは本質的に不可能だった。

さて、UFO の場合、それと同じ原則が適用される。こうして、情報関係機関内の 100 人以下の小さな核、いや私はそれが 50 人以下であることを知っているが、それがすべての情報を支配している。それはまったく議会の調査や監視の対象ではない。だから、議会はその核心に迫った質問を掲げ、公聴会を開催することに踏み切る必要があるのだ。

任務の種類はかなり多いが、端的に言えば、そのとおり、私は墜落した ET 物体の回収という種類の作戦に関わっていた。残骸が生じる次の UFO 墜落、着陸を我々はその部隊で整然と待っている、多くの人々はそう考える。我々は日常の生活を送っているのだ。軍の中で通常の任務に就いている。だが、その区域で出来事が発生し、あなたが専門分野としてそれに前向きに関わることを望む人々の一人なら、あなたは招集される。

さて、私にこのことの準備をさせるために、入隊後のきわめて早い段階で、彼らは私をアラバマ州フォートマッカレンにある NBC 学校に送った。そこは 3 週間の学校だった。そこは NBC 要員のための学校だった。NBC とは核 (Nuclear)、生物 (Biological)、化学 (Chemical) を意味する。私が UFO 回収に関わったのは、常に一つの NBC 部隊としてだった。部隊はそれが核事故だったかのように取りかかり、展開した。だから部隊はそう行動する。もし我々が密かに人知れずそこに接近して回収を行ない、中に入って残骸を採取できるなら、我々はそれを行なう。もし公式に許可

された偽装計画、たとえば嘘の新聞発表をする必要があるときは、我々はそれも実行する。

たとえば飛行機事故が起きた場合、それを処理する標準的な手順というものがある。墜落したET 宇宙機あるいはその残骸を回収または採取するとき、それと同じ手順が利用される。残骸が重要だと私が言う理由は、それらは高度に進歩した装置だからだ。言われているほど多くの墜落があったわけではない。それらには欠陥があったのだ。なぜなら、それらはあなたや私と同じような肉体を持つ人間(*異星人)の知性が造ったものだからだ。人間である限り、失敗はする。

さて、我々は高度に知的な文明について語っている。高度に無能な文明についてではない。我々は必要な手順を踏むし、彼らもそうする。だがそれに加えて我々が出向くときには回収を行なう。その回収を行なうとき、我々は飛行機事故か危険物質を処理するときのようにそれを扱う。それが安全だからだ。その手順はすべて決められている。唯一の問題は、これが地球のものではないことを直ちに認識できる人々がそこにいることだ。確かに、ブルーフライの[ET 宇宙機]回収では、現場分析ということが行なわれた。

要するに、我々の場合はミサイルがどういうものか、飛行機がどういうものかを知っている専門家がそこにいる。彼らはこの物質を調べ、それが何でないかを告げる。こうして我々はただ一つの可能性に行き当たる。この惑星に起源を持たないもの。これがブルーフライの目的だった。迅速な現場分析を行なうことはきわめて重要なことだった。さて、それが残骸ならその物質を梱包するとき、危険物質を梱包するときと同じに扱われる。そして予防措置がとられる。もし機体全体を扱うときは、嚴重な予防措置がとられる。なぜなら、ET たちに敵意はないと私は主張しているわけだが、それでもなお死亡に至る重大な事故が発生することがあり得るからだ。これらの任務に向かわなければならなくなったとき家族がどんな状況だったか、私はそれを話すつもりはない。なぜなら、起きたかもしれないことを考えると少々心が乱れるからだ...

当然我々はその物質を秘密にしようとする。特に機体が大きく、円盤型やくさび型をしている場合はそうだ -- 時々我々はそれを回収したが、素晴らしい形だ。特にそれを搬入のためにトラックに載せる必要があるときには、警戒態勢がとられる。それをトラックに乗せて安全な収容場所まで運ぶ場合、我々はそのトラックを追跡する。そのトラックは 800 ナンバーを付けているので、もし故障が起きたら、我々はその所に留まってそれを警護する。また、連絡すべきある電話番号があって、その機体を安全に収容場所に移動するための支援が直ちに得られる。手順は概略このようなものだ。実際のところ積荷書類があって、そこにはその電話番号が書かれている。そしてある暗語が使われる -- 我々がいつも使った一つを教える; タバスコ(Tabasco)だ。

ET 宇宙機の場合は特別チームがそこに行く。もしそこに生物学的要素がある場合、どうしたらよいか彼らは知っている。我々の大きな関心事の一つは、まったく外来の起源を持つこの生命体による汚染という生物学的なことだった。

私は以下のことを言明する覚悟ができています。私はこの地球で造られたものでない起源不明の宇宙機があった場所(複数)を見てきた。その場所にいたとき、我々はこの地球で生まれたものでない生命体の生存者と遺体(複数)を見た。我々は、それらの生命体との間で、彼らが言うところの“接続(interfacing)”を行なった。人々にある考えを吹き込むための学校がある。私はそこに行った

ことはない。私はいつも拒否した。私が 1990 年に除隊したとき、彼らは私が考え直して除隊を止めるように、2 ヶ月間拘束した。私は 1989 年 12 月 1 日付で除隊の命令を受けたが、彼らはその命令を取り消した。繰り返すが、彼らは規則を犯して私の退役の承認を未決定とし、2 ヶ月間拘束した。それはすでに承認されていたのだ。その目的は残留するように私を説得することだった。

我々はどこかの外国ではなく、他の太陽系に起源を持つ異星人と接触を持っている。私はずっとそれに加担してきた。私はそのために働いてきた。私はそれを目撃してきた。そして私は我々が行なっていることの一部が実に、実に、実に、実に恐ろしいものであることを知っている。彼ら(異星人)は我々に敵意を持っていない。だが我々はこの瞬間にも敵だ。そう考える十分な理由がある。我々は他国が何をするかに関心を持っている。私は自分が時間と闘っているのだと思いついて定めている。我々は宇宙の軍事化に向かってひた走っている。私にはこのことを人々に確信させる時間が残り少ない。宇宙の軍事化が達成されるや、我々の前にはまったく新しい工学技術の世界が明らかになるだろう。

NASA は、我々がいわゆる恒星間旅行を達成するのにあと 1,400 年かかると言う。私は敢えて言うが、今世紀末までに我々はそれを成し遂げるだろう。もし我々が精神を成長させるために何もしないなら -- これを言うのはつらいことだ -- だが、もし我々が精神を成長させるために何もしないなら、我々は恒星間旅行を達成しないだろう。彼ら(異星人)がそれを阻止するだろう。さらに悪いことに、彼ら(異星人)は地球上の人々の前に前触れもなく姿を現すだろう。

我々はこの技術を獲得したい。我々はこの技術を我々の技術の一部としたい。これから 25 年以内に我々は宇宙を軍事化するだろう。宇宙軍事化の結果として我々は新しい技術を獲得し、恒星間旅行を可能にする新技術を発展させるだろう。その結果はそのまま、我々が精神的に成長しない限り彼ら(異星人)の脅威にもなる。

だがもし我々が精神的に成長しないなら、異星人たちがついに我々の前に姿を現す状況を招来するだろう。私はそう感じる。彼らは姿を現す。そして地球人はそれを阻止できない。ET たちは、我々が宇宙の脅威として進出するのを阻止するためにそれをするだろう。これが起きるとき、それは世界中の人々に思いもよらないことで、なんらかの深刻な問題が持ち上がるかもしれない。

[宇宙の軍事化に関するウェルナー・フォン・ブラウンの懸念を語ったキャロル・ロジン博士の証言を見よ。SG]

だがこれは米国だけのことを言っているのではない。それは全世界が知らされなければならない真実だ。その真実とは、人間は孤独ではないということ、我々は他の惑星、他の太陽系の人々の訪問を受けているということだ。

情報関係部門の人々が UFO 情報を機密にしたとき、彼らの意図は善意だったと私は信じる。彼らは幾つかのきわめて深刻で困難な疑問に直面したはずだ：我々は最早宇宙で孤独ではない、この惑星を知性体が訪問している、このことを世界中の人々が知ったらどんな事が起きるか？そこにあつた意図は善意だったと私は考える。国家の情報機関として、軍事応用のためにその技術を獲得しようとするのは当然だ。こうしてその知識は、可能な限り厳重な機密として守られるようになる

— ほんの一握りの人々にのみ明かされる秘密の厳守、つまり特殊接近プログラムだ。しかし、この秘密を守ることはまったくの善意だったにせよ、それは[今]人々を苦しめていると私は思う。

UFO を見ただけの人々を気違い扱いにする権利はどの政府にもない。特定の人々が最後は精神的に追いつめられ、その多くがついに自殺または自滅するのを見ている権利など、どの政府にもない。このようなことが起きているのだから、我々は自らの考えと立場を考え直す義務がある。私の考えは、我々は秘密の壁を打ち破り、真実を明るみに出す責任があるということだ。その真実をいかにして明るみに出すか、我々にはその責任がある。我々は真実を語らなければならない。

そしてこれは怖い話ではない。あなたは ET たちが神の概念を持っていることを知るだろう。あなたは彼らが家族を持っていること、彼らには文化があること、彼らには好悪があることを知る。あなたは我々の間にも、それらと異なるものではない、似たものを見つけるだろう。それはあなたにとって真実への道の始まりだ。我々の現在の問題は、我々が彼らを話題の対象として見ているということだ；驚嘆したりびっくりしたりする対象として。

さて、私の話に戻ると、我々は NBC(核・生物・化学)下士官になるための訓練を修了したばかりだった。私の友人がバージニア州フォートリーまで私を送ってくれた。彼はメリーランド州フォートミードに行くところで、一緒に来いよ、君の基地まで車で送るよ、と言ったのだ。こうして我々はフォートリーまでの道中、UFO について語り合った。

私がフォートリーに戻って数週間後、この友人から電話があり、私はフォートミードにいる彼を訪ねることになった。彼がいるはずのフォートミードに着くと、彼はこれから忙しくて手が離せなくなる、後で解放されたらすぐにそのことを話す、と言われた。この人物は私に、ところで君はペンタゴン(国防総省)に行ったことがあるか?と言った。当時私はペンタゴンに行ったことがなかった。そして彼は、そこは実に特異な場所だと言った。それじゃ君を 25 セント旅行に連れていこう。こうして我々は出かけた。我々は入っていった。私は与えられた小さなバッジを着けていた。それには何の図柄もなかった。だが私に同行した人物のそれには図柄があり、私を連れてきたことは許可されていると警備員に告げた。私を内部へと導くのは常にこの人物だった。ついに我々はエレベータがある場所にやってきた。我々はそれに乗って降下した — どれくらい降下したのか、私には分からない。ペンタゴンの下に延びる階段が 1 段なのか、2 段なのか、15 段なのかは知らない。だがとにかく我々は降下した。我々がそこに着いたとき、そこには二つのモノレールがあった。ペンタゴンの地下にはモノレールがあったのだ。それらは巨大な円筒のようで、中央部がやや太く、それぞれに一つずつあった。つまり、これらの小さなモノレールには弾丸に似た車両があり、前に二人、後ろに二人乗れるようになっていた。我々はその一方のモノレールに乗り、出発した。20 分も乗ったかと思われたが、これは推測ではっきりは分からない。

我々が降りたとき、彼はこの廊下をくだった所にある面白い場所を幾つか見せようと言った。こうして我々は廊下をくだっていった。廊下の遠い突き当たりにはドアがあるように見えた。そのドアにどンドン近づいていったとき、私の案内者は振り向いて、いいかい、物事は必ずしも思われているようなものじゃないよ、とはっきり言った。ペンタゴンの下部にあるこれらの地下施設について、多くの人々は知らないと言っている。ほんの少数だけが、ペンタゴンには地下モノレールがあり、別の場所と接続していることを知っている。彼は次のように言った。それはここにある壁(複数)のようなもの

だ -- それらが必ずしも壁だとは思えない。それで私は言った。それらが壁ではないって、どういう意味ですか？あなたは何を話しているのですか？と私は言った。彼は冗談を言おうとしたのだと思った。そのとき彼は、いや、それは君の後ろの壁のようなものだ、と言った。私が見るとそれは壁のように見える。そこには継ぎ目のようなものは何も見当たらない。そのとき彼は私を押す。私は身体を支えようとするが、そこには実際に開いたドアがある。

そのドアを通過して進むと、そこに野外テーブルのようなものがある。その野外テーブルの後ろに、この小さな生命体があった。その生命体は3フィートよりわずかに大きかった。何度も報道された3フィート半の身長をもつ生命体だった。だがそこにはこの生命体のやや後、両脇に二人の男がいた。辺りを見回しているとき、私はこの小さな生命体の目を真つすぐに覗き込んだ。そのときの感じは次のようだった。私はそれを見ているが、私の心から何もかもが引き出されている -- 彼は私の全生涯を読み取っている。私がそこで実際に感じたことを述べるのは難しい -- その時までの人生がほんの数秒で通り過ぎていく。つまり私はあらゆることを感じていた。

私はしゃがみ、自分の頭をこのように抱えて床に倒れたのを覚えている。次に覚えているのは、目覚めて[フォートミードの]友人の事務所にいたことだ。私がジャックの事務所に戻ったとき、彼らは私に、一日中そこにいただけで何事もなかったと語った。だが私の方がよく知っている。

生命体(複数)とある政府機関(複数)の間には、一つの交流がある。このことをはっきりと述べるために、私はここまで立ち入るつもりだ。今のところ、彼ら(生命体)が我々に自滅のための技術を与えていると述べるつもりはない。彼らの方針はそうではない。地球での彼らの目的は科学的かつ人道的なものだ。

いかに我々がある種の行為を行ない、我々自身を傷つけてきたかを見れば、我々がとても愚かだったことは明らかだ。今我々はこれまで自分自身を傷つけてきた一方で、それを修正しようとしていることに気付いている。まさにこの点で ET たちが調査している一つのことがある。我々の生物圏は損なわれつつある。彼ら(ET)はそれを修復するために来ているのではない。彼らは我々がそれにどう対処するかを見にきている。だが一政府がそのすべての責任を負い、すべての知識と理解を引き受けることはできない。事態を見渡せば、我々は一つの人民、結束した人民として一致団結して取り組まなければならないということだ。我々は前進し、ついには他の太陽系にある他の惑星を訪問する大いなる一歩を踏み出すために、自ら準備を始める必要がある。そして繰り返しこの言葉を使うが、まとまった人民として、惑星地球の人類を代表する人民として、我々は精神的に成長しなければならない。我々を訪問しているすべての種族(ただ一つではない)と各国政府 -- 米国政府だけではなく全世界 -- との間にある種の -- その程度は分からない -- だがある種の対話があるのは確かだ。まずは先進諸国の人々だ。なぜなら、現時点で宇宙旅行を行なっている国家(複数)が彼ら(異星人)の最大の脅威になっているからだ。

最初の頃に私が経験したもう一つの話は、見てはいけないうものを偶然見ってしまったことだ。ある施設にいたとき、友人と私は会見室を見下ろすバルコニーに行った。そこにはプレキシガラスの窓があり、バルコニーと階下に続く部分とが隔離されていた -- 何が話されているかは聞こえない。だが我々は彼らが映画を上映しているのに気付いた。その映画は様々な種類の、我々が今日 UFO と呼ぶものを映していた。それは様々な種類の異星人を映しており、その中には我々によく似

たもの、我々とは著しい違いを持つものがあつた。我々はこちらに上がってきた男たちがいることに気付かなかつた。彼らは、君たちはそこで何をしているか？と言つた。それで我々は、このとおり、軽食堂に行きたくなかつたので、ここに座つてスナックを食べていただけだ、と答えた。彼らは、一緒に来い、今すぐにだ、と言つた。こうして彼らは我々を押し、襟首やシャツをつかみ、押しながら階段を降りた。

階段を降りきると、彼らはまた我々を押しながらドアを出てトラックに乗つた。そのトラックはそこで待っていたのだが、それは小型バンで、彼らは我々をそれに押し込み、ドアを閉めた。そして我々を乗せて走り去つた。彼らが我々をどこに連れていったのかは知らないが、最後に我々が降りた所は、一体構造の軍隊様式の建物だつた。彼らは我々をそこに連れ込み、この部屋に押し込んだ。そこには軍用簡易ベッドがあつた。また照明を取り付けた机が一つあつた。我々は呆然と座つて、なぜ彼らはこんなことをしているのか？と考えた。なぜこんなことが行なわれているのか？

5 日目の夜に、私は外に出て彼らに兵舎まで送られた。私は委細を報告し、ベッドにもぐり込んだ。というのは、私は疲れ切つていてとにかく眠りたかつたからだ。翌朝、土曜日の朝だつたが、私は CQ (Charge of Quarters) つまり当直に起こされる。君はどこにいたんだと彼は言う。なにしろ、私は二人の男の所に連れていかれていたので；一人は善玉のように振る舞つた。もう一人は思いのままにこう言つた。ヤツを信用しちゃダメだと言つただろ。ヤツを連れ出せ。始末しよう。撃つてしまえ。その善玉はこう言う。まあまあ、もう少し話そう。そして彼は悪玉役の男を外にやつた — 保安警察ではよく使う手だ — 善玉警察官と悪玉警察官。悪玉役の男は食べ物を取りに出ていった。

その善玉役はこう言う。聞きたまえ、君はこの UFO に関係した仕事をしたいと思つている。いえ、したくありません、と私は言う。すると彼は、だが君はそれを経験したじゃないか、と言う。君はそれに少しは関係してしまつたのだ。あそこで見たものはまやかしではなかつた、と彼は言う。この仕事をしないか？と彼は言う。我々と一緒に仕事をしないか？私は、いえ、したいと思いません、と言つた。最後に彼はこう言う。いいかい、君はこの仕事をしたい、するようになる、それについてもっと知るようになる、そう彼は言うのだ。今年中には我々が知っていることをすべて公開することになっている、と彼は言う。だが繰り返すが、この世界は安全な場所ではない。技術的な観点と軍事的な立場から、我々はこの国の潜在的な敵が知るよりもさらに多くを知る必要がある。だから君に頼んでいる -- 我々と一緒に働いてくれ。こう言われて私は考えた。なにしろ私は若かつた。私が考えたのは次のことだつた。これは私が実際に身を挺して関わつてきた何かだ。面白いことになりそうだ。ある事柄についてさらに先を知ることができるし、今までの疑問に答が見つかる。私の人生で起きた事件について、もっとよく理解できる。

私は心からこう信じる。一つ、軍は私を必要としている；二つ、彼らは私がこの計画に参加することを望んでいる；三つ、将来いつか私がこれについて秘密を漏らす心配は絶対にない。彼らは私が立証することになるかもしれない事柄を心配していただけた：私が何かほんのわずかの証拠でも握つた場合、それが私の話にどんな影響力を与えるか。彼らは私が軍を飛び出すことを望まなかつたのだ。彼らは私が留まることを望んだ。彼らは私が自ら進んで学校と呼ばれている所に行くことを望んだ。だが私は彼らが学校と呼んでいる所に行くとは決して確約しなかつた。

もし私が学校に行けば、そこには新しい世界、新しい道が開ける、私はそう言われた。だが私に

はそれに同意することが必要だった。またそこに行くためには、進んでそのための書類に署名することが必要だった。だが私はその学校に行く覚悟ができていなかった。私はこの計画に参加しその学校に行った人々を見てきた。はっきり言うが、私は彼らの人格が好きでなかった。そこへ行くと、人は何か特別な人間になる、なろうと思えば人を見下す立場にもなる、この考えが好きでなかった。その道は、新しい世界が開けるはずの道ではなかった。自分がなれるのはせいぜい奴隷で、その逆ではない、私にはそう思えた。

これらの人々の一部は、私が好きな気質ではなかった。私は彼らの態度が好きでなかった。私は彼らのようにはなりたくなかった。私が恐れていたことの一つは、もしその学校に行ったら、私も彼らと同じように変わるだろうということだった。

さて、事件があり、[ET 宇宙機の]回収もあった。だが回収は少なく、めったになかった。その中で1969年に起きた事件はくさび形宇宙機の回収で、インディアンタウン・ギャップ(*ペンシルバニア州)で発生した。私が知るところでは、その日は寒かった。冬だったが雪はなかったと思う。我々は第96民事作戦群で実働演習中だった。私は第96民事作戦部隊の一員だった。私はNBC(核・生物・化学)担当下士官だった。我々が知らされたのは、墜落機に関する事故があり、我々はその回収を支援する必要があるということだった。現れた人物は、我々がどこに行くかを正確に知っており、我々はその集結地に向かった。そこから我々は、インディアンタウン・ギャップにある別の場所に行った。市民やもの好きや、その類に関する問題は何も起きなかった。状況を言えば、我々は回収をしたのだ。私が見ているものは人間が造ったものではない、私はそう気付いた。

我々がそこに着くと、あるチームがすでに待機していた。物体の周りを常に投光照明が照らしていた。私は警報付き線量計 APD27 を持ってその物体にできるだけ近づき、線量を計測するように言われた。それをしていたとき、私は見ているものが地球のものではないと気付いた。私はそれについて感情的になりたくないの、あまり深く立ち入ることをためらう...

ベントウォーターズはもう一つのとても関心を引く事件だ。ベントウォーターズのととき、我々は情報を得るためにそこへ行った。物理的証拠という点では、写真(複数)があった。映像記録もあった。また通常を上回る背景放射線量も計測されていた。それほど高いわけではなかったが、通常を上回っていた。降下地点とされている場所で、我々は幾つか異常なものを見つけた。また木々の頂部がなぎ倒されていることにも気付いた。我々がそこに着いたのは12月も終わりだった。正確に言うと12月28日だった。

[この事件についてのラリー・ウォリン, ニック・ポープ, その他の証言を見よ. SG]

我々は資料を収集した。我々はこれらの資料をリンゼイ空軍基地(*ドイツにあった米国空軍基地、現在は閉鎖)に持ち帰った。我々が入手できたすべての具体的証拠、そこにあったすべての文書記録類だ。レーダーでも捕捉された目撃(複数)があった。英国政府も米国政府もこれらの目撃については知っていた。我々が入手した具体的証拠は、リンゼイ空軍基地に持ち去られた。そこでその資料は整理要約され、SHAPE(ヨーロッパ連合軍最高司令本部)に説明する幾種類かの資料が作成された。SHAPEの誰に説明されたかは知らない。だが我々がそれをする必要があったことは確かだ。その情報はそれから特別伝書便に託された。それはワシントンD.C.地区に近いある空

軍基地に運ばれ、それからバージニア州フォートベルボワに移されたと思う。そこは当時米国空軍戦闘作戦センターの特殊作戦群司令部だった。彼らはこの資料を受け取り、それを処理し、完成された情報資料を仕上げた。

それがリンゼイ基地に行った理由は、そこに米国空軍戦闘作戦センターの作戦地区分遣隊があったからだ。ベントウォーターズに最も近い作戦地区分遣隊はリンゼイ空軍基地にあった。その資料を入手したのは彼らだ。それを米国に持ち帰るまで護送する任務を負ったのは彼らだ。彼らがあれこれ質問をしていた。容赦のない、重要な質問をしていた。彼らはこれに関わった技術要員たちに技術的な質問をしていた。私は、何人かのレーダー操作員たちが質問されたことを確かに知っている。その中には英国人も米国人もいた。

私は 1989 年 6 月、7 月のベルギー UFO 事件にも関わった。我々はベルギー上空を飛行した UFO について情報を評価し、データを収集していた。それらの UFO はドイツ全土の上空も飛び回った。我々はソ連に近い国境である事件を経験した。それが巨大な物体だったためにソ連は非常に動揺していた。それは三角形をしており、一辺がフットボール場約 3 個分の大きさがあった。それはいわゆる緩衝地帯の上空を飛んだ。それが上空を飛んだとき、我々は皆不安におののいた。

それは夏、8 月頃だった。我々は毛髪が逆立つ思いをした。それは恐怖などで身震いする、というだけのものではなかった。ある種の生理学的作用がそこに生じていた。一旦この事件がおさまると、我々は戦闘機に警戒態勢をとらせた。彼らには、ソ連機が緩衝地帯を越えて近づいているので、それを迎撃するのだと通告した。ソ連もまた同じ行動をとった。UFO はソ連領空に引き返し、ソ連はそれを迎撃しようと戦闘機を緊急発進させた。その移動速度は全然速くなかった。だがこの事件があった夜に、それを攻撃した者は誰もいなかった。

撮影された写真(複数)があった。ソ連との間で協議があった。これが進行している間、全員が収容され、説明を受けた。皆が受けた説明とは、ただのロシアのミグ 27 が 1 機緩衝地帯をこちら側に深く迷い込み、問題を起こして警戒態勢がとられることになった、というものだった。だがそれはミグ 27 などではなかった。我々が何を見ていたかは我々が正確に知っていた。我々はフラッシュカード(訓練用教材カード)を持っており、それにはソ連と我々自身の様々な航空機のシルエットが描かれている。

我々が何を見ていたか、私は正確に知っていた。我々が見たものは何にも該当しない 1 機の航空機だった。それは空気力学的な物体ではなかった。それが空気力学的ではなかったと私が述べる意味は、それはヘリコプターのような、目に見える浮力装置を持たず、あのような高さに浮揚する何らの手段も持っていなかったということだ。その手段はそこになかった。それはまったく無音で、ほぼ 3 階建ての高さがあった。私はここから抜け出して家族のもとに帰りたい、普通の生活を送りたい。この事件は私にこうした気持ちをわずかに抱かせた一つだった。この事件は新たな局面を生じた。この事件は発展し、ソ連はベルギー政府を通して米国政府に公式の抗議をした。彼らの懸念は、他の数カ国とともにベルギー当局が、偵察のためにソ連に侵入するステルス航空機の離着陸を認めている、というものだった。我々はソ連に通告し、これについて議論した。我々は少なくともソ連軍事連絡使節団に対して、こう説明した。これは彼らの領域にステルス航空機を送るという我々の企てには何の関係もないと。

ソ連は発生している出来事に危機感を持っていた。実に彼らはそれが我々の航空機だと考えていた。彼らにはそうではないと言って安心させた。我々はベルギー当局に対してそうではないと言って安心させた。ベルギー当局は、彼ら自身の目撃を体験していた。我々はそれをテレビで見たことがある。それらの目撃について人々が知らないことは、そこにはあるとてつもない — 私はそれを隠蔽と呼びたくない — そこにはそれらの目撃に関する特定の情報を秘密にしておこうとする、ある動きがあったということだ。レーダー画面の映像フィルムを修正し、地下に潜っていく UFO を見せる何らかの試みがあった。UFO はそんなことをしなかった。それは地下 600 フィートまで潜ることになっていたと思う。それは事実でなかった。それは目に見えた。人々はそれを見たし、パイロットたちも見た。パイロットはそれを連続追跡した。だがこれらは我々が答を用意すべき質問をさらに増やすものだった。それで我々はこれを報道機関から隠すことに決めた。我々はそれをうまくやった。

[この事件とそれに続く事件を述べた政府文書を見よ。SG]

我々が関わった別の事件は、1976 年 9 月 19 日に起きたイラン事件だ。2 機の戦闘機が同時に故障した原因が実際に何だったのか、これを究明しようと、それらが徹底的に調べられた。我々は目撃があった場所に幾つか異常を見つけていた — そこはパイロットの一人が地表に降下した UFO を見た場所だ。我々はそれらの異常を音声装置で記録した。我々はその場所を映像に撮ったが、そのフィルムには何か奇妙なものが映っていた。その着陸場所で起きたことのすべてを私は知っているわけではない。私はそのすべての情報を持っていない。それは私が関与すべきことではなかった。だが、これだけは言える。何が起きたにせよ、そこには 2, 3 週間は何人がいた。

1986 年だったと思うが、1 機の UFO が 2 度にわたり攻撃された。その UFO は何事もなかったかのように飛び去った。1986 年にはブラジルの航空機の周りを 20 機あるいはそれ以上の UFO が飛び回った事件があった。それらの近くに空飛ぶ輪(複数)があった。これらの記録文書は重要だ。

私が最初の説明を受けた 1969 年までに、回収された UFO はせいぜい 20 数機だった。最大でも数十機にすぎないと我々は教えられた — 1940 年代と 1950 年代初期に数機あった。当時それらの事件が起きた事情を明確にすると、まったくとんでもない話だが、我々のレーダーが ET の誘導システムに大打撃を与えたということだった。そのために、彼ら(ET)は彼らの誘導システムにその対策を講じなければならなかった。

どれくらいの遺体が回収されていたか？知らない。我々が現場に行く前に ET たちが来て彼らの回収を行ない、我々はほんの破片しか入手できなかった墜落事件はどれくらいあったか？知らないが、あったことは確かだ。それは起きているのだ。彼らに問題が発生すると、我々が救難信号を発するように、彼らも救難信号を発する。多くの人々はそれについて考えない；それはこれまで出されたことのない質問だ。ここで繰り返すが、我々は彼らを、そこにあるぬいぐるみの動物のように何か得体の知れないものとする。だが彼らは生きており、あなたや私と同じように肉体を持ち、呼吸する生き物だ。彼らは考え、愛し、好き嫌いがあり、社会的文化を持っている。

それが真相だと人々に理解させるのは、とても重要だ。私は人間の要素を UFO の搭乗者に当てはめて考えたい。私が人間の要素という意味は、彼らは実在の人々だということだ。我々は彼らを

実体とも生き物とも呼ぶ。だが時々我々はこう自問していることに気付く： どちらがより本当の人間か、彼らか我々か？これらは本当に明らかにされる必要がある事柄なのだ — つまり、彼らはあなたや私のような存在だということ。我々は、相違ではなく類似性を探し求め、大いなる理解に到達する必要がある。なぜなら、いずれ遠くない将来、我々は新しい扉を押し開く決定的な接触をすることになるだろうからだ。...

多くの人々はただぼんやりと座って、こう言う。でも彼らの基地はここにはないじゃないか。いや、彼らにはあるのだ。

我々は1970年にカンボジア国境から約7マイルにあるベトナム基地の一つで、大規模な戦闘に巻き込まれた。それについてもっと知りたかったら、私はそれを録音テープにとってある。その録音テープをコピーさせてもよい。申しわけないが、私は実際に話の一部を打ち明けていない。私がそれを話し始めると、人々はそれを追体験することになるからだ。そして人々は理解しない。人々はまったく理解しない。...

ワシリー・アレクセイエフ少将の証言
Testimony of Major-General Vasily Alexeyev
1997年3月

(アレクセイエフ少将へのインタビューを行なったバレリー・ウバーロフ氏と、このインタビューを我々と共有してくれたマイケル・ヘスマン氏に深甚なる謝意を表する)

ロシア宇宙通信センターのアレクセイエフ少将は、最も博識なロシア人将軍の一人と見なされている。彼は、もし地球外知性体が広大な距離を横断する能力を持つなら、彼らはおそらく高いレベルの文明から来るのだと明言する。またそれが本当なら、彼らは人々の間にある、関係の正常な発展に関心を持つに違いない — 破壊的ではなく建設的な進歩に。彼は言う、もし我々が地球の歴史を見るなら、そこには全民族の自滅、殺人と死の物語を見るだろう。進歩した文明はこのような行為に寛容ではないだろうと彼は信じている。なぜなら、彼らの生命は我々と違った意味を持ち、より大きな背景の中で理解されていると思われるからだ。

アレクセイエフ少将は、ソ連の特定の論文に記録された異常な航空機に関する多くの目撃報告を知っている。政府内の様々な部門がこの現象の調査を始めた。その中には国防省と科学アカデミーがある。彼らは、核施設のような先端科学の高度集積場所を含む、各地の上空で見られた UFO に関する多くの報告書を持っている。幾つかの事例で彼らは、意図的に UFO の出現を誘発する状況をつくる方法を学んだ。たとえばこれらの‘接触’においては、彼らが腕を様々な方向に向けると、UFO がそれに応じてそれらの球体を同じ方向に扁平化した。モスクワ郊外で起きた事例では、一人の准尉が、気が付くと着陸した1機の UFO のそばに立っていた。その地球外知性体はテレパシーで彼と接触し、彼に宇宙機の内部に入りたくないかと訊いた。

VA: ワシリー・アレクセイエフ

VU: バレリー・ウバーロフ

VA: ... 基地(複数)から入ってくる情報は、それが単なる話題や噂ではないというだけでも興

味深かった；現象の目撃証人たちがおり、それは特定の記録文書や関係当局の報告書の中で考察された。時にはこの情報はとても興味を引く内容だったので、信じないわけにいなかった。後にこの問題は、最早それほど異様なこととは思われなくなり、国防省のみならず、他の政府部門でも調査されるようになった。このことに対する関心が特に高かったのは、調査のために派遣されたある種の専門家たちの間でだった。特に UFO、それらをそう呼ぶことにしよう、それが頻繁に出現する場所に派遣された専門家たちだ。それに分類されるすべての軍事基地の数を私は知っている。概してそれらは戦略的に重要な目標物、ロケット複合施設、科学実験施設だ。言い換えれば、そこは先端科学の集積場所であり、またある程度危険な場所だ。すべての核(弾頭)ロケット、すべての新しい空軍基地は、科学と軍事の両面において最先端を体現している；それは何よりもまず一つの最高点、人類が到達した頂点だ。そしてそこそが UFO がかなり頻繁に出現する場所なのだ。さらに、この現象を知っていながらそれに対処する方法を指示されていない、その場所の個々の将校や司令官が、彼ら自身の決断で行動し、UFO を調査したり記録したりする。幾つかの場所では、彼らは意図的に UFO の出現を誘発する状況をつくる方法さえ学んだことを私は知っている。UFO は、たとえば“特別な”搭載物の輸送に関係する軍事活動が活発な場所によく出現する。UFO を出現させるためには、このような動きを見せかけで活発化させるか計画するだけで十分だった。つまり、ある種の条件関係が明らかになった。彼らはそれを見逃さなかった。ある実験射撃場では — 最早それは秘密ではないが、その名前を出したくない — 彼らはある種の接触を行なう方法さえ学んだことを私は知っている。どのようにしてそれは行なわれたか？まず UFO が出現した；ほとんどの場合それは 1 個の球体だったが、他の種類もあった。接触は身体的合図という動作を介して行なわれた — たとえば彼らが腕を様々な方向に向けると、その球体は同じ方向に扁平化した。彼らが腕を 3 回上げると、UFO も同じように上下方向に 3 回扁平化した。

1980 年代の初期、当時のソ連指導部の指示により、技術的装置(経緯儀、レーダー基地、その他)を用いた実験(複数)が行なわれた。その結果、未確認飛行物体は確実に測定データとして記録された...

UFO 目撃報告は定期的に入ってきた。国防省、科学アカデミーといった領域の指導部中枢に近いどこかに、この種の情報が大量に蓄積され始めたのは明らかだった。情報は専門家ではない普通の人々のみならず、科学者や専門的職業に就いている人々からも入ってきた。概して軍人は空想する傾向を持たない。彼らは見たもの、起きたことをただ報告する。彼らは信じられる人々だ。忘れてならないのは、この当時はまだ軍備拡張競争、軍備と他の優先事項のための苦闘が進行中だったということだ。科学と技術の新しい発見がひっきりなしに行なわれていた。UFO は新しい何かであり、理解されないものだった。またそれらは何かの情報収集手段かもしれないという考えも実際にあった... だが興味深いことに、委員会から出された公式見解の一つは、最終的な論点の中に含めて、UFO がある地球外文明に属している可能性を主張していた！それは関心を引くものだった！...

仕事の性質上、私は、その当時はソ連だったロシア中の様々な部隊から情報を受け取った。その資料は何の説明も注釈も付けられずに、より上層部の関係組織に回送されたことを私は知っている。UFO 調査に従事するグループ(複数)があることに私は気付いていたし、たぶんそれ以上のことがあったと思うが、当時この問題の機密レベルは、受け取った情報はそのまま上層部に送るといようなものだった：人々は私の所に来たが、我々は軍人だったので、何の説明もなされなかつ

た。彼らが言ったのは、あれこれに関心を持っている、ということだけだった。彼らは、これまで記録されたあらゆる種類の UFO の絵の表を用意した。それらは約 50 種類あり、楕円体、球体から宇宙船に似たものまであった。目撃証人たちは、どれにそれは似ていたかと訊かれ、それから彼らはその場所などを特定した。その後その資料は次に回された。だから、その仕事はどう継続されたか、それがどこまで科学的に行なわれたかは分からない。ある種の仕事が国防省、科学アカデミー、情報諸機関で継続されていたことを私は知っている。だがその状況はと言えば、調査に直接関係しない人間は、何が行なわれているかを知らなかった。我々は情報を供給するだけだった。大変な量の情報があつたと私は認めざるを得ない。ここモスクワ周辺にある、多数の防空基地、実験射撃場、その他の軍事施設の上空 — これらは UFO が最も頻繁に出現する場所だ。...

これは地球規模の問題、地政学的なものだ。米国や他の国々は、この種の情報を大量に蓄積しているはずだ。今日では相当量の情報があると私は確信している。いずれにせよ、この問題は、熱核兵器と同様に、地球規模の問題だ。環境とエネルギー資源に対する我々の観念の貧しさ、つまり持ち上がっている生態系問題を考えると、その問題には人類の生存がかかっている。我々は酸素を使い尽くし、その他にも多くのことを行なう。結局のところ、我々の末路はどうなるのか、またこれらの進行がどの程度不可逆的なのかは分からない。問題の解決方法を見つける必要がある；何らかの突破口があるに違いない。これらの問題を考えるとき、UFO の研究はある新しいエネルギー形態を我々に明らかにするか、少なくとも一つの解決策に我々を近づけるかもしれない。それゆえに、UFO と深く関係している諸問題とそれに付随するすべての現象は、全体的に見ると全人類の関心事だと私は信じている。だから関係ある地位にいる我々の指導者たちは、状況を真剣に考え、受け入れ可能な解決策を見つけるべきである。多くの傑出した世界的科学者たちは、そのような取り組みの必要性を語ってきた。どうしてそれが実行されないのか分からない。... 今日多くの国々は、科学とこの問題の研究において一定水準に達している。我々は一定の結果を得ているので、現在の課題は何らかの単一の機関をつくり、この問題についての我々の全知識を結合することだ。そうすることで、物事はより容易になると私は信じる。アメリカ人は興味深い何かを得ているし、我々もそうだ。結論は得られており、データも集まっている。年月もまた多く経過した。今それらはどこかに“棚上げ”されている。おそらく一つのを別のものと組み合わせるだけで、問題全体がまったく違った光の中に姿を現すだろう。...

我々にはモスクワ郊外で起きた一つの事例がある。二人の准尉が外に出るように内部からせき立てられるのを感じた。そのうちの一人は、自分がまさにある飛行装置の着陸地点にいるのに気付いた。彼は精神的な接触をした — 言葉のレベルではなくテレパシー、つまり想念だ。彼は宇宙船に招待されたが、恐怖か何かの個人的な理由により、それを受け入れることができなかった。後に彼はその宇宙船の興味深い絵を幾つか描いた。私はそれらの説明書きと、彼らが見たものを描いた絵を見た。彼らの説明はその報告書に付録として付けられた。また当直士官たち、その副官たち、警備に就いていた徴集兵全員による絵も追補された。すべての説明は、その場所と時刻に関して矛盾がなく、飛び去った宇宙船の絵には多くの共通点があつた。...

私が特定の人々、目撃証人たちから数年間にわたり、また様々な地域から集めた膨大な記録文書資料を目の前にしたら、人々の UFO に対する考え方は必然的に変化するだろう。私自身、何枚かの写真を持っているのだ。...

現在の科学では説明できない、似たような多くの事実がある。まるである種の知性がそこに働いているようだ。

VU: あなたはどう思われますか — UFO(複数)は他の文明(複数)を代表していますか？

VA: もし彼らの文明レベルが、おそらく物質の別の形態をとりながら、広大な距離を横切って宇宙を移動することを可能にするものなら — 真相はまさにそうなのだが — 彼らの発達レベルにおいて問題を見たとき、彼らもまた人々の間の正常な関係、ある種の進歩、最終的には知的生命体の存続、もしそれが存在すればだが、これらを心配するだろう。もし我々はその観点から地球を見るなら、我々のこれまでの歴史は、創造ではなく自滅の物語だ。それは全民族の殺人と死の歴史だ。真に文明化された社会でそれを容認するものは皆無だろう。生命には別の意味がある。正常な人間だったら子供が溺れていたら通り過ぎることはできない！子供は未来だという理由だけでも、我々は子供を救う。文明のレベルが高いほど、その認識の度合いは大きい。もし個人レベルでそうだとすれば、文明のレベルにおいても同じことが言えるだろう。だがそれでも彼らは干渉しない。なぜなら、ある法則によりそれぞれの文明は独立に発達しなければならないからだ。自然な進行に外部から干渉することは常に危険な行為だ。だがある種の修正は、明らかに高度知性体の計画に含まれる。それは、我々が文明の歴史を終焉させようとするとき、その崩壊過程をそのままにしない。

米国空軍(退役)／国家偵察局諜報員 ダン・モリス曹長の証言

Testimony of Master Sergeant Dan Morris, USAF (Retired)/ NRO Operative

2000年9月

ダン・モリス曹長は空軍の退役職業軍人で、多年にわたり地球外知性体プロジェクトに関わった。空軍を去った後、彼は超機密の国家偵察局、NRO に採用された。そこで彼は地球外知性体関連専門の作戦に従事した。彼はコズミック最高機密取扱許可(最高機密よりも38レベル上位)を持っていた。彼が知る限り、このレベルの権限を持った米国大統領はこれまで一人もいなかった。証言の中で彼は、NSA(国家安全保障局)が実行した暗殺について語る；彼は我々の軍がいかんにしてロズウェルの近くで起きた1947年のET宇宙機墜落を引き起こし、ETの一人を捕らえたかについて語っている。捕らえられたETはロスアラモスで死ぬまで3年間拘束された。彼はET/UFO事件の目撃証人に対する脅迫、信用の失墜、さらに抹殺まで受け持つ情報機関チームについて語る。彼は第二次大戦をさえ遡るドイツによるUFOの再設計についても語る。彼はまた、我々の今日のエネルギー危機について語る — もしフリーエネルギーが開発されていたなら、我々は1940年代以来化石燃料を必要としなかった — だがそれは人類から隠されてきた、ということについても。これがET/UFO問題を秘密にしておく真の理由だ。“今権力を握っている人々が我々に知られたくないのは、このフリーエネルギーが誰にでも利用できるということなのだ”最後に彼は、宇宙の軍事化とET宇宙機の墜落に対して警告する — これは彼らを報復へと向かわせるかもしれない。そうなれば我々の破滅だ。

私は最高機密よりも38レベル上位のコズミック機密取扱許可を持っていた — すべての機密取扱許可の最上位だ。これはUFO、異星人などを対象とする。かつてそのレベルの機密取扱許可を持った大統領はいなかったし、現在でもそうだ。アイゼンハワーは最もそれに近かった。まず幾つかの情報機関がある — 陸軍がそれを持っているし、海軍にもある。それから幾つかの秘密情報

機関がある。存在していなかった機関、それほど秘密だったが、その一つが NRO だった。人々は NRO について言及することができなかった。それは国家偵察局 (National Reconnaissance Office) だ。そのレベルになると、次には ACIO と呼ばれる、ある世界規模の機関がある。これは異星人接触情報機関 (Alien Contact Intelligence Organization) だ。その地位を何とか得て規則に従えば、あなたの政府はその機関の情報を利用することを許される。一部の人々はそれをハイフロンティア (high frontier) と呼ぶ。海軍情報局は時々彼ら自身をそう呼ぶ。彼らはすべて一体となって働く。空軍情報局、海軍情報局、および NRO はすべて以前バージニア州ラングレー空軍基地のある部門にあった。また衛星データ分析者の大部分はそこにいた。空軍、陸軍、海軍の情報分析者の大部分もそこにいた。そこは彼らが働き、分析していた場所だった。

さて、アイゼンハワーは誰かにそれを統轄させたかった。彼は CIA 長官にやらせようとした。だがそれはうまくいかなかった。CIA は第一に自分自身のために働いた。大部分の情報機関は自らのために働いた。それで彼はこう言った。“独立した文民組織がよい。我々の一流科学者の中から選ぶ” こうしてそれが組織されたが、NRO という名前は何年もの間秘密にされた。

それが自立し始めたのは 1968 年頃だった。それ以前の戦時中には OSS、つまり戦略諜報局があった。その大部分はスパイ兵だった。つまり、軍のある部門から集められ、OSS のもとに組織された機関だった。私は OSS でスパイをしたことはない。私は空軍情報局にいた。もう一つ私に高い機密取扱許可を与えたものは、私が CONRAD (Committee on Radiology; 放射線委員会) 諜報員だということだった...

こうして私が空軍を退役したとき、私がこの事柄の一部を知っていたことを彼らは知っていた。彼らが私に、やはりその事柄を知っている誰かのために働く機会を与えた理由はそれだった -- つまり NRO だ。

国家安全保障局 — 殺し屋がその中で働いている。‘問題’を除去する必要があるが生じたら彼らは... 彼らはそういう連中だ。もしあなたがジェームズ・ボンドを知っているなら、彼らはダブル・オー・エージェントだ、この意味が分かればだが。そして国防長官フォレストル (*James Forrestal; 初代国防長官) は情報 (*ロズウェル事件) を公開しようとして消された、本当に実力のある最初の人物だった。そして誰もこの罪を償わなかった。あの犯罪で彼に何が起きたか、その徹底的な調査を軍が実際に行なったことはなかった。だがほとんどの人々は、彼が病院の窓から投げ落とされたことを知っている — 彼は窓から投げ落とされて殺されたのではなかった。ベッドの中ですでに死んでいたのだ...

知っていることのために消された人々が他にもいる。その一人は私の友人フィル・スナイダーだった。彼はここニューメキシコでトンネル建設のために働いた — 彼が関わった最大のものはダルシー地下施設だ...

私が知っているのは、フィルはこの国を愛しており、これらの計画が我々の政府を無視して行なわれていると考えたことだ。その建設と同じく、進行していた極秘プロジェクトがあまりにも多かった。そのどれもが我々の議会の承認を受けていなかった。

[クリフォード・ストーンの証言を見よ。SG]

議会はこれらの極秘プロジェクトのどれについても可決したことはなかった。それで彼は、米国民は彼らの税金が何に使われているのか、また何をすることができるのかを知る権利があると考えた。そして彼は語り始め、取り除かれた。..

私自身のことだが、私は 73 歳だ。私はよい人生を送ってきた。悔いはない。私はこの国を愛しており、11 歳頃からずっとクリスチャンだ。だから私は、神はこれが知られることを望むと信じている。宇宙はこれが知られることを望むと信じている。もし我々が秘密を止めさせなければ...我々はそれを深い秘密のままにしておくことで、人々に多大な被害を与えている。私はそう考えている。もし我々がそれを止めさせなければ、他の誰かがそれをするだろう。この惑星外の誰かが。私は、この 50 年間我々とともにあった人々の誰かが、秘密を止めさせると信じている。..

さて、下にいた二人に私は言った。“カメラを持っているか？ — 空軍公式カメラだ。外に出て写真を撮れ。外に出て見たことを私に話してくれ” 彼らは戻ってきて言った。“外に UFO が編隊を組んで静止しています！” 私は言った。“分かった。写真を撮れ。カメラを持って写真を撮れ” 私は別の二人にレーダー・カメラのスイッチを入れるように言った。我々にはレーダー・カメラ(複数)があり、それでも写真が撮れたからだ。

だから、そこで起きたことは間違いのない出来事だった。我々がいた建物は一つの側壁全面がガラスのフレンチドア(*観音開きの扉)になっており、もしレーダー・スコープをセットすれば外側を眺めることができ、そこに UFO がいたのを見ることができた。そこで私は本部を呼んだ。私—“我々は接触している” 彼—“SAC(戦略空軍)が君に逆らって何か実行しているのか？” 私—“SAC ではない、SAC ではない” 彼—“では何だ？” 私—“コズモス(Cosmos)” 彼—“ちょっと待ってくれ。電話で説明してくれ” 盗聴防止のためのスイッチがあった。私—“よろしい、こちらの電話は盗聴防止をかけた。そちらは？” 彼—“こちらも盗聴防止をかけた。どういう意味だ、地球外接触をしたというのか？” 私—“外で 3 機の UFO が静止しているんだ” 彼—“写真を撮っているのか？” 私—“我々は写真を撮っている” 彼—“レーダー写真は撮っているのか？” 私—“我々はレーダー写真を撮っている。本物の写真だ” 彼—“よろしい、もう何も言わなくていい。そこに諜報員を一人送る。6 時間後にはそこに着くはずだ。彼にすべてを任せろ” それで私は言った。“分かった” こうして約 6 時間後に彼がやってきた。我々は彼のためにすべてを厳重封鎖した。我々は彼にそれを引き継いだ。彼は航空実験地上司令部(Air Proving Ground Command)に引き返す。我々には、これらの写真を彼らが受け取ったと公式に通知されることはなかった — それはあたかも起きなかったように秘密、極秘になった。だが我々はその写真(複数)のコピーを持っていた。それで私はその 5 人にこう言った。“よし、君たち。ここに全員分のコピーがある。君たちの孫のためにそれを持っていてくれ。..”

我々がなぜ核兵器の爆発を停止したか、ご存じか？我々はオリオンから来たあの ET たちにそうするよう命令されたのだ。オリオン— 彼らは降りてきて、我々にこう告げた。“地球人よ、君たちは君たち自身を滅ぼしかねない。我々はそれに耐えられない。君たちはそれをするかもしれない、君たちはこの惑星を爆発させるかもしれない、君たちは今やその能力を持つに至った。..” 我々が実際に彼らの注意を引いたのはこのときだった。彼らは降りてきてこう言った。“地球人よ、君たちが君

たちの惑星を破壊するのを黙って見てはいない”だから我々は君たちがすべての核実験を停止することを望む。彼らはすでに我々に兵器の使用を止めさせた。それから彼らは我々にこう告げた。“これ以上核実験をやるな”さてロシアと米国だが、そのときまでに我々は、これらの人々は言ったことを実行することができる、そう信じて疑わなかった。人々は、彼らが大挙してワシントン D.C.上空に飛来したのを目撃した。我々はジェット機(複数)を発進させ、彼らを追跡させた。そしてジェット機が上昇するたびにその UFO 群は素早く消えた。あるいは別の次元に移った。ジェット機が基地に戻ると、その UFO 群はワシントン上空に戻った。彼らは何をするつもりか？とワシントンの誰もが恐怖に怯えた。

起きたことは、高出力レーダーが彼らの安定性を妨害することを我々が発見したことだ。なぜなら、彼らが高度を下げ低速になったときに、その増幅装置と安定化装置の機能が低下するのを見ることができたからだ。低空低速のときにはレーダーが UFO に影響を与えていた。我々はすでにそれを知っていた。我々は 1947 年に彼らが墜落する前からそれを知っていた。我々のレーダーの大部分はどこにあったか？ホワイトサンズ、そしてロズウェルだ。ロズウェルに配備されていた人々は誰だったか？世界で唯一の核爆弾部隊だった。だから彼らは関心を持ち、我々はそこに多くのレーダーを設置した。何とかそこを防護するつもりだったからだ。そこで我々は何基かの巨大な高出力レーダーを彼らに向けて照射した。これは彼らのうちの 2 機が接触する事態を引き起こした。1 機は降下して農場に着陸した。他の 1 機は土手に突っ込み、我々がそこに着いたときには、二人の異星人が外に横たわっていた。そのうちの一人は負傷しており、もう一人はそのとき生存していた。我々が彼(負傷した一人)をどこかに移動しようとする前に、彼はすでに死亡していた。だがもう一人は、我々がこちらのロスアラモスで約 3 年間生存させた。

彼は病気になった。我々は可能なすべての周波数帯を使い、あらゆるメッセージを発信した。彼が病気であること、我々がそれを引き起こしたのではないこと、もし望むならこちらに来て彼を連れ帰ってもよいこと、などだ。だが彼らが来る前に彼は死亡した。それでも彼らはやってきて彼の遺体を引き取った。彼らがワシントンに行き、ワシントン上空にあの編隊を現したのはこのときだった。こうして彼らは遺体を回収したのだ。

以前に我々は 1 機を撃墜し、非難を受けていた。だが我々とロシアの核兵器に取り囲まれている状況下で、我々がしたことは何であったとあなたは思うか？我々は防衛線として核兵器を宇宙に配備したのだ。もし彼らが何かを始めたら、我々は彼らを吹き飛ばす構えだった。...

私はその情報を調査し収集するグループの一員になった。最初にそれはまだブルーブック、スノーバードやその他の秘密プログラムの傘下にあった。人々が何かを見たと言ったとき、私は彼らに訊問し、彼らが何も見なかったか見たものは幻覚だったことを納得させようとした。それで効果がなかった場合、別の一団がやってきてあらゆる脅しをかける。そして、彼らとその家族を脅したりする。彼らの仕事はその人々の信用を落としたり、いかれた人間に仕立て上げたりすることだ。さて、それでも効果がなかった場合、また別の一団がいて、どうにかしてその問題に終止符を打つ。...

だから、作り話が意図的に流され、次にそれが暴露された。情報と偽情報が 50 年間存在し続けている。

機密保全誓約に署名した大多数の人々からの支援が必要だ — 彼らが秘密を守り続けなければならぬ理由は、この誓約だ。ご存じのとおりだ、グリア博士。そこから我々を連れ出して欲しい。これは明らかにされる必要がある。

ドイツは以前に 2 機の UFO を回収した。1931 年、1932 年の事だ。彼らはそれらをドイツに持ち帰り、我々がやるように、その再設計を開始した。彼らは前進し、戦争がまだ始まらないうちに 1 機の動く UFO を持った...

我々の記録保管所にはそれを示す多数の写真、記録映像がある。そして戦後我々はドイツからさらに多くを入手した。というのは、我々はフォン・ブラウンだけでなく、シャウバーガーと UFO を研究していた彼らの電磁気学専門家たちの何人かもこちらに連れてきたからだ。シャウバーガーのおかげで我々は誰よりも先んじることになった。

さてロシアも何人かを連れていった。だが我々がその主要部を入手した。シャウバーガーはここニューメキシコにいた。そしてホワイトサンズやニューメキシコ周辺の他の場所で我々を手助けした。その後彼は、我々から不当に扱われていると感じて帰国し、その 2 週間後に命を奪われた。

UFO には地球外のものと地球人が造ったものの両方がある。UFO に取り組んでいる連中のことだが、彼らは眠っていなかった。タウンゼント・ブラウンは我々側の一人で、ドイツ人たちと一緒にほとんど起きていた。そのために我々は一つの問題を抱えた。我々はタウンゼント・ブラウンを手元に引き留めておく必要があった — 彼は反重力電磁気推進の秘密に取り組んでいたのだ。テスラの時代にまで遡って、我々は変換可能なフリーエネルギーを手にしていて、やるべきことはただアンテナを 1 本立て、1 本の杭を地面に刺すことだった。そうするとこの家に明かりを灯し、必要なすべてのエネルギーを得ることができた。だが我々は何に頼っているか？前世紀を通して、我々は石油を燃やしてきた。この世界で誰が石油を支配しているか？多くの人々はイラク、イラン、等々がそれだと考える。彼らではない。我々がそれを支配している。我々と英国の勢力だ。一部の人々はこれを秘密の政府と呼ぶ。世界のある富裕層グループが石油を支配している。そして内燃機関を持たなければ石油は不要だ。もし人々がこれらの装置の一つ、それはおよそ長さ 16 インチ、高さ 8 インチ、幅 10 インチだが、これを持てば電力会社にコードをつなぐ必要はない。これらの装置は何も燃やさない。汚染もない。可動部分がないから決して摩耗しない。動くのは重力場、電場の中の電子だ。それらは反対方向に回転する。いいですか？これを車に取り付ける — 車はそれが摩耗する前に錆びたり転倒したりする。だから石油に依存している世界経済にそれはどんな影響を与えるだろうか？

何千年もの間他の惑星(複数)に住んでいる人々がいる。このことを我々の政府と世界が我々に知られたくないのではない。今権力を握っている人々が我々に知られたくないのは、このフリーエネルギーが誰にでも利用できるということなのだ...

米国民はその政府よりも強し、これは当然のことだ。私はそれを信じているし、そう決意するに至った。米国民は真実を知るために立ち上げられるし、また真実を知るべきだ。それが私が名乗り出た一つの理由だ。実現できるもっとよい生活がある、私はこのことを人々に知ってもらいたい...

ご存じのとおり、南アフリカ政府は彼らが1機のET宇宙機を回収したことを認めている。彼らはそれを隠そうとしない。彼らは一つの記録映像を流したが、その中で一人の巡査部長がそれを回収したと述べている。さらに回収の映像などが映し出されている。さて、私が読んで知るところでは、ある合意が我々の政府と彼らとの間で取り交わされたという。つまり、彼らが最初の核兵器を開発し使用することについて、米国政府は何も言わない。もし国連において我々が彼らを支持できなくなったら、我々は沈黙を守る。その代わり、彼らは我々にそのET宇宙船を渡す。我々はそれに合意し、彼らはそれを実行した。我々はC-5Aギャラクシー(*大型輸送機)をそこに飛ばし、その宇宙船と船内から運び出された二人の異星人を持ち帰った。それらはオハイオ州デイトンのライト-パターンソン基地に行った。我々が回収したものの大部分は通常そこに送られる。そこは地下8層になっており、そこに回収物を収容する。

そうすると、今誰が我々の敵なのか？異星人が今の我々の敵だと人々に信じ込ませ、その考えを広めようとする勢力がある。どの公式記録を読んでも、その証拠はない。そこに述べられていることは、彼らは攻撃されない限り攻撃したことはないということだ。ここでロシアが関係した一つの例を話しておきたい。この事件には息子が空軍のミグ戦闘機パイロットをしている一人の提督が出てくる。我々は1機のF-18をアラスカで飛ばしていた。そしてロシアは彼らのアナグマとビーバーを放とうとした。つまり彼らはミグ(複数)を発進させようとした。それでアラスカにいる第21戦闘飛行隊だが、上昇して彼らを迎撃しようとした。彼らは皆武装していた。幸いに誰も発砲しなかった。我々の管制官は、これらのミグが入り乱れているとき、その中に別の船(飛行体)が入ってくるのを見た。我々の管制官はロシア人たちがこう言うのを聞いていた。“あの船を迎撃せよ”彼らはそれを船(ship)と言った。それは我々が、あるいはロシア人たちが知っている何物でもなかった。そして2機のミグが迎撃を開始した。我々のパイロットは管制官にこう言われた。“その場を離れよ。見える距離を保て。だがその船を迎撃するな！”ロシアの戦闘機(複数)がUFOに照準を定めた兵器を作動させるや否や、そのミサイルは両方とも、このようにして一つずつ破壊された。我々のパイロットは攻撃を受けずに帰還した。この話をしたのはあるロシアの二つ星将軍だ。彼らはこの話を息子から聞いたその提督にも会見した...

異星人たちは、我々が彼らに対して兵器を建造しようとしていることに気付いていると思う。そこで、私が言いたいことはこうだ。我々には確かに一つの防御手段があり、彼らの一部を撃墜する能力がある。我々はその能力を発展させた。アイゼンハワーは米国民に向かって警告を発した。“軍部と兵器製造業者に権力を渡すな”彼はそれをいつも恐れていた。彼の最後の演説を見れば分かるが、彼はそのことを国民に語った。彼らをあまり強くさせるな。だから、我々は目覚めるべきだ。我々はこれまで何機かのUFOを撃ち落とそうとしてきた。そしてそれに成功してきた。我々はニューメキシコ州ホワイトサンズで1機を撃墜した。我々はあの日それを追跡しており、それに損傷を与え、墜落に至らしめた。そして、そうだと。それには数人の異星人が乗っていたのだ。我々は彼らを拘束した。これが起きたのは1968年か1969年で、南アフリカがそれをやった頃だった...

我々にはもうロシアの脅威はない。だが、もし我々があの異星人たちを攻撃し続ければ、我々は彼らから脅威を受けることになる。我々はこんな行為を止めなければならない。我々の政府がああ異星人たちを撃墜しようとするのを止めるよう、我々は要求すべきだ。我々は皆協力すべきだ。

ロッキード・スカンクワークス, 米国空軍, CIA 請負業者 ドン・フィリップス氏の証言
Testimony of Mr. Don Phillips, Lockheed Skunkworks, USAF, and CIA Contractor

2000年12月

ドン・フィリップスは UFO(複数)がラスベガスの北西, チャールストン山の近くを猛烈な速度で移動しているのが目撃されたとき, ラスベガス空軍基地で空軍に勤務していた。また彼はケリー・ジョンソンとともにロッキード・スカンクワークスで働いた - U-2 と SR-71 ブラックバードの設計と建造のためだった。我々はこれらの地球外起源の装置を持っているのみならず, それらの研究から途方もない工学技術上の進歩を成し遂げた, 彼はそう証言する。彼の証言によれば, 1950年代と1960年代に NATO(北大西洋条約機構)は, ET 種族(複数)の起源に関する調査を行ない, 様々な国の指導者たちにその報告書を送った。フィリップス氏はさらに, 1954年にカリフォルニアで行なわれた ET と米国の指導者たちとの会談に関する記録と映像資料があると語る。彼は ET のお陰で我々が開発することができた幾つかの工学技術を挙げる: コンピュータチップ, レーザー, 暗視技術, 防弾チョッキなどだ。そしてこう結論する。“これらの ET に敵意はあるか?もし彼らに敵意があったとすれば, 彼らの兵器でとうの昔に我々を破壊していただろう - あるいは何らかの損害を与えていただろう” フィリップス氏は今, 環境汚染を除去し, 化石燃料への依存を減らすことができる技術を開発している: 地球から取り出せる自然エネルギーを使うエネルギー発生システムだ。

DP: ドン・フィリップス氏

SG: スティーブン・グリア博士

DP: エンジェルスピークは秘密のレーダー施設だった。我々はそれらを知っているが, 多くのレーダー施設は辺鄙な場所にある。我々はラスベガスからエリア 51 に入ってくる航空機, またはそれが何であれ, そこを通過するあらゆるものを監視していた。そしてある夜, その何かが通過し, それは最も関心を引く一夜となった。1966年から1967年のことだ。その夜, 私は午前1時頃に大きな騒ぎを聞いた。

我々は 8,000 フィートにいた: レーダードームはおよそ 10,500 フィートにあった。それで私は起きて主要道まで歩いて登ることにし, 私の事務所近くまで来た。そこに同僚たちが立っていた - そこには 5 人ほどのグループがいた - 彼らは空を見上げていた。それで私も空を見上げ, これらの物体を目にした。光を發し, とてつもない速度で移動している... まさにそのとき, これらの物体が鋭角を描き飛行するのを私は見た。速度は時速 3,000 から 4,000 マイルと推定された。そして瞬く間に急な方向転換をした。これらは我々の物体ではない...

まったく突然に, それらは数百マイルはあろうかと思われる天空を横切って西へと集まったように見えた。それらは輪になり, 旋回し, 消えた。何と見事なショーだ, 私はそう思った。

その保安軍曹はたまたま任務に就いていた。我々は皆互いに顔を見合わせ, これは確かに現実のことなんだと言い合った。そしたら軍曹が, いいか, これについては何も話すな, と言った。

ところで, 私には主任レーダー操作員をしていた一人の友人がいた。アンソニー・カザーという名前だ...

彼の顔は紙のように蒼白だった。彼は階段を一步降り、私を見上げてこう言った。君はあれらを見たかい？私は言った。見たとも。我々はそれを見ていたんだ — 何人かはそれらが消えるまで 4, 5 分間は見ていたよ。自分が見ていた時間は 90 秒よりやや長かったな。彼は言った。我々はそれらをレーダー画面で見たし、記録もした。あれらはお化けじゃないし、幻影でもない。あれらは現実の確かな物体だ。我々が使っている種類のレーダーに映るからには、それは現実の物体でなければならなかった。そしてそれを我々のレーダーは追跡しなかった — それらはレーダーに映ったり消えたり、そんなふうに映像を残した。彼は最終的に 6 から 7 個を記録した。我々が推定した速度は、レーダー操作員もレーダースコープを使って推定した。

SG: 彼らが推定した速度はどれくらいでしたか？

DP: 彼らは、時速に換算して 3,800 から 4,200 マイルと推定した。これらの物体は大空を横切って矢のように飛んだ。最初それらは 1 個の星のように見えた。そしてあらゆる方向に動き、あらゆる種類の直線運動をし、あるいは静止した。 . . .

これらの UFO は巨大だった。それらは停止し、その後で 60 度、45 度、10 度といった方向転換をした。そして瞬く間にこの動きを逆転させた。 . . .

SG: あなたがロッキード・スカンワークスにいたとき、反重力推進システムの研究が行なわれていると聞いたことがありましたか？

DP: あなたが訊ねている推進システムの研究だが、それが確かに存在していると私は耳にした。だが、右手がしていたことを左手が知ることは決してなかった。それには正当な理由があった。 . . .

我々が持っている 1954 年の記録によれば、ここカリフォルニアで我々の指導者たちと ET との間で会談(複数)が持たれた。書かれた記録資料から私が理解するところでは、彼らはここに来て研究することを許可するように要請したという。それに対する我々の返事は次のようだったとそれには書かれていた。これほどの進歩を遂げているあなたたちを、私たちがどうして止められるだろうか？そして、私はこのカメラ、録音を前にして述べる。この会談を持ったのはアイゼンハワー大統領だった。それは映像に残っており、ちょうど我々が今日行なっているようなものだった。それについての最新の NATO 報告書には、12 の種族がいたと述べられている。これらの種族は何者なのか、何をしているのか、何をしようとしているのか。これらを理解し、状況を最終的に要約するために、彼らはこれらの種族と接触する必要があった。 . . .

これらの地球外の人々に敵意はあるか？もし彼らに敵意があったとすれば、彼らの兵器でとうの昔に我々を破壊していたか、何らかの損害を与えていただろう。 . . .

彼らが墜落した原因は、彼らの誘導装置が我々のレーダーと我々が持っているある装置により干渉を受けたということだ。

私にとりさらに明らかなことは、我々の民間会社、ライト・シティ・テクノロジー社の契約科学者の一人が、これらの技術に取り組んでいたということだった。彼はこれらの幾つかの技術に取り組んで

いる一方で、米国政府のあるとても有名な情報機関にも属していた。

軍または政府のレベル以外で私が語った相手は、SG(スティーブン・グリア博士)だ。そうした理由は、彼がそれに専門的な手法で取り組んでいるということだ。それは我々が軍でとった方法と一致している。

ET のレンズについて：宇宙飛行において宇宙にはわずかな光しかないことを、現在我々は知っているが、その中で物を見るための眼球被覆物が幾つかあった。これらのレンズは光を増幅するだけでなく、ある種の透明性も持っていた。私がこれを述べる理由は、彼らにそれを外させ、これらのレンズを研究したのは、地球の医師と専門家たちだったということだ。

この多くはコース大佐により文書で十分に立証されてきたと私は思う。ご存じと思うが、誰が彼と一緒にいたか？そのとおりだ。多くの人々が彼の周りにいた。だが、コース大佐が書いた本の中で言われている多くを私は立証できるし、今までずっと私と一緒に仕事をしている人々により裏付けられている。だから私は、それについて私が知っていることは真実だと言える。その情報が伝わってきた経路についてはまた別の問題だ。我々は隠蔽されている技術について語っている。なぜ彼らはそれを人々に知らせないのか？まさに彼らはそれを一般国民から隠している。つまり、その幾つかにはおそらく十分な理由がある。

政府自身それを理解しなかった。空軍にいながら、たぶん我々もそれが何だったのかはよく知らなかった。ロズウェルからそれらの技術を引き出した後、それから何を作り、いかにして産業に組み込み、いかにして人々の役に立てるか、それを知るまでにその作動原理を解明する時間が暫く必要だった。...

一人の同僚科学者から私はあることを学んだ — 私が最大級の尊敬の念を抱いている人物だ — 彼は CIA にいた。彼はこう言った。我々が最初にはっきりさせたいことは、どの計画であれ、それを推進しているのは誰かということだ — これが私が CIA でやったことだ。

では、誰が推進者か？何が動機か？なぜそれが行なわれているのか？我々が最初に話したすぐ後で私は訊ねた。なぜスティーブン・グリア博士はこれをしているのか？私は私の調査を行ってきた — かなりの量になるだろう。そして何が起きているかを見つめてきた。あなたは自分がしていることに打ち込んでいる。そして専門的職業を持っている。私が今夜ここにいる理由はそれだ。あなたと話している理由はそれだ。...

さて、SG(スティーブン・グリア博士)。私が 1998 年にこの技術会社をつくった一つの目的は、有害物質を除去できるこれらの技術を開発することだった -- 空気を浄化することができ、化石燃料を大量消費する必要性をなくすか、さらにそれを効率化するのに役立つ技術だ。そうとも、時期が来たのだ。私が個人的にあなたに言えるのは、それはすでに始まっているということだ。

我々が何を考え出したか、私は立証できる。我々はそれを立証できる。...

米国海兵隊(退役) ビル・ユーハウス大尉の証言
Testimony of Captain Bill Uhouse, USMC (ret.)

2000年10月

ビル・ユーハウスは戦闘機パイロットとして海兵隊に10年間、また新型実験航空機の飛行試験をする民間人としてライト-パターソン空軍基地の空軍に4年間勤務した。その後の30年間は、国防関係請負業者(複数)のために反重力推進システムの技術者として働いた: 新型航空機の飛行シミュレータ(複数) — そして実際の空飛ぶ円盤(複数)。彼は証言する。彼らが試験した最初の円盤は、1958年にアリゾナ州キングマンで墜落したET宇宙機を再設計したものだ。さらに彼は、ETたちは米国政府に1機の宇宙機を提供したと証言する; この宇宙機は当時建設中だったエリア51に運ばれ、その宇宙機に搭乗していた4人のETたちはロスアラモスに連れていかれた。ユーハウスの専門は操縦室とその機器類だった — 彼は重力場というもの、また反重力を経験するために必要な訓練は何かを理解した。彼は実際に、宇宙機を設計する物理学者と技術者たちを援助していた一人のETに数回会った。

私は10年間を海兵隊で過ごし、その後の4年間を民間人として空軍に勤務した。そこで私は海兵隊以来の仕事である航空機の飛行試験に関わった。私は現役のパイロットだった。それも戦闘機乗りだった; 私が戦ったのは... 第二次大戦の後半と朝鮮戦争での兵役後に、私は海兵隊大尉として除隊になった。

私が初めて飛行シミュレータに取り組んだのは — そう、1954年9月頃だった。海兵隊を辞めた後、私はライト-パターソン空軍基地の空軍で仕事を見つけた。そこでは航空機の様々な改良型に対する飛行試験を行なった。

私がライト-パターソン空軍基地にいたとき、ある人物が私に近づいた。彼は — 名前は言いたくない — 私が新しい独創的な装置に関係する分野で働きたいかどうかを知りたがっていた。いいですか? それは一つの空飛ぶ円盤シミュレータだった。彼らがしたことは何か: 彼らは我々数人を選び、私をシミュレータ製造会社のA-リンク・アビエーション社に再配属した。その当時同社ではC-11Bと彼らが呼ぶ装置、F-102(*迎撃戦闘機)シミュレータ、B-47(*亜音速爆撃機)シミュレータ、その他を建造していた。彼らは我々が実際に空飛ぶ円盤シミュレータに取り組む前に経験を積ませたかったのだ。私はこれに取り組んで30数年間を過ごした。

どの空飛ぶ円盤シミュレータも1960年代初期になるまでは作動し始めなかったと思う — 1962年か1963年頃だ。私がそう言うのは、シミュレータは1958年頃までは実際に機能しなかったからだ。彼らが使ったシミュレータは彼らが持っていた地球外宇宙機用のものだ。その宇宙機は1953年か1952年にアリゾナ州キングマンで墜落したもので、30メートルあった。彼らが初めて試験飛行に持ち出したのはそれだった。

そのET宇宙機は異星人たちが我々の政府 — アメリカ合衆国 — に提供しようとした一つの制限された機体だった。それはかつて陸軍飛行場だった場所から約15マイルの地点に着陸した。その陸軍基地は現在閉鎖されている。その特別な宇宙機だが、幾つか問題があった: 最初の問題 — エリア51まで運ぶために運搬用平台に載せることだった。道路事情のために、彼らはそれをダ

ムを渡って輸送できなかった。当時はそれを荷船に載せてコロラド川を渡る必要があり、それから国道 93 号線を経由してエリア 51 に着いた。当時そこは建設の最中だった。この機体には 4 人の異星人が搭乗していた。彼らは試験のためにロスアラモスに行った。これらの異星人のために、彼らはロスアラモスに特別区を建設し、ある種の人々を異星人たちとともにそこに配置した — 天体物理学者と一般科学者たちだ — 異星人に質問するためだった。私が聞かされた話の内容は次のとおりだ： その施設に配置された科学者の誰とであれ、話をするのはただ一人の異星人だった。他の異星人は誰も話さなかったし、誰も会話さえ持たなかった。最初彼らは、それはすべて ESP(超感覚的知覚)あるいはテレパシーだと考えた。だが私にはその多くは一種のジョークだ。なぜなら異星人たちは実際に話すからだ — 我々のようではないだろうが — 彼らは実際に話し、会話をする。だがそれをするのは[ロスアラモスでは]ただ一人だった。

この円盤と彼らがそれまでに見ていた他の円盤(複数)との相違は、これがとても簡単な構造を持っていたということだった。

円盤シミュレータには動力部がなかった。[だが]我々はその内部に動力部に見える空間を設けた。それはシミュレータを作動させる装置ではなかった。我々はそれぞれ 100 万ボルトで蓄電された 6 個の大きなコンデンサでそれを作動させた。だからそれらのコンデンサには 600 万ボルトが蓄電されていた。それはこれまでに製造された最大のコンデンサだった。これらの特別なコンデンサは 30 分間持続したので、我々はその中に入り実際に制御装置(複数)を動かし、そのシミュレータ、その円盤を作動させるために必要なことを行なうことができた。

だから、それはそんなに簡単ではなかった。我々には 30 分間しかなかったからだ。だが、シミュレータの中にはシートベルトがないことに気付くはずだ。それは実物の宇宙機と同じだった — シートベルトはどこにもない。シートベルトは不要なのだ。なぜなら、これらの1機を逆さまに飛ばしたとすると、普通の航空機の中のように逆さまにはならない — そのようには感じない。その説明は簡単だ： 機体内部にはそれ自身の重力場があり、外部から見て逆さまになって飛んでいても、内部では搭乗者にとっての上が上になるのだ。つまり、それを見たら実に簡単なことだ。私は始動のために、実際の異星人宇宙機の内部にいた。...

窓は一つもなかった。何らかの視界を得る唯一の方法は、カメラまたはビデオ装置だった。[マーク・マキャンドリッシュの証言を見よ。SG] 私の専門は操縦室とその機器類だった。私は重力場というもの、また人々を訓練するために何が必要かを知った。

円盤はそれ自身の重力場を持つので、それに搭乗し、その出力が上がった後の約 2 分間は気分が悪くなり、方向感覚がおかしくなる。それに慣れるには相当の時間が必要だ。その内部は狭いので、手を挙げることさえ面倒になる。我々は訓練する必要がある — 頭を訓練し、実際に感じ経験することを受け入れなければならない。

動き回ること自体が難しい。だが暫くするとそれに慣れてできるようになる — それは簡単だ。物がどこにあるかを知らなければならないし、体に何が起きているかを理解しなければならない。航空機を操縦しているとき、あるいは潜水から戻ったときの G の力を受け入れるのと変わりはない。それはまったく新しい状況だ。

設計に携わった技術者たちの誰もが、始動乗組員の一員だった。我々は自分たちが取り付けたすべての装置を検証しなければならなかった — それがちゃんと設計どおりに機能するか、などを確かめる。

我々の乗組員たちがこれらの宇宙機で宇宙まで行ったことを、私は確信している。私が言っているのは、そのために彼らは十分な時間をかけて必要な訓練を行なったはずだということだ。円盤に関する全体的な問題は、その設計などがきわめて厳格だということにある。爆弾を落としたり翼に機関銃を取り付けたりといった、今日我々が航空機を使うような使い方はできない。

その設計は厳格で、何も追加することができない — 過不足があってはならない。どこに何を付けるかという設計上の大きな問題がある。たとえば、航空機の機体の中心はどこにあるか、そのような類のことだ。さらに事実を言えば、背の高い人間が入れるように、我々はそれを3フィート高くした — 実際の機体は最初の形態に立ち戻って拡大された。とにかくそれを高くする必要があった。

我々は幾度も会合を持った。私は一人の異星人と最後の会合を持った。私は彼をジェイ・ロッド (J-ROD) と呼んだ — もちろんそれは皆がそう呼んでいたものだ。それが彼の実際の名前かどうかは知らない。だがそれは言語学者が彼に与えた名前だった。私は別れる前に会合の中で彼をスケッチした。私はそれを一部の人々に提供したが、それは私が見たものの印象だった。

その異星人はよくテラー[エドワード博士>(*水爆の父)と一緒に現れた。他の人々と一緒の場合もたまにあった。それは我々が直面するかもしれない諸問題に対処するためだった。いいですか？ だがすべてはそのグループに固有の事柄だった。このことをあなたは理解する必要がある。そのグループに固有でない事柄を話すことはできなかった。その原則は、知る必要性というものだった。[その ET だが]彼は話した。彼は話したが、それは相手が話すように声を発するというものだった — 彼は我々と同じように発声した。つまり、彼はオウムのように話したが、相手の質問に答えようと努力した。彼は理解するために何度も困難に直面した。なぜなら、相手がそれを紙に書かないで説明した場合、2回に1回は適切な答を与えられなかったからだ。

この異星人に会う前に我々がした準備とは、基本的に世界中のすべての異なる民族をくまなく調べ上げることだった。次に動物やその類型に至るまで、他の形態の生命体に目を転じた。そして...このジェイ・ロッドだが — 彼の皮膚はピンク色で、やや粗かった — そんな感じだった；恐ろしくは見えなかっただろう — というか、私にとっては彼の外見は恐ろしくなかった。

私が属していたこのグループの何人かだが — 彼らはそれにうまく対処できなかった。心理学的な質問をされると、私は感じたままを答えた。それで何も問題がなかった。それが彼らが知りたがっていたことだった — 取り乱すことはないか — だが私はそれが気にならなかった。それが精神的負担になることはなかった。

こうして、基本的にその異星人は技術的な助言と科学的な助言のみを提供していた。たとえば、私は計算を行なったが、さらに援助を必要とした...私はある本について話した — いや、それは本ではない；それは一つの大きな組み立て部品で、重力制御を行なう様々な部分があった。主要

な要素はそこにあったが、すべての情報はそこにはなかった。我々の最高の数学者でさえ、この問題を解明できなかった。それでこの異星人が援助した。

時々我々は、どれほどあがいても抜け出せない問題に行き当たり、それが機能しないことがあった。彼[その異星人]が現れるのはこのときだ。我々は彼にこれを見せ、我々がしたことどこが悪いかを調べてくれと言った。

この 40 年ほどの間、シミュレータは数えないで — 私は実際の宇宙機について話している — 我々が建造したものはおそらく 20 から 30 数機だろう。様々な大きさのものがあつた。

ここに持ち込まれた[ET]宇宙機について私はあまりよく知らない。キングマンから運ばれたもの[宇宙機]のことは知っているが、まあその程度だ。それを現場から運んだ会社を知っている — それは今ここにある — だが... だが、ある種の化学物質(複数)で作動するものがある。

人々が見ているこれらの三角形は、2機または3機の30メートル宇宙機だと思う。それはその[三角形の]中心にある。その外周部 — そこには設計条件(複数)に適合するものなら何でも望みのものを置くことができる。そうするとそれらは作動する。

秘密には何かの理由がある。私が理解できたのはこういうことだ：それは彼らが製造した最初の原子爆弾と違うところはなかった。だが彼らは航空機の設計に関して長足の進歩を遂げつつある。そして前にあなたに言ったように — 2003年までにはこの問題の大部分はすべての人々の前に姿を現すだろう。人々が考えるような方法ではないかもしれない。だが彼らが決める何らかの方法... すべての人々に見せるのにふさわしい方法で。それは人々を大いに驚かさだろう。

私がそう言う理由は、私が署名した書類は 2003 年に失効し、またそれらの書類に署名した人間は私だけではないからだ。

だが、あの重力マニュアル — もし仮にあなたがこれらの大量の書類の一部でも入手したなら、あなたは世界の頂点に立つだろう。あなたはすべてを知るだろう。

[人類が建造した反重力宇宙機と、窓の代わりにカメラを用いて映像を得る方法について立証するマーク・マキャンドリッシュの証言を見よ。SG]

ジョン・ウィリアムズ中佐の証言

Testimony of Lieutenant Colonel John Williams

2000年9月

ウィリアムズ中佐は 1964 年に空軍に入り、ベトナムで救助ヘリのパイロットになった。彼は電気工学の学位を持ち、軍航空部隊のためのあらゆる建設プロジェクトを担当した。軍に在籍中、彼はカリフォルニア州ノートン空軍基地内に誰も知ることがない施設があるのを知った。彼が聞いたところでは、そこには 1 機の UFO が格納されており、ボブ・ドールを含む一部の上院議員といった人々はその施設を訪れたという。ウィリアムズ中佐はまた、彼の父が彼に語った別の話を明らかにする：ある

夕食会に参加していたときのこと、彼はランド研究所の高級職員と会話を持った。この高級職員は、政府がこの国の歴史にあるどのプロジェクトよりも多額の予算を、反重力装置の開発に費やしていると語った。

JW: ジョン・ウィリアムズ中佐

SG: スティーブン・グリア博士

JW: ノートン空軍基地に一つの施設があったが、そこは隠された倉庫だった — その司令官でさえ、何が進行しているのかを知ることができなかった。その頃パイロットたちの間に常にあった噂では、それが実際には 1 機の UFO を隠している場所だということだった。なぜこの場所か。その理由は、人々が出かけてきてノートンに着陸し、ゴルフをしたりゴルフトーナメントに参加したりして、その途中にこの施設に立ち寄り、UFO を見ることができたことだった。だが私がノートン空軍基地にいた間は、その区域に立ち入ることは許されなかった。 . . .

[このノートン空軍基地の施設には実際に 1 機の UFO が格納されていたことを立証するマーク・マキヤンドリッシュの証言を見よ。SG]

SG: それが実在することをあなたは立証できますか？

JW: それは間違いない。なぜなら 1981 年から 1982 年の間、私はあの基地の施設(複数)を任されていたからだ。

SG: どんな種類の要人たちがそこに入り、おそらく UFO を見て出てきたのですか？

JW: 上院議員たちだったと思う。実際にボブ・ドールがあの施設にいたと私は理解している。さらに 1950 年代初期に遡れば、あのアイゼンハワーが実際にあの施設を訪れた可能性がある。 . . .

とても親しいある友人との夕食会に、一人のランド(RAND)職員が招かれた。ここはベントウーラ(*カリフォルニア州ベントウーラ郡)地区で、彼らのランド調査地域に近かった。その話は私の父を驚かし、父はそれを私に何度となく伝えた。父が言うには、いくらか飲んだ後のその夕食会で、このランド職員はこう言ったという。政府はこの国の歴史にあるどのプロジェクトよりも多額の予算を反重力に費やしている。これを聞いて父は、我々が使用可能な反重力システムを実際に開発してしまっていると信じた。その予算支出はおそらく第二次大戦直後から始まったものだろうと思う。これは何年にもわたり継続された取り組みだったと思う。

この情報を伝えた人物は、ランド研究所の高い地位にいたと私は理解している。 . . .

ドン・ジョンソン氏の証言

Testimony of Mr. Don Johnson

2000 年 12 月

ジョンソン氏は 1971 年と 1972 年に、センチュリー・グラフィックス社で働きながら、自力で大学に通っていた。彼の仕事の中に大型印刷機による設計図の印刷があった。センチュリー・グラフィックス

社はロッキード、リットン、ヒューズ、RCA といった様々な軍事電子企業から仕事を受けていた。彼が低い階級の機密取扱許可を持っていたとき、最高機密文書のために彼の手伝いが必要とされたときが何回かあった。そんなあるとき、彼は米国とロシアのすべての潜水艦ルートのリトグラフ陰画に取り組んだことがあった。証言の中で彼は、ヒューズ-スナマ社から受けた巨大な電子回路図に取り組んだこともあったと述べる。その回路図の中央には 1 個の大きな長方形があり、そこに“反重力室”と書かれていた。彼は自分の仕事をやり終え、その言葉を指し示しながら彼の指導員の方を向いた。その指導員が彼に言ったことは、君はそれを扱うことになっていない、それを元に戻して忘れるのが身のためだ、ということだった。

ボーイング・エアロスペース社 A・H の証言

Testimony of A. H., Boeing Aerospace

2000 年 12 月

A・H は我々の政府、軍、民間の UFO 地球外知性体グループの内部から重大な情報を得てきた人物だ。彼は NSA (国家安全保障局)、CIA (中央情報局)、NASA (航空宇宙局)、JPL (ジェット推進研究所)、ONI (海軍情報局)、NRO (国家偵察局)、エアラ 51、空軍、ノースロップ社、ボーイング社、その他に友人がいる。彼は地上専門家としてボーイング社で働いていた。彼は四つ星将軍カーチス・ルメイに紹介された。そしてある日カリフォルニア州ニューポートビーチにある彼の自宅に行き、この主題について彼と話をした。ルメイはロズウェルでの ET 宇宙機墜落を認めた。NSA にいる A・H の接触者は彼にこう語った。ヘンリー・キッシンジャー、ジョージ・ブッシュ、ロナルド・レーガン、ミハイル・ゴルバチョフのすべてが ET の主題については知っていた。彼の CIA の接触者は、米空軍はこれらの宇宙機の一部を撃墜したと彼に語った。ボーイング社で働いている A・H のある友人は、墜落機の回収に関わり、運ばれた ET の遺体(複数)を自分の目で見た。A・H によれば、FBI の中のあるグループは、レーダー試験が ETV (地球外輸送機)の一部に干渉を引き起こしていたことを発見した。またそれが多くの墜落を引き起こした原因だった。さらに彼は、地球外技術を試験し維持している地下基地(複数)があると言う。それらはユタ州(飛行機でしか行けない)、カリフォルニア州エンツォ(Enzo) (*地名と思われるが不明)、カリフォルニア州ランカスター／パームデール地区、カリフォルニア州エドワーズ空軍基地、カリフォルニア州マーチ空軍基地、フロリダ州エグリン空軍基地、英国ロンドン、その他の多くの場所にある。

AH: A・H

SG: スティーブン・グリア博士

AH: . . . 私はカーチス・ルメイにこう訊いた。カート、君が空軍にいたとき、空軍に報告された[UFO]目撃のうち、どれくらいの割合が確認できないままだったかい？そしたら彼は、確認できなかったのは 35 パーセントにすぎなかったと言った。それで私は、なぜ確認できなかったのかと訊いた。そしたら、ヤツらはあまりにも速過ぎるんだ、と彼は言った。我々は彼らを捕まえられない。実際、彼は口汚い言葉を使ってそれを説明した。

次に私はロズウェル墜落事件について、本当にあったのかと彼に訊いた。彼は私の方を見て首を振った。そうだ、それは確かに起きた。それで私は、内部で見つかった奇妙な文字に特に興味があると聞いた。私はそれが解読されたかと訊いた。彼は、自分が在職期間中、知る限りではそれらは解読されなかったと言った. . .

それからカーチス・ルメイは次第に打ち解け、ロズウェルで起きた墜落事件について話し始めた。彼は私にこう言った。それが我々の物体でないことは知っていた。軍のものではなかった。空軍でも陸軍でも海軍でも、どのものでもなかった。墜落した機体はまったく未知のものだった。...

ところで、マジスティック(Majestic) 12 の話は本当だ。MJ12 は確かに存在した。だが今日それは存在しない。名前が変わったのだ。その地位は変わっていない。ヘンリー・キッシンジャーは何が進行しているかについてとても精通していた。ヘンリー・キッシンジャーはその仲間に入っていた。私はそう告げられた。

SG: それをあなたに告げたのは誰ですか？

AH: NSA(国家安全保障局)で働いていた私の友人がそう言った。彼は文書の中でヘンリー・キッシンジャーの名前を見た。彼はその文書の幾つかにジョージ・ブッシュの名前を見た。私は何が起きているかについて気付かされた。1978年頃、レーガンは異星人の存在について完全な説明を受けた。レーガンはロシアのミハイル・ゴルバチョフに、起きていることの75パーセントを語った。それからゴルバチョフは、我々ととてもとても親しくなった。...

ワシントンD.C.のあるCNN記者が、ゴルバチョフが二度目にアメリカに来たときに、ゴルバチョフとその夫人にインタビューすることができた。彼らは通りに出てきてその警護特務隊をイライラさせた。CNN記者がゴルバチョフに‘核兵器を全廃すべきだと思いますか？’と質問した。そしたら夫人が進み出て、いいえ、異星人の宇宙船がいるから私たちの核兵器をすべて廃棄すべきだとは思わないわ、こう言ったのだ。

さあ、この話をCNNはヘッドラインニュースで半時間にわたり放送した。私はこれを聞いて飛び上がり、次の半時間を記録するために空のテープを入れた。なんと、この話は消えてしまったのだ。誰が妨害したか、あなたはご存じだ。それに関与したのはCIAだった。なぜなら、彼らはCNNと全世界のヘッドラインをそのとき監視していたからだ。彼らはそれを踏みつぶした。だが私はそれを聞いてしまった。これで私のNSA情報源から入手したロナルド・レーガンに関する情報が正しかったことを、私は知った。私に関する限り、この秘密はまったくの行き過ぎだ。議会はこの情報について知る必要がある。...

CIA工作員のブレット・メルは、彼ら(異星人)が我々の領空に侵入した場合、これらを撃墜するためのミサイルに関連した問題で合衆国空軍を相手にしたことがあったと言った。彼はその状況と極度の機密性について知っていたが、何が行なわれているかは知っていたと言った。彼は国家情報工作員だった。我々はネバダ州のイーリー上空とニューメキシコ州アルバカーキ近くで、それらの何機かを攻撃したと彼は言った。

SG: これらの事件が起きたのはいつ頃だと彼は言いましたか？

AH: これは60年代終わりと70年代だった。...

そのとおりだ。私は一人の陸軍将校に会った。彼は CID (Criminal Investigation Division; 犯罪捜査部) にいたとき何度か墜落機の回収に関わった。1947 年に彼が米国陸軍で兵役に就いたとき、彼の友人が何人か CIC (Counter Intelligence Corps; 対諜報部隊) にいた。彼らは互いにとても親しくなった。彼はロングビーチのボーイング航空機社で働いていた私の友人を引っ張った。ニューメキシコ北部での ET 墜落機の回収に当たらせるためだった。

彼は何人かの異星人を見た。またこの墜落した円盤を守っている宇宙機を目撃した。彼は誰もそれに近づけさせないようにと、M1 カービン・ライフルを渡された。そして許可のない者は誰でも撃てと命令された。彼は他の何度かの回収にも呼び出された。彼らは窓を目隠した飛行機で幾つかの墜落現場に彼を連れていく必要があった。...

私の友人は自分の目で異星人の遺体(複数)を見ていた。彼ら(異星人)は黒いアーモンドの形をした目を持っていた。やや大きな頭部 — 人間の頭部よりも少し大きかった。彼らの身体はほぼ 9 歳くらいの子供の大きさだった。彼らには 4 本の指があった。親指はなかった。彼らはすべて一つの鋳型から出てきたように見えた。というのは、彼らはすべて同じに見えたからだ。口はただの小さな細長い切れ目だった。

彼ら(異星人)にはちゃんとした小さな耳があった。頭髪はなく、彼にとってはとても異様な姿だった。彼が考えたのは、彼らはおそらく遺伝子操作によって造られたのではないかということだった。だが宇宙機の内部で見た技術は人間の手によるものではあり得なかった。なぜなら内部にはファイバー光学が使われていたからだ。また内部にあったスライドスイッチの一部は我々が持っていなかったもので、地球上にあの種の技術を持つ者はいないだろう。...

1949 年の墜落はやや大きな宇宙機で、搭乗していた人々は少し背が高かった。彼ら(異星人)は約 5 フィート 8 インチの身長があった。彼らはパレスチナ周辺の古代民族に似た外見をしていた。おそらく紀元前 3,000 年頃のだ。

彼は私に次のように語った。彼はこれらの異星人の一人を持ち上げ、ジープの一台に乗せた。その重さはせいぜい約 45 ポンド、たぶん 40 ポンドくらいだった。彼ら(異星人)は遺体袋に入れられ、当時はライト-パターン空軍基地に運ばれた。後になって彼らの一部はコロラド州やニューメキシコ州北部に移送され、1960 年代終わりにはエリア 51 に運び込まれた。すべての墜落残骸や工学技術、異星人に関連する現象と関わりがあるものすべては、それ以後エリア 51 に行った。...

彼らはニューメキシコでのレーダー試験が、異星人の宇宙機を多く墜落させた原因だと気付いた。高出力発信装置に近づき過ぎたとき、彼らの誘導制御がそれと干渉し、彼らは墜落した。他に墜落した宇宙機は、我々が軍の兵器で撃墜した。

彼が私に言ったことで覚えていることの一つは、我々にとてもよく似た別の異星人グループがいるということだ。彼らはオレンジと呼ばれている。...

だが、彼は私に確かにこう言った。彼はその技術を逆行分析 (back engineer) するためにその宇宙機に取り組んだ。彼は異星人たちが実在することを知っている。彼は、私が空軍参謀総長のル

メイ将軍に会ったことを知っている。彼はエリア 51 で行なわれた試験について、何度も私に語った。それらの何機かは山の背後から姿を現す。それらは突然姿を消し、約 20 秒以内に 15 から 20 マイル離れた所に再び現れる。それを行ったり来たり繰り返す...

SG: これらは人間が造ったものですか？

AH: いや、これらは本物の宇宙機だ。これらは彼が取り組んでいた宇宙機だ。これは我々の軍がこれらの ET 宇宙機をエリア 51 で試験しているのだ...

彼はノースロップ社のために働いていた。直接にノースロップ社のためにだ。彼は軍のために働いていたのではない。彼は給料をノースロップ社から受け取っていた。

SG: そうすると、ノースロップ社はエリア 51 に関わっているのですか？

AH: そのとおりだ。ロッキード・マーチン社、ボーイング航空機社も同様だ。ボーイングは間違いなくエリア 51 のためにトラック輸送をしている。ヒューズ社もまた関わっている。防衛関連請負企業の大部分は、エリア 51 と何らかの関係を持っている。ボーイングがエリア 51 のためにトラック輸送をしていることを、私は確かに知っている。私はボーイングにいる友人からそのことを知った。軍は幾つかの軍事拠点への輸送のために彼らをそこで雇っていた。私はこの友人自身がエリア 51 に行ったことも知った。彼は主要高速道路から護衛されてエリア 51 に行った。

この目撃証人は存命だ。実際に彼は異星人たちがどこから来たのかを知っている。彼が理解する限りでは、そこには地下区域があり、大量の地球外宇宙機の残骸がエリア 51 の地下の、ある種の封じ込め区域に格納されている。だが彼はエリア 51 の中で、歩き回って誰かと話している地球外知性体を見たことはない。彼は宇宙機とその工学技術だけは確かに見た。彼らはその工学技術をこれらの輸送機から抽出しようと試みている。それを我々の戦闘機、あるいは我々の宇宙計画の一部に組み込むためだ。

彼らはこれらの ET 宇宙機を調べることによって、レーザー工学技術と音波防衛手段を開発した。彼らは音波によって戦車や建物を吹き飛ばすことができる。レーザー工学技術の幾つかは、彼が私に話したこれらの宇宙機を研究することにより獲得したものだ。私はまた、彼らが大量の人員、装置の一部、地球外工学技術装置の一部と宇宙機を、ユタ州のある基地へと移動していることも知った...

[私が他の深部の事情通から聞いているところでは、これは本当で、今最も重要な施設はすべて地下と飛行機でしか行けないユタ州にある。SG]

レッドライト計画はこれらの宇宙機を試験し、これらの物体がどのように作動するかを見つけるために、できるだけ多くの情報を異星人関連プロジェクトから抽出するものだ。彼らはできるだけ多くの情報を得て、それを我々の戦闘機や爆撃機、我々の宇宙関連計画に応用したいと思っている。私は陸軍や空軍やエリア 51 で働いた人々から聞かされた。彼らの全員がレッドライト計画に関して行なわれていることを確認している。レッドライト計画は今日このときもなお継続されている。

こうして、ノースロップ社は彼を雇った。これらの物体がどのようにして作動するのかを知るという、エリア 51 での目的を達成することに加担させるためだった。彼が同社に入ったのは 1980 年だったと思う。そして 1997 年頃に彼はそこを退社した。

ところで、レッドライト計画とグラッジ計画だが、それらはすべて入り混じっている。ブルーブック計画の責任者ロバート・フレンドが私にそう語った。彼はレッドライト計画のことを完全に知っていた。グラッジ/ブルーブック計画書の報告 No.13 は彼によって書かれたのだ。ロバート・フレンドは、レドンドビーチ(カリフォルニア州ロサンゼルス)のアビエーション通りとローズクランズ通りに面したフェアチャイルド社で働いていた。我々は電話で約 1 時間話した — 彼もまた、私がルメイ将軍、そしてもちろん CIA と FBI の職員たちに会ったと話すまでは、その事件について私に話したがらなかった。

こうして彼は打ち解け、私に UFO のことを話し始めた。私は彼に、ロズウェル墜落事件の後でライト-パターソン空軍基地に運ばれた幾つかの墜落残骸について訊いた。彼は、そうだ、残骸の一部と遺体(複数)はオハイオ州 Dayton のライト-パターソン空軍基地に運ばれ、その他の一部はフロリダ州のある基地に運ばれた、と私に語った。私はフロリダ州にある基地については何も聞いたことがなかったので、驚いた...

彼が言うには、目撃を最小限に減らし、メディアと目撃情報をメディアに報告してくる目撃者たちを鎮めるために、彼らはこれにフタをしようとしている。空軍はこのことを絨毯の下に押し込み、研究を続けて、まさにそれを掌握したいと考えている。彼は次のことをはっきり言った。空軍は、これらの目撃は大学生のいたずら、気球、気象現象などによるものだ、という馬鹿げた考えに報道機関を誘導しようとしている...

秘密の保安について、彼は私にこう言った。これについて喋った彼らの軍関係者は、それを撤回するよう軍法会議にかけられるか、少なくともそう脅される。別の脅迫は給料小切手を取り消す、アラスカのような大抵の人間が行きたがらない基地に転属させる。

NSA にいる私の接触者は陸軍にいた。NSA は陸軍の一部で、彼は高度な情報収集に当たっていた。彼はアンブラ最高機密取扱許可を持っていた。彼は NSA とメリーランド州フォートミードで訓練を受けた。それから彼は衛星監視局に転属させられた。彼は国防総省や ETVS(地球外輸送機)を追跡していた他の NSA の衛星監視局(複数)から発信された幾つかの通信を受信した... 我々は 60 年代に彼らの信号の多くを傍受した...

だがカーターはほとんど蚊帳の外に置かれた — 統制グループは、ある理由で彼を信用しなかった。彼は出てきて、覆い隠されていることを報道機関に対して表明するのではないか。彼らはそれを恐れて彼を信用しなかった。彼らはカーターを蚊帳の外に置いた...

NSA のこの目撃証人は 1974 年に入隊し、1985 頃に軍、NSA を辞めた。彼が語るところでは、ヘンリー・キッシンジャーは 50 年代に遡ってこの研究グループに関わっていた。その目的は、この情報の波及効果を研究し、信頼できる情報源からこの情報が漏洩された場合に何が起きるかを明

らかにすることだった。彼らはこれを行なうために、ランド研究所やその類のシンクタンクといった、ある種の外部研究グループに秘密情報を流し、肩代わりさせた。

基本的に、これらのプロジェクトはマジスティック 12 グループにより統制されていた。もうこれは MJ12 と呼ばれていない。私はこの組織の新しい名前を見つけようと調べている。エリア 51 で働いていた私の接触者は、この組織の名前を知っているが、それを私に言うのを拒んでいる。要するに、これはワシントン D.C. にある国家安全保障会議および国家安全保障立案グループと交じり合った、一つの統制組織だ。あらゆること管理統制を行なう国家安全保障立案グループと呼ばれるものがある。MJ12 はこれらの人々、国家安全保障立案グループと交じり合っている。

彼らは完全な統制力を持っている。彼らは、今起きていることについて大統領に注意を喚起すると、大統領はそれを認可するか、単に‘やってくれ’と言うだけだ。彼らは完全な統制力を持っている。彼らに議会の監視はまったく及ばない。彼らは誰に対しても答えない、米国大統領以外には。しかし、私が理解したところでは、その大統領さえも脇に押しやろうとしている。

大統領は、最早これらのグループに対してそれほど統制力を持たない。それはまるで分離した組織だ...

大統領は統制力を失いつつある。彼は間違いなくこの問題に対して統制力を失い始めている。カーターが蚊帳の内に置かれなかった理由がそれだ...

NSA は追跡と迎撃に関して NORAD (北米航空宇宙防衛司令部)、空軍、陸軍とともに、NRO (国家偵察局) とも行き来しながら協力している。彼らはこの行動についてはすべて一体だ。そしてすべてが MAJI 統制と呼ばれる最高機密グループに結びついている。

SG: MAJI 統制とそれがどのように機能しているかについて、彼はあなたに何を語りましたか？

AH: MAJI 統制は海軍情報局 (ONI) により支配されている。それは中央情報局 (CIA) や NSA (国家安全保障局) のように、最高機密収集グループだ。実際に、ONI は CIA と同じようなものだ。それは海軍内部の最高機密組織だ。それは NSA や CID (犯罪捜査部) と似ている。それはすべて暗号化された情報だ。彼らはちょうど CIA のように、情報を収集する作業者たちを外に抱えている。それはすべてきわめて厳重な最高機密だ...

宇宙機の大部分は反重力と電気重力推進によって作動する。我々はまさに反重力に関して結論を得るところまできている。私はそれをおそらく約 15 年と見ている。そのとき我々は、この種の工学技術を利用した浮揚する車を持つことになるだろう。我々は今それをエリア 51 で行なっている。それこそが私の友人がノースロップ社の一員としてエリア 51 で取り組んでいたことの一部だ。彼は今ネバダ州パーランプに住んでいる。我々はまさに今反重力輸送機をそこで、またユタ州で飛ばしている...

たとえば、火星の人面岩に関して我々が収集することができた情報、私はそれを確かな事実だと知っているが、これは大きな衝撃を与えるだろう。私には、これまで話に出さなかったが、NASA、

JPL に別の接触者がいる。私はそれについてあまり話せない。というのは、彼はまだそこで働いているからだ。私が知るこの人物は、NASA でとても高い役職にある。それが紛れもない顔であることを彼らは知っていると彼は言った。それが我々ではない何者かによって彫刻されたものだと彼らは知っている。画像分析により、彼らは火星の人面岩が事実であり、嵐による浸食や光のいたずらによるものではないことを知っている。彼らは、火星の人面岩が、この地球に紀元前 45,000 年頃にやってきた地球外知性体により造られたことを、事実として知っている。 . . .

英国警察官(退職) アラン・ゴッドフレイの証言
Testimony of British Police Officer Alan Godfrey (retired)
2000 年 9 月

アラン・ゴッドフレイは退職した警察官で、1975 年から 1984 年まで英国ウェストヨークシャー州都市警視庁に勤務した。1980 年 11 月 28 日、彼と他の 5 人の警察官は 1 機の UFO を目撃した。彼は約 75 フィート離れた所にダイヤモンドの形をした 1 個の物体を見た。それは地面から 5 フィートの高さに浮揚しており、幅約 20 フィート、高さ約 14 フィートと推定された。下半分は回転しているように見え、上部は静止していた。それは無音だった。この事件を報告した数ヶ月後、彼は嫌がらせを受け始めた。彼は 50 マイル離れた場所に転属させられ、ついには彼の所属警察署に入ることを禁じられた。密輸麻薬が彼のロッカーに置かれた。

私は. . . 警察のパトロールカーに乗って A646 号線をバーンリーに向かっていて、走行しているこの道路の前方を見ていた私は、正面のおよそ 150 ヤード先に 1 個の物体を見た。最初に私はそれを 2 階建てのバスだと思った。そういう状況だったが、私はこの物体に向かっていった。それに近づいたとき — 物体との距離が約 25 ヤード以内 — 目に入ったものは私を困惑させた。

私はこれらの熱気球の一つが降下したと考えた。次に、今は朝の 5 時だと考えた。そのとき、私はこの物体が実際に地面から浮揚しているのに気付いた： 私はパトロールカーに乗っていて、実際に物体の下を通して向こうが見えたのだ。それは地面から約 5 フィートの高さに空中静止していた。横方向の範囲は、前方の道路の大部分を隠していたから、幅は約 20 フィートだった。道路はそこでかなり狭かったからだ。その頂部の上方に道路照明が見えたので、物体の高さは約 14 フィートと推定された。

私はそれを眺めながら、約 25 ヤード離れて車を停めた。私はパトロールカーのブルーライト、ヘッドライト、ハザードライトなど、考えられる限りのライトを点灯した。これで道路を完全に封鎖した。それはダイヤモンドの形をしていた。それは二つの部分が結合しているように見えた。その下半分は回転しているように見え、上半分は静止しているようだった。その周囲を黒い窓(複数)かパネル(複数)が取り巻いているように思えた。

私は完全にショックを受けた。道路を縁取っている茂みや樹木は、まるで強風が吹いているようにとても激しく揺れていた。だが私の車は明らかに静止していた。私は車にいて何の振動も感じなかった。何の物音も聞こえなかった。それは私に聞こえる音は何も発していなかった. . .

それはまったく航空機に似ていなかった。ご存じのとおり、航空機は飛ぶものだ。垂直離着陸ジ

ェットでない限りは、この物体は実際に浮揚しており、動いていた。私はこれが典型的な UFO、未確認飛行物体の状況かと考えた。

時が経ち、私は他の警察官たちの目撃を知った。それは私にとり大きな救いだった。それが私にとりどれほど大きな救いだったか、あなたは想像できないだろう。一人の警察官が、あの小さな共同体の中で同僚たちから受けた扱いがどんなものだったか、あなたには理解できるはずだ...

信じようが信じまいが、我々の警察署には実際に一つの書式があり、それで国防省に UFO 目撃報告をする...

その後で起きたことに私は本当に驚いた。私の人生はあっという間にひっくり返ってしまった。のんきな男が6ヶ月の間に地獄を経験させられ、想像できないような惨めな人間になってしまった。他ならぬ原因は嫌がらせ、圧力、虐待、ありとあらゆるものだ。私は実際に経験したのだ...

元英国外務省 ゴードン・クレイトン氏の証言

Testimony of Mr. Gordon Creighton, Former British Foreign Service Official

2000年9月

クレイトン氏は多年にわたり英国外務省に勤めた。彼は中国で10年間を過ごしたが、1941年に大使館にいるとき1機のUFOを見た。白昼に彼が見たのは円盤型をした無音のUFOで、頂部に青白色の照明をつけ、高速で飛行していた。1953年に彼はホワイトホールにある国防省に暫くいた。そしてある部門、UFOを扱っている航空戦術部の下のフロアで働いた。1機のUFOがイングランド南部サウサンプトン近くのマウントバッテン卿の土地に着陸したと彼は言う。

...今我々は、スターリンがアメリカ人よりも早く行動に移したことを知っている。スターリンはニューメキシコにおけるUFO墜落の後、1947年というとても早い時期に知るようになった。スターリンはあらゆる場所からの報告を集めていた。ある日、彼は彼らの一流天文学者を呼び、これらのすべての報告書を見せた。スターリンは彼にこう言った。そこに座ってそれを見たまえ。君はそれをどう考えるか？その天文学者はこう言ったという。それを家に持ち帰って見てもよいですか？スターリンは言った。できない。君から返事が聞けるまで君はこのクレムリンのここに座り続けることになる。それでその天文学者は彼にこう答えたという。確かに、それはこの世界のものではありません。それはこの地球のものではなく、地球外のもんです...

私は私のよき友人であるJ・アレン・ハイネックにこう訊いた。これらすべてのUFO事件が始まった原因は何だと思うか？彼らはずっとそこにいたはずなのに、1947年以後の彼らのこの大きな関心は何が原因だと思うか？私の記憶によれば、彼は少し考えてこう言った。原子爆弾だということは明白だ。もしあなたが多次元理論というものを考え、それを受け入れるなら、我々がとんでもない大被害を引き起こしてしまったことは大いにあり得ることだ。ある領域において我々は、この世界で与えたよりもさらに大きな被害を与えたかもしれない。あなたがミツバチの巣を蹴ったら、ミツバチが出てきてあなたを見ても驚くに当たらないだろう。もしあなたが彼らを傷つけたら、彼らはあなたを刺すことさえするだろう。だから、これはとてつもなく複雑な問題だ、というのが私の答だ。

人類が今のまま振り舞い続けたら、自滅するだろう。人類は弓と矢で永遠に生き続けることもできた。人類はこの現在の技術では永遠に生存することはないだろう。どちらか一方だ。

あまりにも知り過ぎたために厄介になったり不都合になったりしてしまった人々を始末するために、諸機関により対策がとられてきたと私は確信している...

ケネディは UFO の主題についてもっと多くの情報を得ようと、CIA との間でちょっとした闘争を行っていたかもしれない。彼はそれをロシアと一緒に取り上げて検討すべきだと考えていたらしい。もし彼がそれをロシアと一緒に取り上げることを考えていたとしたら、CIA はそれを時期尚早でとても危険な行為だと考えたかもしれない。そう考えると彼の抹殺の説明が見つかるだろう...

米国空軍 カール・ウォルフ軍曹の証言
Testimony of Sergeant Karl Wolfe, US Air Force

2000 年 9 月

カール・ウォルフは 1964 年 1 月から 4 年半空軍に勤務した。彼は最高機密取扱許可クリプトを持って、バージニア州ラングレー空軍基地の戦術空軍司令部で働いた。NSA (国家安全保障局) 施設で働いていたとき、彼はルナー・オービターが撮った月面写真を見せられた。そこには人工構造物の細部が写っていた。これらの写真は 1969 年のアポロ月着陸以前に撮られたものだった。

こうして私は、ラングレー空軍基地にあるこの施設まで行くように言われた。この基地では NSA (国家安全保障局) がルナー・オービターからの情報を集め始めていた... 私が入っていくと、そこには他の国々から来た人がいた。私服を着た大勢の外国人がいた。彼らには通訳が付いており、首から保安バッジを下げていた...

彼らはとても物静かで控えめだった。彼らの頭上にはとても奇妙な幕が掛かっていた。彼らはとても心配そうな表情をしていた...

私はその研究室の一方の側面まで歩いていった。そしたら彼が、我々は月の裏側に一つの基地を発見した、と言った。私は、誰のか？と言った。どういう事だ、誰の基地か？彼はこう言った。そうだ、我々は月の裏側に一つの基地を発見した。それを聞いて私は驚き、少し恐怖を覚えた。もし今誰か部屋に入ってきたらと私は密かに考えた。我々は危険に曝される、窮地に陥る。なぜなら、彼は私にこの情報を明かしてはならなかったからだ。

私はそれに興味をかき立てられた。だが彼が越えてはならない限度を踏み越えていることも知っていた。それから彼は、これらの一連の連続写真から一枚を取り出し、月面上のこの基地を見せた。それは幾何学的な形状をしていた - 塔 (複数) があり、球形の建物があり、とても高い塔 (複数) とややレーダーアンテナに似た物体 (複数) があつたが、それらは巨大な建造物だった...

この同僚と私は同じ階級だった。彼はとても気が沈んでいる様子だった。彼は部屋の外にいる科学者たちと同じく、青ざめた表情をしていた。科学者たちは彼と同様に心配そうな様子だった。彼はこれを誰かに話さずにはいられなかった...

建造物の幾つかは半マイルの大きさがあつた。つまり、それらは巨大建造物だつた。それらは写っている写真ごとくすべて異なる大きさを持っていた。先に述べたように、形状の幾つか — 建造物の幾つかはとても高く、細かつた。高さは分からないが、とても高いに違ひなかつた。それらは影のある斜めから撮つた写真だつた。巨大な球形やドーム型の建物があつた。それらはひときわ目立ち、巨大な物体だつた。興味深かつた。というのは、私はそれらを心の中で地球上の建造物と対比させていたからだ。それらは大きさと構造において、地球上で我々が見る何物とも比較にならないものだつた。...

それ以上私はそれを見たくなかつた。命が危険に曝されていると感じたからだ。言っていることがお分かりか？本当はそれをもつと見たかつたし、それをコピーしたかつた。それについてもつと話し、議論したかつたが、それはできないと知つていた。これを他に話してゐた若い同僚は、まったく当時の限度を踏み越えていると私には分かつていた。

彼は誰かに話さずにはいられなかつただけだと思ふ。彼はそれについて議論しなかつたし、できなかつた。彼がそうしたのは、このことの重圧を受けて苦しんでいたからで、それ以外に何の意図もなかつたと思ふ。...

軍を除隊後少なくとも5年間は、私がいた國務省に断りなしにはどこにも行けないと知つていた。

[同じような制限を受けたメルル・シェーン・マクダウ他の証言を見よ。SG]

旅行するときには、米国内でさえもいつも届け出て許可を得なければならなかつた。私がどこにいるか、常時彼らは知っている必要があつた。たとえば、もし我々がベトナムにいとすると、いつも銃を持った何者かが我々と一緒にいる。もし我々が敵の手に渡つるようなことでもあれば、彼らは基本的に我々を消滅させる。彼らは敵が我々を捕まえることを欲しない。その代わりに殺す。

我々はこのような条件下で行動していることを知つていた。もし間違つた者の手に渡つたらと、我々の命は常に危険に曝されていた。そのことを我々は認識してゐた。除隊するとき、私はこう告げられた。私が何か政府のためにならない変な活動に関わつていないことを確かめるために、私は定期的に調査されると。...

NASA 従業員 ドナ・ヘアの証言

Testimony of Donna Hare

2000年11月

ドナ・ヘアは NASA の請負業者フィリコ・フォードで働いたとき、ある機密取扱許可を持っていた。彼女は紛れもない UFO を写した写真を見せられたと証言する。彼女の同僚は、それらが一般に公表される前に吹きつけで写真から UFO の証拠を消すのが仕事だと説明した。彼女はまた、一部の宇宙飛行士が地球外宇宙機を見たこと、そのうちの何人かがこれを話そうとしたとき彼らは脅迫されたこと、別のジョンソン宇宙センター従業員から聞いた。

私の名前はドナ・ヘアだ。1970年と71年に私は請負業者フリコ・フォードのためにNASA第8号館で働いていた。その業者は何回か名前を変えた。多年にわたり、私はこの会社内外の暗室やいろいろな部署で働いた。

1970年代、正確な日付は覚えていないが、私はその暗室、制限区域の一つに入っていた。私にはある機密取扱許可が与えられていた。私は自分の会社のものではない、ある制限区域に入っていた。そこはNASAの暗室だった。そこでは月面や衛星からの画像が現像されていた。すべてがNASAによって行なわれていた。

そこにいた一人の職員、かつて友人であり今でもたまに話をするが、彼が私の注意をこの連続写真の一つの区域に向けた。それは何枚かの写真をつなげて一枚の大きな写真にしたものだった。それらは衛星写真だと思ったが、確信はない。それらは空中から下を見たものだった。本当に興味深いわね、と私は言った。

彼はすべてを説明した。彼は笑みを浮かべて、そこを見なさい、と言った。私は見た。私が見た写真の一枚に1個の丸い白点があった。そのときの画面はとても鮮明で、くっきりとした輪郭が見られた。それで私は彼に、それは何なの？と言った。それは感光膜のシミかしら？そしたら彼はニヤリと笑って、感光膜のシミが地面に丸い影を落とすことはないと言ったのだ。なるほどそこには丸い影が写っており、それは太陽の入射光に対して正確な角度だった。私は彼の顔を見た。私は驚いていた。なぜなら私はそこで数年間働いて、これまでこのようなものを見たことはなく、聞いたこともなかったからだ。私は言った。これはUFOなの？そしたら彼は私に笑顔を向け、君にそれを言うことはできないと言った。君にそれを言うことはできない。私が理解した彼の言葉は、そうだ[UFOだ]、だがそれを私に言うことはできない、ということだった。それで私は言った。あなたたちはこの情報をどうするつもりなの？そしたら彼はこう言った。我々はこれらを一般に売り出す前に必ず吹きつけて消去しなければならない。私はそれを聞いて、これらの写真からUFOを除くために実施されている一つの手順があることに驚いた。...

彼は、一部[の宇宙飛行士]が語ろうとして脅迫されたと言った。彼らは口外しないように誓約書に署名している。彼らに引退は許されない。私はその情報に圧倒され、聞き取りを始めた。私が知っていたある人たちは、組織の重要な地位にいた。それで私は彼らを外に連れ出すことにした。私は昼食を共にしながら、彼らに話しかけた。一人になると彼らは私にいろいろなことを語った。彼らは、もし私が彼らから聞いたと言った場合には、私が嘘をついていると言うつもりだと断言した。私がよく知っている一人の職員は、宇宙飛行士たちと一緒に隔離されていた。彼はこう言った。月に行った者のほぼ全員が物体を見ている。実際に、ある宇宙飛行士は着陸のときに宇宙機が月面にいたと言った。だがこの人物は地球の表面から姿を消した。私は彼を見つけ出そうとしたが、名前を知り得ただけだった。私はこのことをSG(スティーブン・グリア博士)に伝えている。

私はまた、大量のUFO写真を焼却させられた保安兵にも会った。彼が私の事務所に来たとき、彼はとても怯えていた。彼は言った。ドナ、君がこの問題に興味を持っていると聞いたんだ。さらに彼はこう言った。自分はここで働いたことがある。ある日何人かの兵士が軍服でやってきて、私に写真を焼却させた。彼が言うには、自分はそれらを焼いたが、見てはならないと言われた。だが彼は誘惑に負けた。彼はそのうちの一枚を見たが、それは地上にいる1機のUFOだった。その直後に

彼は銃の台尻で頭を殴られた。その傷はまだ彼の額に残っている。さて、この保安兵は怯えていた。彼は恐怖で気が動転していた。彼はこうも言った。その写真には1機のUFOが写っており、その上に小さな隆起(複数)があった。それは今着陸したばかりのように見えた...

これを話しては駄目だといって、何人かが私の前に姿を現したときがあった。彼らは殺すとは言わなかったけれど、これを話してはいけないというメッセージだと思った。だけど私はそのときはもうあちこちで話していたので、最早何の意味もなかった。私が[1997年に]議会の背景説明会で話したように、この話題はまるでセックスと同じだと感じ始めていた。誰もが知っているけど、男女同席では誰も口にしない。安全な議会公聴会の中でもっと話したいから、私はいつでもそれを待っている。私はグリア博士を信用している。今までのところ、博士は身の安全や私が話した秘密に関する限り、彼がすすと言ったことは全部してきた。必要で適当な時期に、それが明るみに出て何かの役に立つことを私は望んでいる。うろつき回ってこれらの人々を排除したり、傷つけたり、身柄を拘束したり、また脅して引っ越しさせるようなことをしないで欲しい。私が見知っているこの人物は、この地球上から姿を消してしまった。その人は消えた。私、それだけのご免だわ。

私が憤慨していることの一つは、善良な人たちが違法な行為を強いられていることだ。私はこの情報がアメリカ[の国民]に提供されなければならないと信じている。

国防情報局(退役) ジョン・メイナード氏の証言

Testimony of Mr. John Maynard, Defense Intelligence Agency (ret.)

2000年10月

ジョン・メイナードは国防情報局(DIA)の軍事情報分析官だった。21年間の経歴の中で、彼は軍が様々な形でUFOに関心を持っていた証拠を見た: 地球独自のものではない電子通信技術; UFOの軍事写真。国防情報局に勤務中、秘密保持のための区画化についてよく知るようになった。彼はUFOがはっきりと写った偵察機写真を見た。

JM: ジョン・メイナード

SG: スティーブン・グリア博士

JM: 私の名前はジョン・メイナードだ。私は退役した軍事情報分析官で、1980年に退職した。私は陸軍情報保安庁で分析官として出発し、軍に21年間勤務した。私はそこから幾つかの様々な軍の組織を渡り歩き、DIA(国防情報局)が私の経歴の最後となった。そこでは要求と評価部(Requirements and Evaluation Division)のための大部分の文書に責任を持つ管理官を務めた。

情報の世界で地球外知性体とUFOについて何かに気付いていたのだが、これは1960年代初期の私の経歴の早い段階でやってきた。私が陸軍情報保安庁で分析していた無線通信の一部が、通常考えられるものとはやや異なっていた。私がこれに強い関心を持ち始めたとき、彼らは私をその部署から外すことを決めたと思う。

私はそこから、UFOに関して進行している物事の様々な側面を研究し続けた。私がヨーロッパに行ったとき、そこにいた少数の防諜関係者が接近してきた。彼らは分析に関する私の経歴を知っていた。私は軍隊の内部で麻薬のやりとりをする現場を調査する仕事に関わることになった。それと

同じ時期に、人々がかかえていた UFO 問題 — 特にヨーロッパにおける目撃事件に偶然出会うことになった。私はこれらの人々に対して予備調査を行ない、人々が何を言っているか、何が起きているかについて、報告書を提出した。

だが私の UFO との最初の触れ合いに話を戻そう — それは沖縄での勤務とつながっている。そこで我々は、他ならぬあの時期の中国の通信パターン[電子通信]を分析していた。時々私は、我々の軍事通信網で知られている通信パターンには絶対にならない異常に出会った。

これについて私が疑問を発すると、私は常に脇に外され、彼らはこう言った。“いいかい、君はそんなことを心配しなくてもいい” だが私は放っておけなかった — 今でもそうだ。私は問題を起こさずに可能な限りそれを追求する。だがそのとき私は問題を起こしてしまった。私は通常の通信とは異なるものがあることを見つけたが、それは基本的に地球から出ているものではなかった[地球から来ているのではなかった]。

それを徹底的に調べれば調べるほど、それは送信されている通常の通信には属さないことがいよいよ明らかになった。私はその発信源を特定できず、それがどこから来るのかに強い関心を持った。通信部で働く数人の友人を知っていたので、私はそれがどこから来ているのか、彼らに助言を求めた。それが私の失敗だったようだ。彼らは考えていたようなよき友人ではなかったからだ。

SG: あなたはそのことから何を知りましたか？

JM: 要するに、その通信は中国国内から来ているのではなかった — それらは他の場所から来ていたが、彼らはそれを実際に明かそうとしなかった。友人の一人が脇の方で私に合図をし、親指を上に向けた。私は“それはグッドサインか、それとも？”と言った。そしたら彼は“そうじゃない”と言った。内密の、とても内密の会話で、彼はそれらが地球の信号ではないと認めたのだ。

この問題の時期に、我々にはあの種の通信を交わす宇宙計画がなかったし、通信システムと衛星もなかったのは事実だ。... 私は 1950 年代終わりから 1960 年代初めのことを言っている。だから時期という点に関する限り、それはまさに我々の近くにいた何者かであったに違いなかった。スプートニクはあれほど長く飛んでいなかったし、ましてやアメリカの衛星もそうだ。

あれはまったく私の失敗だった — それが地球外のものであることを知ったが — それで彼らは私を取り除くことにし、首尾よくそれを実行した。

ともあれ、ヨーロッパにいる間に私はこれらの UFO 報告を調査した。我々はかなり多くの目撃情報入手した。我々は、それが着陸しているかいないかにかかわらず、またその中に搭乗者 — 地球外知性体あるいはその類のもの — を見たかどうかにかかわらず、見た宇宙機を描いた絵入手しようとした。このことが彼の地における次の 2 年間で心躍らせるものにした。

SG: この期間にあなたが報告書を提出した相手は誰でしたか？

JM: 基本的にそれらは CIA (中央情報局) に行ったが、一部は DIA (国防情報局) や空軍の特

別情報部(OSI)に行ったものもあった。彼らがその情報を何に使ったか、私は知ることがなかった。

その後私がトルコにいたときに、幾つかの別の計画を偶然知ることになった。1970年代中頃 — 76年, 77年, そして私がそこを去った78年初めのことだ。私はNATO(北大西洋条約機構)南欧司令本部の管理官だった。

私はトルコ軍の友人数名とともに問い合わせ、結局一人の将軍に、トルコのこの特定の地区でUFO活動があることを実際に認めさせた。彼はこう言った。“そのとおり、そこは重要な場所だ。UFOが見たければ、いつか君をそこに連れて行ってやろう”

ペンタゴン(国防総省)にいたときに、私はコース大佐からファイルを幾つか入手してくるように使わされたことがあった。そのとき彼は、あの時代としては実に奇妙なことを言った。後年になるまで私は実際にそれを何事とも結びつけて考えなかった。彼はこう言った。“我々がしようとしていることを君は想像できるかい?” 私は“いいえ、できません”と言った。彼はこう言った。“よろしい。いつの日か完全に逆行分析(back engineered)された工学技術が世の中に出てくるだろう” そのときは彼の言葉は私の頭上を素通りしていった。私はただ、はい、上官殿、と答え、行儀のよい一兵卒のようにしてそこを立ち去った。私は大佐が私に言ったことを誰にも言わなかった。私はそれを自分の心にしまっておいた。私を使わした上司に対して私は、コース大佐は自分をすぐに追い払い、自分はそのまま戻ったと復命した。

そんなことはペンタゴンでは四六時中起きていた。資料はその所有者が厳重に保持している。後年、DIA(国防情報局)にいたとき、地球外知性体に関する幾つかの文書を見たことがあった。それらは暗語で書かれていた。普通の人が見ても気付かないかもしれない — それはまさに頭上を素通りするだろう。これらは最高機密文書だった。その大部分は今でも機密なのではないかと思う。その多くはソルト 1, ソルト 2 に関するものだった — ロシアとの戦略兵器制限条約(Strategic Arms Limitation Treaty; SALT)だ。

私はまた UFO の写真(複数)を見たことがある。それらは国立情報写真センター(National Intelligence Photographic Center) [NIPC] — そう呼ばれていたと思うが — からのものだった。時々そこにあるはずのない異常なものが写真に写っていることがあった — 丸い物体、三角形の物体。それらは何かの場所を示すために写真に付けられた目印ではなかった。これらは地面から浮いていた。これらの異常なものは、DIA の我々の事務所が受け取った一部の写真などに写っていた。我々はいつもそれらを興味深いものだと考えていた。それらはNIPCから送られたものだった。NIPCはアーリントン(バージニア州)のヘイズ通りに面した国立情報写真センターだったと思う。

それらが何か写真に付けられた目印のようなものの一部でなかったことは、ご存じのとおりだ。それらは通常の物体ではなかった。特に長方形物体、円形物体、三角形物体 — 三角形物体はその末端部が丸くなっていて面白い形をしていた。これらはほとんどがタレント・キーホール衛星(写真偵察衛星; TK) (複数)によって撮影されたものだ。それらの中にこれらの物体 — UFO — が写っていた。TK11, TK12 による撮影だった。時々我々は、それが[空中を]移動したときの写真を一枚一枚見ることで、実際にそれを追跡することができた — それが動いたことを知った。

私には少し面白い経験がある。私が所属していた DIA (国防情報局) の中ではなく、DIA での私の所管区域内にあったある事務所で起きたことだ。そこは私の保安区域内だったので、私はそこに行きその事務所を見てくるようにと、その暗号名を受け取った。それはオムニ計画と呼ばれていた。...それはレーダー衛星を扱っていた。私は中の小さな展示室でその軍曹の一人と話していた。私は衛星の姿勢に注目した。私は言った。“さて、これは地球上のレーダー異常を追跡するためのシステムだ。そうだね？”彼は“そうだ。そのためのものだ”と言った。それで私は訊いた。“ではどうしてその半分が月や何もない宇宙空間など、外側の宇宙を向いているのかい？”私はこう言った。“あなた方がそこに打ち上げた衛星の少なくとも半分は地球を見ていない — それらは何を見ているんだい？”彼は言った。“それを知るには、それを知る必要性を持っている必要がある”私は言った。“分かった。では誰が地球に向かっていているのかね？”彼は“我々には分からない”と言った。彼らは外側の宇宙から来る何かを追跡していた。それは随分奇妙なことだと私は思った。

私はまたキャンプデービット合意と SR-71、つまりブラックバード(*長距離偵察機)によるシナイ半島への偵察任務にも関わった。この時期に、何か地球のものではない物体がブラックバードに付き添って飛行したとの報告が幾つかあった。シナイ半島の写真(複数)には地形でも、人々でも、大気現象でもない異常が写っていた。

情報の分野では、区画化(compartmentalization)ということがたぶんすべてだ。一般市民は、機密分類に関して実に大きな間違いをしている。基本的には三つの機密分類がある：部外秘(confidential)、機密(secret)、最高機密(top secret)だ。それがすべてだ。最高機密より上はない。彼らは近づいてきて、アンブラやこの計画、オムニについて訊いてくる。彼らは TK、つまりタレント・キーホールやその類の他の計画について訊いてきた。ここで人々が知らなければならないのは、次のことだ。私はアンブラ文書を持っていたが、それはただの機密だった。最高機密ではなかった。それは同じではなかった。

情報機関が物事を行なう実態、つまり彼らがいかにして物事を分解するかについて話そう。彼らは大体がそれぞれの組織を他から孤立させておく。計画の中では複数の部門にまたがる仕組みはつくらない。たとえば私はアンブラ機密取扱許可を持っている。さて、人々はそれが最高機密よりも高い機密だという。違う、そうではない。それは一つの区画なのだ — 厳密な意味での区画だ — それ以上ではない。最高機密とは分類にすぎない。ウルトラはまた別の区画を意味する。それはまったく異なるもので、基本的に大統領に関係している。だからそれを不注意に扱うことはできない。そういうことなのだ。皆それ自体孤立している。それぞれがそれ特有の形の分析を行なう。

私は DIA で要求と評価と呼ばれる仕事をしていた。我々の仕事はワロップス島あるいはどこか別の場所から飛行体を飛ばす決定をすること — つまり衛星を打ち上げることだった。

我々は DC3 だった。DC4, DC5 もあった。それぞれの正確な名前を知るためには、実際に私の背景報告書を丹念に調べる必要がある — これが区画が行なわれる方法なのだ。その中の一つは分析だけを行なった — それが彼らが行なったすべてで、彼らはそれを我々の要求部に送った。だが、我々は実際に彼らが行なったすべてを見なかったし、彼らが作成した資料のすべてを見たわけでもなかった。彼らは我々に最終製品を渡し、我々はその最終製品を見て、そこから我々が何をするかを決定した。それが基本的な仕組みだ。オムニ計画、これはレーダー衛星だったが —

それ自体孤立していた。着けているバッジにオムニのスタンプがなければ、その事務所に入れなかった — 以上、それでおしまい。同じ事は TK(タレント・キーホール)あるいは他の多くについても言える — アンブラ, ウルトラ — すべて同じ線上にある。

NRO, 国家偵察局は基本的に空軍により運営されている。退役後にこれまで私が接触した人々から聞いて理解したところでは、偵察局はさらに多くの責任を引き受けるようになっている — 特に UFO と地球外知性体の活動への対処だ。

彼らはブルーブックが下車した場所から乗車したと言ってよい。ブルーブックは基本的にそれ自体空軍の計画だった。だがその活動は最終的に国家偵察局の管轄下に入った。

現在それは基本的に共同部局だが、空軍と統合参謀本部により運営されている。彼らはとても忌まわしい仕事を持っている。彼らが実際に何をしているかはあまり多く知られていない。だが彼らは SR-71 の後継機を運用している。それはロサンゼルスからロンドンまで約 18 分の[飛行]能力を持つ、あるデルタ翼航空機だと考えられている — だからそれは宇宙空間に近い所を飛行する。それはかなり高速だ。衛星画像はほとんどが背後に行ってしまった。タレント・キーホールは依然としてある。オムニもまだある。私は最早その暗号名すら知らないが、他にも数機打ち上がっている。だが偵察のほとんどは航空機によって行なわれる。

反重力に関して言えば、彼らはそれに長い長い期間取り組んでいる — 私はそれを知っている — だが基本的に私が見てきたのは磁気パルスエンジンだ。それは飛ぶときにとても変わった痕跡を残す。それは通常の燃料を使うが、それに磁気パルスエンジンが付いている。その痕跡とは、背後にできる、紐につながった石鹸のような飛行機雲だ。

誰でも知っているように、政府というものの影響は広範囲だ。それは皆のポケットに入っているし、あらゆる場所のあらゆる人々の生活に入り込んでいる。同じ事が UFO/地球外知性体の主題についても当てはまる。だが、きわめて少数の人間だけが何が起きているかについて完全に知っている。それは闇の秘密活動の中に堅固に保持されている。その背景に近づいてよく見ようとするなら、NSA の外側にある民間組織に行けばよい。彼らは NSA の直接の請負業者たちだ — ドライドン・インダストリーズはその一つだ。彼らはなぜ海軍のパイロットたちを使って偵察に SR-71 を飛ばしているのか？彼らは何を見ているのか？そのことを考えるなら、NSA は何を見ているのか？なぜ彼らはこんな事をしているのか？彼らは訓練のためにそれを使っているのではない。それはある一つのこのためだ。

組織内の幹部レベルでは、国家安全保障顧問が一員となる場合、内情に通じた NSA のトップとして厚遇されると言うてよいだろう。

彼が知っている範囲は限られている。というのは、彼はただ指名された者にすぎないからだ。その点に関して言えば、CIA で新しく指名された者も同様だ。彼らには知らされるだろうが、それはごく限られた知識だ。闇の秘密領域にいる一部の人々だけが、何が行なわれているかについて本当の情報を知ることになるだろう。

だが、NRO についてはあまり多くのことが知られていない — それは実に目立たない組織の一つだ。...この質問が上がるたびに、それは厳密な意味で偵察を行なう空軍の一組織だ、それでおしまい、となる。これでは多くの疑問が残されたままだ。だが、UFO、情報、地球外知性体問題に関する限り、この組織はまさしく頂点にある — 私は敢えて言うが、大統領はそれについて限られたことしか知らない。

私はカーターが何の知識も持っていなかったことを知っている。私はまさにその政権、カーター大統領の政権組織で働いていた。彼らはそれを堅い秘密にしていた。

SG: それがそれほど秘密にされていたのはなぜだと思いますか？

JM: 彼らがロズウェルで失敗したからだとは私は考えている。彼らはそれを認めるよりも隠蔽した。彼らは、UFO と地球外知性体の活動がこの政府が認めることになるよりもはるかに長期間続いているために、それを隠蔽した。ブッシュ(大統領) — ジョージ・W — がこう言いながらチェイニー(副大統領)のコートにボールを放り込んだのは滑稽だった。誰よりもこれについてよく知っている者がいるとすれば、それはチェイニーだろう。彼は何かとても興味深いことを知っている。...

この問題に関与している企業の中で、アトランティック・リサーチ社は主要なものの一つだ。だから、これはあまり頻繁には聞かれない。その目立たない存在をそう呼びたいければ、これは内部にいる環状道路沿いの悪党だ。その仕事の大部分を情報機関の内部で行なう。TRW、ジョンソン・コントロール、ハネウェル。これらのすべてがどこかの時点で情報分野に関わるようになった。ある種の仕事、活動は彼らに請け負わされた。アトランティック・リサーチはずっと以前からその一つだった。これらは‘環状道路沿いの悪党’になるためにペンタゴン(国防総省)の人々によって創られた組織だ — ある極秘の区画化されたプロジェクトを実行するために、プロジェクト、助成金、資金を受け取っていた。あまりにも秘密で区画化されていたために、何が行なわれているかを知る人間は4人ほどにすぎなかっただろう。それほど、それは厳重に統制されていた。

軍を退役した人々により始められた企業に目を向けるべきだろう。カリフォルニア州[SAIC](サイエンス・アプリケーションズ・インターナショナル社)にいるボビー・インマンと彼が監督する小グループがその一例だ。似たような企業が他にも幾つかある。そこで我々はこの質問をする。誰が実際にJPL(ジェット推進研究所)を支配しているか？なぜ JPL が組織されたか？他にもある：エイムズ研究所、フォートデトリック研究所だ。フォートデトリック研究所からは非常に興味を引く研究成果が発表される。そしてハリーダイヤモンド研究所。...これはとても長い間活動している。彼らのことはあまり耳にしなない。なぜなら、彼らは基本的にすべて軍と契約しており、ある特定の専門性を持っているからだ。

逆行分析記録をあなたが見たことがあるかどうかは知らない — それを行なう方法などの記録だ。とても変わっている。やり方を教えてくれる技術者と、その特別な記録を手に入れる。それを誰かの記録から表に引き出すのだ。そしたらそれを建造できる — まさしく逆行分析記録があれば可能になる。それがどのように機能するかを知るためには、それを分解する必要がある。

ロズウェルから我々が得たものを幾つか思い出すことができる。50年代中頃にカナダでも一つの

墜落事件があった。それはとても嚴重に隠されてきた。それらの物体を使った幾つかの工学技術計画が間違いなく存在した。

兵器と宇宙について：我々は月面に降り立った宇宙飛行士たちが発した一つの言葉に遡ることができるだろう。それは彼らがそこに到着した翌日だった。最初の飛行だった。彼はこう言う。“言うとおりで、彼らはすでにここにいる”私は無線交信から聞き出した。それを記録した人々がいることを私は知っている。だがその発言はとても尋常ではなかった。なぜならそれは公共放送された他のすべてのテープから素早く削除されたからだ。宇宙における兵器は今なお大きな謎だ。基本的に闇の秘密計画は、常にそのようなことをやろうとしてきた。スターウォーズ計画は無用の長物だ。その大部分は存在しなかった。それはすべて紙に書かれただけのものだった。レーザー兵器...これはまったく別の話だ。レーザー分野ではまったく新しい技術の急速な進歩がある。切断に使われるだけではない。パルスレーザーはそれを照射することで基本的に何でも破壊する。

SG: ではあなたは我々が宇宙に兵器を置いていると思いますか？

JM: 我々は宇宙に兵器を置いていると私は確信している。おそらく私の気持ちの中には何の疑いもない。彼らはスターウォーズ計画が始まるずっと前から、それらを開発しようとしていた。それは60年代終わりから70年代初めの頃だ。

ニクソンは、その方針に沿って宇宙兵器を建造するために何かをしたかった。そしてその計画が始まった。(ニクソン個人ではなく、その政権だ) 人々はそれを望んだ。それからそこには何かしらの恐怖が存在することになった。最初に地球に衝突する小惑星の話が出てきたのはそのときだ。実に、それはごく最近になるまで一つの大きな計画になることはなかったのだ。だがそのとき我々は、かなり危機的な状況に直面していたらしい — 今日彼らが騒ぎ立てるよりもっと差し迫っていた。こうしてそれは大きな関心事となった — 小惑星, UFO, 他の場所からやってくる人々。

[キャロル・ロジン博士の証言を見よ]

基本方針があった。構想があった。妄想もまた政府部内にはあった。ある段階で人々はそれを感じ取ることができた。それが起きていたことを人々は知った。彼らはその真実を語るだろうか？私には疑問だ。たぶんいつかはそうなるだろう。たぶんあなたのプロジェクト(*公開プロジェクト)が彼らに告げることになるだろう。英国と合衆国とカナダがこれらの秘密の最大の加担者だ。後になって彼らはオーストラリアをも巻き込んだ。

報道ということになると、メディアはとても片寄っている。論議を呼ぶ事柄になると、彼らは相手の感情を損ねることはしない — UFOや地球外知性体のような事柄だ。主流メディアに衝撃を与える目撃がこれまであまりに多く発生している。だが彼らは素早く死んだふりをする。なぜ彼らは死んだふりをするのか？メディアが追求すべきより大きな関心事が進行していた。だが彼らはそれをするをすげなく拒絶した。なぜ彼らはそうしたのか？彼らは背後から糸で操られていたのか？それは分からない。私はそれについて言えない。彼らもまた言わない...

これらの環状道路沿いの悪党たちにも、まさに同じ事が言える。彼らに何か話をさせることができ

るか？ノーだ。それこそ彼らの生きる道だからだ。彼らは自分自身の足を踏むことはしないし、自分に一発食らわすこともしない。

彼らは長年にわたり、我々から UFO や地球外知性体のような事柄を隠蔽してきている。それが真実だ。現在だけでなく 1900 年代より以前からだ。だからそれはそこにあるのだ。彼らが人前に出てきて、おいみんな、これが真実だ、と言う。もうそうしてもよい頃だ。

ハーランド・ベントレー氏の証言
Testimony of Mr. Harland Bentley
2000 年 8 月

ベントレー氏は NASA(航空宇宙局)や DOE(エネルギー省)を含む幾つかの政府機関で秘密プロジェクトに関わってきた。彼は電気工学の理学士号を持ち、原子核工学で広範囲の訓練を積んでいる。ベントレー氏はメリーランド州のあるナイキ・エイジャックス・ミサイル施設で 1 機の UFO の墜落を直接目撃したこと、レーダーに映った一群の UFO が空中静止した後に、時速 17,000 マイルと算出された速度で飛び去ったときのことを詳細に語る。彼はまた、1967/68 年に起きた事件についても語る。そのとき彼は、ヒューストン管制センターと飛行中の宇宙飛行士たちとの間で交わされた会話を耳にした。その内容は、彼らが 1 機の UFO との衝突を回避したこと、また我々の宇宙飛行士たちが UFO の入り口を通して生命体(複数)が動き回るのを実際に見たというものだった。

1957 年から 1959 年の間、私はワシントン D.C.の北方、メリーランド州オルニー近くにあるナイキ・エイジャックス・ミサイル施設にいた。私はレーダー操作員だった。1958 年 5 月午前 6 時頃に私は最初の音を聞いた。それは振動する変圧器のような音だった。私は窓の外を見やり、原野を見渡して、この[円盤型]物体が地面に向かって突進し、墜落するのを見た。それは破片を飛び散らしたが、その後再び離陸して飛び去った。... 私が見た最も大きな破片は実際に白熱しており、おそらく洗濯機くらいの大きさがあった。...

その宇宙機が墜落後に再び離陸したとき、それは木立の中を通ったが、太さ 3 ないし 5 インチの大枝をナイフかマシエティ(*さとうきび伐採用なた)のようにただの一撃で刈り払った。...

[ジョン・ウェーガント上等兵により詳述されている 1997 年にペルーで起きた地球外宇宙機の墜落との類似性に留意せよ。SG]

本当に驚くべき部分は、私が任務に就いていた翌日の晩に起きた。時刻は夜中の 10 時か 11 時頃だった。私はゲイサーズバーグ施設から連絡を受けた。電話は 12 ないし 15 機の UFO が 50 から 100 フィートの高さに見えているというものだった。私は無線交信の相手に“それらはどんな音を出しているか？”と訊いた。彼はヘッドマイクを外し、それをトラックの窓から外に突きだした。そしてああの振動音が再び聞こえた。だが今度はもっと大きかった。彼はそれらが様々な形をしているなどと説明していた。

私はレーダー、M-33 走査レーダーのスイッチを入れた。そしてゲイサーズバーグ施設がある場所の地面反射に隣接して、これらの宇宙機がいた場所に輝点を見出した。そのときまったく突然に

それらは同時に飛び去った。私のレーダースコープでは、それは1回走査する間に起きた。その走査速度は毎分33と1/3回転だ。その中心から最初の走査で次に輝点を見た位置までの距離を移動するためには、一定速度だとすると時速17,000マイルでなければならなかった。我々のアナログ計算機による数値だ...

私には、あまり多くは述べられないが、別の経験がある。その場所がどこかは言えない。私はカリフォルニア州のある施設にいた。私が言えるのはそれだけだ。そこで特殊な機密任務に就いていた。その出来事は、我々の宇宙飛行士たちが月を周回して再び姿を現す飛行任務中に起きた。彼らが月に向かう途中、11時の方角に1個のボギー(未知の目標を表す言葉で、しばしば特にUFOを言い表すのに用いられる)が現れるのを見た、と彼らが話すのを私は聞いた。

その特別な言葉をよく知っていた私は、耳をそばだてて聞き始めた。そしてヒューストンと宇宙飛行士たちが衝突について会話をやりとりしていることを知った。宇宙飛行士たちは衝突回避の許可を求めており、ヒューストンは最終的にその行動を許可した。後で宇宙飛行士たちは“それは必要ない。彼らは我々の航路と並行して飛んでいる”と言い、その航路と並行して飛んでいるものが何かについての議論があった。

それは別の種類の宇宙船だった。そこには入り口があり、彼らはその内部を見ることができた。そこにはある種の生命体(複数)が見えた。彼らはこれらの生命体について説明しなかった。彼らはただ写真(複数)を撮った。暫くして、数千マイル飛行した後で彼ら[ボギー]は接近した宇宙船から離れ、飛び去った。宇宙飛行士たちは、それを円盤型の宇宙機だったと言った。それは実際に彼らの宇宙船と並行して飛んでいた。彼らはそれが動くのを見た。彼らはその内部で何物か、あるいは誰かが動いているのを見た。これが起きたのは月面着陸の前だ。...そして彼らはこう言った。“彼らはそこにいる”彼らの会話から私が聞き取ったところでは、彼ら[ボギー]はほとんど瞬時に視界から消えた。この出来事は、私がいた場所[交信を聞く秘密の部署]のゆえに編集されることはなかった。

それは厳重な機密通信チャンネルだった...これが起きたとき、私と一緒にいた人間は一人だけだった。彼はこんなことを言った。“君は何も聞かなかった”私は言った。“何を聞いたというんですか?”事件についてはそれっきりだった。実際彼は私がそこにいてこれを聞いたことにとっても動揺していた。宇宙飛行士たちはこの出来事が起きたとき、月まで約半分の距離にいた...

マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者 ロバート・ウッド博士の証言
Testimony of Dr. Robert Wood, McDonnell Douglas Aerospace Engineer

2000年9月

ロバート・ウッド博士は彼の43年間にわたる経歴の全期間を、マクドネル・ダグラス社の上級航空宇宙技術者として働いた。証言の中で彼は、マクドネル・ダグラス社のある特別計画に関わったと述べる。それはUFOの推進システムを研究することだった。さらに彼は、航空宇宙業界には他の諸計画が存在することを確認する。彼の評価によれば、この主題は現実であるのみならず、地球外技術に関係している。彼はまた、この主題を取り巻く極度の機密についても確認する。

[3.3 節「なぜ UFO は秘密にされるのか」を見よ]

上級政策分析官 アルフレッド・ウェーバー博士の証言

Testimony of Dr. Alfred Webre, Senior Policy Analyst

2000年8月

アルフレッド・ウェーバー博士はエール大学から理学士号と法律の学位を、またテキサス大学からカウンセリングの教育学修士号を取得している。彼はスタンフォード研究所にある社会政策研究センターの上級政策分析官だった。1977年に彼は SRI(スタンフォード研究所)を通じてカーター政権の地球外通信計画に取り組んだ。その目的は、この主題についての知識を集め、政策提言をまとめることだった。NASA 局長のジェームズ・フレッチャーと国立科学財団が関係していた。その計画は始まると間もなく早々と不法に打ち切られた。この計画はすでにホワイトハウスの国内政策部により承認されていたものだった。

私は 1977 年のカーター政権地球外通信計画に取り組んだ...

[カーターが]1977年1月にホワイトハウス入りしたとき、私もまた SRI(スタンフォード研究所)にある社会政策研究センターに入った。面談の過程で私は、このセンターで一つの地球外通信計画をやりたい、そうはっきりと宣言した。私の計画は明確な同意が得られ、私はホワイトハウスで誰がこの主題に関心を持っているかを問い合わせるために動き回った。私はその人物に接触し、地球外計画の基本的な概要を打ち合わせるために会う約束を取り付けた。

だからこれは公然と始められた計画であり、透明性のある文民的性格のものだった — 秘密めいた側面はどこにもなかった。それはスタンフォード研究所の私の事務所で始まった...

その提案のもとで最終報告書が発表されていれば、それはホワイトハウス文書となり、彼らの機関の彼らの政策提言となっただろう。

NASA は我々が契約により連携しようとした機関の一つだった。当時の NASA 職員から直接聞いた話だが、その提案は局長ジェームズ・フレッチャーの事務室にあった。そのとき彼がその提案を握っていた。その研究を科学委員会と諮問委員会が厳しく吟味するという形で、国立科学財団もまたその提案に加わっていた。

管理者側全員と研究所側は、その提案について SRI の社会政策研究センターで心得顔に署名契約した。センターの統括者だったトム・トーマスがそれに署名した。ピーター・シュルツは私とともに上級政策分析官であり、またその提案の助言者だったが、彼はこのことを完全に承知していた。彼は現在グローバル・ビジネス・ネットワークの会長だ...

この計画は、ホワイトハウスと最初の接触が行なわれた 1977 年 5 月から、同年にペンタゴンの介入により打ち切られるまで続いた。

その研究の目標は、この主題についての知識の空白を埋め、将来のための政策提言をまとめる

ことだった...

提案はホワイトハウスの国内政策部内で知られており、承認もされていた。また、ホワイトハウス科学諮問局に回報されていた。それらは提案に名前が載っている諸機関だった。我々が最初の接触を持ったのは、スチュワート・アイゼンシュタットが率いるホワイトハウス国内政策部を通してだった。

1977年5月から9月の期間、私はその提案を単独供給契約の段階まで発展させるために、カーターのホワイトハウスを20日ごとに訪れ、ホワイトハウスの担当者と2、3週間ごとに会った。私の会合は、ホワイトハウスの行政府ビルでホワイトハウスの国内政策部担当者で行なわれた...

私はこの最終承認が与えられたホワイトハウスでの会合から飛行機で戻った。私がSRIの事務所に着くと、SRI上級役員の事務所に呼び戻された。彼はアフリカ系アメリカ人で、私は宣誓供述書の中で彼をジョン・ドゥーという名前で言及した。この準備会合に加わったもう一人はピーター・シュルツで、彼は私と同じ事務所を本拠地にしており、計画の助言者だった。そのSRI上級役員は私に、数分したらもう一人、SRIとペンタゴン(国防総省)の連絡役員が来ると言った。

その計画は打ち切られることになった。彼らはペンタゴンから直接に、もし計画を先に進めたらペンタゴンと結んでいるSRIの契約(複数)は破棄されるという連絡を受けていた。これらの契約は、研究、資金、ミサイル研究契約、その他の契約を含むという意味で、当時のSRI事業のある実質的な部分を成していた。その高級役員は私に、彼の言葉を引用すると、“偽装しろ”と忠告した。私はその話に従うふりをしろと — そしたら私は仕事を続けられるとほのめかしていた。

そのSRIとペンタゴンの連絡役員が入ってきた。彼のことを、私は宣誓供述書の中でジョン・ドゥー2という名前で言及している。彼は、この計画を止めなければペンタゴンとSRIの契約研究は破棄されることになると明言した。彼は計画が打ち切られたとはっきり言った。ホワイトハウスによって承認されたばかりの計画が打ち切られたのだ。彼の言葉を引用すると、“UFOなどどこにもいない”からだった。ことここに至って私は声を大にして異議を唱えた。私はUFOが実在することを示す基本データを列挙した。それは無駄だった。その高級役員はペンタゴン役員の側に立ち、その計画は打ち切られた。

私の知るところ、SRIはホワイトハウスにより承認された計画を取り消す習慣を — したがってその実例を — 持たない。それどころか、彼らは研究資金に極端に飢えている。ホワイトハウスがある計画を承認したときは、その系列諸機関からの資金確保がほぼ確実であることを意味し、彼らはそれを追って突進する...

その計画の完全な取り消しは、それ自体一つの秘密活動だったと私には思えた...

ここにはUFO問題を公開すると約束して政権についた米国大統領がいる；そしてホワイトハウスで公然と始められた研究、それが潰された...

この同じ時期に、NASAで大変重要な地位にある一人の同僚が進んで情報を寄せた。彼は、NASA局長がこの提案を再検討していたと確証した。これは裏付けとなるものだ...

元 SAIC 従業員 デニス・マッケンジーの証言
Testimony of Denise McKenzie, former SAIC employee

2001 年 3 月

デニス・マッケンジーは大手の国防関係請負業者であるサンディエゴの SAIC(サイエンス・アプリケーションズ・インターナショナル社)に雇われた。この会社に勤務しているときに、彼女は次のことに気付いた。SAIC には数百万ドルもの発注があったが、ほとんどの場合これらの契約のどれに関しても同社が活動したようには思えなかった。一見合法的に見える計画の中にかんして“闇の”予算が隠されているか、彼女はそれを明らかにする。ある上司の前にこの問題を持ち出してから、性的嫌がらせのあるパターンが始まった。

... 私がファイルを開いたところ、そこには成文書簡のみがおそらく 2 通か 3 通あった。しかもこれらの契約は数年前の古いものだった。その中にあった書簡(複数)は数年前に日付が遡っていたが、まったく同じ文面だった：“これは継続中、かくかくしかじか” それには、ときに数百万ドルの契約であることが書かれていた...

そこにあった様々の契約はすべて更新されるべきものに思えたが、それを裏付けるものは何もなかった。それに関しては何の活動も行なわれていなかった。私はとても奇妙な印象を持った...

私はこう思った。“こんなおかしい会社、今まで見たこともないわ。どうやって商売しているのかしら？こんなでたらめなやり方で、誰も何もしないで、どうしてこんな何百万ドルもの契約を受注できるのかしら” — そして、“ここに実体のあることは何もないのじゃないかしら”と思った。そこには何か秘密めいたものが感じられた。私たちはこうして大変豪華で経費のかかる事務所にいる。私は鉛筆を削ることさえしない。これは正気じゃない。私が何か始めようとする、これらのファイルに関係あることは何もない。

彼らは何もしないで多額の予算を手に入れている。そのお金はどこに流れているのか。これは隠れ蓑、何かの隠れ蓑のようだ。つまり、ここは資金を隠す、あるいは通過させる場所だった...

SAIC はあらゆることに名を借りて、自分たちがやりたいことを何でも行なう完全な体制を持っている — 何でも意のままだ。彼らは決して単独では物事を行なわない。彼らは、言うところの複合企業体だ。SAIC という組織がある。でもそれは多数からなる個別の企業集団だ...

それは個人所有の企業(複数)であるために、彼らが報告すべき相手は彼らと一緒に事業を行ない、契約している人たちだけだ。だから契約している人たちが、おそらく誰にとってもよい利益にならない何かをやろうとしても、誰もそれについて知ることはない。何もかもが組織の中で進行する：資金調達、資金供給、契約。ファイルがあるべきだ。どの計画にも書類とまともなスケジュールがあるべきだ。そんなものはどこにもない。もし私が軍の一部門で働いており、ファイルのすべてを扱えるとしたら、この書類はどこにあったのかしら？だから私は、このお金が全部どこに流れているのかと疑いを持った...

[注記: この憂慮すべき軍と産業の契約の世界を垣間見た経験は私にもある。これは USAPs (知られざる特殊接近プロジェクト)がいかんして偽装した計画の中に資金を隠すかを明らかにする。実際の資金は議会、大統領、あるいは米国民に知られないままに、極秘プロジェクトへと流用される。彼女は私が話をした、このような仕組みを知った唯一の目撃証人ではない。1994年に、当時バード上院議員が議長をしていた上院歳出委員会の主席弁護士ディック・ダマトが直接私に語ったところでは、400億ドルから800億ドルの資金が、彼らが分け入ることのできないプロジェクト(複数)に流れていた - 最高機密取扱許可と上院召喚権限をもってしても分け入ることができないプロジェクト。資金は間違いなくUFOに関係したプロジェクト(複数)に流れているが、誰もそれに入り込めない、そう彼は言った。彼がこう言ったのを私は覚えている。“スティーブン・グリア、君は闇のプロジェクトすべての代表チームを相手にしている - 幸運を祈る...”

デニス・マッケンジーが述べている奇妙な雰囲気と性的虐待についても言及しておこう: これはこのような活動に共通しており、稀なことではない。彼女が言っているように、それはある非現実的な感じを伴っている。彼女の採用係/上司が別のファーストネームで数年前に死んだことになっているといった話さえも共通のパターンだ。人々は死んだとされて一つのプロジェクトから姿を消す。そしてB博士が彼の証言の中で指摘するように、別の超機密活動に別の名前、あるいは少なくとも別のファーストネームを持って再び現れる。本質的にSAICは超機密プロジェクトの世界における優良企業の一つなのだ。そしてUFO工学技術(複数)と隠れた資金調達に結びついている。前NSA局長のボビー・インマン提督は深くSAICに関わっている。このことに留意する必要がある。ここでもまた我々は、ロジン博士が述べた軍と企業プロジェクトの間に存在する転身の実例を見る。1994年にバリー・ゴールドウォーター上院議員と会った後で、私は上院議員にインマン提督の公開への協力が得られないかとお願ひした。あのとき彼(インマン)はゴールドウォーター上院議員を断固として拒絶した。彼や他の人々が真実を持って早く名乗り出てくることを我々は願う。SG]

米国陸軍大佐(退役) フィリップ・J・コースの証言 Testimony of Colonel Phillip J. Corso, Sr., US Army (ret.)

[このインタビューを我々と共有してくれたジェームズ・フォックス氏に深甚なる謝意を表する]

フィリップ・コース大佐は、アイゼンハワー政権の国家安全保障会議の一員を務めた陸軍情報将校だった。21年間の軍勤務の後、彼は軍事分析官になった。コース大佐は1947年のロズウェル墜落による地球外知性体の遺体(複数)と1機のUFOを、ある空軍基地で直接見た。彼はまた、UFO(複数)がレーダー上を時速4,000マイルで飛行するのを見たことがあった。彼が研究開発プロジェクトにいたとき、方々で起きた墜落から回収された地球外工学技術の破片(複数)を受け取った。彼の仕事は、これらの工学技術がどこか地球上のものだと言って、それを産業界に植え付けることだった。

これらの地球外知性体は別の知性体だ。彼らは我々よりも進歩していることを証明している - 一つのことを見ただけで分かる - 彼らは宇宙空間を飛び回ることができ、我々にはそれができない。簡単に言えばそういうことだ。我々はいかにしてそれを克服するか?我々はそれについて何も知らない。だから知っていることから始める必要がある。そのわずかに知っていることとは、彼らが

我々に与えてくれた偉大な贈り物だ — 単なる機械装置ではない地球外物体。

私が見たその宇宙機は、ある空軍基地にあった。それがどこなのか、私は言うつもりはない。だがそれはそこにあり、それは本物だった。私はその内部に入らなかった。内部に何があるか私は多くを知っていた。内部に入ってそれを見ても私が得るものは何もなかった。私は内部の様子を描いた絵(複数)を持っていた。そこに何があるのかは知っていた。実際に内部に入ったとすれば、それは好奇心だっただろうが、当時の私には好奇心を満たす時間などなかった。

その地球外知性体だが、少し変わっていた。それはある意味では、人間もそうであるように、細胞でできていた。その宇宙機は、実際のところほとんど生物的構造をしていた。というのは、その地球外知性体はそれにはめ込まれていたからだ。これらの生命体をつくった者たちは、それらを何のどこにはめ込むかを考えてつくった。その宇宙船それ自体が生物的構造をしていた。...

さて、この生命体が地球に来るときには衣服を着る — 身体に密着する衣服だ。我々はそれを発見した。その皮膚は自動的に調整され、衣服もまた自動的に調整される。これは放射や有害な作用を防ぐためだ — 宇宙線をさえも防ぐ。その生命体は空気を呼吸しないので、生きてこの地球に来るものはある種のヘルメットを着けることになる。それは言葉を発しないので声帯を持たず、交信ができるように意志の伝達を増幅する何かを持つことになる。

...

私はこれからその話をしよう。私は 1947 年にロズウェルにはいなかった。1947 年に私はイタリアから戻ったばかりだった。私はローマで情報保安責任者をしていた。情報分野の仕事で私は英国人から訓練を受けた。私は MI-19(*英国軍事情報活動第 19 課)の一員だった。私は帰国してカンザス州フォートライリーに行った。私はそこで勤務した。私は情報学校の教官だったが、そこには攻撃部隊があった。ある夜、私は第一当直士官に就いた。第一当直士官とは、その夜の管理責任者は私だったということだ。それで私はすべての警備、保安地区を点検した — 私はすべての持ち場を点検した。

こうして私は獣医地区に行ったが、私がとてもよく知っている軍曹がその夜の警護軍曹だった。私は彼に言った。“やあ軍曹、この辺りは何もなかったかい？”彼は言った。“はい、異常ありません”私は彼に言った。“この地区を見回るときは注意しろと皆が言っている。君が何か機密物を警護しているからだと言うんだ”彼は言った。“上官殿はそれを見たいですか？”私は彼に言った。“ああ”彼は言った。“見に行きましょう”私はその軍曹(曹長)を知っていた。

私が来た道に戻ると、そこには 5 個の木箱があった。5 個か 6 個、私は 5 個だったと思う。私はその一つの蓋の端を持ち上げた。そこには液体に浮かんでこの遺体があったのだ。私はそれを 10 ないし 15 秒間見た。それ以上は見なかった。私は蓋を元に戻して言った。“軍曹、今すぐここを出るんだ、君をトラブルに巻き込みたくない。私は当直士官だからここを歩き回れる。だが君はここから戻ったら困ったことになる。私と一緒に来るんだ”我々はそこを飛び出した。私は彼に言った。“あれらの箱はどこから来たんだ、軍曹？”彼は言った。“はい、5 台のトラックがニューメキシコからここまで走り通して来ています。彼らはライト・パターン空軍基地に向かっています”

さて、当時高速 40 号線はほぼ唯一の大陸横断道路だった。彼らがとった経路はカンザス州フォートライリーを通り、次にライト・パターソン空軍基地に向かう高速 40 号線だった。それで私は言った。“それに近づくなよ、軍曹。君にはどんなトラブルにも巻き込まれて欲しくない” 私は彼に言った。“私なら歩き回れる” それから私は考え始めた。あれは何だったのか？最初、私はそれを子供だと思った。なぜならそれは小さかったからだ。次に私はその頭部、そして全部を見た。これはほんの数秒のうちに起きたことだ。それから私は蓋を元に戻した。その頭部は変わっていたし、腕は細く、身体は灰色だった。そしてその瞬間に私は、これは私の知らないものだとは断定した。こうして私は情報分野の仕事の中でそのことを心の奥にしまい、それが何であるかを判断できる裏付けが将来現れるかどうかを待つことにした。それについて私はすぐに忘れてしまった。

その 10 年後、私はニューメキシコ州コマンドレンジの近くにいた。陸軍ミサイル射撃場があるホワイトサンズの中で、私の本部があるトリニティサイトの近くだった。自分自身が使うレーダーにより、私はこの地区を時速 3,000 から 4,000 マイルで動く物体を捉え始めた。私のレーダーは目標を自動追跡するペンシルビーム型で、皆はこれらの物体が時速 3,000 から 4,000 マイルで動いていると私に語った。

一度私は本部に通報した。彼らはこう言った。“忘れろ — 我々はそんなものに興味はない” それで私は、今後彼らには何も言わないのがよいのだと思った。この現象が起きるたびに、私は皆に言った。“そのテープを私に持ってきてくれ” 私のコンピュータ全部にテープがあった。それには射撃の全経過が記録されたので、我々は何か不具合がなかったかを調べることができた。私は皆に言った。“そのテープを私に直接渡してくれ”

それから私はそこを去り、ドイツに行った。ドイツでも私は同じ現象を捉え始めた — ドイツ上空を時速 3,000 から 4,000 マイルで飛ぶ物体。ここでもまた、ペンシルビーム型レーダーが自動追跡すると、自動追跡されたすべての UFO がそれを逃れようとした。

それから私は 4 年間ホワイトハウスに勤務した。そこで私は報告書を受け取り続けたが、それらは報告書にすぎなかった。私はあらゆる機密取扱許可を持っていたので、それらを手にした。暗号報告書(複数)をさえも手にした。私はあるとき、NSA(国家安全保障局)が宇宙から信号を受信しているという一つの報告書を実際に目にした。その信号は宇宙雑音でも、解読された信号でも、判読できない何かでもなかった — それらは実際にきわめて完璧で、何者かが本当のメッセージを伝えようとしているように見えた。だが我々はそれを解読できなかった。これは大変組織化されたメッセージだった。それは宇宙雑音でもなく、わけの分からぬ言葉の類でもなく、ただの雑音が入ってきたのでもなかった。

[ジョン・メイナードとA・Hの証言を見よ。SG]

それはあるパターンだった。下された評価は、それが大気圏外の実体から来ているに違いないというものだった。その報告書を私はホワイトハウスで手にした。というのは、私は NSA を含めてあらゆる機密取扱許可を持っていたからだ。私が戻ると、トルドー将軍が私を部屋に入れた。彼はある研究開発プロジェクトを組織していた。... 最初私は特別助手として初出勤した。それから約 1 週

間後に彼は外来工学技術部を設け、私をその責任者に据えた。そこで私はETたちの検視解剖報告書を受け取り始めた。また他で起きた墜落報告書とその墜落から回収された人工物を受け取り始めた。私はこの場所[ニューメキシコ州ロズウェルの近く]を2、3回訪れた。

...

研究開発プロジェクトに入ったとき、私はこれらの人工物のすべてを引継ぎ、ウォルター・リード病院からの検視解剖報告書(複数)を引き継いだ。現在ウォルター・リード病院には一つの研究室があるが、そこは我々が資金提供をした我々の研究室だった。つまり、彼らが我々のために検視解剖をした。だが我々はその間にコピーを何も残さなかった。そこは我々の研究室だったので、すべてのコピーは我々の手元に戻る必要があった — その資金はすべて我々が出した。こうしてそこで我々は、墜落が実際にここで起きた証拠を入手し始めた。

言うまでもなく、私はそれについて35年間沈黙していた。私は将軍に誓約しており、人々の名前は明かさなかった。私の息子はこう言った。“お父さんは35年間秘密を守り、家族にさえも話さなかった” 私は考えたものだ。“私が他人に話すことなどあるか?” さて将軍は私にこう言った。“これは秘密にしておこう。だが私が死んだら、私との誓約からは解放してやろう”

3年前に将軍が亡くなったので、私はこのすべてを紙上で発表し始めた。私の孫が言った。“おじい様は戦争で何をしていたの?” 私は彼らに一つの遺産を残すのがよいと考えた。軍にいるとき、私は本を書くつもりがなかった。だが結局、その気持ちが高じて私は徐々に書き始め、こういうことになった。これが私の背景であり、またすでに述べたように、私はここで墜落が確かに起きた証拠を手に入れた。

ウィルバート・スミスは天才だったが、彼に対する政府の態度は実によくなかった。私は彼と一緒に彼の研究室に行くことになっていた。というのは、将軍が彼にこう言ったからだ。“スミス君、君と大佐には話し合うことが沢山ある。私はオンタリオ湖に面した君の研究室まで大佐を行かせるつもりだ” だが私はその訪問を遅らせ、1962年に行く決心をした。私は電話をした。そしたら彼らはスミス氏が癌で死亡したと告げたのだ。だから私は彼の研究室に行ったことはなかった。彼は我々に、ある空飛ぶ円盤から取った一片の金属片を提供した。

[スミスのメモとB博士その他による証言を見よ。SG]

我々は[墜落したUFO(複数)からの]金属サンプル(複数)を交換した。彼は我々のものを後で返却した。

議会に対して私はこう言う。“それは実際に起きた” そしてこう付け加える。“この情報を世界中の若い人々に知らせよ — 彼らはそれを聞いたがっている、彼らは望んでいる。それを彼らに与えよ。隠さず、嘘をつかず、作り話をするな。彼らは愚かではない。彼らはパニックを起こす若者たちではない” 実は私の甥はDECO社の研究部長をしている。彼が私に電話をしてきて、こう言う。“フィル伯父さん、どうして彼らは我々に真実を語らないのだろうか? 我々はパニックにならないし髪の毛を掻きむしることもしない”

私がいつも言うことだが、若い人々がそれを望んでおり、パニックにならないことを証明する一つのよい例がある： 私はいつもこんなふうにしてそれを証明する — 私は 1,500 人の大隊を指揮した。ある戦闘大隊で、兵士の平均年齢は 19 歳だった。ある日私は幹部クラスに言った。“大変だ、我々は赤ん坊を戦闘に送ろうとしている” これらの青二才たちは世界で最も手強い敵と戦った。彼らは逃げなかった。彼らはパニックにならなかった。彼らはそこに立ちほだかって闘った。彼らがパニックになるとなぜ考えるのか？彼らはこの情報を望んでおり、その資格がある。それは彼らの情報だ。それは陸軍や国防省のものではない — それは彼らのものだ。もしそれが機密なら、その機密を外し、彼らに与えよ。

私はいつもこう言う — 政府は巨大かつ広大だ。だから放っておくとそれ自身を覆い隠してしまうだろう。私が戦争捕虜・行方不明者委員会、議会、上院、また比較的最近では下院で証言したとき、人々は私にこんな質問をした。私は人々に言った。“もしスコウクロフト将軍とキッシンジャーがここに来て皆さんの前に姿を現し、何の情報も持っていないなどと言ったら、とんでもない話だ。私自身が 2 年間にわたり東京から電話会議でそれを送ったのだ。彼らはそれに何と答えるだろうか？”すべての家族がそこに座ってこれを聞いたがっていた。我々は後でそのことを調べて分かった。それは無視されてしまった。政治家たちは気にかけなかった。彼らにはそれぞれの小さな自尊心があり、新聞に載るための小さな仕事を持っている。一人の戦争捕虜が家族の元からいなくなっても彼らは気にかけない。こうして時々誰も何もしないことによるもみ消しが起きる — 私が述べたように、それは自らをもみ消し、姿を隠す。

我々は CIA を信用したことはなかった。その理由だが、私が若い頃、スターリンが彼の一流科学者と工作員の何人かに、ロズウェルから出てきた情報を入手するように命令した。その命令は実行に移された。特殊情報部(私はペンタゴンにいた)の中で KGB がそれに侵入を試みたが、侵入できなかった。スターリンがこの辺りの隅々まで工作員を送り、ロズウェルの情報を得ようとしていたとき、我々は間抜けのように尻込みし、それは存在しないと断言していた — 我々はそれを気象観測気球だと言った。彼らはそれを気象観測気球だとは考えなかった。なぜなら、彼らはこの事件が起きていたことを示す何かを持っていたからだ。

[ゴードン・クレイトンの証言を見よ. SG]

ヨーロッパの国々はこれを真剣に受け取っている。彼らは我々のようではない。彼らは空から何か模型が降りてきたとか、これらの人々は酔っぱらっていたとか、そうは考えない。彼らはこのことについては我々よりも真剣だ。だがここでは人々が示す反応について私は驚かない。一部の人々は私のようにこのことを公にしてこなかった。軍を退役した後、人々の前に出てインタビューを受けたり本を書いたりもしない。

我々は ET の工学技術について情報を与え、彼ら[企業]が是非特許を取るようになってきた。だが同時に我々は少し注文もつけた： その陸軍の優位性に資する技術を我々に還元して欲しい — 特許を取れ、利益を上げろ。だがそれを米国民に還元せよ、それを世界に還元せよ。

日本人が私にインタビューした。私は彼らにこう言った。“我々が集積回路を製造したら、あなた

たちにも提供しよう” 私はこれまで六つの議会委員会で証言した。もし私に証言させようと思ったら、彼らが真剣で、それを資料保管庫にしまったり片づけたりしないことが条件だ。．．私は上院議員や下院議員が当選するのを手助けするためにそこに行くつもりはない。

よく聞いて欲しい。多くの愚かしさがついてまわっている — それに立ち向かおうではないか。私の些細な愚かしさは長い間沈黙していたことだ。だが私は将軍が 3 年前に亡くなるまで語ることはしないと誓約していた。他にも関わった人々はいたが、前にも言ったように、私は彼らが進んで名乗り出るまでそれを明かさない。だが我々はもっと多くのことをすべきだった。

[ET の]頭部は実際にはそんなに大きくなかった。だがその小さな身体に比べたら大きく見えた。後に私はその検視解剖報告書を 1961 年にウォルター・リード病院から入手した。私が外来工学技術部の責任者だったときだ。そこから私はすべてをつなぎ合わせる作業を開始した。身体内部の性質はその検視解剖報告書に書かれていた。彼らは検視解剖を行ない、脳とすべての部分を切開した。脳は変わっていた。身体の大部分も変わっていた — 鼻はなし、口もなし、耳もなし。声帯も消化器官も、生殖器官もなかった。だから我々が到達した結論は、それは人間の形をしたクローン(複製生物)だというものだった。すでに述べたように、私とその遺体を見たとき、考えを先に進めることができなかった。時が経ち、私は専門家たちが行なったその検視解剖報告書を入手した。我々が用意した専門家たちだ。

だが我々はそれを我々のうちに留めた — 限られた人々だけがそれを知った。頭から頭へ、頭脳から頭脳へ、文書に残さずに。我々は何かを成し遂げることができた。そして[第二次大戦後にペーパークリップ作戦の中で連れてこられた]ドイツ人科学者たちと議論した。

トルドー将軍がある日私に言った。“誰かが始めたトランジスタを完璧に発展させ、集積回路を完成させるのに 5 年かかった。もし我々がヘルマン・オーベルトやウィルバート・スミスのような人々、そして進化した人々の援助がなければ、それには 250 年かかっていただろう。私の本の中にある私が好きなメッセージは、若い世代がこれを見て我々がやったことを理解し、我々が大気圏外からの援助を受けたこと、そしてこれらの生命体が実在することを理解することだ。それが君たちがこれから見てその中で暮らすことになる未来だ、そう若い人々に知らせようではないか。

それが本に込められたメッセージであり、私が望んでいることだ：若い人々にそれを与えよ。．．我々は老いている、我々は間もなくこの世を去る、これらの若者たちに知らせよ。．．彼らにはこの援助が必要だ。彼らこそがこれを引き継いでいく者たちだ。

グレン・デニス氏の証言
Testimony of Mr. Glen Dennis

2000 年 9 月

デニス氏はニューメキシコ州ロズウェルの葬儀社に勤めていた。あの有名なロズウェル墜落があった 1947 年 7 月、ロズウェル陸軍飛行場の遺体処置係から彼に電話があり、密閉型の幼児用棺はないかということだったが、その理由は説明しなかった。その日彼は救急搬送の仕事でその飛行場に着くと、そこには正体不明の残骸があった。彼が知る一人の看護婦が、今基地で異星人の遺体

(複数)を扱ってきたと彼に語った。

GD: グレン・デニス氏

RS: ラルフ・シュタイナー

GD: 我々の葬儀社は、ロズウェル陸軍飛行場にあるすべての部署と契約していた。この人物が電話をしてきて、自分は基地の遺体処置係だ、少し情報が欲しいと言った。それで私は、どういことでしょうか？と言った。彼は密閉型の幼児用棺が私の所に幾つあるか、3 フィート半あるいは 4 フィートの棺の在庫があるか？と言った。私は在庫はないと言った。それらを準備するのにどれくらいの時間がかかるか？私は、午後の 3 時半までに電話すれば朝には用意できます、と言った。私は、何があったのですか？と訊いたが、それは重要なことじゃないと彼は言った。

彼は後でまた電話をよこし、もっと情報が欲しいと言った。彼は組織や胃の内容物を変えてしまう死体防腐用薬剤は何か、また数日間風雨に曝されている遺体を保存するために我々ならどうするかを知りたがっていた。それで私はこう言った。あなたは遺体処置係でしょう、それを私に訊くんですか？私はこの電話の相手が誰かを知らうとしていた。

その日私には救急搬送の仕事が生じた(*別の関連記事によれば、オートバイで怪我をしたパイロットを基地の病院まで運ぶ仕事が生じた。霊柩車は赤いライトを付けて救急車も兼ねる)。私が基地に着くと、そこには3台の陸軍航空隊救急車が、後部を上にして傾斜路に停まっていた。我々はその傾斜路を歩いて登ったが、そこで私は(*後部ドアが開いていた救急車の中に)大量の残骸を見た。手続きをしながら入り、私は言った。墜落があったようですね。こちらで準備する必要がありますか？そしたら彼がこう言った。一体お前は誰だ、ここで何をしている？それで私は言った。ええ、救急搬送で来ました。こちらのすべての部署と契約しています。墜落があったようですね。彼はただこう言った。ここにいろ。動くな。それで私はそこから動かなかった。間もなく彼は二人の軍警察を連れて戻ってきて、こう言った。この男を基地から出せ、ここにはならないヤツだ。

何が起きたのかは知らないが、ここに勤務するすべての医者と看護婦に、出勤しないように命令が出された。ライト-パターソンからこれらの専門家たちがここに入り込んでいる、それが理由なのだと私は理解した。

こうして、明らかに私は関わるはずのない物事に巻き込まれた。

私はこの看護婦を知っていた。この看護婦は出勤するなという命令を受けなかった。彼女はライト-パターソンから来ていた二人の病理学者に会った。彼らはそのロズウェル墜落と我々が呼ぶ UFO 墜落から回収されたものを調べていた。彼らは言った。少尉、もう少し手伝って欲しい。これを君にやってもらおうつもりだ。彼らには彼女が必要だった。こうして彼らは[その ET から切り離した]1本の手を裏返し、彼女はそれを 4 本の細い指、長さはこれこれなどと言った。彼女はその中に長くて 20 ないし 30 分以上はいなかったが、彼ら全員の目が焼けるように痛くなり始め、皮膚も熱くなった。自分たちが何に曝されたのか、彼らには思い当たらなかった。その二人の病理学者は、解剖学書にこれと似た物はどこにもないと言った。我々の医学校にそれと似た物はどこにもなかった。彼らはこのような物を見たことがなかった。そのすぐ後に ET の遺体(複数)はこれらの袋に入れられた。

RS: その看護婦はそれらがどんな様子だったか、あなたに説明しましたか？

GD: その軍警察(複数)が私をホールまで連れてきたとき、彼女がこのタオルを顔に巻いて物品室から出てきて、こう叫んだのだ。グレン、ここからすぐに出て。翌朝私はある会議室の中の将校クラブで彼女に会った。何が行なわれていたか、それらがどんな様子だったかを描いた一枚の小さな図を彼女が私にくれたのは、そのときだ。それは現在我々が目にする小さな図(複数)の大部分に似ていた。つまり、4本の細い指と長い腕、大きな目だ。頭部はほぼ完全に損壊していたが、そこに二つの穴だけがあるのを彼らは見る事ができた。それらには耳たぶがなかった；二つの外耳道があった。口は約1インチしかなかった。それが彼女が私に説明した内容だった。

私はその日の11時半まで彼女と一緒にいた。同じ日の午後3時半に、彼女の上司が私に電話をしてきて、こう言った。君の友人は転属になった。私は彼女の隊員番号と他の何もかも知っていたが、現在に至るまで彼女を見つけられないでいる。彼女と連絡をとったこともない。彼女は修道院に入る考えを持っていた。それで彼らは彼女を除隊させ、自由にさせたのではないかと私は考えている。そこは誰かを黙らせるにはよい場所だ。

[ここには地球外知性体に関係した出来事を目撃した人々が突然別の部署に移され、他の目撃証人から隔離されるといふ、繰り返されるパターンがある。SG]

軍警察の一人が私を脇に連れていき、はっきりこう言った。いいかお前さん、ここを出て行って噂を広めるんじゃないぞ。ここでは何も起きなかった。もし何かしたら、分かっているだろうが、深刻なことになるぞ、と言った。そのとき私はやや憤慨していたので、こう言った。私は民間人だ(*手出しはできないはずだ)、地獄に落ちろ。そのとき彼はこう言ったのだ。地獄に落ちるのはお前だ。もし話したら、誰かが砂の中からお前さんの骨を拾うことになるぞ。

私が見た、墜落から回収されたその物質は、アルミニウムにもステンレスにも似ていなかった。それに似ている物はもちろん当時の我々にはなかった。それは実に明るい灰色、ほとんど白だった。またその幾つかは実に黒かった。それはむしろ現在の繊維ガラスに似ていた。それはへこんだりはしなかった。それは振られたり切り刻まれたりといった、あらゆる変形を受けたように見えた。だがそれには本当に鋭角的なへこみというものがなかった。それがとても細かったことを私は知っている。それがきわめて細かったのを私は見る事ができた。

それらの軍曹の一人がこう言った。さあ、ヤツを片づけよう。誰もヤツのことなんか信じない。誰もここで起きたことなんか信じない。

[実にこの問題に関する真実は、ほとんどの人々の現実の遥か外にあり、そのこと自体が最良の覆いになっている。真実は白日のもとに曝されてもそれ自身を覆い隠す]

米国海軍中尉 ウォルター・ハウトの証言
Testimony of Lieutenant Walter Haut, US Navy

2000年9月

ハウト中尉はニューメキシコ州ロズウェルにあるロズウェル陸軍航空基地の広報担当官だった。そのとき近くのコロナで1機の地球外宇宙機が墜落した。彼はそこで1機の空飛ぶ円盤が墜落したという最初の話 공개したその人物だった。その話は翌日に撤回された。

...我々は1機の空飛ぶ円盤を手に入れた。それはロズウェルの北にある農場で発見され、レイミー将軍の事務所に空輸された - そこは第2位の司令部、第8航空軍だ。それでお終いだ。私が得た情報は、ブランチャード大佐からほとんどそのままの言葉で与えられたものだ。彼は目の前に置いたメモ帳をすらすらと読み上げ、私はそれを書き取っていた。我々がそれを終えたとき、私は一種の畏怖の念に打たれていた...

彼らが[墜落した地球外宇宙機から]大小あらゆる残骸を1機の航空機に積み込み、持ち去ったことを私は知った。だが、[報道発表が行なわれた後]私にはひっきりなしに電話がかかってきた...

隠蔽はとてよく組織化されていた。事件に対するその対処の仕方は、いろいろな経路を通してワシントンから降りてきたと思う。そして我々はすべて間違っており、それは気象観測気球だったと告げられた...

そこには実に多くの隠蔽があったと思う。物体は大気圏外から来た何かだというのが、私の偽らざる気持ちだ。軍は次のように決めつけた。何かが大気圏外からやってきて、我々が地球に衝突した、これを国民は寛大に受け入れないだろう。人々にそれを受け入れさせるのは少し難しい...

米国空軍軍曹 レオナルド・プレツコの証言
Testimony of Buck Sergeant Leonard Pretko, US Air Force

2000年11月

プレツコ軍曹は通信の訓練を受け、ハワイのヒッカムフィールドに勤務した。1950年代初め、250人以上いた野外劇場で9個の銀色円盤を皆が目撃した。それらは真珠湾入り口の上空を不規則に動き回っていた。その現象は約10分間続いた。別のときに彼はこんな話をした。彼はダグラス・マッカーサー将軍の個人警護隊の一人と友人になったが、その友人は彼に、マッカーサーがロズウェル墜落から回収された宇宙機と地球外知性体の遺体(複数)を見たことがあったと語った。

...皆が右方を向き、真珠湾入り口の上空に目を向けた。そこには9個の銀色円盤があった。我々が見た最初の光景は1個の“L”字のようだった。我々がそれに気付く前に、それらはあちらこちらと動き回り、あらゆる種類の飛び方をしていった。それは約10分間続いた。誰もがただ眺めていた。そこにいたある中佐が立ち上がり、こう言った。“皆さん、心配しなくていい。あれは全部ただのスポットライトだ”

そうでないことは馬鹿でも分かる。私は立ち上がって言った。“中佐、スポットライトだなんてどうい

うつもりですか？どこにも雲なんかありません。光線などどこからも来ていません”彼は私に口をつぐめと言った。そのときその大佐が立ち上がった。名前はミラーだった。彼は言った。“中佐、君こそ口をつぐめ。ここにいる人々を馬鹿にするのは止めたまえ。ここにいるのはすべて軍人だ”こうして我々はその物体(複数)を約 10 分間見た。それらはただ飛び去った。

これらの物体だが、実に速かった。これらの物体を追跡した記事をホノルル新聞で読む機会がたびたびあったが、一度などはハワイから日本まで 8 分で移動した。...

彼は私にこう言った。“私がダグラス・マッカーサー将軍の警護隊の一員だということは知っているだろう。私はこれから暫く米国に派遣される。ダグラス・マッカーサー将軍はロズウェル事件のことをとても詳しく知っていた。墜落した残骸物とその遺体(複数)についてもだ。なぜなら彼自身がそれらを見ていたからだ。彼が私に語ったのはそういうことだった。その日から 5 年前まで私は一言も話さないできた”

軍隊では人を馬鹿にすることがよくあり、私はこれらの UFO 事件で何回か馬鹿にされた。私が言われたのは、もしこのくだらないことをまた言い出すなら、決して曹長になれない、ということだった。私の上司はこう言った。“もし君がこの馬鹿げたことにいつまでも拘るなら、君は曹長に昇進できない。君は工科大学行きの命令は受けるだろうが、曹長にはなれない。君は軍隊を出ていかざるを得ない”

米国海軍 ダン・ウィリス氏の証言 Testimony of Mr. Dan Willis, US Navy

2001 年 3 月

ダン・ウィリス氏は最高機密クリプト・レベル 14 取扱許可を持って、1968 年から 1971 年まで海軍に勤務した。その後、彼はサンディエゴの海軍電子工学センターで 13 年間働いた。彼はアラスカ海岸近くの商船からまったく普通ではない交信を受信したときのことを語る。その内容は、直径約 70 フィートの赤味がかかったオレンジ色に輝く楕円型物体が海から現れ、急上昇で上空に飛び去ったというものだった。それが時速 7,000 マイルで移動する様子がレーダーで追跡された。何年も経ってから、ウィリス氏はこの話を NORAD で働いたことのある知人に語った。その知人はこう言った。NORAD のレーダーが指示範囲を超えるほどの速さで移動する物体(複数)を追跡したことがたびたびあった。そういうあるとき、年配の上司が、いつものことのように彼に言った。“我々の小さな友人たちの一人が来ていたのだ”

... その交信内容は次のようだった。... その内容を私はとても鮮明に覚えている。その交信が明らかにしたのは、それは海から現れた、船のすぐ近く、左舷船首、1 個の赤味がかかったオレンジ色に輝く楕円型物体、直径約 70 フィート、水面から飛び出し、急上昇で上空に飛び去った、このようなことだった。船のレーダーがそれを追跡した。その速度は時速 7,000 マイルを超えていた。この内容のすべてが今までずっと私の心から離れなかった。...

私は NORAD で働いたことのある職員の何人かと一緒に働いた。我々は UFO を話題にしていた。彼が言ったことを引用すると、こうだ。“私が NORAD で働き始めの頃、全土のレーダー監視スクリ

ーンがあったが、突然何かはそのスクリーンを横切った。そして指示範囲 — この物体の速度表示値が指示範囲を超えた。．．” そのとき年配の上司の一人が、いつものことのように、こう言った。“なに、我々の小さな友人たちの一人が来ていたのだ”

ロベルト・ピノッティ博士の証言
Testimony of Dr. Roberto Pinotti

2000年9月

証言の中でピノッティ氏は、イタリア空軍のファイルにある215例の説明できないUFO事件について語る。彼は1930年代に遡るイタリアの公式文書、特に当時のファシスト政府がUFO目撃に対処し記録に残した1936年の文書を入手した。ムッソリーニはこれらの説明できない航空機をとて心配していた。というのは、それらはイタリア空軍に影響を与えるに違いなかったからだ。その文書には、より小さな空飛ぶ円盤型のUFO(複数)をはき出している長い航空機のことを述べられている。一つの目撃がベニス上空で起きた。空軍はこれらの航空機を迎撃しようとしたが、それらがあまりにも速過ぎるためにできなかった。最近、イタリア空軍の情報局長オリベロ将軍がこの問題について、こう言及した。UFO問題は現実のことで、空軍は1978年以来これに対処していると。ナポリ近くのカンパーニャには二つの着陸痕さえあった。その地面は強力かつ高い周波数のマイクロ波で照射されていた。空軍のサルバトーレ・マルコレッティ将軍により記録された別の重要な事件が1976年であった。彼はリエティで飛行中、1個の緑色をした巨大な物体と遭遇した。それは彼の飛行機の上方に現れた。間もなくそのUFOは途方もない速度で飛び去った。

．．．目撃(複数)の性質から、空軍の記録文書は我々が紛れもない現実の物体に直面し、これらの物体がレーダーで捕捉されることを示している。イタリア軍パイロットたちは、米国や他の場所とまったく同様に、イタリア上空で遭遇を経験してきた。イタリア空軍が、まだ説明されていない215の事例があると言うとき、それらは未知の性質を持つUFO目撃だという意味だ。たとえば、イタリア上空で軍用機がこれらの物体の迎撃を試みた事例が幾つもある。だがこれらの物体は迎撃の可能性を与えずに飛び去る．．．

最近、一人のイタリア空軍将校が、公式に、制服を着てUFO問題に言及した。その話し手はオリベロ将軍だった。彼はイタリア空軍の情報局長で、UFO事例を追跡する責任者だ。彼はUFO問題は現実のことで、空軍は1978年以来この困難な問題に対処していると語った。彼はまた、軍のファイルには少なくとも215のUFO事例があり、説明不可能な事例が現実にあると語った。彼は報道機関から公式に個人見解を求められた。彼はこう答えた。自分は一人のパイロットであり、UFOと遭遇したことを語る真面目な同僚たちと真面目なパイロットたちを知っている。私は彼らを信頼している。

1990年代にイタリアで二つの着陸事例があった。いずれもカンパーニャで起きた — カンパーニャはナポリに近い地方だ。これらの別々の物体によって残された着陸痕は、我々の専門家により研究室で分析された。我々は特有の結果を得た。我々が発見したのは、その物体(複数)が着陸後に強力かつ周波数の高いマイクロ波で地面を実際に照射したということだった。我々はその効果を検証し、はっきりと示すことができた。次に我々は、これらの結果を世界的に有名なフランスのトランザンプロバンス事例と比較した。それは1981年に起きた事件で、この観点からの典型的な事例だ。それはとても重要なことだった。なぜなら、我々がツールーズに行ったときに、我々が見たこれ

らの事例から得たデータが、その効果という点で実によく似ていたからだ。

これはきわめて重要だった。我々はフランスで UFO 問題を調査しているフランス政府機関とよい関係を持っている。ベラスコ氏はフランスで UFO 問題を研究する政府組織の責任者をしている。

フランス人はこの問題が現実であり、我々は現実の現象、未知の工学技術的現象に直面していると考えている。フランス人の態度はきわめて開放的であり、きわめて現実的だ...

もう一つの重要な事例は、1976 年に起きた一人の空軍将軍 — 彼は今退役している — サルバトーレ・マルコレッティ将軍の事件だ。彼がリエティにあるイタリア空軍飛行学校のチーフだったときに、飛行中偶然に 1 個の巨大な物体と遭遇した。彼が飛行していたとき、突然上方にこの緑色の物体を見た — 操縦席の上だった。彼は何かものすごい、巨大なものが飛行機に覆い被さっていることを知った。

彼はどうしてよいか分からなかった。数秒が経過し、数分が経過したが、この状況がいつまで続くのか彼には分からなかった — 突然この塊は途方もない速度で飛び去った。彼はイタリア空軍を去ってから初めてこの事件を語った...

論理的な観点から、私は我々に何か恐れるものがあるとは思わない。なぜなら、もし我々が敵対的な相手に直面しているとすれば、とうの昔に間違いなく彼らは我々を征服しているか、信じ難い事態を引き起こしていたはずだからだ -- 彼らは実際にそれが可能だった。それが起きていないとすれば、それは間違いなく我々に恐れることは何もないからだ。

おそらく、世界中の至る所に、この秘密を隠している一つの確かな見えざる組織と繋がる見えざる鎖の輪がある。彼らはこの主題に研究の観点から取り組んでいる。その目的は、収益を上げ、様々な分野に応用する技術を獲得することにある。UFO 問題は科学の問題であるだけではない、情報の問題でもあるのだ。

これは UFO の実相の重要なもう一つの側面だ。これを理解し始めると、多くのことが理解できるようになるだろう。なぜなら、このすべては権力に関係しているからだ。あらゆる権力、あらゆる国の、あらゆる政府の、あらゆる状況の権力だ。

3.8.5 工学技術／科学

米国空軍 マーク・マキヤンドリッシュ氏の証言
Testimony of Mr. Mark McCandlish, US Air Force
2000 年 12 月

マーク・マキヤンドリッシュは熟達した航空宇宙イラストレーターだ。そして米国の多くの一流航空宇宙企業で働いてきた。一緒に学んだ彼の同僚ブラッド・ソレンセンは、ノートン空軍基地の施設内部にいたことがあり、そこで彼は複製された異星人の輸送機(複数)すなわち ARV を目撃した。そ

それは完全に作動し空中静止していた。彼の証言から人々は、米国が作動する反重力装置を持っているのみならず、それを何年も何年も前から持っていること、またそれらは一つには地球外輸送機の研究を通して、過去 50 年間にわたり進歩を遂げてきたことを知るだろう。さらに我々は、航空宇宙発明家ブラッド・ソレンセンが見た装置の絵と、これらの複製された異星人の輸送機の一つを描いた図解を見ることができる — 素晴らしく詳細な絵だ。

私は基本的には概念芸術家として働いている。私の顧客の大部分は国防関連企業にいる。時々私は軍のために直接仕事をするが、ほとんどは民間企業が相手だ。彼らは国防関連請負業者であり、兵器システムや軍用品を製造する。これまで私は主要なすべての国防関連請負業者のために働いてきた：ゼネラル・ダイナミクス、ロッキード、ノースロップ、マクドネル・ダグラス、ボーイング、ロックウェル・インターナショナル、ハネウェル、そしてアライド・シグネット社だ。

私がウェストバー空軍基地にいた 1967 年だったが、ある夜床に就く前に、私はこの光体が空を横切って移動するのを見た；次にそれは前触れもなく停止した。物音は何もしなかった。私は犬を家の中に入れ、望遠鏡を持ち出した。そして望遠鏡でこの物体を約 10 分間じっと観察した。実を言うと、それは核兵器が貯蔵されている施設の真上に空中静止していた — ウェストバー空軍基地の緊急格納庫近くの貯蔵施設だ。それはそこを離れ始め、ゆっくりと離れて空中をどこともなく動き回った。そして突然、それは飛び去った。まるで銃から発射されたようだった。それはものの 1、2 秒で視界から消えた。

さて、私がイントロビジョン社で働いていたときに、すべてが一緒に現れ始めた。ジョン・エッポルトがある人物と行なった対談について語った。この人物は、何かの理由である空軍基地のある地区、そこにある一つの格納庫まで歩いていく羽目になった。彼はその格納庫で 1 機の空飛ぶ円盤を見た。彼は拘束され — しゃっ引かれ、目隠しされ、訊問され — この種の仕打ちを受けた。それから私はこの人物、マーク・スタンボーが一種の空中浮揚を可能にしたある実験を行っていたことを知った。一部の関係者の間でそれは電気重力浮揚、または反重力と呼ばれている。

彼が行っていたことは、どうやら高電圧電源を得ることだったらしい — 一つの直流電源だ — 彼は直径約 1 フィート、厚さ 4 分の 1 インチの銅板(複数)を使った。それぞれの上部と底部の中央部からはリード線が出ていた。次に彼は、基本的にそれらをポリカーボネイトまたはプレキシングラスのような、一種のプラスチック樹脂に埋め込んだ。あるいは他の種類の透明な樹脂に埋めて、その銅板や物質が見えるようにした。そしてそこから気泡などをすべて追い出すために、あらゆる事をしたようだ。そうすれば、電気がその物質を突き破って通過する経路をなくすことができる。実験は、この配列を持ったキャパシタ — サブプレート・キャパシタ — にどれだけ電圧をかけられるかを見ることだった；その絶縁物質が突き破られるまでに、どれだけの電圧をかけられるか？

さて、彼は約 100 万ボルトまでの電圧を実現した。そしてその物体が浮揚し始めた。それは今を遡る 1950 年代終わり／1960 年代初めに、トーマス・タウンゼント・ブラウンと呼ばれる人物により出願された、ある特許に述べられていた原理に従って浮揚した。ブラウンとビーフェルド博士という名前の人物がこれを発見した。それでこの効果はビーフェルド-ブラウン効果として知られるようになった。つまり、スタンボーはビーフェルドとブラウンによって行なわれた実験(複数)を再現したものらしい。この配列について彼らが発見した一つの現象は、浮揚または移動が正に帯電した板に向かっ

て発生することだった。だから、もしここに2枚の板があると、直流電流システムにより一方は負に帯電し、もう一方は正に帯電する。もし正に帯電した板を上に向けると、それはその向きに動く。もしそれを振り子に付けると、正に帯電した板が向く方向に沿って、常に振れ続ける。

後日、学校で知っていた一人の学友から私に電話がかかってきた。ブラッド・ソレンセンという名前だった。彼は[私がある雑誌のためにした仕事から]私の名前を見つけ、その美術監督と連絡をとって私の電話番号を聞き出し、電話をしてきたようだった。分かったことは、彼はカリフォルニア州のグレンデール／パサデナ地区にあるデザイン会社に入り、結局この会社の顧客の大部分を獲得するようになったということだった。

いつの間にか彼は、様々な顧客のために概念設計と製品を開発するという仕事のやり方を軌道に乗せた。彼の仕事の進め方はこうだった。もし彼が何か今までにない新しいデザインや特許が取れる何かを考え出したとすると、顧客がその独占権を買うように手配する。その特許が彼の名前で付与されたら、その顧客にだけ使用を許可することに同意し、彼らはその特許権使用料を彼に支払う。こうして彼はこれらのすべての特許を顧客たちを買わせ、特許権使用料を支払わせた。そのために、彼は30歳を前にして大富豪だった。

つまり、学校を出て8年後にブラッド・ソレンセンは再び私の所に戻ってきたわけだった。我々は語り合い、彼はこれらのすべての興味深い物語を私に語ったのだ。ノートン空軍基地で近く行なわれる航空ショーがあった。そこはかつてカリフォルニア州南部サンバーナーディーノのまさに東端に位置する、現役の空軍基地だった。

私は、一緒にこの航空ショーに行こうと持ちかけた。そこではSR-71 ブラックバードによる接近通過(実演飛行の一つ)があると聞いていたからだ。彼もそのことはよく知っていたようだった。それで私は、よし、見に行こうじゃないかと言ったのだ。最後になって、ポピュラーサイエンス誌がまたやってきて、実に差し迫ったもう一つのイラストの仕事があると私に言った。そして、私がそれを週末にかけて仕上げられるかを知りたがった。それで私は言い訳してこの航空ショーを断るしかなかった。

ブラッドはすでに行く準備をしており、彼の顧客の一人を連れていくことにしていた。その顧客は背が高く、眼鏡をかけた白髪の人物で、姓にイタリア語の響きがあることを私は知った。彼は自分自身の才覚によりすでに大富豪であり、国防長官か国防次官を務めた後、再び民間人として暮らしていた。ブラッドは私をこの紳士に合わせたがっていた。だからそのとき私がこのことを知っていたなら、おそらく私は雑誌社に待ってくれと言ったはずだ。その時点で私には、仕事の機会を見逃すことになるなどという考えはなかったからだ。

信じて欲しいが、私はその後ずっと後悔した。というのは、翌週ブラッドは帰宅してから私に電話をよこし、航空ショーについて話したからだ。彼はそこで何を見たかを話した：空軍の実演飛行チーム、サンダーバードが彼らの実演を始めようとしていたとき、ブラッドと一緒にこの紳士が、こう言ったらしい。“私についてきなさい” 彼らは、群衆がいる場所から離れた飛行場の反対側の端に行き、ノートン空軍基地にあるこの巨大格納庫まで行った。その建物番号を私は覚えていないが、とにかくその空軍基地にある中で最大の格納庫の一つだ。

実際に、基地ではその格納庫は大格納庫と呼ばれていた。それは四つの巨大なクォンセット(*かまぼこ型プレハブ)型格納庫がすべて中央で連結されているような外観だった。それぞれの端の周囲には店や仕事場があり、中央部には一種の隔壁があった。

[ジョン・ウィリアムズ中佐の証言を見よ。SG]

この紳士はブラッドをここまで連れてきた。彼は言った。“この展示責任者に会いたい”警備員は中に入り、三つ揃いを着た一人の人物を連れて出てきた。彼はブラッドと一緒にこの紳士をすぐに認めた：この紳士とはたぶんフランク・カールツチではなかったかと私は推測する。彼らは中に入った。ドアの内側に入るとすぐにこの紳士は、この格納庫で行なわれている展示を管理しているこの人物に、ブラッドが自分の側近であると思わせたようだった。この展示は高い機密取扱許可を持った一部の地元政治家と軍の一部の地元将校たちのためのものだった。

さて、彼らが奥に向かって歩き始めるとすぐに、ブラッドは連れ立っている紳士からこう言われた。“この中には、彼らが展示するだろうとは私が予期しなかった多くの物がある — たぶん君が見るべきでない物だ。だから、誰にも話すな。何も質問するな。口を開いてはいけない、ただ笑って頷け。だが何も言うな — ただ展示を楽しむんだ。我々はできるだけ早くここを出るつもりだ”

そうこうしている間、その案内者すなわちこの展示責任者は、ブラッドと一緒に紳士と大変意気が合っていた。そして彼らの中へと連れていき、すべてを見せる。そこには B-2 ステルス爆撃機に開発競争で負けた試作機があった。そこにはオーロラの愛称で知られるロッキード・パルサーと呼ばれる航空機もあった。

これらの航空機は 121 発の核弾頭を積み、発進後 30 分で世界中どこにでも到達する性能を持っていた — ご存じのとおり、10 ないし 15 メガトンの兵器 — 典型的な戦術型ミサイル核弾頭だ。

それでは、ノートン空軍基地でのブラッドの話に戻ろう：彼が話した別のことのひとつだが、彼らはこれらのすべての航空機を見せられた後で、その格納庫を異なる二つの区域に分割している大きな黒いカーテンの前に来た。これらのカーテンの後ろには別の広大な区域があり、その内部ではすべての明かりが消されていた；こうして彼らは中に足を踏み入れ、明かりをつけた。ここには床から浮揚した 3 機の空飛ぶ円盤があった — それらを吊り下げている天井からのケーブルなどはなく、下に着陸ギヤもない — まさしく床の上に浮揚、空中静止していた。そこにはビデオテープを回している小さな展示があった。映っていたのは 3 機のうちの最小機が砂漠、おそらく乾燥湖だろうが、そこに置かれている映像だった — エリア 51 に似たどこかだった。映像では、この円盤が小さな素早い動き、跳躍を 3 回していた；それは真つすぐ上方に加速し、視界から消えた。ほんの 2、3 秒で完全に見えなくなった — 音を出さず、衝撃音も発せず — 無音だった。

彼らは 1 枚の切断図を持っていた。私がこれからあなたに見せるものとほとんど同じだが、それはこの円盤内部にどんな構成部分があるかを示していた。その図では幾つかのパネルを取り外しているの、中を覗くことができる。そこには酸素タンク(複数)、円盤の側面から外に突き出してサンプルや物体を集めることができる 1 本の小さなロボットアームが見える。つまり、明らかにこれは大気中を飛び回るだけでなく、宇宙に飛び出してサンプルを収集する能力を持つ円盤だ。これは音を

発しない性質の推進システムを用いている。彼が見ることのできた範囲では、それにはどこにも可動部分がなく、排気ガスを出さず消費する燃料も持たない — ただそこに空中静止していた。

こうして、彼は一心に耳を傾け、できる限り多くの情報を集めた。帰ってきて彼は私に、1988年11月12日にノートン空軍基地にあるこの格納庫で、これらの3機の空飛ぶ円盤を見たときの様子を語った — その日は土曜日だった。その最小のものは幾分鐘の形に似ていたと彼は言った。それらは形と寸法の比率がすべて同じだった。ただ異なっていたのはその大きさだった。その最小機の最も幅のあるところは、鐘の形に平たく広がった底だった。また最上部には1個のドームあるいは半球があった。側面は垂直から約35度傾斜していた。

裾まわりのパネル(複数)は取り外されていて、彼はその内部にこれらの大きな酸素タンクの一つを見ることができた。彼はその酸素タンクの直径が約16から18インチ、長さ約6フィートで、車輪のスポークのように、すべて放射状に向けられていたと具体的に述べた。最上部に見えたこのドームは、実際には円盤の中央にある1個の大きな球状の乗組員区画の上半分だった。この円盤の中央を取り巻いて、1個の大きなプラスチックの一体成型物があり、その中にこの大きな銅コイル(複数)が埋まっていた。それは上面の幅が約18インチ、厚さは約8から9インチあったと彼は言った。その内部には、おそらく15から20層に積み重なった銅コイルがあった。

その円盤の底部はおよそ11か12インチの厚さがあった。どちらの場合も、コイルと底部にあるこの大きな円板は、プラスチックの大きな一体成型物のようだった — 緑がかった青の透明なプラスチック、あるいはガラスだったかもしれない。概念芸術家としての技法を使って、私はそこに細切りにしたピザパイのような区画が正確に48あると断定した。この一体成型物の内部にあるそれぞれの区画は、おそらく4から5トンの重さがあった。その厚さと直径から割り出した値だ。それは重さにおいては怪物に違いなかった。それには半インチの厚さの銅板が詰まっており、48区画のどれにも8枚の銅板があった。

こうして、ここで我々は再びプレート・キャパシタとビーフェルド-ブラウン効果を利用する方法を見つけた場合の可能性に戻ってきた — キャパシタに充電すると正側の板に向かって持ち上がるという、この浮揚効果だ。さて、8枚の積み重なった銅板をその中に入れるとすると、それは交互になる。こうだ：上昇するときには負の次に正、負、正、負、正 — 4回繰り返す、結局正の板(複数)が常に負の板(複数)より上にくる。

乗組員区画の内側には、中央部を貫いて下に向かう1本の大きな円柱があった。この円柱の上半分には背中合わせに四つの射出座席があった。それから、この円柱の中央部には、ある種の大きな回転円板が1個あった。

さて、この機体は複製された異星人の輸送機(Alien Reproduction Vehicle; ARV)と呼ばれていた；それはフラックス・ライナーという愛称でも呼ばれていた。この反重力推進システム — 空飛ぶ円盤 — は、ノートン空軍基地の格納庫にあった3機のうちのひとつだった。その合成視覚システムには、アパッチ・ヘリコプターの砲撃制御システムと同種の工学技術が使われていた：もしパイロットが背後を見たいと思ったら、その方角の画面を選べばよい。そうするとカメラ(複数)が対になって回転する。パイロットはヘルメットの正面に小さなスクリーンを持っていて、それがパイロットに交互

に切り替わる映像を見せる。パイロットはまた小さな眼鏡をかけており — 現実には、我々はこれと同じことをするビデオカメラ用完全立体映像システムを、今実際に買うことができる — 周りを見たときに外部の完全な立体映像を得る。だが窓はない。では、なぜそれらには窓がないのか？我々が話題にしているこのシステムの電圧が 50 万から 100 万ボルトになるというのが、おそらくその理由だ。

さて、彼は 3 機の円盤があったと言った。最初のもの — 最小で、部分的に分解されていて、ノートン空軍基地で 1988 年 11 月 12 日にこの格納庫で展示されたビデオに映っていた円盤 — これは最も幅の広い底部で直径約 24 フィートあった。次に大きいのは底部で直径約 60 フィートあった。

私はこの物体の構造を眺め始めたが、自分が見ているものが巨大なテスラコイルだと思い当たった。それは一種の屋外変圧器のようなものだ。起きることはこうだ。もしこの大きい直径のコイルに電気を通すと、それは一つの場を発生する。

このシステムが行なっていることはそれだ： 2 個の大きな 24 ボルト船舶用バッテリーを用いて電気を得る。基本的にはこれを利用して、これらの巻き線の中に何らかの方法で交流電流を流す。その次には 2 次コイルによりその電圧を上げる。2 次コイルは中央部の円柱に取り付けられており、ここでこの超高電圧を得る。これらのキャパシタ 48 区画のどれにその電圧をかけるかは、自由だ。

では、そんなことをするのは何のためか？もし通常のテスラコイルを使っているなら、システム全体で 1 個か 2 個のキャパシタしか使わないだろう。だがここで取り上げているのは違った種類のキャパシタだ — ここでは板でできているキャパシタを取り上げている — その板は長くて細い三角形だ。そして車輪のスポークのように、すべて放射状に配置されている。ちょうど酸素タンク(複数)のように、その大きな直径のコイルから出ている場の力線のようにだ。このシステムを眺めたとき、もしあなたが電気技術者か、テスラコイルとその組み立て法について少しでも知っている人なら、実に構成部分の向きこそがシステムが機能するために本質的だと気付くだろう。

異なるキャパシタ区画がなぜこんなにも多く必要か？マーク・スタンボーがアリゾナ大学で実験を行なったように、一つの大きな円板を用いたらどうなのか — ついでだが、その装置は政府から来たと名乗る男たちにより、国家安全保障条例による権利の行使を名目に押収された。彼らはこれらの物をすべて持ち去った。そしてその実験を見た全員を訊問し、沈黙を守ってそのことについては話すなと告げた。だが、私は何が起きたかを知っている彼の同室者からそのことを聞いた。いずれにせよ、その事例では、浮揚は実現したが制御は何もしていない。この物体は辺りを浮遊する。自ら発生したこの場が何であろうと、その上に浮かんでいる。だが制御は何もしない。

ではどうするか？我々はこの円板を異なる 48 区画に分割する。そうすると、こちら側とかあちら側とか、どれだけの電気を与えるかを思いのままに決めることができる。電氣量を制御することで、推力とその方向を制御することができる。それは真つすぐ上昇させることもできるし、傾けたり方向転換したり、上昇や下降をしたり — 思いのままだ。それらの 48 区画に与える電氣量を制御することにより、それが可能になる。仮に円を持ってきてそれを 48 の等しい部分に分割したら、それらは実に小さく細い区画になることが分かるだろう。こうして、これらの 48 個の独立したキャパシタと一つの大きなテスラコイルを持つことになる。また車の分配器(ディストリビュータ)のような、何らかの回転スパークギャップが必要になる。これはそれらの区画のそれぞれに電気を送り出す。次に、これらの

それぞれにどれだけ電気を与えるかを制御する、何らかの方法がなければならない。

[このような円盤型の機体は全方向性を持った運動をする — それは機首と尾部を持つジェット機のように一方向への運動だけに限定されない。 LW, マッキヤンドリシュとの対話の後で]

さて、ブラッドがその制御システムを説明したとき、彼は一方にこの大きな高電圧電位差計があったと言った — それは加減抵抗器に似た大きな制御装置だった。そのレバーを押すことにより、システムに注入する電流量を次第に増加させることができる。制御システムの反対側には、コウノトリの首に似た一種の金属棒が出ていた。その先端には、金属製らしい外見をした一種の球体が付いていた。その球体に付着して一種のボール(鉢)があったが、それはあたかも球体の底に磁石でぶら下がっているように見えた。彼によれば、すべてがその場所を動かず、まるで大きな船が海に面した港で錨を降ろし、水面に浮かんでいるようにゆっくりと前後左右に傾いて揺れていた。それは文字どおり、エネルギーの海に浮かんでいた。

ジョン・モレー博士は別の種類のエネルギーで実験した — それは何かのスカラー・エネルギーだったかもしれない — 1920年代か1930年代の初期だったと私は考えている。彼はエネルギーの海(*The Sea of Energy*)と題する1冊の本を書いた。その中で彼はこの種のエネルギーについて述べている。ブラッドは、この物体が動き回っていたとき、そのシステムは完全にはエネルギーで満たされておらず、船体内部の構成部分(複数)はまだ幾らか重力の影響下にあったと言った。それがある方向に傾きかけたとき、そのボール(鉢)が重力の影響で同じ方向に振れたと彼は言った。それが傾き始めると、それは滑りながら動いてシステムの同じ側のパワーを上げる。そうすると、それ自身でまた元の正しい姿勢に戻る。完全に無人でありながら、それはその場所を動くことなく、それ自身で元の姿勢へと修正する。

それはすべてファイバー光学的に連結されていた。さて、なぜそれが意味を持つのか?なぜシステムをすべてファイバー光学的に連結しようとするのか?理由はこうだ。もし重力を制御する方法が見つければ、その質量は減少する。それができた場合の別の利点とは何か?もしどうにかしてこのスカラー場、このゼロポイント・エネルギーを利用する方法を見つけたとしたらどうだろうか?科学者たちが信じていることが本当なら、ゼロポイント・エネルギーこそが、宇宙の万物の原子構造において、電子をその周囲に保持している実際の方だ。それは電子にエネルギーを与えている — それはこの世界のすべての原子核の周りにある様々な電子雲の中で、この小さな電子に回転を与えている。それは電子を回転させ続け、地球を回る衛星が引力に引っ張られて大気に引き込まれるようにその原子核へと潰れていくことから防いでいる。もしその相互作用、電子によるゼロポイント・エネルギーの吸収に干渉する方法があれば、電子は減速する。

宇宙のすべての原子は、まさに小さなジャイロスコープのようなものだ: それはこれらの電子を原子核の周りに回転させる。するとそれらはジャイロスコープと同じ効果を現す。我々が慣性および質量と呼ぶ効果だ。陽子、中性子、またそのように回転している電子をそれぞれ1個ずつ持つ一つの原子核がある — 水素だ: それほど大きな質量も慣性も持たない。別々の電子雲の中で回転する235個の電子を持つウランウム235の場合は、大きな質量と慣性を持つ。ある意味でそれはより大きなジャイロスコープのようなものだからだ。とにかく、私は類推としてこの話をしている。だが、もしゼロポイント・エネルギーの吸収に干渉する方法があれば、それらの電子はエネルギーを失い、

減速する。その慣性の効果、ジャイロスコープとしての効果が弱まり始め、その結果、質量も減少する。その一方で原子構造には何の変化もない；それは依然としてそこにある — それはウランウムのままだが、それほど重くはない。

アインシュタインが言ったことの一つは、どんな物体でも光速以上には加速できないということだ。もし光速に達したとすれば、それは宇宙の全エネルギーを使う必要があっただろう。なぜなら宇宙空間を加速して進行するのに伴い、質量が増すからだ。この概念を示す古い映画がある。列車が光速に向かってどんどん速度を上げるが、車体もどんどん大きくなり、ついにエンジンがそれを牽引できなくなる。だからそれは決して光速を超えることはできない。

だが、ゼロポイント・エネルギーを吸収し、それが機体の原子構造と相互作用することを妨害するシステム、装置があったらどうなるだろうか？と同時に、それはキャパシタ区画に新たなパワーを供給する — この電気システム現象のすべてがあつた円盤の中で進行しており、稼働している。実際には、速ければ速いほど速度を上げることが容易になり、光速に到達し、それを超える。

ブラッドによれば、ノートン空軍基地でのこの展示会で一人の三つ星将軍が、これらの円盤は光速あるいはそれ以上を出すことができると言った。ついでだが、最大の円盤は直径が約 120 から 130 フィートあつた。つまりそれは重いということだ — まさに巨大物体だ。

ユタ州にモレー・B・キングという名前の科学者がいる — 彼はゼロポイント・エネルギーの開発 (*Tapping the Zero Point Energy*) という本を書いた。彼の主張はこうだ。このエネルギーは我々を取り巻く時空間に埋め込まれている；それは我々が見るあらゆるものの中にある。何もない空間自体の中に、このフラックス、この電荷が満ち満ちていると推測したのはジェームズ・クラーク・マクスウェルだっただけだ。もしほんの 1 ヤード立方の中に埋め込まれているエネルギーを全部捕捉できるなら、全世界の海を沸騰させるのに十分なエネルギーを手に入れるだろう。開発されるのを待ってそこに存在しているエネルギーの量が、いかに巨大かということだ。さて、モレー・B・キングが述べたことの一つは、そのエネルギーを捕捉する最良の方法は、その平衡状態に歪みを起こすことだ。それは箱の中に詰められたタバコの煙のようなものだ。もし何らかの方法でそれに衝撃波を送り込むと、力が得られる — その中に波紋が生じる。その反対側でそのエネルギーを収集する方法を持っていれば、それを捕捉して利用することができる。

この複製された異星人の輸送機 (Alien Reproduction Vehicle)、フラックス・ライナー (Flux Liner) は、それを何か電子的な方法で行なう仕組みを持っている。さて、ブラッドはこの中央の円柱が一種の真空室を持っていると述べた。この真空室は、これらのすべての科学者たちが自ら製作したオーバーユニティ (over-unity) やフリーエネルギー装置の中で述べているものの一つだ。これらの装置のすべてにある種の真空管、真空技術が使われている。

中央の円柱にあるこの大きな真空室、これはすべての部分の内側にある — 回転円板の内側、テスラコイルの 2 次コイル (複数) の内側、乗組員区画の内側 — その真空室の中には水銀蒸気がある、そうブラッドは主張した。水銀蒸気は電気を通す。だが、あらゆる種類のイオン化現象をも発生させる。これらの小さな水銀分子は異常な電荷の帯び方をする。だから、不完全真空の中にある水銀蒸気に途方もない量の電流を流すと、何か特別な、異常な現象が発生する。

モレー・キングが真空中のエネルギーに対して何らかの衝撃波を与え、その平衡状態に歪みを起こすと述べたが、それがこの現象だと私は思う。

さて、ここでもう一つ起きていると私が考えることは、このシステムがゼロポイント・エネルギーに分け入り、それを局所空間から抽出し始めると、機体全体の重量が軽くなる — 言うなれば、それは部分的な質量消滅だ。キャパシタのわずかなエネルギーが、機体をどこにでも撃ち飛ばしてしまう理由の一つがこれだ。

起きていると私が考える現象の一つだが、このようなシステムを手に入れ、それを始動させると、そのシステム内のあらゆるものが質量を失い始める。システムを流れている電子もまた質量を消滅させる。このことは何を意味するか？そのシステムとその大きなテスラコイルを流れているすべての電子が質量を失うとともに、それはまた完全な超導電体になる。これにより、このシステムの効率は際限なく向上する。ここに飛躍的な効率が得られることになる。あたかもこのシステム全体が液体窒素に浸かるか、ある温度では完全な導電体となる純粋の銀あるいは純粋の金でつくられたようなものだ — それは軽くなり、信じられないほどの速度に加速される。

[その速度が大きいほどそれは軽くなり、そうするとさらに速度が増す。 LW, マツキヤンドリシュとの対話の後で]

1992年に私はケント・セレンという名前の人物に会った。そして分かったのは、ケント・セレンと私は共通の友人だったということだ：ビル・スコットまたはウィリアム・スコットという男だ。彼はアビエーション・ウィーク・アンド・テクノロジー (Aviation Week and Technology) という、ある業界誌の地方編集者していた。

ビル・スコットは、かつて1970年代初めにエドワーズ空軍基地でテストパイロットをしており、ケント・セレンは、ビル・スコットが操縦する飛行機の担当主任をしていた。それで私はケント・セレンにこの話をした。そしたら彼は頭を振って頷き、大きな笑顔を向けた。そして目配せしてこんなことを言ったのだ。“うん、君の言っていることは知っている”君はどのように私が言っていることを知っているんだい？と私は訊いた。そしたら彼はこう言った。“私は1機見たのだ”その瞬間に私の記憶は、イントロビジョンのジョン・エッポルトがある格納庫にあった何かについて語った話に焦点が合った — 誰かが格納庫で何かを見た話だ。

それで私は、1992年にエドワーズで行なわれた航空ショーでケントに会っていたとき、彼に訊いた。それは底が平らだったか、側壁は傾斜していたか、頂部にドームがあったか、小さなカメラがあったか？そしたら彼は言った。“そのとおりだ。君はそれを見たのかい？”私は、ペンを貸してくれ、と言った。私は小さな紙切れを取り出し、略図を描いた。そして、それはこんな様子だったか？と訊いた。彼は言った。“そうだ、これだ — その形はこのようだった”私はさらに、いつこれを見たのか？と訊いた。彼はこう答えた。“1973年だ”私は、どこでどういうときに君はそれを見たのか？と訊いた。それに対して彼はこう答えた。“私は担当主任だった。ビル・スコットがテストパイロットだったとき、彼の飛行機を担当していた”

彼が私に語った話は次のようだった。ある夜、彼の当直長が彼に言った。“北基地まで行ってくれ — 航空機用の地上電源車に漏電か故障か、何かトラブルが起きた。それで君にそこまで牽引車を持って行ってもらう必要がある。行ってそれを受け取り、持ち帰って修理倉庫に入れてくれ；それで君は帰宅してよしい。他の仕事は全部片づけた”さて、北基地正門まで続く大きな周辺道路を回っていく代わりに、ケント・セレンはエドワーズの乾燥湖を横切り、真っすぐにその北基地の施設まで車を走らせた。彼は乾燥湖を走り抜けて舗装道路に乗り入れ、これらの列になって並んでいる格納庫まで行った — 当時格納庫はすべてクオンセット(かまぼこ型プレハブ)型だった。彼は扉に隙間が開いていた最初の格納庫の前に車を止めた。問題の故障した地上電源車がそこにあるのではないかと思ったのだ。彼は何を見たか？彼は格納庫の中にこの空飛ぶ円盤を見た。それは地面の上に空中静止していた。

彼に会ったときのこの話は、ジョン・エッポリトが語った内容を私に思い出させた。それは 1982 年より前に、ある格納庫で 1 機の UFO を見た人物についての話だった。私は、それでどうした？と訊いた。彼は言った。“この物体は底が平らだった。側壁は傾斜しており、これらの小さなプラスチック・ドームに入った小型カメラがあちこちに付いていた。一つのドアが側面にあった。私はそこに 15 秒はいなかった。私に向かって走ってくる足音が聞こえたと思ったら、振り向いて見る間もなく、私の喉には自動小銃の銃身が押しつけられていた”しゃがれ声がこう言った。“目を閉じて地面に這いつくばれ。でないとお前の頭を吹き飛ばす”

彼らは彼の頭に覆いをかぶせ、目隠しをし、しょつ引いていった。彼らは 18 時間をかけて彼を事情聴取した。彼らはそれをしている間に、この輸送機について私の友人ブラッドも知ることがなかったいろいろなことを彼に語った。

ブラッドは、そのシステムの構成部分はすべて在庫棚にある部品ばかりだったと語った — つまり、誰でも在庫品リストの中から見つけられるものだ。彼らは自前の酸素供給を行っていた。彼らは一度 15,000 フィートより低い高度で機外に脱出した、そう彼は語った。個々の座席は、ちょうど軌道車のように一組のレール上を降下し、この中央円柱から離れた。それらは一つまた一つと脱出し、パラシュートが開き、彼らは機体から離れた。

私はブラッドから得たこのすべての情報を眺めた。そして、機体の側壁に開いた小さな跳ね上げドアから突き出すことができる 1 本の機械的アームがあることに気付いた。これらの物体で宇宙航行ができることは明らかだった。10 年か 15 年前になるが、私はスカラー効果についてトム・ビーデンに話しかけていた。その中で、彼はまったく思い付いたようにしてこう言った。“NASA の予算がこれほど大幅に削減されたのはなぜか、君はそのことを疑問に思わなかったかい？彼らははるかに優れ、はるかに高速な、これらのすべての異種工学技術を手に入れたからだ。それらは太陽系の外縁部まで何ヶ月も、ときには何年もかかるロケット推進宇宙船よりもはるかに優れている。結局は科学者たちのための公共事業にしかならない計画に、何百万ドルもの金を注ぎ込もうと思うかい？国家安全保障局、CIA、あるいは空軍情報局だけが独占的に利用している、この秘密にされた技術があるときに、なぜこの膨大な資金を注ぎ込む必要があるのだ？それは太陽系のどこへでも数時間で到達する。数ヶ月や数年ではない。今すぐにでもそこに行けるものを持っているときに、どうして NASA に金をかけるか？”

人々が月の裏側に有人基地(複数)があるのではないか、火星に基地(複数)があるのではないかと推測するなら、それはほとんどあり得ることだと私には言える。実のところ、私はそれが本当にあると考えている。

これらの物事を知っているもう一人の人物に私は会った。彼はこう言った。“私はパームデール／ランカスター地区(*カリフォルニア州)のプラント42にあるB-2爆撃機施設で働いている。B-2爆撃機の大きな建造施設からその南西端まで横切る対角線地帯は、ロッキード・スカンクワークスだ — それは巨大な複合施設だ” 私は、そうだ、そこにあるのはよく知っている、と言った。彼は言った。“1992年の夏、私は夜の10時半頃外にいた。というのは、私は深夜勤務で、そのときタバコを吸っていたからだ。そのとき私は、副保安官たちがプラント42を取り巻くすべての通りを封鎖しているのに気付いた。プラント42に秘密の航空機がやってきて着陸するとき、またはそこから発進するとき、彼らはいつでもそうする”

彼は続けた。“私は封鎖されているすべての通りに注意を向けた。この格納庫の前には輪になった車両の編隊があった — だがそれらは実に奇妙な車両だった。それらは小さなトラクターのようで、一つの塔を持っていた。その塔には大きな1本の機械的アームがついており、アームの先端には1個の籠があった。それは架線作業員が高压電線を張るときに使う車両に似ていた。だがその籠はすべて高々と上げられていた。この大きな輪のそれぞれの籠からは、この大きな黒い幕が吊り下がっていた。そしてそれらを全部結びつけている1本のロープがあった”

彼は言った。“私はその車両編隊の上を見上げた。すると約500フィート上空に、この大きくて黒い、レンズ型をした空飛ぶ円盤があった。車両編隊のちょうど上だった。この車両編隊の中央に、大きな青緑色の携帯フラッシュライトを持った男が現れた。彼は円盤に向かってそれを掲げ、3回点滅させた。その円盤の下には青緑色の照明が3個あり、彼らも彼に3回点滅を返した”

“それからこの物体は車両編隊の中へと降りた。すべてのアームが輪の中心まで伸び、その幕でこの機体をすっぽりと覆った — それらのすべてが車輪を転がしながら格納庫に入っていった。扉が閉まり、明かりがついた。そして副保安官たちはいなくなった” それがあった翌週、彼はやたらとタバコを吸いながら、何かを待った。1週間後に彼の我慢が報われた。あの夜に見た光景が、すべて逆向きに進行したのだ。明かりがつき、扉(複数)が開き、この車両編隊が出てきた。そのアームがすべて高く立てられ、暫くするとこの物体が車両編隊の上空約500フィートに、音もなく上昇した。その男がフラッシュライトを持って現れ、3回点滅させた。その物体もまた彼に向けて照明(複数)を3回点滅させた。

続けて彼はこう言った。この物体は滑走路の端から端までを使って離陸した。そこはB-2建造施設のすぐ隣にある。それは彼の目の前を通り過ぎ、2秒もしないうちに闇に消え去った — この輸送機は音も、超音速衝撃波も、衝撃音波も、何も出さずにそれを行なった — まるで大砲から打ち出されたようだった。これは自分の人生を変えたと彼は言った。それは彼の物の見方をすべて変えた。なぜなら、そのとき彼は知ったからだ。彼らは反重力 — 無質量推進技術を持っている。彼らの工学技術は未知の場所 — どこか他の太陽系 — からやってきた、ある種の宇宙機から回収されたものかもしれない — だが、彼らがそれを持っていたことは事実だ。彼はそう言った。

我々はジェームズ・キング・ジュニアにより出願された特許を発見した。この特許はまさにこのシステムに似ている。違う点は、乗組員区画用ドームの代わりに、中央に1個の円柱を持つことだ。それは同じ形をしている。平たい底、傾斜した側壁、外周にコイル(複数)を持ち、すべて放射状に配列されたキャパシタ・プレート(複数)を持つ。この特許は1960年に初めて出願され、1967年に付与された。ユタ州プロボの近くでこの機体にまったくよく似た写真が撮られた年だった。

決め手はタウンゼント・ブラウンとともにその特許を出願した人物だ。タウンゼント・ブラウンはニュージャージー州プリンストン近くのある研究所で働いていた。バーンソン研究所のアグニュー・バーンソンという科学者と一緒だった。彼らは、彼らが電気重力推進と呼ぶこれらのすべての実験を行なった。ここに1本のビデオがある。アグニュー・バーンソンの娘が撮影した16ミリフィルムから変換されたものだ。元々それは“お父さんの実験室”と呼ばれていた。それにはバーンソンとトーマス・タウンゼント・ブラウンが、彼らの助手ジェームズ・キング[J・フランク・キング]とともに行なったすべての実験が映っている。ジェームズ・キングがその特許を出願した人物だ。そのフィルムには、浮揚して火花を放っている小さな円板(複数)が映っている。こうして、いわば輪が完全につながった。

今や、彼らはその工学技術を持っているだけでなく、その工学技術を実際に展開していることが理解されると思う。それは飛行するだけではない。それは1960年代に遡って出願された特許に酷似している。エリア51の近くで一連の写真が撮られた年だ。エリア51とユタ州プロボの間で一人の軍パイロットにより撮影された。それはあらゆる同一の特徴を示す；それはまったく同じ形状を示す。だから私にとって最も重要な結論はこうだ。人々がこの工学技術の細部まですべてを理解するかどうかにかかわらず、この工学技術は現実に存在し、それを見た人々がいる。私は自分自身でこれらの物体を見たことがある。だから私にとって、彼らがこの工学技術を秘密の中から出し、汚染を伴わないエネルギー生産など、他のことのために我々に使わせるのは、まったく時間の問題だ。人々はおそらくそれらの空飛ぶ円盤に似た数個の物体を持ってきて、クランク軸の周辺に取り付け、それを使ってエンジンを駆動させる。汚染は発生しない。燃料も不要だ。

さて、私が言えるもう一つのことだが、私がファイバー光学制御システムについて語っていたとき、それはやはり最初のロズウェル報告書にまで遡る物事の一つだった。そこには光を通すこれらの細かなファイバーが巡らされていた。彼らはそれが何であるかを説明できなかった。よろしい、宇宙船にはなぜファイバー光学システムが必要か？もし突然に機体の中のあらゆるものが質量を消滅させ、電子さえも質量を消滅させたら、システムを貫いているすべての遠隔計測はおかしくなるだろう。システムは突然に相変化を通過し、あらゆるものが超伝導になる。だから、スパークギャップ(複数)の制御を同一レベルに維持するための何らかの方法が必要になる。キャパシタ(複数)から供給する電気を制御する。制御棒を動かしたときに、たとえ質量消滅または部分質量消滅の状態に移行したとしても、システムの中に依然として同じ量の動きと偏位を起こさせることができるようにするためだ。なぜなら、電子もまた質量を消滅させ、電子回路は超伝導回路になってしまうからだ。

なぜファイバー光学を用いるのか？光子は質量を持たず、影響を受けないからだ。つまり、コンピュータに出入りするどんな情報、どんな遠隔計測もそこに届く。超伝導状態でコンピュータが機能するかという心配は不要だ。なぜなら、それはただ速くなり、効率が向上し、高性能になるだけだからだ。航空機が墜落しないような制御を望むなら、最良の方法は何か？それはファイバー光学システムだ。

ポール・シス教授の証言
Testimony of Professor Paul Czysz

2000年11月

ポール・シス博士はセントルイスにあるパークス大学の航空工学教授だ。彼はライト・パターソン空軍基地の空軍で8年間、その後マクドネル・ダグラス社の外来工学技術部門で30年間を過ごした。ライト・パターソン空軍基地にいたとき、彼はミズーリ州、オハイオ州、ミシガン州上空にかけて起きたUFO追跡事件に関わった。これらのUFOは多くの人々により目撃された：軍、地元警察、一般市民がこれを目撃した。それらが普通ではない無音の飛行を行なったとき、その速度は時速約20,000マイルと計測された。シス博士はその経歴の半分以上を、マクドネル・ダグラス社で秘密の区画化プロジェクト(複数)に従事した。シス博士は、これらのプロジェクトの秘密性が保たれる方法についても証言する。彼は、我々が行なっている宇宙の軍事化が地球のテロリストたちの脅威に向けられたものではないことを指摘し、どんな新しい工学技術をも兵器化する人間の性癖について警告を発する。また、これらの兵器を地球外標的に使用する考えは自殺行為だと警告する。

PC: ポール・シス教授

I: 取材記者

PC: 私はパークス大学の卒業生だ。私の経歴はライト・パターソン空軍基地の空軍で始まった。私は空軍に2年間、その後さらに研究部門に6年間勤務した。それから私はマクドネル・ダグラス社に入り、そこに30年間勤務した。最後は寄附教授として再びパークス大学に戻った。

マクドネル・ダグラス社にいたとき、私は高速に関して多くの仕事をした — つまり極超音速だ。我々はマッハ4からマッハ12で飛ぶ物体に取り組んだ。我々はマッハ12で世界中を飛び回る幾つかの飛行機を持っていた。我々はほとんどそれを建造しかけていた。

ライト・パターソンで経験したとても興味深い夜の一つは、私がパターソン・フィールドで主任当直士官の補佐をしたときだった。我々は未確認飛行物体に関する151回の電話を受けた。それは高速40号線上をコロンバスまで移動し、そこで向きを変えてトロイトへと北上した。これらの電話は州警察、何人かの深夜勤務医、これを見たというあらゆる種類の人々からだった。彼らはこれを見たとき報告していた。我々はそれらをレーダーで追跡したし、定期航空便(複数)からもそれらを見たとき電話が入った。それはとてもとても興味深いものだった。これらの人々は、彼らが見たものについて大変明確な説明をした。

ご存じのとおり、私の経歴のおそらく半分以上は、秘密または区画化されたプロジェクトの中でのものだ。

I: それらがどのようにして進められるか、説明していただけますか？

PC: 一般論だが、その区画化のレベルと秘密性のレベルに応じて、我々の身元調査が行なわれる。これはかなり重要だ。身元調査には6ヶ月から1年かかる。それにパスして一員になるとき、もしそれがきわめて機密性の高いものである場合には、誓約書に署名し、プロジェクトの存在を漏

らさぬよう、もしくは質問に対してプロジェクトの存在を認めるような発言をしないことを求められる。それは知る必要性の制約などではない；それは自分たちが取り組んでいるものが何か、誰がそのプロジェクトに直接関わっているか、これだけを知らされる人々により進められる。だからそれはきわめて念入りに封じ込められた事柄なのだ。

一つの秘密プロジェクトがあれば、その資金は様々な政府筋から流れ込んでくる。プロジェクトに従事する者には資金源など分らない。どんな高官たちがそれに関与していたとしても — 彼らでさえその資金がどこから来るのか知らないだろう。米国政府と契約を結びさえすれば、資金は必要な場所に必要なときに現れる。

もし情報が地球外からもたらされたものだとする、設計や分析を行なっている人々は、それがどこから来たのか決して分らないだろう。彼らにできることは、ロシアに出かけて行き、彼らがいかにしてそれを行なったかを調べることぐらいだ。彼らはどのプロジェクトも、私がサイロと呼んでいた区画に分割する。彼らは一人の大佐または将軍をプロジェクトの責任者にする。そして文字どおり、彼らはそのサイロの外の誰とも話をする事ができない。もし誰か助けが必要なときには、ある人物が別の場所に派遣され、机に座り、一片の紙切れを眺め、こう言う。“なるほど。問題が何かは分かった。それに対する答はこうだ”そして立ち去る。彼は自分が対処した事柄が何だったのかを知ることはない。

パームデール上空に現れるその巨大な三角形(複数)は、とてもゆっくり移動する — それらはとても大きく、動きがとてもゆっくりだ。私が思うに、それはベルギー全土の上空に現れる、動きのとても速いものと同一ではない。

人々はそれを既成物理学では説明できない。既成物理学というとき、私は我々が今日知っているエンジン、ジェットエンジン、ロケットモーター、推進システムなどを指している。燃料を入れ、何かを燃焼させる。するとそれは推力を発生し、物体を加速する。既成物理学では、我々の小さな太陽系の縁を遙かに越えて航行するのに必要な長い時間を人間がどうしたら生きられるか、説明することができない。

つまり、既成概念では、とても人々はそれを説明できない。それは量子物理学に関連付けられなければならない。そこでは物体が同時に二つの場所に現れることがほとんど可能だ。そして一部の高エネルギー粒子衝突器の中で陽子や電子が振る舞うように、現れては消え、また現れる。それは空間に充満しているエネルギーとその装置の結合だ。もし適切なエネルギーシステムと適切な電磁波スペクトルがあれば、地球から火星上の有人基地に何の損失も伴わずにエネルギーを供給することができる。テスラがそう言ったとき、おそらく彼はそのことに近づいていた。量子物理学とゼロポイント・エネルギーを使えば、その実現性がある。

サハロフと他の人々はこれに取り組み、とても説得力のある議論をしていた。それは、空間組織は海、エネルギーの海のようなもので、その中に固体エネルギーが漂っている、そして固体エネルギーとは質量だ、というものだった。もしそれが本当なら、重力波は存在し、実にすべてがヘビサイド方程式に立ち戻る。そこでは量子は今や質量ではなく、時間だ。もしそれが本当なら、全宇宙は違った様相を見せ、多くの物事が可能になる。それらは時間、空間、推力、力について我々が現

在持っている理解の中では不可能だと考えられている事柄だ。

もしこれらの UFO が宇宙の他の場所から来るのだとしたら、それはこのような何かに関係しているに違いない。我々の銀河でさえ横切るのに約 100,000 光年かかる。我々が想像するどんな既成の推力と力の仕組みも、人間の時間枠を考えたら役に立たない。もし他文明からの人々がここに来ているとしたら、彼らは量子物理学の細部まで理解している。

私がライト-パターソンにいたとき、時速約 20,000 マイルに相当する速度で、コロンバスからデトロイトまでの距離を移動した空飛ぶ円盤に遭遇した。当時、通常の航空宇宙業界に身を置く誰かが、今でこそ我々が知っている量子物理学、ワームホールなどについての知識を少しでも持っていたとは私には思われたい。だが今 CERN (Conceil Europeen pour la Recherche Nucleaire; セルン; ヨーロッパ合同原子核共同機関) に行き、そこの粒子物理学者たちに話をしたら、彼らは確実にこの幾つかは可能だと言うだろう。なぜなら、彼らは年中それを見ているからだ。彼らが質量を見ていると考える場所では、実際に彼らは時間量子の中で凍結されたエネルギーを見ている。彼らが見ているのは、実に凍結されたエネルギー束なのだ。それはほとんど何の制限も受けずにあちらこちらと移動する。

UFO は人々の想像にすぎない現象ではなかった。彼らが見たものは現実だった; それはどうして現実になったのか、何がそれを現実にしたのか、私には説明できない。だが人々は見えたものを見たのだ。

セントルイスの近くで、1 個のかなり大きな三角形物体が目撃された。それはサウスセントルイスまで移動した。何人かの目撃によれば、それは比較的穏やかに移動していたが、次の瞬間、文字どおり 2, 3 秒の間に約 20 マイルを跳躍した。私は地元の新聞社 (複数) やテレビ局 (複数) から多くの電話を受けた。どうしてあんな事ができるのかという問い合わせだった。私は答えた。どうしてそれが可能なのか、私も知らない。時空旅行を可能にする空間と時間と関係 (複数) についての量子物理学を使った説明、そのような説明でもしない限り無理だと。それ以外では説明する方法がない。この物体はまったくの無音だった。それは空中静止の状態から発進し、文字どおりほとんど姿を消し、ここにひょいと現れる — だからそれは、あるマンガのようにヒューと飛ぶのではない。何人かの警察官が描写したところによれば、それはほとんど消えたようになり、次にこちらに姿を現す。

難しいのは、物理的にそれを行なう方法を見つけることだ。何年もの間ゼロポイント・エネルギーの実験を行なったり、その開発をしようと試みたりしている人々がいる。時折誰かが偶然それに成功する。彼らはそれを常温核融合と呼びたがる。だが私はそれを常温核融合だとは思わない; 私はそれこそゼロポイント・エネルギーを捉えたのだと考える。私が知っている 3 人以外にそれを制御できた人はいない。それが起きるときは短時間であり、ほとんどの場合それは破壊的だ。それはまるでグランドクーラーダムの底にドリルで穴を開けるようなものだ。そんなことをしたら突然に水が噴出し、その力はあなたを真っ二つに切断するだろう。それに弁を付けられない限り、止めることはできない。

ある人物がおり、私の友人が実際にミシガン州アナーバーに訪ねていった。彼は数学の天才だと私は考えている。彼は実際にそれを制御する方法を見つけたのだ。彼は、自分が持っている知識と、このエネルギーを自分が欲しいと思うときに取り出し制御できる能力のために、誰かが自分を

殺しに来ると恐れていた。我々は彼を5年間見ていない；我々は彼がどこにいるのか知らない。

今日我々は、石油価格に関連する一つのエネルギー問題を抱えている。もしあなたがこのゼロポイント・エネルギーを利用する方法を発表したら、何が起きるとあなたは思うか？ゼロポイント・エネルギーは1インチ立方につき40から50メガワットの電力に相当する。これは莫大な電力だ。もし人々が思いどおりにそれを取り出すことができたなら、最早誰もガソリンやオイルを売る必要はなくなる。人々はただそれを利用すればよい。それはあたくも五大湖まで行って水を一滴すくい、利用するようなものだ — 無くなることなど考えられない。それは全宇宙に満ちており、物質-反物質の相互作用として絶えず変動しているために、鎮まった湖のようではない。それは宇宙の大きさを持つ貯水池なのだ。だから、我々がそれをどんな目的に使おうとも、それは決して無くならない。

この研究者はこう主張したものだ。もしこのエネルギーを汲み上げ、他の場所に持って行ってそれを解放したら、局所空間の時間領域に裂け目をつくることになる。それは問題を引き起こす。彼はそれをしたと主張し、再びそれをしようとはしない。

また、それは従来のジェットエンジンでは利用できない。利用するためには実際のゼロポイント・エンジンを新開発する必要がある。ミシガン州アナーバーのこの研究者は1台持っていて、地下室でそれを動かしていた。それは何のエネルギー源にも接続されておらず、テーブルの真ん中に置かれたまま1年間動いていた。

だが、これらの研究者の誰も、フットボール競技場大の船を造り、それをセントルイスの近くに現れた物体が見せたような速度で動かす方法には言及していないようだ。実のところ、速度とは間違った言葉だ。なぜなら、従来の考えではこの言葉は空間を疾走することを意味する。だがそれが現実に CERN の高エネルギー粒子のように振る舞うとしたらどうか？それらの粒子はエネルギーに姿を変え、次に再びここに現れる。どこかに移動した質量はない — というのは、すべての質量は固体エネルギーだからだ。従来の知識では、人間のような複雑な有機体はエネルギーと固体の間を行ったり来たりできない。だが、それは我々が今までそれを見たことがないというにすぎない。

人間は固体エネルギーだ。人間は固体だと考えられている。本当にそうか？実際のところ、身体の中の原子間距離は、太陽の周りを回る惑星のそれとほとんど同じ比率を持っている。だから、もし自分自身の個々の原子を眺めることができるなら、我々は98パーセント空間だと言える。もし我々が固められた原子核と電子だけからなる中性子星と同じだったとしたら、それは針の先に乗るだろう。実際に身体を構成する材料だけを考えたら、我々の全存在は針の先に乗る。

ジェームズ・S・マクドネルはマクドネル・ダグラス航空を創設した人物だが、彼は超常心理学を研究する一つの研究所を持っていた。彼の飛行機(複数)がバンシーやファントムと名付けられた理由がそれだ。彼は精神世界と超常現象に大変興味を持っていたアイルランド人で、研究部の一部に資金を与え、超常現象を研究させた。

[このことを確認するロバート・ウッド博士の証言を見よ。SG]

奇術師の“偉大なランディ”が彼の組織に入り込み、彼を惑わすために約6ヶ月間にわたり実際

に奇術の実験を行なった。そこには本物も実際にあったと思われるが、その後ランディはその信憑性を失わせた — 結局、その研究部長はこれに関係したことについては何も語ろうとしなかった。

ゼロポイント・エネルギー装置を持っていたアナーバーのその人物が、実際にマクドネル・ダグラスにやってきた。彼は同伴者(複数)と一緒に入ってきて、持参したこの水素モーターについて話すつもりだった。私はその会合に呼ばれた。会合もほぼ半ばにきたとき、私ははっきりと言った。あなたたち、それはゼロポイント・エネルギー装置だ — あなたたちはどうしてそれを認めないのか？ランディによって信用を落とされた研究部長は、その発明家たちが議論している間に嫌悪感を募らせた。彼は警備員(複数)を呼び、彼らを工場の外に送り出させた。というのは、その研究部長はまた同じ事が起きるのではないかと恐れていたからだ — 彼はそれを疑似科学だと考えた。私は言った。それは疑似科学ではない；我々が今知っている事柄の向こうにあるものだ。

[ある研究分野に信用の失墜や作り話を持ち込むための侵入活動をする人々について、多くの報告がある。こうして、その研究分野は主流から外され、発展し支持される機会を失っている。SG]

超心理学 — どのようにしてそれを評価したらよいだろうか？それに近づいたのは、ロシアの超心理学研究所(複数)の人々だけだと私は理解している。その大部分は今存在しない。彼らには一緒に実験を行なう大変興味深い数組の双子がいた：彼らは双子の間、彼らの頭脳間に起きる何かを測定していた。こうして彼らは、双子の他方が考えていたことを実際に知ることができた。それはまったく驚くべきものだった — 頭脳の中で電磁波スペクトルが発生していたのだ。

ロシア人たちはスカラー波と呼ばれるもの、また頭脳の中の様々な電磁波スペクトルについて、多くを成し遂げた。起きていることを証明するために必要な測定とは何か、それを発見したら超心理学は説明できる、彼らはそう確信していた。だが、彼らはおそらく何かを測定する最先端に到達したのだ。

それはすべて物理学に基づいている。もしそれがスカラー波なら、我々は論議を呼ぶまったく別の物理学の大通りにいる。テスラはその中に深く深く足を踏み入れていた。テスラにとっての難事は、彼が他界したとき、J・エドガー・フーバーがやってきて、ほとんどあらゆるものを持ち去ったことだ。彼のメイドが彼が亡くなったのを発見したとき、そこにいたのは彼一人ではなかった — 彼の部屋には5人のFBI 職員がいて、あらゆるものを盗み取っていた。テスラは死んでベッドに横たわっていた。彼の甥が米国政府を相手取って訴訟を起こし、名目上彼の全装置、実験結果、記録を勝ち取った。

[このインタビューの最後にある政府文書を見よ！SG]

名目では記録などを収めた50箱があったが、彼らはそのうちの45箱だけをベオグラードで手に入れた。他の5箱は行方不明だ。非常に多くの物が失われたままだ。

我々は1917年か1918年に地中海にあった1隻の潜水艦についての記録も発見した。テスラはニュージャージー州にいて、これらのアンテナの一つを沖合に、もう一つを海岸に置いた。彼はその潜水艦の艦長と対話をしていた — ある人物が海軍の記録からその潜水艦の航海日誌を実際

に掘り出した。それには基本的にこう書いてある：自分はニュージャージーにいてと言い張る大馬鹿者が私に話しかけている；この男は頭がおかしいに違いない。なぜなら私は 100 フィートの深さにいることを知っており、誰もニュージャージーから私に話しかけることなどできないからだ — 彼はテスラの日誌にも符合する言葉を見つけた。では、それは何だったのか？人々はそれはあり得ないと言う — それは一つの偶然だった、それは偶然の一致だった、等々。だが、人々が実際に成し遂げたことで我々が説明できない物事は多い。

1960 年代に私がマクドネル社の若い技術者だった頃に戻ろう。我々は空軍と海軍のためにマッハ 4 と 6 で飛ぶ飛行機を設計するのが日常業務だった。ベトナム戦争がその大きな妨げになったが、我々は容易にマッハ 6 を出せるエンジンを作動させていた。我々はマッハ 12 の飛行機を飛ばすエンジンを実際に試験した。事実、1966 年にビル・イーシャーという名前の同僚 — 彼はまだ存命で、ハンツビルの SAIC で働いているが — 彼はあるエンジンを試験台に載せた。それは約 120,000 フィートの高度でマッハ 8 という予測性能の 5 パーセント以内だったが、約 20 分間作動した。これは建造できる、そのとき我々はそう確信した。私は 2, 3 週間前に X-33 (*宇宙往還実験機) を見る機会があったが、これほど私の関心を引くものはなかった。彼らはこの飛躍的進歩を達成した — 熱を反射し、飛行機の内部を室温に保つことを可能にした新しい遮熱技術。我々は 1965 年にほとんど同じ構造を組み立て、マッハ 12 の条件で試験した。見たものは我々のものより少し洗練されているが、今日ではより洗練された材料があるから当然だ。だが我々は当時それが可能だと確信していた。人々は笑って、いや、君たちにそれはできない、と言った。そうでなければ、いや、それは不可能だ、危険だから我々はやるつもりはない、と言った。だが、そうではない。それは危険ではなかった。それは可能だった。夢を追いかける者が物事を実現する。

もしライト兄弟の一人が弁護士で一人が会計士だったなら、どういうことになっただろうか？彼らはこう言ったかもしれない。“どうしてこんな馬鹿げた飛行機を造る必要があるんだい？一人しか運べないじゃないか。誰がそれを買うんだい；どれほどの利益が出るんだい？自転車は 40 パーセントの利益を上げている；何のためにこんなことをするんだ？借金のことを考えてみろ — みんなから訴えられるぞ。よくない考えだ；やめにしよう”我々がそういう発想をする限り、何もできない。言うべきことはこうだ：“おお、これはまだ誰もやったことがないようだ；やってみよう”

私が若い中尉として初めて UFO に入門して以来、今日までの期間を振り返るなら、米国ではこれまで誰も気付いていない多くの秘密プロジェクトが進行していると思う。もし人々がこれらの物体の幾つかを見たなら、それはおそらく彼らの目を釘付けにするだろう。それらは人々が持つ飛行機という概念には適合しない — だから、人々にとりそれは UFO に見える。つまり、UFO と思われる物体に占める割合の大きな部分は、我々か他の誰かが行なっている秘密プロジェクトの所産だ。それは地球の工学技術だ。もし人々がそれらの背後にあるものを本当に知ったなら、こう言うだろう。なるほど、それがどんなふう to 作動しているのか、理解できる。

[人間がつくった反重力輸送機、またそれが地球外輸送機と容易に見間違われることについて述べているマーク・マキャンドリッシュの証言を見よ。私が話した多くの部内者が明らかにしたように、我々は地球外輸送機とともに、地球製の外来輸送機を持っている — それらはすべて UFO と呼ばれている。SG]

それはブルーブック計画に似た状況だと思う： どうしても説明できないこの10から15パーセント、あるいは20パーセント。我々がよく知らない方法でUFOに乗った生命体(複数)が地球を訪れている、この事実以外にはどんな説明も当てはまらない — それは時空旅行だ。UFOの一部はそのようなものだ私は信じて疑わない。

人々が考えるほとんどあらゆるものは転用され、武器として使われる可能性がある。もし人々がこの種のエネルギーとエネルギー-時間遷移に足を踏み入れると、それらは地球上の全人口を消滅させるのに使われる可能性がある — またそれらを使って我々を化石燃料への全面依存から解放することもできる。

[長期的持続可能性のために必要な適切な工学技術を用い、人間が存続し続けるためには、平和こそが最も優先される条件であることは疑う余地がない。明らかに我々は、これらの工学技術を戦争に用いる選択肢が我々の文明の終焉を意味する進化の段階にある。SG]

第一に、弾道ミサイル防衛システムは、その脅威がどこから来るか分かっていることを前提に設計されているという点で、おそらく非現実的だ。ロシアが敵だったとき、それがどこから来るかは五分五分の確率で予想できた。今日我々が無法国家(複数)を相手にしているときに、それはまったく馬鹿げている。脅威はブリーフケースを持って歩いて来る人間だ — 1950年代に直径8インチの核弾頭が造られたことを思い出して欲しい。それは4分の1キロトンの兵器だった。それは考えられるどんなブリーフケースにも収納可能だろう。それを運んでいる人間は死ぬ。だがどうせ彼は死ぬつもりだ。だからどこに違いがあるか？ 私はその方をはるかに恐れる。もし地球外知性体(複数)が時空を旅することができるなら、我々が軌道に兵器として何かを置く行為は、ジンギスカーンに爆竹で刃向かうに等しい。それは無意味だ。

[ここで彼は、宇宙の軍事化についてとても重要な点を明らかにしている： 地球のテロリストたちによる本当の脅威には、このような兵器システムでは対処できない。それらを何らかの地球外目標に対して用いるという発想は、気でも狂っていなければ自殺と隣り合わせだ。ここで述べている部分はまた次の考えをも支持する。つまり、もし地球外知性体が敵意を持っているなら(だから宇宙兵器が必要だ)、我々が最初の核兵器を爆発させた頃に、地球の文明はわけもなく終焉させられていたかもしれない。我々が今でもこうしていることは、ETの存在が脅威ではないという考えを強く支持しており、宇宙の軍事化を正当化する口実にはなり得ないものだ。SG]

我々がゼロポイント・エネルギーについて語る時、それが意味するのは、すべてのものが静止しても、依然としてエネルギーはそこにあるということだ。それは大洋の水位に似ている。物質と反物質の間には、それ自体の消滅と再創造に伴うある一定のエネルギーの流れがある。それは恒星の中で起きる — それは絶え間のないエネルギー交換だ。平均はゼロだが、そのゼロは無に比べたらとても高いレベルにあるだろう。サハロフと一部の物理学者たちが言ったのは、宇宙が存在するための背景エネルギーを生み出すのはこのレベルだということだ。

私がサンディ・マクドナルドとともに再び宇宙に関係し、我々が最終的には米国宇宙航空機計画(National Aerospace Plane; NASP)になった仕事を始めたとき、私は英国での会議でロシア人のグループに会った。そのうちの一人は地上のアンテナから軌道上の衛星へ、次にまた地上のモスクワ

へとエネルギーを伝送することに関わっていた。それは約 10 から 15 パーセントの損失しか生じていなかった。彼はこう言った。我々にとってそれが可能なのは、それがスカラー波投射装置だからだ。ここにその装置がある — 彼はルーズリーフ・バインダーを開き、こう言った。“これを写真に撮ったり描き写したりしてはいけない； 見るだけにしてくれ”

そしたら、何とそこには私がユーゴスラビアで見たそのチューブがあったではないか。それは特斯拉がつくったものだ！これはキャスパー・ワインバーガー(*レーガン政権の国防長官)がロシアの対弾道ミサイル兵器だと言っていたものだ。そのロシア人は、もしこのスカラー波装置が置かれている建物に入っても、見えるのは何本かのケーブルを引き込んだだけのコンクリートの建物だけだろうと言った — なぜなら、それは対弾道ミサイルレーダーではないからだ — それはスカラー波電送装置だ。ようやく米国国防総省がその中に入ったとき、彼らはその中に数本の金属線がある空っぽのコンクリートの建物を見つけた。そしてこう言った。“なんてことだ、彼らはみんな持って行ってしまった” だが、彼が言うには、そこにはもともと何もなかったのだ。彼はこの基地から衛星へ、さらにモスクワへと、最大 10 メガワットまでの電力を伝送し、モスクワでは 8.5 から 9 メガワットを受信したと主張した。

[キャロル・ロジン博士もまた、米国がソ連の対弾道システムの脅威を誇張したと確証していることに留意されたい — 米国はロシアが何も持っていないときに、彼らは‘キラ衛星’を持っていると主張していた。SG]

彼らは、これらの幾つかの既成概念を外れた物事がどうして可能なのか、それを今にも理解しようとしていた。だがそのすべてが今はない。彼はどこにいるのか。彼は仕事を失い、彼の研究所はなくなった。こうしてソ連ではその仕事の多くが破綻した。

[ビーデン中佐とデービット・ハミルトンの証言を見よ。SG]

それは特斯拉が火星 — 火星の表面 — にエネルギーを伝送するために使えると言ったものと同じチューブだ — こうして有人基地にエネルギーを供給する。月の表面でも同じことができる。一度それが実際に可能になると、軌道上での燃料の問題は解消する：これらのチューブの一つを利用し、適切なアンテナに直接エネルギーを発生させる。そうすれば月まで飛んで行けるし、軌道に乗って飛ぶこともできる。何でも思いのままにできる。

これらの進歩したエネルギー工学技術を利用する手段を持つ人々は、それを公開する術を知らない。というのは、彼らは誰がそれを入手することになるのかを恐れているからだ。人類にとつてもない恩恵を与えるとは言っても、誰かがその同じエネルギー源を手に入れ、米国駆逐艦コールにしたと同じことをする心配がある — 舷側に穴を開ける代わりに、艦船を丸ごと破壊する。

闇の予算の世界は、あの親しげな幽霊カスパーを描写するのに似ている。彼の漫画を見ることはできるが、それがどれくらい大きいのか、その資金がどこから来るのか、どれくらいの数があるのか、その区画化と守られる誓約のために、知ることはできない。私がいた場所で働いていた人々の今を知っているが、もしあなたがそれについて彼らに訊いても — たとえインターネット上で論じられていようとも — 彼らは“知らない、あなたは何を言っているのか”と言うだろう。彼らは今 70 歳台だが、

依然としてあなたが言っていることを知っているさえ、決して認めようとしないうらう。あなたには見当がつかないが、たぶんあなたが考えるよりも巨大だ。繰り返すが — それには理由がある：もし彼らが実際に大きな惨事を引き起こしているとしたら、我々はその敵対する相手に我々ができることを知られたくない。もし彼らがそれを知ったなら、彼らがそれをするのを我々は止められない — 彼らはそれを別のやり方でやる。

ハル・パソフ博士の証言

Testimony of Dr. Hal Puthoff

2000年11月

理論および実験の物理学者であるハル・パソフ博士は、スタンフォード大学の卒業生だ。彼は電子ビーム装置、レーザー、量子ゼロポイント・エネルギー効果の分野における40編以上の技術論文を発表し、レーザー、通信、エネルギー分野の特許を持つ。パソフ博士の専門家としての経歴は、ゼネラルエレクトリック社、スペリー社、国家安全保障局、スタンフォード大学、スタンフォード国際研究所での研究、また1985年からはテキサス州オースチン高等研究所長、さらにアーステック・インターナショナル社長就任と、30年以上に及ぶ。証言の中でパソフ博士は、我々が宇宙旅行を可能にする工学技術を発見するにつれ、この行路の先を進んでいる他の文明が存在する可能性を考えなければならないと指摘する。これはET訪問の可能性を広げるものだ。我々の電磁工学技術の歴史が1世紀であることを考えれば、我々よりも数百万年先に行く進んだ文明があり、彼らの工学技術が我々の想像をはるかに超えるものかもしれないことを、我々は認識する必要がある；それゆえに、ET/UFO問題は現代の科学者たちが真剣に考えるに値するものだ。

... [UFOに関して]もちろん我々は、異常な振る舞いをしながら飛び回る、飛行機のような何かがいるようだという主張(複数)があることを知っている。それは一般の人々の間だけではない。軍パイロットと信頼できる観測者、大体は軍人だが、それらの人々の間にある。

それらが持つと思われる幾つの特徴、またある種の物理学と物理学が向かっている先を考えたとき、それらの一部はある種の輸送機または探査機かもしれないという考えを排除することができない。どこか遠くの文明から来た、おそらく輸送機よりは探査機である可能性が高い。

だが、我々の電磁工学技術の歴史が1世紀であることを考えれば、次に我々が認識することは、我々よりも数百万年先に行く進んだ文明があるかもしれないということだ。彼らは接触を行なうための何か別の方法を持っているのか、あるいはワームホールのような方法を発見しているのか、語る術はない。それは我々の想像をはるかに超えるものかもしれない。

NORAD(北米航空宇宙防衛司令部)は彼らが説明できない‘無相関目標(uncorrelated targets)’に遭遇している。時々衛星(複数)は早足(fast walkers)と呼ばれる物体(複数)を捉える。既存の飛行機などでは説明できない速さで移動するその様子は、エネルギー粒子の飛跡のようだ...

デービット・ハミルトンの証言
Testimony of David Hamilton
2000年10月

デービット・ハミルトンはエネルギー省の新世代電力システムの分野で働いている。彼の説明によると、我々は世界の化石燃料供給量をほぼ使い尽くした。今まさにアジアと中国が“産業革命”の最中にあり、すでにそれを終えた“第一世界”を凌ぐ化石燃料消費者になろうとしている。現在の地球環境汚染、地球温暖化、等々を軽減し、持続可能な工学技術社会として前進するためには、我々は古い理論枠に適合しない工学技術を開発する必要がある。

我々は石油に依存する世界の仕組みをつくり上げたが、その石油供給は益々制限されるようになっていく。今その石油供給の実情を眺めると、我々は供給と需要が交差しかねない、歴史上これまでになかった状況に置かれている。だがあと10年もすると、我々は供給と需要が交差する事態に直面し、供給は深刻な制限を受けることになるだろう...

彼らはロシアの大学(複数)と共同で、これまでで最良の部類に入ると考えられる重力実験を行なった。それが行なわれたのは、ロシアの高温物質研究所だった。彼らはこの実験を所外施設で行ない、この装置が重力場を35パーセント減少させることを実証した。

今や我々はそれを目にした。我々はそれに強い感銘を受けた。エネルギー省で重力研究を行っている上級研究員たちに、私はそれを見せた。我々は皆それに関心を持った。我々は第二段階の実験を行なうために、それを徹底的に追究したいと考えた — 十分に科学的であるための基本である複製可能性(duplication)、再現性(reproducibility)。だがこれは人々から大変な抵抗を受ける。ロシアではなおさらだ。彼らがこの所外実験室を去ったとき — それは大学と通りを挟んだ向かい側にあったと私は理解している — そこは完全に荒らされていた。

すべての設備が無くなっていた。だが幸いなことに、彼らは記録、ビデオテープ、発表資料を残した。その全部が無傷だった。だがその装置は、その実験を再現するために必要な多くの設備とともに行方不明だ。

これには何らかの金儲けが絡んでいたことを考えると、そこにはマフィアのような人間たちが関わっていた可能性がある。私のロシア人の友人は言う。それと同じようなことをする政府の一部はマフィアと何ら変わらない。こうして問題が複雑になる...

私の心配は、もし我々が今すぐ何かをしなければ、資源に不自由し始めたいずれかの社会が、資源の不自由を引き起こしている原因を除去しにかかることだ。他の人々が我々を除去したいと考えるか、あるいは我々が自分たちの生き方を続けるために彼らを除去しなければならないか、我々がこのような状況に陥るのを見たくはない。それこそ我々が今始めなければならない理由だ。

トーマス・E・ビーデン中佐(退役)の証言
Testimony of Lieutenant Colonel Thomas E. Bearden (retired)

2000年10月

ビーデン中佐は代替エネルギー技術、電磁的生物効果、統一場理論構想、その他の関連分野における主導的な概念論者だ。彼は米国空軍の退役中佐で、ジョージア工科大学から博士号と原子核工学の修士号を取得している。現在彼はCTEC社の最高経営責任者、米国著名科学者協会会長、アルファ財団高等研究所名誉研究員の肩書きを持つ。証言の中でビーデン中佐は、現在知られているどの物理法則にも違反せずに、真空から利用可能なエネルギーを引き出すことがいかにして可能か、これについて詳しく語る。ビーデン中佐たちはそれを実証する電気機械的な装置(複数)を製作した。彼はまた、ある勢力(複数)がいかにしてこの工学技術が小さな秘密集団(複数)の外に広く知られることを妨げようとしているのかを説明する。だが残された時間は少ない。なぜなら、我々の地球の石油と石炭は、今の世代を賄うのにさえ不十分な埋蔵量しかないからだ。我々の最高知性と科学者たちがまずこのことを認識し、このエネルギー問題を解決する努力のもとに結集しなければならない。それも2004年になる前に。彼はそう説明する。

... エネルギー分野には、産業と経済の巨大な連合体が存在する。それは一つの連合体ではない。エネルギー分野には実に多くのグループがある。それぞれがそれ自身の領域でとても強力になっている。そのどれもが、簡単で小さな電気タップが真空から莫大なエネルギーを汲み上げるのを見たいと思わない。それよりも彼らは、人々がもっと多くの石油を燃やすのを見たい...

殺人部隊が使われている。たとえば私は発明家のスパーキー・スウィートと一緒に働いた。彼は大変有名な人物だ。彼は約300ヤードの距離から狙撃ライフルで銃撃された。彼の命が救われた理由は、ただ彼が高齢で大変弱っていたというだけのことだった。銃弾が彼の命のその部分を狙った。彼は階段を昇っているときによろめいて倒れた。彼の頭が前にのめったとき、その銃弾がまさに彼の頭があった場所を通過した。もちろんその暗殺者は見つからなかった...

もし我々が真空からエネルギーを引き出すこのシステムを使うなら、この生物圏を浄化することができる。我々が直面する最も重大で危機的な事柄の一つは、安価な石油の供給は今が絶頂期にあるということだ。それは紛れもない現実だ。このことは何を意味するか。我々が今後もある程度の石油を手に入れることは確かだろう。だがその価格は年々際限なく上昇する。一方、電力の需要は世界中の至る所で高まり、それがまた石油価格を押し上げる。こうして我々は、典型的な価格急騰の事態を迎える...

さて、何が起きるか？私が状況を見て予想するところでは、2008年前後のどこかで、我々は世界経済の崩壊を経験する。経済は予想されるこの需要の増加に対処できない。もし中東で戦争でも起きたらどうなるか。だが2008年までには世界の経済が崩壊すると私は思う。そのほぼ1年前になると、経済が破綻し、あらゆる民族、あらゆる指導者、あらゆる国民の上へのしかかる圧迫が強くなる状況下で、死に物狂いの人々はどんなことでもするだろう。追い詰められた指導者たち、特に狂信的な指導者たちは手段を選ばないだろう...

私が見るところ、今進行しているエネルギー危機は、おそらく大規模な終末戦争を引き起こすだ

ろう。もし我々がエネルギー危機を解決できない場合、それは 2007 年頃に起きるかもしれないと誰もが長い間恐れてきた。それから逆算すると、時期は 2004 年の第一四半期だ。これらの新しいエネルギー装置は、ソーセージのように組み立てラインから次々と出てくるのがよい。そうでないと人々はそれを忘れて家に帰ってしまうだろう。それでは状況を変えるには手遅れだ。つまり、我々に残された時間がいかに少ないかということだ。

私はこれを米国に対する、また実に文明の存続に対する、私の生涯にあった最大の戦略的脅威だと見ている。...

私にはとても親しく一緒に働いた一人の友人がいた。彼は実用的なエネルギー発生装置を製作した人物だ。彼はある会議で一つの 8 キロワットシステムを実演した。その後、不思議なことに、彼とその家族全員が姿を消した。そのとき以来、彼は今なお健在で裕福に暮らしていることを我々は知った。彼はとても高価な衣服を身にまとい、とても素敵なお車に乗っていた。彼と彼の家族は、そのとき姿を消したにもかかわらず、元気に暮らしている。

だが彼は一つの完成されたユニットを持っていたのだ。それは地球上から見事に消えてしまった。さて、それを消失させたのは強大な財界勢力か、あるいは何らかの闇のプロジェクトだ。彼らはそれを隠してしまった。...

私は心からこう信じる。我々は米国政府の主導のもとで、我々を救い我々の地球を救うために、これらの工学技術を公開しなければならない。もし我々がそれを秘密にしておくか、または制御集団の手に握らせたままにしておけば、2007 年頃には我々はすべて忘却の淵に沈む。...

一つの予想をしよう。もし政府が動かなければ、75 から 80 パーセントの確率で我々は失敗する。我々は、化石燃料を実用的なエネルギー装置で置き換える事業が 2004 年の第一四半期には必ず始まるようにしたい。もしこの 2004 年の第一四半期を逃したら、我々は皆家に帰り、吹き飛びつつある束の間の残された時間を家族とともに楽しむのがよさそうだ。...

誰でも現代的な生活を望む。人々は泥や汚れた場所から抜け出て、照明や電力で動くものを欲しがらる。そして産業を興し、仕事をもち、家や学校を建てる。それは人間の本性から来る共通の行為だ。それを今のやり方で続けようとするれば、我々はこの地球を破壊し、否応なく互いを滅ぼす。我々はもう少し賢くならなければならないと思う。

ユージン・マローブ博士の証言

Testimony of Dr. Eugene Mallove

2000 年 10 月

ユージン・マローブ博士は現在インフィニット・エナジー (Infinite Energy) 誌の編集長であり、またニューハンプシャー州の新エネルギー研究所長だ。彼は MIT (マサチューセッツ工科大学) から航空工学と宇宙航行学の学位を、またハーバード大学から環境保健科学 (環境汚染制御工学) の博士号を取得している。彼はヒューズ研究所、TASC (The Analytic Science Corporation) といった企業や MIT リンカーン研究所で先端技術工学に関わった豊富な経験を持っている。マローブ博士は、

1989年3月に起きた常温核融合論争のときのMIT科学記事執筆主幹だった。彼は、MITで偽造された常温核融合データ(これは主題全体の信憑性を失わせることに役立った)について調査を要求したが、適切に行なわれることはなかった。その後、1991年に彼は辞職した。科学界の常温核融合問題に対する故意の過小評価と、ET/UFO問題に対する過小評価との間には、強い類似性がある：両方とも冷笑され、誹謗されている。なぜなら、それらは既成の理論的枠組みを壊すからだ。マローブ博士はインタビューの中ではっきりとこう述べる。“特に学界の物理学者たち、また一般に学界に対して、次のように示唆することほど忌み嫌われることはない。あなたたちは間違っているだけではない；あなたたちはどうしようもないほど間違っている、破滅的なまでに間違っている”彼の雑誌の中でマローブ博士は、我々にマイケル・ファラデーのこの格言を思い出すように忠告している：“真実であることほど素晴らしいことはない”

... 今日我々は、あの常温核融合という低エネルギー核反応が本物だったことを事実として知っている。それは主として熱を生成する安全な核反応の一種だが、また核変換をも伴う - 大変有益で強力な反応だ。それは多くの企業の手の中で商業化されつつある工学技術だ...

これについては何の疑念もない。それが意味するものはこうだ。1立方キロメートルの海水を汲み、その中の重水素をすべて融合させたなら、地球上にあるすべての石油資源を燃焼させたエネルギーに等しいだろう...

常温核融合の問題に関しては、特許局とエネルギー省による異常なまでの基本的法的責任の放棄が行なわれてきた。常温核融合の特許(複数)は今も認可されていない。常温核融合に類似する特許の認可を受ける唯一の方法は、常温核融合またはそれに類する言葉を削除することだ。そのようにして成功した人々もいる。パターンソン・パワーセルはその一例だ。それは年齢による審査迅速化条項(パターンソン博士の年齢のため)が適用されたもので、それが彼に有利に働いた。彼は特許局の別の技術グループ(art group)の審査を通過した。

だがほとんどの場合、もしその特許が特許局のハーベイという名前の人物を通るとすれば、彼はそのような特許はすべて却下するだろう。それらは認可されないだろう。米国市民はこの特定の事例に関して憲法上の権利を否定されている。疑いもなくそうだ。我々はそれについての審査追跡記録を持っている。間違いなく、そこでは深刻な犯罪行為が進行している。常温核融合や新エネルギー革命が前進するためには、それらは最終的に根絶されなければならない。それが根絶されなければ、人々は商業化基盤を持たないだろう...

私が知ったことだが、特に学界の物理学者たち、また一般に学界に対して、次のように示唆することほど忌み嫌われることはない。あなたたちは間違っているだけではない；あなたたちはどうしようもないほど間違っている、破滅的なまでに間違っている...

ポール・ラビオレット博士の証言
Testimony of Dr. Paul LaViolette
2000年10月

ポール・ラビオレット博士は4冊の著書を書き、物理学、天文学、気候学、システム理論、心理学に

関する多くの独創的な論文を発表している。彼はジョンズホプキンス大学から物理学士号、シカゴ大学から経営学修士号、またポートランド州立大学から博士号を取得し、現在は学際的な科学研究所であるスターバースト財団理事長をしている。彼は超量子力学(subquantum kinetics)を開発した。これは電気力、磁気力、重力、核力を統一的に説明し、年来の物理学上の諸問題を解決する微視的物理学への新しい取り組みだ。この理論の予想に基づき、彼はビッグバン(宇宙大爆発)理論に事実上取って代わる別の宇宙論を展開した。ラビオレット博士はまた、深刻な欠陥を抱えている一般相対性理論に置き換わる重力の新理論を開発した。超量子力学の予想によれば、タウンゼント・ブラウンが発見した電気重力結合現象は説明がつき、また B-2 爆撃機に応用されている進歩した航空宇宙推進技術が説明される可能性がある。UFO、闇の予算による推進システム、物質化と非物質化についての理解に加え、彼は米国特許局の内部事情についても深い知識を持っている。インタビューの中で彼はこう述べる。現在、もしある発明が既成物理学の理論に適合しない場合には、特許審査官たちはそれが理論に違反するので間違っているに違いないと考え、それを直ちに却下する。実際に新エネルギー工学技術は犠牲になっている：それらは理論に合わないので、必要な財政的支援から遠ざけられ、あるいは特許が認可されない — 特許局は法律を犯してまでそうする。現在の地球の環境汚染、地球温暖化、等々を軽減し、持続可能な工学技術社会として前進するためには、我々は古い理論枠に適合しない工学技術を開発する必要がある。

... 例を挙げればロズウェルで墜落があり、これをすべて秘密にしておくために国家安全保障局(NSA)が組織された。さて、そのような出来事は我々の政府当局者の一部にとり、大変な動揺を引き起こす経験だ。地球外知性体が存在し、彼らはこの進歩した工学技術を持っている。何かにとても動揺したとき、起きる反応の一つは、それを隠すことだ。そしてそれを我々自身のためにいかに利用できるかを考える — 我々は他国より一歩先んじなければならない。当時我々はソ連と冷戦の最中であつた。だからその理由付けは、それを軍事目的に使うということだった。

自動車が開発された 100 年前に同じ事が起きたとしたら、どうだろうか？我々は今でも馬車に乗っていたらと私は心から信じる。なぜなら、自動車は戦争というものを食べる恐れがあつたからだ。それは移動をはるかに高速にする。だからこれを秘密にしなければならないのは当然だ。その当時は使える手段がなかった；我々には NSA(国家安全保障局)がなかったし、この進歩した工学技術を閉じ込める主要な計画もなかった。

科学は観測に基づいており、変化に対しては寛容だと我々は考える。だが科学と科学者自身についてもっとよく知れば、それがいかに一つの宗教であるかが分かる。それはとても閉鎖的で、その基本原理を変えることに強く抵抗する...

あるカナダ人についての事例だが、彼は靴箱とほぼ同じ大きさの何かから、一軒の家を十分に賄う量の電力を発生する工学技術を開発した。それは何かを新しい配線方法で繋ぐもの — ある種の非線形装置だった。彼は何の隠し立てもせず、その装置を公表した。ある日彼の家が特別機動隊に包囲され、彼のすべての装置類が押収された。彼はテロリストの工学技術か武器を秘匿していたという理由で逮捕された。そして、今後この分野での研究をしないことを誓約した書類に署名した後で、やっと釈放された。現在彼は生活のために芝刈りをしている...

特許局の今の姿勢は、実のところ法律に違反している。それは米国物理学会に所属する物理学

者たちを安泰にしようとするものだ — 彼らの考え方にいわば権力を与え、エネルギー危機のような、我々が直面する諸問題を解決することができる優れた発明を国民が利用するのを阻害している。特許局の全体を貫いているのはこの姿勢だ。私は体験からそのことを知っている。なぜなら、私は約 1 年間特許局にいてその何人かを知っているし、行なわれていることの一部も知っているからだ。たとえば、私が知っている審査官だが、彼は光速よりも速く信号を送るある方法について特許を認可した。するとこれはロバート・パーク(*物理学者)により、彼のウェブサイトで物笑いの種にされた。彼らの世界では、これをその年の最も馬鹿げた特許賞であると紹介した — こんなことが行なわれている...

人々は言いたいことは何でも言える；それは言論の自由だ。だが特許局にとり法律を守る代わりに彼らの命令に従う — それは不法行為だ...

フレッド・スレルフォール氏の証言

Testimony of Mr. Fred Threlfall

2000 年 9 月

スレルフォール氏は 1953 年にカナダ空軍トロント基地の通信教官だった。そのとき彼は、1 個の物体の非物質化と再物質化を成功させたある実験を目撃した。最高機密取扱許可を持っていた彼はまた、基地の資料庫から第二次大戦のガンカメラによる撮影フィルム of the 原版を借り出すことができた。これらのフィルムを見ていて、彼はフィルムに UFO が映っているのに何度も気付いた — 様々な姿勢、様々な形だったが、間違いなく UFO だった。彼はまた、空中で UFO が飛行するのを自分自身で目撃した。

... 1953 年に教官としてトロントの飛行場にいたとき、私はある異常な実験を目撃した。私はある実験を終えたばかりで、自分の教室に戻る途中だった。そこでこの実験が行なわれていたのだ。この部屋には約 4×4(*単位不明)の密閉されたガラスの囲いがあった。一つの保管庫の上には大きなガラスの灰皿があった。私は、何が行なわれているんだい？と訊いた。今、ある実験の最中だ。別の部屋に灰皿のない同様の装置がある。我々はそんな話をしていた。そしたら科学者の一人が、さあ、やってくれ、と言った。次に起きたことは何か。その灰皿はそこから消えた。皆は次の部屋に入って行き、この上なく興奮していた。なぜならその灰皿はそこにあったからだ。だからそれは非物質化し、再物質化したのだ...

テッド・ローダー博士の証言

Testimony of Dr. Ted Loder

2000 年 10 月

テッド・ローダー博士は尊敬される科学者で、ニューハンプシャー大学の海洋学教授だ。彼は従兄のスティーブン・ラブキン准将から、ET/UFO の主題は現実であるばかりでなく、地球環境を保護し、持続可能な地球社会へと発展することを可能にする工学技術への鍵だと教えられてから、この主題を取り巻く秘密を終わらせるための積極的な唱道者となった。彼は学生、他の科学者、国会議員といった人々に、人類は宇宙で孤独ではないことを知らせるために尽力してきた。

4.0 一般社会、民間および政府の利害関係者に対する行動提言の要約

4.1 報道機関と一般社会に対する行動提言

この公開への取り組みが成功し、米国民と学術機関が脅迫されながらではなく、知性的かつ関心を持って事実を受け入れるために、報道機関が果たす役割は決定的に重要である。この分野を研究している誰にとってもまず明らかになることは、偽情報を流布し、UFO/ET 問題についての国民の考え方を形成するために、米国の報道機関が過去半世紀にわたり重要な役割を果たしているということである。³⁰⁾ しばしば報道機関は、無意識のうちに誤情報/偽情報を広げることに、また意識して事実の報道を拒否することに荷担してきた。重要な目撃事件が全国規模で報道されることはきわめて稀である。報道がなされるとき、それらはしばしば見下すような、事実をゆがめるような、“ふざけ半分”のような、視聴者が混乱し興味を失うやり方で行なわれてきた。最近の二つの例外は、USAトゥデー紙³¹⁾ にあったリチャード・プライスによるフェニックス・ライツ事件の報道、およびレスリー・キーンによるフランス COMETA 報告³²⁾ についてのボストン・グローブ紙の報道である。いずれの記事もよく調査されており、バランスがとれ、一方的判断を避けた書きぶりで紹介された。

我々は報道機関が以下の行動をとることを提言する：

1. 我々はこの話題について書いている記者に対し、その証拠とこの話題が何を意味するかを自分自身でよく理解することを提言する。UFO/ET 問題を研究した多くの人々は、これが今日の世界が直面している最重要問題だと感じている。この重要性は、責任ある真摯な方法で読者に伝えられるべきである；

2. 我々は報道機関に対し、これらの諸問題を経験を積んだ、尊敬される、全国的に認められた報道記者に担当させることを提言する。これらの諸問題は、最早埋め草記事として若手記者に担当させたり、娯楽番組に落としたりすべきではない；

3. 真面目さを欠いた程度の低い論調を報道に持ち込むことによって、この話題を“易しくする”ことを意図したのかもしれないが、我々は報道機関に対し、これらの問題を報道する際に現在の陳腐な表現を排除することを提言する。それらの中には“緑色の小人”のような冒頭説明、インタビューを受けている人を奇妙なカメラアングルで映した映像、着色光、霧発生器などが含まれる。これらの仕掛けのすべてが数十年にわたりこの話題を情報操作するために有効に使われてきたが、国民にあなたたちの報道の真剣さを信じさせたいなら、排除されなければならない。

我々は国民が以下の行動をとることを提言する：

1. 我々は国民に対し、自ら思慮深くこの問題を研究することを通じて UFO/ET 問題に心を開くことを提言する；

2. 我々は国民に対し、一度公開の意味を認識したら報道機関や官僚に働きかけ、彼らが責任を持ってこれらの問題の研究と報告を行なうよう、さらにこの惑星の人間の見方の劇的な変化、

そしてある大きな知性体グループの一員としての人間の将来の地位を取り上げる対話に参加するよう促すことを提言する；

30) See Hanson, T., *The Missing Times: News Media Complicity in the UFO Cover-up*. 2001

31) See copy in Appendix I (Document AI.18).

32) See copy in Appendix I (Document AI.19).

3. 我々は国民に対し、目撃証人たちが安全に名乗り出てこられるように(大統領の行動提言の節を見よ)、大統領令の公布を請願する手紙を大統領に書くことを提言する。また、これらの目撃証人たちが証言できる公聴会を発起するように要請する手紙を、上院議員と下院議員たちに書くことを提言する；

4. 我々はこの主題について知識を持ち、目撃証人として名乗り出る意志を持つ元政府職員、または元軍関係者、または企業にいた人々に対し、彼らの知識を高潔で愛国心に富んだやり方で公開することを促進するために、公開プロジェクトに連絡することを提言する；

5. 最終的には、人々が先導すれば指導者たちはそれについてくる。この状況を転換させ、寛容と信頼の時代を創り出すためには勇気、展望、そして忍耐が必要である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を持たないなら、我々が彼らのためにそれを現さなければならぬ。なぜなら、最終的には国民が公開への取り組みを促進するだろうからだ。

4.2 議会に対する行動提言

この主題の途方もない重要さとその意味を考えると、議会は過去 40 年から 50 年の間、ほとんど何の役割も果たしてこなかった。実際に、その期間中には 2 回しか公式の公聴会が開かれなかった。最初は 1966 年 4 月 5 日に国家軍事委員会が開いたものだが、これは空軍のブルーブック計画に対する新聞と国民からの強い批判があったからである。当時ミシガン州下院議員だったジェラルド・フォードが公聴会の熱心な推進者だった。その理由の一部には、彼の州でその年の 3 月に起きた大きな目撃事件があった。それは数百人の人々により目撃され、報道機関が大々的に報道した。その公聴会の結果、独立した組織による UFO の科学的調査が提言された。これはエドワード・コンドン博士に率いられるコロラド大学の“UFO の科学的研究”計画になった。

次は 1968 年で、国家科学航空委員会が UFO の科学的根拠を再考するために、“未確認飛行物体に関するシンポジウム”を開いた。証言した 6 人の科学者のうち 5 人が、さらに研究を要する明らかな科学的異常性があるとの見解を表明した。実際に、その一人³³⁾であるアリゾナ大学の上級物理学者にして教授だったジェームズ・マクドナルド博士は、次のように結論した。“我々はこの並外れて興味をそそる謎に対して、速やかに真面目な科学的関心を拡大すべきだ。私自身の UFO 問題研究から私はそう確信している” 1 年後にそのコンドン委員会は、UFO について説得力のある科学的証拠は何もなかったという結論を出し、ブルーブック計画を終わらせることを提言した。そしてその年の 12 月 17 日に、事実そうだった。この驚くべき結論は、委員会によって調査された事例

の約 30 パーセントが正体不明であるという事実を無視したものだ。1990 年代、ニューメキシコ州ロズウェルの近くで起きた墜落に関して次々と明らかになる証拠について空軍が一切言及しなかったために、当時のニューメキシコ州下院議員スティーブン・シッフ(ニューメキシコ州・共和党)は、会計検査院に対して関連資料の調査を行なうことを要求した。1995 年に GAO (General Accounting Office; 会計検査院) は一つの報告書を発表した。それには、ロズウェル陸軍飛行場の当時の資料は不適切に廃棄処分されており、その墜落に関する資料を見つけることはできなかったと述べられていた。

33) See sections 32.1 and 6.3 (under Dr. Robert Wood for other comments by and about Dr. McDonald.

それから 1997 年 4 月初めに、CSETI (Center for the Study of Extraterrestrial Intelligence; 地球外知性体研究センター) は議員と民間の目撃証人たちのための非公開説明会を開いた。議会の誰かが勇気を持ってこの話題についての公聴会を開いてくれることを期待してのことだった。そのときも、それから今日に至るも、誰もこの話題について公聴会の開催を敢えて要求した人はいない。1966 年にジェラルド・フォード下院議員が出した声明、“我々は国民に対して UFO についての真実性を確立する義務がある”は、そのときも今日も真実であるにもかかわらずである。興味深いことに、上院議員たちはこの主題について公聴会を開くことはなかったが、立場を離れた個人としてこの主題に重大な関心を示した人々はいた。

我々は議会がこの問題を追求するために以下の行動をとることを提言する:

1. 下院および上院情報委員会の連絡窓口と議長に対し、指定審問を行なう;
2. 一覧に掲げた様々な施設、政府機関、および諸団体に対し、直接に審問を行なう;
3. これらの作戦行動を制御している組織を特定するために役に立つ、議会に知られている他の連絡窓口を追求する;
4. これらのプロジェクトに対する直接目撃証人が証言できるように議会公聴会を開き、この問題をさらに追及する。このような要求を共同提案するために、二人以上の国会議員が必要だと我々は信じている;
5. 宇宙兵器を禁止する議会法案を成立させ、我々の同盟軍と国連に同じ事をするように働きかける。

議会あるいは大統領令により国家機密保全誓約(4.7.2 節)と恩赦(4.7 節)の合法性の問題が一旦解決されれば、UFO/ET 問題の現実性とそれが我々の国の将来に対して持つ意味について進んで証言しようとする潜在的な目撃証人は、数百人に上る。

隠し立てのない公開された議会公聴会という手段によってのみ、これらの問題の複雑性が理解

され、我が国は前進することができる。

UFO問題、世界のエネルギー事情、および工学技術の間にある相互関係のゆえに、これらのエネルギー諸問題についての議会公聴会もまた、それに続いて、あるいはほぼ並行して開催される必要があるだろう。

UFO 問題の現実性について一旦議会がそれを受け入れたなら、次に我々は議会に対し、以下のことを提言する：

1. これらの新しい工学技術を、一般の民間人が現在持っている情報源と、軍、情報機関、および企業の請負分野にある区画化プロジェクトの両面から、徹底的に調査する；
2. この主題に関わる区画化プロジェクトが保持する情報の秘密解除と解放を承認する；
3. このような工学技術の押収もしくは抑圧を明確に禁止する；
4. 民間の科学者と工学技術者たちによる基礎研究と開発のための十分な資金を承認し、この研究を国民と主流派科学者たちが利用できるようにする；
5. このような工学技術(複数)の公開と、脱化石燃料経済への転換に対処する諸計画を策定する。 これらの計画には、とりわけ以下のことが含まれるべきである： 軍事と国家安全保障計画； 戦略的な経済計画と準備； 民間部門への支援と連携； 地政学的計画、特にその経済を石油の輸出と価格に大きく依存しているOPEC(石油輸出国機構)諸国と地域に配慮した計画； 国際的な連携と安全保障。

公開プロジェクトは、これらの新しいエネルギー源の利用を促進するための役に立つなら、議会に対してどんな協力でもする用意ができています。我々は、議会に召喚されてこのような工学技術について証言することができる多数の人々、そしてまた、これらの問題をすでに扱っている秘密の政府活動の内部にある、認められざる特殊接近プロジェクトについて情報を持つ人々を推薦することができます。

4.3 軍に対する行動提言

1990 年代初めから、公開プロジェクトの代表とそのメンバーたちは、統合参謀本部情報局長(J-2)、国防情報局長官(DIA)、中央情報局長官、国家空軍情報センター・ライト・パターソン本部長、その他を含む軍の高官たちに対して背景説明を行なってきた。これらの背景説明を行なう中で我々が知ったことは、高官たちはこの主題について知らされてこなかったということである。これは国家安全保障と軍の即応性への重大な脅威である。

ロスコー・ヒレンケッター提督の言葉を引用しよう。“未確認飛行物体を秘密にすることから生じる危険を減じるために、議会が早急に行動を起こすことを強く求める” 彼が UFO によって生じる危

陰ではなく、秘密によって生じる危険を強調していることに留意されたい。³⁴⁾

34) Hillenkoeter, Roscoe: Aliens from Space, Major Donald E. Keyhoe, 1975.

我々は軍と国家安全保障分野の高官たちが以下の行動をとることを提言する：

1. 公開プロジェクトの主導と軍／民間の目撃証人たちにより、この主題についての徹底的な背景説明を受ける；
2. 司令長官たち(CINCS; Commander in Chiefs)に十分な背景説明を行ない、ETI/UFO (地球外知性体／未確認飛行物体)との遭遇に対処する特別な行動規則(ROEs; Rules of Engagement)を開発する；
3. この主題について独自に調査し、この主題に関係する USAP(Unacknowledged Special Access Projects; 認められざる特殊接近プロジェクト, 3.4 節を見よ)活動に侵入する；
4. この主題に関係する秘密計画(複数)に全面的に関与し、このようなプロジェクトが適切に監督され、直接的かつ継続的に憲法に基づく指揮系統下にあることを確実にする；
5. UFO に関係する進歩した工学技術あるいは兵器システムの USAP による秘密裏の悪用については、いかなる場合もこれを制止する；
6. これらの生命体に対しては平和的で協力的な対処行動をとり、武力を用いた暴力的な行動を回避することに細心の注意を払う；
7. 上記の情報に照らし、宇宙空間に兵器設備を展開することを注意深く再考する。また地球外知性体にとって好戦的あるいは敵対的と見なされかねない行動を避ける。

これらの諸提言のさらなる詳細は 5.1 節，“作戦即応性と未確認飛行物体／地球外知性体(UFO／ETI)問題”で述べられる。

4.4 科学界に対する行動提言

世界中の何千人もの目撃者により観測された UFO 現象の真実性が立証されるにつれ、観測されたものが何であるかを説明する、科学の新しい理論的枠組みが必要になる。20 世紀の科学理論は、科学分野、軍事、民間の数多くの目撃証人が観測し報告した現象を、ほとんど何も説明し得ない。しかし幾つかの事例では、(3.8 節、目撃証人の証言に基づく)観測された現象と工学技術を理解するのに、我々の科学界の著名な科学者たちよりも秘密の軍事研究計画(複数)の方がはるかに進歩しているように思える場合がある。超光速を可能にする現象³⁵⁾の実演はその一例であるが、最近の諸発見はまったく新しい分類の科学的現象があることを実際に示唆する。21 世紀の科学者

たちは、前世紀の科学者たちにより“不可能”と断言されてきたことを説明するために、これらの現象を研究することになる。

UFO/ET 問題では、大部分の科学者たちの間で今なお容認という大きな問題がある。ピーター・スターロック博士は大変尊敬される太陽物理学者で、現在はスタンフォード大学名誉教授だが、この問題を以下のように要約している：

“UFO の謎の最終的な解決は、確立した科学の正規の手法に基づき、公然かつ詳細な科学的研究の対象になるまでは実現しないであろう。そのためには、まず科学者と大学の管理者の側が姿勢を変える必要がある”³⁶⁾

科学者と科学雑誌の役割について、スターロック博士のさらなる見解が 3.2.1 節に引用されている。一般の人々は驚くだろうが、科学者というものは、彼らの理論が正しくないかもしれない証拠に直面したとき、作用と自然現象の理解を変更するに際して、しばしば問題を抱える。科学の歴史においては、これはできない、あれは不可能だと断言する科学者たちの例に事欠かない。後になって彼らの仮説は間違っていたことが示される。この通常の人間の傾向は、確かに科学者に限ったものではない。(例を挙げると、ライト兄弟の飛行機が飛ぶのを何千人もの人々が見た後でも、数年間は飛ぶことは不可能だと公言する人気記事がなお見られた) さらに米国内の科学研究のほとんど、特に大学におけるそれは、補助金や雑誌への論文掲載はもちろんのこと、昇進や身分保障も仲間同士の承認という過程を通して決定される。仲間同士で容認された研究の外に踏み出すことは、既成分野で地位を確立した科学者にとっても、しばしば災いの元になる。その結果、科学界の圧倒的多数派はそのような危険を冒そうとはしない。なぜなら、現在容認されている学説に留まる方が安全だからだ。

前世紀を通じて科学者たちは、誤情報や偽情報を流すことにより、“信じやすい”国民の UFO 問題に対する態度を形成するという行為の中で、しばしば知らず知らずのうちに能動的役割と受動的役割の両方を演じてきた。1950 年代以来、UFO 現象の“科学的証拠はない”ことを国民に説得するために科学者たちが利用されてきた。知名度の高い科学者たちは、今日でもまだその役割を演じている。SETI(Search for Extraterrestrial Intelligence;地球外知性体探査)計画の指導者の一人が、ハーバード大学での最近の公開招待講演で、“UFO 実在の科学的証拠はない”と明言したが、そのようなことだ。この声明については幾つかの説明が可能である。彼女はこの主題についての証拠の奥深さに気付いていなかった。その場合、彼女の権威ある表明は修正されたも同然である。あるいは、彼女はその主題が現実であることを知っていたが、SETI 研究を拡大するもっと多くの支援を得るために、気付かずに国民を欺く動機を持ってしまったのかもしれない。いずれにせよ、科学者は国民に対してもっと正直でなければならない。国民の大部分は今なお彼らと彼らが表明することを信頼する。

要約すれば、調査と研究なしには、現象についての理に適った真実に基づく声明はあり得ない。この必要性についてはスターロック/ロックフェラー報告中の科学者委員会、および 8.0 節で要約されるフランス COMETA 報告中の科学者と軍関係者によっても提言されている。

35) Wang, L.J., A. Kuzmich, and A. Dogariu. 2000. Gain-assisted superluminal light propagation.

Nature. 406:277-279.

- 36) Sturrock, P. A., Report on a Survey of the American Astronomical Society concerning the UFO Phenomenon, Stanford University Report SUIPR 68IR, 1977.
- 37) Greer, Steven M. Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications, Crossing Point, Inc. Publications, Afton, VA.1999. Available at: www.DrGreer.com.
- 38) Marrs, Jim. 1997. Alien Agenda, HarperCollins Publishers, NY, 434pp.
- 39) See George Filer witness testimony in section 3.8.4.

我々は科学者が以下の行動をとることを提言する:

1. 科学者たちは UFO/ET 現象の可能性について心を開かなければならず, この分野を研究している人々に先入観を持つことを止めるべきである. それには各人がこの問題について自分自身の“調査”を行なう必要がある;
2. UFO/ET 問題が現実であることを知る科学者たち(たとえば秘密プロジェクトに参加している科学者たち)は, その現実性と自らの知識を同僚科学者たちと共有し, 彼らに必要な情報を与えることを始めるべきである. そのためにやるべき事は多く, 世評と資金問題ゆえの困難が予想される;
3. 大学の科学者たちは, この知識を彼らの学生と国民に分かち与えるべきである. なぜなら, 数世代にわたり観測されている現象を説明する研究に飛躍をもたらすのは, 次世代を担う学生と大学院生たちだからだ;
4. 科学者たちが UFO/ET 問題の研究を, これら将来の大学院生と若い専門家たちのための支持され奨励される科学研究分野にするように助力することは, きわめて重要である;
5. 我々の連邦政府の財政援助による研究計画を運営している科学者/管理者たちは, 彼らの予算のうちのわずかな部分を UFO/ET 分野の‘独創的’研究のために取っておき, それを正規の研究分野にすることに助力すべきである;
6. 最後に, 科学者たちは UFO/ET 現象の理解から生じる科学と工学技術上の進歩が, 人々と我々の地球環境の未来に広範囲に及ぶ効果をもたらすことを認識すべきである. 新しい‘飛躍的’研究が生まれるために, これ以上の機会はない(多くの教科書を書き改める機会でもある)

4.5 米国大統領に対する行動提言

第二次大戦以来の歴代大統領たちは, UFO/ET 問題が現実であることを知っていたが, この数十年間は彼らの知識とこの問題に対する影響力は制限されてきた. 今こそ大統領が公開のための行動を率先して起こすときである. なぜなら, もし大統領が何の役割も果たさずに重要な公開が

行なわれるなら、米国民と世界は大統領に対して次の二つのうちの一つの見方をするだろう。おそらくいずれにしても不利であることに変わりはない。

1. もし米国大統領と行政府がこれほど重要な主題について何も知らなかったと主張するならば、大統領の威信は著しく損なわれるだろう。
2. “裁可されていない”公開が起きた後で、もし米国大統領と行政府がその主題とその途方もない国家的重要性を知っていたが公開には関わっていないと主張するならば、大統領はその隠蔽に荷担したとして非難されるだろう。この主題がきわめて秘密裏に扱われてきたという事実に照らせば理不尽かもしれないが、非難は免れない。

いずれにしても、大統領は以下の手順を踏んで公開の行動を起こす必要がある。そうしなければ、上記の不利な選択のいずれかが一般的な見方になるだろう。

1. 我々は大統領に対し、この主題に関する国家機密保全誓約から目撃証人を解放する大統領令を公表することを提言する。なぜなら、証言しようとしている目撃証人の重要問題は、それが不法に行なわれたにせよ、彼らの機密保全誓約だからである(機密保全誓約についての4.7節を見よ)；
2. 我々は大統領に対し、独立した公平で開かれた委員会を開催し、この主題、この主題に結びついた USAPs(認められざる特殊接近プロジェクト)、および現在は秘密にされているが公開された暁には人類の利益になる工学技術(複数)について調査することを提言する；
3. 我々は大統領に対し、上記と並行して大統領令により UFO/ET 問題に関係する政府文書の機密解除を後押しすることを提言する。この行動は情報公開法(Freedom of Information Act; FOIA)を通じてすでに始まっている；
4. 我々はまた大統領に対し、公開のプロセスが進行するのに伴い、UFO/ET 問題を制御していると疑われるグループの構成員と職員に対して恩赦を与える大統領令を出すことを提言する。ただし、そのグループからの協力と不干渉が条件である；
5. 我々は大統領に対し、この問題について国民に向けたテレビ演説を行ない、政府と民主主義原理への国民の忠誠を回復するための行動について語りかけることを提言する；
6. 最後に、我々は大統領に対し、大統領令により我々のエネルギー問題を解決できる秘密の工学技術(複数)を発展させる新しい科学研究組織を創立し、これらの工学技術を我々の主流学術機関へと統合することに着手するよう提言する。

これらの大統領令は、憲法に基づく指揮系統を外れて行動しているように思われるある種の“秘密プロジェクト”活動(複数)を終わらせるために、大統領権限を最大限に行使するものになるだろう。地球外工学技術(そして他の諸問題)のある側面に対してはこの大統領令による完全な接近がで

きないかもしれないが、決定的な目撃証人による証言の公開が可能になるだろう。これにより、大統領とその行政府、議会、報道機関、納税者たちを蚊帳の外に置こうとする闇のグループによる活動を無力化するプロセスが始まるだろう。

(*4.6 は原文にない)

4.7 恩赦の保証と安全の確保

4.7.1 なぜ恩赦か

公開への主要な障害の一つは、過去半世紀の間に行なわれてきた欺瞞の深さと範囲を政府と国民が知ったときに、その懲罰を隠蔽に関わっている人々が恐れているということである。我々市民は彼らが行なったことを見逃すべきではないが、彼らを罰すべきでもない。我々市民は忘れる覚悟を持つべきだ。現在あるいは過去の秘密に関わった人々に厳しい懲罰を求めることで得られるものは何もない。たとえば 3.6 節と 3.8 節で証言を提供した目撃証人たちのように、この秘密を終わらせるための行動を起こした人々も一部にはいる。しかし他の多くはそのとき、自分たちは正しいことをしている、と感じていたかもしれない。それはしばしば今日に至るまで続く。我々の世界は宇宙ウォーターゲート事件を必要としない。我々は皆でそれを放棄すべきだ。我々は現在と将来に目を向け、過去を忘れなければならない。我々の文化が誰かを非難したり責任をとらせたりすることを欲しても、我々は真実を隠している人々に完全な恩赦を与える必要がある。この取り組みには、最近南アフリカの人々によって示されたように、国際的な先例がある。米国にも同じ先例がある。例を挙げると、クリントン政権の初期に、エネルギー省と前の原子力エネルギー委員会内で行なわれた過去の行き過ぎた行為と狂気の実験について、全面的な公開があった。我々は、孤児院の子供たちのオートミールにプルトニウムが混入されたこと、‘何が起きるか’を見るために人口集中地域に故意に放射能がまき散らされたこと、等々を知った。この真実は明らかになったが、世界は終わりにならなかった。誰も投獄される必要はなかった。政府は崩壊しなかったし、天は落ちてこなかった。前進しようではないか、いくらかの本当の同情と寛容とを持って。そして、この世紀を新しく始めようではないか。

大統領に対する行動提言の節で言及されているように、我々の大統領はこの恩赦の問題に率先して取り組まなければならない。我々の理解では、米国民は前進する準備ができています。そして格言に曰く、人々が先導すれば指導者たちはついてくる。我々の未来が奪われているときに、それを無視することはあまりにも高い賭けである。この事態を変革し、開放と信頼の時代を創造し、全世界と惑星間の平和の基礎を打ち立てるために、勇気、展望、そして忍耐が必要である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を欠いているなら、我々がそれを彼らに示さなければならない。

4.7.2 UFO／地球外知性体の主題に関係した国家機密保全誓約の合法性の評価(1996)

著作権 スティーブン・M・グリア, 医師 — 1996 年 10 月 21 日

UFOと地球外知性体(ETI)を扱う秘密プロジェクトに対する軍、情報機関、および政府関連の直

接目撃証人たちが、公開プロジェクトの努力により多数確認されてきた。過去3年間に我々は数十人のこのような潜在的目撃証人の居場所を探し出したが、それはこの主題について全世界にわたる決定的な公開を実現するための適切な証拠を集めるという、包括的戦略の一部だった。これらの重要な政府の目撃証人たちが語る証言内容は、UFOの現実性と地球のすぐ近くに存在する地球外知性体についての信頼に足る、否定できない証拠になるだろう。

この証言が公の場に現れるときに常に立ちはだかる障害の一つは、これらの目撃証人たちに課されている国家機密保全誓約と呼ばれる問題である。一部の人々はこれらの国家機密保全誓約と制限事項から‘解放’されない限り、自由に話すことはできないと感じている。それゆえに、我々はこれまで議会とホワイトハウスに対してこれらの制限事項を解除する行動を起こさせるための働きかけをしてきた。

1995年の夏に、これらの多数の目撃証人たちが証人会議に集まり、クリントン大統領に対してこれらの制限事項を解除するための行動を起こすよう請願する手紙に署名した。この手紙は大統領特別補佐官の一人により受理承認されたが、我々はこれに応える米国行政政府の行動を今なお待っている(我々は2001年時点でなお待っていることに留意されよ)。

以上の状況を踏まえ、このような国家機密保全誓約と制限事項が、それ自体法的に有効か否かを考察することは重要である。

我々は、通常の政府プロジェクトを外れてこの主題を扱う活動が今存在し、またこれまで数十年間存在し続けてきたとする、説得力のある証言を持っている。公開プロジェクトチームの活動員たちは政権、議会、統合参謀本部、中央情報局の高官たち、その他の政府諸機関の職員たちと会合を持ってきた。これらの議論の中から浮かび上がった実態は、一般に考えられる政府の通常経路を外れて機能している、UFOを扱うある活動のそれだった。驚くべきことに、行政府、議会、軍、その他の高官たちの大部分は、この並外れた問題について完全に蚊帳の外に置かれていることを我々は知ったのである。

この事実から、では誰が蚊帳の内にいるのか?いかなる承認のもとでこのような活動が行なわれているのか?という肅然たる疑問が次に持ち上がる。我々の評価によれば、これらの活動の大部分は、立憲的に裁可されたいかなる承認事項にも該当しない。だから必然的にこれは違法である。

行政府と議会による監督と承認の欠如ということから離れても、これらの活動は折に触れ欺瞞行為に関与し、関係諸機関による憲法上合法的な審問と民主的プロセスを妨害してきた。このように振る舞ういかなる活動も、本来備わっているべき合法性、および憲法と調和するプロジェクトのための保護からそれ自身で一方的に離脱する。

状況がそうであれば(我々はそうでないことを証明する人には是非 — いや、心底から — 会いたいと思う)軍、情報機関、政府の請負業者の職員たちに課されているいわゆる“国家機密保全誓約”と他の“制限事項”は、無効であり空虚だ。つまり、それらの制限が課された活動それ自体が違法なのであるから、それらの制限はいかなる合法性も持たないと思われる。立憲民主主義においては、このような活動が憲法上合法であることが法的な基本条件である。そしてもしそれらが合法でな

いなら、それらに由来することのすべては — このような“誓約”を含めて — 違法であり、ゆえにまた拘束力を持たない。もしこれらの活動が合法的だとすると、我々が会って話をした議会、行政府、あるいは軍高官の誰もがそれについて知らないのはどういうことか。これらのプロジェクトを承認する現在も有効な大統領令あるいは議会の指示が一つでもあれば、そしてそれは単独で検証可能であるが、我々の見方は違うものになるだろう。

複数の隠れた接触者たちが我々に語ったのは、実に次のことだった。このような目撃証人たちは誰でも適切な時と場所で話すことができるし、話すべきだ。なぜなら、どんな合法的組織も — あるいはどんな組織も合法的には — それについて何をすることもできない。我々はそれに同意する。

何よりも、このような目撃証人たちが一致協力し、考え得る最高、最良、そして最も信頼できる場所で、この問題の真実に関して声を揃えて発言するのは合法的で、高潔で、愛国的な義務である。もしこのような証人が一人か二人しか名乗り出なかった場合、真実は弱く、その危険性は受け入れ難いだろう。そのとおりだ。しかし、もし 10 人、20 人、そしてさらに多くのこのような目撃証人たちが一致協力し、団結し、この主題についての自らの情報と経験を共有するなら、そのとき決定的な真実が生まれ、世界と彼らの国家に対する偉大な奉仕が達成されるだろう。

この問題を合法的な政府の経路と人々による討議の場に返すことは、冷戦後の時代にあって実現されていない重要課題の一つである。冷戦が終わって 5 年以上が経過した。最早この種の途方もない秘密と隠された行動計画は（かつては正当化されたかもしれないが）正当化され得ない。国家と世界の安全保障は、この問題ができるだけ早く国際社会に戻っていくことを求めている。

我々は、展望と勇気と熱意を持った人々が、この課題を実現するために我々と合流することを提言する。いわゆる‘機密保全誓約’に対する法律違反どころか、このような目撃証人たちによる公の場での証言は、きわめて高潔で合法的な行為である。さらに言えば、このような計画に元々ある違憲性を考えるとき、この秘密性の継続そのものが違法で背徳行為だとするのが正しくないというのか？ 信頼できる目撃証人たちが団結し、統一された戦略により彼らの証言を提供するなら、この主題は合法的な監督と統制のもとに戻っていく。またそれにより米国と世界の人々が公然とこの問題について討議することが可能になる。それは 50 年前に起きていたはずだ。

5.0 論点 — 論説

序文

以下の“論説”は、UFO/ETI(未確認飛行物体/地球外知性体)問題についての我々の理解の現状を要約したり、政府や統合参謀本部に向けた説明資料を準備したりするために、グリア博士により過去 8 年間に書かれた。それらは話題ごとに三つの部分に大別される：

1. 背景と歴史；
2. 公開の必要性；
3. 公開の意味。

それらはどんな順番で読んでも構わないが、UFO/ET 問題全体の深遠さと複雑さを把握するため

には、上に挙げた順番で読むことを勧める。賢明な読者なら、幾つかの論説において一部重複した部分があることに気付くだろう。これは数年間にわたり様々な読者に向けて、それぞれが独立した資料として書かれたということからきている。

多くの論説の中に我々の公開への取り組みが述べられている。これは公開プロジェクトが UFO／ET問題の全体像に世界の指導者たちの注意を向けさせるために行なった、1990年代中頃の取り組みを指している。我々のプロジェクトは、1997年4月に議会に対する大がかりな非公開説明会を持った。これは議会に対して、この主題の現実性に報道機関、政府、学界、および国民の注意を向けさせるために目撃証人を入れた議会公聴会を開くことを促すものだった。公聴会を開くべきだと促す勇敢な議員はそのとき一人もいなかった。

頁数の制約のためにこの公開プロジェクト資料には含まれていないが、この主題についてグリア博士により書かれた論説(複数)は他にもある。その幾つかは公開プロジェクトのウェブサイト www.DisclosureProject.org またはグリア博士の著書³⁷⁾の中に見出される。

5.1 公開の必要性和秘密主義の危険性

5.1.1 作戦即応性と未確認飛行物体／地球外知性体(UFO／ETI)問題：なぜ軍と国家安全保障の指導者たちは知る必要があるのか

スティーブン・M・グリア, 医師, 1998年8月22日

要旨:

軍と国家安全保障の主要な指導者たちは、UFO／ETの主題についてこれまで適切に知らされてこなかった。その理由は、この主題が USAPS(Unacknowledged Special Access Projects;知られざる特殊接近プロジェクト)の管理下に置かれているということである。この情報の欠如が国家安全保障上の重大な危機をもたらしている。この主題についての綿密な説明と議論の欠如ゆえに、情報を持たない、あるいは誤情報を与えられた指導者たちによる不適切で危険な行動が著しく増加している。こうして作戦即応性の重要な分野は、次に掲げるような事柄について危険なまでに情報を持たない、あるいは誤情報を与えられた指導者たちにより、“危険な状態”に置かれている。

- ◆ 偽の I&W(兆候察知と警報発出)事態の中での ARV(複製された異星人の輸送機)の使用;
- ◆ 超光速性能を持つ地球外輸送機の不意の出現と消失;
- ◆ 宇宙に配備された軍事および他の施設に対する地球外知性体の予期せぬ関心。

とりわけ統合参謀本部、国家安全保障会議、国家軍事指揮センターの幹部当直士官たち、議会の重要な指導者たち、大統領、国防長官、中央情報局長官を含む軍と国家安全保障の高官たちは、明らかに上記の諸問題について知る必要性を持つ人々である。

背景と導入:

1990 年以来、米国に拠点を持つ非営利団体である公開プロジェクト(ディスクロージャー・プロジェクト)は、UFOと地球外知性体(ETI)の主題について独自の調査を行ってきた。1991年に最初の包括的評価が完了した。そのときから公開プロジェクトは、世界中での現地調査を通じ、また科学的証拠とこの主題について直接の知識を持つ情報源の確認を通じて、この主題を研究してきた。我々の情報源とそれに続く評価には、以下のものが含まれる:

- ◆ 世界中に展開する現地調査チームによる UFO/地球外物体の直接の現地観測;
- ◆ 数千の事例報告を含む、過去に遡った証拠の収集。その中には軍と民間のパイロットによる遭遇、軍と民間によるこれらの物体のレーダー捕捉、着陸痕の事例、写真やビデオテープの証拠、および数千頁に達する政府機密文書が含まれる;
- ◆ 情報機関や他の諸計画にいる数十人の科学者、軍と民間の目撃証人、および秘密計画に関わっている民間研究者の目撃証人に対する詳細な面接取材。これらの目撃証人たちは UFO/ETI 事件について直接的な知識を持っている。その中には地球外宇宙機の回収と逆行分析、およびこれらの宇宙機を入手したことで大飛躍を遂げた工学技術の秘密裏の応用が含まれる。

上記の情報源と調査により、一般的にはこの主題についての、具体的には国家安全保障上の意味に関しての多くの評価が可能になった。これらはこの文書の添付物として別に提供される。

UFO に関係した USAPS の概要:

機密活動の安全を確保するためには、情報と計画の堅固な区画化がしばしば必要になる。しかし、行き過ぎた機密化と区画化は国家安全保障と軍事的即応性に脅威を与え、大統領の指令(複数)に反する。UFO/ETI の主題の場合、極端な秘密性と重層的な特殊区画化が 1940 年代から存在してきた。関連する工学技術の特殊性とともにこの極端な秘密性がもたらしたものは、国益を損ねる行動を監督する体制の欠如という潜在的危機、ETI/UFO に関係した出来事に対処する軍事的即応性の深刻な低下、および議会による監督の全面的な欠如である。

現在 UFO 問題を管理する秘密の組織/USAP の性質は、3.4 節の論説、“認められざるもの”に述べられている。手短かに言えば、この異常な USAP は以下の特質を持っている:

- ◆ 活動範囲が全世界的である;
- ◆ 区画化が重層的である;
- ◆ 主として民間の私営化された請負/“他から頼まれた仕事”部門に拠点を持つ;
- ◆ 機密性の高い他の USAPS/秘密プロジェクトを含む従来の政府、軍、情報関連計画と並行して、しかし一般的にはそれとは別に運営される;
- ◆ 高度先端技術企業、および区画化された政府、情報機関、軍の計画を基盤とする複合組織である。しかし実質的には独立した別組織として機能する;
- ◆ 従来の意味での政府、軍組織、諸機関のどの単独部門にも統制されているようには見えない;
- ◆ 一般的に、このプロジェクトへの接近はプロジェクトが決める資格により行なわれる。その資格は政府内における個人的地位、軍組織内での階級、あるいは従来の意味での(憲法に基づく)指揮系統上の地位にはほとんど関係しない;

- ◆ 回収された地球外装置(複数)の進歩した工学技術を60年近く研究した結果、このUSAPを制御するグループは、従来の軍事施設と世界の安全保障一般に脅威を与え得る実質的な工学技術を持つ;
- ◆ これらの活動の資金は、いわゆる“闇の予算”と非政府資金の“粉飾”から引き出される;
- ◆ このプロジェクトの秘密/制御はいかなる犠牲を払おうとも維持されてきた。またそれは常に法律と憲法による監督、抑制と均衡、および米国民の権利を侵害してきた。

現職の中央情報局長官、ホワイトハウス高官、重要な関連委員会の委員を務める議会の主要議員、米国と英国の軍高官、とりわけこれらの人々との議論により明らかになったことは、UFO/ETIに関係するプロジェクトへの接近は、地位や憲法に無関係だということである。五つ星提督にして元英国国防参謀長のヒル・ノートン卿は、同様の仕組みが英国にもあることを確証している。このような高官たちによる指定審問は、たとえそれが米国大統領府から出た場合でも、公開を実現させてこなかった。

なぜ軍と国家安全保障の指導者たちは知る必要があるのか:

UFO/ETI 問題には幾つかの相互に関連する側面がある。そのことが軍、情報機関、および国家安全保障の重要な指導者たちがこの問題について知っていなければならない、まさにその理由なのである。このような指導者たちが適切な情報を持っていなかったために、彼らの決定と行動がきわめて望ましくない結果をもたらしかねない状況を生じさせてきた。UFO/ETI の USAP の能力は、指揮系統の指導者たちを広範囲に欺き、驚きの事態を招くことを可能にする。それは破滅的な誤解を生むだろう。

さらに、地球外知性体が本当に関与した出来事の背後で、彼らがこの地球や人類全般に対して敵意を示した客観的証拠は何もないが、これらの出来事が悪く誤解される可能性があり — さらに重要なことだが、これまでそうであったと我々は理解している — この誤解はこのような地球外物体に対する是認されない軍事行動を引き起こす。これらの行動は世界の安全保障に対する真の脅威となるが、軍と民間の指導者たちはそれに気付かない。危険な事態へと発展する恐れがある、人類による将来の軍事行動の可能性を排除するために、軍と国家安全保障の指導者たちには、この主題について適切な情報を与えることが不可欠である。

以下に述べることは、想定される事態と行動であり、なぜこのような指導者たちがこの問題について緊急に知る必要があるのかを説明している:

- ◆ UFO/地球外物体の誤認. 本物の地球外物体とそれに外見が似た地球製のARV (Alien Reproduction Vehicle;複製された異星人の輸送機)の両方が存在するために、混同と誤認は現実的である。このような混同により引き起こされる行動は、予期せぬ結果をもたらす(以下に述べる‘偽の兆候察知と警報発出’も見よ)。
- ◆ 地球外物体による驚き. 過去において、軍の司令官たちが地球外物体の突然の出現に驚き、彼らに敵対的な行動をとったことがあった。例を挙げると、1981年10月、そのような物体が東海岸沖に出現し、米国大西洋艦隊総司令部(CINCLANTFLT)に大混乱を起こした。直径300フィ

ートと推定される円盤型のこの物体は、レーダーが1回走査する間にニューファンドランド州沖からバージニア州ノーフォーク沖まで高速で移動することができた。この白昼の出来事の間、米国大西洋艦隊総司令部はゼブラ警戒態勢(“ストライプス”)に入り、NORAD(北米航空宇宙防衛司令部)から司令長官ハリー・トレイン提督に、この物体の正体を確認し、必要なら強制着陸させよとの命令が与えられた。戦闘機が陸と海から緊急発進し、そのうちの1機がこの物体をはっきりと写真に撮れるまで接近したとき、この物体はレーダーが1回走査する時間にバージニア州ノーフォーク沖を離れてカナリア諸島近くの大西洋まで移動し、仰角60度に向きを変え、地球の大気圏を去った(*3.8.4節 メルル・シェーン・マクダウの証言では、事件は1981年5月に起き、UFOは円筒に近かったと表現されている)。この事態は司令長官を驚かし、総司令部の司令室を混沌に陥れ、その物体を強制着陸させる命令が出された(これは破滅的な結末をもたらしただろう)。しかし、これは軍の最高指導者たちに対する基本的な考え方と想定事態の説明、またこれらの特異な事態のための明確な“行動規則”(ROEs)の開発が行なわれていれば回避できたはずだった。

- ◆ 地球外知性体の行動の誤った解釈。我々の評価によれば、二つ以上の地球外文明が地球の偵察と世界の軍事情勢の監視に関わっている。過去において、大量破壊兵器に関心を持つ地球外知性体は、ある種の戦略拠点で工学技術的な示威行動をとった。たとえば1975年11月にノースダコタ州マイノットにある戦略空軍大陸間弾道ミサイルサイトで起きた事件がそれだが、ここで彼らはその戦略ミサイル発射機能を無能力化した。我々が知るどころでは、同様の無能力化がソ連でも起きた。このような出来事は当然ながら我々人類に軍事上の懸念を生じさせる。しかし重要なことは、このような出来事を地球人中心の考えではない、より高い観点から解釈することである。この行動を地球外知性体の敵意の現れとする見方もあり得るが、出来事の非暴力的な性質を考えると、これは地球全体を滅ぼすこのような兵器システムに対する、彼らの大きな懸念を伝えるメッセージだった可能性がむしろ高い。この主題について指導者たちが適切に知らされない限り、地球外知性体の行動と意図について、破滅につながる誤った解釈がなされる危険が存在する。
- ◆ 宇宙配備の軍事施設に対する地球外知性体の懸念。我々の理解によれば、宇宙に配備されている人類の軍事施設に対する地球外知性体の見方はきわめて好ましくないものであり、これをはっきりと示す幾つかの出来事が最近起きている。米国宇宙軍、および宇宙に関係するか宇宙配備の施設と連動しそれに依存する他の軍組織(複数)は、この懸念に気付く必要がある。地球外知性体の懸念は、進歩した兵器を使った人類の絶えざる戦争と暴力、量破壊兵器の蔓延などと相まった、急速な宇宙の軍事化に基づくものと思われる。また、秘密のUSAP計画が益々頻繁かつ効果的に地球外物体を標的にしていると信ずべき根拠もある(以下を見よ)。
- ◆ 軍と情報機関の計画について証言する複数の信頼できる目撃証人は、地球外宇宙機を追跡し、標的にし、破壊する進歩した兵器システムを用いる秘密のUSAPについて述べている。このような出来事は1980年代以来、頻度と正確さにおいて増強されているように思われる。もしそうであるなら、このことは国家と世界に対する深刻な安全保障上の危機であり、重要な立場にある指導者たちは緊急にこのことを知る必要がある。我々が聞いた証言に照らして、このようなことは起きていない、あるいは正当化できる部分もある、などという簡単な否定は、これらの報告を却下したり傍観したりする十分な根拠にならない。軍と国家安全保障の重要な指導者たちは、この間

題を十分に研究し、国家指揮最高部(NCA)、統合参謀本部議長(CJCS)、および重要な議会の指導者たちのために、状況についての完全な評価を発表する必要がある。

- ◆ この主題を扱う秘密計画に関与し、直接の経験から得た知識を持つ軍と民間の複数の目撃証人は、UFO/ETIに関係したUSAPSの意図についての報告(複数)を確認している。それは逆行分析により獲得した地球外工学技術を使って、暴力的な性質を持つET事件を捏造するということだ。物質化/非物質化、超光速移動、反重力推進とそれに関連するシステムを可能にする進歩した工学技術を持つ強力な秘密のUSAPは、その存在自体が従来の憲法に沿った軍および国家安全保障の指導と制御に対する直接の脅威である。このような組織は、全面的に法律と憲法による指揮システムの直接的な監視と制御のもとにない限り、従来の政府の指導体制を悪用し、欺き、操作する大きな危険を秘めている。例を挙げれば、情報機関の重要な一人の目撃証人は次のように述べている。我々が敵意を持った地球外知性体に攻撃されているように見せかけるために、ARV(複製された異星人の乗り物)を意図的に用いて偽の兆候察知と警報発出の事態を生じさせ、その中でARV(複数)を従来の軍事施設の攻撃に用いる。もし軍と国家安全保障の指導者たちがこのような人類の隠された行動能力を知らなければ、彼らはそのような事態に欺かれ、本当の地球外物体に対して不当で破滅的な結果をもたらしかねない対抗措置をとる命令を下すだろう。
- ◆ 意識と思考に直接的に干渉する地球外起源の超電磁氣的、非線形通信システムが、秘密のUSAPSにより逆行分析され、偽の兆候察知と警報発出の事態の中で民間と軍の指導者たちに対して用いられる可能性がある。ある国の最高指導者から直接もたらされた情報では、これがすでに行なわれているという。線形時空間を迂回し、精神と思考に直接干渉するこのような非線形の遠隔計測システムは、被標的者に捏造ではあるがきわめて現実的な体験を誘発する。軍と民間の国家安全保障の指導者たちは、これらのシステムの潜在的危険性について知る必要がある。そうすれば、このようなシステムが彼らに向けられたとしても、その人を惑わす効力は最小限に抑えられるだろう。(言われるところの“異星人による誘拐”経験は、概して秘密のUSAPSによるこれらのシステムの悪用の結果である)
- ◆ NASA、民間の天文学者、および他の科学者たちは、地球の軌道を横切る小惑星あるいは彗星が地球に衝突する可能性への懸念を益々強めている。JPL(ジェット推進研究所)とどこかのチームが、このような地球の軌道を横切る物体を我々の太陽系内で数千個も見つけている。過去にあった大衝突は、地球の表面に現在のメキシコ湾、ハドソン湾、その他の地形を造った。大部分の科学者たちは、このような衝突が起きるのが‘もし’ではなく‘いつ’の問題であることに同意する。従来の科学者たちは、核兵器やその他の従来の手段を用いて、このような衝突を回避することを議論してきた。しかし、UFOに関係するUSAPSは明らかにそれよりもはるかに進歩した、この問題を解決できる工学技術を持っている。特にそれが真実であるのは重力改変工学技術である。それはこのような物体の質量効果を変化させ、それが地球軌道と交差する針路から外れることを可能にするだろう。我々が知るように、このような衝突は人類文明を終わらせる潜在力を持っているがゆえに、軍と国家安全保障の指導者たちはこのようなUFO USAPに関係した工学技術を知り、それに接近する手段を持つべきである。さらに、今述べたような重大で有益な目的のために宇宙空間でこのような工学技術を利用することは、それが平和目的のためであることをETたちが認知して初めて可能になる。現在の状況がそうでないことを我々は理解している。

結論:

- ◆ UFO/ETI の主題の現実性とそれに関連する工学技術の公開は、地球上での生活の多くの局面を確実に変えるだろう。その中には地政学的関係、工学技術、経済、全体的な社会秩序などが含まれる。この主題について知らない軍と国家安全保障の指導者たちは、このような公開の遠大な意味を適切に予想できず、またそれゆえに準備ができない。公開プロジェクトは他の人々とともに、比較的近い将来にこのような公開を実現させることを積極的に追求しているので、指導者たちはこれらの意味を完全に理解し、このような公開に異議を唱える勢力に整然と対処できなければならない。地球外知性体が関係する出来事が突然、しかも否定のしようがない形で起きたとき、軍と国家安全保障の指導者たちがこれを知っており、事態に適切に対処する準備ができていないことは、さらに重要である。
- ◆ 地球外宇宙機のエネルギーと推進工学技術は、エネルギーのゼロポイント場を利用しており、核や内燃機関に依存しないために汚染を発生しない。軍、および国と世界の安全保障の指導者たちが直面する大きな‘予測不能要因’の一つは、来るべき化石燃料の枯渇とそれに伴う地球生態系の崩壊である。中国、インド、および多くの第三世界の急速な工業化により、石油資源のさらなる急速な減少と同時に、地球生態系に与える損傷は指数関数的に増加するばかりだ。現在、我々は末期的な技術文明の中にいる — 実に深刻な長期的安全保障問題である。しかし、UFO/ETI 問題に責任を負うべき秘密の USAP は、すでに内燃機関を時代遅れのものとするエネルギーと推進システムを逆行分析 (reverse-engineered) している。我々の推測によれば、この大飛躍は 1954 年から 1957 年の間に起きた。ロッキード・スカンクワークスのベン・リッチは、死の間際に公開プロジェクト顧問に対して次のように確証した。“我々はすでに星々の間を旅行する手段を持っている。だがこれらの工学技術は闇のプロジェクトの中に閉じ込められており、それらを取り出し人々の役に立てるためには、神の業を必要とするだろう...” 長期的国家安全保障計画では、人類の利益と地球保護のために、結局は(望ましくはきわめて近い将来に)これらの工学技術を公開することが必然的に求められる。国家安全保障と軍の指導者たちが、地球のエネルギーと内燃機関への依存をすべて置き換えてしまうことになる、これらの工学技術を理解すべきであることは間違いない。さらに指導者たちは、持続可能なエネルギーシステムへの転換が円滑で平和的に行なわれるように、このような工学技術の公開がもたらす物事を予想すべきである。

これらは UFO/ETI の主題が国家安全保障と軍に関わりを持つ事柄のごく一部である — そのどれもが、指導者たちにこの主題について十分な背景説明を行なうべき正当な理由である。

提言:

我々は、軍と国家安全保障の指導者たちが以下の行動をとることを提言する:

- ◆ 公開プロジェクトの主導のもとに、軍/民間の目撃証人たちからこの主題についての徹底的な背景説明を受ける。
- ◆ 司令長官たち (CINCS) に十分な背景説明を行ない、ETI/UFO との遭遇に対処する特別な

行動規則(ROEs)を開発する。

- ◆ この主題について独自に調査し、この主題に関係する USAP(認められざる特殊接近プロジェクト)活動に侵入する。
- ◆ この主題に関係する秘密計画(複数)に全面的に関与し、このようなプロジェクトが適切に監督され、直接的かつ継続的に憲法に基づく指揮系統下にあることを確実にする。
- ◆ UFOに関係する進歩した工学技術あるいは兵器システムの USAP による秘密裏の悪用については、いかなる場合もこれを制止する。
- ◆ これらの生命体に対しては平和的で協力的な対処行動をとり、武力を用いた暴力的な行動を回避することに細心の注意を払う。公開プロジェクトは7年間にわたり ETI と平和的な関係が続けている一つの原型プロジェクトを持っている。国と世界の指導者たちが同様の方法を導入することを勧める。
- ◆ 上記の情報に照らし、宇宙空間に兵器設備を展開することを注意深く再考する。また地球外知性体にとって好戦的あるいは敵対的と見なされかねない行動を避ける。

5.2 UFO/ETI 問題の国家安全保障に対する意味： 要約

著作権 スティーブン・M・グリア, 医師, 1995 年 8 月 30 日

UFO/ETI の主題の国家安全保障に対する意味という問題は、現在ほとんど認識されていないが、深遠であり広範囲に及ぶ。

これらの意味は、別々にではあるが互いに関連する問題として考察される：つまり ET の活動に内在する問題、およびこの問題が秘密に管理されている現在の状況から生じる問題である。

歴史的背景：

初期に国家安全保障上の観点から検討されたのは、地球の近傍にいる、あるいは地球に着陸した地球外宇宙機(ETS)の発覚が国民の間にパニックを引き起こす懸念、および進歩した地球外物質が軍拡競争と冷戦に影響を与えるという工学技術上の懸念だった。さらには、宗教的信念体系、政治的秩序、および経済体制への影響も懸念された。

重要なことだが、一旦実際のETS(地球外宇宙機)が1947年に回収され、地球外の機械装置が研究され、我々の軍事応用のための逆行分析(back-engineer)が可能になると、当時の当局者たちはこの問題の完全な秘密性を最優先事項と考えた。核の時代の始まりであり、ソ連との冷戦が激化していた状況下では、地球外工学技術の導入がすでに危険になっていた事態をさらに不安定にすると考えられたのは理解できる。さらに、原子爆弾および水素爆弾に関係した工学技術の秘密がソ連のスパイにより盗まれた歴史を考えると、地球外工学技術に関係するいかなる工学技術上の大飛躍も、ソ連の手に渡るかもしれないと懸念されたことも理解できる。もしこのような出来事により、米国よりも先にソ連が実際の軍事応用を可能にしていたなら、明らかにそれは米国の軍事能力を破滅的に不利にする可能性があった。

1970年代以来、この問題についてある程度の協力がソ連、米国、その他の国々の間で展開されていると信ずべき根拠がある。また確かに冷戦の終結は、工学技術の大飛躍とソ連による攻撃の恐怖に対する初期の懸念をほぼ取り除いた。

さらにまた、国民のパニックを懸念するという秘密の心理学的根拠は、今日では通用しない。少なくとも人々の57パーセントがUFOが現実であり、地球外に起源を持つことを受け入れている。人類による30年から40年に及ぶ宇宙開発は、宇宙旅行を実現した他の地球外文明が存在するかもしれないという考えを、人々の間に浸透させた。要するに、秘密の理由とされた以前の懸念は、今日では的外れである。

本質的に、地球外知性体の存在が国家と世界の安全保障に脅威を与えると信ずべき根拠はない。もし敵意や侵略が彼らがこの地球に来ている目的に関係しているとすれば、その敵意を示す出来事が遙か以前に起きていただろう。我々の評価によれば、地球外知性体(複数)に敵意はない。しかし戦争行為と宇宙の軍事化に関係する人類の能力をとっても懸念している。ICBM(大陸間弾道ミサイル)施設とそれを含む軍事的宇宙開発の無能力化に関係する地球外宇宙機の活動は、大量破壊兵器の出現および宇宙開発と相まった、人類が持つ攻撃性の知られた歴史に対する彼らの懸念に照らせば、理解されるはずである。実に、人類の兵器が地球外宇宙機を標的にし、追跡してきた過去の歴史を考えれば、地球外知性体(複数)が驚くべき自制によって対応してきたと我々は信じている。

皮肉なことに、国家安全保障への脅威は、地球外知性体の存在によってではなく、この主題に対する現在の秘密管理から生じている。50年以上も地球外知性体による脅威がない中で、現在の秘密性を地球外知性体による侵略の恐怖に基づいて正当化することはできない。地球外知性体の存在に関係する公開は、もし穏やかに理性的に提示されれば、米国でも他の場所でも、人々のパニックを引き起こすことはないだろう。1995年は1945年ではない。そして世界中の社会はこの情報を肯定的に受け入れる段階にまで成長した。

その一方で、おそらく憲法を外れたこの問題の秘密管理は、国家と世界の安全保障に対する真の脅威であり、憲法で保障された自由と民主主義を蝕んでいる。これを終わらせない限り、この秘密管理は米国の国家安全保障と持続的世界平和への機会を著しく阻害することになる。

我々の評価によれば、この問題に対する現在の秘密管理は、以下の要素を含む。これらは国家安全保障に対する直接的で差し迫った進行中の脅威である：

1. 地球外知性体の存在を否定し続けることは、地球外知性体に関係する出来事が突然に、否定しようもなく、公然と起きたときに、パニックを引き起こす状況を生み出す。なぜなら、国民の恐怖を和らげることができる、先を見越した公開の取り組みが存在しないからである。地球外知性体に関係するこのような出来事は、ここ2年から10年以内、あるいはもっと早く起きる可能性がある。それゆえに、秘密性と否定は国家と世界の安全保障にとり真の脅威である。
2. この問題に対する現在の秘密管理は、独立して活動し、憲法による指揮系統の外にあるように思われる。これらの活動を制御しているグループは偵察、地球外工学技術の逆行分析、お

よび宇宙で(とりわけ)ETS (extraterrestrial spacecraft;地球外宇宙機)を標的にする行為を行っており、憲法にも行政府の監督と制御にも応答しない。これは国家安全保障と立憲民主主義および自由に対する真の脅威である。

3. 我々の信頼すべき直接目撃証人によれば、地球外宇宙機が人類の秘密宇宙兵器により標的にされ、これまで少なくとも 2 度破壊されている。もしそれが本当なら、世界の平和と安全保障に対する危険は現実であり、切迫している。また、これらの秘密活動の継続は、国家と世界の安全保障に実に深刻な危険をもたらす。人類の秘密兵器による地球外宇宙機に対する敵対行為は、国家安全保障への由々しき差し迫った脅威なのである。国連とも、議会とも、米国大統領あるいは国民とも相談せずに活動している比較的小さな秘密組織が、人類の代表として地球と世界平和を危険にする行為に関与している。それを統制しない限り、これらの行為はやがて惑星間紛争を引き起こし、世界一般、とりわけ米国に災厄をもたらすだろう。この秘密管理を終わらせ、この問題の制御を憲法が定める権限および社会共有の領域に返さなければならない。
4. 地球外工学技術の逆行分析に関係する工学技術の進歩が、ある小さな秘密活動の手に集中している状況は、国家安全保障、世界の安全保障、および地球の未来にとり脅威である。45年以上も秘密の研究開発の対象だった地球外工学技術は、もし平和的な目的に賢明に利用されるなら、人類に多大な利益をもたらす潜在力を秘めている。しかし、それが国民にも法律と憲法に基づいた指揮系統にも応答しない小さな秘密活動に集中したときには、とてつもなく危険である。このことが米国と世界の安全保障にもたらす脅威は重大であり、この状態が長く続くほど、進歩した工学技術の支配権が相対的少数者の手に集中する。このような強力な工学技術の秘密裏の支配は、本質的に自由と民主主義、そして我が国民と世界に対する脅威である。憲法を外れた秘密行動計画のためにこれを使うことは、我々の国家に対する深刻な脅威であり、抑制され転換されなければならない。
5. 重要なことだが、秘密と秘密工作員そのものが国家安全保障に対する真の脅威となる。立憲民主主義のもとでの国家安全保障は、自由と民主政治に合法的に結びついてのみ可能だからである。自由と民主主義、抑制のない秘密と秘密権力、生来これらは共存できないがゆえに、きわめて稀な正当化できる状況でしか極端な秘密と秘密活動は存在し得ない。地球外文明の発見が持つ深遠な意味が、国民への公開と協議に無関係な秘密活動だけの領域にあることは許されない。そのような行為は米国憲法、民主主義、および自由を蝕むものであり、国家安全保障に対する深刻な脅威となる。
6. 最後に、この問題の排他的な秘密管理は、世界が平和的かつ互恵的に地球外知性体を受け入れる機会を失うという結果をもたらし、それが今も続いている。つまり、世界の人々、国連、他の多くの国際的な機関や国内機関が、この問題に理性的に対処する機会を奪われているということである。その結果、国家と世界の安全保障は、以下の分野でその機会を失うという負の影響を受けている：
 - ◆ 地球環境は、次の 100 年間に大規模崩壊が起きる深刻な危険に曝されているが、もし地球外工学技術が平和的に展開されたなら、大きく改善されるだろう。汚染を発生しない、い

いわゆるゼロポイント・エネルギーまたはフリーエネルギーのシステムが、地球上に持続可能な技術文明が存続することを可能にし、地球を環境的にも経済的にも転換させるだろう。地球外文明との平和的かつ互恵的な関係の確立により、やがて我々はこのような工学技術を理解し利用することが可能になるだろう。

- ◆ 我々は宇宙で孤独ではないと全世界が認識することにより、世界の一体化と平和が増進されるだろう。この事実を認めることにより、我々は地球という共通の故郷の上で生きる、本当に一つの惑星民族であるという意識が高まるだろう。その結果、現在地球を苦しめている紛争の多くが新しい視点から考察されることになるだろう。これは地球外知性体の存在を神聖化することも悪魔化することもなく、それを公平で、科学的で、中立的な視野に置くことにより達成される。結局、世界平和と地政学的現状の著しい改善が、我々は孤独ではないという事実の公開により実現されるだろう。一つの国際的な構造基盤、および地球外文明との関係に平和的に対処できる諸機関が必然的に発生し、その結果として、世界の一体化と協調が強化されるだろう。
- ◆ 世界の文化、思想、科学、および他の多様な分野が別の世界(複数)との平和的な関係の発展により恩恵を受けるだろう。このプロセスは、数世紀ではないにせよ、数十年を要するだろう。しかし時間はかかるだろう、結局それは地球の人々が地球全体のみならず、他惑星の文明とも一体化することになる道である。

要約すると、国家安全保障にとって急を要することは、大統領と議会が UFO/ETI の主題の秘密と秘密管理を終わらせるための措置を講じることである。この問題を明るみに出し、国民への公開と制御に失敗すれば、世界の歴史における民主主義と政府の最も憂慮すべき失敗ということになる。これを行なうことは、民主主義に対する我々の忠誠、人々に対する我々の忠誠が試されることに他ならない。21世紀が近づいている。我々は冷戦の遺物である癌のような行き過ぎた秘密を終わりにし、民主主義が再確認され永続する世界平和への機会が与えられる、新しい時代を展開しなければならない。

5.3 新エネルギー革命の国家安全保障と環境に対する意味： 米国上院環境・公共事業委員会に向けた概要説明

スティーブン・M・グリア, 医師, 2000年10月

国家安全保障の根本は、今日の世界が直面する切迫した環境危機と密接に結びついている：人類が、進歩した工学技術文明の中で存続できるかどうかの問題である。

化石燃料と内燃機関は、環境と経済の両面で持続可能ではない — そしてこの両面に対処する代替物はすでに存在している。問題は、我々が新しい脱化石燃料経済に移行するかどうかではなく、いつ、どのようにして、ということである。この問題に関連する環境、経済、地政学、国家安全保障、および軍事の問題は、深遠であり相互に密接不可分である。

このような新しいエネルギー工学技術の公開は、人間社会のあらゆる局面に広範囲の影響を及ぼすだろう。このような事態に備えるときが、すでに到来している。なぜなら、もし今日そのような工学技術(複数)が公表されたなら、それらの広範囲に及ぶ応用が効果を上げるためには、少なくとも10年から20年かかると思われるからである。つまり、石油の需要が供給をはるかに超え、環境破壊が指数関数的かつ破滅的に進み、世界経済の混沌が始まるまでにおよそどれくらいの時間が我々にあるか、ということなのである。

我々は化石燃料の使用に代わる工学技術(複数)が存在することを知っており、それほど遠くない将来に起きる深刻な世界経済、地政学、および環境の危機を回避するために、直ちにそれを開発し応用する必要がある。

要約すると、これらの技術は以下の分類に大別される:

- ◆ 量子真空/ゼロポイント・エネルギー利用システムおよび関連する電磁理論と応用の進歩;
- ◆ 電気重力および磁気重力エネルギーと推進;
- ◆ 常温核反応効果;
- ◆ 電気化学と内燃システムにおける関連する進歩。これは汚染排出量をほぼゼロにし、きわめて高い効率を実現する。

このような工学技術を使った幾つかの実用的な応用技術が、過去数十年間に開発されてきた。しかしこれらの大飛躍は、その斬新さゆえに無視されてきた — あるいは国家安全保障、軍事の利害関係者、および“特別”利害関係者のために秘密にされ、抑圧されてきた。

明確にしておこう: 問題はこのようなシステムが存在し、化石燃料の実現可能な代替物になり得るか、ではない。問題は、世界中にこのようなエネルギーシステムの転換が起きるのを許容する勇気が我々にあるか、ということなのである。

このような工学技術 — 特に石油や石炭などの外部燃料源を必要としない技術 — は、人類に疑う余地のない有益な効果をもたらすだろう。これらの工学技術は高価な燃料を必要とせず、その代わりに遍在する量子空間エネルギーを利用するために、世界経済と社会秩序に革命をもたらされるだろう。その影響は以下のとおりである:

- ◆ エネルギー発生に関係するすべての空気汚染源が除去されるだろう。その中には発電所、自動車、トラック、航空機、および製造業が含まれる;
- ◆ すべての製造過程を排出量ゼロに近づけることが可能になるだろう。というのは、それに必要なエネルギーそのものを得るための燃料代が不要になるからである。これらの工学技術の応用により、大煙突からの排出の除去、および排水路からの固形廃棄物の除去が可能になるだろう。現在その実行を妨げている要因は、それに莫大なエネルギー費用がかかること、またそのエネルギー消費量 — 化石燃料が基本である — が環境への逆効果となるときがすぐにやってくるということである;
- ◆ 環境への影響をほぼゼロにし、なおかつ地球上に高い技術文明を維持することが現実に達成されるだろう。これは人類文明の長期的持続可能性を保証する;

- ◆ 発電, ガス, 石油, 石炭, 原子力エネルギーのために現在使われている数兆ドルは自由となり, 個人と社会全体の双方により, さらに創造的で環境に無害な活動に使われるだろう;
- ◆ 地球上の未開発地域は貧困を脱出し, 1 世代のうちに先進技術世界に参入するだろう — しかし関連する構造基盤経費, および従来のエネルギー発生と推進による環境への影響は生じない. これらの新システムは空間の量子エネルギー状態からエネルギーを発生するために, 集中化した発電と送電のための数兆ドルの構造基盤投資は不要になるだろう. 遠隔地の村や町は製造, 電化, 浄水などのために, 燃料を買ったり大規模な送電線と電力網を建設したりすることなしに, エネルギーを発生させる能力を持つようになるだろう;
- ◆ 資源と物質のほぼ完全な再利用が可能になるだろう. というのは, そうするためのエネルギー費用 — 現在その主な阻害要因である — は取るに足りない程度にまで減少することになるからである;
- ◆ 富める国と貧しい国との大きな格差は急速に消失するだろう — それにより, 多くの社会的, 政治的, 国際的な不安定要因の根元にあるゼロサムゲームの考え方の多くも, 同じく消失するだろう. 有り余る低価格のエネルギーを持つ世界にあっては, 貧困, 搾取, 憤慨, および暴力の循環を生じさせる苦悩が, 社会の動力学から除去されるだろう. 思想, 文化, 宗教の違いは存続するだろうが, 不当な経済格差と闘争はかなり急速に方程式から除去されるだろう;
- ◆ 電気重力/反重力エネルギーと推進システムが現在の地上輸送システムに置き換わるのに伴い, 地上の道路 — したがってまた大部分の道路建造物 — は不要になるだろう;
- ◆ 世界的な貿易, 発展, および進歩した工学技術を使ったエネルギーと推進の装置 (複数) が世界中で必要とされるのに伴い, 世界経済は劇的に拡大し, 米国やヨーロッパのような進んだ経済が計り知れない利益をもたらすだろう. このような世界エネルギー革命は, 世界経済の拡大を引き起こし, 現在のコンピュータとインターネットによる経済を些末なものにしてしまうだろう. これは, 実にすべての船を持ち上げるうねりになるだろう;
- ◆ 長い間に社会は無尽蔵の豊かさを実感する段階 (psychology of abundance) へと発展し, それは人類全体に及ぶ利益, 平和的な文明, そして破壊と暴力の活動ではなく創造性の追求に, 益々重点を置く社会となって現れるだろう.

これらのすべてが幻想だと思われないうちに, このような工学技術の進歩は可能であるばかりか, それらはすでに存在している, ということに肝に銘じて欲しい. 足りないのはそれらを賢明に応用しようとする全体の意志, 創造力, 勇気である. そして問題はそこにある.

救急外傷医として, 私は何事も善悪両方に使えることを知っている. ナイフはパンにバターを塗ることに使える — また喉を切り裂くことにも使える. どんな工学技術であれ, 害を及ぼすことにも利益を生むことにも応用することができる.

その後者の応用が, このような工学技術に対する国家安全保障と軍事の深刻な懸念の一部を説明する. 何十年の間, それらを経済と軍事の観点から我々の安全保障に対する脅威と見なすある種の勢力 (複数) により, エネルギーと推進の工学技術に関するこれらの進歩が達成され, 抑圧され, 秘密にされてきた. 短期的には, これらの懸念には十分な根拠があった: 数兆ドルの経済の石油, ガス, 石炭, 内燃機関, および関連する輸送部門に事実上終止符を打つ工学技術の流出を放置することにより, なぜ世界経済という船を暗礁に乗り上げさせようとするのか? また, これほどの工学技術の飛躍が確実に兵器へと応用される不安定で危険な世界へ, なぜこの工学技術

を解き放つのか？これを考えると、現状維持が適切のようだ。

しかしそれは、短期的にということにすぎない。実際に、このような国家安全保障と軍事の政策 — 今さら述べるまでもない産業(複数)と国家(複数)にいる巨大な特別利害関係者たちにより煽られている — は、世界の大部分を貧困化し、富める国と貧しい国の間のゼロサムゲームという考え方をさらに強めることで、全世界の地政学的緊張を激化させ、我々に世界のエネルギー危機と差し迫った環境危機をもたらした。そして今、我々にはその状況を解消するわずかな時間しか残されていない。このような思考法は過去に追いやらなければならない。

それというのも、あらゆる国が限られた資源を求めて闘争し、エネルギー不足と地球規模の混沌から我々の文明全体が崩壊するという、この不安以上に大きな国家安全保障上の脅威があるだろうか？現在の産業構造基盤を化石燃料依存から転換するのに要する長い先行期間を考えると、今我々は国家安全保障の緊急事態に直面している。そのことはほとんど誰も語っていない。これは危険なことだ。

また、米国と他の国々で深刻な憲法上の危機が生じている。そこでは国民を代表しない組織と区画化された軍および企業の極秘プロジェクトが、この問題および関連する諸問題について国家と世界の政策を決め始めた — すべてが国民による議論の外側にあり、大部分は議会の同意も大統領の同意も得ていない。

実に、この危機は米国を含む各国で民主主義を蝕んでいる。私はこの問題および関連する諸問題について、米国とヨーロッパの政治、軍、情報機関の高官たちに自ら背景説明を行なうという、気の進まない仕事をしてきた。これらの高官たちは、ある種のプロジェクトの内部で区画化された情報に接近することを拒絶されてきた。はっきり言うと、それは認められざる領域(いわゆる“闇の”プロジェクト)である。これらの高官たちには下院議員および上院議員、クリントン政権の最初の中央情報局長官、国防情報局長官、統合参謀幹部、その他が含まれる。通常、このようなプロジェクトと工学技術について高官たちが持っている情報は、皆無かそれに近い — 彼らがそのことについて質問すると、何も説明されないか、“知る必要性”を持っていないからと拒絶される。

これはさらに別の問題を提起する：これらの工学技術は永久に抑圧されてはいないだろう。たとえば、我々のグループは、きわめて近い将来にこれらの工学技術を公開することを計画しているが、その口を封じることはできないだろう。このような公開が行なわれるとき、米国政府は準備ができていだろうか？公開により米国政府と他の国々の政府は、真実を知らされるとともに、我々の社会を化石燃料から新しいエネルギーおよび推進システムへと転換するための計画を持つことを余儀なくされる。

実に、大きな危険は、我々の指導者たちがこれらの科学的な大躍進に無知なこと — そしてそれらの公開に対処する術を知らないことだ。世界の先進諸国は、このようなエネルギーと推進技術の進歩が平和的にのみ利用されることを確実にするために、システム(複数)の適切な管理に備える必要がある。経済と産業の利害関係者たちは、負の影響を受けることになる我々の経済の諸局面(商品、石油、ガス、石炭、公共施設、エンジン製造、その他)が、急激な逆転の衝撃から保護されるように、また新しいエネルギー構造基盤への投資と支援により経済的に“防御”されるように、備え

なければならない。

将来への創造的な物の見方 — このような工学技術に対する恐れや抑圧ではなく — が求められている。それは今すぐに必要である。もし我々がさらに10年から20年待つとすれば、必要な変革が間に合わず、世界的な石油不足、法外な価格、および資源を求める地政学的争いにより、世界経済と政治機構は崩壊するだろう。

あらゆる体制は恒常性に向かう傾向がある。現状維持は心地よく安心だ。変化は恐ろしい。しかしこの場合、国家安全保障にとり最も危険な針路は、無為である。我々はエネルギー不足、急騰する価格、そして経済の崩壊に関係する来るべき動乱に備えなければならない。最良の備えは石油および化石燃料への依存を転換することであろう。我々にはその代替物がある。しかし、これらの新しいエネルギーシステムの公開には、それ自体が内包する利益、危険、および困難が同時に伴う。米国政府と議会は、この大きな難問に賢明に対処する準備をしておかなければならない。

議会に対する提言:

- ◆ これらの新しい工学技術を、一般の民間人が現在持っている情報源と、軍、情報機関、および企業の請負分野にある区画化プロジェクトの両面から、徹底的に調査する;
- ◆ この主題に関わる区画化プロジェクトが保持する情報の秘密解除と解放を承認する;
- ◆ このような工学技術の押収もしくは抑圧を明確に禁止する;
- ◆ 民間の科学者と工学技術者たちによる基礎研究と開発のための十分な資金を承認し、この研究を国民と主流派科学者たちが利用できるようにする;
- ◆ このような工学技術(複数)の公開と、脱化石燃料経済への転換に対処する諸計画を策定する。これらの計画には、とりわけ以下のことが含まれるべきである: 軍事と国家安全保障計画; 戦略的な経済計画と準備; 民間部門への支援と連携; 地政学的計画、特にその経済を石油の輸出と価格に大きく依存している OPEC(石油輸出国機構) 諸国と地域に配慮した計画; 国際的な連携と安全保障。

私個人としては、これらの新しいエネルギー源の利用を促進するための役に立つなら、議会に対してどんな協力でもする用意ができています。この問題および関連する機密事項に10年以上も関わってきた立場から、私は、議会に召喚されてこのような工学技術について証言することができる多数の人々、そしてまた、これらの問題をすでに扱っている秘密の政府活動の内部にある、認められざる特殊接近プロジェクトについて情報を持つ人々を推薦することができます。

もし我々がこれらの難問に勇気と英知を持って立ち向かうなら、我々は子供たちのために、貧困と環境破壊に無縁な、新しい持続可能な世界を確保することができます。我々はこの難課題に必ずや立ち向かえるだろう。なぜなら、そうする以外にないからだ。

6.0 背景情報資料

6.1 入手できる最高の証拠への手引き

以下の節では、よく知られた一連の目撃と事件を述べる。

UFO 問題に関する最近のある本の中で、報告者であり著者であるジム・マース³⁸⁾は、その序文 (p. x) のはじめにこう述べている:

“UFO が実在するかどうかの論争は過去のものになった。UFO は実在する。過去 50 年間にわたり収集されてきた膨大な記録文書と報告に誠実に対処できない視野を持つ人々だけが、今なお、地球の空に急増しているのは人間の想像力の所産以外に何も無い、という考えを固守している”

では、どこにその“膨大な記録文書”があり、なぜそれがもっと広く知られていないのか？それはすべて我々の周りにあり、人々はそれを見さえすればよい。現在は一般の人々が入手できる UFO 情報の一つの最盛期にある。たとえば、2001 年 2 月の時点で、アマゾン書籍販売のウェブサイト上では UFO という検索条件のもとに 581 冊が列挙された。さらに研究向きの資料として、幾つかの大きな編集物が利用可能である。

一般の人々が自由に利用できる、UFO 目撃に関する最大のコンピュータ・データベースの一つが UFOCAT2000 (*2001 年時点) である。そこには 109,000 例を超える報告および関連情報が収録されている。UFOCAT は、そのウェブサイト (<http://www.cufos.org/UFOCAT.html>) で述べられているように、30 年以上に及ぶ努力の結果であり、それは“コンドン委員会”の名前でも知られる空軍が発起したコロラド UFO プロジェクトの期間中に始まった。UFOCAT はデービット・S・サンダース博士により創始された。当時彼はコロラド UFO 研究の共同研究責任者であり、コロラド大学の心理学教授だった。

目撃情報のもう一つの主要なコンピュータ情報源は、“*U*データベース”という名前の編集物である。それには 2001 年 2 月の時点で、17,750 例の慎重に選ばれた UFO 事件が含まれている。それらは 365 以上の本、新聞、定期刊行物、および個人の情報源から編集されたものである。このデータベースに関する情報は、ラリー・ハッチのウェブサイト (<http://www.jps.net/larryhat>) にある。

ここ数年間に、退役空軍大尉ジョージ・ファイラー³⁹⁾ は、米国および世界中から入手した UFO 目撃報告の多くに解説を付けて編集し、(電子メールにより) 公表した。これらはほぼ毎週送信されている。彼が 1997 年から 2000 年までの 4 年間に公表した報告は Majorstar@aol.com から CD で入手することができる。

発生とほぼ同時の最新目撃情報に関しては、ピーター・ダベンポートにより運営される全米 UFO 報告センター (National UFO Reporting Center; NUFORC) (<http://www.msatech.com/nuforc>) が、人々から寄せられる報告に関する価値ある情報、および過去数年間に及ぶ報告の検索可能なデータベースを提供している。人々が実際に見ているものを考えたときに、これらの報告は何を意味

しているか？ピーター・ダベンポートが最近の電子メールで我々に知らせたところでは、NUFORCが受ける報告は毎日 5, 6 例から数十例に及び、一日平均では 10 ないし 20 例である。彼は言う：“おそらく 100 例のうちのほんの 1 例がどこかで記録されていると仮定すれば、この統計は毎日どれくらいのUFO目撃が起きているかについて一つの洞察を与える。私が見るところ、報告される目撃例の割合は 1,000 例のうちの 1 例程度にまで下がるのではないか” このことは、一日当たりたぶん 15x100 すなわち 1,500 例のUFO目撃が起きており、1 年では数十万例になることを示唆している。では、なぜこれがもっと広く知られていないかということだが、それは複雑な質問であり、この総合的な資料が明らかにしたいことの一部である。

数十人を超える目撃証人によりここに提示された証拠は、その多くの証人が専門的な訓練を受けた人々（たとえば民間パイロット、軍関係者、警察官）であるというだけでなく、その多くの事例において複数の目撃証人がいたという点で、特別な説得力を持つ。さらに、出来事の多くが最近公表された同じ出来事を述べている政府文書（複数）によって裏付けられていることを考えると、このような専門家による報告を退けることはきわめて困難である。これらの事件のほとんどについて政府文書がある。それらの文書は参照され、この資料の巻末に付録 I として含まれている。

6.2 1940 年代より前の UFO 目撃

UFO 目撃の現代史は、ワシントン州で 1947 年 6 月 25 日に起きたパイロットのケネス・アーノルドによる 9 個の皿型物体の目撃を巡る報道に始まったと多くの人々により考えられているが、今日なら UFO と我々が呼ぶであろう物体は、歴史の全期間を通じて記述されている。聖書と古代バラモン教の聖典に述べられている幾つかの出来事は、研究者たちにより UFO を描写したものと考えられている。リーダーズダイジェスト社の本 *Mystery of the Unexplained* には、古代エジプトとローマの文書、そして中世のヨーロッパと日本の文書に見られる目撃の記述が紹介されている。ジム・マースもまた彼の本⁴⁰⁾の中で、これらの古い目撃の幾つかを述べている。これらの報告の多くは、UFO 作家たちにより繰り返し論評されてきたので、ここでは取り上げない。第二次大戦から 1980 年代中頃までの UFO 問題についてのすぐれた歴史的評論については、ティモシー・グッドの *Above Top Secret* を読みたい。我々の政府の UFO に対する関心と秘密保持は 1940 年代に本格化したことから、最も説得力のある証拠となった事例はこのときに始まったのである。

6.3 1942—1945 年：現代の UFO 目撃はこうして始まった

最も早い事例史の幾つかは、1940 年代初期に軍将校たちによってもたらされている。1942 年に一人の写真家が中国の繁華街で開業した。大型カメラを持っていた彼は、観光客の写真を撮り、それを彼らに土産として売ろうと考えた。突然、彼の注意は路上の多くの人々とともに空に向けられた。そこには、無音で空中静止している 1 個の大きくて暗色の円盤型物体があった。機転を利かせたその写真家はカメラの焦点をその円盤に合わせ、その物体の素晴らしく鮮明な写真を一枚撮った。第二次大戦前の中国戦役で任務に就いていた一人の軍将校も、そのとき路上にいた。彼はその写真を買ひ、中国駐留中に収集していた写真スクラップブックにしまい込んだに違いなかった。この写真は一人の日本人が 1942 年のその写真を収めた古いアルバムを発見するまで、何年もの

間注目されなかった。⁴¹⁾

1942年の8月、米国海兵隊軍曹スティーブン・ブリックナーはソロモン諸島に駐留していた。彼は大きな音を出す、これまで見たこともない複数の飛行物体が現れたのを目撃した。ブリックナー軍曹は、報告の中で150個以上の“フラフラ揺れる”物体が10から12個ずつ直線編隊を組んで飛ぶ様子を記述した。⁴²⁾

40) Marrs, Jim. 1997. Alien Agenda, HarperCollins Publishers, NY, 434pp.

41) "UFO Sightings: Photographic Evidence, Vol. #1", video, 8 1996 AFS/Dialogue Productions, producer, Thomas Tulien. Photograph owned by Wendelle Stevens, obtained from Paul Dong.

42) Good, Timothy, Above Top Secret, William Morrow and Company, 1988, p.18

フー・ファイターズ：第二次大戦中のヨーロッパと太平洋戦域、そしてインドで、パイロットと乗組員たちは彼らの軍用機と並んで飛行する正体不明の輝く球体(複数)を報告し始めた。⁴³⁾それは1943年に始まり、インド洋、ドイツ、その他の空域を飛行するパイロットたちは、“火の玉”が信じられない速度で大空を横切ったと述べ、似たような現象を報告した。それはナチスが何らかのミサイル、ロケット、もしくは電気重力装置を飛ばしているのだという見方もあったが、情報機関による調査が行き着いた推測は、ナチスもまたこれらの奇妙な光球に付きまとわれているらしいということだった。伝えられるところでは、ある米国人パイロットが当時の漫画の題名をもじって、“フーがあるところにファイヤーがある”⁴⁴⁾と言った。“フー・ファイターズ”という言葉がこのとき造られ、定着した。

ドイツ上空を飛行していた米国空軍のパイロットと情報将校たちは、特にライン低地の上空で、数十個の赤やオレンジ色の光体や閃光、ナチスの夜間戦闘機と考えられる“クラウト・ファイターズ”または“クラウト・ボールズ”の目撃事例(複数)を、米国軍レーダーセンターに無線通報した。しかしレーダーセンターの応答は、その空域でレーダー画面に映っているのはその軍用機だけだというものだった。それは単独の現象ではなかった。それらの光体は1943年から1944年にかけて、出現頻度を高めながら繰り返し現れたのである。⁴⁵⁾実際に、1944年には2人のP-47パイロットが、それぞれ白昼に1個の“フー・ファイター”を目撃した。ドイツのノイシュタット近くを飛行中のパイロットは、“金属的な外観をした金色の球体”を見たと報告した。2番目のパイロットは、やはりノイシュタット近くを飛行していたが、それを直径が約3ないし5フィートの“燐光を発する金色の球体”と述べた。

1945年5月、米国軍兵士リン・R・モモは、ドイツのオールドルフ上空で“かなり驚くべき性質の1個の火の玉”を見たと言った：

それはどんな星よりも輝いていた。金星よりも明るかった。それは約2秒のうちに完全に地平線から地平線へと移動した。その経路は天頂を通過しており、高度は分からなかったが、速度は途方もないものだったに違いない。

モモは続けて、その物体は無音で、地平線から地平線へと横切るときに“浮いたり沈んだり”の不規則な揺動をしたとはっきり述べた。モモによれば、それは鏡を持ったときそこからの反射光が手元のわずかな動きで不規則に動く現象を連想させたという。“似た装置が第二次大戦中に用いら

れ、迷信を信じる敵兵を恐れさせる目的で雲に宗教的な映像を映すために使われた。それは正体を見抜かれるまで非常に効果があった” モモはそう報告した。⁴⁶⁾

今は亡き米国人ジャーナリストのフランク・エドワーズは、英国の E・R・T・ホームズ少佐の報告に言及した。それは 1943 年 10 月 14 日にドイツのシュワインフルト・コンビナートへの爆撃航程中に、第 384 航空群の B-17 爆撃機パイロットたちが目撃したことを要約したものである。ホームズ少佐はその報告書の中で、それらの円盤は爆撃機に何の損害も与えなかったと述べた。その軍公式報告書には、以下の記名があった：

E・R・T・ホームズ少佐，連絡将校，第 1 爆撃飛行隊，ロンドン英国政府陸軍省 15 情報大臣宛，1943 年 10 月 24 日付。（英国記録文書，任務第 115）⁴⁷⁾

43) For example: See pilot Leet's letter to Major Keyhoe describing a "Foo Fighter" and the statement that it was thought to be a new German fighter. Appendix I. (Document AI.3)

44) Lore and Deneault, *Mysteries of the Skies: UFOs in Perspective*, Prentice-Hall, Inc. 1968, p. 116.

45) *UFO Encounters*, Golden Press, 1978.

46) *Mysteries of the Skies*, pp. 119-120.

47) Edwards, Frank, *Flying Saucers--Here and Now!*, Lyle Stuart, New York, 1967, p.77.

フランク・エドワーズたちは、この現象の調査が英国で始まったと信じていたが、英国の軍部ははっきりとそれを否定した。さらに、今述べたホームズ報告のようなわずかな記録文書以外には、その存在を裏付ける証拠は何も明らかにされていない。マッシー中将の名前に由来するらしいマッシー報告なるものが知られていた。しかし、英国航空省（*1964 年に防衛省に昇格）航空情報局第一副局長だった空軍中将ビクトル・ゴダードは、英国軍の記録にマッシー中将はいないと述べた。ところが、ヒュー・マッシー なる人物は 1954 年の名士録 に載っているのである。ヒュー・R・S・マッシー 中将は最後に帝国副参謀長に任ぜられた。1942 年に退役したこのマッシーが、フー・ファイターズを調査した將軍だったのだろうか？これらの不可解な飛行物体の性質と起源のように、その報告書とその名前の由来となった人物については、今日に至るまで謎のままである。⁴⁸⁾

6.4 ニューメキシコでの墜落回収と着陸事例

1966 年 4 月 1 日発行の *ライフ* 誌記事によれば、1947 年 6 月から 1966 年初めまでに 10,147 件の UFO 目撃が報告された。⁴⁹⁾ “空飛ぶ円盤”という言葉そのものは、民間パイロットのケネス・アーノルドが 1947 年 6 月 24 日にワシントン州レニエ山で経験したことが発端になっている。彼は小型飛行機を操縦していたときに、9 個の急速に移動する円盤型物体の編隊を見た。熱狂的な報道と 1947 年夏の間中起きた目撃多発現象の中で、大衆紙により“空飛ぶ円盤”という言葉が造られた。

ロズウェル事件： 1947 年 7 月 2 日、農場主ウィリアム・“マック”・ブレイゼルの牧場の遠く離れた場所に 1 個の物体が墜落した。ブレイゼル氏は、激しい嵐の最中に大きな爆発音を聞いたと報告

した。その翌日、彼は 50 エーカーはあろうかと思われる範囲に散乱している破片を発見した。ブレイゼル氏は地元の保安官事務所に通報し、保安官はそれを陸軍に回した。この事件は、ニューメキシコ州ロズウェル地域にあった陸軍航空基地第 509 爆撃航空群が、報道機関に対して、1 機の空飛ぶ円盤がロズウェル近くに墜落したという驚くべき話を公式に発表したことにより、大騒動を引き起こした。この話を報道機関に発表した基地の広報将校は、空軍中尉ウォルター・ハウトだった。彼は今でもロズウェルに住んでいる。ロズウェル・デイリー・レコード(*新聞名)は、第 1 面に次のような大見出しを付けてこの話を掲載した：“ロズウェル地区の農場で RAAF (Roswell Army Air Force;ロズウェル陸軍航空隊) 空飛ぶ円盤を捕獲” その 2 日後、陸軍は 2 回目の報道発表を行ない、それはただの気象観測気球が落下したものだとして主張して、前言を撤回した。

ロズウェル地区の参謀情報将校だったジェシー・マーセル少佐が、その回収作戦を担当した。2 回目の報道発表をさらに“真実”らしく見せるために、破片が最初に回収されたテキサス州フォートワースで記者会見が行なわれた。そしてマーセル少佐がしゃがんで破れた銀色の気象観測気球の断片を調べている 1 枚の写真が発表された。この気球は、航空隊により最終的に“ムガール気球” — ソ連の核爆弾実験の証拠である音波を検出する最高機密プロジェクトに使用された音響装置搭載気球 — だと断定された。ムガール気球は、実際に非常に大きな一連の気球を大気中に滞留させるように設計されていた。それは単独の気象観測気球にいくらかは似ていた。しかし、大々的な軍の回収作戦が、この気球の“落下”だと主張されていることのために行なわれた。陸軍の一隊がその現場を数日間にわたりくまなく捜索し、残骸だけでなく(伝えられるところでは、地球外知性体の複数の遺体も)、断片やかけらもきれいに持ち去った。回収された残骸は厳重に秘匿され、まずテキサス州フォートワースのカーズウェル航空隊基地に空輸され、最終的にはオハイオ州ライト地区(現在のライト・パターソン空軍基地)に移送された。どんな気球配置が 50 エーカーの範囲にわたって残骸を散乱させるのか、またその破片を回収するのに最高機密作戦を必要とするのか、想像することは難しい。

48) Above Top Secret, p.28

49) "The Week of the Flying Saucers," Bill Wise, Life magazine, April 1, 1966, 8 1966 Time Inc.

回収作戦の初期に、マーセル少佐は彼の家族に、決して話題にするなど注意してその残骸の破片を幾つか見せた。今は亡きマーセル少佐の息子である医師ジェシー・マーセル・ジュニア大佐は一人の目撃証人であり、公開プロジェクトに加わっている。マーセル博士は、父がその夜に台所のテーブルに家族を呼び集めたことをはっきりと覚えている。マーセル博士はそのとき 12 歳だったが、墜落現場から持ち帰った物体(複数)、特に軽い物質からできているラベンダーか紫色をした、側面に沿って象形文字のような記号がある幾つかの梁(はり)を見せられた。マーセル博士は、その物体を手にとって調べた 12 歳の少年の鮮明な記憶に基づく一つの模型を持っていた。

アイゼンハワー大統領のスタッフだったもう一人の目撃証人は、1960 年から 1961 にかけてペンタゴン(国防総省)の地下で暗号法の訓練をしていたとき、小さな I 形梁(*I の形の断面を持つ梁)の 2 個の断片と金属箔に似た 1 片の物体を見せられたと語った。彼はその物体が“1 機の墜落 UFO のものだ”と聞かされた; それがどこかは聞かされなかったし、その物体を手にも取れなかった。彼は、その金属箔が突き刺して穴を開けることも、裁断することも、燃やすこともできな

いと聞かされたことを思い起こす。これらの目撃証人たちはまた、小さな梁の一つの側面に沿って刻まれていた象形文字に似た記号をはっきりと思い出すことができる。⁵⁰⁾

ロズウェル事件は、1978 年まで噂の領域にあった。この年に今は亡きジェシー・マーセル少佐が NBC ラジオ番組に出演し、ロズウェル近くの墜落現場で行なわれた当局による残骸回収について語った。マーセル少佐は、核物理学者にして UFO 研究者であるスタントン・フリードマンのインタビューに答えて、以下のように語った：

... その日の午後、ブランチャード大佐の命令に従ってあらゆるものを B-29 に積み、フォートワースに空輸した。私はそれをオハイオ州ライト地区まで空輸する予定だったが、我々がフォートワースのカーズウェル基地に着くと、その将軍がそれを禁じた。この時点では彼が事態を掌握しており、私は報道機関に対していかなる状況でも何も話すなと命令された。私は飛行機から降ろされ、他の誰かがそのすべてをライト地区まで空輸する任務を引き継いだ...⁵¹⁾

なぜロズウェルなのか？とても簡単だ。なぜなら、第 509 爆撃航空群は核弾頭を所有する国内、そしておそらくは世界で唯一の 軍事施設だったからだ。

その他の墜落場所：ロズウェル墜落事件が本当にロズウェルの近くで起きたのか、それともニューメキシコ州の他の場所、特にマグダレナ、ソコロ(サンアグスティン平原)、コロナ、あるいはアズテックだったのかは未解決である。また、ニューメキシコ州で起きた地球外宇宙機と思われる物体の墜落がただの 1 回だったのか、それより多かったのかも、いまだに判明していない。1997 年に、ロズウェル墜落事件の最もよく知られた研究者の何人かが彼らの主張を翻し、地球外宇宙機がロズウェルで墜落したことはもう信じない、それは気球に吊り下げられた装置か高い機密性を持った軍の原子力実験機だったと言明した。しかし、上にその概要を述べた目撃証人の証言、およびかつて軍籍にあった他の目撃証人たちから公開プロジェクトに寄せられた声明は、1940 年代終わりから 1950 年代に米国南西部で数回の墜落があったことを確証する。これまで何人かの UFO 研究者たちにより見出されてきたこれらの目撃証人たちと証拠は、ロズウェルを含むこれらの場所で地球外宇宙機の墜落があったことを示している：ニューメキシコ州アズテックあるいはその近く；アリゾナ州キングマン；コロラド州グレートサンドデューンズ；テキサス州ラレード近くのメキシコ国境内部；アリゾナ州パラダイスバレー(現在のケアフリーの近く)。また研究者のトミー・ブランとレオナード・ストリングフィールドによる、1962 年に起きたニューメキシコ北部での墜落の報告書もある。この二人の研究者はさらに、同じ年の 1962 年にライト・パターソン空軍基地で嚴重な警備のもとで格納庫に置かれていた 1 機の UFO についても報告した。⁵²⁾

50) Disclosure Project transcripts of closed witness meetings; June 1995 and April 1997.

51) Berlitz and Moore, The Roswell Incident, Granada, London 1980.

52) Stringfield, Leonard H., UFO Status Reports II and III, 1982.

墜落があったかもしれない場所の正確な位置はともかく、重要な一連の証拠があり、その中には情報公開法(“FOIA”)により米国政府から入手した、秘密の回収作戦が行なわれたことを明確に示す文書も含まれる。もし我々が 1947 年 7 月のロズウェル事件に関する 2 回目の報道発表を信じ

るというなら、嚴重に保護されたこのような作戦が、1 個の気象観測気球のために必要だったとはとても信じ難い。

しかし、スティーブン・シッフ下院議員(R-NM;ニューメキシコ州共和党)を先鋒にした、それらの文書を入手するための活動は、あっけない手詰まり状態に行き着いた。シッフ下院議員は、1947年にニューメキシコで起きたある空中物体の墜落に関するありとあらゆる資料を、GAO(General Accounting Office;会計検査院)を通じて要求した。GAO 代理人たちは調査を行なったが、シッフ下院議員に何の資料も提供することができなかった。

しかし、CIA(中央情報局)と FOIA(情報公開法)を通じた別の要求により、FBI(連邦捜査局)長官の 1950 年 3 月 22 日付の覚え書きを入手することができた。それには、ニューメキシコ州で 3 機の空飛ぶ円盤が回収された(書簡への言及)、と述べられている。また 1947 年 10 月と 11 月の 2 通の覚え書きには、米国で最近目撃された空飛ぶ円盤について、ライト地区で研究が行なわれていること、また風洞実験のための模型(複数)が建造中であることが述べられている。

ニューメキシコ州における墜落事件の調査により、地球外知性体(“EBEs”)に関する情報は絶えることがなくなった。それらは墜落の最中かその直後に絶命し、その遺体は 1940 年代終わり以来、ある秘密軍事基地から別の基地へと移送され続けているというものである。この話の筋に、生存中の目撃証人たちの証言や、死の床にあった近しい家族の告白を聞いた人々の証言 — 墜落現場で小さな人間ではない生命体が発見された、そのうちの一体以上は発見されたときにまだ生きていた — を合わせると、我々には少なくとも、再調査のために公開されたすべての資料を用いて綿密な科学的調査を行なうべき事件(複数)が残されている。

ソコロ着陸事件 — 1964 年: ニューメキシコ州ソコロの巡査部長ロニー・ザモラは、地上にあった 1 機の UFO を目撃したと報告した — この目撃には着陸痕と小さな人間の姿をした生命体が付随していた。事件は 1964 年 4 月 24 日に起き、空軍と FBI による公式調査に加え、他の研究者たちによる民間調査の対象にもなった。その中に J・アレン・ハイネック博士がいた。この事件は着陸痕と人間の姿をした生命体の目撃を含め、公式の空軍 UFO 記録に載った最初の報告である。⁵³⁾

勤務があったその日の日中、ザモラ巡査部長は黒いシボレー(*GM 社製自動車)を緊急追跡中だった。それがソコロ郡庁舎の前を高速で通過したのを彼が最初に見つけたのである。彼は町の外を走る高速 85 号線を北上しながらその車を追跡した。突然彼は爆発音と思われる音響に気をそらされた。青-オレンジ色の炎を見た彼は、より緊急性の高い事態が出来たために車の追跡を諦め、その地区にあるはずのダイナマイト小屋に向かった。道路が急な未舗装の砂利道だったので運転は困難だった。彼は炎が見えた地区に近づき、尾根に到達してゆっくりと西に向かった。1 個の輝く物体が目飛び込んできた。そこは道路から約 150 ないし 200 ヤードの場所で、最初ザモラは車が小峡谷に突っ込んで転覆しているのを見ているのだと思った。彼は 2 体の小さな人間に似た搭乗者を見た。伝えられるところでは、それらは白いつなぎ服(オーバーオール)を身に付けていたという。

午後 4 時 45 分頃、ザモラ巡査部長は本部に無線で自動車事故と思われるこの状況を報告し、調査のためにパトロールカーを離れると伝えた。ザモラによると、彼はその小峡谷を見下ろす見晴

らしのきく場所まで車を走らせた。ザモラの報告である：

現場に近づいたとき、私はそれを転覆した車だと思った--直立したような感じだった。何度か眺めるうちに、結局それは光沢のある物体であることが分かった。その物体はアルミのように見えた--それは苔を背景にして白っぽく、クロムメッキはされていなかった。ちょうどこのようなフットボールの形だ。二つのつなぎ服姿が見えた。⁵⁴⁾

53) Emenegger, Robert, UFO's Past, Present & Future, Ballentine, New York, 1974.

ザモラの話は続く。そのうちの一人が振り返って彼の車に気付いた。驚いたようだった。ザモラが手助けしようと思い近づいていくと、直ちに大きな音がし始めた。それは低い周波数の音で始まり、非常に大きな高い周波数の音へと変化し、それに炎が伴った。ザモラ巡査部長はフェンダーに足をぶつけ、眼鏡をはたき落としながら、急いで彼のパトロールカーに引き返した。音を発しているその物体は空中へと上昇し、彼から遠ざかっていった。ザモラの驚愕は大変なものだった。彼は腕で顔を覆いながらもその物体を見ようと顔を向けた。“かん高い金属的な音が聞こえ、次に完全な無音になった”とザモラは報告した。彼は直ちに警察本部に無線通報したが、ほとんど狂乱状態だった。同僚警察官のチャベス巡査部長が間もなく現場に到着した。彼はこう述べた：

私が到着したとき、ザモラは汗をかき、顔面は白...蒼白だった。私は物体があった場所に降りていった。茂みが数カ所焼け焦げているのに私は気付いた。地面に跡が認められた。その物体は四つの垂直な圧痕を地面に残していた。茂みがくすぶっていたが、それは触れても冷たく感じた。ロニーは何かを見たのだ - 証拠はまさにここにある。私が到着する前に、彼はその物体の側面に描かれていた記事を書き写していた。私はその場所を確保し、地元の軍当局に電話した。⁵⁵⁾

間もなくその場所は見物人、報道関係者、一人の FBI 捜査官、その他の人々によりいっぱいになった。天文学者の J・アレン・ハイネックは調査のために空路直ちに飛んできた。彼は実際にその後さらに 2 回この場所を訪れ、地元住民やザモラに聞き取り調査を行ない、彼らは信用できると表明した。この事件の FBI 主任調査官ヘクター・クインタニラ警部は次のように述べた。土壌と植物のサンプルが持ち帰られた。ライト-パターソン基地で分析と計測が行なわれ、徹底的な調査が実施された。それでもこの事件は官僚主義の中に埋没し、公式の結論は出されなかった。報道機関により軍の秘密実験機の可能性が取り沙汰されたが、そのすべてについても結論が出されなかった。ザモラ巡査部長は嘲笑と非難に曝されたために警察という職業を辞め、事件については口を閉ざさざるを得なかった。

ニューメキシコ州の非常に多くの信頼できる民間、警察、および軍の目撃証人たちは、まじめな科学的調査とそこで収集された証拠と資料の公開を強く求めている。

6.5 軍用機による遭遇－1951年

1951年2月9日、米国海軍125便は、アイスランドのケブラビークを出発してニューファンドランドのアルゼンチアにある海軍飛行場に向かった。そのパイロットは米国海軍予備軍大尉グラハム・E・ベシューンだった。彼は26年間現役として勤務した公開プロジェクトの目撃証人である。ベシューン大尉は当時メリーランド州に配属されていたが、ロッキードとアイスランド政府の秘密の会合に出席するために、ケブラビークに飛べと言われた3人の将校の一人だった。アイスランド人たちはアイスランド沖で正体不明の航空機が出没するので、米国部隊に保護を要請していた。彼らは秘密の実験機を見ているのだろうとベシューン大尉は推測した。だが彼の見解は海軍125便に搭乗中に変わった。

54) *Ibid*, p. 64

55) *Ibid*, p. 65

1951年2月10日の0055(00:55)、午前零時を回って間もなくだった。ベシューン大尉とその乗組員は未知の物体と遭遇したのだった。以下の報告はベシューン大尉自ら語ったものである：

私はアイスランドからニューファンドランドまでの飛行パイロットだった。沖に出て240マイル飛行したとき、私は40マイル彼方の水面に何かを見た。月の入りは1時間前だった。その海域には何も無いはずだった。私は航法士と副パイロットに、あれを見ろと言った。それは遠くにある都市のように見えた。水面上に光の模様があった－奇妙な模様だった。これは秘密の回収任務ではないかと私は考えた。20マイルまで近づいたとき、光は消えた。黄色の光輪が一つ水面に現れた。それは我々に向かって約20マイルを飛んできた。時速は約1,000マイルだった。それは我々の200フィート下方で停止した。私はそれにぼやけた形のドームがついているのを見た。私はそれが知性的に制御されていることを知った－それは我々を見るためにやってきた。その物体は約45Nの方角に約5マイル離れて留まった。それは我々を見ながら我々と一緒に飛行した。私の推定では、その大きさは直径300フィートだった。私の飛行機は機銃を装備していなかった。機内の磁気コンパスは回転した。この飛行機には31人の乗客が乗っており、その中には一人の海軍中佐と一人の精神科医がいた。私は後方に行き、その精神科医に、何か異常なものを目撃したかと訊いた。その中佐は我々が見たものを見たと言った。だが精神科医はこう言った。“ええ、あれは1機の空飛ぶ円盤でした。でもそんなものは存在しませんから私はそれを見ませんでした”

私は乗組員にそれを報告しないように言った。しかしそれはガンダーのレーダーにより捕捉されていた。我々はアイスランドで訊問された。我々の報告を受けたその米国海軍の面々の質問内容と態度から、彼らが以前にそこで物体を見ていたことは明らかだった。この出来事に関する報告書はライト-パターソン空軍基地で保管された。私は記録保管所でそれを1991年に見つけた。私はその報告書を全米大気現象調査委員会(National Investigations Committee on Aerial Phenomena; NICAP)からの手紙、議会へのキーホール報告(*Donald Edward Keyhoe; 1950年代のUFO研究者)、私が乗っていた飛行機の写

真とともに持っている。5人のパイロットすべてがその UFO を同じように描写している — その大きさ;それを包む光。我々が訊問された夜に任務に当たった一人の大尉は、彼らがそれをレーダーで追跡し、時速 1,800 マイルを超えていたと告げられていた。その 17 頁の報告書にレーダー報告は含まれていなかった — 私がついにその報告書を見つけたときそれは報告書から消えていた。レーダー報告はあの日確認されていたのだ。その物体の速度は推定で時速 1,000 マイルだった。他のパイロットたちは時速 1,000 から 1,500 マイルと推定していた。当時我々が持っていた最速戦闘機は時速 500 マイルを出すことができた。その当時ジェット機はなかった — 1951 年 2 月のことだ

この物体は流星ではなかった。それは常に飛行機と水面との間にあった。当時我々は広範な認識訓練を受けていた。我々には今日のような計器による支援がなかった。我々は星々を使って航行した。我々は飛行機で飛びながら、約 54 分の 1 秒で何かを識別した。我々は上空を飛行したので宇宙物理学者たちに情報を提供したのだ。我々は多くの目撃をしたが、これが文書化した唯一のものだ。⁵⁶⁾

56) Taped transcript from closed Disclosure Project witnesses' meeting, April 9, 1997, Washington, D.C.

ニューファンドランドのアルゼンチアに着くとすぐに、ベシューン大尉と彼の乗組員たちは海軍将校からその事件について訊問された。メリーランド州パタクセントリバー海軍飛行場艦隊後方支援航空団に保管されている 1951 年 2 月 10 日付けベシューン大尉の公式機密報告書の中で、彼はさらに詳しい経緯を述べている。その物体は、飛行機がアイスランド沖少なくとも 250 マイルに来たときに最初に見えた。ベシューンと副パイロットは、他の乗組員の注意をそれに向ける前に 4 から 5 分間それを観察していた。その物体が上昇し、推定時速 1,000 マイルで彼らに向かってきたとき、ベシューン大尉が最初に感じたのは、その空軍機が UFO と空中衝突するだろうということだった。UFO が飛行機に接近したとき、その形は少なくとも直径 300 フィートの円盤型だとはっきり認識することができた。その色は黄色から赤味がかかったオレンジ色に変化した。UFO が進路を反転させて航空機から飛び去り、水平線の向こうに消えたときには、3 倍の速度だった。⁵⁷⁾

125 便の他の乗組員たちも報告書を提出した。フレッド・W・キングドンは第二輸送指揮官を務めていたが、こう述べている。“私は肉眼で未確認物体の異常な目撃をした” キングドン大尉は右側の席(副パイロット)におり、ベシューン大尉は左側の席にいた。UFO が水面から上昇して飛行機に急接近したとき、キングドン大尉はそれを“とても大きく丸い形をし、黄色ないしオレンジ色に輝く輪がその外縁にあった”と述べている。その物体はきわめて近くにあったが、その正確な速度と形状を決定するのは難しかった。というのは、それは夜間に水面で観察されたからである。“しかしその速度は途方もなく、大きさは直径が少なくとも 200 から 300 フィートあった。その物体は私にとり十分に近く、それをはっきりと認識することができた” キングドンはこのように報告している。⁵⁸⁾

輸送指揮官の海軍中尉 A・L・ジョウンズは、一人の航法士が後方に来てその物体を指さしたとき、飛行機の客室にいた。彼はこう述べている:

私はそれを 1 分間見て、もっとよく見るために前方の操縦室に行った。操縦室に着くとすぐに私は飛行機の自動操縦を解除し、その物体を追跡するために機首を真方位 290N にとった。その物体は真方位 290N に向けてきわめて短時間に水平線の向こうに去った。その速度は時速約 1,500 マイル以上あったと思う。物体の直径は少なくとも 300 フィートだった。それを見た私の最初の印象は、縁を立てた巨大な燃えるようなオレンジ色の円盤。．．それが水平線の向こうに去ったとき、垂直の姿勢から水平の姿勢に移ったように思われた。後縁部のみが半月状に見えていた。⁵⁹⁾

航法士のノエル・J・P・コジャー大尉は、彼の報告書の中でこう記している。

キングドン大尉が、小さな村か船のようだと言いながら、相対方位約 60N または真方位 290N にあるオレンジ色の物体を指さした。我々がいる位置を考えたらそれは村ではなかった。私は約 30 秒間その物体を見ていたが、それは私にとり“北極光”の現象の一つに見えた。．．そのとき物体は突然輝きを増し、形を現しながらものすごい速度で我々の方角にやってきた。．．その物体が最もよく見えたとき、それは 1 個の丸い形をした明るいオレンジ色か赤色の円盤だった。その物体はとても速い、決定することもできない速度で接近してきた。⁶⁰⁾

この遭遇事件をまとめた空軍情報資料報告⁶¹⁾ は乗組員たちの目撃を要約しているが、その中でその物体を最初に見たのはベシューン大尉だと述べている。また 5 人の乗組員全員が北大西洋の空を飛んだことがあった。そして 5 人の目撃者全員が、述べられた事実を認めた。さらなる詳細はこの事件に関する公式政府文書を読みたい。それを公開プロジェクトは FOIA (情報公開法) 要求により入手した。これらは付録 I (文書 AI.4) にある。

57) Commander Bethune's original Memorandum Report U.S. Navy, 10 February 1951, Appendix I. (Documents AI.4)

58) Memorandum Report of F.W. Kingdon, Jr., LT, U.S. Navy, 10 February 1951 in Appendix I. (Documents AI.4)

59) Memorandum Report of A. L. Jones, LTJG, U.S. Navy, 10 February 1951 in Appendix I. (Documents AI.4)

60) Memorandum Report of Noel J. P. Koger, Lt. U.S. Navy, 10 February 1951 in Appendix I. (Documents AI.4).

61) See Air Intelligence Information Report in Appendix I. (Documents AI.4)

6.6 1952 年夏：首都ワシントンを含む多くの場所上空の UFO

UFO について最も頻繁に聞かれる修辭的疑問の一つがこれである：もし彼らが実在するなら、どうしてホワイトハウスの庭に降りてこないのか？実際に彼らは 1952 年 7 月の週末に、2 回続けてほとんどそれに近いことをしたのである。

1952 年の夏は UFO 目撃報告が最も多いときのひとつだった。東海岸と中西部の州から、数週間

にわたり、特筆すべき数の報告があった。情報機関員たちは、目撃の急増に対して大きな不安を募らせるようになった。特に関心を持たれたのは、これらの報告の多くが民間からのものだったことである。この運命の夏が始まる前は、目撃のほとんどが軍関係者からのもので、それは国民の目から隠されてきた。しかし今や、民間パイロットを含む一般の市民自身が情報源となったのだ。

1952年7月10日：バージニア州クワンチコ上空を飛行していた1機のナショナル・エアラインは、高度2,000フィートで1個の光体を観測した。乗務員によればその光体は大流星にしては動きが遅く、灯気球にしては速過ぎた。

1952年7月12日：インディアナ州デルファイの元空軍ジェットパイロットだったジャック・グリーンは、大勢の人々とともに高空に1個の青白い円盤型物体を目撃した。

1952年7月13日：インディアナポリスの市民数千人が、5,000フィートの高度で市の上空を急速に通過した、巨大な卵形物体を目撃した。多くの人々がそれを見て怖がった。イースタン・エアライン、空軍パイロット、そして自家用飛行機パイロットの3人全員が、操縦されていたその物体を見た。最初その高度はかなり高かったが、約5,000フィートまで降下し、インディアナポリスの上空を飛んだ。これは、少なくとも1940年代に始まったUFO目撃の時代において、数千人により目撃された最初の低高度目撃だった。それがインディアナ上空に出現する直前に、おそらく同じ物体 — 確かに同じ特徴を持っていた — がミズーリ州カークスビルにある空軍レーダーに捕捉されていた。推定によると、それは時速1,700マイルの速度で、B-36爆撃機ほどの大きさがあった。

1952年7月13日：ワシントンの南西60マイルを高度11,000フィートで飛行していた民間航空のパイロットと乗務員が、彼らの下方にある1個の光体に気付いた。その光体は彼らと同じ高度まで上昇し、飛行機の左舷側に数分間相対停止した。そしてパイロットが飛行機の着陸灯を点灯するや、急速に上昇していった。

1952年7月14日：ニューヨークからマイアミに向かって南下していたパンナム機は、バージニア州ニューポートニューズ近くで、輝くオレンジ色のUFOを見たと言った。（注：6機の円盤からなる最初の編隊がまず目撃された；最初の編隊が飛び去った後さらに2編隊が目撃された）その編隊が飛行機に接近したとき、先頭にいた円盤がその縁を軸にしてぐるりと向きを変えた。他のUFOも瞬時に同じ振る舞いをした。すべての円盤がひっくり返ったり向きを変えたりしながら、加速して飛び去った。

1952年7月17日：デンバー近くを飛行していたアメリカン・エアライン機が、前方に1機いるという警告の無線通報を受けた。ポール・カーペンター機長と乗務員は、推定時速3,000マイルで編隊飛行している4機の円盤を見た。

地上からの目撃：

1952年7月16日：ラングレー空軍基地では琥珀色の大きな光体が2個目撃されていた。二人の観測者のうちの一人は、大変尊敬されているラングレーの民間人科学者だった。それらの光体は真南に向きを変え、最初に目撃された位置に戻った。そして互いに場所を争うように動き回り、そ

れに第 3 の光体が合流した。そして上昇し始めたが、さらに数個の光体がそれに合流した — すべてが編隊を組んで飛行した。推定ではこのすべての現象は 3 分間続いた。

ホワイトハウスをかすめて飛ぶ UFO 群: 1952 年 7 月 19 日午後 11 時 40 分、ワシントンナショナル空港の複数のレーダー基地がアンドリュー空軍基地の東と南に 7 個の物体を捕捉した。アンドリュー空軍基地でもまた、彼らのレーダーでその目標を捉えていた。それが通常の飛行機でないことはすぐに判明した；これらの目標は時速 100 ないし 130 マイルで飛行し、突然ものすごい速度まで加速してその場を去った。一つの物体は時速 7,200 マイルと計測された。伝えられるところでは、その物体群はレーダースコープのあらゆる区画に現れた。その中にはホワイトハウスと国会議事堂上空の禁止空域を通過したものもあった。その物体群はその夜の間中、何度も戻ってきて、定期航空便のパイロットたち(午前零時と 2 時に)、航空管制塔操作員たち、そしてアンドリュー空軍基地から派遣されたジェット戦闘機パイロットたちにより目撃された。

エドワード・ルッペルトはこう書いている：

だが、決定的な出来事はその日の未明に起きた。ARTC(航空交通管制)の交通管制官がアンドリュー空軍基地の管制塔を呼び出し、ARTC で目標を 1 個捕捉したと告げた。それは彼らの管制塔の南、アンドリュー空軍基地航行無線局の真上にあるという通報だった。管制塔操作員たちは外に目を向けた。そこには 1 個の‘巨大な、燃えるようなオレンジ色の球体’が彼らの航行無線局の真上に滞空していた。⁶²⁾

どうやら空軍情報部は、その地区の他の人々と同様に、翌朝の新聞見出しを見るまではこの出来事について知らされなかったようだ：**首都ワシントン上空で迎撃機が空飛ぶ円盤を追跡。**ペンタゴンのある少佐でさえ、その出来事について知っていることはすべて新聞で読んだことだと、ブルーブック計画調査員エドワード・ルッペルトに語った。徹底的な調査が、今述べた少佐 — デューイ・フルネ — の指揮のもとに直ちに開始された。ワシントンナショナル空港の交通管制官たちは情報機関員たちに、彼らが観測した目標はレーダー波が何か堅い固体物体で跳ね返ったものだと語った。アンドリュー空軍基地の空軍レーダー操作員と 2 人の熟練パイロットもそれに同意した。

62) The Report on Unidentified Flying Saucers, Ruppelt, Edward J., Doubleday & Company, New York, 1956.

ワシントン上空の 2 回目の乱舞: 思いがけなくも、ワシントン上空での 2 回目の目撃多発現象は、7 日後のほぼ同じ時刻に起きた。その間の 7 日間は平穏とはほど遠いものだった：UFO 報告がオハイオ州デイトンのライト地区に毎日 30 から 40 件の割合で押し寄せた — 以前の 3 倍の数だった。エドワード・ルッペルトは“多くはワシントン事件に勝るとも劣らない目撃事件だった”と断言した。それらの報告の中で最も際だった正体不明の事例には、以下のものが含まれる：フロリダ州パトリック空軍基地の誘導ミサイル長距離性能試験場上空で目撃された琥珀色を帯びた赤い光体(複数)、テキサス州ユバルディの急速に移動する巨大で丸い銀色の回転物体；ニューメキシコ州ロスアラモス上空での軍用ジェット機による不成功に終わった UFO 追跡；マサチューセッツ州(2 例)、そしてニュージャージー州。

ある目撃事件がワシントン上空における2回目の目撃多発現象への先駆けとなった。7月26日夕方、赤い光を点滅させた円盤型物体が、フロリダ州キーウェスト海軍飛行場の上空に出現した。それは数百人の人々により目撃されたという。事件(複数)はそれから急速に東海岸を移動し、またもや国家の首都に集中していった。そこでは、午後9時頃からワシントン地区のレーダー操作員たちが、再びその前週の騒乱に似た‘国籍不明機’を捕捉していた。1時間もしないうちに常に4ないし5個のUFOがレーダー画面に現れるようになった。軍のジェット機が発進し、民間航空機は航路を変更した。ルッペルトによると、ワシントンナショナル空港の管制塔に集まった報道機関は退去を求められた。彼はこう書いている:

迎撃行動の手順は公開されないという理由で報道機関が退去させられたことを、後で私は知ったのだが、これは馬鹿げていた。というのは、有能なアマチュア無線家なら誰でも彼らの装置で迎撃の様子を聞き取れたからだ。私が知った報道機関が退去させられた本当の理由は、次のとおりだ。レーダー室にいた少なからぬ人々が、この夜がUFOの歴史上重要な夜になることを確信していた -- 今夜パイロットがUFOに肉薄してそれを十分に観察する -- そして彼らは報道機関がそれに参加することを望まなかった。⁶³⁾

一方、UFOの地球外知性体のパイロットたちは別の考えを持っていた。F-94ジェット機(複数)が発進したのは午前零時頃だったが、間もなくUFOはすべてレーダー画面から姿を消した。視程と天候がよかったにもかかわらず、パイロットたちは何も肉眼で確認することができなかった。ところが、後で分かったことだが、ラングレー空軍基地とその地区の市民たちは、空中に色彩を帯びた回転する光体(複数)を見ていた。そして -- 驚いたことに! -- 軍のジェット機がその場を去るや否や、UFO(複数)はワシントンのレーダー画面に再び忽然と姿を現したのである。1個の光体を肉眼で捉え、航空交通管制によりそれに誘導されたあるパイロットは、彼が接近するや否や、それは“まるで誰かが電球のスイッチを切ったように”消えたと報告した。そのパイロットにより短時間のレーダー自動追跡が行なわれた。⁶⁴⁾

彼らが接近している間はじっと静止し、次に急に飛び去るか姿を消す。こうして、UFOはF-94とゲームを続けた。UFOは日の出の時刻が近づき、ジェット機がほとんど燃料を使い果たすまで“できるもんなら捕まえてみる”を演じた。夜が明けると間もなくUFO(複数)は飛び去り、再び戻ってくることはなかった。今度もまたレーダー操作員たちは、目標(複数)の原因が固体で金属製の動く物体であり、気象の異常によるものではないことを確認した。再度、新聞の見出しはUFOを大きく取り上げた。ペンタゴンは大混乱に陥っていた。レーダー目標があった同じ地区で肉眼による目撃があったことを実証する新しいUFO報告が押し寄せ、混乱に拍車をかけた。これは、気まぐれな気象条件が偽のレーダー目標を生じさせたとする、ペンタゴンの作業仮説を裏付けるためには、ほとんど役立たなかった。そして、ワシントンにおけるこの乱舞が始まる前には、レーダーと肉眼の両方による追跡を示唆する報告はほとんどなかったのである。

今やどうしても国民に何かを語らなければならなかった。軍による下手な言い訳は、ペンタゴンに押し寄せる激しい抗議のうねりを止めることができなかった。抗議のうねりは、米国全土から寄せられるさらに重大な目撃報告、またおそらくロシアが関与しているのではないかという忍び寄る疑惑のために、一層激しくなった。研究家のドナルド・キーホーによると、空軍情報部長ジョン・A・サムフ

オード少将は、一般大衆の高まる動揺を鎮めるために、ペンタゴンが画策した幾つかの嘘の説明に取り組んだ。少将は落ち着き払い口舌滑らかに、事例の“20パーセント”は未解決であると認める一方で、円盤は奇妙な性質を持つ様々な自然現象であると片づけた。少将はさらに続けて、それが米国にとり何らかの脅威あるいは危険なものであることを示す傾向は少しも見られないと述べた。地球外宇宙機と訪問者たちが実在するという考えの誤りを暴き立てる情報操作が、新聞により米国全土に広められた。ドナルド・キーホーによると、報道機関がこのほら話を展開しているまさにそのときに、空軍は中西部の諸州で円盤を追跡するためにジェット機を発進させていたのである。キーホーはこう述べた。“もしある事件があつた夜に公表されていれば、事実と正反対の発表を台無しにし、捏造に基づく暴露計画を頓挫させていただこう。だが数週間が過ぎるまで私はこれを知らなかった”⁶⁵⁾ それにもかかわらず、あらゆる UFO 事件に対する否定 — そして嘲笑 — は今日まで続いている。

公開プロジェクトには、あの米国の首都で起きた上空通過事件を目撃した一人の生き証人がいる。そして、公開プロジェクトの非営利的な教育用資料である“入手できる最高の証拠”背景説明ビデオ(1997年)には、ホワイトハウスの真上をかすめて飛ぶ UFO 編隊のカラー写真が1枚含まれている。

63) Ibid, p. 164.

64) Flying Saucers from Outer Space, Keyhoe, Major Donald E., Henry Holt and Company, New York, 1953.

65) Ibid, p.88

6.7 戦略空軍基地上空を通過

1975 年は戦略空軍基地上空に未確認飛行物体が多く出現した“当たり年”だと考えられているが、重要な事件はもっと早くから起きていた。

公開プロジェクトの一人の目撃証人が、以下の報告を提供した：

私は 49 歳で、大学を卒業した傷病退役軍人だ。米国空軍に 1964 年から 1974 年まで勤務した。1967 年に私は異質な工学技術 (foreign technology) の直接目撃を 2 回経験し、また関連する少なくとも 2 回の事件を耳にした。

最初の ETV (地球外輸送機) の直接目撃は、1967 年 11 月に起きた。ノースダコタ州 (マイノット空軍基地) で、夜中の 22 時にミニットマン I サイト (*ミサイル発射サイト) に修理に向かう途中だった。我々の車両には二人の弾道ミサイル分析官、つまり私とその助手、それに一人の武装した保安兵の 3 人が乗っていた。その護衛官は“この辺りは恐ろしいほど静かだ”という意味のことを言った。“自分は今それを銃撃します、それはサイトの上空約 300 フィートにいる！”これを我々が聞いたとき、私は無線の四つのチャンネルを確認することを躊躇しなかった。

我々は直ちに脅迫状態 (duress condition)、つまり脅迫を受けている隊員を援助するために全員に応答を求める態勢に移行した。この出来事のすべては、おそらく 2、3 分の間に起きた。

発射管制戦闘班指揮官が近くのサイトにいた二人の保安兵に、その ETV を“撃つな”と命令しているのが聞こえた。我々はそのサイトの方角に向かった。そしてそこに1個の大きな輝く物体を見た。それは約 10 ないし 12 マイルの距離で赤／緑／青の光を点滅させていた。無線交信が飛び交っている中で、その物体は上昇を始めた。それは上昇し、真っすぐ上方に加速し、とてつもない速度に達した。そして迎撃機の F-102 か F-106 が頭上を通過したとき、その物体は見えなくなった。

その二人の保安兵は、保安システムに障害が発生したのでそのサイト(サイトは無人だった)を警護し、保守要員が修理に来るのを待っていたのだ。もし週末ならそれには 3, 4 日はかかったはずだ。事件が起きていたその時刻に、そのサイトかその近くには、他に脅迫状態信号に応答した 3 台の車両に乗った 6 人の保安兵(攻撃班)がいた。

保安兵の一人(その ETV を銃撃しようとした当人)が、私の班と一緒にその週の後日に保守巡回に出た。彼は 30 ないし 40 分かかって私に説得され、彼らの恐ろしい体験と事情聴取の詳細を私に語った。その二人の保安兵は、J・アレン・ハイネック博士とマイノット空軍基地に所属しない別の職員から事情聴取された。ハイネック博士は“この宇宙機は以前にも目撃された”と述べた。その保安兵によれば、彼と彼の班員はある空軍大佐から、起きたことを話題にしないように、またそれに従わなければ直ちにベトナムに送られると命令された。彼ら二人は恐ろしさで縮み上がった。

第二の事件は数週間後に起きた。夕暮れの少し前で、私は雪がちらつく中で低く垂れ込めた雲を見ていた。そのとき、一人の保安兵が空に見える“奇妙な月”のことを言った。

我々がミニットマンサイトを修理していた場所の真上に、月の大きさの物体が、月と同じ色で“雲の下”にあった。私は“月”を報告するために、直ちに 8 ないし 10 マイル離れた発射管制施設(LCF)を呼んだ。その保安要員たちもその物体を観察中であり、マイノット空軍基地の飛行隊保安管理部(WSC)にそれを報告したということだった。

私とその物体を観察し LCF(発射管制施設)と話している間に、その物体はゆっくりと雲の中に退却し、姿を消した。私は他にもノースダコタ州マイノット空軍基地で起きた幾つかの事件 — 信頼できる二つの事例 — そしてミネソタ州ダールズ空軍基地で起きた事例(複数)について情報を持っている。⁶⁶⁾

1970 年代

モンタナ州マルムストローム空軍基地

NORAD(北米防空軍)第 24 地区上級部長テレンス・C・ジェームズ大佐は、1975 年 11 月の複数日にわたり発生した複数回のマルムストローム空軍基地上空通過事件について、報告書⁶⁷⁾を提出した。ここにそれを引用する:

1975 年 11 月 7 日(1035Z)⁶⁸⁾(*グリニッジ平均時 10:35, 現地時刻 03:35)

第 341 戦略空軍指揮所(SAC CP)から以下の電話連絡があった。次のミサイルサイトから 1 個の大きな赤、またはオレンジ、または黄色の物体が見えるとの報告があった: M-1, L-3, LIMA, および L-6. 物体のおよその位置はモンタナ州ムーアの南 10 マイル、同バッファローの東 20 マイル。指揮官と作戦副官(DO)に通報。

1975年11月7日(1203Z)(*現地時刻 05:03)

SAC(戦略空軍)から以下の通報があった。モンタナ州ハーロートンの LFC(発射管制施設)で1個の物体を目撃した。物体は光線を発射し、サイトの道路を照射した。

1975年11月7日(1319Z)(*現地時刻 06:19)

SAC(戦略空軍)から以下の通報があった。K-1で東側のとても輝く物体が今南東側にあり、隊員たちが10×50の双眼鏡で観察している。物体に(幾つかの)照明があるように見える。配列ははっきりしない。頭上にあるオレンジ/金色の物体にも小さな照明(複数)がある。またSACの通報によると、女性の市民がルイスタウンの西6マイルにある彼女の場所から南に1個の物体を見た。

1975年11月7日(1327Z)(*現地時刻 06:27)

L-1から以下の報告があった。北東にある物体が筒型の黒い物体を1個放出しているように見える。この間中レーダー監視官は確認された航空機以外の物体を検出していない。(強調は編者による)

1975年11月7日(1355Z)(*現地時刻 06:55, 日の出は 07:17 頃)

L-1とK-1から、夜明けが近づくとともに視認中の物体が上昇を始めたと言った報告が入る。

1975年11月7日(1429Z)(*現地時刻 07:29)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報: 太陽が昇ったらそれらのUFOは消えた。指揮官と作戦副官(DO)に通報。

1975年11月8日(0635Z)(*現地時刻 11月7日 23:35)

K-4の野営保安隊から、白色照明(複数)とその後方50ヤードに1個の赤色照明を持つUFOの報告があった。K-1でも同じ物体を見ている。

1975年11月8日(0753Z)(*現地時刻 00:53)

航跡J330 不明 07:53. 静止/7ノットで移動/高度12,000フィート。1個(7個まで変化)。他現象の可能性なし, EKL3746, 2機のF-106, グレートフォールズより緊急発進 07:45. NCOC(*NORAD Combat Operation Center; NORAD 戦闘作戦センター)に通報。

[戦闘機(複数)が迎撃のために緊急発進したことに留意せよ - 編者]

66) Private correspondence to Steven M. Greer, M.D. and author, February 1997.

67) See original report in Appendix I. (Document AI.5)

68) Refers to time of sighting in Zulu (military) time.

1975年11月8日(0820Z)(*現地時刻 01:20)

レーダーより消失, 08:25 に戦闘機が作戦を打ち切る, 航跡 J331(別の高度監視レーダ

ーによる捕捉)領域を搜索.

[戦闘機(複数)は確かにUFO(複数)をレーダーで捕捉していたことに留意せよ]

1975年11月8日(0905Z)(*現地時刻02:05)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報: L サイト(複数)では戦闘機(複数)と物体(複数)を確認; 戦闘機は物体の撃墜に成功しなかった.

[注: L サイトはミニットマン大陸間弾道ミサイル発射サイトを意味する]

1975年11月8日(0915Z)(*現地時刻02:15)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報: 4カ所の地点: 物体(複数)と戦闘機(複数)を確認; 戦闘機がそこに到達すると照明(複数)が消えた; 戦闘機がそこを去ると照明がついた; NCOC(NORAD 戦闘作戦センター)へ.

1975年11月8日(0953Z)(*現地時刻02:53)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報: L-5 から以下の報告があった. 物体が速度を上げ - 高速, 高度を上げ, 今や背景の星々と区別がつかない. NCOC(NORAD 戦闘作戦センター)へ.

1975年11月9日(0305Z)(*現地時刻11月8日20:05)

SAC CP(戦略空軍指揮所)がUFOを観測中のサイトL-1, L-6, およびM-1のSAC隊員に電話通報した. 物体は黄色がかった輝く丸い光体で, ハーロートンの北20マイル, 高度2,000ないし4,000フィート.

1975年11月9日(0320Z)(*現地時刻11月8日20:20)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの報告. UFOがルイスタウンの南東20マイルにある. オレンジ色がかった白い円盤型物体. NORAD第24地区レーダー監視区域. レーダー監視官は高度を確認できない.

1975年11月9日(0320Z)(*現地時刻11月8日20:20)

FAA(連邦航空局)監視管理官から以下の報告があった. UFOの近くに5機の輸送機を確認, ユナイテッド157便から“アーク溶接の青”色をした流星を見ているとの報告があった. SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報, サイト(複数)では静止物体をなお観察中.

1975年11月9日(0348Z)(*現地時刻11月8日20:48)

SAC CP(戦略空軍指揮所)が確認, L-1で物体を目撃, 移動保安隊がそれに近づき報告するように指示されている.

1975年11月9日(0629Z)(*現地時刻11月8日23:29)

SAC CP(戦略空軍指揮所)から03:05頃のUFO目撃について通報があった. サイトL-1からの小隊保安隊中止, 区域を点検, すべて正常, その後目撃はない.

1975年11月10日(0125Z)(*現地時刻11月9日18:25)

SAC CP(戦略空軍指揮所)から以下の電話があった。サイト K-1 からハーロートン地区周辺で目撃された UFO の報告があった。レーダー監視官が高度監視レーダーで地区を捜査中。

1975 年 11 月 10 日 (0153Z) (*現地時刻 11 月 9 日 18:53)

レーダー監視官から、K-1 から目撃された UFO に該当する航跡を検出できないとの報告があった。

1975 年 11 月 10 日 (1125Z) (*現地時刻 11 月 10 日 04:25)

マイノット空軍基地から以下の UFO 目撃報告があった。明るい星に似た 1 個の物体が西にある。東に向かって移動しており、車ほどの大きさがある。最初の日撃は 1015Z(*現地時刻 03:15)頃。1120Z(*現地時刻 03:20)頃、その物体はレーダー基地上空を通過した。高度 1,000 から 2,000 フィート、音は聞こえなかった。サイトまたは地元民の 3 人がその物体を目撃した。NCOC(NORAD 戦闘作戦センター)に通報。[強調は追加]

1975 年 11 月 12 日 (0230Z) (*現地時刻 11 月 11 日 19:30)

K-1 から以下の UFO 報告があった。1 個の赤色照明を持つ物体がビッグ・スノーウィー山地(Big Snowy Mountains)上空の高い高度にある。オヘイム(Opheim)からレーダー捕捉を試みている。オヘイムでは 120N から 140N を探査している。

1975 年 11 月 12 日 (0248Z) (*現地時刻 11 月 11 日 19:48)

同じ地区に 2 個目の UFO が出現したとの報告があった。それは断続的に光線を地面に照射しているように見えた。0250Z(*現地時刻 11 月 11 日 19:50)に物体は消えた。[強調は追加]

1975 年 11 月 12 日 (0251Z) (*現地時刻 11 月 11 日 19:51)

両方の物体が消えたとの報告があった。これらはレーダーで捕捉されなかった。

注: 1 週間後にもう一つ別の事件が報告された。

1975 年 11 月 19 日 (1327Z) (*現地時刻 11 月 19 日 06:27)

SAC(戦略空軍)指揮所から以下の報告があった。UFO が FSC(Flight Security Controller;小隊保安管理官)と厨房員により目撃された。物体は M-8 と M-1 の間を高速で北東に向かっていて。明るい白色光の物体は地面から 200 フィートの高度で地形に沿って移動し、45 ないし 50 秒間目撃された。物体はジェット機の着陸灯の 2 ないし 3 倍の明るさがあった。

NORAD 司令官の 1975 年秋の日誌⁶⁹⁾(付録を見よ)からの抜粋は、他の多くの SAC(戦略空軍)および空軍基地における数々の目撃報告を日付順に記録している:

1975 年 10 月 29 日

1 機の“正体不明ヘリコプター”がメイン州ローリング空軍基地の軍需品倉庫地区に 2 夜

続けて着陸した。カナダの空軍基地(複数)上空を通過した1機の“ヘリコプター”についての未確認情報がある。ローリング空軍基地も11月1日の“ヘリコプターと推定される物体の上空通過”について、別の報告書を提出した。

1975年10月31日

ワートスミス空軍基地(ミシガン州)は、SAC(戦略空軍)武器庫地区上空に空中静止していた1機の“ヘリコプター”について報告した。1機の空中給油機が肉眼で追跡し、レーダーの“機体反射信号”も受信した。同機はこの物体をヒューロン湖(*五大湖の一つ)上空まで追跡した。

1975年11月8日

この記入事項には、モンタナ州マルムストローム空軍基地上空およびその近傍を飛行した最初の“正体不明機(複数)”の詳細な記述があり、パイロットたちが肉眼とレーダーで追跡したと述べられている。UFOはジェット戦闘機(複数)がそれらに向かっているときには照明を消し、F-106(複数)がその場を去ると再び照明をつけ、戦闘機をかわした。

1975年11月10日

1個の輝く、車ほどの大きさの無音物体がノースダコタ州マイノット空軍基地上空をかすめて飛んだ。

1975年11月12-25日

ミネソタ州、バージニア州、オンタリオ州、およびカリフォルニア州メンドシノ郡の一般市民から、様々な種類のUFO目撃が報告された。その中には葉巻型、ダイヤモンド型、ボールの中のカップ(cup-in-a-bowl)型、回転光体、光球、点滅する照明を持つ卵形、および火球が含まれる。

1980年代中頃(推定)には、データベース要覧(*Directory of Databases*)に機密分類のNORAD正体不明機追跡システム⁷⁰⁾が記載された。その中に1971年にデータベースが始まって以来の北米およびその近傍における7,000の正体不明機事件が登録されている。

69) See original report in Appendix I. (Document AI.6)

70) See page describing the database in Appendix I. (Document AI.7)

ニューメキシコ州

ワシントンD.C.の国家軍事指揮センター(National Military Command Center; NMCC)は、1976年1月21日付の一つの報告書⁷¹⁾を発表した。それにはニューメキシコ州キャノン空軍基地上空で起きたある事件に関する空軍戦闘作戦センターからの情報が述べられている:

ニューメキシコ州キャノン空軍基地の駐機場近くで2個のUFOが報告されている。それらを目撃した保安警察官によると、UFOは直径25ヤード、色は金または銀、頂部に青色照明、中央

部に穴があり、底部には赤色照明があった。空軍がレーダー探査と同時に気象逆転データも調べている。

メリーランド州

国家軍事指揮センター(NMCC)は、1976年7月30日付でもう一つの報告書⁷²⁾を発表した。これはメリーランド州フォートリッチー周辺で7月30日未明に起きた幾つかのUFO報告を詳細に述べたものである。一般市民が目撃報告を電話通報した後で、別々の二つの軍警察パトロール隊が、ある軍需品倉庫上空のとても低い高度(100から200フィート)に空中静止していた3個の赤い、楕円形円筒を目撃したと述べた。それとは別に、この二つのパトロール隊による報告の約50分後、一人の陸軍警察巡查部長が車で仕事に向かう途中、その同じ場所の上空に1個のUFOを見たと言った。興味深いことに、この報告書の最後の段落は、これらの目撃を飽和湿度下での気温逆転で説明しようと試みている。

全体として見ると、ここで詳しく述べた一連の報告は、米国軍がUFO情報の収集に関与していたことを反駁できないまでに示している。これらの報告は確かにすべてを包括するものではない。しかし、1969年にブルーブック計画が、地球外知性体とその宇宙機の主題に対する軍の関心に終止符を打ったとされる結論を出した後も、米国軍が実際にUFOに関心を持ち、確実に目撃を調査していたことは明らかである。

6.8 イラン上空の軍用機による追跡—1976年

UFO事件を記録した最高の政府文書の一つに挙げられるのが、1976年9月にイランのテヘランとその上空で起きた驚くべき事件である。この話を追跡調査した米国政府の公式文書⁷³⁾が、在テヘラン米国大使館の国防担当大使館員により執筆されていた時点で、国防情報局(DIA)、ホワイトハウス、中央情報局(CIA)、国家安全保障局(NSA)、統合参謀本部、空軍長官、国防長官、および国務長官に配布された。⁷⁴⁾

1976年9月19日午前零時半、イラン帝国空軍はテヘランのシェミラン地区住民たちから電話を受けた。住民たちは“空中の奇妙な物体(複数)”について報告した。何人かはそれを鳥のようだと言い、また点灯したヘリコプターだと言う者もいた。指揮所はその時刻にヘリコプターは飛んでいないことを知っていたので、住民たちに空の星を見ているのだと伝えた。指揮所はメフラバード空港管制塔に問い合わせた。そして間もなく、彼は自分の目で1個の大きな、明るい星のような物体を目撃することになったのである。午前1:30に1機のF-4ジェット機がシャフロキ空軍基地から緊急発進し、調査に向かった。

71) See original report in Appendix I. (Document AI.8)

72) See original report in Appendix I. (Document AI.9)

73) Note two versions of the report showing different degrees of censorship when the documents were released. Appendix I. (Documents AI.10)

74) This event was later summarized in a confidential document by Captain H. Shields. Appendix I.

F-4 が緊急発進: パイロットは、物体はとても明るく、70 マイル離れても容易に視認できると報告してきた。それはテヘランの北およそ 40 マイルにあった。イラン帝国空軍 (IIAF) パイロットはその異常な航空機を追跡した。その正体不明物体から 25 海里の地点で、パイロットは突然 UHF (極超短波)、内部通話装置、および計器類が使えなくなった。パイロットが UFO を離れてシャフロキ空軍基地に機首を向けたとき、突然にまた通信機能が回復した。次々と明らかになる奇妙な出来事のために、2 機目の F-4 が派遣された。後部席のパイロットは 27 海里の距離で UFO をレーダー捕捉した。その F-4 が物体から 25 マイル以内に入ったとき、UFO はジェット機との距離を 25 マイルに保ち、速度を上げて飛び去った。

UFO 表面の色光: 政府の公式報告書 (複数) には、この話の追跡調査結果がまとめられている。米国空軍フランク・B・マッケンジー大佐が書いた報告書によると、F-4 パイロットたちはレーダー画面上で、その物体の大きさを 707 空中給油機と同程度と見たが、UFO の強烈な輝きのために肉眼での推定は難しかったと述べた。それでもパイロットたちは青、緑、赤、オレンジ色の矩形ストロボライト (複数) が閃光を発する様子を述べる事ができた。閃光の反復は大変速く、4 色すべてが同時に見られたと報告書は述べている。

物体の中に物体が: 事件は進むにつれてさらに奇妙さを増していった。F-4 がテヘランの南で UFO を追跡していたとき、最初の目標から 2 番目の物体が飛び出した。それは明るく輝き、大きさは月の 2 分の 1 から 3 分の 1 と推定された。2 番目の物体は F-4 に向かって急接近してきた。この時点でこの F-4 パイロットは、UFO に向けて AIM-9 ミサイル (*サイドワインダー短距離空対空ミサイル) を発射しようとした。その瞬間、彼の攻撃制御盤はすべて電源が切れ、またもや通信機能が失われた。パイロットはその UFO を回避するために、極度の急降下を行なった。彼がその行動をとったとき、その UFO は推定 3 ないし 4 海里の距離で F-4 を追って降下した。パイロットが機体を旋回させると、その 2 番目の物体はその旋回半径の内側に現れた。次にそれは最初の UFO へと引き返し、再び完全に合体した。そしてほとんど時を移さず、別の物体が最初の UFO の反対側から飛び出した。それは途方もない速度で地表に向かった。F-4 の通信と攻撃システムの機能はこのときになって再び正常に戻った。

UFO は着陸した: F-4 パイロットたちは急降下していった UFO を見ながら、それが地表に激突し大爆発を起こすだろうと考えた。驚いたことに、その UFO は何の衝突も起こさずに地表にふわりと着陸したように見えた。さらにその物体は、2 ないし 3 キロメートル (優に 1 マイルを超える) 先まで延びる強烈に明るい光を放った。

さらなる通信障害: そのイラン空軍機 F-4 は降下を始めた。その一方でパイロットたちは着陸した UFO から目を離さず、その場所に注目し続けた。彼らはジェット機を着陸させるまで何度か試みる必要があった。彼らがある磁針方位を通過するたびに通信不能になり、機内の計器盤が激しく振られた。さらに、その近くにいた 1 機の民間航空機もまた通信障害を報告してきた。しかし UFO を目撃したとの報告はなかった。F-4 がシャフロキ空軍基地への最後の着陸進入を行なっている間に、そのイラン帝国空軍 (IIAF) パイロットたちは、もう一つの物体を目撃した - 今度のは円筒型で、

両端に点滅しない明るい照明があり、中央部には 1 個の点滅する照明があった。管制塔は、その空域に確認されている他の航空機はいないと報告してきた。その円筒型 UFO が F-4 の上を通過したとき、パイロットたちは管制塔にその物体がいる空域を伝えた。そして管制塔は肉眼でそれを捉えることができた。

追跡調査：翌日、その F-4 パイロットたちは、彼らが見た UFO の着陸地点にヘリコプターで連れていかれた。そこは干上がった湖底であることが分かった。ヘリコプターに搭載された機器類は、その湖底の真上と周辺で強烈な警告信号を記録した。最も強い信号は 1 軒の小さな家屋付近から来ていた。ヘリコプターは着陸し、その住人たちは軍の職員から前夜に起きたことを訊かれた。その家族によると、彼らは大きな音を聞き、稲妻に似たとても輝く光を見た。さらに残留放射能の有無の調査も行なわれたようだ。放射能検査とその他の事後調査結果の記録を我々は入手していないが、この事件が衛星により確認されていたことは注目すべきである。衛星追跡番号(複数)が公開プロジェクトのトニー・クラドック氏から入手可能である。

6.9 英国空軍／米国空軍ベントウォーターズーウッドブリッジー1980年12月

これまで軍により報告され、情報公開法に基づいて入手した文書がある最も重要な接近遭遇の一つは、英国にある米英合同 NATO 空軍基地で起きた、複数の目撃証人がいる事件である。基地の副司令官だったチャールズ・I・ハルト中佐(後に大佐に昇進)は、現場で目撃したことを詳細なメモに残した。それが米国の研究者たちに公開されたことで、事件当時に作成された調査報告書(複数)の信頼性が著しく高められることになった。このハルト・メモには、最初の事件が“1980年12月27日未明(0300L頃)”⁷⁵⁾に起きたと書かれている。ここは重要な点である。1994年9月、遭遇事件に居合わせた保安兵の一人ジェームズ・ペニストン軍曹が、その事件について自ら進んで逆行催眠を受けた。彼によれば、政府職員(複数)によって事件の数日後に行なわれた逆行催眠においてさえ、目撃証人たちの話は、内容は同じだが日付が異なったという。⁷⁶⁾ 報告書により日付が異なるのはこれで説明がつくかもしれない。一般には、1980年12月26日早朝に最初の事件が起きたとされている。

RAF(英国空軍)／USAF(米国空軍)ウッドブリッジ基地は、英国サフォーク州イプスウィッチの東 8 マイルにあり、もう一つの RAF ベントウォーターズ NATO 空軍基地とともに双子基地を形成している。ウッドブリッジ基地に滑走路はあったが、主要な建物と部署はすべてベントウォーターズにあった。第二次大戦中、この双子基地はドイツ戦線のための整備基地として機能した。ハーキュリーズ輸送機と大型ヘリコプターがここを本拠地にしていた。そこは完全な米国基地で、隊員のほとんどが米国人であり、英国人はわずかな人数の飛行隊指揮官だけだった。⁷⁷⁾ 基地の周りを広大で密生したレンドルシャムの森が取り囲んでいた。

接近遭遇

1980年のクリスマス休暇の週末、2夜続けてベントウォーターズとウッドブリッジ双子基地で驚くべき接近遭遇が起きた。まず森の外にある近くの居住地で目撃された1機のUFOは、1980年12月26日午前2:30にベントウォーターズ空軍基地に面した森の中に着陸した。最初にそれはパトロ

ール中の二人の兵士により目撃された。彼らは最初灯台からの光を見ているのだと考え、次に“ライトオールズ(投光機)” – 夜間の作戦行動に用いる事実上夜を昼に変える大きな可搬型の明るい照明 – かもしれないと推測した。彼らが注視している間に、その空中に浮かぶ光体は木の梢より低い高さまで降下した。兵士たちは、おそらく飛行機がベントウォーターズ基地の滑走路に墜落したのだと考えた。二人は本部に無線通報した。3人の救助保安兵が派遣され、その結果、この最初の二人組はこの後に起きた遭遇に居合わせる機会を失った。救助保安兵のうち二人はジープで、次には徒歩で UFO を追って森の中を進んだ。この二人の兵士によれば、それは形がやや三角形で、明るい白の機体の周囲に青、白、赤の照明があった。兵士たちが UFO が見える所まで来たとき、それは地面のすぐ上に浮かんでいたり、あるいは着陸ギアで地面に着地していた。兵士の一人が間近に迫ったとき、それは上昇し、ゆっくりと漂った。次にそれは森に明るい光を照射しながら、目も眩むような速度で真上に急上昇し、家畜の牛にパニックを引き起こした。この出来事に二人の兵士は呆然となった。調査隊がまだ放心状態の二人を発見したのは、ほぼ1時間後だった。警察が呼ばれた；空港のレーダー管制官に連絡がとられた。ヒースロー空港は、ベントウォーターズ基地近くで消えたレーダー目標を報告し、英国南部の全域から空中の輝く光体(複数)についての報告が続々と寄せられた。事件が起きた時刻にレンドルシャムの上空には、1機の航空機もいなかったことが確認された。

75) Official Department of the Air Force memorandum by Lt. Col. Charles I. Halt, 13 January 1981.

Appendix I (Document AI.12)

76) Howe, Linda Moulton, *Glimpses of Other Realities, Volume II: High Strangeness*. Paper Chase Press, New Orleans, 1998. 478 pp.

77) Randles, Jenny, Out of the Blue, Global, 1991, Berkley Books, New York, 1993.

さらなる遭遇(複数)が翌日の夜に続いて起きた。何人かの軍関係者が、人間が建造したいかなる装置もなし得ない振る舞いをする UFO(複数)を見た。それは形や大きさをも変化させた。

26日の真夜中近くに、4人のチームが前夜 UFO がやってきて着陸したレンドルシャムの森の区域を調査するために向かった。間もなく、彼らはとても異様な光のカーテンを目撃した。その下には靄(もや)か霧がかかっていた。兵士たちが近づくと、そこには1個の構造を持った物体があった。その形は明瞭でなかったが、黄色、赤色、青色の照明がその表面にあった。その多色模様の物体は後退したが、強い静電気が空気中に満ちており、髪の毛が逆立った。兵士たちはベントウォーターズ基地の副司令官ハルト中佐に無線連絡をした。彼は、動かずにそこで待て、増援隊を送ると告げた。

ハルト中佐と約30名の兵士が到着し、ライトオールズ(投光機)を設置し始めた。それは最初うまく機能しなかった。ハルト中佐は携帯用テープレコーダーに逐一状況を吹き込み、前夜 UFO が着陸した区域の上昇した放射能レベルを記録した。その地面には三つの圧痕が三角形に残されており、周囲の木々に熱を浴びた形跡があるのを暗視望遠鏡で見ることができた。

午前2:00少し前、ハルト中佐と兵士たちは、地上に1個の黄色-赤色の光体を見た。それは隣接する農場の家畜を怖がらせていた。突然、その光体は上昇し、それ自身複数の色光を放ちながら、

彼らに向かって滑空してきた。他の隊員たちは、その光体が地面の上にある霧状の広がりへと合体し、その中で爆縮(implode)したのを見た。とてつもない閃光が起こり、その霧は1個の固体の物体に姿を変えた。それはドームを持った蛍光を発する円盤で、青い光で縁取られていた。その機体の青く光る部分は、眩いばかりの色光の粒子を地面に降らせていた。伝えられるところでは、二人の別の軍人がこの物体の写真(複数)を撮ったという。その機体は上昇し、その縁の周囲にさらに鮮烈な光の現象を見せた。それは兵士たちの目の前で空中静止し、小刻みに揺れた。UFO が飛び去ったとき、最大で5個の光り輝く物体が別々に目撃された。

皆はウッドブリッジ上空を飛び越えて海に向かう物体群を注視した。海でそれらの物体は長い時間ショーを演じた。色光を放ちながら、半月形になったり完全な円形になったりした。しかし、遭遇は再び迫っていた。UFO の1機が光線を下に照射しながら、森を越えて彼らに急接近してきた。二人の兵士がそれぞれに詳しく報告したところでは、一つの無定型光体が、樹幹を透かして光線を放ちながら木々の間を縫って飛来し、彼らの頭上で超新星のように爆発したかに見えた。その夜の信じ難い出来事は、さらにこの後4時間以上も続いた。⁷⁸⁾

78) Details in this narrative taken from *Out of the Blue* by Jenny Randles, and NBC-TV television program *Unsolved Mysteries*, first air date, September 18, 1991.

一般市民の目撃者たち

最初の目撃者は、レンドルシャムの森の向こう側にあるサドボーン村に住むゴードン・レベットだった。レベットは、夜になったので犬を家に入れようと外に出ていた。1個の巨大なキノコ型をした輝く物体が海の方から漂ってきて、レベットと彼の大型番犬の頭上に無音で静止した。彼の犬は身震いし始め、翌日になってもこの出来事を終日怖がっていた。英国の UFO 研究者ジェニー・ランドルズとの面談において、レベットは次のように回想した：

何かの力で私の注意は空に向けられた。私にそうさせたものが何なのかは分からない。だが私は海岸の上空に一つの形を見た。それは私に向かってきた。私の犬もそれを見たが、犬の目はそれに釘付けになった。... その物体がとても低い高度まで降下し空中静止したとき、それは奇妙な燐光を発して輝いた。... その物体は森を横切って RAF ウッドブリッジ基地に向かって飛び去った。... 翌日私の犬はまだ動転していた。犬は小屋から出てこようとせず、体を震わせずくんでいた。犬のこの振る舞いはまったく普通ではなかった。⁷⁹⁾

第2夜目の出来事は、軍ではない市民たちにより、基地の外でそれぞれ別々に目撃された。アーサー・スメークルは午後 11:00 頃、レンドルシャムの森を通過して車で帰宅する途中、上空に多数の光体を見た。彼は帰宅してからそれを話したが、空軍基地に近かったので、それはおそらく航空機だろうと言われた。ウェブ家の人々は、マートルシャムの自宅に車で向かう途中の午前 2:30(このときは12月27日になっている)、空中に光体群の巨大な白い塊があるのを全員が見た。彼らは道路の脇に車を止め、それを注視した。それは無音で空中静止し、やがて途方もない速度で砲弾のように大空を飛び去った。その地区の何人かの農場主もまた、英国捜査当局の面談を受けたり報告書を提出したりした。一人の農場主は基地に呼ばれ、UFO がベントウォーターズ基地内に飛

来する直前、空中に輝く光体(複数)を見たと報告した。

森林警備隊員ジェームズ・ブラウンリーは、翌月に森の中で着陸の物理的痕跡を見つけた。ハルト中佐による公式の政府メモは作成後2年半公開されなかったが、ブラウンリーの1981年1月の報告には、樹冠に開いた1カ所の穴、焼け焦げた木々、地面上の異様な跡を見つけたことが述べられている。これらはハルト中佐が英国国防省と米空軍に公式に報告した内容と符合する。⁸⁰⁾

ハルト中佐による報告書は、第2夜目の遭遇を以下のように詳しく述べている：

夜遅く、赤い太陽のような1個の光体が、木々の間を通して見えた。それは動き回り、脈動した。ある時点でそれは輝く粒子を放出しているように見えた。それから5個の別々の白い物体に分離し、消えた。その直後、空に3個の星に似た物体があるのに気付いた。2個は北側、1個は南側にあった。それらの全部が地平線の上約10度(*仰角)にあった。それらの物体は急角度で素早い動きをし、赤色、緑色、青色の光を発した。北側の物体(複数)は8-12拡大鏡で見ると楕円形に見えた。それらは次に完全な円形になった。北側の物体は1時間かそれ以上そこにあった。南側の物体は2ないし3時間見えており、時折下に向けて一筋の光線を放射した。署名者も含め多数の人々が、段落2と3にある活動(複数)を目撃した。⁸¹⁾

79) Ibid, p. 73.

80) Ibid, p. 75.

81) Official Department of the Air Force memorandum by Lt. Col. Charles I. Halt, 13 January 1981.

これを書いている1997年時点でハルト大佐は、軍事史において最も顕著で記録に残されたUFO遭遇の一つを目撃した、存命中の軍司令官である。この事件はさらなる調査の対象であり続けている。たとえば、ジョージナ・ブルーニ⁸²⁾が書いた最近の本は、全編をベントウォーターズ事件に充てており、これまで多くの著者が述べてきたよりもはるかに広範囲の目撃者一覧を掲載している。

6.10 日本航空機による遭遇(1986年)

1986年11月17日、寺内謙寿機長はB-747貨物機の操縦桿を握っていた。二人体制の乗務員は副パイロットと航空機関士だった。寺内機長は1986年には29年間の経験を持つ熟練パイロットだった。1628便はアイランドのレイキャビク、アラスカのアンカレッジを経由して東京に向かう途上にあった。その日の夕方6:00頃、同機はカナダ/アラスカ国境を越えつつあり、乗務員たちはアンカレッジへの着陸準備をしていた。アラスカ標準時午後6:19に、寺内機長はアンカレッジ航空路交通管制センターに交通情報の提供を要求した。航空交通管制官のカール・ヘンリーは自分のレーダーを確認し、近くに他の航空機はいないと機長に告げた。寺内機長の応答は、1628便と同一高度12時の方角に、接近して1個の照明をつけた飛行物体があり、同機を追跡あるいは尾行しているというものだった。寺内機長は、上下の高度にもいないか確認してくれと言うヘンリー管制官の要求に対して、必要ないと答えた。物体の高度は同機と同じだったと機長は後に語った。ヘンリー管

管制官はエルメンドルフ空軍基地レーダーに問い合わせた。そして彼らが寺内機長の報告と同じ位置に、機体反射像(primary target)を捕捉していることを知った。ヘンリー管制官と 1628 便の間で交信が頻繁に交わされている間に、ヘンリー管制官自身が JL1628 便が報告した同じ空域に機体反射像を捕捉した。寺内機長は旋回と航路変更を要求して許可された。機長はヘンリー管制官に、その物体が 747 機の右側に付けて飛行していると報告した。

ある時点で、寺内機長は同機をその物体と平行にするために、右 360 度の旋回を要求して許可された。そのとき物体は視界に入っていなかった。寺内機長が元の航路に戻ったとき、その物体はまるで彼らを待っていたかのように、そこにいた。これは同機長が後に FAA(米連邦航空局)に対して述べたことである。ヘンリー管制官は、探知範囲内にあったユナイテッド航空機と軍用機 C-130 に対しても誘導を行っていた。どのパイロットも何も捕捉していなかった。ただし、このときは寺内機長もその UFO を肉眼では見失っていた。

この出来事が続いている間にヘンリー管制官は、3 種類の暫定レーダー像(tentative radar target)を観測した。ヘンリー管制官が寺内機長にその物体の様子を訊いたとき、同機長は、その物体には何の模様も認められず、どんな種類の航空機かも分からないと述べた。快晴で一片の雲もない条件下で、寺内機長はこの未確認機の表面に白色と黄色の閃光が見えると述べた。目撃が起きている間中、747 機搭載のカラーレーダーにより、同機と物体との間の距離が測定された。それは 5 から 7 海里あった。

寺内機長と乗務員たちは、アンカレッジに着陸すると直ちに FAA のジャック・ライト⁸³⁾により面談と事情聴取を受けた。事情聴取の中で寺内機長は、自分自身に今回のようなことが起きたのは初めてだと述べた。寺内機長による事件の説明は、次のようだった。高度 35,000 フィートでカナダ／アラスカ国境を越えると、すぐに 1 個の物体が同機の 5 から 7 海里前方に現れた。それは時には B-747 よりも大きく、4 個か 5 個の照明が並んでいた。時折複数の UFO が見られた。目撃は 1 時間近く続いた--FAA 報告書によれば 55 分間だった。

機長と乗務員たちは少し動揺していたが、FAA(米連邦航空局)は彼らが専門家であり理性を持っていたと断定した。

82) Bruni, Georgina. You can't tell the people ? The definitive account of the Ranelsham Forest UFO mystery, Sidgwick and Jackson, 2000, 449 pp.

83) Incident and interview report by Jack Wright (FAA) in Appendix I. (Documents AI.13).

ティモシー・グッドが彼の書 *Above Top Secret* の中で説明しているところでは、寺内機長はその出来事を通常の言葉では説明できないとし、それらの物体が素早く移動したり停止したりする様子から、それは地球外起源であるかもしれないと語った。機長は、彼らがフランスワインを日本に運ぶ途中であったとしたうえで、“たぶん彼らはそれを飲みたかったのだろう”と感想を述べた。⁸⁴⁾

この事例については、航空交通管制官カール・E・ヘンリー⁸⁵⁾による身上書と AAL-1 所長のフランクリン・L・カニングムによる警戒報告書(Alert Report)⁸⁶⁾も読みたい。

6.11 英国における 1990 年代の目撃多発現象－三角形飛行物体その他

空飛ぶ三角形物体－巨大で、無音で、低高度－飛行速度は遅いが、とてつもない速度にまで加速できる。我々がこれらの物体について知り始めたのは、1990 年に始まったベルギー上空における目撃多発現象のときだった。公開プロジェクトは現場での直接調査 (real-time research) を行なうために、最初の調査チームの活動を 1992 年 3 月に開始した。⁸⁷⁾ 2,000 を超える目撃事例がベルギーで収集された。それらの多くは警察と軍の関係者によるものだった。⁸⁸⁾ 実に、この三角形物体は民間と軍の双方のレーダーにより追跡され、従来のいかなる航空機、あるいは実験機をもはるかに凌ぐ振る舞いと速度を示した。⁸⁹⁾

1992 年、UFO の活動がスコットランドで急増した。エジンバラとグラスゴーに挟まれた町々や谷間に腰を据えたかのように、目撃報告が定期的に寄せられるようになった。ボニーブリッジという特定の町が、この目撃多発の中心地と思われた。人口約 5,500 人の結び付きの強いこの共同体で、若者も老人も同じように、三角形物体を含む様々な飛行物体について数多くの目撃情報を寄せた。ボニーブリッジの議員ビル・ブキャナンは、1996 年 8 月にこう述べた。“私の知る限り、過去数年間に 3,000 人の人々がこの空で何か異常なものを見ている。…名乗り出ることを恐れている人々はさらに多いかもしれない”⁹⁰⁾

この多発現象が始まって数年間、目撃のほとんどは、しばしば回転したり操縦されているように振る舞ったりする光球、あるいは黒い円盤だった。1990 年代中頃になると、三角形物体の目撃がしばしば報告されるようになった。フォールカーク町のマルコム家が率いるスカイサーチ・スコットランド (Skysearch Scotland) という調査グループは、報告のみならず、三角形に配列された光体群、光球、および黒い三角形の空中静止物体と思われるビデオ映像を収集し始めた。目撃者たちは、これらの物体が海に飛び込んだり、海から出現したりする現象を報告した。ボニーブリッジ地区住民の何人かは、第 5 種接近遭遇すなわち人々と物体が相互作用 (交信) をした体験について詳しく語った。アーマデル町の一人の青年は、雷雨の間に空から急に降りてきた、35 ないし 40 フィートの棒状物体について語った。それは生け垣の木の上を低空で飛び、青年の車の真上を通過して原野で停止した。その目撃者の報告によると、“それは無音で空中静止し、地面から約 15 フィート離れて、ただそこにあった。私は車から出て、もっとよく見るためにハロゲン灯をそれに向けた。すぐにその球が切れた。それから車のヘッドライトが消えた。私は車のエンジンをかけようとしたが、かからなかった。突然、その物体は跳び上がり、車の頭上を越えて信じ難い速度で、もと来た方角へ飛び去った”⁹¹⁾ この目撃者は携帯無線電話で警察を呼んだ。しかし、それは目撃が起きてから 1 時間後のことだった。この青年は失われた 1 時間について説明することができない。彼の車が牽引されて町に戻ったとき、その電気系統は完全に機能を回復した。

84) Good, Timothy, *Above Top Secret*, William Morrow, New York, 1988, p. 432.

85) Personnel Statements - Federal Aviation Administration by C. Henley in Appendix I. (Documents AI.14).

86) Alert Report by Franklin L. Cunningham, Director, AAL-1 in Appendix I. (Documents AI.15).

87) Greer, Steven M. UFOs over Belgium, Chapter 30 in: *Extraterrestrial Contact: The Evidence and*

Implications, Crossing Point, Inc. Publications, Afton, VA 1999.

88) US Department of Defense report of Belgium sightings in Appendix I. (Document AI.16).

89) Paris Match article includes photos of radar screen sighting of UFO in Appendix I. (Document AI.17).

90) Daily Mail, (London) Weekend section, August 3, 1996.

91) Ibid

1994 年になって、巨大な三角形飛行物体の目撃事例が、英国から相次いで寄せられるようになった。報告の大部分は、ミッドランド地方と北部からのものだった。しかし、その幾つかはイングランド南西部から寄せられた。どの事件も著しい類似点を持っていた。肉眼で目撃した人々は、夜空に溶け込んだ暗色あるいは黒い三角形飛行物体を報告した。しばしばその物体の三つの頂点にはそれぞれ 1 個の照明があり、中心部には別の種類の照明があった。この巨大物体(複数)は、低空を低速度で飛んだ。それらはまったくの無音か、微かにブーンという音を発した。

1996 年の夏、ある家族が日曜日の夕暮れ時、帰宅するためにイングランド南西部のグラストンベリーに向かっていた。突然、運転手 - 父親 - は車に速度を合わせている暗い、無音の物体に気付いた。家族全員が、彼らの頭上を低空で飛んでいる 1 機の巨大な三角形飛行物体を目撃した。短時間の目撃の後、その物体はそのまま消えた。⁹²⁾ 1996 年 10 月と 11 月、黒い三角形飛行物体の特筆すべき目撃多発現象が英国で発生した。その中には西ウェールズ・カーディガン湾地区の目撃多発地点も含まれていた。そこではこの 2 ヶ月間に数え切れないほどの目撃が起きていた。

1996 年 8 月のサンデータイムズ誌 (ロンドン) に掲載された 2 本の記事は、三角形飛行物体は米国空軍と NASA (航空宇宙局) により 1996 年 8 月に公表された実験機であることが確認されたと報じた。それらの記事では、1995 年に 747 型民間機との異常接近が起き、政府が秘密を明かしたのだと推測している。カリフォルニア州とネバダ州で目撃された“空飛ぶドリトス”(*三角形コーンチップのスナック菓子)と呼ばれる三角翼実験機の噂は 1995 年から広まっていた。もちろん、これは正式名称ではないだろう。サンデータイムズ誌によれば、“波乗り(wave-rider)”航空機が 1950 年代に英国の科学者テレンス・ノンワイラーにより提唱された。記事はその航空機の仕様を述べる--時速 3,000 マイルを超える速度が可能; 空気の‘波に乗る’; 低速飛行と地面に近い低高度で浮遊あるいは空中静止することが可能 (“LoFlyte”実験機と呼ばれる)。記事はさらに航空電子工学専門家の次の言葉を引用している。三角翼はレーダーで追跡されない。またその複雑な操縦のすべてを人間のパイロットが行なうことは不可能なので、コンピュータがこの航空機を‘飛ばす’。⁹³⁾

巨大な三角形飛行物体の謎はほとんど解明されていない。目撃報告は今日に至るも世界中から寄せられている。これらの三角形飛行物体の数百に上る最近の目撃事例を、全米 UFO 報告センター (NUFORC; www.msatech.com/nuforc/index.html) で見ることができる。

6.12 メキシコでの目撃多発現象 - 1991 年以後

1991 年の日食は、メキシコシティーでは皆既日食だった。多くの人々が屋外で観測し、ビデオに

撮った。彼らが大変驚いたことに、日食とともに映像に捉えられていたものが、前例のない UFO 目撃多発現象の先駆けとなった。それは 1991 年以來、これを書いている 1997 年まで、少しも衰えないで続いている。

日食の当日、四つの都市の 17 人の人々が、同一物体と思われる何かをビデオに撮った：1 個の銀色円盤で、その厚ぼったい形から“ホッケーパック(hockey puck)”のあだ名を付けられた。あるテープはテレビ局の重役によって撮られ、また別のテープは牧師によって撮られた； 実に、この広大なメキシコの大地に広がる多くの都市の様々な職業の人々により撮影されたのである。テープはジェーム・マウサン宛ての郵便物に入れられて届き始めた。彼はメキシコ版“60 Minutes(シックスティミニッツ)”(*1968 年から CBS で放映されている報道特集)の司会を務めている。マウサン氏は、この現象の綿密で徹底的な調査を開始した。彼は番組のゲストとしてビデオを撮った多くの人々を出演させた。彼の調査には広範囲に及ぶコンピュータ分析も含まれた。その結果明らかになったことは、同じ型の UFO、あるいは“ovni”とメキシコで呼ばれている物体が、すべてのテープに捉えられており、そのどれもが、その背後の大気を歪ませているように見えるということだった。これらの特徴は、その 7 月の日に撮られたそれぞれのテープに認められた。調査が進められ、恒星、惑星、および気球は、それを説明し得る原因から除外された。時は流れたが、物体はテープに撮られてマウサン氏を含む研究者たちに送られ続けた。多くの ovni(UFO)が、メキシコシティ空港で発着するジェット機の近くで撮影された。パイロットや航空管制官たちによる肉眼での目撃もしばしばあった；しかし、物体(複数)はレーダーには映らなかった。ovni が近くにいたとき、計器類が突然一時的に機能しなくなったというパイロットからの報告が幾つかあった。航空機の安全に対する懸念があった。しかし幸いにも、危険な目にあった経験は誰にもなかった。

1991 年のメキシコ目撃多発現象と関連する興味深い事例は、同日に 4,000 マイル離れた場所からやってきた。同一物体と思われるものが日本の雲仙岳でビデオに撮られた。実際に、メキシコの四つの都市で撮られたビデオを、日本で撮られた物体映像とともに分割画面表示すると、その違いを見つけるのは不可能である。日食時に起きたメキシコ目撃多発現象のすべてを、手の込んだほら話だと主張する人々は、地球の反対側で同一の物体が同時に目撃された事実の説明に窮するだろう。さらにマウサン氏には、1991 年以來 3,000 を超える‘ホッケーパック’UFO のビデオが、巨大な三角形飛行物体のそれとともに送られてきている。

92) Personal correspondence, The Disclosure Project.

93) The Sunday Times, London, August 11, 1996, as reported by Greg Little, Alternate Perceptions magazine, Issue #36, Fall 1996.

6.13 バルジニャでの出来事ーブラジルで地球外生物を捕獲？

ブラジル・ベロオリゾンテ市のビットリオ・パカッチーニ氏から提供された情報

1996 年 1 月 20 日、ブラジルで軍が地球外生物と思われる生物(複数)ー まだ生存していたー を捕獲した。事件は、ブラジル中心部ミナス・ゲライス州のバルジニャ市に隣接する地区で起き

た。この出来事はブラジル、そしておそらく全世界でこれまで記録された最も重要なものの一つと考えられる。軍当局は、その作戦の詳細について口を閉ざしたままである。しかし、ビットリオ・パカッチーニ教授とウビラハラ・ロドリゲスの調査により、その情報は UFO 研究界の間に漏れた。二人は近くに住んでおり、真面目で熱心な研究者だと考えられている。彼らがこの事例の調査に費やした時間は 3,000 時間を超えた。

1 月 20 日の午後、現地時刻の午後 3:30 頃だったが、リアン、バルキリア、カティアという名前の 3 人の女性が町の外側を歩いていた。彼女たちは、家から数ブロックしか離れていない野原の端の小さな茂みで、1 体の奇妙で小さな生物に遭遇した。その日は土曜日で、彼女たちは仕事から帰宅する途中だった。ある空き地を横切っているとき、彼女たちの注意は、ほんの数メートル離れた所にいるとても奇妙な生物に引きつけられた。その ET は膝を曲げており、怪我をして痛みを苦しんでいるように見えた。そのとき、UFO は目撃されていなかった。彼女たちは数分間その生物を観察し、それから逃げた。今偶然に出会ったのは悪魔かもしれないと思い、怖かったのである。

この 3 人の女性は、上記の研究者たちにより広範囲に及ぶ質問を受け、起きたことについては少しの疑念も残さなかった。とても素朴な彼女たちは、その生物が暗い色をし、身長 4 から 5 フィートの小さな身体を持っていたと説明した。それにはまったく髪の毛が無く、茶色の大きな頭部と小さな首があった。顔には二つの目 — 大きくて赤い — があり、瞳は見えなかった。口の位置には細長い切れ目があり、鼻はとても小さかった。そして、興味深いことには、ちょうど額の頂部に三つの隆起があった。彼女たちはその隆起を角(つ)と表現した。これこそ悪魔に出会ったと彼女たちを怖がらせた原因だった。

これらの情報をもとに、パカッチーニとロドリゲスの二人の研究者は、バルジニヤの町周辺のあらゆる場所で、誰か他に同じ生物を見た人はいないか、調査を始めた。彼らは、同じ場所で生物と軍の作戦を見た人、また別の場所でおそらく別の生物(複数)を見た人など、数人の目撃者を見つけ出した。調査を進めるうちにこの二人の研究者が知ったことは、まさにその日の朝に、彼女たちが遭遇した場所から数ブロック離れた所で、陸軍のトラックと他の軍用車両を見た別の目撃者がいたことだった。

軍が何をしていたのかを突き止めようとしていたパカッチーニとロドリゲスは、数人の兵士と軍曹に会うことになった。兵士の一人が、軍の任務について匿名で話すことを決心し、内密の録音された面談に応じた。その軍人は次のことを確認した。1 月 20 日午前 9:00 頃、軍からバルジニヤ消防署に、ハルディム・アンデレ地区で珍しい動物を 1 匹捕まえて欲しいという電話があった。これに対処したのは、マシエル少佐の指揮下にあったファルアレス軍曹、兵士のニバルド、ルーベンス伍長、および兵士のサントスだった。伝えられるところによると、マシエル少佐もそこにいたという。現場に着くと、その消防署員たちは、これが珍しい動物などではないことを知り、バルジニヤから約 10 マイル離れて隣接するトレス・コラソンイス市にある陸軍軍曹学校(ESA)に知らせるべきだと悟った。軍曹学校から来るのに要すると思われた時間よりも早く、陸軍のトラックが現場に現れた。消防署員たちは、ESA の上層部もまた事件については知らされていたのだと理解した。

その生物は、野生動物を捕獲するときに普段用いる網や他の道具を使って捕獲された。まだ生きていたその生物は、1 メートル四方の木箱に入れられた。それは耐久性のある布で覆われ、この

事件のすべてがトラックに積み込まれた。その生物は箱の中に体を丸めて入れられ、網でくるまれていた。目撃者によれば、それは蜂に似たブンブンという音を発していた。トラックは ESA(軍曹学校)に向かった。ワンダレイ中佐からこれに関わった全員に対して、これは秘密作戦であり、事件のことは誰にも話さないようにとの命令が出された。興味深いことに、ワンダレイ中佐の専門分野は原子-生物-化学戦争だった。その当時 ESA には将軍が一人いたにもかかわらず、彼がその作戦を指揮した理由は、たぶんそれだったのだろう。

警察官のマルコ・チェレセはその生物 1 体の捕獲に関わった。彼は無防備にその生命体に触った。彼は 2 週間後に全身感染で死亡した。彼の家族はパカッチーニ氏に、彼の最後の血液検査結果を見せた。そこには、彼の血液中に未知の毒性物質が 8 パーセント含まれていると記されていた。パカッチーニ氏によると、バルジニヤ警察署はずっと長い間、チェレセ氏が 1996 年 1 月 20 日には出勤さえしていなかったことを証明しようとしてきた。しかしチェレセの家族は、当日の夜に彼は確かに勤務に出ていたこと、また彼が着るものを取り替えるために一時帰宅し、任務で遅くまで仕事があるから夕食には戻れないと言ったことを確証した。

最初の兵士がパカッチーニとロドリゲスによる録音された面談に応じた後、他の何人かの軍関係者が、身元を公表しないという条件で、事件について話すために名乗り出た。名乗り出た全員が内密の録音された面談に応じた。その全員が確証したことは、おそらくその日の午後 3 人の女性によって目撃された 2 体目の生物が、陸軍、消防署、および警察の秘密調査部から来た職員らによって、同じ日の夜に捕獲されたということだった。パカッチーニとロドリゲスによる調査活動にもかかわらず、回収作戦の詳細について多くは知られていない。

最初の生物と同種の 2 体目の生物は、生きたままバルジニヤの地域病院に運ばれた。その地域病院で数時間を過ごした後、その生物はもっと設備の整ったウマニタス病院に移送された。二日後の 1 月 22 日午後、その生物 — もう死んでいたが — を ESA に運び去るために、大規模でうまく偽装された作戦が展開された。

その地域病院の看護婦と関係者数人が、事件後暫くは口を閉ざされていたが、幾つかの事実を確証した。その生物を見たウマニタス病院の職員全員が、家族を含め誰ともそれについて話さないように、また特に報道機関と UFO 研究家を避けるように警告された。

その移送作戦に関わった軍関係者で、内密の面談に応じた何人かが語ったところでは、3 台の陸軍トラックが使われ、それぞれに 2 人一組のチームが乗った。彼らの推測では、おそらく地球外生物と思われる 1 体の遺骸を運び去るために 3 台のトラックが使われた。そして、実際にその生物の遺骸を運んでいるのが誰なのか、トラックの運転チーム自身が知らないようにした。ブラジルの研究者たちは、この事件の後でこれらの事実を突き止めている。運転チームは病院そのものからは外に出されていたが、作戦の詳細を目撃した。ブラジルの S-2 — 陸軍内部の情報部 — から来た部員たちが、その遺骸を病院内部から運び出し、それを木箱の中に横たえてトラックの 1 台に乗せる任務を担当した。

3 台のトラックのすべてが ESA(陸軍軍曹学校)に戻った。翌朝 4:00 に、それらのトラックはサンパウロ州カンピナスにある別の軍施設に向かった。200 マイルの行程だった。そこで、その遺骸は

ブラジルでも最高の機関の一つであるカンピナス大学に移送された。その遺骸はフォルトナート・バダン・パルアレス博士により検死解剖に付された。彼はブラジルで発見された有名なドイツ・ナチスのメンゲレの遺体を検死解剖したとき、当代最高の法医学者の一人として世界的な名声を得た人である。しかし、パルアレス博士は、1996年1月に発見された生物の検視解剖に参加したことを、公然と否定したままである。

バルジニャ事件から1年経って、もう一人の目撃証人が名乗り出た — ジョーオ・バスコ・マノエルである。彼はパカッチーニ氏に電話をしてきた。彼（パカッチーニ）とロドリゲス氏は彼（バスコ）に会い、話を聞いた。彼は最初の捕獲を単独で目撃していた。1月20日の10:45頃、バスコ氏は家々を回って魚を売り歩いて、その場所にいた。そのとき彼の注意を引いたのは、1台の消防車と消防隊員たちだった。しかし火事の様子はなかった。彼は身を隠してその出来事を注視した。彼は6人の消防隊員が茂みから慌ただしく出てくるのを見た。その後から4人の隊員が大きな手袋をはめて出てきたが、彼らは網でくるまれた生物を囲むようにして運んでいた。その生物はトラックに乗せられ、彼らは走り去った。バスコ氏は、周囲に鼻をつくアンモニアに似た臭いが充満しているのに気付いた。バスコ氏は記者会見で自分が見たことを公表し、少なくとも消防隊員のうちの二人は確認できたと述べた。当局がこの話を否定したために、これは混乱を引き起こすことになった。バスコ氏は記者会見の後、威嚇され脅迫を受けた。脅迫事件の後で、パカッチーニ氏は彼に会うために多大な時間を費やした。バスコ氏は結局ミナス・ゲライス州から引っ越していった。

ブラジルのメディアは、事件について大々的に報道した。国民の大多数は、事件が現実に起きたと考えているが、軍と行政当局は事実について堅く沈黙を守っている。研究者のパカッチーニとロドリゲスは、この捕獲に関わった警察官たちがその後異動し、昇進した事実を突き止めている。事件後暫くの間、バルジニャがあるミナス・ゲライス州南部の地域では、これまで記録された最大のUFO目撃多発現象の一つに見舞われた。その中には、近距離からの巨大UFO目撃報告（複数）、および報道された住民たちとの接触（複数）が含まれる。この事件はウォールストリートジャーナル・ヨーロッパ⁹⁴⁾の第1面で報道された。ただし、記事の扱いはきわめて皮肉を込めたもので、4.1節で論じた主要メディアの報道姿勢を示すよい例となっている。

94) Moffett, Matt, The Wall Street Journal Europe, July 1, 1996

6.14 アリゾナでの目撃—1997年3月

1997年3月13日、複数の飛行物体が、アリゾナ州南部の広い範囲を横切って移動した。数千人が目撃し、多くの人々によりビデオに撮られ、軍と政府が声明を出したこの10年間で最大のUFO事件は、報道で大きく取り上げられ、世界中の注目を集めた。

ワシントン州シアトルにある全米UFO報告センター（NUFORC）⁹⁵⁾に第1報が入ったのは、3月13日の午後8:16だった。アリゾナ州フェニックスの北60マイルにあるポールデンの退役警察官が、5個の赤い光体が一団となって南に向かったと電話をしてきた。2分もしないうちに、ポールデンの南15マイルにあるプレスコットから別の報告が舞い込んだ。この後、ウィッケンバーグからテンピに

かけた地域から、多くの報告が堰を切ったように流れ込んだ。センターが受ける報告についてはまず疑う、と自ら認めているセンター所長のピーター・ダベンポートは、こう述べた：“アリゾナ上空の出来事は、私がこれまで見た最も劇的なものだ。．．我々がここで経験していることは現実である。彼らはここにきているのだ”⁹⁶⁾

空中の物体群が、フェニックス・スカイハーバー空港に至る航空路(複数)を越えてやってくると、複数の民間パイロットから管制塔に、光体の確認を求める無線が入った。航空管制官はその答を持っていなかった。彼らはそれらの物体を肉眼で見ることができたが、説明のつかない何物もレーダー画面に現れていなかった。

3月13日が過ぎて行なわれた調査により、電話での報告者たちが、テレビ局やラジオ局ばかりでなく、警察署の電話回線にも殺到したことが分かった。フェニックスに近いルーク空軍基地にも、州都大フェニックスの上空を南へ移動する物体群を見たと報告する電話が押し寄せた。大フェニックス上空の物体群の速度は、多くの目撃者の推定によると、時速30マイルというゆっくりしたものだった。このことは、物体群は目撃され、ビデオに撮られることを確かに意図していたことを示唆する。

様々な種類のUFOが報告された：三角形、直線状に並んだ光体、V字型あるいはデルタ型編隊の球体、実際に三角形の機体を持った1個の物体。多くの目撃者によれば、光体群は内部から発光していたようだったという — それらはとても明るかったが、輝いたり光を放ったりはしなかった。近距離でそれらを見たほとんどの人々は、光体群はオレンジ色ないし赤色の縁と中心を持つ白色だったと述べた。目撃者の何人かは、光体の編隊の背後にぼんやりとした暗い影を認めることができた。それはゆっくりと通過するとき、星々を歪ませたり覆い隠したりした。公開プロジェクトの代表と調査部長は、自宅からその光体群をはっきり見たという退役空軍パイロットと3月14日の晩に話をした。彼はケアフリーに住んでいる。そこはフェニックスの北にあり、市内よりもはるかに光の汚染が少ない。彼の説明では、その光体群は無音かつ動きがゆっくりで、編隊を崩さなかった。彼によれば、これは空軍パイロットだったときに彼が空中で目撃したどんなものとも似ていなかった。

すべての目撃者の一致した意見では、目撃された編隊の形はともかく、光体あるいは物体はとも動きがゆっくりで、きわめて巨大で、無音だった。物体の大きさは900フィートから1マイルを超えると推定された。目撃者たちが撮ったビデオをテンピ市のブレッジ研究所がコンピュータ分析した結果は、全長が6,000フィートだったことを示した — 優に1マイルを超える。

USAトゥデー紙のリチャード・プライスは、1997年6月18日の紙面に、目撃してから自分はすっかり変わったと述べたビル・グレイナーとの面談記事を掲載した。グレイナー氏は懐疑論者から、彼が言うところの“驚いたが、あまり怖くなかった”(*USAトゥデー紙の記事ではTim Leyの発言)ものを目撃した人になった。セメント車の運転手であるグレイナー氏は、フェニックスの北の山からセメント荷を運んで降りてきたとき、白色、オレンジ色、赤色をした2個のUFOを見た。それらの頂部は回転していたと彼は語った。グレイナーは、その球体の一つがそこから移動してルーク空軍基地上空を飛んだのを目撃した。彼は、3機のF-16戦闘機がUFOに向かって発進したと述べた。それらのジェット機が近づくと、そのUFOは真上に砲弾のように急上昇し、見えなくなった。グレイナー氏の言葉である：“それは常軌を逸していた。パイロットたちも確かにそれを見た。あの基地の連中に同じ真似はできない。何なら全国テレビに出て嘘発見器のテストを受けてもよい。．．政府はあり

のままを認めればよい。それは 50,000 人の人間にスタジアムでフットボールの試合を見せながら、我々はそこにいなかったと誰かに言わせるようなものだ”

95) Website at: www.msatech.com/nuforc/index.html

96) Richard Price, Arizonans say the truth about UFO is out there. USA Today newspaper article, June 18, 1997, p. 4A. See reprint of the whole article in Appendix (Document AI.18).

ビレッジ研究所のジム・ディレットソと共同運営者のマイケル・タナーが、一般市民からのビデオテープを解析して分かったことは、別々の 4 編隊または物体群が、1997 年 3 月 13 日の晩に、北から南へ移動したということだった。この地域を横断した物体群の通過は 106 分間続いた。その光体群は一様で、その広がりから端から端まで光の明るさも強度も同じだった。そして輝かなかった。それらは航空機の照明でも、ホログラムでも、レーザーあるいは軍の照明弾でもないとは断定された。ビデオに映っているフェニックス市の夜景と比較すると、UFO (複数) の特異性がよく分かる。

アリゾナ州南部の住民たちは興味をそそられ、正体を知りたいが、行政と軍当局からの説明を期待した。様々な軍関係者からの報告では、その光体群は国家警備隊の対抗機動演習で使用した照明弾だとされた。しかし、国家警備隊は 1997 年 3 月 13 日に数千人のアリゾナ住民により目撃された光体群を発生させることはできず、その意図もなく、そうしなかったことが、調査により明らかになったとディレットソ氏は述べた。ルーク空軍基地から飛び立ったジェット機は、あの夜にフェニックスの上空にいたが、基地の広報担当官は報道機関に対し、ジェット機の照明ではあの目撃 (複数) を説明できないと断言した。

地元住民の世論の高まりを受け、フェニックス市の女性市議員フランセス・バローズが、誰か公式の調査を行なっているかと市議会で質問を提起した。住民たちはすぐさま彼女の意見に飛びつき、彼女を政府に対する彼らの“公式の”窓口とした。女性市議員バローズは、自分自身でその物体群を見てはいないと言ったが、彼女の選挙区民の多くが見ていた。彼女が調査についての質問を提起したことを住民とメディアが知ると、今や中心となる一人の公的な代理人を持った説明を求める住民たちから、何百という電話を受けることになった。

しかし、市議会、市長事務所、知事事務所、および上院議員ジョン・マケインは、何らの公的行動をも起こさせることができなかった。上院議員マケインは、それを空軍に委ねた。空軍は 1997 年 6 月に、事件について調査するつもりはないと声明を出し、地元の管轄に戻した。そして、もちろんこれは、空軍が 1969 年にブルーブック計画を終了させ、公式に UFO の調査から手を引いて以来、空軍がとり続けている立場だっただろう。

2 年後に、上記の全米 UFO 報告センター (NUFORC) は、目撃が発生して以来収集してきた相当量の証拠に基づき、そのウェブサイト⁹⁷⁾ で特別最新報告書を公表した。その最新報告書は、物体の大きさ、外見、および動きのすべてについて、それ以前の報告書の内容を立証した。フェニックス・スカイハーバー空港で地上にいた航空管制官とある民間航空機乗務員による目撃および報告とは対照的に、“ルーク空軍基地の高官たちは、彼らは事件のことは何も知らず、事件について一般市民から基地に寄せられた報告は何もなかったと述べた”(目撃事件が起きた翌日の声明)。

基地への電話であることが明らかな長距離電話の料金請求書は、これらの高官たちの声明と矛盾する。ついに、ルーク空軍基地に駐在する隊員だと身分を明かした一人の目撃者が、次のように報告した。空軍は基地から2機の戦闘機を発進させた。そして、“そのうちの1機がインディアン・スクール道と7番大通りの交差点上空で、1個の巨大物体を‘迎撃’した”

この大変よく記録に残された出来事を分析し、互いに矛盾する諸報告から真実を選び分けることが2年経った今でも困難であるのは、驚くにあたらない。1997年3月のこの重要な日の謎を解く新たな手掛かりの探究は、研究者、分析専門家、メディア、そしてアリゾナとそれを越えた地域に住む何千人もの人々の興味の対象であり続けている。

97) Report at: www.msatech.com/nuforc/phoenix.html

6.15 イリノイ州セントクレアでの2000年1月の目撃

さらに最近の目撃で、よく記録に残され、複数の目撃者がいる事件の一つは、ミズーリ州セントルイスのすぐ東にあるイリノイ州セントクレアで2000年1月5日未明に起きた。この目撃事件は、NUFORC (National UFO Reporting Center; 全米 UFO 報告センター)⁹⁸⁾、MUFON (Mutual UFO Network; 相互 UFO ネットワーク)⁹⁹⁾、および NIDS (The National Institute for Discovery Science; 全米発見科学研究所)¹⁰⁰⁾ を含む幾つかの機関により研究され、後に記録映画¹⁰¹⁾ が放送された。その映画には、様々な目撃者全員の報告に基づく素晴らしいコンピュータシミュレーション映像が含まれている。以下の要約は、この出来事に関する NUFORC 報告¹⁰²⁾ から引用である。

“2000年1月5日水曜日、全米 UFO 報告センターに2本の電話連絡が入った(太平洋標準時 03:16, 03:51)。発信人はイリノイ州セントクレア郡レバノン警察署に勤める警察官トーマス・‘エド’・バートンだった。その電話が当センターに知らせていたのは、この日の未明 04:10(中部標準時)頃、イリノイ州セントクレア郡とその周辺で UFO 目撃が発生したというものだった。

“その後で同じ日の午前、我々はバートン警察官と話すことができた。彼が我々に語った内容は、次のとおりだった： 当日の未明 04:10(中部標準時)頃、彼はセントクレア(イリノイ州)緊急派遣係官からの発表を耳にした。一人の住民がイリノイ州ハイランド警察署に駆け込んできて、近くのとてつもない変な物体が1個見えるので、外に出て見てくれと警察官に頼んだというものだった。その住民は、その奇妙な外見の物体を仕事場に向かう途中で目撃した。彼は一人の警察官がその物体を彼と一緒に目撃するまで、警察署を立ち去ろうとしなかったらしい。

“無線でその事件のことを聞いたバートン警察官は、レバノンの彼がいた場所から南東の方角を見た。そして、地平線に近い空中に浮かんでいる、2個のきわめて明るい白色光体に気付いた。これらの光体が発する光が大変強烈だったので、その光景はバートン警察官に、日本の軍旗に描かれる‘旭日’模様を思い起こさせた。間もなく、その2個の大きな光体は一体化したように見え、物体が放っている光は急激に増したようだった。

“バートン警察官はその物体に近づこうとして、南へ東へと車を走らせた。彼は頭上警告灯を点灯し、ときどき時速 75 ないし 80 マイルの速度を出しながら、その物体に向かった。物体は依然として彼の位置からおよそ南東の方角にあった。間もなくバートン警察官は、その物体が彼に向かって移動しているらしいことに気付いた。

“彼は車を止め、頭上警告灯を消し、助手席側の窓を引き下げた。その物体は彼の場所に近づいてきて、推定高度 1,000 ないし 1,500 フィートで頭上を通過した。物体は地上の彼の場所から推定水平距離 100 フィート以内であったが、この時点ではほぼ西あるいは北西に向かっていた。その物体ははっきりとした三角形で、三角形の各先端には 3 個の白色照明があった。また、後部には奇妙な照明の‘銀河(集合)’があり、その中には白色、赤色またはピンク色の色調、そしておそらく他の色もあった。

98) National UFO Reporting Center

99) Mutual UFO Network

100) The National Institute for Discovery Science

101) “UFO Over Illinois: Anatomy of a Sighting”, Discovery Channel, 2000

102) Report prepared by: Peter B. Davenport, Director, on Monday, January 10, 2000, at 2300 hrs. (Pacific). (Revised on January 22, 2000.). Web site at:

<http://www.msatech.com/nuforc/CB000105.html>

“バートン警察官の頭上を過ぎてから、その物体は、見たところ傾きも揺れもせず、ふいに左方を向いた。次に突然ものすごい加速をし、猛スピードで西に約 8 マイル移動した。彼の推定ではその間約 3 秒だった。(注記: バートン警察官は、我々のセンターとの間で交わされた数回に及ぶ電話会話と少なくとも 1 回のラジオ放送で、その物体がほとんど信じ難い素早さで加速し、ほんの数秒間で相当の距離を南西に移動した様子を強調した。彼によれば、その速度はほとんど想像を絶するものだったという。これは本事例の特徴の一つであり、物体がほぼ確実に人間が造ったものではないことを強く示唆している)

“彼はセントクリア緊急派遣部に、自分がその物体を目撃したことを無線通報した。そしてそれが向かった方角がおよそ南西だったと教えた。彼は緊急派遣部が、彼がいる場所の南と西にある部署、たとえばシャイロー、ミルシュタット、デュポなどに連絡し、その警察官たちに最もよく見える場所からその物体を探させるように勧めた。

“少なくともシャイロー(イリノイ州)の一人の警察官が、次にその物体を目撃したようだ。また、名乗り出たり身分を明かしたりしたくないらしい別の二人の警察官も、彼らの町の共同墓地に立ってその物体を目撃した。

“ミルシュタット警察署の警察官クレイグ・スティーブンスがその交信を聞いていた。NUFORC は彼とも話をした。彼はそれを聞き、夜空にその物体を発見できるかもしれないと考え、巡回パトカーを町の暗い場所に向けて走らせた。すぐに彼は自分の場所から西の方角、地平線から約 45 度の高さにその物体を見つけた。そして、それが‘巨大’な物体であると判断した。彼の推定では、物体

は‘1階か2階の高さがあり、おそらく3階分の全長があった’。その表面には幾つかのとても明るい照明があった。

“セントクレア緊急派遣部は、誰かできればその物体を写真に撮るように指示した。それに応えて、スティーブンス警察官はパトカーのトランクからポラロイド型カメラを取り出し、素早くその物体を写真に撮った。外気温がおよそ華氏 18 ないし 20 度(*摂氏マイナス 8 ないし 7 度)と低かったので、カメラもフィルムもうまく機能しなかった。そのために、撮られた写真の解像度はよくない。

“スティーブンス警察官がその写真を撮った後で、その物体はさらに西に移動し、イリノイ州デュポ、同カホキア、ミズーリ州セントルイスに向かってるように見えた。このとき、デュポの警察官が一人この物体を目撃したかもしれない。

“最終調査によれば、この事件に巻き込まれた警察署と地域は、以下のとおりである：イリノイ州のハイランド、サマーフィールド、レバノン、シャイロー、マスキーター、ミルシュタット、デュポ、カホキア。物体は少なくとも以下の地域の警察官により目撃された(時刻順に)：レバノン、シャイロー、(ここにもう一つ?)、ミルシュタット、デュポ、およびカホキア(?)。

“注記と補遺:

“1)スコット空軍基地：目撃のある時点で、我々はその物体がスコット空軍基地から 2 ないし 3 法定マイル以内にあったと推定した。しかし基地の公式報道官は、以下の趣旨の公式表明を行なったと伝えられる。A) 目撃が起きている間、管制塔は約 1 時間閉鎖されていた； B) 同時間帯に基地のレーダーは詳細不明の原因で電源が切れていた；そして C) その目撃に気付いた隊員は誰もおらず、誰もその物体を目撃していない。

さらに 5 項目の注記と補遺がこの後に続いており、この原報告書でそれらを見ることができる。

7.0 エネルギーと反重力研究の概要

ポール・ラビオレット博士と他の研究者たちからの援助を受け
アンソニー・J・クラドックにより編集された。

偉大なニコラ・テスラの時代以来(それ以前からも), 科学界のごく一部の人は, 我々の周囲からいわゆる“フリーエネルギー”を取り出せること, そしてたとえば“反重力”のような, 既成概念の向こう側にある力や作用もまた, 我々の指図さえあれば現れ出ようとしていることを知っていた。

1899年のコロラドスプリングスにおける実験で, テスラは電気重力(またはスカラー)波を発見した。それは, 真空のエネルギー密度を揺らがせ, それにより時空の湾曲を振動させる。つまり, 1 世紀以上も前に, テスラはすでに重力と電磁気の統一場理論を生み出していたと思われる。彼の諸発見はとても基本的で, 全人類にフリーエネルギーを提供するという彼の意図はあまりにも明確だった。おそらくそれゆえに, 彼に対する財政的支援が中止され, 意図的に孤立させられ, 歴史書から彼の名前が次第に消されていった。

真空中のゼロポイント・エネルギーは, 揺らぎを考慮した最もエネルギーの低い真空状態である。低いエネルギー状態においても量子の揺らぎは絶えず発生し, その瞬間に存在するエネルギーの, 絶え間のない, きわめて急速で激しい“不規則振動”が引き起こされる。これらの量子の揺らぎによる最小エネルギーがゼロポイント・エネルギー(*zero-point energy*) と呼ばれる。このエネルギーは“巨大”である。科学者の中には, 1 立方センチメートルの純真空には 10 の 80 乗から 120 乗グラムの物質に凝縮できるほど十分なエネルギーが含まれる, との仮説を唱える人もいる! 量子力学的には, 考え得るどんな系(時空そのものも含めて)もゼロ・エネルギーを持つことはできない。いわゆる“フリーエネルギー”は, このゼロポイント・エネルギーをうまく引き出すことにより実際に得られる。

多くの現代科学の基盤は, 古典的電磁気理論(Classical Electromagnetic Theory; CEM)である。ジェームズ・クラーク・マクスウェルは, 4 元数(quaternions; クォータニオン)として知られる風変わりな代数学を用いて, 136 年前にこの理論を構築した。実際の電気力学者が利用するときにもっとよく理解できるようにするために, それは 1903 年にオリバー・ヘビサイド(およびギブス)の手で慎重に, より簡素な言葉で書き直された。この簡素化(そして切り捨て)により, 元々の理論に含まれていたスカラー電磁気学と重力に関する方程式の部分がすべて除去されてしまった。クラーク・マクスウェルの使い古された理論には, 合計すると少なくとも 34 の欠陥があることが知られている。これが依然として今日の教室で教えられている。ウィーラー, ファインマン, ブンゲ, マルゲナウ, バレット, コルニル, エバンス, ビジエ, レーナートといった, 世界の一流科学者の何人かは, 皆 CEM(古典的電磁気理論)の欠陥について書いている。

古典的電磁気理論(CEM)のこの失われた“ヘビサイドの切り捨て部分”が復活し, ケンブリッジ大学の数学者 E・T・ホイットカーの 1903 年と 1904 年の輝かしい業績が考慮されるとき, 我々はまったく突然に, 見つけるのが困難であると思われる科学の聖杯 — 一般相対性理論, 量子力学, 精神と神秘エネルギー現象, および古典的電磁気理論を一体化させる, 真の統一場理論を持つことになる。

しかし実際のところ、人類の進歩のための本当の聖杯は、仰々しく聞こえる統一場理論ではなく、本当はこの失われた切り捨て部分にあるということができるだろう。

なぜなら、局所時空間、つまり三つの空間次元および時間に圧力を及ぼすのは、この“スカラ一・ポテンシャル”だからである。これは付加的電磁気エネルギーの“滲み出し(bleed-through)”を可能にし、オーバーユニティ(overunity)の電磁気システムを実現する。実に、この失われた切り捨て部分の復活により、アインシュタインの一般相対性理論は、彼が書こうとしていた本当の理論のごく一部にすぎないことも示される。アインシュタインは一般相対性理論により名声を得た(タイムマガジン誌“*Man of the Century*”)が、彼自身は次の言葉を残している。いわゆる物理学の基礎は、絶えず見直しが必要である。相対性理論は、必ずしも型にはまった不変のものではない。

“フリー”エネルギー抽出の理論に立ちはだかるもう一つの障害が、すでに色褪せた残りのマクスウェル電磁気理論に対して、1902年にH・A・ローレンツにより負わされた。彼は単なる独断により、回路の外にあって回路に捕捉されない、莫大な量の電流を投げ捨ててしまった。それは彼が理論的に説明できないものだった。彼はそれを“物理的に無意味!”と表現した — それは我々の通常の電気回路においては、捕捉される電流の約10の13乗倍も大きいのにである! こうして彼は、電磁気システム(複数)を理論的、および比喩的意味での鉄の箱に永久に閉じ込めてしまった。その箱は、電磁気システムをオーバーユニティにし、付加的エネルギーを滲み出させ、捕捉することを決して許容しようとしなかった。

エネルギーは創出も破壊もできない。そして、取り込むよりも多くのエネルギーを出力するシステムの例(熱ポンプや風車など)は、どこにでもある。これは単に他のエネルギー源を変換しているのである。もし、他のエネルギー源から変換された追加エネルギーを受け、出力エネルギーが最初に供給されたエネルギーよりも大きくなる場合、これはオーバーユニティ(*overunity; 入力に対する出力の比、つまり性能係数COPが1を超える状態)と呼ばれる。既成科学では、“既成科学”のあらゆる側面で、これを“許容”している。“ただし、唯一の(独断的)例外が電磁気理論である”

しかし、“許容”されない局所的時空間の湾曲が“フリー”真空エネルギーへの扉を開く手段であることを考えると、塹壕で防備されたある種の経済的利益集団が、この素晴らしいエネルギー源を開発する物理学者の研究を阻止し続けている理由が、我々にはよく分かる。実際に、米国特許局には厳格な指示があり、意味のあるオーバーユニティ電磁気システムあるいは今のエネルギー供給体制の現状維持を脅かすと思われるものは、その特許を認可しないことになっていると聞かされている。

それでも時折、一部の抑圧されている驚くべきオーバーユニティ・システムの前で、それを覆うベールが不用意にも持ち上げられることがあるが、それは結局また素早く降ろされてしまう。

ここに、その幾つかを紹介する:

テスラの自己出力自動車

Tesla's Self-Powered Automobile

1931年に、テスラはある極秘計画の中で一つのオーバーユニティ、自己出力電力システムを作り、それをピースアロー車(*20世紀初期の車)に組み込んだ。そしてその車の走行に成功した。彼と一緒にその車に乗った一人の親類が、何年も後になってそれを裏付けた。詳細の一部が、マーク・サイファーによるテスラ伝記の中で次のように述べられている:

“その車は標準規格のピースアロー車で、エンジンが取り外され、別の部品(複数)が代わりに搭載された。標準規格のクラッチ、変速装置、駆動系はそのままだった... ボンネットの下には1個のブラシレス電動モーターがあり、エンジンと接続されていた[あるいはエンジンの代わりにしていた]... テスラは誰がそのモーターを作ったのか、打ち明けなかった”

“計器盤には1個の‘エネルギー受信機’が組み込まれたが、それは1個の箱で... 12本のラジオ真空管が入っていた... 6フィートの棒でできた1本の垂直アンテナがあり、そのエネルギー受信機に接続されていた。エネルギー受信機とはいえば、2本の太い、人目を引くケーブルでモーターに接続されていた... テスラは始動する前にこれらを押し込み、こう言った: ‘さあ、エネルギーを捕まえたぞ’”

このテスラの装置は、以下に述べるT・ヘンリー・モレーの放射エネルギー増幅器にとってもよく似ているように思われる。また、テスラは彼の二つの特許の中で、自然の媒質に関して“放射エネルギー(radiant energy)”という言葉は初めて使った。

さらには、テスラが実際に特許を取った回路に関して、確かにその中をエネルギーが意図されたように自由に行き交ったという、バレットによる高次元位相幾何学的見地からの数学的証明がある。

要するにテスラは、ポテンシャルの非対称的变化を自ら引き起こしてオーバーユニティ・システムを生成し、それにより自己出力する回路の作り方を知っていたらしい。

これは、今日の電気技術者たちが用いる電圧のエントロピー的伝達とはまったく異なる動作である。それは、ある外部のエネルギー源から余剰エネルギーが引き出されるように、回路の特定部分のポテンシャルを意図的に変化させる仕組みと言ってもよい。つまり、それはポテンシャルの非対称的变化であり、クロン(この後に論じられる)が苦心の末に発見し、その全貌が明らかにされることになかった回路とも同類である。

テスラの自己出力自動車システムがどのように機能するかについて、その技術的詳細はまったく公表されなかった。最終的に彼の祖国に引き渡されたテスラの論文(複数)には、彼の死亡時に部屋にあった本当の“決定的な”論文は含まれていなかった。それらの“決定的な”論文は、まるでテスラが不法滞在外国人であったかのように、彼の部屋から違法に持ち去られた(彼は市民権を得た米国民だったので、その行為のすべては明らかに違法だった)。もしそれらの“決定的な”論文がまだ存在するなら、それらは今なお高い機密扱いであり、既成科学者たちの目から隠されている。チェニーは彼女のテスラ伝記の中で、それらの論文のありかを発見したと述べている。

テスラの業績中、フリーエネルギーの電氣的な自動車用出力システムは、初期の共産主義者にロシアの支配権を奪取させ、アドルフ・ヒトラーを権力の座に昇らせるために資金援助した同じ人物により、資金援助された。この資金の支配下にあったために、テスラはその車を米国のどこかの自動車会社に生産させるのを許されなかったのだと推測される。

最近の関連文献、およびテスラの業績に部分的に基づく特許の幾つかは、以下のとおりである：

Barrett, T.W., "Tesla's Nonlinear Oscillator-Shuttle-Circuit (OSC) Theory," *Annales de la Fondation Louis de Broglie*, 16(1), 1991, p. 23-41.

Barrett, T.W. and D. M. Grimes. [Eds.] *Advanced Electromagnetism: Foundations, Theory, & Applications*, World Scientific, (Singapore, New Jersey, London, and Hong Kong), Suite 1B, 1060 Main Street, River Edge, New Jersey, 07661, 1995.

_____"Active Signalling Systems," U.S. Patent No. 5,486,833, Jan. 23, 1996.

_____"Oscillator-Shuttle-Circuit (OSC) Networks for Conditioning Energy in Higher-Order Symmetry Algebraic Topological Forms and RF Phase Conjugation," U.S. Patent No. 5,493,691. Feb. 20, 1996.

モレーの放射エネルギー装置

The Moray Radiant Energy Device

1900年代初期に、ソルトレーク市の T・ヘンリー・モレー博士は、空間自体のメタ周波数振動 (metafrequency oscillations) からエネルギーを取り出す最初の装置を作った。最終的に、彼は重さ 60 ポンドで 50,000 ワットの電力を数時間発生し続ける、一つのフリーエネルギー装置を作った。皮肉なことに、彼は科学者や技術者たちに何度もこの装置を実演して見せたが、これを大規模に電力を供給できる、実用的な動力装置へと発展させる資金を得ることができなかった。

1920年代から1930年代にかけて、モレーは着実にこの装置、特にその検知管を改良した。モレー自身によれば、これがただ一つの本当の秘密部分だった。彼の著書¹⁰³⁾、*The Sea of Energy in Which the Earth Floats* (地球が浮かぶエネルギーの海) の中で、モレーは1925年にトランジスタ型の真空管を発明したことを示す証拠文書を公開した。公式に認められているトランジスタの発見時よりも遙か以前である。彼のフリーエネルギー検知管において、モレーは検知管そのものの内部にこのトランジスタの発想に基づくある部品を使つたらしい — 半導体物質である摩擦発光を示す亜鉛と放射性あるい核分裂性物質の混合物でできた小球。彼の特許申請(特許が認可されたことはない)は、ベル研究所のトランジスタ(*1948年6月30日)が出現するよりずっと以前の、1931年7月13日に出版された。

103) Moray, T. Henry, *The Sea of Energy in Which the Earth Floats*, 4th Edition. See also Moray, T. Henry, *The Sea of Energy*, 5th ed., Salt Lake City, 1978. Foreword by T.E. Bearden.

繰り返し繰り返し、モレーは電気工学教授、国会議員、政府要人、そして彼の研究室を訪れる多くの人々に、彼の放射エネルギー装置を実演して見せた。一度などは、その装置をすべての送電

線から離れて数マイル田舎に移動させ、彼の研究室の他の場所から密かに放射されているエネルギーを受信しているのではないことを証明した。彼は何度か、別々の調査員たちにその装置を完全に分解させ、再度組み立てさせた。それでも、装置は再び自ら作動した。彼は、あらゆる試験の中で、感知できるいかなるエネルギー入力もなしに、その装置がエネルギー出力を発生させることを成功裏に実証した。完全な証拠書類に照らして、その装置がイカサマであることも、またそれがモレーが主張するとおりの装置でないことも、証明できる人はいなかった。

記録文書は、懐疑的な物理学者、電気技術者、および科学者たちの署名入り声明で満ちている。彼らはモレーの研究室を訪れ、モレーが本当に無料電力を生産する、ある普遍的エネルギー源の開発に成功したことを完全に確信して帰った。

しかし、このすべてを目の前に置き、米国特許局はモレーに特許を認可することを拒んだ。理由の第一は、彼の装置が真空管に冷たい陰極を使っていた(その特許審査官は、電子を得るために加熱した陰極が必要なのは常識だと主張した)ことだった。第二は、そのエネルギー源が彼には特定できないことだった。あらゆる種類の無関係な特許と装置が持ち出され、モレーの成果はこれらの権利を侵害している、あるいはそれらを真似したものだと言われた。これらの拒否理由の一つひとつにモレーは忍耐強く反論し、無効にした； それでもなお、その特許は今日に至るも認可されずにいる。モレー家は、今でもこの特許申請を取り下げている。

ソルトレーク市でその研究所を運営しているジョン・モレー(*ヘンリー・モレーの息子)は、あるロシア人二重スパイによりその基本装置が破壊されて以来、父の仕事を引き継ごうとしている。モレー博士自身は、1974年5月に亡くなった。

ガブリエル・クロンと負抵抗体

Gabriel Kron and the Negative Resistor

ガブリエル・クロンが亡くなったとき、彼をこれまで米国が生んだ最も偉大な“非線形”科学者だと考える人々がいた。

負抵抗体(negative resistor)とは、利用不可能な、あるいは無秩序な形態のエネルギーを受け取り、利用可能な、秩序ある形態のエネルギーを出力する、何らかの構成要素、機能、または過程と定義される。ここでは**収支**としてその機能を果たす場合を指す。明確に述べると、我々は“負抵抗体”の種類に、トンネルダイオード、サイリスタ、マグネトロンといった、全体として秩序立てるエネルギーよりも多くのエネルギーを消費し無秩序にする、“差分”負抵抗体は含めない。

回路の任意部分を取り巻くヘビサイドのエネルギー成分の利用可能性は、1930年代にガブリエル・クロンが真の負抵抗体を実現することを可能にした“開路(open path)”の、長い間探し求められてきた秘密であろうと思われる。そのときクロンは、スタンフォード大学にいて、ネットワーク・アナライザのために米国海軍と契約していたゼネラルエレクトリック社の筆頭科学者だった。クロンは負抵抗体を作った方法を公開することを許されなかったが、それがネットワーク・アナライザの中に組み込まれたとき、彼は負抵抗体が回路に電力を供給するので電源は不要だと明言した。この負抵抗体は、米国の納税者が支払った税金で開発されたものと言ってもよいだろう。

負抵抗は、周囲のエネルギーを集中させて回路に発散するものであるために、クロンの負抵抗は、エネルギー流のヘビサイド成分を“開路”のエネルギー流として — 任意の独立した二つの回路要素の局所空間を接続することにより — 集めたのではないかと思われる。それはローレンツに続く、以前の電気力学者たちにより捨てられていたものだった。それゆえに、クロンはこれを“開路”と呼んだ。クロンはこれを以下のように述べている¹⁰⁴：“... ‘開路’（‘閉路’と対をなす）という失われていた概念が発見された。そこでは、任意の二つの節 (nodes) の間にある枝 (branches) を通って電流を流すことができた。（以前 — マクスウェルの後の — 技術者たちは、開路のすべてをただ一つの基準点、つまり‘接地端子’に接続した）開路の発見は、第二の矩形変換行列を成立させ... それは‘層状’電流を生み出した...” “閉路と開路の両方を同時に含む回路は、著者が長年追究してきたことへの解答だった”

真の負抵抗がクロンにより開発されていたのだと思われる。彼は 1945 年の声明で、その疑い得ない成功を述べている¹⁰⁵：“正負の実数のみが存在する場合、正抵抗 (positive resistance) をインダクタンスで、負抵抗 (negative resistance) をキャパシタで置き換えるのが慣例である (実際のネットワーク・アナライザ上には負抵抗は一つも、あるいはほんのわずかしかなかったから)” クロンはその声明の中に“一つも、あるいは”という言葉を挿入するように要求されたようだ。彼はまた、次のようにも書いている¹⁰⁶：“負抵抗がネットワーク・アナライザ用に利用可能であるが...” これはかなり確かな言葉で、負抵抗がネットワーク・アナライザ用に利用可能だったことを示唆している。

モスクワ大学の科学者たちがオーバーユニティ装置を 1930 年代に試験 University of Moscow Scientists tested Overunity devices in 1930s

1930 年代に、モスクワ大学のロシア人科学者たち (Mandelstam 他) と支援諸機関が、COP (性能係数) が 1.0 を超えるパラメトリック発信装置¹⁰⁸を開発し、試験した。その理論、結果、図面などがロシアとフランスのいずれの文献にもあり、その翻訳の中で多くの参考文献が引用されている。この研究が第二次大戦後に再び取り上げられた様子はない。

関連する他のロシア語文献には、以下のものがある：

Mandelstam, L.I.; and N.D. Papaleksi, "On the parametric excitation of electric oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934, p. 5-29

Mandelstam, L. and N. Papalexii, "On resonance phenomena with frequency distribution," Z.f. Phys., No. 72, 1931, p. 223

____ "Concerning asynchronous excitation of oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934, p. TBD

____ "Concerning asynchronous excitation of oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934

____ "Concerning nonstationary processes occurring in the case of resonance phenomena of the second class," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934

Andronov, A. "The limiting cycles of Poincare and the theory of self-maintained oscillations,"

Comptes-Rendus, Vol. 189, 1929, p. 559.

_____ and A. Witt, "On the mathematical theory of self-excitations," Comptes-Rendus, Vol. 190, 1930, p. 256

_____ "On the mathematical theory of self-excitation systems with two degrees of freedom," Zhurnal Tekhnicheskioi Fiziki, 4(1), 1934

_____ "Discontinuous periodic movements and theory of multivibrators of Abraham and Bloch," Bull. De l'Acad. Ed Sc. De l'URSS, vol. 189, 1930.

Chaikin, S., "Continuous and 'discontinuous' oscillations," Zhurnal Prikladnoi Fiziki, Vol. 7, 1930, p. 6.

_____ and A. Witt, "Drift in a case of small amplitudes," Zhurnal Tekhnicheskoi Fiziki, 1(5), 1931, p. 428.

_____ and N. Kaidanowski, "Mechanical relaxation oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoi Fiziki, Vol. 3, 1933, p. 1.

104) Kron, Gabriel, "The frustrating search for a geometrical model of electrodynamic networks," circa 1962.

105) Kron, Gabriel, "Numerical solution of ordinary and partial differential equations by means of equivalent circuits," Journal of Applied Physics, Vol. 16, Mar. 1945, p. 173.

106) Kron, Gabriel, "Electric circuit models of the Schrodinger equation," Phys. Rev. 67(1-2), Jan. 1 and 15, 1945, p. 39

107) L Mandelstam. [L.I. Mendel'shtam], N. Papalexi, A. Andronov, S. Chaikin and A. Witt, "Report on Recent Research on Nonlinear Oscillations," Translation of "Expose Des Recherches Recentes Sur Les Oscillations Non Lineaires," Technical Physics of the USSR, Leningrad, Vol. 2, 1935, p. 81-134. NASA Translation Doc. TTF-12,678, Nov. 1969.

108) Note: COP stands for Coefficient of Performance

最初の点接触トランジスタ

The Original Point-Contact Transistor

最初の点接触トランジスタは、しばしば真の負抵抗体のような振る舞いをした。しかし、その仕組みが理解されたことはなかった。点接触トランジスタは、間もなく容易に製造でき製造ムラも少ない他の型のトランジスタへと移行したために、置き去りにされた。点接触トランジスタから、COP(性能係数)が1を超える回路を可能にする、真の負抵抗体を作り上げることは容易である。

バーフォードとバーナー¹⁰⁹⁾ (281 頁)はこう述べている: “. . . それらの作用の基礎となる理論は、ほぼ1世紀になろうというのにまだ完全には理解されていない. . . これらの装置の問題の性質は、小出力の範囲に限定されているとはいえ、接合素子に应用されたときの小信号動作という見方は無意味である。なぜなら、平衡あるいは理論的な性能が観測される動作範囲というものがないからである。点接触装置(複数)は、それゆえにあらゆる動作条件下で際立った非線形性を持つと言えるだろう”

ミニットマンミサイルに搭載されたオーバーユニティ装置 — ウェスチングハウス社の特許
Overunity device installed in Minuteman Missile - patented by Westinghouse

トランジスタを 64 段使った周波数変換器, およびそれに似た巧妙なフィードフォワードおよびフィードバック機構 (feedforward and feedback mechanism) が, 最初のミニットマンミサイルに搭載された. そして, 実証された COP (性能係数) が 1 を超えるその性能を落とすために, 意図的な改造が行なわれた. 詳しい調査により, その装置は受ける取るエネルギーの約 105 パーセントを出力していることが判明した. COP が 1.15 を示したのも幾つかあった. その後, まったく何事もなかったかのように, ウェスチングハウス社の技術者たちは, その技術に関連する幾つかなの特許を取った. しかし, それについての言及は, デサンチスらがマルチパワー開ループ連鎖 (multipower open loop chain) を持ったフィードバックシステムは COP が 1 を超える性能を実現できることを示しても, その後の文献にも発表されていない. これらの特許の幾つかが, 以下の文献に出ている:

Andreatta, J.H. "High Power Switching Amplifier Wherein Energy is Transferred to a Tuned Circuit During Both Half Cycles," U.S. Patent No. 3,239,771, Mar. 8, 1966

Dennis Jr., T.L. "Highly Efficient Semiconductor Switching Amplifier," U.S. Patent No. 3,239,772, Mar. 8, 1966

DeSantis R.M. et al., "On the Analysis of Feedback Systems With a Multipower Open Loop Chain," Oct. 1973, AD 773188, available through the U.S. National Technical Information System.

Morrison, H.J. "Square Wave Driven Power Amplifier," U.S. Patent No. 3,815,030, June 4, 1974.

109) William B. Burford III and H. Grey Verner, Semiconductor Junctions and Devices, McGraw-Hill, New York, 1965, p. 281-291.

宇宙飛行士の磁気ブーツ

The Astronaut's Magnetic Boots

ウェスチングハウス社のラドゥスらが開発した, 最初の宇宙飛行士用磁気ブーツは, その磁場 — 永久磁石による磁場 — そのものが簡単に切り替わった! 宇宙飛行士たちは, その永久磁場のスイッチを切るだけで, 容易に足を持ち上げることができた. 彼らは足を降ろしたときに再びスイッチを入れた. それを行なうために必要な, 莫大な電流を供給する巨大バッテリーを身に着けて運ぶ必要はなかった. そして, 磁石はある記憶を持っていた. (工場から出てきたばかりの未使用磁石の多くが, その最初の使用状態を記憶し, 自らを条件付けする! 知られている限り, 今日においてさえこんなことを語る人はいない) この事実を利用して, たとえば, 一見通常に見える磁場を生じながら, 磁場の中に変則性 (anomalies) を生じるなど, 通常の磁石とは異なる振る舞いをする磁石を作り出すことができる.

次のことを容易に理解することができる. つまり, 永久磁石の磁場を簡単に切り替えられるなら, またラドゥス磁石がそうであったようにその磁石が内蔵の記憶を持つなら, 切り替えを少し工夫する

だけで、そのような磁石を使って自動切り替え、自己出力する永久磁石モーターを作ることができる。一つの永久双極子である磁石は、それだけですでに特殊な“フリーエネルギー発生器”である。なぜなら、それは、エネルギーに満ちた真空の流れを非対称にすることにより、絶え間なく真空から直接に磁気エネルギーを湧出させているからである。

記憶を持った永久磁石の製造、またそれを稼働システムの中でどう利用するかという主題全体が、今なおほとんど探究されていない遙か辺境の領域である。実際に、大部分の研究者はその現象の存在すら知らない。この話題についての文献の幾つかを、以下に掲げる：

Astleford, Jr., J. and R. J. Radus, "Distribution Transformer with Zero-Percent Impedance," Westinghouse Engineering, 23(5), Sept. 1963, p. 148-151

_____"Zero Impedance Distribution Transformer," IEEE Transactions on Power Apparatus & Systems, 83(9), Sept. 1964, p. 918-926

Hangar, A.W. and A. A. Rosener, "The use of permanent magnets in zero-gravity mobility and restraint "footwear" concept," IEEE Transactions on Magnetics, Vol. MAG-6, No. 3, Sept. 1970, p. 464-467.

これらの未熟な“ひきずり”ブーツは、それより先に開発され NASA で使用されたウェスチングハウス/ラドゥスの優雅な“足踏み”ブーツと好対照である。

_____"Human fly has magnetic sole," Electrical Engineering, Apr. 1963, p. 294.

Radus, R.J and W.G. Evans, "Apparatus Responsive to Direct Quantities," U.S. Patent No. 2,892,155, June 23, 1959.

Radus, R.J., "Permanent Magnet Flux Transfer Principle," Internal Westinghouse paper, date unknown

Radus, R.J., "Permanent-Magnet Circuit using a 'Flux-Transfer' principle," Engineers' Digest, date unknown (July 1963?), p. 86.

日立の技術者たちがオーバーユニティ・プロセスを確認

Hitachi Engineers confirm Overunity Process

日本人の発明家、河合輝男による磁気モーター中の磁路 (magnetic path) の巧妙な自己切り替え技術により、ほぼ 2 倍の COP (性能係数) が得られる。COP が 0.5 未満の通常の磁気エンジンを改造しても、COP が 1 を超えることはない。しかし、市販品の中で高い性能 (COP が 0.6 から 0.8) を持つエンジンを改造して河合プロセスを適用すると、そのエンジンは COP が 1.2 から 1.6 の性能を示す。河合の仕様に改造された二つの日立エンジンが、日立の技術者たちによる厳格な試験を受けた。その結果、それぞれの COP は 1.4 と 1.6 を示した。河合プロセスは、適切な切り替え制御 (たとえば光子) により、特許から直接製作することができる。河合プロセスと日本における他の幾つかのオーバーユニティ・システムが、さらなる進歩と市場への投入を妨害されてきたように思われる。

Bearden, T.E., "Energetics Update and Summary," Part I, Explore, 7(6), 1997, p. 60-67; Part II, Explore, 7(7), 1997, p. 53-56; Part III, Explore, 8(1), 1997, p. 53-56; Part IV, Explore, 8(3), 1997, p. 56-63

_____"The Master Principle of EM Overunity and the Japanese Overunity Engines," Infinite Energy,

1(5&6), Nov. 1995-Feb. 1996, p. 38-55.

____ "Energy Flow, Collection, and Dissipation in Overunity EM Devices," Proceedings of the 4th International Energy Conference, Denver, Colorado, May 23-27, 1997, p. 5-51

Kawai, Teruo, " Motive Power Generating Device," U.S. Patent No. 5,436,518. Jul. 25, 1995.

磁気ワンケルエンジン

The Magnetic Wankel Engine

磁気ワンケルエンジンもまた、COP が 1 を超え、閉回路自己出力 (closed-loop self-powering) が可能な性能を持てるはずである。しかし、日本のオーバークニティ電磁気システムのすべてがそうであるように、これもまた抑圧されている。

Bearden, T.E., "The Master Principle of EM Overunity and the Japanese Overunity Engines," Infinite Energy, 1(5&6), Nov. 1995-Feb. 1996, p. 38-55

____ "The Master Principle of Overunity and the Japanese Overunity Engines: A New Pearl Harbor?"

The Virtual Times, website <http://www.hsv.com>, January 1996.

ジョンソン・モーター

Johnson's Motors

ハワード・ジョンソン¹¹⁰⁾ は、多くの斬新なリアモーターと回転モーターを作り上げた。また、少なくとも一つの自己出力回転磁気装置 (self-powering magnetic rotary device) を作り上げたが、後にそれは彼の研究室に不可解な不法侵入があったときに盗まれた。ジョンソンは、磁束線の双方向“2粒子”理論 (bidirectional two particle theory) を使っている。その理論は、すべてのポテンシャルと場における内部双方向エネルギー流を示した、ホイッタカーの初期の研究により説明することができる。彼はまた、制御されたスピン波と自己発生した正確な交換相互作用力を利用している。それらは一瞬の間、非常に強力な力場の爆発を生み出すことが知られている。彼の方法は強い非線形性を示す磁石部品を使うことであり、それが回転周期のきわめて正確な点 (複数) において前述の現象を発生させる。要するに、彼は自己発生的な非線形磁気作用を利用して、正確な位置と方向を持った、突発的な磁力を発生させることを追求する。これは、外部コイルに流れる微弱電流の急激な遮断によるレンツの法則の効果を利用してワンケルエンジンが行なったことと類似している。レンツの法則の効果と他のきわめて急激な場の変化は、一瞬の間増幅されたポインティング・エネルギー流成分のみならず、増幅されたヘビサイド・エネルギー流成分をも発生させる。関連する幾つかの文献には、以下のものがある：

Cullity, B.D, Introduction to Magnetic Materials, Addison-Wesley, Reading, MA, 1972

Gurevich, A.G. and G.A. Melkov, Magnetization Oscillations and Waves, CRC Press, 1996

L'vov, V.S., Wave Turbulence Under Parametric Excitation: Applications to Magnets, Springer-Verlag, Berlin, 1994

L'vov, V.S. and L.A. Prozorova, "Spin Waves Above the Threshold of Parametric Excitation," in A.S. Borovik-Romanov and S.K. Sinha, (Eds.), Spin Waves and Magnetic Excitations, North-Holland,

Amsterdam, 1988.

110) Johnson, H.R., "Permanent Magnet Motor." U.S. Patent No. 4,151,431, Apr. 24, 1979. See also Johnson's U.S. Patents 4,877,983, Oct. 31, 1989 and 5,402,021, Mar. 28, 1995

フロイド・スウィートの真空三極管増幅器 Floyd Sweet's Vacuum Triode Amplifier

スウィートの半導体真空三極管には、自励発振する磁界を持つ、特別に調整されたバリウム・フェライト磁石が使用されていた。この装置は 33 ミリワットの入力に対して約 500 ワットを出力し、その COP (性能係数) は 1.2×10^6 (つまり 120 万!) (*下記の Sweet 論文を参照) だった。スウィートは、彼の ELF (極低周波) 自励発振を生じる磁石の調整方法を、完全には決して公開しなかった。しかし、強磁性体では (1) 磁化, (2) 不安定化閾値より上のスピン波, および (3) マグノン (magnons) の、周波数 1 キロヘルツから 1 メガヘルツの自励発振が起きることが知られている。制御された条件下で、その装置は反重力の特性をも示した。ある実験では、90 パーセントの重量減少を生じた。

クロンがスウィートの指導者、つまりスウィートは彼の弟子であったことは、興味を引くかもしれない。今は亡きスウィートは、同じ会社で働いていたが、ネットワーク・アナライザ計画には関わっていなかった。しかし、彼はほぼ確実にクロンの“開路 (open path)” 発見と、その負抵抗体の秘密を知っていた。この技術分野へ参入するための資料として、詳細な文献引用がある下記を読みたい:

Gurevich, A.G. and G.A. Melkov, Magnetization Oscillations and Waves, CRC Press, 1996, p. 279.
L'vov, V.S., "Wave Turbulence Under Parametric Excitation: Applications to Magnets," Springer-Verlag, Berlin, 1994, p. 214-218, 226-234, 281-289.
Sweet, F. and T. E. Bearden, "Utilizing Scalar Electromagnetics to Tap Vacuum Energy," Proceedings of the 26th Intersociety Energy Conversion Engineering Conference (IECEC '91), Boston, Massachusetts, 1991, p. 370-375.

デボラ・チャン博士の負抵抗体 Dr. Deborah Chung's Negative Resistor

バッファロー大学 (UB) の機械工学と宇宙工学の教授デボラ・D・L・チャン博士は、“スマート材料 (*外部からの刺激に対して反応する材料)” 分野におけるこの国の一流科学者であり、また国際的な評価も高い。彼女は、バッファロー大学の材料研究ナイアガラ・モホーク講座を持ち、スマート材料と炭素複合材についての研究により、世界的に認められている。1998 年 7 月 9 日、ラスベガスで開催された第 5 回複合材料工学国際会議での基調講演で、彼女はある複合材料の層接合面で明白な負抵抗を観測したことを報告した。負抵抗は、繊維層と直交する方向に観測された。

彼女のチームは、その負抵抗効果を実験室の中で 1 年間徹底的に試験した。それが真の負抵抗体であることにはまったく疑問の余地がなかった。チャン博士は、その研究を述べた論文を論文

審査のある雑誌に投稿し、大学は特許を出願した。間を置かずに、幾つかの反論記事が通俗科学雑誌に現れた。負抵抗は物理学と熱力学の法則に反する、と公言する既成科学者たちが、素早く引き合いに出された。おそらくバッファロー大学の研究者たちは小さな電池を作り上げてしまい、それに気付かなかつたのだ、と考える人々もいた。

バッファロー大学のウェブサイト上では、その発明が商業使用権のために提供されると公示された。その使用権と適切な守秘義務契約に関心を持つ大手企業には、一括技術資料が与えられることになった。その直後に公示は撤回され、技術資料は入手できなくなった。そして、商業使用権の付与と商業化は無期限の保留となった。それは、これを書いている時点でもまだ保留である。

ランデル・ミルズ博士とブラックライト・パワー

Dr. Randell Mills and Blacklight Power

1989年の初め、ランデル・ミルズ博士は、水素原子がその基底状態より低いエネルギーレベルに落ち込み、かなりの量のエネルギーを発生する現象が起こり得ることを発見した。最初は、新しい種類の常温核融合が見つかったのだと考えられた。しかし、彼はこの発見が、実際には水素原子の落ち込み(彼はこれをハイドリノス(hydrinos)と呼んだ)による新しい形態のエネルギーであることを示した。初期の報告によれば、入力エネルギーの1,000倍ものエネルギーが出力されていた。この卓越した量の熱エネルギーは、水素の落ち込みによって放出されるエネルギーが受容体に供給される触媒反応の結果だった。広報フュージョン・ファクツ(Fusion Facts)は、この業績によりミルズ博士を年間最優秀科学者に指名した。

2000年に、米国特許6,024,935がランデル・ミルズ博士と彼の会社、ブラックライト・パワー社に対して付与された。その特許は60頁で請求項目が499という、異常に分厚いものだった。特許は「低エネルギー水素の方法と構造(Lower-Energy Hydrogen Methods and Structure)」である。この新分野についての情報がウェブサイト <http://www.blacklightpower.com/index.html> にある。

常温核融合

Cold Fusion

常温核融合の現象は、ユタ州の研究者スタンリー・ポンスとマーチン・フライシュマン¹¹⁾によって最初に報告され、大々的な偽情報工作にもかかわらず、これまで世界中の研究室の数百の実験で確実に再現されてきた。常温核融合を巡る事情は、アスピリンの初期のそれに類似している。それには効果がある、しかし“既成科学”はそれがいかにして、あるいはなぜそうなのか、知らない。それゆえに、それは集権的な電力産業など、塹壕で防備された経済的利益集団のみならず、正統派科学界にとっても脅威である。

原子力技術者のトーマス・ビーデン博士は、幾つかの新しい種類の反応を提起している。その中には、常温核融合の機構を確かに説明する時間反転帯(time-reversal zones)の形成が含まれる。これらの新しい種類の実験の変則性は、実際には時間を一つのエネルギー源としていることが原因である。そこでは、時間エネルギーが空間エネルギーに変換されている。毎秒1マイクロ秒の時間を空間電磁気エネルギーに変換すると、およそ10の11乗ワットの出力を生じる。このことから、

時間そのものが潜在的な巨大出力源であること、そしてたぶん今世紀後半の最適なエネルギー源となることが理解される。

明らかに常温核融合の一種であるパターンソン・パワーセル(Patterson Power Cell)は、同じ効果(複数)を得るために一枚の薄膜を使っている。この成果は、イリノイ大学のジョージ・マイリー教授が確認したようだ。著名な科学者であり常温核融合の分析家でもあるユージン・マローブ博士が、米国の巨大電子企業であるモトローラ社がパターンソン・パワーセルに対して行なった実験に言及している。“一つのセルは、入力なしで20ワットの出力を発生し続けた。非公開になっているが、私はその生データを持っており、数多くの同様の試験でこれらの効果が得られている。そこでは、私の親指ほどもないセルの中で、たとえば15°Cの温度差が11時間も持続した。それは水を加熱している20ワット電球と同等の能力だった”

パターンソン・パワーセルによる1,200を超えるCOP(性能係数)が報告されている。ジェームズ・A・パターンソンに付与された特許と論文を以下に掲げる:

Patterson, J.A "System for Electrolysis of Liquid Electrolyte," U.S. Patent No. 5,372,688, Dec. 13, 1994;

"Method for Electrolysis of Water to Form Metal Hydride," U.S. Patent No. 5,318,675, June 7, 1994;

"Metal Plated Microsphere Catalyst," U.S. Patent No. 5,036,031, July 30, 1991;

"Improved Process for Producing Uniformly Plated Microspheres," U.S. Patent No. 4,943,355, July 24, 1990

Cravens, D. "System for Electrolysis," U.S. Patent No. 5,607,563, March 4, 1997.

111) Fleischmann, Martin, Stanley Pons, and M. Hawkins, "Electrochemically induced nuclear fusion of deuterium," J. Electroanal. Chem., Vol. 261, 1989, p. 301-308 and erratum, Vol. 263, p. 187

以上の例は、知られている正真正銘のオーバーユニティ・システムのごく一部である。紙数の制限により、先駆者たちの他の証明済みシステムについては割愛する。その中にはベディニ、ワトソン、フォーガル、ネルソン、ウェイガンド、ロワンディ、マッカイなどが含まれる。

以下は、この主題に関する一般的な参考文献一覧である:

Heaviside, O., "On the Forces, Stresses, and Fluxes of Energy in the Electromagnetic Field," *Phil. Trans. Roy. Soc. Lond.*, 183A, 1893, p. 423-480

Heaviside, O., a series of papers in *The Electrical Experimenter*.

Whittaker, E.T., "On the Partial Differential Equations of Mathematical Physics," *Mathematische Annalen*, Vol. 57, 1903, p. 333-355

_____"On an Expression of the Electromagnetic Field Due to Electrons by Means of Two Scalar Potential Functions," *Proc. Lond. Math. Soc.*, Series 2, Vol. 1, 1904, p. 367-372. The latter paper

was published in 1904 and orally delivered in 1903.

特に、ホイッタカーの前述の二つの論文を初めて深く論じた、エバンスらによる論文を読みたい。

M. W. Evans, L. B. Crowell et al., "On the Representation of the Electromagnetic Field in Terms of Two Whittaker Scalar Potentials," 1999 (in preparation).

これは AIAS (アルファ財団高等研究所; Alpha Foundation Institute for Advanced Study) 所属の研究者と特別研究員 19 名による共同執筆論文である。

Alger, P.L., (Ed.), The Life and Times of Gabriel Kron, or Walking Around the World, and Tensors, Mohawk Development Services, Inc., Schenectady, NY, 1969.

Hoffman, B., "Kron's Non-Riemannian Electrodynamics," Reviews of Modern Physics, 21(3), 1949, p. 535-540.

Stigant, S.A. "Gabriel Kron on Tensor Analysis, A bibliographical record," BEAMA Journal, Aug. 1948, (この中に Kron による文献一覧がある)

さらに最近の論文には、以下のものがある:

Bearden, T.E., "Use of Regauging and Multivalued Potentials to Achieve Overunity EM Engines: Concepts and Specific Engine Examples," Proceedings of the International Scientific Conference "New Ideas in Natural Sciences," St. Petersburg, Russia, June 17-22, 1996; Part I: Problems of Modern Physics, 1996, p. 277-297

____ "Use of Asymmetrical Regauging and Multivalued Potentials to Achieve Overunity Electromagnetic Engines," Journal of New Energy, 1(2), Summer 1996, p. 60-78

____ "The Master Principle of EM Overunity and the Japanese Overunity Engines," Infinite Energy, 1(5&6), Nov. 1995-Feb. 1996, p. 38-55.

____ "On Extracting Electromagnetic Energy from the Vacuum", July 2000

____ "Bedini's Method for Forming Negative Resistors in Batteries", 2000

Burke, H.E. ,Handbook of Magnetic Phenomena, Van Nostrand, New York, 1985.

Cole, D.C. and H.E. Puthoff, "Extracting Energy and Heat from the Vacuum," Physical Review E, 48(2), Aug. 1993, p. 1562-1565.

Kaganov, M.I. and V.M. Tsukernik, The Nature of Magnetism, 1985, Mir Publishers, 1985.

Plotkin, H., "The War Against Cold Fusion: What's Really Behind It?" San Francisco Gate, May 17, 1999. Webster at: www.sfgate.com

Puthoff, H.E. "Source of Vacuum Electromagnetic Zero-Point Energy," Physical Review A, 40(9), Nov. 1, 1989, p. 4857-4862.

他に多くの関連論文がエネルギー省の一般向けウェブサイト:

<http://www.ott.doe.gov/electromagnetic/papersbooks.html>

そして、トム・ビーデンのウェブサイト:

<http://www.cheniere.org/>

に見出される。

どんな物質にも何の動力も与えないが、電磁放射エネルギーを電気エネルギーに変換するシステムに対して、1996年12月31日に米国特許認可番号 5,590,031 がフランクリン・B・ミード・ジュニアとジャック・ナチャムキンに付与された。これは実際には(カシミール効果を使った)一つの原理の

証明であり、その中で真空から利用可能な電磁気エネルギーを取り出す方法(複数)があることを明確に立証している。すべてのカラスが黒いわけではないことを証明するには、1羽の白いカラスを見せればよい！そしてこれは間違いなく、1羽の素晴らしい小さな白いカラスである。

しかし、“フリーエネルギー”に至る最も普遍的な入り口は、単純で小さな原始双極子 (source dipole) である。この双極子は、真空から電磁気エネルギーを取り出す普遍的な負抵抗体となる。具体的に言えば、それは時間領域(複素平面)からエネルギーを吸収し、実三次元空間にそのエネルギーを放つ。残念ながら、紙数の制限により、これについての議論はここまでとする。

反重力と電気重力

Anti-Gravity and Electrogravitics

スカラー電気重力の領域では、二つの魔法の法則がある：

(1) 通常の電磁場が干渉を受けたり合成されたりしてそのベクトルがゼロになると、それらは真空に応力を生じる(5次元ポテンシャル)。この5次元ポテンシャルの一成分が、4次元空間(*通常の空間)の重力ポテンシャルである。この4次元空間の重力ポテンシャルは、その勾配(gradient)として流出するので、電磁場を破壊する干渉あるいはゼロ・ベクトルにする合成は、重力場を生じる。

要するに、破壊的な干渉を行なう電磁波あるいは力場は、それを検出する、あるいはそれと結合する粒子に対して重力場を生じる。

(2) 電気重力場が干渉を受けたり合成されたりしてそのベクトルがゼロになると、この破壊的な干渉あるいはゼロ・ベクトルにする合成は、通常の電磁場を生じる。

要するに、スカラー電磁波あるいは場(電気重力波あるいは場)の破壊的な干渉は、それを検出する、あるいはそれと結合する粒子に対して、電磁場を生じる。

こうして、長年の科学の夢だった重力場の — そして時空間そのものの — 直接制御が、今や現実のものとなった。まず、電磁場をゼロ・ベクトルにし、応力の強さと合成成分の内部パターンを変える。また、電磁気応力のゼロ・レベルとなる基準ポテンシャルを変え、内部成分の変化の周波数を変える。

ここに反重力の秘密を述べる。

荷電粒子の“電荷” — たとえば原子の軌道電子の一つ、あるいはその原子核の陽子の一つ — は、局所的な粒子とその周囲の真空との間の流束強度の差(ポテンシャル)を表す。

それは重力荷 (gravitational charge) が絶え間なく電荷として流出しているのである。

もしその流出を逆転あるいは停止させると、重力ポテンシャルと重力荷に対する劇的な効果が続いて起きる。5次元ポテンシャルと5次元重力荷は、それぞれ4次元ポテンシャルと4次元重力荷

になっている。(＊トーマス・E・ビーデンの *FER DE LANCE (1986)* に詳しい解説がある)

こうして、そのスカラー・パターンによる物体の“充電”は、それを重力的に充電する。

今や、唯一の“流出経路”は、4次元重力場である。

さらに、原子核の中では、核子が絶えず陽子と中性子の間を行きつ戻りつ姿を変えているので、その電荷は核子全体に“行きわたり”，すべての核子により共有されている。

さらにまた、各元素(実際には各同位体)はそれ自身固有のフーリエ展開スカラー周波数、振幅などの“集合パターン”を持っている。このパターンは、もちろん、改良された電磁波送信機(つまり、スカラー電磁波送信機)により、人工的に再現し送信することができる。しかし、核子(仮想的な電荷の流れの交換により相互に行きつ戻りつ姿を変えている陽子と中性子)には、一種の“親鍵”となるスカラー電磁波(電気重力)パターンがある。

もし、このパターンを反対にして“充電を逆転”させると、“反対の重力荷で質量を充電する”ことになり、外部の観測者にとってその充電している質量は、どんどん軽くなり、その慣性もどんどん小さくなる。最終的にそれは(観測者にとり)負の質量と負の慣性を持つに至り、加速して地球から彼方へと飛び去る。物体は“下に落下”する代わりに“上に落下”するのである。

また、ある奇妙な時間効果も起きる；物体は時間の中を実験室の観測者よりもゆっくりと移動することができるし、時間の中を逆行することさえできる。(相対性理論について人々が教えることを何でも信じてはいけな；彼らの中で一般相対性理論の状況を一つでも実現した人はほとんどいない。一般相対性理論について彼らが教えることの中に、直接の実験に基づいたものは何もない。彼らが教える大部分は、すでに実験で誤りであることが証明されている)

パターン自身の中では、それはきわめて正常なパターンである。もし物体が均一に充電されていれば、物体にとってその内部あるいは表面に変化が起きているようには見えない。実際に、内部の観測者にとって突然奇妙に見え始めるのは、外部の環境である！

たとえば、それは悪名高いバミューダ三角海域のような、時にスカラー波が活動的になる地帯で、異常な時空の狂いを経験する不運な航空機や艦船に時々起きていることのように思われる。条件さえ揃えば、船体の重力荷はその地帯で地球から放射されるスカラー波の異常な変化の影響を受ける。乗客や乗員にとって、突然奇妙になるのは外部の環境の方である。それに加え、船内の電磁機器や慣性装置も影響を受けるだろう。また、船体各部の充電速度の違いにより、他の電気重力的効果も起きるかもしれない。

“電気重力充電の逆転あるいは減少”は、集合パターン送信機上の基底ポテンシャルにバイアスをかけることにより制御される。これらの送信機は船内に持ち込むこともできる。というのは、スカラー電磁気理論では、送信と受信は同時だからである。船体は適切な送信により、(局所真空重力ポテンシャルに対して)それ自身のバイアス・ポテンシャルを変えることができる。それは“受信されるポテンシャル充電”に転換される。その荷流は負にも正にもなり得る(そのポテンシャルは、真空

のそれに対して減少させることも増加させることもできる)。

これをうまく利用すれば、金属を空中に浮かすことができる。人体、戦艦、あるいは乗員を乗せた高速の船体も同様である。

さらに、それを“非物質化(dematerialize)”することも“瞬間移動(teleport)”させることもできる。

1940年代の“フィラデルフィア実験”では、実験船となった掃海艇 IX97(本当は“マーサズ・ベンヤード”という名前のヨット)とその乗組員が、緩やかな制御されたやり方ではなく、“吹き飛ばされて”この奇妙な世界に移行した。事実上死の床にあったニコラ・テスラが、これに関わった科学チームに実験の指導をしていた。(ボブ・ベックウィズの著書 *Hypotheses* を読みたい — ベックウィズは、そのチームにゼネラルエレクトリック社から参加した科学者だった) この実験結果は、個人的な情報源(複数)によると、2002年に機密解除されることになっている。実験では、偶発的な時間旅行により、実験船は別の場所に移動し、また元の場所に戻った。そして、身の毛もよだつ恐ろしい結果をもたらした(乗組員は甲板などを貫き、それと融合していた)。

今、実質的に重力荷を減少あるいは逆転させる(調節する)ものとする(5次元重力ポテンシャルと電磁気へ流出する経路を絞めるゼロ合成された電磁場)。重力荷がゼロになると、外部の観測者には船体が無質量、無慣性になったように見える。そうすると、極端な加速、全速力での直角方向転換などが可能になる。それはまた、まさに非物質化しかけている状態でもあり、光の船体のように見える。

もしパイロットが“着陸”したいと思ったら、当然彼は船体の重力荷を調節しなければならない。

もしパイロットが“非物質化”あるいは“瞬間移動”したいと思ったら、再び彼は船体の重力荷を調節しなければならない。

もし彼が“超空間(hyperspatial)”に移行したいと思ったら、再び彼は船体の重力荷を調節し、超空間力を生むための適切な流出を得なければならない。これは、多段階的(nested)なゼロ合成と多段階的なスカラー電磁波送信により行なわれる。

つまり、彼は複数の多段階的なゼロ合成を同時に行なうことにより、船体を充電しバイアスをかけることができる。

超空間制御と旅行のために、それが必要である。

低次の超空間では、船体はとても不思議な現象(複数)を起こし得ることに留意されたい。たとえば、固体物質の“貫通”などである(実際には、第4カルーザ-クライン空間でその3次元物体を“迂回”しているのである)。

このような船体は輝いて見えることになるだろう。それらの表面の外観や機構もまた、輝いたり回転したりする光といったものに見えるだろう。

それらは、大気中でなら一見信じ難い“空力性能”を見せるかもしれない。

実際に、それらは大気の“中を”移動するのではまったくない。それらは大気分子の外側にある高次空間を通過しているのである。

それらは非物質化し、物質化するように見えるかもしれない。

それらは海に飛び込み、また海から飛び出すように見えるかもしれない。

それらは海の中や、地球そのものの内部においてさえ活動するように見えるかもしれない。

このような特異な船体性能は、これまで世界中で目撃されてきた。特に、第二次大戦の数年後からはそうである。

米国政府、ソ連(そしておそらく地球上の他の国々)は、(我々の地球外訪問者たちに対する秘密と同じ)堅い秘密の中で、今現在このような輸送機を活動させている。

これはしかし、我々の本当の“政府の政府”ではない。そうではなく、それは“統制グループの政府”である。それは運営レベルの政府であるが、高いレベルにおいてある統制グループに属している。この統制グループは、我々の政府の枢要部に浸透し、このようなすべてのプロジェクトを掌握している。

電気重力は、米国政府において幾度となく繰り返し取り組まれてきた。そのたびに、それは暴力的に潰されるか、本当の政府ではない政府の内部筋による、不可解な統制のもとに引きずり込まれてきたように思われる。

このような“引きずり込まれた”プロジェクトのいずれにおいても、その運営に関わる個々人は、本当の政府職員である。彼らはその高い機密性を持ったプロジェクトが、米国政府により統制されていると信じて疑わない。彼らは、知る必要性を持った上層の政府高官たちが、そのプロジェクトについて完全に知っていると考えている。

実のところ、その思い込みは間違っている。プロジェクトの最上層部においては、そのプロジェクトは米国政府に報告されない。それは統制グループの代表者たちに報告される。プロジェクトを、米国政府において直接の指揮系統上にあり、機密取扱許可と知る必要性の応分の資格を持つ高官たちからさえも隠蔽する覆いとして、最高度の機密分類が使われている。

今述べたように、もし誰かが次のように訊いたら、用心しなければならない。“我々の政府は、こんな事はしていないんじゃないか？” 答は、イエスでもあり、ノーでもある。

我々の合法的な政府の政府は、このような輸送機を持つことも知ることも許されていない。

我々の違法な統制グループの政府が、それらを数十年間掌握している。

タウンゼント・ブラウンの電気重力工学技術

Townsend Brown's Technology of Electrogravitics

1920年代の中頃、タウンゼント・ブラウンは電荷と重力質量が結合していることを発見した。彼が知ったのは、キャパシタを高圧で充電すると、正に帯電した側に向かって力が働くということだった。これはビーフェルド-ブラウン効果として知られるようになった。彼の重要な発見は、当時の既成的思考の科学者たちから反対された。

真珠湾での実演。1953年頃、ブラウンは軍の最高幹部たちのために、ある実演を行なった。彼は直径3フィートの1対の円盤を中心の柱に係留し、直径50フィートのコースに沿って飛ばした。150,000ボルトに充電され、前縁部からイオンを放射しながら、円盤は時速数百マイルの速度に達した。この主題は、その後で機密扱いになった。

ウィンターヘイブン計画。ブラウンは国防総省に対し、マッハ3の円盤型電気重力戦闘機を開発する提案を行なった。その基本設計が彼の特許の一つに示されている。それらは、本質的に彼の係留試験円盤の大型版である。

アビエーション・スタディーズ・インターナショナル(Aviation Studies International)。彼らは、軍のために情報研究を行なうシンクタンクである。1956年に、彼らは“電気重力システムズ”という題名の報告書を発表した。その中で、彼らは政府に対し、タウンゼント・ブラウンの電気重力工学技術を発展させるために十分な政府予算を組むこと、およびウィンターヘイブン計画を実施することを提唱した。報告書は、航空宇宙産業の大部分が、この反重力工学技術の研究に積極的に取り組んでいると明言した。そこには、次の企業名が挙げられていた：グレン-マーチン社、コンベア社、スペリー-ランド社、ベル社、シコルスキー社、ダグラス社、そしてヒラー社。この分野に参入した別の企業にはロッキード社とヒューズ航空機社が含まれており、後者は一部の人々により、この分野において世界のリーダーだと見られていた。この報告書は最初機密扱いだった。ポール・ラビオレット博士が1985年にそれを国会図書館のカード目録の中に見つけ、偶然に発見された。しかし、文書はそこから紛失していた。彼らの職員がコンピュータ検索し、その他に知られているただ一つの複製がライト-パターソン空軍基地にあることを突き止めた。ラビオレットは後に、図書館相互貸借によりそれをライト-パターソン基地から入手した。現在それは、T・バロン(編集者)の著書 *Electrogravitics Systems* (電気重力システムズ) の中で公表されている。

ノースロップ社の風洞実験。1968年に、ノースロップ社の技術者たちは風洞実験を行ない、その中で翼の前縁部を高電圧に帯電させた。彼らは、航空機の衝撃音波を緩和するためにこの技術がどのように有益に使えるかを調査していた。こうして、彼らはブラウンの電気重力概念について大規模な試験を行なっていた。ブラウンの研究開発会社は、以前に、衝撃音波の緩和はこの電気重力推進技術の有用な副次効果であることを公表していた。興味深いことに、ノースロップ社は後にB-2爆撃機の第一の請負業者になった。

B-2爆撃機。1992年に、極秘プロジェクトの科学者たちは、アビエーション・ウィーク・アンド・スぺ

ース・テクノロジー (Aviation Week and Space Technology) 誌に次のことを公開した: B-2 は、その排気を静電的に高圧に帯電させ、それと同時にその翼形機体の前縁部を逆極性に帯電させる。この情報に接して、ラビオレット博士は 1993 年に B-2 推進システムを逆行分析した。彼の提案は、B-2 は本質的にタウンゼント・ブラウンの特許である電気重力航空機の実現だということだった。B-2 は通常のジェット推進で離陸することができる。しかし空中に舞い上がったなら、その電気重力駆動が稼働し、推力を増強する。このシステムは、乾燥した条件下でのみ稼働可能である。もし、B-2 の誘電体翼が濡れたら、印加高電圧はショートする。これが、B-2 が雨の中を飛行できない理由である。ブラウンの電気重力実験、そしてラビオレットが開発(1985, 1994a)した場の理論のいずれも、B-2 の高電圧空間電荷差は、前部から後部への重力勾配を生み出し、それが機体の前方への運動を強める役に立つことを示唆している。ラビオレットの理論では、B-2 の周囲電荷の前方への運動はさらに大きな重力推進効果を生じる。その効果はブラウンの電気力学実験の中でも見られる。

電気重力駆動により、B-2 はその燃料消費量を劇的に削減することができる。高速飛行の条件下では、それをゼロにすることさえ可能である。民間航空会社は、この技術により劇的な便益を受けることができるだろう。それはジェット旅客機の燃料消費効率を大幅に向上させるのみならず、飛行時間を大幅に短縮する高速飛行をも可能にする。

電荷の移動は、さらに大きな推進効果をもたらすだろう。同じ効果が、B-2 爆撃機に利用されていると思われる。

シド・ハーウィッチ

Sid Hurwich

1969 年に、トロントの発明家シド・ハーウィッチが、彼の重力場制御装置をトロント警視庁に実演して見せた。強盗特捜班の警部ビル・ドルトンが、彼の勤務用リボルバー(拳銃)をその実演に提供した。そのリボルバーはテーブルの上に張り付いて動かなくなり、彼はそれを持ち上げることも引き金を引くこともできなかった。その部屋で実験が始まって約 30 分後、掛け時計や腕時計の時刻は、持ち込まれたときのままだった。これは時空間の強い湾曲を示していた。

その後、この装置は 1976 年 7 月 3 日に、イスラエルによるウガンダ・エンテベ空港での奇襲作戦で使用された。後にバンクーバー・サン紙の週末版 1977 年 12 月 17 日号は、その 17 頁に“イスラエルの秘密兵器”の見出しで記事を載せた。

ブラジルの物理学者フラン・デ・アキノ(Fran De Aquino)教授は、2000 年に発表された幾つかの興味深い論文¹¹²⁾の中で、重力場の制御により、次のことを可能にしたと述べている: 重力場から直接エネルギーを取り出すことができた; 極低周波放射を使って重さ 77 ポンド、直径 2 フィートのドーナツ形物体を浮揚させた。デ・アキノ教授は、ブラジル・マラニャン州の州都サン・ルイス市にあるマラニャン州立大学物理学部教授である。デ・アキノ教授は、論文がノーベル賞受賞者を含む 36 人の科学者により査読されたことを報告している。

サール(Searl)電気重力円盤とロシア人の実験。英国の技術者ジョン・サールにより 40 年以上も前に開発されたこの装置は、分割された一つの回転円盤で構成されており、その分割部分(複数)

は円周軌道の内側を転がる一連の円筒永久磁石で支持されている。これは完全な離昇 (lift off) を達成したと言われている。この数年間に、ロシア国立科学アカデミー所属の二人のロシア人科学者、**ロスチン (Roschin)** と **ゴディン (Godin)** は、単純化されたサークル円盤を建造し、その特異な重量減少効果を裏付けた。彼らは、直径 1 メートルの円盤を毎分 600 回転させ、35 パーセントの重量減少を実現すると同時に、7 キロワットの余剰電力を発生させた。

ポドクレトノフ (Podkletnov) の重力遮蔽体とグリーングロー計画。ポドクレトノフ博士に率いられたフィンランドの研究チームが、回転超伝導円盤で実験を行っていた。それは、一連の電磁石が発生した反発磁場により、空中に浮揚させられていた。彼らは 1996 年に、円盤は部分的に地球の重力場を遮蔽し、円盤の上方にある物体の重量を 2 パーセント減少させることができたと報告した。推進の他に、重力差生成による機械的電力発生という応用があるのは明らかである。ここ数年間に、ブリティッシュ・エアロスペース社とマルコーニ・エレクトロニック・システムズの合併で誕生した BAE システムズ社が、ポドクレトノフの重力遮蔽体を研究している。彼らはこの研究を、非既成工学技術の実現可能性を調査するために彼らが立ち上げた、グリーングロー計画のもとで進めている。

重力慣性揚力システム (Gravito Inertial Lift System)。航空宇宙技術者の **ジム・コックス (Jim Cox)** は、最近ディーン駆動 (Dean Drive) を改良した。ディーン駆動は 1959 年 5 月に特許が付与された、一つの慣性推進エンジンである。彼は、エンジン重量の 90 パーセントに相当する上昇推力を実証した試験について報告している。それは 1/4 馬力モーターを 1 個使い、互いに逆転する 2 個の回転子を回転させる。回転子は直径が約 1 センチで、約 200 ワットの電力を消費しながら、毎分約 600 回転する。揚力は、回転子 (複数) を正弦波状に上下振動させ、上昇行程で揚力を取り出す構造体と連動させることにより得られる。1 馬力当たり約 45 ポンドの揚力が得られる (~55 ポンド/kW)。彼の計画は、400 ワットの消費電力で毎分 1,200 回転する 1/2 馬力モーターを使い、支障なく上昇する装置を年内に作ることである。彼の計算では、この工学技術を使えば、200 馬力の自動車エンジン 1 台で約 9,000 ポンド (*約 4 トン) の揚力を発生させることができる。

偏向力場推進 (Kineto-baric Field Propulsion)。ドイツの物理学者 **ルドルフ・ジンサー (Rudolph Zinsser)** は、鋸歯状電磁波が遠く離れた物体に圧力を及ぼし得ることを発見した。彼は、急上昇緩降下の 45 メガヘルツ電磁波を送信するラジオ真空管回路を作った。彼の実験では、これらの電磁波が最大 10^4 から 10^5 ダイン秒の衝撃を及ぼし得ることが実証された。これは、毎秒約 1 ないし 3 オンスの力を与えることに相当する。彼は、この力が驚くほど低い入力で発生することを知った。出力対入力比は、従来の推進方法の 10 の数乗倍に達する。彼の予測では、キロワット当たりの推力は 1,350 ポンドである。

112) "How to Extract Energy Directly from a Gravitational Field", "Possibility of Control of the Gravitational Mass by Means of Extra-Low Frequencies Radiation", and "Gravitation and Electromagnetism: Correlation and Grand Unification"

圧電物質に対する場の推力実験 (Field Thrust Experiments on Piezoelectrics)。カリフォルニア州立大学フラートン校の物理学教授 **ジェームズ・ウッドワード (James Woodward)** は、電磁波が圧電セラミック媒質に揚力を誘発し得ることを示す実験を行なっている。彼の考えは、1994 年の米国

特許と 1990 年の物理学誌の中で述べられている。ウッドワードは実験により、この推進効果を可聴周波数(～10,000 ヘルツ)で確認した。彼の計算によれば、この効果は周波数が高くなるとともに大幅に増大し、マイクロ波周波数帯(0.1 から 10 ギガヘルツ)で最大になる。彼の研究は、部分的にエネルギー省から支援を受けている。

米国上院(2000 年 10 月)に提示した反重力研究の要約を引用することを承諾してくれたポール・ラビオレット博士に感謝する。また、他の多くの匿名の情報提供者たちにも感謝する。

一般的な参考文献:

LaViolette, P.A., "An Introduction to Subquantum Kinetics," Parts I, II, and III Intl. J. General Systems, vol. 11 (4), 1985, pp. 281-345.

____ "Subquantum Kinetics", Starlane Publications, Alexandria, VA, 1994a.

____ "The U.S. Antigravity Squadron," in Electrogravitics Systems, edited by T. Valone, Integrity Research Institute, Washington, D.C., 1994b.

Roshchin, V.V. and S. M. Godin, "An Experimental Investigation of the Physical Effects in a Dynamic Magnetic System in a Dynamic Magnetic System," Technical Physics Letters vol. 26 (12), 2000, pp. 1105-1107.

Valone, T. (ed.), Electrogravitics Systems, Integrity Research Institute, Washington, D.C., 1994.

Woodward, J., "A New Experimental Approach to Mach's Principle and Relativistic Gravitation," Foundations of Physics Letters, vol. 3(5), 1990.

Zinsser, R., "Mechanical Energy from Gravitational Anisotropy," edited by T. Valone. Integrity Research Institute, Washington, D.C., 1989.

Brown, T.T. (<http://www.soteria.com/brown/>)

8.0 最近の民間による研究の概要

ここには、UFO 現象の本格的で深い思慮に基づく研究の例として、最近の 2 報告の要約が収録されている。最初は、米国で作成され 1998 年に公表された、スターロック/ロックフェラー報告である。もう一つは、フランスで作成され 1999 年に公表された、COMETA 報告である。

8.1 UFO 報告に関係した物理的証拠のスターロック/ロックフェラー報告

UFO 現象によるものとされる物理的証拠を再考するために、1997 年にピーター・スターロック博士と科学探究協会(Society of Scientific Exploration; SSE)が主催し、ローランス・S・ロックフェラー氏が資金提供をしたワークショップが開催された。これはほぼ 30 年間で初めて行なわれた、これらの諸問題についての科学界による重要な再検討であり、その結果は全国のメディアで報道された。ワークショップ議事録の要旨(科学探究誌; Journal of Scientific Exploration)¹¹³⁾を以下に転載する。それに続き、このワークショップ議事録についてのスタンフォード大学通信報道部による論説を掲載する。議事録の全文は科学探究誌より入手することができる。これは後に 1999 年に出版されたピーター・スターロック博士の著書¹¹⁴⁾に掲載された。

要旨

UFO 報告に関係した物理的証拠： ニューヨーク州タリタウン、ポカンチコ会議センターで 1997年9月29日から10月4日まで開催されたワークショップの議事録

P・A・スターロック他, スタンフォード大学

(P. A. Sturrock, et al., Varian 302G, Stanford University, Stanford, CA 94305-4060)

この4日間のワークショップの目的は、UFO報告に付随する物理的証拠といわれるものについて、このような証拠のさらなる収集と調査がUFO問題の解決、つまりこれらの報告の原因あるいは諸原因を断定する役に立つかどうか、ということ視野に入れながら、再検討することだった。7人のUFO研究者が、UFO報告に付随していたと彼らが主張する様々な物理的証拠について発表した：写真類；光度の推定値；レーダー観測データ；自動車の機能障害；航空機の計器異常；明らかな重力あるいは慣性への影響；地上の痕跡；植生の損傷；目撃者への心理的影響；遺留破片の分析。これに加えて、ノルウェーのヘスダレン谷で繰り返し発生している現象の調査についての発表が1件あった。様々な専門分野と関心を持つ9人の科学者により、調査委員会が組織された。委員会は、発表された調査に関して意見と批評を述べた。そして、以下の主要事項について全体的な意見の要約を作成した：

113) Sturrock, P. A. et al. (25 authors). 1998. Physical Evidence Related to UFO Reports: The Proceedings of a Workshop Held at the Pocantico Conference center, Tarrytown, New York, September 29 ? October 4, 1997. Journal of Scientific Exploration 12 (2): 179-229. Web site at: http://www.scientificexploration.org/jse/articles/ufo_reports/sturrock/toc.html

114) Sturrock, Peter. A. The UFO Enigma: A New Review of the Physical Evidence. Warner Books, 1999. 416 pp.

-
- ◆ 研究者たちにより提示された事例資料について、委員会が出した結論は以下のとおりである。報告された少数の事件には、たとえば電氣的活動のような、稀ではあるが重要な現象が含まれている。しかし、未知の物理過程あるいは地球外知性体の関与を示す説得力のある証拠はなかった。
 - ◆ それでもなお、委員会は次のように結論した。UFO報告を注意深く評価することは、有益であろうと思われる。なぜなら、説明されない観測結果には常に、科学者がそれらを研究することにより新しい発見をする可能性があるからである。しかし、信頼性を確保するためには、そのような評価が客観的で、かつ対立仮説をも積極的に評価する態度でなされなければならない。
 - ◆ 最も期待されることは、関連する仮説の意味のある評価が、物理的証拠の吟味により達成されることである。
 - ◆ 重要な進歩がもたらされる可能性は、30年前にコンドン報告をまとめたコロラド計画の時代よりも今の方が高いと考えられる。なぜなら、科学的知識と技術的能力は進歩しており、またCNES (Centre National d'Etudes Spatiales; フランス国立宇宙研究センター) による、地味ではあるが実効のあるUFO研究計画の例もあるからである。

スタンフォード大学通信報道部ニュース発表, 1998年6月22日

UFOの証拠は研究に値すると科学委員会が結論

1970年以來初めてとなる、UFO現象に関する独自の再検討の中で、科学者たちの委員会は、一部の目撃に科学的研究に値する物理的証拠が付随していると結論した。しかし委員会は、この証拠のどれかが、知られている自然法則に違反し、あるいは地球外知性体の関与を示しているとは確信しなかった。

この再検討は、スタンフォード大学の応用物理学教授ピーター・スターロックにより準備され、方向付けされた。そして、その運営は未解明現象の研究のために公開討論の場を提供する、科学探究協会が担った。9人の科学者による国際調査委員会が、最も説得力のあるデータを提示するように要請された8人の研究者によるUFO報告の発表を検討した。スタンフォード大学の電気工学名誉教授フォン・R・エシュルマンが共同議長を務めた。

UFO報告は50年前から存在しているが、集められた情報は、未知の物理過程あるいは異星人の工学技術が関与していることを立証していない。しかし、そこには十分な数の興味をそそる不可解な観測が含まれている、委員会はそう結論した。“UFO報告を注意深く評価し、現在の科学が知らない異常現象についての情報を取り出すことは、価値のあることかもしれない”科学界がそれを信頼するためには、“そのような評価が客観的で、かつ対立仮説をも積極的に評価する態度でなされなければならない”これが今まで欠けていたことだ、委員会はそう付け加えた。

この結論は、コロラド計画の責任者エドワード・U・コンドン博士が1968年のUFO報告の中で出したそれと異なっている。彼の結論は、次のようなものだった。“科学の進歩を促すという期待を持ちながら、UFOに関するこれ以上の規模の研究を進めることは、おそらく妥当ではない”しかし、委員会の結論は、2年後(*1970年)に公表された米国航空宇宙協会のキュットナー報告が到達した結論、すなわち“客観的手段による改良されたデータ収集と、高品質の科学的分析に重点を置いた、継続的で適度な[研究]努力”を主張したそれと、大変よく似ている。

この検討の中で、科学委員会は何らかの物理的証拠を伴う事件に焦点を当てた。それらの中には写真類、レーダー観測データ、自動車への干渉、航空機の計器に対する干渉、明らかな重力あるいは慣性への影響、地上の痕跡、植生の損傷、目撃者への心理的影響、および遺留破片が含まれる。特に関心を持たれたのが、UFOとの遭遇が人々の健康を害する可能性がある報告である。伝えられるところでは、一部の目撃者は、放射線被爆型の損傷を受けた。これらの報告に基づき、委員会は起こり得る健康上の危険について、医学界に注意を促した。

科学者たちは報告された幾つかの事件が、たとえば雷よりも激しい電氣的活動あるいはレーダー波のダクト伝播(大気中の導波経路によるレーダー波の捕捉と伝播)といった、稀な自然現象により引き起こされていた可能性に気付いた。しかし、委員会はUFOに関連した諸現象の一部がそうした方法では説明が困難であることを知った。

委員会に提示された証拠をこれ以上分析しても、報告の裏に潜む原因について新たな知見は

得られそうもない、これが委員会の意見だった。

科学者たちは、さらに次の所見を述べた：

- ◆ UFO 問題は単純ではない。また、ただ一つ一般的な答などない。
- ◆ 説明されない観測結果には、常に科学者がそれらを研究することにより新しい発見をする可能性がある。
- ◆ 研究は、可能な限り多くの独立した物理的証拠を伴う事例に集中すべきである。
- ◆ UFO 研究界と物理学者たちとの継続的な連絡が、成果を生み出すと考えられる。
- ◆ この分野の研究に対する制度的支援が望まれる。

委員会の構成員は、以下のとおりである：フォン・エシュルマン；トーマス・ホルツァー（コロラド州ボールダーの高所天文台）；ランディ・ヨキッピ（ツーソンのアリゾナ大学惑星科学教授）；フランソワ・ルワンジ（フランス・パリのフレクシメージ社代表取締役）；H・J・メロシュ（ツーソンのアリゾナ大学惑星科学教授）；ジェームズ・J・ペーパー（アルバカーキのニューメキシコ大学地球・惑星科学教授）；グンサー・ライツ（ドイツ・ケルンのドイツ航空宇宙センター航空宇宙医学研究所）；チャールズ・トルバート（シャーロットツビルのバージニア大学天文学教授）；バーナード・ペイレ（フランスのボルドー大学生体電磁気学研究所）。エシュルマンとホルツァーが委員会の共同議長を務めた。

証拠を提示した UFO 研究者は、以下のとおりである：リチャード・ヘインズ（カリフォルニア州ロスアルトス）；イロブラント・フォン・ルトビガー（ドイツ）；マーク・ロドガー（シカゴ UFO 研究センター）；ジョン・シュスラー（ヒューストン）；アーリング・ストランド（ノルウェー・シェーベルグのオストフォル大学）；マイケル・ソード（カラマズのウェスタンミシガン大学自然科学教授）；ジャック・パレー（サンフランシスコ）；ジャン-ジャック・ベラスコ（フランス・ツールーズの国立宇宙研究センター）。

この研究はローランス・S・ロックフェラーにより創始され、LSR（ローランス・S・ロックフェラー）基金により財政支援された。

デービット・F・ソールズベリー， e-mail: david.salisbury@stanford.edu

スタンフォード大学通信報道部 (650) 725-1944

関連資料と報告の全文が科学探究誌ウェブサイト: <http://www.jse.com> にある。

8.2 COMETA 報告： UFO と国防に関するフランスの報告

以下は、フランスの UFO 作家ジルダ・ボーデにより書かれた英文要約である。報告書の全文英訳が第 II 巻の付録に収められている。UFO 問題に関するこの重要な研究は、米国の報道界ではほんの少ししか取り上げられなかったが、注目すべき例外はボストン・グローブ紙¹¹⁵⁾に掲載されたレスリー・キーンの記事だった。そのコピーが付録 I にある。

ジルダ・ボーデによる要約

はじめに、これが COMETA と呼ばれる民間団体による独自の報告書だということを強調しなければならない。この要約は執筆者たちの同意を得て書かれている。この報告書を直接に翻訳して公表するためには、部分であれ全文であれ、COMETA 広報担当者のミシェル・アルグリン氏(フランス、パリ 75005, サン・ジェルマン大通り 25)に手紙を書き、承諾を得るべきである。

1999年7月16日金曜日、フランスで一つの傑出した文書が公表された。“UFO と防衛。我々は何に対して備えるべきか？” (“Les OVNI et la Defense. A quoi doit-on se preparer ?”)である。

この 90 頁の報告書は綿密な UFO 研究の成果であり、この主題の多くの側面、とりわけ防衛問題を取り上げている。研究は、きわめて厳粛な国防高等研究所 (IHEDN; Institut des hautes Etudes de defense nationale) の前“監査官たち”の独立グループ、および様々な分野の有資格専門家たちにより、数年間にわたり行なわれた。公表に先立ち、報告書はフランス共和国大統領ジャック・シラクと首相ライオネル・ジョスパンに送付された。

この報告書の序文は、IHEDN 前所長ベルナール・ノーラン空軍将軍によって書かれ、フランスの NASA とも言うべき国立宇宙研究センター (Centre National d'Etudes Spatiales; CNES) の前所長アンドレ・ルボーの前置きで始まっている。報告書の共同執筆グループそれ自体は、専門家たちの団体であり、その多くが現在の、あるいはかつての IHEDN 監査官で、前監査官デニス・レティー空軍将軍により統轄されている。名称の“COMETA”は“Committee for in depth studies; 綿密研究委員会”を意味する。

全員を網羅していない構成員一覧が冒頭に掲げられているが、見事な顔ぶれである。以下の名前がある：ブルーノ・ルモワヌ空軍将軍 (IHEDN 前監査官)；マーク・メルロ提督 (IHEDN 前監査官)；ミシェル・アルグリン (政治学博士、弁護士, IHEDN 前監査官)；ピエール・ベスコン将軍 (軍備技師, IHEDN 前監査官)；デニス・ブランシェ (内務省国家警察警視長)；クリスティアン・マルシャル (国家“鉱山局”技師長, “国家航空宇宙技術研究所 (ONERA)”研究長)；アラン・オルサーグ将軍 (物理学博士, 軍備技師)。

委員会は、以下の外部寄稿者にも謝意を表している：ジャン-ジャック・ベラスコ (CNES 空中異常現象専門部 (SEPPA; Service d'Expertise des Phenomenes Rares Aerospatiaux))；フランソワ・ルワンジ (フレクシメージ社長, 写真分析専門家)；ジョセフ・ドモンジョ空軍将軍 (IHEDN 監査官協会総代表)。

ノーラン将軍は短い序文の中で、この委員会がどのようにして生まれたかを記している。1995年3月に、レティー将軍が UFO に関する委員会の計画を議論するために、当時 IHEDN 所長だった彼に会いにきた。ノーランは関心があることを彼に明言し、彼を IHEDN 監査官協会に紹介した。それに応じて同協会は彼を支援した。20年前にこの同じ協会が出した報告書により、最初の UFO 研究部署である GEPAN (Groupe d'Etudes des Phenomenes Aerospatiaux Non-identifies) が CNES に誕生したことをここで想起するのは、興味深いことである。

115) Kean, Leslie, UFO theorists gain support abroad, but repression at home. The Sunday Boston
Globe, May 21, 2000, p. E3. (See Appendix I, AI.19)

その結果、数人の IHEDN (国防高等研究所) 監査官協会員がこの委員会の構成員となり、これに他の専門家たちが合流する。彼らのほとんどが、防衛、産業、教育、研究、あるいは様々な中枢管理部門で重要な職務を現在持っているか、かつて持っていた。ノーラン将軍は、この報告書が国家規模の新しい取り組みを発展させ、不可欠な国際連携に役立つことを期待すると述べる。

COMETA 代表として、レティー将軍は報告書の中心テーマを指摘する。つまり、よく記録された観測の蓄積は、今や我々に対して UFO の起源に関するあらゆる仮説、とりわけ地球外起源説を考慮することを迫っている。

続いて委員会は、研究の内容を提示する：

第 I 部では、フランスと国外における幾つかの顕著な事例を取り上げる。第 II 部では、フランスと国外における研究組織の現状、さらに既知の物理法則に矛盾せずに現象を部分的に説明する世界中の科学者の研究成果を述べる。次に、秘密の航空機から地球外起源の兆候まで、主要な全体的説明が検討される。第 III 部では、地球外起源仮説が確証された場合に、民間と軍の双方のパイロットに対する情報提供から、戦略的、政治的、宗教的影響までを含む、防衛に関してとられるべき対策が検討される。

第 I 部：“事実と証言”

選ばれた事例の多くは、大部分の研究者たちによく知られており、ここでは言及するだけで十分である。以下にそれらを列挙する：

- ◆ フランス人パイロットたちの証言。ジロー少佐, ミラージュ IV パイロット(1977)；ボスク大佐, 戦闘機パイロット(1976)；エールフランス AF3532 便(1994 年 1 月)。
- ◆ 世界の航空機事例。レイクンヒース(*英国空軍基地)(1956)；RB-47(*ジェット偵察機)(1957)；テヘラン(1976)；ロシア(1990)；サンカルロスデバリロチェ市(アルゼンチン, 1995)。
- ◆ 地上からの目撃。タナナリブ市(*マダガスカル)(1954)；フランス人パイロットによる地上付近での円盤目撃, ジャン-ピエール・ファルテ(1979)；ロシアのミサイル基地上空での近接目撃, 複数の目撃者(1989)。
- ◆ フランスにおける接近遭遇。バレンソール村(モーリス・マッセ氏, 1965)；キュサク村, カントール県(1967)；トランザンプロバンス(1981)；ナンシー市(いわゆる“アマランス”事件, 1982)。
- ◆ 解明された現象による反例(2 事例)。

抽出は限定的であるが、知識は持たずとも偏見のない読者に UFO の実在性を確信させるためには十分であろうと思われる。

第 II 部：“知識の現状”

“知識の現状(Le point des connaissances)”と題された第 II 部は、フランスにおける公式 UFO 研究機関を外観することから始まる。ここでは、1974 年に“憲兵隊”に最初に下された報告編集の指示書に始まり、1977 年の GEPAN 誕生まで、その組織、および憲兵隊による 3,000 例を超える報告、事例研究、統計的分析などの成果が取り上げられる。続いて、GEPAN およびその発展組織である SEPRA から空軍、陸軍、民間航空会社、および試料や写真を分析する民間と軍の研究所へ送られた協約を外観する。

方法と成果に関して、幾つかの有名な事例(トランザンプロバンス、アマランス)に我々の注意が向けられる。そして、世界中の事例目録、とりわけパイロット(ワインスタイン目録)および“レーダー／目視”による事例目録に重点が置かれる。ここで、歴史的な記録が登場し、すでに UFO の実在性を断言した 1947 年 9 月のトワイニング将軍の有名な手紙が引用される。

続く章は“仮説とモデル化の試み”(“OVNI : hypotheses, essais de modelisation”)と題され、幾つかの国々で研究が行なわれているモデル(複数)と仮説(複数)が議論される。UFO の推進方法に関して、速度、動きと加速、近くの自動車のエンジン故障、目撃者たちの身体麻痺といった特徴の観測に基づいた、部分的なシミュレーションがすでに行なわれている。一つのモデルが、すでに水中で実験に成功している MHD(magnetohydrodynamics;磁気流体力学)推進であり、数十年以内には超伝導回路を使って大気中で達成される可能性がある。また、粒子線、反重力、惑星および恒星の引力利用といった、大気中と宇宙空間で推進する他の研究についても、簡潔に述べられる。地上の自動車のエンジン故障は、マイクロ波放射により説明されるかもしれない。実際に、高出力超高周波発電機がフランスと他の国々で研究されている。一つの応用がマイクロ波兵器である。粒子線の場合、たとえば空気を電離して目に見える陽子線を使えば、先端が途切れた光線が目撃例を説明することが可能である。マイクロ波は、身体麻痺の説明になるかもしれない。

同章では、“全体的な仮説”が次に検討される。悪ふざけは稀であり、また容易に見破られる。非常に強力な勢力による謀略や巧みな操作、超心理学的現象、集団幻覚などの非科学的な事柄は取り上げられない。秘密兵器仮説もまた、冷戦時代のいわゆる“洗脳工作”、あるいは自然現象と同様に、とてもありそうにないと見なされる。その結果、我々に残されるのは、様々な地球外起源仮説である。その一つが、米国の物理学者オニールの“宇宙植民島”の概念に基づき、天文学者のジャン-クラウド・リーブとギ・モネによりフランスで展開されている。そして、それは今日の物理学と矛盾しない。

米国、英国、およびロシアにおける UFO 研究機関が素早く概観される。米国ではメディアと世論調査が、国民の興味と関心が著しいことを示している。しかし、当局、とりわけ空軍の立場は、今でも一種の否定である。より正確に言えば、国家安全保障にとり何の脅威もないということである。実際には、FOIA(情報公開法)により機密解除された文書は、別のことを示している。つまり、UFO による核施設の監視、および軍と情報機関による継続した UFO 研究である。

報告書は、米国における独立した民間団体の重要性を強調する。ここでは、1995 年に世界中の

数千人の著名人に送られた“摘要書. 入手し得る最高の証拠(Briefing Document. Best available evidence)”,そして1997年のスターロック・ワークショップが言及される。これらはいずれも、ローレンス・ロックフェラーにより支援された。“摘要書”がCOMETA報告の執筆者たちから歓迎されたのは明らかだった。委員会はまた、フィリップ・コーソ大佐のような、言うところの部内者たちが公に名乗り出たことにも留意し、彼の証言が、多くの批判があるにもかかわらず、米国の現状に関して一定の重要性を持つと考える。

報告は、特にニック・ポープに言及し、英国の事情を簡潔に述べる。そして、米国と合同で行なわれている秘密研究があるかもしれないと、問題を提起する。また、ロシアにおける研究、および公開された情報、とりわけ1991年のKGBによる機密解除に言及する。

第III部: UFOと防衛

第III部の“UFOと防衛(Les OVNI et la defense)”では、もしこれまで敵意を示す行動が示されてこなかったことが事実だとしても、フランスでは少なくとも幾つかの“威嚇”行動が記録されていると述べる(たとえばミラージュIVの事例)。UFOの地球外起源仮説が除外できない以上、その仮説がもたらす影響について、戦略的レベルで、しかしまた政治的、宗教的、およびメディア/国民に対する情報の面からも研究する必要がある。

第III部の第1章は、予想される戦略(“Prospectives strategiques”)を扱っている。そして、基本的な疑問から始まる: “もし地球外起源だとしたらどうなるか? 彼らの意図は何で、彼らの行動から我々はいかなる戦略を導けばよいか?”

このような疑問から、報告のより一層論議を呼ぶ部分が始まる。たとえば、核ミサイル基地上空への度重なる飛来が示唆する、核戦争からの惑星地球の防御といった、地球外訪問者たちのあり得る動機がここで探究される。

続いて委員会は、公式であれ非公式であれ、国家によりその反応行動が異なり得ることを考察する。また、秘密の特権的な接触が“米国に起因する”可能性に焦点が当てられる。米国の姿勢は、1947年の目撃多発とロズウェル事件以来、“最も奇妙”だと見なされる。そのとき以来、秘密を益々強固にする方策がとられてきたように思われる。それは、UFO研究から獲得される軍事技術の優位性をどんな犠牲を払ってでも防御する、ということで説明されるかもしれない。

次に、報告書はこの疑問に取り組む: “いかなる方策を今我々はとらなければならないか?” UFOの性質がどのようなものであれ、とりわけ“不安定化をもたらす計略”の危険性に関して、少なくとも彼らは我々に“最大限の警戒”を強いる。何らかの衝撃的驚き、間違った解釈、および計略的な敵対行動を防止するために、指導者たちによる一種の“宇宙的警戒”が国家的、および国際的に必要となる。

COMETAは、国家単位ではSEPPRA(空中異常現象専門部)の強化を強く促している。そして、仮説の発展、戦略の計画、ヨーロッパおよび他の諸国との協力合意の準備を使命とする、政府最高レベルの組織を創設することを提言する。次の段階は、ヨーロッパ諸国とヨーロッパ連合が、政治

的戦略的同盟関係の枠組みの中で、米国に向けた外交活動を開始することであろう。

報告書が提起する一つの重要な疑問が、“我々はいかなる事態に備えなければならないか？”である。報告書では、その事態を次のように述べる：地球外知性体による公式接触に向けた動き；ヨーロッパあるいはフランスでの UFO／異星人基地の発見；侵略（起こりそうにないと考えられる）と局所的あるいは大規模攻撃；他国の不安定化を企てる計略あるいは意図的な偽情報工作。

COMETA は、航空機搭乗員、管制官、気象予報官、技術者といった様々な人々に対する詳細な提言とともに、特別の注意を“航空に関わる意味”に向ける。また、防衛と産業の潜在的利益に関わる、開発研究者に向けた科学と技術レベルでの提言も述べられる。

報告書はさらに、UFO の政治と宗教に関わる意味を考察する。ここでは、モデルとして我々自身の宇宙開発の視野が使われる：我々はどのような行動をとるか、進化の遅れている文明との接触に、我々はどう対処するか？

このような研究姿勢は、豊富な UFO 関係書を読み十分な知識を持つ読者にとっては新しいものではない。しかし、この報告書のレベルで真剣に検討される場合、それは特別の価値を持つ。偽情報工作、嘲笑への恐れ、およびある種の集団による計略が取り上げられ、メディア／国民に関わる意味も見落とさなく述べられる。

結論の中で COMETA は、知的存在が制御する UFO の物理的実在性を、“ほぼ確実(quasi certain)”と主張する。ただ一つの仮説が、得られているデータを説明する：地球外訪問者仮説。この仮説はもちろん証明されていないが、遠大な影響力を持っている。これらの訪問者とされる存在の最終目的が何なのかは依然として不明であるが、推測と予想されるシナリオの主題であることは間違いない。

最後の提言の中で、以下の必要性が再度強調される：

1. すべての政策決定者と責任ある地位の人々に知らせる；
2. SEPRRA における調査研究資源を強化する；
3. 宇宙探査に関わる諸機関に UFO 検出を行なわせることを検討する；
4. 国家最高レベルで戦略的組織を創設する；
5. この“重要問題”について協力するために、米国に向けた外交活動を開始する；
6. 非常事態に対処する方策を研究する；

最後に、この文書には7項目の興味深い付録が付いている。それらは精通した UFO 研究者にとっても一読の価値がある。

1. フランスにおけるレーダー検出
2. 天文学者による目撃
3. 宇宙の生命
4. 宇宙の植民地

5. ロズウェル事件 — 偽情報工作(興味深い文章で、これを批判する者も、また私を含めて喜んで受け入れる者もいるだろう)
6. UFO 現象の長い歴史. UFO 年表の初歩
7. UFO 現象の心理学的, 社会学的, および政治的な諸側面

この報告書の重要性を、情報に通じた世界中の UFO 研究者たちは見逃すべきではない。内容のみならず、その執筆陣の顔ぶれを見て欲しい。一方、報告書に対する批判もある。事実、幾つかの痛烈な批判が、報告書の公表直後からインターネット上で行なわれた。そして、フランスの新聞には社会学者のピエール・ラグランジュによる批判記事が掲載された。不思議なことにその中では、この主題を嘲笑する手段としての偽情報工作を非難している(“Liberation of July 21, 1999”)。この要約が議論を明確にする役に立つことを願おうではないか。

ジルダ・ボーデ

9.0 付録 AI. UFO に関係した米国政府の文書

9.1 政府文書についての概要

この付録 I に含まれる文献は、この文書の本文中で参照されたもののみで、以下の基準で選択されている: 1) 目撃報告を明確に立証する、あるいは 2) 議論の中の特定部分を立証する。我々が収集した多くの重要な米国政府の UFO 文書(優に 1,000 頁を超える)は、それらのすべてを掲載するのは非現実的だという理由で、この摘要書には含まれていない。たとえばブラック・ボルト¹¹⁶⁾により運営されているウェブサイトには、UFO 問題に関連する入手可能な数千頁の政府文書がある(ほとんどが FOIA, つまり情報公開法¹¹⁷⁾により政府から入手したもの)。多くの文書は読むのが難しいかもしれないが、洞察力の鋭い読者なら直ちに、政府と軍の UFO 問題に対する深い関心と関わりを程度を理解するだろう。明白なのは、彼らの関心が続いていることだけではない。秘密と意図的な虚報および偽情報工作を組み合わせることにより、情報を国民から隠蔽し続けようとする願望の持続である(この過程は次の題名の論説で議論された: “認められざるもの”)。

報告された目撃のほとんどすべてに対して、“専門家”と当局によるおびただしい数の声明があることに留意すべきだ。しかし、これらすべての声明は、基本的にただ一つの現象により、説得力を失う: 付録にあるような文書を機密扱いとし、情報公開法のかつてない強力な権限に耐えられるまで、ある場合にはそれに逆らってまで、その秘密を維持しようとする、我々の政府の継続的な行為。もしこれらの目撃に何の価値もないならば、秘密にする理由などあるはずがない!

UFO への関心に対する政府機関の二枚舌ぶりの好例が、ブラック・ボルトのウェブサイト¹¹⁸⁾上でジョン・グリーンワールドにより述べられている。その中で彼は、空軍から受け取った書簡から引用された、次の空軍の見解声明を挙げている:

UFO/UAO(Unidentified Aerial Object; 未確認空中物体)現象に関して、我々には、記録保存されているか否かにかかわらず、この種の現象に関する資料は何もない。また、

1969 年の“ブルーブック計画”¹¹⁹⁾ が公式に終了して以来、この種の情報が記録されたこともなければ、データベースが維持されたこともない。

ここに集められた証拠から、我々は空軍が“ブルーブック計画”の終了より前に、確かに UFO に関心を持っていたことを知る。なぜなら、空軍規則 AFR 200-2¹²⁰⁾ (1954)には、未確認飛行物体の報告方法が、その描写方法をも含めて述べられているからだ。上記の見解声明は、UFO に対して当面の関心がないことを暗に意味している。しかし、2000 年 3 月 7 日付けの現在の作戦報告に関する空軍マニュアル (AFMAN 10-206) は、CIRVIS (Communications Instructions for Reporting Vital Intelligence Sightings; 重大情報目撃の通信指示書) 報告手順を述べており、その 5.7.3.3 節には“未確認飛行物体”が明記されている。それは、未確認航空機 (5.7.3.1 節)とは別に記載されている。これらの報告は、NORAD (北米航空宇宙防衛司令部) 司令官に提出される。

116) Web site at: <http://www.blackvault.com>

117) FOIA-Freedom of Information Act. Set up by Congress in XXXX to allow citizens to obtain
xxxxxxx

118) Web site at: <http://www.blackvault.com>

119) Project Blue Book was an Air Force sponsored research project to collect and investigate UFO sightings from March, 1952 to December, 1969 and followed its predecessors, Projects Sign and Grudge which had similar tasks.

120) See Appendix AI (Document AI.20).). Full copy in PDF format is available on the AFDPO web site at: <http://afpubs.hq.af.mil>

戦略空軍基地上空の通過に関する(6.7)節で論じた、1970 年代中頃の文書は、当時 NORAD が UFO に対して強い関心を持っていたことを示す。それは今日まで続いていると思われる。

9.2 付録 I.1: UFO に関係した政府文書の説明一覧

AI.1. To: The Controller of Telecommunications

From: Wilber B. Smith, Senior Radio Engineer - Department of Transportation

Date: November 21, 1950

Re: Top Secret Memorandum on geomagnetic research project, including the information obtained through the Canadian Embassy that UFO subject is classified in US higher than the H bomb and the US assessment that "flying saucers exist".

AI.2. To: Mr. Shlomo Amon

From: Senator Barry Goldwater

Date: March 28, 1975

Re: UFOS. Goldwater unable to find out what was stored in specific building at Wright Patterson AFB as it was classified above Top Secret.

AI.3. To: Major Donald E. Keyhoe, Director National Investigation Committee on Aerial Phenomena

From: William Leet, USAF

Date: 11 March 1958

Re: Reports of several personal UFO sightings and offer to help Keyhoe and NICAP.

AI.4. To: Commanding Officer, Air Transport Squadron

From: Graham E. Bethune and others - Multiple reports of same event

Date: 10 February 1951

Re: Sighting of UFO by aircraft crew. Object appeared to be circular, bright orange-red disc, approaching at "very great, undeterminable speed."

AI.5. NORAD Log

Date: November 7, 8, 9, 1975

Re: Log entries by senior director of 24th NORAD Region describing UFO sightings at Malmstrom Air Force Base, MT.

AI.6. Extracts NORAD Command Director's Log

Date: 29 October 1975 - 23 November 1975

Re: Multiple reports of sightings

AI.7. Directory of Databases

From: Air Force

Date: beginning 1971

Re: NORAD Unknown Track Reporting System (NUTR)

AI.8. Report. of Sighting

From: National Military Command Center, J.B. Morin, Rear Admiral, USN

Date: 21 January 1976

Re: UFOs near flight line at Cannon AFB, NM; 25 yards in diameter; gold or silver in color with blue light on top, etc.

AI.9. To: Memorandum for Record

From: National Military Command Center, L.J. LeBlanc, Jr - Deputy Director for Operations

Date: 30 July 1976

Re: Sightings at Fort Ritchie, MD - July 30, 1976

AI.10. To: Multiple Distribution

From: Joint Chiefs of Staff

Date: September 1976

Re: Detailed report of sightings of UFOs in Tehran, Iran - 19 September 1976

- AI.11. Article: "Now You See It, Now You Don't"
From: Captain Henry S. Shields, HQ USAF Date: Declassified 4 December 1981
Re: Episode reported by two F-4 Phantom crews of Imperial Iranian Air Force in late 1976.
- AI.12. Sighting Report
From: Charles I. Halt, Lt. Col, USAF - Deputy Base Commander
Date: 13 January 1981
Re: Unexplained lights in woods outside RAF Woodbridge, trace landing marks found on ground the next day, numerous witnesses
- AI.13. Inspection and Surveillance Record - Incident Report
From: Jack Wright, FAA
Date: November 17, 1986
Re: Report and interview of Captain Terauchi and crew of JAL #1628 on being followed by a UFO during flight approaching Anchorage, AK
- AI.14. Personnel Statement - Federal Aviation Administration
From: Carl E. Henley, Air Traffic Control Specialist
Date: January 6, 1987
Re: UFO radar and visual sighting report - Anchorage - JAL #1628
- AI.15. Information Alert Report
From: Franklin L. Cunningham
Date: December 31, 1986
Re: Sighting by crew of JAL #1628 for over 350 miles, recorded on onboard color radar USAF Elmendorf AFB showed on ATC radar.
- AI.16. To: Multiple distribution
From: Joint Staff, Washington, DC
Date: March 1990
Re: Reports of UFO Sightings in Belgium including summary by Col. DeBrouwer. Phenomenon cannot be explained by Belgian Air Force.
- AI.17. Paris Match article - authorized publication of documents from the Belgian Ministry of Defense
Date: March 30 and 31, 1990
Re: Details regarding encounters between UFOs and Belgian Air Force including photos of radar screen sighting of UFO.
- AI.18. USA Today newspaper article "Arizonans say the truth about UFO is out there"
Written by: Richard Price
Date: June 18, 1997

AI.19. Boston Globe article on the French COMETA Report entitled: "UFO theorists gain support broad, but repression at home"

Written by: Leslie Kean

Date: May 21, 2000

AI.20. Department of Air Force Document (1954)

From: USAF Chief of Staff, General Nathan F. Twining

Date: 12 August 1954

Re: Full details regarding reporting procedures of UFOs for the Air Force.

AI.21. Department of Air Force Manual 10-206 (Operational Reporting)

From: Secretary of the Air Force

Date: March 7, 2000

Re: Complete details on procedures for CIVUS reporting (Communications Instructions for Reporting Vital Intelligence Sightings). Full copy in PDF format is available on the AFDPO

web site at: <http://afpubs.hq.af.mil>.

10.0 推奨される文献一覧

Good, Timothy. *Above Top Secret: The Worldwide UFO Cover-Up*. Acacia Press, Inc., 1989.

Greer, Steven. *Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications*. Crossing Point, Inc. Publications, 1999.

Haines, Richard, et al. *Close Encounters of the Fifth Kind*. Sourcebooks Trade, 1999.

Haines, Richard. *Project Delta: A Study of Multiple UFO*. LDA Press, 1990.

LaViolette, Paul. *Beyond the Big Bang: Ancient Myth and the Science of Continuous Creation*. Inner Traditions International, 1994.

LaViolette, Paul. *Subquantum Kinetics: The Alchemy of Creation*. Starline Publications, 1994.

Mallove, Eugene J. *Fire from Ice: Searching for the Truth Behind Cold Fusion Furor*. Infinite Energy Press, 1991.

Pope, Nick, et al. *Open Skies, Closed Minds: For the First Time, a Government UFO Expert Speaks Out*. Dell Pub. Co., 2000.

Redfern, Nicolas. *The Incredible Story of the UFOs that fell to Earth*. Simon & Schuster Intl, 2000.

Sturrock, Peter A., et al. *The UFO Enigma: A New Review of the Physical Evidence*. Aspect, 2000.

Tutt, Keith. *The Search for Free energy: A Scientific Tale of Jealousy Genius, and Electricity*. Simon and Schuster, 2001.

Warren, Larry, et al. *Left at East Gate: A First-Hand Account of Bentwaters-Woodbridge UFO Incident, Its Cover-Up and Investigation*. Marlow & Co., 1998.

11.0 謝辞

過去 10 年間に非常に多くの人々がこの仕事に寄与した。その名前の一部を列挙するだけで 1 冊の本ができるほどである。ここに、世界中の何千人もの CSETI(地球外知性体研究センター) 支持者たちに、彼らの援助、連絡網の形成、および献身に対して感謝の意を表したい。それがなければ、このプロジェクトは決して生まれることも、その使命を果たすこともなかった。

特に、私の妻エミリーと私たちの 4 人の娘たちには、この数年間彼女たちから受けた愛情、献身、および支援に対して感謝を捧げる。エミリーは何年もの間、疲れも忘れて陰で働いてくれた。それは常に控えめで真心のこもったものだった。この惑星に彼女のような人は二人としない。ありがとう、ありがとう。

私の家族は、他の多くの面で犠牲にもなった — 私がこの仕事を続けている間、彼女たちは数百万ドルの収入を失い、多くの面で最も犠牲になった。私がこのプロジェクトを始めた。彼女たちではない。このような活動を忍耐強く支えてくれる医師の妻がどれだけいるだろうか？しかし、賭けるものが人類だと知ったとき、我々は他のどういう行動をとれたのか？私の家族の無条件の愛情と支援がなければ、この事業は企画されることすらなかっただろう。

以下の名前一覧は、ほんの一部にすぎない。ここには非常に多くの人々の困難な仕事と献身が反映されており、恩義は彼らのすべてにある。すべての軍と政府の目撃証人、そして私の主任補佐である西海岸のリンダ・ウィリッツと DC 地区のデビー・フォックに特別の謝意を表す。

Shari Adamiak

ARS NOVA

Major-General Vasily Alexeyev

Eric Anderson

Lt. Col. Dwyne Arneson (ret.)

Colin Anderson

Maurizio Baiata

Msgr. Corrado Balducci

Stephen Bassett

Dr. Tom Bearden, Lt. Col. (ret.)
Dr. Fred Bell
Harland Bentley
Cmd. Graham Bethune (ret.)
Don Bockelman
Gildas Bourdais
Shell Boyd
Dr. Jan Bravo
Bob and Teri Brown
Lt. Col. Charles Brown (ret.)
Sgt. Robert Blazina
David Browning
John Callahan
Sgt. Stoney Campbell
Franklin Carter
Astronaut Gordon Cooper
Col. Philip Corso, Sr. (ret.)
Philip Corso, Jr.
Anthony and Patricia Craddock
Gordon Creighton
Prof. Paul Czysz
Don Daniels
Col. Ross Dedrickson (ret.)
Glen Dennis
Janet Donovan
Gerry Eitner
Maj. George Filer, III (ret.)
Deborah Foch
Lt. Frederick Fox
James Fox
Stanton Friedman
Alan Godfrey
Emily Greer
A.H.

Dr. Richard Haines
David Hamilton
Donna Hare
Paola Harris
Lt. Walter Haut
Michael Hesemann
Joe Heilig

Lord Hill-Norton
Jean Houston
Joel Howard
Dorothy and Burl Ives
Prof. Robert Jacobs
Don Johnson
Miles Johnston
Harry A. Jordan
Kevin Kachikian
Miki Kaipaka
Enrique Kolbeck
James Kolbeck
Marian Kramer
Alice Ladas
Kelly and Peter Lakin
Dr. Paul LaViolette
Prof. Ted Loder
Brig. Gen. Stephen Lovekin, Esq.
Ted Mallon
Rosemary May
John Maynard
Mark McCandlish
Denise McKenzie
Astronaut Edgar Mitchell
Dr. Eugene Mallove
Jaime Mausson
Merle Shane McDow
Cmd. Will Miller (ret.)
Robert Mitchell
Sgt. Dan Morris (ret.)
Jordan Pease
Donald Phillips

Dr. Roberto Pinotti
Antonio Pinto
Capt. Massimo Poggi
Nick Pope
Sgt. Leonard Pretko
Rhiannon Pruett
Dr. H. E. Puthoff
Nick Redfern
Capt. Lori Rehfeldt

Lawrence Rockefeller
Dr. Carol Rosin
Ron Russell
Capt. Robert Salas
Daniel Sheehan, Esq.
Gary Shrieves
Fred Smith
Michael Smith
Peter Sorenson
Sgt. Chuck Sorrells

Ralph Steiner
Sgt. Clifford Stone (ret.)
Jeff Thill
Fred Threlfall
Daniel Monoz Tovar
Capt. Bill Uhouse
Paul Utz
Lt. Robert Walker
Larry Warren
Dr. Alfred Webre
Dotha Welbourne
LC Jonathan Weygandt
Lt. Col. John Williams (ret.)
Dan Willis
Linda Willitts
Karl Wolfe
Lt. Col. Joe Wojtecki (ret.)
Dr. Robert Wood
Sandra Wright

DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT

tentative Japanese version

by

Y. Hirose

日本語仮訳： 廣瀬 保雄

この資料は、ディスクロージャー・プロジェクトが頒布する“*The Disclosure Project*” DVDに収録されている“*disclosure2.doc*”本文の全訳である。同文書に含まれている政府文書や図、新聞のコピー等は含まれない。なお、文中の注記(＊)は訳者による。